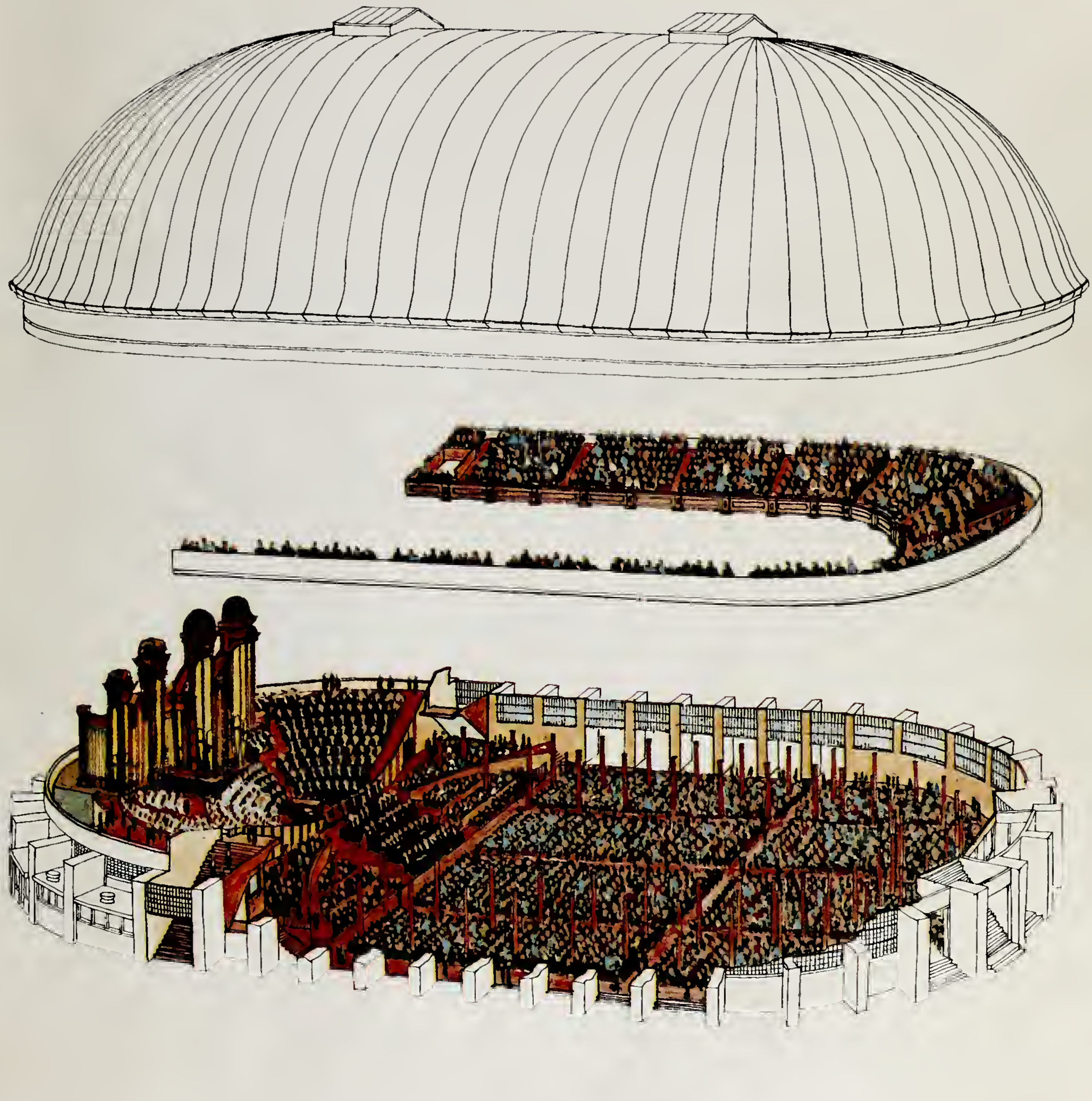
大会報告

1970-72

大管長会会員・十二使徒評議員会会員
大祝福師による説教



CHURCH
LIBRARY-ARCHIVES
THE CHURCH OF JESUS CHRIST
OF LATTER-DAY SAINTS

Res
M204.1
C748JA
1970-72

Digitized by the Internet Archive
in 2011

http://archive.org/details/conferencereport197072jpn

大会報告

1970—72年

大管長会会員
十二使徒評議員会会員
大祝福師
による説教

末日聖徒イエス・キリスト教会

東京ディストリビューションセンター

大会報告1970—72
Conference Report

発行所
末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューションセンター

発行日
1978年3月1日

印刷所
フォト印刷株式会社

主より導きを受けて

まことに主なる神は，そのしもべである予言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない。

（アモス3:7）

そこでイエスは彼らに言われた，「それでは，あなたがたはわたしをだれというか」。シモン・ペテロが答えていった，「あなたこそ，生ける神の子キリストです」。

すると，イエスは彼にむかって言われた，「バルヨナ・シモン，あなたはさいわいである。あなたにこのことをあらわしたのは，血肉ではなく，天にいますわたしの父である。

そこでわたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして，わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。

わたしは，あなたに天国のかぎを授けよう。そして，あなたが地上でつなぐことは，天でもつながれ，あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」。

（マタイ16:15－19）

およそ聖霊に感じたる時語るところはことごとく聖典の言となり，主の意となり，主の精神となり，主の言となり，世を救いに導く神の能力となるべし。

（教義と聖約68：4）

この故に汝ら教会員は，彼が上より受くるままに汝らに与うる誡命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き，わが前に全く聖き道を履むべきなり。

そは彼の言は，汝ら全き忍耐と信仰とを以て，あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入れるべきなればなり。

これらのことを為さば，地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して，誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い，汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。

主なる神かくの如く言う。われは彼に霊感を与えて，善を為すために大いなる力を以てシオンの大事を推し進めしむ。

（教義と聖約68：4－7）

私たちは予言者の書いた聖文を研究し，多くの啓示を受け，また予言の「みたま」をもっている。このように多くの証があるので私たちは希望を得て私たちの信仰は固くなる。まことにその信仰は，私たちがもしもイエスの御名によって命ずれば，実際木も山も海の波もその命令に従うほど強い。

それにもかかわらず，私たちがこのようにする力をもつことは，全く神の恵みと神の人に対する厚いいつくしみとによることをさとらせるために，主なる神は私たちに自分たちが弱いことを認めさせたもうのである。

ごらん，主の御業は本当に偉大で驚嘆すべき事である。また主の奥義が何と深くて，隅々まで知ろうとしてもむつかしいことよ。それであるから，主のなしたもうことを一切知るのはとても人間業でできることではない。主の道が啓示されなかったならこれを知る者は一人もない。それであるから兄弟たちよ，神の下さる啓示を軽んじてはならない。

（モルモン経ヤコブ4:6－8）

「大会報告」を活きたものとする

私たちは今この大会に集っているが，大会から何を得ようとしているのだろうか。生活を改善することだろうか。家族を向上させることだろうか。それともワード部や支部を変えることだろうか。

問題は，大会を通して「新しい秩序」を私たちの生活の中でうち立てたいと思っているかということである。もしそうならば，私たちがこの総大会に集った理由も明らかである。そう，私たち一人一人が「新しい秩序」で出発することである。

ではどのように進めていったらよいだろうか。ひとつの方法を紹介しよう。それは，大会が終わった後に，この会場から約3千マイルも離れて住んでいる家族の人でも実行できる方法である。大会での説教が掲載されている「聖徒の道」が家に届いたら，すぐに家族でそのメッセージを読むこと。年長の子供には特定の説教について報告をさせることである。

ただ読むだけではない。家庭の夕べにおいて，この大会のメッセージに基づいて家族としての，また個人としての目標を立てるのである。目標は実際に則したものにする。例えば「毎日の祈りの中に祖母のことを入れる，讃美歌を暗記する，家族の準備状況を点検する，主の望むことを私たちの方法ではなく主の方法によって行なう，非教会員を教会に連れてくる」などを目標とする。また家族で目標について話し合い，祈って，たびたび検討する。このように進めてくると，次のように語る父親がいてももはや不思議ではないのである。「私たちの家族は総大会を，主が私たちに何をすべきかを教えて下さる機会だと思っています。それは私たちや子供たちにとって言葉以上の深い意味を持っているのです。

兄弟姉妹，この総大会で受けた教えは私たちにどれほどの影響を与えるであろうか。両親としてどれほど大切だろうか。また役員教師として，またホームティーチャーあるいは家庭訪問教師としてどれほど重要な意味があるのだろうか。

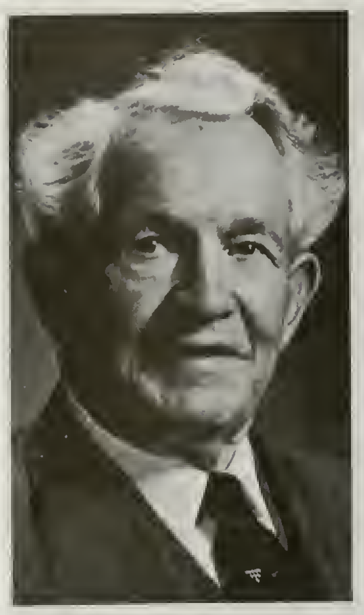
私はこれまでの総大会の経験から，聖霊に感動して話された言葉は「聖典」の言葉であるということを証する。主は次のように語られた。「聖霊に感じたる時語るところはことごとく聖典の言となり，主の言葉となり，主の声となり，世を救いに導く神の能力となるべし。」（教義と聖約68：4）

私たちがこの大会で選んだ目標が私たちに，家族に，隣人に，また私たちのワード部や支部の会員たちに救いをもたらすものとなるように心から祈るものである。

（J・トーマス・ファイアンズ，1974年10月5日の総大会における説教）

目　次

主の王国のしもべたち



大管長
デビッド・O・マッケイ

教会出版局長

ヘンリー・A・スミス

末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者，聖見者，啓示を受くる者として，人々から愛されたデビッド・O・マッケイ大管長は，1970年1月18日，ユタ州ソルトレークの自宅で逝去した。96年の生涯を終えた予言者の葬儀は1月22日ソルトレークのタバナクルで挙行された。

デビッド・オーマン・マッケイは教会の第9代大管長として1951年4月9日ソルトレークタバナクルで開かれた厳粛な集会において支持された。時に77歳であった。

予言者，聖見者，啓示を受くる者の死去により，およそ20年間にわたり続いた地上における神の王国の進歩の行軍の一つが，他に類を見ない時代として終止符を打った。

彼が大管長会に在任期間中，教会は歴史を通じて類を見ない驚異的な進歩と発展を遂げた。

マッケイ大管長は，「聖霊と共にいることができるようにベストを尽くす」との誓いのもとに教会の指導者という責任を引き受けた。霊感あふるる指導，彼に率いられた大管長会の業績は，マッケイ大管長が聖霊と共にあったことの証である。それはまさしく「黄金時代」であった。本当の意味で，教会が国際的視野に立った時代である。

1952年の夏，マッケイ大管長が聖任後初めて欧州を訪れたとき，彼は「アメリカの教会とヨーロッパの教会員との接近」を確信した。この訪問中，スイス神殿用地を選び，現在建造なったロンドン神殿の用地の購入を考えたのだった。

これがマッケイ大管長の考え方である。すなわち，世界の国々に住む末日聖徒が，もし神殿の霊にかかわる大きな祝福を受けることができるとすれば，聖徒は祖国にとどまり，教会を建てるであろうと。彼は大管長会在任期間に，5つの神殿を奉献したが，そのうち3つがアメリカ以外の国々，すなわちスイス，イギリス，ニュージーランドであったという事実はこの点において彼がいかに努力したかの証拠となろう。

さらに，「国際的視野に立った方針」という彼の言葉の証ともなるべき事柄があげられる。すなわち，大管長会在任期間中に，イギリス，ヨーロッパ，南アメリカ，さらに太平洋諸島において最初のステーキ部が組織されたのである。これらの最初は，1961年に組織されたマンチェスターステーキ部であった。

デビッド・O・マッケイは劇的な情況のもとに教会の大管長となった。第121回年次総大会は4月の6，7，8日に予定され，数週間前から計画が練られていた。大会の開かれる2日前，すなわち1951年4月4日，ジョージ・アルバート・スミス大管長は自分の誕生日にあたるその日にソルトレーク・シティーの自宅で逝去されたのである。そのとき，ベッドの傍らにはスミス大管長の家族と，大管長の後継者が見守っていた。大管長会の責任が重く彼の肩にのしかかってきたのであった。

2日後，総大会は大管長空席のまま開かれた。管理権は十二使徒評議員会にあり，デビッド・O・マッケイはその会長であった。出席した人人やラジオ，テレビで大会の模様を見聞きした多くの人々の記憶によると，十二使徒評議員会管理のもとに総大会が開かれたのはこれがはじめてであった。

土曜日の大会はスミス大管長葬儀のため中止となり，マッケイ会長が葬式を管理した。そして，大会は月曜日にも開かれ，午前の大会でマッケイ大管長が支持され，同時に大管

長会が組織された。副管長は，スティーブン・L・リチャーズとJ・ルーベン・クラーク・ジュニアであった。

マッケイ大管長が在任した20年近くの間の教会員数，ステーキ部，ワード部，伝道部の数には教会の成長が顕著に示されている。
1951年マッケイ大管長が就任したとき教会員の数は約115万人であったのに対し今日では300万人近くに急増している。1951年ステーキ部数は180であったのに対し，現在は500である。当時ワード部と支部の合計は1,541であったのに対し，現在では4,200を越える。1951年伝道部数は43であったのに対し，現在は80を越えている。

この成長は，マッケイ大管長の霊感に満ちた進歩的な指導性によるところが非常に大きい。教会の支部組織のある世界のいたる所で，彼の影響力を感じることができる。彼は大管長として最も旅をした人である。近代輸送機関を利用して，文字通り地球の隅々にまで旅し，聖徒たちと会い，宣教師を力づけ，礼拝堂や神殿を献堂し，いたる所で教会のために友を作った。その旅行の中には，イギリスとヨーロッパを数回，中南米およびメキシコ，南アフリカ（マッケイ大管長は南アフリカを訪れた最初の教会幹部である）また，かつて大管長が足を伸ばしたことのないニュージーランドやオーストラリアを含む太平洋諸国の伝道部訪問がある。

マッケイ大管長の教会幹部としての在任期間は約64年の長きにわたった。十二使徒評議員会に指名されたのが1906年4月，32歳のときであった。

デビッド・O・マッケイは，1873年9月8日，スコットランドからの改宗者デビッド・マッケイを父とし，ウェールズ出身のジェネット・エバンズを母として，ユタ州オグデンバリーのハンツビルに生まれた。七歳のとき，父は2年間英国で伝道する宣教師に召され，ハンツビルに残った母と子供たちは農耕に従事した。（マッケイ一族は長年ハンツビルの家を別荘として使っており，マッケイ大管長も最後の病にふせるまで，家族と共に生家で過ごすのを楽しみとしていた。）

デビッド・O・マッケイはハンツビルで初等教育を受け，1894年ソルトレーク・シティーのユタ大学へ入学，1897年の卒業のときには総代をつとめた。

卒業後宣教師に召され，父に続いてイギリスで伝道し，教会の傑出した宣教師の一人という評判を得た。このようにして，宣教師と指導者としての人生が始ったのである。1898年3月，グラスゴー地方部長に任命され1899年9月に帰国するまで一年以上その召しにあった。

1899年，現在はウェーバー州立大学となっているユタ州オグデンのウェーバー・アカデミーの教師に任命され，1902年にはこの学校の校長になっている。

マッケイ大管長は1901年1月2日ソルトレーク神殿において，ソルトレーク・シティー出身のエマ・レイ・リッグスと結婚した。二人は世界中の末日聖徒の範となる理想的な伴侶であった。二人には七人の子供がいる。デビッド・ローレンス・マッケイ，ロウェリン・R・マッケイ博士，ロイヤル・リッグス・マッケイ（死亡），ラッセル（ロウ・ジーン）ブラッド夫人，コンウェイ（エマ・ラエ）アシュトン夫人，エドワード・R・マッケイ博士，ロバート・R・マッケイである。

1906年マッケイ大管長は使徒に召された数カ月後，デゼレト日曜学校協会副管理会長になった。1918年，同管理会長に召され，1934年大管長会に召されるまでこの職にあった。マッケイ大管長は「日曜学校近代化の父」としてよく知られている。多くの貢献のうち，日曜学校プログラムの統一化や日曜学校レッスンの技術と方法の改善に関してはだれも及ぶものがない。幼稚園から大人のクラスまで，年令別で進んでゆく学習コースが始められ，全教会で教師養成プログラムが採用された。

マッケイ大管長は教会の教育プログラムに多大の貢献をなしている。1906年から1919年まで，彼は教会教育管理会の会員であり，1919年から1921年まで教会教育理事であった。また，ユタ大学の理事，ユタ州立大学の評議員であった。死去した時にも，彼はブリガム・ヤング大学の理事長，教会教育管理会長の職にあった。

1921年マッケイ大管長とヒュー・J・キャノン長老は世界各地の伝道部を巡った。このような訪問は教会幹部としては，はじめての事だった。

二人は南アフリカを除く全伝道部を訪れた。距離にして10万キロにも及ぶ旅行であった。

1922年，イギリスに本部を置くヨーロッパ伝道部を管理するよう任命され，2年間その職にあった。

その後10年間は，十二使徒として責任を果たし，教会の全世界にわたる活動の指導につとめた。そして1934年，彼はヒーバー・J・グラント大管長により，大管長会第二副管長に召された。彼は1951年大管長になるまで，グラント大管長，後にジョージ・アルバート・スミス大管長の副管長の職にあった。

教会役員として多忙な中にも，マッケイ大管長は市民としての多くの義務，責任を果たしてきた。1938年ユタ州知事は1947年7月のモルモン開拓者ソルトレーク峡谷到着百年記

念を迎えるにあたって，マッケイ大管長を百年記念祭準備委員長に任命した。1947年になって，一年間にわたる州百年記念祭が行なわれたが，ここでマッケイ大管長の指導性がフルに発揮された。そして，ソルトレーク・シティー東部の丘に美しく感動的な，かの「まさにこの土地だ」の記念碑を建て，奉献した。そこは，ブリガム・ヤングとモルモンの開拓者が最初にグレート・ソルトレーク峡谷に足を踏み入れた地である。

マッケイ大管長は多くの説教，著書を残した。数々の書籍や月刊誌「インプルーブメント・エラ」,「インストラクター」,「聖徒の道」にそれらが見られる。この宗教的な文献は，人々から愛された偉大な指導者の霊感あふれる指導性の記念碑として長くその名をとどめるであろう。

彼は多くの栄誉を受けた人であった。ブリガム・ヤング大学，ユタ州立大学，ユタ大学，ペンシルバニア州フィラデルフィアのテンプル大学より名誉博士号を受けた。1951年テンプル大学より名誉博士号を受けたときの表彰状の一部を引用してみよう。「氏の生涯は，教会の評議員，教会の学校の指導，外国伝道の進展，教義と教えに関する著作活動，教会関連企業の指導で占められてきた」1954年9月イリノイ州シカゴのサージョン国際大学は，マッケイ大管長の「人類の福祉に対する貢献と教育および人道主義確立への努力に対して」名誉会員称を贈った。その他，マッケイ大管長の人類に対する顕著な働きに対して数々の栄誉や表彰が贈られている。

偉大な人道主義者，模範者たる父，社会の指導者，霊の指導者，霊感あふれる神の予言者を失った今，何百万という人々は彼の死を悼んでいる。

(「聖徒の道」に掲載された，ヘンリー•A•スミスによる追悼記事より)



ジョセフ・フィールディング・スミス

予言者ジョセフ・フィールディング・スミス以上に，長年にわたる献身的な奉仕を通じて備えられ，教会の大管長会に入った人はいない。ジョセフ・フィールディング・スミスの名は，彼の父であり，1901年から1918年にかけて教会を管理したジョセフ・F・スミスにちなんでつけられた。ジョセフ・フィールディング・スミスはまた，予言者ジョセフ・スミスの傍らにあって不変不動に立ち続けた忠実なハイラム・スミスの孫である。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は十二使徒評議員の空席を満たすべく，1910年に33歳で召され，以来60年以上にわたって主イエス・キリストの使徒として忠実に働いた。また前大管長の重責を担い5年間大管長会の副管長を務めた。

教会幹部としての驚異的な記録に加えて他の分野でのスミス大管長の働きと貢献も教会史上ほとんど比類のないものである。スミス大管長は，49年の間教会歴史家として働き，教会の歴史と教義に関する特別な知識は，教会中で長年にわたって権威あるものとして認められてきた。彼の手になる著作の多くは福音を学ぶ者にとって欠かすことのできないものとなっている。

スミス大管長は，1876年7月19日に生まれた。1898年4月，21歳のとき，最初の妻となったルイー・エミラ・シャートリフと結婚した。そして結婚後わずか1年後の1899年5月12日，スミス大管長は父親によって七十人に按手聖任され，翌日伝道地に向けて旅立った。スミス大管長にとって，このような個人的な犠牲を払うことは，今日の私たちのように容易ではなかった。しかし，スミス大管長はその召しを受け，2年間ノッチンガム・カンファレンス（英国中部）で働き，1901年6月に帰国した。

帰国後，スミス大管長は，教会歴史事務局で働くことになり，生涯の大部分をそこでの仕事に捧げた。さらに1907年系図協会の書記に任命された。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は，故デビッド・O・マッケイ大管長が使徒に召されて4年後の1910年4月7日，使徒に聖任され，十二使徒評議員となった。使徒としての在任期間はこの神権時代最長，十二使徒評議員会会長としては一番の高齢である。また十二使徒評議員会会長と副管長兼任は彼が初めてであった。そしてマッケイ大管長の死去に伴い，激動の時代の新たな予言者，第10代大管長として召されたのは93歳の高齢を数えるときであった。しかし1972年7月の逝去の日までは，まさに，愛と奉仕の現世の生涯をしめくくるというにふさわしく，多くの人々に感銘を与える献身の日々であった。

十二使徒評議員会会員になる2年前，スミス大管長は最初の妻ルイー・エミラを失った。また1908年11月2日，エセル・ジョージナ・レイノルズと結婚したが，彼女は1937年8月26日に亡くなった。最初の妻ルイー・エミラとの約10年間の結婚生活ではふたりの娘に恵まれていた。2度目の妻ジェシー・エバンズと結婚した。ジェシーは以前タバナクル聖歌隊のアルト歌手で独唱者であった。生来，陽気で快活なジェシーが33年間大管長の傍らにあって，大管長を元気づけ，愛と献身をもって大管長の世話をする姿には，全く美しいものがあった。ジェシーは生存中にスミス大管長が教会の大管長になるのを目にし，大管長が数多くの教会の任務を帯びて旅行する際に同行し，広く各地を旅した。大管長の厳しい旅行日程に従うだけでなく，多くの国々で聖徒たちの愛にあふれた歓迎会にも出席した。1971年8月3日，ジェシーが心臓病で亡くなった折には，大勢の人々が，スミス大管長の悲しみと寂しさを共にした。当時，ハロルド・B・リー副管長が，スミス大管長に深い関心と同情を示すと，スミス大管長は副管長に向かって，自分の義務を続けて果たしてゆけるように，主が自分を強めてくださるだろうと自信をもって語ったと言われる。



ハロルド・ビンガム・リー

1889年アイダホ州クリフトンでサミュエル・マリオン・リーとルイザ・エメリン・ビンガム・リーを両親とする6人兄弟の長男として誕生。

13歳のハロルドは教会経営の中学校に学び，ここでエズラ・タフト・ベンソンを知った。その後，州立師範学校に学び，17歳で教員免許を取得し，18歳で校長となった。4年間の教職生活を終え，伝道に召されたのは1920年のことであった。西部諸州伝道部での召しから解任されると，伝道中遠くから敬服していたファン・ルシンダ・タナーとソルトレーク神殿で結婚した。

その後1932年，ソルトレーク・シティー理事の死去に伴って，彼は理事に指名された。さらに翌年も再選された。

彼は結婚後，パイオニアステーキ部内に住んでいたが，そこでは教会の責任が次々に与えられた。そして1929年，副ステーキ部長に指名され，その翌年にはステーキ部長に召された。そのとき31歳であった彼は，当時教会で最も若いステーキ部長であった。

経済恐慌のさ中にあって，パイオニアステーキ部の若き指導者はヒーバー・J・グラント大管長の指導の下，教会保全計画（今日の教会福祉計画）の実施にあたるべく，教会福祉委員会の一員に召された。

問題は山積していた。農業資産を集め，食糧を生産し，またその処理施設や貯蔵施設を造ることは困難を極めた。さらに悪いことに教会のすることに対して批判的な態度を取る人々がいた。そのような人は，福祉などというものは政府のする仕事であると考えていたのだった。

だが，祈りと説得に努め，汗と涙を流し，そして予言者からの祝福を受けて，彼はシオンのステーキ部を東奔西走した。その結果，ようやく計画も軌道に乗り，発展して，隆盛を見るに至った。

興味深いことに，リー大管長を補佐したマリオン・G・ロムニー第二副管長は，この計画の初期の頃，共に辛苦をなめた友であり，またリー大管長のあとを継いで部長となった人である。ふたりはそれより何年も前に，個人的に親しくなっていた。ふたり共，その計画の最初の集会が開かれた頃は，作業着を着て，共に働いたものであった。以来，ふたりは，共に働く経験を積み重ねるうちに，無類の友となったのである。

3分の1世紀前を振り返ってみると，リー大管長の双肩に引き継がれた重責に耐えさせるべく，このしもべを鍛練された主の御手を見ることができる。教会の福祉計画の試練に満ちた開拓時代にあって，辛苦をなめ信仰を試されたリー長老は，ヒーバー・J・グラント大管長によって使徒職に召され，1941年4月6日十二使徒評議員会の一員として支持された。

この責任を遂行するにあたって，彼は大管長会の指示の下に，世界各地を旅し，声をあげて，全人類の贖い主の使命を証し，人々の心を動かした。

デビッド・O・マッケイ大管長は，リー長老が教会の全プログラムに通じ，またそれまでの業績で証明ずみの行政手腕を買って，彼を相互調整委員会の委員長に指名し，教会の全教科課程を統合させた。これによって，教会の教育組織と教育施設について完全な分析がなされ，これまで何年間も使用されてきた各クラスのテキストの内容の徹底的な再検討が試みられたのである。彼の指示のもとに多大の努力が払われたことによって，教会活動と教義のあらゆる面の知識を伝え，各会員の霊性を高めるために，相互調整教科課程がつくられることとなった。彼の傑出した指導力は，この責任において遺憾なく発揮された。その手腕は手堅く，その目標は，はっきりと見定められていた。教会全体が，彼の奉仕によって多大の恩恵を受けている。

マッケイ大管長が逝去し，ジョセフ・フィールディング・スミスが大管長の職を継承したことに伴い，リー長老は，十二使徒評議員会の会長となり，さらにスミス大管長によって，第一副管長に選ばれた。このため，彼が以前から携わっていた活動のうち幾つかの議長職を退かねばならなくなったが所期の目的は，彼の全般的な指導を受けて，そのまま引き継がれている。教会の教師たちをさらに訓練するために，様々なプログラムが設けられた。監督の訓練プログラムも実行に移され，全世界の宣教師プログラムも強化された。

彼が，これら一連の活動やその他数多くの活動を指導していたとき，彼の行政者としての秀でた手腕は，他の分野でも認められた。彼はアメリカ赤十字の中央管理会の一員に指名されていた。また，全アメリカ適正生命保険協会，ユニオン・パシフィック鉄道，その他多くの会社から理

事として就任して欲しいという要請を受けていた。彼は，これらの職にあって，政界，実業界，教育界，その他の分野で政府の要人と交わる機会を持った。彼の親友の中には，上記の人々も入っている。これらの人人は，リー大管長の判断を尊重し，当時の交遊を懐しく感じている。ユタ州にある3つの主要大学──ブリガム・ヤング大学，ユタ大学，ユタ州立大学──は皆，彼に名誉学位を贈っている。国内各地の教育家たちは，彼を理解ある友のひとりに数えている。17歳で公立学校の教職についた人物が，そのような思慮を持ち，評価を得ていたとしても不思議はないであろう。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長が，1972年7月2日の夕方，静かに息を引きとったとき，十二使徒評議員会のすべての会員の心には，だれがスミス大管長の後を継いで大管長になるかという疑惑の気持は，いささかもなかった。7月2日金曜日の朝，十二使徒評議員会の会員は，ソルトレーク神殿の神聖な一室に集った。その静かな聖なる場所で，皆，心を開いてみたまのささやきを求めた。居合わせたすべての人々の心は，そのささやきの答えに，ひとつとなった。主により選ばれ，幼年時代から回復された福音の原則の中で育ち，31年間使徒の職にあって練られ，鍛えられたハロルド・ビンガム・リーは，末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長，予言者，聖見者にして啓示を受ける者として指名され，按手聖任されたのである。



スペンサー・W・キンボール

スペンサー・ウーリー・キンボールは，1973年12月30日，末日聖徒イエス・キリスト教会第12代大管長となった。これは彼の長期間にわたる教会指導者としての生活の中で，まさにクライマックスと言える。

当時十二使徒定員会会長であった彼は，ユタ州ソルトレーク・シティーにあるソルトレーク神殿で行なわれた十二使徒定員会の会合で，「予言者，聖言者，啓示を受ける者，教会の大管長」として支持された。このようにして彼は，前大管長故ハロルド・B・リーの後を継いだのである。

スペンサー・W・キンボールは，1895年3月28日，アンドリュー・キンボールとオリーブ・ウーリー・キンボールの間の6番目の子供として生まれた。アンドリューは，使徒であり予言者であり宣教師であり第一副管長であったヒーバー・C・キンボールの息子である。ヒーバー・C・キンボールは1835年に十二使徒に召され，次いで，1847年にはブリガム・ヤングの副管長となり，以後この世を去るまでその職にあった。彼はこの末日の最初の十二使徒のひとりである。

キンボール大管長の母方の祖父であるエドウィン・デルワース・ウーリーはブリガム・ヤング大管長の実務顧問をした人であり，またヒーバー・J・グラント大管長が所属したワード部の監督でもあった。

キンボール大管長はソルトレーク・シティーの生まれであるが，アリゾナ人として育つことになった。

大管長会の命により，彼の父が，アリゾナ州の肥沃なギラ・バレーにあるサッチャーという町に赴き，セントジョセフステーキ部を管理することになったのである。それが26年半続き，その後12年間は，インディアン居留地伝道部の伝道部長に召された。このようにインディアンへの伝道に熱意を傾ける父からインディアンのいろいろな物語や歌を聞いたスペンサーの心には，彼らへの愛が次第にはぐくまれ，後にインディアン問題の指導者として長期間にわたって人々の支持を受ける結果となった。

キンボール大管長はサッチャーの学校でも常に指導的立場に立ち，学業もスポーツも優等であった。彼はパブリック・スクールを出ると教会のギラ・アカデミー（現イースタンアリゾナジュニアカレッジ）に入り，在籍4年のうちに級長，学生自治会長を務めた。伝道後はアリゾナ大学に出席し，1969年，ブリガム・ヤング大学から名誉法学博士号を授与された。

キンボール大管長が最初に召された伝道部はスイス・ドイツ伝道部であったが，1914年に勃発した第一次世界大戦のために帰国を余儀なくされ，合衆国の中部諸州伝道部へ転任となった。それから今日に至るまで，彼は世界中の伝道部を訪れ，宣教師と会い，また長年にわたり教会の伝道役員会の会長を務めた。彼が面接した宣教師は数万名にも達するだろ

う。

彼の実業歴は銀行員に始まる。現金出納係を皮切りに，帳簿係，支店長，副支配人へと昇進し，銀行退職後はキンボール・グリーンハーフ保険不動産会社の経営者となった。十二使徒評議員への召しを受けたのはこの仕事をしていたときである。その後彼が役員として名を連ねたものには，アリゾナ保険協会理事，州退官教職員協会理事，ギラジュニアカレッジ教育管理会幹事および委員などがある。またギラ・バレー初のラジオ局であるギラ放送会社（KGLU）の設立発起人となり，経営にも加わった。またギラ・バレー開発地区幹事，アリゾナ・ビマ綿花栽培協会幹事も務めた。自分でも小さな畑を耕し，綿花とアルファルファ草を栽培していた。ほかにもスカウト，教育，政治，商業会議所，ロータリークラブなど，公共，実業を問わず，数多くの重責を担ってきた。ロータリークラブでは地区管理委員長，スカウトでは評議会の理事および理事長を務めた。

教会での奉仕は，12歳で執事の職に聖任された頃から始まり，以来今日に至るまで，ほとんどの組識でその才能を遺憾なく発揮してした。

彼は長年にわたってアリゾナ州のセントジョセフステーキ部において書記の任にあったが，後に副ステーキ部長として12年間働き，次いで新しく設立された同州のマウントグレアムステーキ部のステーキ部長に召され，5年半の間働いた。1938年ギラ・バレーの北部の町ダンカンで起きた大洪水の後，教会員のために大規模な救済活動を指示したのは彼である。

結婚は1917年の11月，伝道から帰ってからのことであった。相手はギラジュニアカレッジで教鞭を執っていたカミラ・アイリングである。カミラはメキシコからの難民で，コロニア・フアレスのモルモン居留地で生まれ，ビラ革命のときに家族共々国を追われた。

カミラの学生生活は，メキシコのフアレスステーキアカデミーを発端に，ユタ州プロボのブリガム・ヤング大学，ユタ州ローガンのユタ州立大学，そしてカリフォルニア大学へと進んだ。父はエドワード・クリスチャン・アイリング，母はキャロライン・ロムニーである。キンボール大管長夫妻には，1974年現在で，子供が4人（男3人，女ひとり），孫が27人，曽孫が12人いる。このようなわけで彼の家族は50名になんなんとしているが，この家庭こそ彼の人生の核心をなすものである。娘のグラント・M・マック夫人（オリーブ・ベス）はタバナクル合唱団の一員であり，息子のひとりスペンサー・L・キンボールはウィスコンシン大学法学部長，ローズ奨学金受領者，ユタ大学法学部長であり，保険に関する書物も数冊著している。ニューメキシコに住むアンドリュー・キンボールは傑出したゼネラル・エレクトリック社員，エドワードはブリガム・ヤング大学法学部教授である。キンボール大管長が十二使徒評議員会会員に召されたのは1943年7月8日，聖任は同年10月7日，ヒーバー・J・グラント大管長から受けている。

十二使徒評議員会会員として，彼は洋の東西を問わず世界中をくまなく旅している。南アメリカ大陸は南端から北端まで，中央アメリカやメキシコ訪問は数え切れない。カナダ全域，ヨーロッパ各国，ニュージーランドやオーストラリアをはじめとする南太平洋諸島，日本，韓国，南ア共和国，それに合衆国の全域といった具合である。またほとんどの伝道部，ステーキ部を訪問し，南アメリカ，南太平洋諸島，合衆国，カナダでは多くのステーキ部を創設，分割および再組識した。その外にも実務部長として南アメリカの伝道事業を3年間，英国を2年間管理した。

キンボール大管長はブリガム・ヤング大学および教会学校教育委員会の理事，ユタ・ホーム・ファイヤー・インシュアランス・カンパニーおよびベネフィシャル・ライフ・インシュアランス・カンパニーの重役を務めてきた。また若人の成長にも広汎にわたって努力を傾注し，少女のプログラムや後に社会奉仕事業へと発展した青少年社会復帰委員会などを創設した。著作も若人の奉仕に関するものが多い。現在も大管長として，これら多くの管理会や委員会の長として働いている。かってユタ州エフライムにあるスノーカレッジのインスティテュートの学生たちが，彼に「人を育てる庭師」（Gardener of Souls）という名誉ある称号を贈った。

ヒーバー・J・グラント大管長が教会を管理していた頃から，キンボール大管長のインディアンプログラムに指導者として献身的な働きをなし，過去四半世紀の間インディアン委員会の委員長を務めた。彼の指導の下で多くのことがなされたが，その最たるものは「インディアン学生紹介プログラム」であろう。これは8歳から18歳までのインディアンの少年少女をモルモンの家庭に託し，教育の向上をはかるものであり，1954年にはわずか68名の登録だったものが，現在（1969—70）では5,000名近くになっている。その他にも教会がインディアンの生活向上のために設けてきたプログラムは枚挙のいとまがない。

11歳のときにキンボール大管長はサミュエル・クラリッジから祝福師の祝福を受けているが，その中の一節を紹介しよう。

「あなたは多くの人々に，特にレー

マン人に福音を宣べ伝えるであろう。なぜなら主はあなたに，言語の賜と福音を至極平易に表現する能力を祝福されるからである。そしてあなたは，彼らが自らの民のまわりに防壁のごとく立つべく，備えをする姿を目撃するであろう。」（サミュエル・H・クラリッジによる祝福師の祝福，1906年6月6日）

この祝福は成就した。今までに彼ほどひんぱんにレーマン人（インディアン）のもとを訪れ，語りかけ，彼らと行動を共にした指導者はほかにいないのである。

キンボール大管長は名の通った演説家でもあり，彼の説教は印刷された分だけでも相当な量にのぼる。また聖歌隊指導者，ワード部オルガニストとしても活躍し，数々の会においてコーラスの一員として演奏した経験もある。

キンボール大管長は半生を通して，常に重大な危機からその生命を守られてきた人である。一度は溺れて死にかけ，顔面麻痺にかかり，腸チフスや天然痘で重態に陥ったこともある。また1957年には咽喉にできた悪性腫瘍を切除する手術を受け，片方の声帯全部ともう一方の半分を失い，その結果一時は全く話す能力を失ってしまった。しかし今，その深みのある落ち着いた声は，教会の指導者としての働きに何らの支障もきたしていない。それに1971年には75歳という高齢で心臓切開手術を受けたが，今は全く健康そのものである。

彼の著作は小冊子類が多いが，「赦しの奇跡」「奇跡に先駆ける信仰」の2冊の単行本はよく読まれている。



エズラ・タフト・ベンソン

エズラ・タフト・ベンソンは現在，末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒評議員会会長である。ベンソン長老は十二使徒評議員会で30年間働き，1973年12月28日金曜日に先任使徒としてこの管理の職に支持された。

ベンソン長老は多彩な能力を発揮して教会のために働き，国においてもアイゼンハワー大統領の時代に8年間アメリカ合衆国農務長官を務めた。

1933年から1937年にかけては，アイダホ州ボイシステーキ部のステーキ部長会の一員として，また2年間同ステーキ部のステーキ部長として働いた。その後首都ワシントンD. C.へ移り，ここでワシントンステーキ部の初代ステーキ部長となって，その地のすべての会員をまとめ組織した。同時に議会においても活躍し，十二使徒評議員会で働くよう召されるまでその任にあった。

彼の曽祖父エズラ・T・ベンソンは，1847年7月24日ブリガム・ヤングと共にソルトレーク盆地に入植した初期の開拓者の一人で，使徒であった。そして両親がアイダホ州南部における初期の開拓に加わりその地に入植したため，彼は1899年8月4日開拓地のホイットニーという小さな村で生まれた。青年の頃，彼はスカウトや神権活動に，また教会の補助組織においても活発に働いた。またアイダホの学校に学び，その後ユタ州ローガンのユタ州立大学で学んだ。

1921年から1923年にかけてベンソン長老は英国諸島において宣教師として働いた。伝道後は，ユタ州のプロボのブリガム・ヤング大学で学び，優秀な成績で卒業してアイオワ大学の奨学金を受けた。そして同大学で修士号を受け，農業栄誉協会の会員に選ばれた。その後カリフォルニア大学の大学院で学んだ。

1929年から1939年にかけては，生まれ故郷であるアイダホ州の政界で働いた。

1939年春，ベンソン長老は4,600もの協同組合の連合体である農業家協同全国評議会の書記長に任命されるという栄誉を受けた。以来彼は農業とスカウトの分野における幾つかの諮問委員会と国民会議で働いた。彼はアメリカ・ボーイスカウト国家諮問委員会の一員であり，スカウトの名誉ある賞を数多く受けている。また現在はブリガム・ヤング大学の理事であり，幾つかの商業関係の会社の取締役でもある。そのほか，第二次世界大戦中は，フランクリン・デラーノ・ルーズベルト大統領の農業諮問四人委員会でも働いた。



マーク・E・ピーターセン

マーク・E・ピーターセン長老は，1944年4月，使徒として，末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒評議員会に召された。

ピーターセン長老は力強い話し手，文筆家として教会に広く知られており，多年にわたって教会の広報委員会の委員長として，広報活動に顕著な働きをしてきた。

現在は新しく組織された教会広報部担当アドバイサーとして，もう一人の十二使徒評議員会の会員と共に働いている。

またそのような責任の中にあって，教会の数多くの訪問者センターの設立と運営を率先して指導してきた。訪問者センターは教会の多くの重要な史跡のある場所，有名なソルトレーク・シティーのテンプル・スクエアを始め，アメリカ合衆国内，イギリス，スイス，ニュージーランドなど，神殿の敷地内に設けられている。

元新聞記者であり，編集者であったことから，教会幹部になってからも，著作や説教を通じて教会に対して広範囲な貢献をしてきた。ピーターセン長老の著した論説は多く，著書も20冊ほどにのぼる。そしてこれらは，その時々の問題に対する理解と力強い助言に満ちているとの好評を得ており，忠実に福音の原則に従い正しい生活をするよう教会員特に青少年を戒めてきた。

ピーターセン長老は1920年代中頃に，ユタ州ソルトレーク・シティーの教会の新聞「デゼレト・ニューズ」の記者として，論説活動のスタートを切った。以後主幹，総務主任と昇格し，後にデゼレト新聞社の社長となった。

また彼はかつて教会の系図協会の部長として働いたが，現在は系図協会理事会の一員であり顧問でもある。また教育音楽委員会のアドバイザーでもある。

彼はほぼ30年間教会の役員として，あるいは他の責任によって世界中の伝道部やステーキ部を訪問した。さらに1960年代の中頃には，ロンドンに本部を置く西ヨーロッパ伝道部を管理した。

ピーターセン長老は1900年11月7日にソルトレーク・シティーで生まれ，1923年8月30日にソルトレーク神殿でエマ・マー・マクドナルドと結婚した。夫妻にはふたりの娘がいる。



デルバート・L・ステイプレー

アリゾナ出身のデルバート・L・ステイプレー長老は，1950年10月5日末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒評議員会会員に召されるまで，フェニックスにおける実業界，地域社会または宗教界の優れた指導者であった。

ステイプレー長老は1896年12月11日に，オーリィ・セイマーとポリー・メイ・ハンセイカー・ステイプレーの息子として，アリゾナ州メサに生まれた。1915年から1917年にかけて，ステイプレー長老は南部諸州伝道部で伝道し，第一次世界大戦中はアメリカ合衆国海軍部隊で働いた。さらに戦争後9年以上もの間，アリゾナ州軍の陸軍少佐として働いた。

現在は，アリゾナで金物類，道具類を扱う同族会社，O・S・ステイプレー社の重役会の会長をしている。またZCMIデパートの取締役であり，シオンファーストナショナル銀行の重役であり，信託委員会の一員でもある。ZCMIデパート，シオンファーストナショナル銀行はいずれもユタ州にある。またアリゾナ州フェニックスのバレーナショナル保険会社の重役でもある。

そのほか，ユタ州プロボにあるブリガム・ヤング大学の理事および教会の教育委員会の委員でもある。またその他幾つかの教会の委員会の委員長または委員，2つの教会関係の農場の重役会会長である。

ステイプレー長老はまた地域社会の仕事でも多くの重要な地位にある。かつてはフェニックス・ライオンズクラブ，フェニックス・ベタービジネス局の会長を務め，1921年から1924年にかけて一期4年間メサ市議会議員の席にあり，フェニックス商工会議所や他のアリゾナグループで活躍した。

ステイプレー長老は熱心な青少年指導者として，アリゾナ州フェニックス・アメリカボーイスカウト・セオドア・ルーズベルト評議会の会長を務めた。現在は同評議会の名誉役員会の一員である。またグレートソルトレーク・アメリカボーイスカウト評議会の実行委員，西部地区の名誉実行委員会諮問委員会の一員であり，ボーイスカウト全国評議会の一員である。またステイプレー長老は，その青少年に対する多大な貢献により，スカウトの最高の栄誉を与えられた。

ステイプレー長老はマリコーパステーキ部の高等評議員を12年間，フェニックスステーキ部の第一副ステーキ部長を10年間，そしてステーキ部長を3年間務めた。また1944年から1951年にかけては，教会福祉プログラムのアリゾナ地区委員長を務めた。

ステイプレー夫人は旧姓エセル・バーデット・デービスといい，夫妻には3人の子供がいる。



マリオン・G・ロムニー

マリオン・G・ロムニーは1951年10月6日，十二使徒評議員会会員に召され，1972年7月7日，大管長第二副管長に指名された。そしてハロルド・B・リー大管長のもとで約1年半の間働いた後，1973年12月30日，新たに召されたスペンサー・W・キンボール大管長のもとでも続けて第二副管長として働くように召された。

教会の福祉プログラムは広く世界に知れわたっているが，その先がけの頃から陰の導き手となっていたのは彼である。彼は1941年6月，福祉プログラムの副部長に召されている。

ロムニー副管長は1897年9月19日，メキシコのコロニア・フアレスで生まれた。両親はアメリカ人で，父はジョージ・S・ロムニー，母はアーテメシア・レッド・ロムニーである。彼は1912年までコロニア・フアレスの学校に通ったが，内乱でアメリカ人の立場が危くなったため，彼の家族も財産をあとに残してメキシコを離れなければならなかった。それから数年経って，彼の父はアイダホ州レックスバーグにあるリックス・ジュニアカレッジの学長となり，ロムニー副管長はそこを1920年に卒業した。また伝道後もユタ大学へ進み，1926年に理学博士号を1932年には法学学士号，さらに後年には法学博士号を取得している。

卒業後は法曹界に進んだ。ソルトレーク・シティーで11年間弁護士として働いた彼は，その間，郡，地区，市それぞれの弁護士補助（assistant attorney）として働いた。また1935年から36年まで州議会議員を務めている。

兵役は1918年，陸軍であった。

1920年から23年まで，彼はオーストラリアで専任宣教師として働いた。また1935年にはソルトレーク第33ワード部の監督，1938年にはボンネビルステーキ部のステーキ部長に召された。

そして1941年4月6日，新たに設けられた十二使徒評議員会補助の職に召された5人のうちのひとりとなった。

ロムニー副管長の教会幹部としての仕事は多岐にわたる。ホームティーチング・家庭の夕べ委員会や教会建築諮問委員会の委員長を歴任し，現在でも教会教育委員会，ブリガム・ヤング大学理事会の理事をはじめ，数多くの教育および実業組織の役員をしている。

彼は1924年9月12日，ソルトレーク神殿でアイダ・ジェンセンと結婚，リチャード・Jとジョージ・Jというふたりの息子がいる。



リグランド・リチャーズ

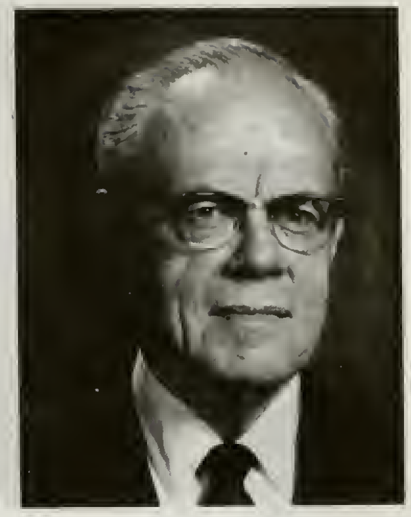
リグランド・リチャーズ長老は，末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒評議員会の一員であり，60年以上も教会の主要な地位にあって働き，加えて同等期間の長きにわたって不動産業で成功を収めてきた。

リチャーズ長老はその家系における第3番目の使徒である。父は十二使徒評議員会会長であったジョージ・F・リチャーズ，祖父はフランクリン・D・リチャーズでやはり十二使徒評議員会会長であった。祖父は開拓者の指導者であり，使徒であり，ブリガム・ヤング大管長の副管長であったウイラード・リチャーズの甥にあたる。リチャーズ長老はアリス・A・ロビンソンを母親として1886年2月6日，ユタ州ファーミングトンに生まれた。

彼の教会での働きは，1905年から1908年にかけて宣教師としてオランダに召された時に始まる。彼は4つの伝道部で伝道し，そのうちのふたつを管理した。また3つのワード部で監督を務め，2つのステーキ部の高等評議員として，またひとつのステーキ部のステーキ部長として働いた。また14年間教会の管理監督として，1952年4月以降は十二使徒評議員会の一員として働いている。

リチャーズ長老には広く読まれている教会関係の3冊の著作がある。

彼は1909年5月19日にイナ・ジェイン・アシュトンとソルトレーク神殿で結婚し，子供は男子が2人，女子が4人いる。



リチャード・L・エバンズ

1971年11月1日のリチャード・L・エバンズ長老のこの死すべき世からの急逝は，我々にはかり知れない，限りない空虚さを残した。その思いは遠い所に，高い所，つつましい家庭に，そして急逝を容易に信じようとしない人々の心の中に，詩人エバンズがかつて語った次の言葉のごとく次第に強く押し寄せた。

「緑深き枝の巨大なヒマラヤ杉が
大音響とともに倒れ
そこに空虚な風景が残るごとく」

リチャード・L・エバンズは著名な人であった。主の使徒として全世界の末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に尊敬され，ソルトレーク・シティーのテンプル・スクェアから放送される，タバナクル聖歌隊のコーラスに交じえた「スポークンワード」の創始者として数百万の人々に愛し尊敬され，そしてその名はロータリークラブの会長として百カ国以上に広く知れわたっている。

政府関係者や数多くの一般人も彼の死を悲しみ，残された家族に哀悼の意を表わした。

しかし，貧しい生まれの彼がこのような生涯を送るとはだれが想像し得ただろうか。9人兄弟の末っ子と

して生まれた彼は，生後2カ月半で父を事故で失い，その人生と性格は，犠牲と勇気と信仰に一致した家庭において，慈愛に満ちた母親の手により形成されていった。

リチャード・L・エバンズのためにこの世の成功に至る安易な道を備えてくれる者はなかった。彼はよく昔のことを思い出しながら，働かずに学校へ通ったことは1度もなかったことを話していた。花売り，新聞配達，ソーダ水売り，トラックの運転手，毛織物売り，広告屋，印刷屋，鉄道の測量員などを経験し，その後かけだしながらラジオ放送の仕事に入った。

ユタ大学在学中に，伝道の召しが来たために勉学を中断した。その後約3年間英国で伝道し，「ミレニアル・スター」の副編集長となり，後にヨーロッパ伝道部の書記となった。

伝道後，ソルトレーク・シティーのKSL放送局に入り，同時にユタ大学に復学した。そして学士および修士の学位を得た。この期間ならびにそれ以後，彼は傑出したラジオアナウンサーとして，また役員として認められるようになった。

リチャード・L・エバンズの名が世界的に知れわたるようになったのは，1930年に彼が，現在では定評のあるタバナクル聖歌隊の全国向け放送のプロデューサー兼アナウンサーの職務についたときであった。その番組のプロデュサーをしながら，死に至るまでの40年以上もの間，彼は毎日曜日の朝，時宜を得た，人を刺激し，心を奪い立たせる短い説教を自ら書き，語ったのである。その人の心を射る，また励みとなり動機づけとなる霊感あふれる言葉は，幾百万の家庭に達し，人々の生涯を動かした。末日聖徒イエス・キリスト教会の神学をよく知らない数多くの人々にとって，彼は唯一の教会であり，形式的に接する唯一の宗教であった。また彼の放送した時間に合わせて礼拝を行なった人々の数は数え切れない。

宣教師の時代に認められた文才により彼は30歳のとき，「インプルーブメント・エラ」の編集長に召され，30年以上もの間，立派な業績をおさめた。

教会幹部に召されたのは32才のときである。七十人最高評議員の召しは，彼に幅広い伝道の機会を与えた。そして1953年主によって使徒として召され，十二使徒評議員会に名を連らねた。

彼は，教会の集会であろうが教会外の席であろうが，どこにあっても悔い改めを説き，永遠の原則を教え，人生と神の徳，永遠の変わらざるものからの祝福を証した。彼は自分の利益を求めず，神に仕え，仲間を助け，時間と才能を主の業の発展のために，そして人間の徳の向上のために勤勉に用いたのである。

危機にあるとき，個人的な必要が生じたとき，地位の高い者も，貧しい者も，教会員も非教会員も，多くの人々がリチャード・L・エバンズの言葉を心に浮かべた。病いに倒れたとき，彼が生涯で触れ合った人々が遠方から病院へつめかけ，家族を励ました。11月4日の葬儀には，彼が関係していた世界中の諸団体の代表が列席した。

テンプル・スクェアのタバナクルで開かれた葬儀で，彼の最愛の妻アリスと子供を伴なった4人の息子たちが，彼の眠る棺から数フィート離れたところに座った。あふれんばかりのタバナクルの壇上には，教会幹部に交じって彼の僚友が席を連らねた。真の賛美をこめたタバナクル聖歌隊の歌声が壁にこだまし，会場は愛と主のみたまにより満たされたのである。

リチャード・L・エバンズの名と生涯とその使命は決して忘れ去られることがない。「今日も，そしていつも」感動と感謝をもって思い出されることであろう。

(「聖徒の道」に掲載された，マリオン・D・ハンクス長老による追悼記事より)



ヒュー・B・ブラウン

かつて陸軍司官，弁護士，大学教授であり，石油会社で要職にあったヒュー・B・ブラウン長老は，末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒評議員会の一員である。ブラウン長老は故デビッド・O・マッケイ大管長の第一副管長として働いた。

ブラウン長老は1953年に十二使徒評議員会補助に召され，1958年4月6日に十二使徒評議員会会員に召された。

彼は1883年10月24日，ホーマー・マンリィとリディア・J・B・ブラウンの14人の子供の第5子，次男として，ユタ州ソルトレーク・シティーに生まれた。15年後家族はカナダへ移住し，彼は人生の多くをここで過ごすことになった。

チャールズ・O・カード（カナダ，アルバータ州カードストンの創設者）の娘であり，ブリガム・ヤングの孫娘にあたるザイナ・ヤング・カードと1908年6月17日ソルトレーク神殿において結婚した。現在ブラウン長老夫妻には，第二次世界大戦中に戦死した息子のヒュー・カード・ブラウンを除いて，6人の娘と息子がひとりいる。

ブラウン長老は初めカナダで，後にアメリカ合衆国で弁護士として働いた。第二次世界大戦中はカナダ陸軍の海外部隊で働き，陸軍少佐まで昇進した。1946年から1950年にかけては，ユタ州プロボにあるブリガム・ヤング大学の宗教学教授，退役軍人問題のコーディネーターであった。また教会幹部に召された当時，ブラウン長老はカナダのリッチランド石油開発株式会社の取締役社長であった。

ブラウン長老の教会歴は長い。1904年から1906年にかけてイギリスで宣教師を務め，その後副監督，アルバータ（カナダ）ステーキ部の高等評議員，レスブリッジ（カナダ）ステーキ部のステーキ部長，グラナイトステーキ部（ソルトレーク・シティー）の副ステーキ部長，ステーキ部長，また2度にわたって(1937年－40年，1944年－46年）英国伝道部の伝道部長を務めた。第二次世界大戦中は，末日聖徒軍人活動のコーディネーターを務めた。



ハワード・W・ハンター

ハワード・W・ハンター長老は現在末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒評議員会の一員であり，1959年10月10日に使徒に召されるまでは，南カリフォルニアの著名な法律家であり実業家であった。

その半生を通して教会の活発会員であるハンター長老は，1907年11月14日，ジョン・ウィリアムとネリー・マリー・ラスマッセン・ハンターの息子として，アイダホ州ボイシに生まれたが，ボイシで小・中学校に通い，高校を卒業すると，1928年にカリフォルニアへ移った。

1931年6月彼はソルトレーク神殿でクララ・メイ・ジェフスと結婚した。大恐慌の時に，さらに教育の必要を感じ，妻と幼ない2人の子供をかかえたまま，ロサンゼルスのサウスイースタン大学に入学した。そして卒業に必要な単位を修得すると，法学部で学び，1939年に法学博士号を得て優等で卒業した。

卒業後カリフォルニア州法律協会への所属を認められ，ロサンゼルス法律家協会，また地区の一流法律家の組織の一員となった。ユタ州に移ってからはユタ法律家協会に所属す

ることを認められた。現在幾つかの大きな工業ならびに不動産関係の会社，および保険会社の重役会の一員でもある。

ハンター長老はイーグルスカウトであり，長年スカウト活動を行なっている。彼は教会の青少年プログラムの中にあって欠くべからざる人材である。

ハンター長老は1940年にロサンゼルスのエルソレノワード部の監督となり，6年間その職にあって働いた。1947年から1948年にかけてはパサデナステーキ部で大祭司定員会会長，1948年から1950年にかけてはステーキ部高等評議員を務め，また1950年2月から1959年11月にかけてパサデナステーキ部のステーキ部長を務めた。またそのかたわら，南部カリフォルニア福祉地区の責任者に，その後分割されロサンゼルス福祉地区の責任者になった。

現在ハンター長老は，系図協会のアドバイザー，ハワイのポリネシア文化センターの所長としても活躍中である。



ゴードン・B・ヒンクレー

ゴードン・B・ヒンクレー長老は末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒評議員会の一員であり，これまでの生涯の多くの時間を教会の業のために捧げてきた。

彼は教会の責任に加えて，地域社会や実業界でも活躍している。中でもCBS放送と提携してテレビ，ラジオ放送を行なっているKSL株式会社重役，日刊新聞の発行において西部最古の歴史を持つデゼレト新聞社社長である。デゼレト新聞社は商業印刷部門でも西部最大の規模を誇る。

ヒンクレー長老は1910年6月23日，ブライアント・Sとアダ・ビトナー・ヒンクレーの息子としてソルトレーク・シティーに生まれた。地元の学校を卒業した後，1932年にユタ大学を卒業した。

1933年6月，彼は2年間イギリスで伝道するよう召され，1934年3月には，ロンドンに本部のあるヨーロッパ伝道部で働くよう責任を受けた。そして1935年に帰還し，2年と経たないうちにデゼレト日曜学校中央管理会に召され，1937年から1946年までの9年間この責任を務めた。

ヒンクレー長老は，1958年4月10日，十二使徒評議員会補助に召されるまで，20年間教会のラジオ広告および伝道文献委員会の書記を，また最後の7年間は中央伝道委員会の書記を務めた。その後，1961年10月5日に十二使徒評議員会会員に召された。

彼は教会の大管長から数々の特別な責任を受けて果たしてきた。そのうちの4つは，神殿の献堂の準備に関することであった。その神殿とは1955年9月に献堂されたヨーロッパ最初の神殿であるスイス神殿，1956年3月献堂のロサンゼルス神殿，1958年4月献堂のニュージーランド神殿，1958年9月献堂のロンドン神殿である。

ヒンクレー長老は5冊の書物の著者であり，その他にも多くの本を出版している。また教会の数多くのテキスト，パンフレット，ラジオやフィルムの台本を著した。このような広範な活動に加え，イーストミルクリークステーキ部のステーキ部長会の一員として10年，また教会幹部になる直前まで2年間ステーキ部長を務めた。



N・エルドン・タナー

西部カナダの産業界および政治界で指導的な立場にあったN・エルドン・タナーは，1973年12月30日に大管長会が再組織され，スペンサー・W・キンボールが新たに大管長に召されたとき，継続して第一副管長としての職を果たすよう召された。彼は前大管長ハロルド・B・リーの在任中，すなわち1972年7月7日から1973年12月26日の死去のときまで，第一副管長の任にあった。

また彼は，その前の2名の大管長，ジョセフ・フィールディング・スミス，デビッド・O・マッケイに，第二副管長として仕えている。

タナー副管長は1963年に大管長会に入ったが，それ以前は十二使徒補助として2年，十二使徒評議会会員として1年働いている。

タナー副管長のカナダでの経歴は，アルバータのパブリックスクールから始まった。1928年から32年までカードストンで校長の職にあった彼は，そのかたわら町議会議員を1期務めた。続いてアルバータ州議会議員に選出され，議長を務めている。また後にアルバータ州の土地・鉱山担当長官（Minister of Lands and Mines）に指名された。さらに1942年にはアルバータ調査評議会の議長，1946年にはボーイスカウト協会の州コミッショナーの要職についている。

1952年から58年にかけて，彼はカナダ産業会の立役者であった。メリル石油会社社長を皮切りにトロント・ドミニオンバンク・オブ・カナダ取締役，次いでトランス・カナダ・パイプライン社長と歴任。その後もカナダガス協会会長，アルバータ大学幹事会員にも指名されている。

教会での職は，まずカードストーン第一ワード部監督，エドモントン支部支部長を経験した後，1953年から1960年に教会幹部として聖任されるまで，ステーキ部長としてカルガリーステーキ部を管理した。1961年4月9日，彼は西ヨーロッパ伝道部長に任命され，1963年1月解任。ソルトレーク・シティーに帰ってからは教会の系図協会会長に任命された。

タナー副管長はカナダ生まれのように言われるが，実は生まれはソルトレーク・シティーで，1898年，5月9日のことである。家族がカナダのアルバータに移ったのはそれから3週間後のことであった。

アルバータ州ヒルスプリング出身のサラ・イザベル・メリルとの結婚は，1919年12月20日，5人の娘がいる。彼が合衆国の市民権を得たのは1966年5月2日である。



トーマス・S・モンソン

トーマス・S・モンソン長老は1963年10月4日に，末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒評議員会会員に召された。

十二使徒評議員会の一員としての多くの責任の中には，伝道役員会の一員として，また教会内務伝達委員会のアドバイザーとしての仕事がある。

彼は1959年から1962年にかけて教会のカナダ伝道部の部長を務めた。その前には，ソルトレーク・シティーのテンプルビューステーキ部のステーキ部長会で，また同じステーキ部内で監督として働いた。

モンソン長老は1927年8月21日，G・スペンサーとグラディス・コンディー・モンソンの息子として，ソルトレーク・シティーで生まれた。彼はソルトレークの公立学校に通い，1948年にはユタ大学を優等で卒業した。また第二次世界大戦中はアメリカ合衆国海軍で働いた。

また1948年10月7日にソルトレーク神殿でフランシス・ビバリー・ジョンソンと結婚した。

大学から経営学の学士号を受けた後，モンソン長老はソルトレーク・

シティーにある教会所有の日刊新聞「デゼレトニューズ」の仕事に携わった。また後に合衆国西部では大規模な商業印刷会社に数えられるデゼレトニューズプレス社に入り，十二使徒評議員会に召された後もしばらくの間その総支配人を務めた。現在はデゼレト新聞社の副社長である。

彼はかつてユタ印刷工業の社長であり，アメリカ印刷工業の重役であった。

彼は実業界でも活躍しており，著名な幾つかの会社の重役である。またユタ州プロボのブリガム・ヤング大学理事でもあり，ユタ州高等教育委員会の委員でもある。



ボイド・K・パッカー

十二使徒評議員会会員のボイド・K・パッカー長老は1970年4月以来この職にある。その前は1961年以来ずっと十二使徒評議員会補助を務めてきた。

教育家としてのパッカー長老の経歴には，教会のセミナリー・インスティテュートの指導主事，ブリガム・ヤング大学管理評議会会員としての働きがある。また現在は教会の教育委員会の委員であり，ブリガム・ヤング大学理事でもある。

パッカー長老はかつてアメリカ合衆国東部のニューイングランド伝道部の部長を務め，現在は神権ホームティーチング，家庭の夕べ，教会の軍隊関係のプログラムを担当している。

彼は地域社会の事業に熱心で，州議会の議員として働いたこともある。また市民組織，教育組織に召喚されることもたびたびであった。

パッカー長老は1924年9月10日ユタ州ブリガム・シティーに生まれた。第二次世界大戦中は太平洋地域で爆撃機のパイロットを務めた。また州立大学で科学の学士号と修士号を得，ブリガム・ヤング大学で教育管理学の博士号を取得した。

パッカー長老とその妻ドナ・スミス・パッカーには10人の子供がいる。



マービン・J・アシュトン

長い間末日聖徒イエス・キリスト教会の青少年指導者として卓越した働きをしてきたマービン・J・アシュトン長老は，1971年12月2日に十二使徒評議員会会員に召された。

1969年10月以来，十二使徒評議員会補助を務め，現在は教会社会奉仕プログラムアドバイザー，教会医療奉仕協会理事，教会教育委員会委員，教会内務伝達委員会アドバイザー，施設諮問委員会委員長，施設管理部アドバイザー，および支出承認委員会委員をしている。

アシュトン長老は11年間，教会の青少年活動プログラムである青年男子相互発達協会（YMMIA）の中央管理会長会副会長を務め，21年間中央管理会の一員として働いた。

彼は青少年指導者や青少年問題の指導にその関心を向け，多くの時間を割いてきた。またアメリカボーイスカウト全国委員会の委員，地区実行委員会，グレートソルトレーク評議会の実行委員会においても働いた。少年たちに対する顕著な働きにより，2つの優れたスカウトの賞を得，イーグルスカウトでもある。MIA役員として，アシュトン長老は教会全体の青少年の音楽，ダンス，演劇，スピーチ，スポーツを管理してきた。また25年間全教会のスポーツプログラムを管理した。

ユタ州議会の上院議員時代，アシュトン長老は少年の拘置に関する法律改善のためその先鋒となって働いた。1960年にはユタ州ホワイトハウス青少年大会の余暇時間部門議長を務めた。

1937年から1939年にかけては，英国で伝道のために働いた。また宣教師バスケットボールチームのキャプテンとなり，英国の全国バスケットボール大会で優勝した。アシュトン長老はユース・カンファレンス，青少年指導のディレクター，講演者として世界中を旅行した。そして1969年には青少年に対する目覚ましい働きと模範により賞が贈られた。

職業面では自ら設立したアルタ製材会社の副社長，デゼレト出版社社長，その他数カ所の事業所の役員として働いている。

アシュトン長老は1915年5月6日，マービン・O・とレイ・J・アシュトンの息子としてソルトレーク・シティーに生まれ，ユタ大学経営管理部を卒業した。また彼は1940年にソルトレーク神殿でノーマ・バーントソンと結婚し，4人の子供がいる。アシュトン夫人は扶助協会中央管理会会員である。



ブルース・R・マッコンキー

かつて合衆国陸軍の保安および情報担当将校であり，新聞の論説記者，公務員であったブルース・R・マッコンキー長老は，現在末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒評議員会会員である。また1946年から1972年にかけては七十人最高評議員会の会員であった。

マッコンキー長老は1,100以上の項目を網羅した百科事典タイプの書「モルモンの教義」(*Mormon Doctrine*)を著し出版した。またジョセフ・フィールディング・スミス大管長の説教と著作の集大成である「救いの教義」(*Doctrines of Salvation*)(全3巻)を編纂した。また全3巻に及ぶ新約聖書の注釈書「新約聖書の教義注解」(*Doctrinal New Testament Commentary*)の著者でもある。

1961年から1964年にかけて，マッコンキー長老はオーストラリア，ビクトリア州メルボルンに本部のある南オーストラリア伝道部の伝道部長を務めた。

マッコンキー長老は1915年7月29日に，オスカー・Wとビビアン・レッド・マッコンキーを両親として，ミシガン州アン・アーバーに生まれ

た。当時父親はミシガン大学で法律を学んでいた。

彼は学生時代いろいろな活動に携わっていたが，特に討論や学校年鑑の事務処理などをよく行なった。

1934年から1936年にかけてアメリカ合衆国東部伝道部の宣教師であった時には，セネカおよびオルバニィ地方の地方部長として働いた。

またユタ大学在学中は，教会のいろいろな指導者としての地位を務めた。1946年10月10日に，故ジョージ・アルバート・スミス大管長により七十人最高評議員会の一員に聖任された。

彼は1937年10月13日に，故ジョセフ・フィールディング・スミス大管長の娘であるアメリア・スミスと結婚し，9人の子供がいる。

彼は1937年には教養学学士号，1939年には法学学士号を修得してユタ大学を卒業した。さらに1967年6月には同じユタ大学から法学博士号を修得した。1940年から1942年にはユタ法律家協会会員，弁護士，市の弁護士補助，検察官を務めた。

その後4年間は軍隊の保安および情報担当将校を務め，野戦砲兵隊予備隊陸軍中佐の地位で軍を退き，一般市民の生活に戻った。

教会幹部となった後も一時，軍隊で働く何千人という青年たちに対する霊的な指導を管理する教会の軍人コーディネーターを務めた。



L・トム・ペリー

末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒評議員会会員のL・トム・ペリー長老は1974年4月6日，現在の職に召された。これまでに，十二使徒評議員会補助，ボストンステーキ部副ステーキ部長，ウェストンワード部副監督を務めている。

彼はマサチューセッツ州ボストンに6年間居住し，ボストン金属器機百貨店の財務担当副社長になった。また後にはボストン近辺に6つの百貨店を経営するR・H・スティアン商会の経理部長になった。

また，十二使徒に召されるまで十二使徒評議員会補助として働いた。

彼の教会における働きは，2年間合衆国海兵隊員として太平洋上で働いた後の1942年合衆国北部での伝道に始まった。

ペリー長老は1949年ユタ州立大学において経営学学士号を修得し，1950年大学院課程に進学した。

ペリー長老は1922年8月5日，ユタ州ローガンに生まれ，1947年7月18日，ユタ州ハイドパーク出身のバージニア・リーと結婚した。現在，1男2女がある。夫人は1974年12月14日死去した。



デビッド・B・ヘイト

1976年1月9日，金曜日，大管長会は1970年4月6日以来十二使徒評議員会補助の任にあったヘイト長老が十二使徒評議員会会員に選任されたことを発表した。

これは，1975年12月2日，ヒュー・B・ブラウン長老の死去によって空席となった十二使徒評議員会の席を満たすものである。

カリフォルニア州パロアルトの前市長であるヘイト長老は，パロアルト商工会議所会長，ダウンタウン商業連盟会長，また半島赤十字血液銀行，スタンフォード地区ボーイスカウト評議会およびサンフランシスコ湾地域市長評議会のディレクターでもあった。また教会で働くよう召された当時は，ユタ州プロボのブリガム・ヤング大学の副学長を務めていた。

実業方面では，ソルトレーク・シティーのZCMIデパートで重要な地位にあり，シカゴのモントゴメリーワード社（デパート）では中西部地域で165の小売店を抱える地区支配人であった。またかってはカリフォルニア州パロアルトの小売店組織の会長でもあった。

ヘイト長老は1970年4月6日に十二使徒補助の責任に任命された時，教会のサクラメント，フレスノ地区の十二使徒会地区代表であった。1963年から1966年にかけて，スコットランド伝道部の部長であった。また神権伝道委員会の一員でもあった。パロアルトステーキ部では12年間ステーキ部長を務め，その以前は副監督，パロアルトステーキ部の高等評議員であった。

ヘイト長老は，1906年9月2日，アイダホ州オークリーで，ヘクター・Cとクララ・タトル・ヘイトの息子として生まれた。ソルトレーク・シティーのルビー・オルセンとソルトレーク神殿で結婚し，子供は2男1女の3人である。ヘイト長老はアイダホ州オークリー高等学校，アイダホ州立師範学校，ユタ州立大学で学んだ。



エルドレッド・G・スミス

エルドレッド・G・スミス長老は，末日聖徒イエス・キリスト教会の第7代大祝福師である。5代さかのぼった彼の先祖ジョセフ・スミス（初代）は，教会の初代大祝福師であり，予言者である教会の設立者ジョセフ・スミス（二代目）はその子供にあたる。

スミス長老は1907年1月9日，ユタ州リーハイでハイラム・Gとマーサ・ジー・スミスの息子として生まれた。父親が管理祝福師（これは教会における唯一の世襲による職である）になった時，一家はソルトレーク・シティーへ移った。青年エルドレッドはここで公立学校，旧末日聖徒高等学校，ユタ大学の教育を受けた。

スミス長老の教会における最初の召しは，1926年から1929年にかけてのスイス・ドイツ伝道部の宣教師の召しであった。その後，1929年から1932年にかけてリバティーステーキ部で伝道関係の責任を受け，また1936年11月から1年半の間エンサインステーキ部でMIAのステーキ部管理会員を務めた。また，1938年5月25日にその地位から第20ワード部第二副監督に召され，1940年3月にはステーキ部が分割され，ステーキ部高等評議員に召された。そして1941年2月16日に新しく組織された第20北部ワード部の監督に支持されるまでその職にあった。

1944年1月，彼はマンハッタン原子力エネルギー計画の技術者としてテネシー州オークリッジへ行き，1946年までその地方の教会の支部長を務めた。

スミス長老は，ソルトレーク・シティーに戻った後，1947年4月6日，大祝福師に支持され，以来教会幹部の一人として教会の数多くのステーキ部を訪問している。また彼は，今までに1万4千名以上の人々に祝福師の祝福を授けてきた。

スミス長老は1932年8月17日にソルトレーク神殿でジャンヌ・ネスと結婚し，子供は2男3女で，14人の孫がいる。

目　次

第140回
年次総大会
1970
4. 4-6

時の動き

1969
1.20　米，ニクソン大統領就任。
7.20　米，アポロ11号，月面に着陸。

1970
1.15　ビアフラ戦争終結
1.18　デビッド・O・マッケイ大管長死去
1.23　ジョセフ・フィールディング・スミス。第10代大管長に召される。
2.11　日本初の人工衛星打ち上げ。
3.13　日本万国博覧会のモルモン・パビリオンが献堂される。
3.15　日本万国博覧会開幕。
　　アジア初のステーキ部，日本東京ステーキ部が設立される。日本の地の伝道事業が，日本東伝道部，日本伝道部，日本中央伝道部，日本西部伝道部に分割されると発表される。
3.31　日航機よど号事件。
4. 4　第140回年次総大会。
　-6　新大管長会が支持される。前十二使徒補助ボイド・K・パッカーが十二使徒に，ジョセフ・アンダーソン，デビッド・B・ヘイト，ウイリアム・H・ベネットが十二使徒補助に支持される。

大管長会


第一副管長
ハロルド・B・リー


大管長
ジョセフ・フィールディング・スミス

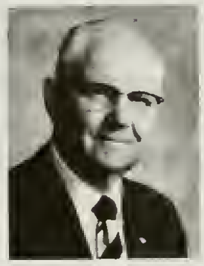

第二副管長
N・エルドン・タナー

十二使徒評議員会


スペンサー・W・キンボール


エズラ・タフト・ベンソン


マーク・E・ピーターセン


デルバート・L・ステイプレー


マリオン・G・ロムニー


リグランド・リチャーズ


リチャード・L・エバンズ


ヒュー・B・ブラウン


ハワード・W・ハンター


ゴードン・B・ヒンクレー


トーマス・S・モンソン


ボイド・K・パッカー

大祝福師


エルドレッド・G・スミス

責任と指導の手綱

大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス



愛する兄弟姉妹，私は今日，へりくだって皆様の前に立ち，主が私に，私の家族に，またあなたがたと主のすべての民に注ぎたもう祝福に感謝する。　私たちは主のみ業に従事している。

主は地の歴史上いかなるときにも，そのみ業をなす人々を立てられる。

私たちは一教会として，またひとつの民として，マッケイ大管長の霊感あふれる指導，偉大な洞察力，力強い腕により大いに祝福を受けてきた。彼は地上における輝かしい働きを終わり，他の方法で仕えるべく天の家に召された。そして主は地上の王国における責任と指導の手綱を残る私たちの中に委ねられた。

私たちは，「主が命じたもうことには，人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり，それでなくては，主は何の命令も人に下したまわないこと」（Iニーファイ3：7）を知っているので，このみ業は主の導きと指示の下に繁栄し続けるであろうと，心から確信している。

私は，自分の力でこの教会を指導できる人間はひとりもいないと申し上げたい。これは主イエス・キリストの教会であって，キリストがその頭なのである。教会はキリストの名をいただき，キリストの神権を持ち，キリストの福音の儀式を施し，キリストの教えを説き，キリストの業をなしている。

キリストが人々を選び，主の目的達成のために御自身の道具として召し，彼らの働きを導かれるのである。人はあくまでも主のみ手にある道具であって，主のしもべがなし遂げるあらゆる誉れと栄光は永遠に主に帰せられる。

もしもこれが人の業であるならくじかれることもあろうが，これは主のみ業であって，失敗に帰すことはない。私たちが戒めを守り，イエスの証を雄々しく述べ，託されたすべての事に忠実であるならば，主はあらゆる目的の成就のために，私たちと教会を義の道にあって導かれると確信している。

私たちは主イエス・キリストと，キリストを通じて天父に信仰の中心を置いている。私たちはキリストを信じ，キリストを神の御子として受け入れ，水のバプテスマを受けてそのみ名を受け，養子縁組によってキリストの息子，娘となっている。

私は主のみ業を喜び，それが真実，神聖だという確かな知識を心に持つことを誇りとしている。

イエス・キリストが生ける神の御子であること，キリストが予言者ジョセフ・スミスを召してこの神権時代の頭となし，地上に教会すなわち神の王国を再び組織されたこと，私たちが従事しているこの業が真実であることを，私は心の底から証する。

父であるジョセフ・F・スミスが教会の第6代大管長に召されたとき，彼は献身的な副管長たちに感謝を述べ，主のみ前に兄弟皆ひとつとならんために，教会の万事について彼らとはかることを宣言した。

今私は，副管長に全幅の信頼を置いていると申し上げたい。彼らは天の霊感に導かれている神の人である。彼らは聖霊の力と賜を享受しており，教会のためになること，天父の子供たちの祝福となること，地上に主のみ業を完成することだけを願いとしている。

ハロルド・B・リー副管長は真理と義の柱，偉大な霊の力と洞察力と知恵を持ったまことの聖見者である。教会と教会に必要な事柄を彼以上に知って理解している人はいない。

N・エルドン・タナー副管長は，正しい指導や助言や指示のできる管理能力と霊的な力を授かった力量ある人で，完全無欠，真理への献身者

である。

また，リー副管長とタナー副管長について言うことは十二使徒定員会やその他の教会幹部についても同様で，彼らはみな神の人である。私はこれらの力ある兄弟を主がお立てになり，彼らを召して教会の指導者の地位に備えられたことを感謝している。

主のみ業ほど大切な業は地上に存在しない。天父の子供たちにこれほど大きな影響を及ぼす奉仕と責任を持った職はほかに存在しない。私たちが主の王国におけるまことの兄弟姉妹として共に働きながら，前途に横たわる偉大な業の達成目指して努めることを祈るものである。

私たちは，様々の信仰を持つ人々との間に愛と調和の精神が高まりつつある現代に生きている。私たちはすべての宗教の善意の人々と手を携えて，あらゆる天父の子供たちの霊的，物的福利のために愛と関心を示すのである。

私たちは同胞の進歩発展のためには，何事においてもどこにあっても誠意ある善良な人々と喜んで協力する。なぜならば，すべての人間は神の子供であり，人類家族の兄弟姉妹であることを私たちは知っているからである。永遠の父なる神がみ手になるすべての業に祝福を注がれんことを。

子供を教える両親に洞察の力と霊感を祝福したまえ。

勧告を求め，受け入れ，戒めを守るように，教会の子供と若人を祝福したまえ。

正しく，忠実に，効果的に，主に仕えることができるよう，天父の教会のあらゆる役員，教師，教会員を祝福したまえ。

義にかなって主を仰ぎ，平安と幸福と人生の目的を見いだすことができるように，この世とあらゆる人とを祝福したまえ。これらすべてを，へりくだり感謝しつつ主イエス・キリストのみ名によって願う次第である。アーメン。

私たちの時代

ハロルド・B・リー

大管長会第一副管長・十二使徒評議員会会長



私は愛する同僚キンボール長老と同じ思いで，ボイド・K・パッカー，ジョセフ・アンダーソン，デビッド・B・ヘイト，ウイリアム・H・ベネットの愛する各兄弟を教会幹部に歓迎する。あなたがた兄弟姉妹が私たちと同じように彼らを知れば，彼らの力強い指導力を感じるに違いない。

私たちはこの場に臨んで，愛するマッケイ大管長のことを思い出さずにはいられない。また同様にマッケイ姉妹，お聞きであるならばあなたと故マッケイ大管長の素晴らしいご家族に，教会の歴史が新しい別の時代に入ろうとしている今，私たちの愛と祝福を捧げたい。

きょう，末日聖徒イエス・キリスト教会は，聖典に語られているこの時満ちたる神権時代に組織されて以来140年の歴史に，新しい1ページを迎えたのである。

今は亡き予言者，偉大なデビッド・O・マッケイ大管長は，教会の地上における頭としての自分の管理の職の報告をするべく，みもとに召されて行った。指導者たる予言者の死には必ず，それに引き続いて教会にも世の中にも大きな出来事が起きている。この予言者が造り主に対して，地上の人間の行ないについて果たして良い報告ができたかどうか，私には不安である。

教会の管理者が代わるとき，その交替は独特な方法により，キンボール長老も言われたように，政治的手段や革命的な方法を使って主のみ業に混乱や挫折を招くことのないようにすでに定められている計画に従って行なわれる。

デビッド・O・マッケイ大管長とそれ以前の代々の大管長は，私たちに知恵と知識の豊かな宝を残して行った。大管長が亡くなるたびに，感謝に満ちた民の心は名残りを惜しんでいっしょに天に舞い昇って行くかのようであった。彼らの生涯や業績，言葉，偉業は幸いにして教訓の書となり，教会歴史に記録され，のちの人々の記憶に跡をとどめた。神がその遺産を各地の信仰篤い人々に恵みたまわんことを。しかしながら彼らの最大の記録は，彼らが熱心に仕えてきたその民の心に刻まれるのである。

ここで，大管長の死に伴う教会の再組織について触れれば，多くの教会員と教会に興味を持つ人々にとって何らかの参考となるであろう。

「教会の大管長はどのようにして選ばれるのか」と質問する人に対しては，信仰箇条の言葉が簡潔，正確な答えであろう。「われらは，福音を宣べ，且つその儀式を執り行うためには，啓示と，権威ある者の按手により，神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。」

大管長になる人の召しは，実際には十二使徒定員会の一員に召され，聖任と任命を受けたときに始まる。そのような予言による召しつまり主の霊感によって大管長会の鍵を持つ者とされ，次に同じ権能によって按手聖任，任命される召しを通じて，各使徒は使徒職を持つ12人の神権定員会に加わるのである。

こうして大管長の手で聖任されたすべての使徒は聖任された他の使徒たちと共に神の王国の鍵を握り，教会のあらゆる職，もしも管理者から召されて教会員の集まりで支持の挙手を受けた場合には全教会を管理する職をも持つに足る神権の権能を受けるのである。

予言者ジョセフ・スミスは，「大管長がいなければ大管長会はない」と述べている。大管長が死ぬと即座に次位にある十二使徒定員会が管理体となり，大管長が正式に聖任と支持を受けるまで，十二使徒定員会会長が自動的に大管長代行となる。

この神権時代の初期には，事情があって，新しい組織ができるまで十二使徒評議員会が3年の間教会を管理したことがある。しかし教会が安定してからは，大管長の死後すぐに新しい大管長会が組織されるようになった。

大管長会と十二使徒定員会は通常全員が，先ほどのように「予言者，聖見者にして啓示を受ける者」として支持される。これは，選ばれて聖任された使徒のだれもが，啓示から引用すれば，「当団体（十二使徒定員会全体と解釈されている）によりて選ばれその職に任命して按手聖任され，教会員の信任と信仰と祈りによりて支持」された場合には，教会を管理することができる（教義と聖約107：22参照），またその場合，管理するのは先任使徒すなわち十二使徒定員会の会長であるという意味である。

先任の十二使徒以外の人が大管長になることはあるのかという質問をときどき聞く。そのことについて考えてみれば，主が十二使徒定員会会長に彼以外の人を選ぶと啓示されたときにのみ，先任使徒以外の人が大管長になれると考えられる。

主はこの神権時代初の予言者に，あらかじめ定められている地上の神の王国の組織を通して，教会の指導者の職をはじめとする秩序正しい計画を啓示された。それに関する話のよりどころとして，主は次のように語っておられる。

「メルケゼデク神権を有てる者の中三人の管理大祭司あり，当団体によりて選ばれ，その職に任命して按手聖任され，教会員の信任と信仰と祈りによりて支持せられ，当教会の大管長会なる定員会を構成す。十二人の巡回評議員は召されて十二使徒となる，すなわち全世界に於けるキリストの御名の特別の証人となるべき者なり。すなわち，かくの如く彼らは当教会に於ける他の職員とは，その天職に就ける義務を異にす。またこの十二人は，前記の三人の管理大祭司と権威と権能とを同じくせる定員会を構成す。」（教義と聖約107：22－24）

この事柄について，第4代大管長ウイルフォード・ウッドラフは，当時十二使徒であったヒーバー・J・グラント大管長にあてた1857年3月28日付の手紙の中で，彼の考えを語っているが，それを引用してみよう。

「……教会の大管長が死んだとき，教会の管理役員はだれなのだろうか。それは，（ほかならぬ神の啓示によって聖任され，組織された）十二使徒定員会である。ではその十二使徒が教会を管理するとして，教会の大管長はだれなのだろうか。それは十二使徒定員会の会長である。彼は十二使徒を管理しながら，大管長会が組織されるときにふたりの副管長を管理するのとまったく同じに，教会の大管長を務めるのである。」そしてこの原則は，教会が組織されて以来140年を経た今も実践されている。ウッドラフ大管長はさらにこう続けて語る。

「こと私に関する限り，……教会歴史にある通り，教会の設立以来使徒たちがたどってきた道，あるいは過去57年間全能の神の霊感によって使徒たちが歩んできた道からそれるような挙手をしたり，そのような行動をとる前に，まずこの教会の組織以来57年間同じ経路で霊感によって教会を導いてこられた同じ神から，啓示をいただくことが必要なのである。」

ジョセフ・フィールディング・スミスが召されて大管長になったことには特別な意義がある。彼の祖父にあたるハイラム・スミスに関して，主は予言者ジョセフ・スミスに次のような啓示を与えられた。

「また，われ誠に汝らに告ぐ，……わが僕ハイラム彼の父により祝福によりまた当然の権利により任命せられし祝福師たる神権者の職に就かん。……かくして，今後彼はわが民ことごとくの頭上に授くる祝福師の祝福につける鍵を保ち，何人にても彼の祝福する者は祝福せられ，彼の呪う者は呪われ，かくて何にても彼のこの世に於て結ぶところは天に於ても結ばれ，彼のこの世に於て解くところは天に於ても解かるるなり。」（教義と聖約124：91－93）

ハイラムには，この職に加えて，彼のあとに続く教会のどの祝福師にも与えられなかったもうひとつの祝福が与えられた。

「されば今後われ彼を任命して，わが僕ジョセフと同様にわが教会の予言者，聖見者，啓示を受くる者となす。こは彼がまたわが僕ジョセフと一致して働くためにして，かくてわが僕ジョセフの助言を受け，またジョセフは彼に諸々の鍵を示さん。この鍵によりて彼は願わばすなわち受けて，嘗てわが僕なりしオリヴァ・カウドリに与えられたると同じ祝福と栄と誉と神権と神権の賜とをその頭に受けん。こはわが僕ハイラムのわがこれより彼に示すところを証するためにして，かくしてその名は子孫代々永遠に覚えられて誉とならん。」（教義と聖約124：94－96）

彼の息子ジョセフ・F・スミスは，1901年から1918年まで第6代大管長を務めた。ジョセフ・F・スミス大管長は少年時代にミズーリやイリノイで苦しい経験をした。父ハイラム・スミスが叔父の予言者ジョセフ・スミスと共にカーセージで暴徒たちに殺されたとき，ジョセフ・F・スミスは9歳の少年ながら牛車を御してミズーリ川を渡り平原を越えて，1848年ソルトレーク盆地に着いた。

1852年に母を亡くして2年後，彼はわずか15歳でハワイ諸島の伝道に旅立った。

これがジョセフ・フィールディング・スミスを生み出したハイラム・スミスの家系である。私は天もきょうの日を喜んでいると確信する。この立派な息子や孫の在任中には，すでに逝った人々が，高齢にもかかわらず主から重大な責任を賜っている自分の子孫の近くにやってくることであろう。彼らがこの場に同席しているとしても，私には少しも不思議でない。

私は先ほどの予言を引用して，ハイラム・スミスの後裔にあたる人々が，自分たちに脈々と流れているこの神権時代の予言者たちの高貴な血統に忠実であるよう，心を尽くして努力するように申し上げてきた。

きょうの出来事を通じて，私は今までの人生を非常に厳粛な思いで振り返っている。神殿の一室で聖なる使徒職を持つ13人の兄弟たちと共に，新しい大管長会の選任に立ち会ったあの素晴らしい霊的な経験以来，ここ2カ月ほどの間に，私は今までの生涯を思い返し，将来の時代を考えてきた。

その間中，私は自分の限界を思い知らされ，自分の力を越えた力と，人の知恵を越えた知恵と，今私を待っている問題についての霊の眼を，かつてないほどに天父なる全能の神により頼んでいる自分を知ったのである。大管長会と十二使徒定員会によって選ばれ，今教会の神権者たちとこのタバクルに集まった教会員とここ以外の場所でこの聖会に参加している信仰篤い大勢の人々から支持を受けたこの職も，神の助けがあってこそ，私に果たし得るのである。

私は今に先立つこの神権時代の偉大な指導者たちを思い起こして，自分の無力さに身が震える思いである。そのことを考えて，長い間瞑想し，祈った結果，私は自分のような者が過去の偉人に取って変わることはできないという現実をはっきり知った。

このような職に召された私たちは，時の経過がもたらした空席を埋めるに過ぎないのである。過去の偉大な指導者たちは永遠の世にあってなおもその地位にあり，彼らが仕えた多くの人々の胸に今も生きている。

古代の予言者ニーファイが父リーハイから，旧約の予言者が記した聖典を含む今は私たちに周知のあの真鍮版を取り返すという難しい仕事を与えられたときの心境が，私には前にもましてよくわかる。

ニーファイはその経験を次のように記している。「……私ニーファイはただ一人都の中へ忍びこんでレーバンの家の方へ進んで行った。私は何をせねばならぬのか，前以ってそれを知らずにただひとすじに『みたま』に導かれて行った。」（Ⅰニーファイ4：5－6）

また，私はこれまでになく，痛切なこの嘆願の祈りに共感するのである。

「取り巻く闇の中を　みちびき
闇を遠く来しわれ　たすけたまえ
足もとを守りたまえ
遙かまでとは願わず」

（讃美歌119番）

このことを，私は今非常に痛感している。

私は，古代のニーファイのように，「前以ってそれらを知らずにただひとすじに『みたま』に導かれて」行かなければならないことが多いと思う。たとえ闇の深い夜であろうと，「遙かまでとは願わず，今のただ一歩を。」

私は忠実な聖徒である皆さまがたに身も心も霊も尽くして務めたいと心から思っている。しかも，あのベンジャミン王が教えたように，たとえ自分の全時間を費してあなたがたのために務めたとしても，「これを自慢したい……のではない。私が務めたのはただ神のために務めただけである」（モーサヤ2：16）ということをよくよく承知している。

忠実な兄弟姉妹，至高なる神の聖徒であるあなたがたに仕えるときに，私も「ただ神のために務めただけである」ことがわかるように，一心に祈りたい。

これまで同様みたまが心に証するまま，私の証を述べたいと思う。世の救い主，造り主である主の贖罪によって人類を贖い得るまことの救いの教えが，この末の時代にまことのイエス・キリスト教会に託されている。主イエス・キリストは生きておられ，きょう予言者，聖見者，啓示を受ける者，私たちの大管長として支持された人を通じて，聖なるみ座からこの地上の神の王国を管理される。

私はこのことをへりくだって証し，教会内に不安を生じるような状態は一掃するように，皆さまがたの信仰と誠実な支持とをお願いする。私たちにこれまで同様皆さまがたの信仰と祈りによる支持を寄せられんことを。また私たちは改めて，皆さまがたを至高なる神に対して忠実な聖徒たちとして支持することを誓う。これらのことをきょう謙遜に，そして謹んで証を述べる次第である。主イエス・キリストのみ名によって，アーメン。



従順の恵み

大管長会第二副管長

N・エルドン・タナー

この麗しい安息日の朝，ここに集った皆様と放送を聞いておられる方方に，大管長会と教会幹部を代表して御挨拶できることは特権であり喜びである。

先週，私たちは主なる救い主の復活を祝った。復活は主を受け入れて戒めを守ろうとする人々に希望と約束をもたらすものである。主は言われた。

「わたしがきたのは，羊に命を得させ，豊かに得させるためである。」（ヨハネ10：10）

「わたしはよみがえりであり，命である。わたしを信じる者は，たとい死んでも生きる。また，生きていて，わたしを信じる者はいつまでも死なない。」（ヨハネ11：25—26）

主はさらに，確かな約束の言葉を私たちに与えておられる。

「これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」（モーセ1：39）

主は私たちのために命を捧げ，また私たちが主の戒めを守る者に約束された祝福にあずかることができるようにひとつの計画を与えられた。この末日に主は次のように説明しておられる。

「そもそも創世の以前より天に於て定められたる一つの変らざる律法ありて，あらゆる祝福はこれに基くなり。すなわち，われら何にても神より祝福を受くる時は，この祝福の基く律法に従うによりて然るなり。」（教義と聖約130：20－22）

私たちはだれでも現在の社会情勢に関心を持ち，自分の生活や地域社会や世界の国々に影響を及ぼす様々の問題に対して答えを捜している。世の大勢が無法と反抗に傾いているのは事実だが，それを日常の話題やマスコミに取り上げ過ぎるのにはへきえきしている。私たちはもっと積極的な態度で福音を実践し，教えることに努力を傾注し，それによって原因を除き，状態を改善すべきである。世に反抗している人も含めて自分に正直な人は皆，自分が究極的に求めているものは幸福であり，より良い人生であることを認めなければならない。

これを心に留めて，私は「従順の恵み」というテーマで話を進めて行きたいと思う。話の間主のみたまがあり，私たちを導いてくれるように祈りたい。さて，サムエルがサウルに言った言葉を思い出してみよう。

「従うことは犠牲にまさり，聞くことは雄羊の脂肪にまさる。」（サムエル上15：22）そして次の言葉も思い出していただきたい。「キリストの贖罪により，すべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得る。」（信仰箇条第3条）

つい先日のこと，私はひとりの青年と話した。彼は，「ああしろ，こうしろと言われるのにあきあきしているのです。自分のしたいことは自分で決める自由が欲しいです」と言っていた。

私はそれにこう答えた。「人の権利や自由を侵害したり強制したりしない限り，あなたは何をしようと自由ですよ。でも自分の行動に責任を持って，その結果をいさぎよく引き受ける心構えが必要です。」

私は主が人に授けられた一番の賜は次の3つになると説明した。第1に不死不滅と永遠の生命を受ける権利，第二にそれを受けるための計画，第三は自分のしたいことを選ぶ自由意志。主は，地上にあって最高の喜びと幸せを与え，永遠の生命を受ける用意をさせてくれる計画を私たちに与えられた。永遠の生命を受けるために私たちがしなければならないことは，律法に従い，主の戒めを守ることである。

私はその青年に，地位や学識や気

持ちにかかわりなくどんな人にもあてはまる物理や自然の不変の法則について考えてみようと提案した。わざとにしても偶然にしても，もし人が熱いストーブや高圧線に触れたとしたら，皮膚は焼けただれてしまう。また，たとえ人を救うにしても，猛スピードで走っている車の前に飛び出したら，けがをするか死ぬかである。だれであろうと，どんなつもりであろうと，人がこのような法則を免れ得ないことを示す例は数限りなくある。

自然の法則を理解し，尊重すればそれを良いことに使うことができる。無視すればしっぺがえしを受け，従えば祝福となるのである。太陽は毎朝決まった時刻に昇り，実体は完全に知られていないながらも電気は同じ条件下で同じ反応を示し，ある年のある日のある決まった時刻に日食が起きる。自然の法則は不変だからである。自然の法則が頼りになることを知っているのは何と幸せなことか。いろいろな分野の技術者，医者，科学者が自然の法則を頼りにできずに無視しているところを想像してみていただきたい。人は自分の仕事に影響ある自然の法則をないがしろにして成功はないし，事実その結果は悲惨である。

神の律法，自然の法則，国の律法はみな人のため，人の慰め，喜び，安全，福祉のためにある。この律法や法則を学んでそれに従い，戒めを守って恩恵を受けるかどうかを決めるのは個人の問題である。きょうの私の話の目的は，律法や法則が私たちのためにあり，成功し，幸福になるには自分の行動に関係する律法や規則に従わなければならないことをお話することである。これらの律法，法則は私たちの行動次第で喜びと幸福にも，また悲しみと災いにもなるのである。

月に着陸したあのアポロ11号が飛行に成功するには，微細にわたってあらゆる自然の法則に従う必要があった。準備にあたった人々は物理や化学の法則，重力や飛行に関するすべての法則を理解し，活用しなければならなかった。彼らはそれらの法則をかせや障害と考えるのではなしに，むしろ計画遂行のための手段と考えた。そして，成功の鍵を握る法則をすべて学び，それに従うか，応用して自分たちの使命を果たそうとした。

これは人生についても真理である。音楽家やスポーツマンになることも，学位を取ったり価値あることを達成するのも，まず目標を定めて，したいことや実現させたいことを決め，それから成功につながる法則を見極め，次に達成を目指して自分を律することである。このようにすれば，成功に向かって進むことができる。しかし，いつも律法に逆らい，従うことを拒否して，要求されていることに不平を言う人は，不満がつのり，反抗的になって，結局は目的が達成できない。

律法や法則を破らないまでも，尊重して用いないと身の破滅を招くとも言われている。律法は絶えず適用されていて，私たちの行動が結果を決める。私たちは自分を律する用意がなく，自分の一番したいことをしてしまうことが多い。

国の法律は政府が国民の安寧と福利のために決めたものである。飲酒運転の規制や交通規則や土地使用制限法や建築法規などを考えてみていただきたい。税金によって道路や学校や公共設備ができており，それもみな国民の便宜と生活向上のためである。

すべての人が律法や法則は人を益するものと考えて尊重し，従うならば，それは私たちの健康や福祉や幸福に大きく貢献する。律法は大切である。法律や規則のない町や社会や国を想像していただきたい。私たちが法律を侮って従わないと，それにつれて私たちの自由は失われ，他人の自由をも奪って世の中は無秩序と化すのである。もし現行の法律が悪いものであるなら，人々は正しい合法的な手段により政府を動かして法律を改善，変更させるべきで，法は法として従わなければならない。

おおかたの私たちは，人生において自分がどんな人生，どんな環境を望むか自分で決定する。今も世界には，人肉を食い，動物的な本能を唯一の規則としてジャングルの規律に支配されている人種がある。私たちがそのような人生を望むのであればそれも可能である。しかし，私たちが存在する目的のひとつは，そのような動物的本能を超越して，人と人との接触を求められる社会にあって高度な水準の人間に到達することである。

そのために，父であり創造主である神と御子イエス・キリストは私たちの幸福と成功を望んで，お互いの人間関係と社会そのものを向上させる律法を与えられた。もしもすべての人が律法に従ったならば，現在世界にはびこっているような不穏な状態はなくなり，青年たちも主張と懸け離れた現在の社会に対して抗議する必要も理由もなくなるわけである。

ここで，モーセの時代と同様現代にもあてはまり，キリスト御自身もそのことを教えられた十戒について少し考えてみたい。

「あなたは盗んではならない。殺したり，隣人のものをむさぼってはならない。また，姦淫したり，隣人について偽証してはならない」という戒めにだれもが従ったならば，家も財産も気にせずに外出し，いつでもどこへでも出歩くことができ，どろ

ぼうや人殺しの心配をせずに安心して家にいられるのである。

欲ばりや陰口や姦淫などのない世の中に住む幸せを想像していただきたい。そこは全員が律法に従って生活する社会である。互いに助けあい支えあう平和で幸福な生活に加えて，法律の施行や犯罪防止に使うはずの費用を全部，貧困の救済や衛生施設，教育施設その他有益な目的に振り向けることができるのである。戒めを守ることによって私たちがこの世で受ける恵みには限りがない。

もうひとつ，私たちの生活に非常に大切な戒めは，知恵の言葉と呼ばれる主の健康の律法で，これはあらゆる家庭で言葉と模範によって教えられるべきである。知恵の言葉は，タバコやアルコールその他，体に有害なものを取らないようにと警告している。これには幻覚剤の使用も含まれると思う。

この律法は百年も前に主から与えられたのだが，科学者の実験や体験によって，これらのものが体に有害であるばかりか社会をも脅かすものであると証明されるようになるまで，一般には無視されていた。今でも大勢の人がこの律法に頓着せず，危機を招く状態にある。これらのものを取った結果は家庭の崩壊や心身の病気や財産喪失，悲惨な状態，のたれ死になど，不幸は枚挙にいとまがない。それはみな，立法，行政関係者を初めとして社会全体が深刻に憂えている問題である。先日の夜，新聞を読んでいてこんな記事が目にとまった。

自動車による死亡事故が1969年の２倍で，自動車事故の26パーセントが酒酔い運転だったという。

また，さる有名なテレビ俳優が肺ガンになり，45歳で死んだ。「肥満ノイローゼ」にかかるよりもタバコを吸っていた方がいいと公言していた彼が，ガンだと知って初めてタバコをやめたのだった。

あるホテル火事ではタバコの不始末が原因で14人の死者を出し，また別の建物はタバコのせいで１万ドル相当を灰にしたという。

マリファナの害は今や深刻で，幻覚剤は若者たちをむしばんでいる。

現代社会に多くの悲劇を起こしているこれらの有害物を制限するか，さらに，可能であれば根絶することは，私たち自身と若者たちと，国家の将来に懸かっている。主がその戒めを守るすべての人に与えられた素晴らしい約束に耳を傾けてみよう。

「およそこれらの言葉を憶えて守り且つ行い，この誡命に従って歩むすべての聖徒らは，そのへそに健康を受けその骨に髄を受けん。また智恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。而して走れども疲れず，歩けども気を失うことなからん。主なるわれ彼らに一つの約束を与う。すなわち，さつりくの天使はイスラエルの小児たちが如く，彼らを過ぎ越して居ることなかるべし。」（教義と聖約89：18—21）

これ以上の祝福が考えられるだろうか。

もうひとつ非常に大切な戒めを引用したい。

「安息日を覚えて，これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神，主の安息であるから，なんのわざをもしてはならない。」（出エジプト20：８－10）

さらに主は言われた。

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。」（教義と聖約59：９）

反対意見は多いかもしれないが，これは神の律法であり，宗教的で，またそれ故に道徳的な律法である。従えばほかからは得られない様々な祝福を受け，どの律法もそうだが，従わなければ罪を受ける。

安息日を聖く守ることは，礼拝と勉強によって福音の教えを理解し，私たちの永遠の将来にとって大切な神を知る機会になる。

主はこう言われた。

「永遠の命とは，唯一の，まことの神でいますあなたと，また，あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。」（ヨハネ17：３）

たしかに７日に一度は造り主に思いをはせ，霊的な自分を養い，神への従順を学び，その上子供たちに敬虔と従順を教えることができるし，そうする必要があると思う。人生で学ぶ最大の教訓のひとつは，「人はパンだけで生きるものではなく，神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイ４：４）ということである。

ある人が賢明にも述べている。「神の律法を，意のままに適用できる便利な力とみなす者に災いあれ。己の富と装備と地位を信じておごれる人間，階級，国家に災いあれ。」

神の律法を無視してはどんな国も国家の連帯も長くは続かず，文明もやがては滅びる。主はこう命じられた。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば，これらのものは，すべて添えて与えられるであろう。」（マタイ６：33）これらのものとは，私たちのためになるすべてのものである。

物質的な欲望や楽しみを追い求める限り，安息日を聖く守ることも，それによって祝福を受けることもできない。実にこう言われている通りである。「物質的なものには沈んだ霊を奮起させる力はない。この世の富でうちひしがれた心をいやすことは

できず，全世界の知恵を集めたところで気ままな心を善に向かわせることはできない。」

祈りの家に行って安息日を聖くすることは非常に大切だが，霊的なことを教える場は教会だけに任されているのではない。両親には，家庭で神の律法を教えるという第一の大切な責任がある。主はこう言われた。

「また，シオンまたは組織せられたるシオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば，その子供八才の時，悔改め，生ける神の子キリストの信仰，パブテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば，罪その両親の頭に留るべし。

また両親はその子供たちに祈ることと，主の前に正しく歩むことを教えざるべからず。」（教義と聖約68：25,28）

これは，主を愛し，敬い，従えという戒めを守るということである。

子供に戒めを守って神の前に正しく歩むことを教えるには，両親が生きた模範になることである。私たちはどんな律法であってもそれを破っていれば必ず罰を受け，さらには子供たちに対して自分を尊敬して従うようにとも，律法を大切にして従うようにとも言うことができない。また，私たちが主の教えや戒めに疑問を抱いていれば，子供たちはどうして戒めを守らなければならないか，大きな疑問を持つに違いない。私たちは偽善者ではいられない。あることを教えたり言ったりしながらすることが違っていて，子供に次のような戒めを守って欲しいと思うのは虫がよすぎる。「あなたの父と母を敬え。これは，あなたの神，主が賜わる地で，あなたが長く生きるためである。」（出エジプト20：12）

従順と，律法を尊重し，守ることや神を信じて戒めに従うことを教わった子供は，成長するに従って自分の両親を敬うようになり，両親の誇りとなって，自分の問題を立派に解決し，人生に一層の成功と幸せを見いだし，現代の悩みの種となっている数々の問題の解決に大きく貢献することであろう。子供たちがやがて将来，指導者となりその責任を通じて世の中に平安と義をもたらすように，今，従順によってその用意をさせることが，両親の責任である。

主のみこころは次の言葉に要約されていると思う。

「『心をつくし，精神をつくし，思いをつくして，主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な，第一のいましめである。第二もこれと同様である，『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに，律法全体と予言者とが，かかっている。」（マタイ22：37—40）

私たちは主を愛するならば主の戒めを守るはずであり，隣人を愛するならば地上は理想郷となるはずである。

主はさらにこう約束された。

「正しき業を行う者はよき報いを得，すなわちこの世に在りては平和を得，次の世に在りては永遠の生命を得ん。」（教義と聖約59：23）

神を父として，また御子イエス・キリストを世の救い主として受け入れ，その戒めを守るならば，私たちは地上で大きな喜びを得，次の世では永遠の生命を受けることを，皆様に証したい。それが私たちすべての祝福となるよう，イエス・キリストのみ名により，へりくだって祈る次第である。アーメン。



神の存在

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター

美しい世界に囲まれた人生とは，何と素晴らしいものであろうか。美は山に，森に，湖にある。寄せてはかえす海の波にも，わた雲の広がる空にも，太陽の輝く中にも，雨の中にも，朝，昼，晩にも，美しさがある。四季の移ろいの中で，生きとし生けるすべてのものが新たな生命の息吹きを告げる春に，光り輝く夏に，私たちは美を見る。白の毛布に覆われた静かな冬の前には，秋が満艦飾の彩りで先立って行く。探しさえすれば，どこにでも美しさはある。

宇宙には正確な秩序があることを私たちは知っている。昼の後には夜が来る。潮は規則正しく満ちては引き，月は周期を守って満ち欠けし，自然に呼応して四季が巡る。空の星は順を待って確実に現われ，惑星と衛星は太陽と関係しつつ正確に動く。生物学者は動植物の生命に驚異と美を見いだし，化学者は地上の元素に神秘を見る。だが科学の知識の有無を問わず，あらゆる人は，全自然が微細にわたって精密さを維持しているこの大宇宙に気付いている。

天地の現象を観察すると，それがある大きな原因に従った結果であるという結論に到達せざるを得ない。設計者なしに設計図はなく，建築家なしに建物はできない。あらゆる結果には原因があるからである。緻密な秩序をもった宇宙には，それを治める手があるに違いない。私たちは至高者の存在を認めずにはいられないのではなかろうか。無数の民がその確信を抱いている。

人の心が神を造り出したのだろうか，それとも神が人を造ったのだろうか。人は数々の大切な疑問に悩むが，すべてに先立つ第一の疑問は，神は存在するか否かである。この疑問の解決に，科学研究の方法は通用しない。物質の領域ではなく，霊の領域の問題だからである。

神の存在を知るには，神がそのために示された方法に従わなければならない。その道は登り坂で，信仰と努力を要する，決してなまやさしくない道である。そのために，多くの人は神の存在を確かめる仕事に取り組もうとしない。そうしてある者は易(やす)きにつき，神の存在を否定したり，懐疑主義者のあいまいな道を安直に歩んでいる。無神論者，不信心者，宗教の自由思想家，懐疑論者，不可知論者がそれである。

大概の研究では，その主題の歴史やすでに知られている事実を調べるものである。そこで私たちは歴史から始めて，最もよく知られている古代の記録に目を向ければ，それには，「はじめに神は天と地とを創造された」（創世１：１）と記されている。この言葉は，地球は偶然にできたのでもなければ，たまたま何かの事件があってできたのでもなく，至高者がある大切な目的をもってそのために造られたという創造に関するヘブライ人の信仰の基になっている。

私たちは創造についてのこの説明を，盲目的に受け入れなければならないのだろうか。聖書の最初の五書の著者は，創造主のみ業を目撃したわけではなく，ただ後の時代にヘブル書の著者が記していると同じ確固たる信仰を持っていただけである。「さて，信仰とは，望んでいる事がらを確信し，まだ見ていない事実を確認することである。」（ヘブル11：1）信仰とは，知識となるには証拠がまだ充分でない場合にそれが真実だと信じること，とも言える。私たちは次の教えに従いながら，探究を続けなければならない。「求めよ，そうすれば，与えられるであろう。捜せ，そうすれば，見いだすであろう。門をたたけ，そうすれば，あけてもらえるであろう。すべて求める者は得，捜す者は見出し，門をたたく者

はあけてもらえるからである。」（マタイ７：７－８）

旧約聖書には，神が天地を創造された後，私たちの最初の両親であるアダムとイブにエデンの園の中で話をされたと書かれている。神はふたりに戒めを与え，言葉を交わされた。アダムが，ノアの父までの８世代の子孫に，神から直接受けた教えを伝えたことは間違いない。ノアは神と直接に言葉を交わし，10世代後までの子孫に教えを与えた。神はアブラハムに姿を見せ，イサクやヤコブにも姿を現わされた。モーセは彼らの子孫の指導者となったが，神とモーセが直接にまみえ，その記録が後の時代に伝えられてきたことは周知の通りである。

新約聖書にも，神が姿を現わされたことが記されている。ヨハネからイエスがバプテスマを受けられたとき，示現があり，「また天から声があって言った，『これはわたしの愛する子，わたしの心にかなう者である』。」（マタイ３：17）また変貌の山では，「……輝く雲が彼らをおおい，そして雲の中から声がした，『これはわたしの愛する子，わたしの心にかなう者である。これに聞け』。弟子たちはこれを聞いて非常に恐れ，顔を地に伏せた。」（マタイ17：５－６）

これは，神が子らにたびたび姿を現わされたことについて，新旧約聖書に記録されているほんの一例に過ぎない。西半球の聖典にも，神との交流のあったことが記されている。時のはじめから代々，神が親しく人と交わられたことについては，歴史も証明している。

至高者の実在について，歴史だけを拠りどころとする必要はない。論理で立証もできる。それは古代の商業界で使われた論法のひとつで，三段論法である。すなわち，すべて造られた物には造り手がいる。地球は創造された。ゆえに地球には創造者がいる。ヘブル書をもう一度引用してみよう。著者は神が地球の創造者であることを，このような言葉で述べている。「家はすべて，だれかによって造られるものであるが，すべてのものを造られたかたは，神である。」（ヘブル３：４）運行する宇宙とその美と驚異のすべてが，大創造主なる神の存在を教えようとしている。

ある学者がこう語った。「……科学は人間のためにあらゆることをしてきたが，人間にしかなし得ないことを代わってできはしない。科学は教えることができるが，学ぶのは人間である。つまり，学ぶことはだれにも代わってもらえないその人個人の課題である。だれも他人に代わって学ぶことはできない。科学一般は神の存在を教えているではないか。しかし神を見いだすことは，ひとりひとりに課せられた問題である。神は実在しないという無神論者の説は何の役にも立たない。無神論者は天に神はないと心底信じているのだろうが，それを証明できるものは何もない。私たちには，彼が知っていないことがわかっている。自分は知っているとはっきり証する人々があるからである。」（故十二使徒評議員ジョセフ・F・メリル *The Truth-Seeker and Mormonism*「真理の探究者とモルモニズム」pp. 104－105）

科学的な手段や近代電子工学では神を見いだすことができないと言われている。しかし，真理を求める者は，因果の因を求めて行けば至高者の存在を自覚せざるを得ない。底に流れる強力な力を見過ごしにできないのである。

人間は生来礼拝心を持っている。昔神はイスラエルの民に対してこう言われた。「わたしはあなたの神，主であって，あなたをエジプトの地，奴隷の家から導き出した者である。あなたはわたしのほかに，なにものをも神としてはならない。」（出エジプト20：２－３）神聖な歴史全体を貫く教えの中に，人はひとりの神しか礼拝できないという確かな真理が存在する。ひとりの神を礼拝することは，人生にひとつの絶対の忠誠を持つことである。私たちがひとりの神を知ったならば，神のもとにひとつの世界，ひとつの人類があって，人はみな兄弟であることを知るであろう。

何が人々を礼拝に駆り立てるのであろうか。人の心には，神との交わりを求める生まれながらの何かがあるようである。ヨブ記にはこう書かれている。「しかし人のうちには霊があり，全能者の霊感が人に悟りを与える。」（欽定訳ヨブ32：８）この言葉は暗に人の創造をさしていると思われる。人はこの霊感によって悟りと理解を得，その結果神よりの真理を識別できるようになる。人はこの霊感によって神を知る。

神を証明する歴史や神の存在を知る人の悟性に加えて神についての最も確かな知識は神よりの啓示によってもたらされる。時のはじめから旧約，新約の時代を通じて，神は人に御自身を示された。まずアダムに，次いでその子孫からノアに至る族長たちに，神は語り，言葉を交わされた。ノア以降，アブラハム，イサク，ヤコブ，モーセ，そしてキリストが導きと恵みの業を施される時代に至るまでの予言者たちに，神は姿を示された。イエスのバプテスマのときと，変貌の山においても，神は話をされた。

バベルの塔の時代に旧世界を去って西半球に渡った一団の指導者に神は御自身を示され，キリスト降誕以前600年の昔にはリーハイに語り，その家族をアメリカ大陸へ導かれた。

神はこの神権時代にも，少年ジョセフ・スミスに姿を示され，ジョセフは永遠の父なる神と御子イエス・キリストを拝する恵みを得た。

このように歴史を通じて，人間は神会を構成する永遠の父なる神と御子イエス・キリストと聖霊について明らかにされてきた。キリスト教界はこの御三方を三位一体としているが，御三方はイエスのバプテスマのときに御父のみ声があって聖霊が下られたことからわかるように，それぞれ別個の御方である。

代価を払わなければ価値ある物を入手できないのが通則である。学者は研究を進め，成功をめざして努力してこそ，学識を得ることができる。そのような努力をしないで，学識などは存在しないなどと言えるであろうか。音楽家も数学者も科学者も運動選手も，その他さまざまな分野で優れた技術を身につけている人々は，そこに至るまで長年の間，研究と練習と熱心な努力を重ねてきたのである。その努力をしようとしない人が，音楽，数学，科学，運動競技などはないと言えるだろうか。神を求めたくないという理由だけで，神の存在を否定するのは愚かなことである。

歴史は神の存在を語っている。科学は至高者の存在を肯定している。人の理性も神の存在をささやいている。神自ら人に姿を示されたことが，存在の確たる証拠である。神の実在をはっきりと知るには，救い主がこの地上でみ業を行なう間に語られた戒めと教えに従わなければならない。そこでイエスは彼らに答えて言われた，『わたしの教えはわたし自身の教えではなく，わたしをつかわされたかたの教えである。神のみこころを行おうと思う者であれば，だれでも，わたしの語っているこの教えが神からのものか，それとも，わたし自身から出たものか，わかるであろう。……」（ヨハネ7：16—17）つまり，真心から求め，身を挺して神のみこころを行なう者が，神は存在するという知識を得るということである。

神を見いだし，神の道を理解すれば，宇宙の万物は偶然の所産ではなく，すべてが神の定められた計画に基づいたものであることを知るはずである。これを知った人の人生はどれほど豊かな意味を持つことか。世の学識を超えた理解を自分のものとすることができる。美しい世界はその美しさを増し，宇宙の秩序はその意味を深めて，神の日々が去来し，四季があとを追って移り行くのを見るとき，神のすべての被造物に理解の目は広がる。万人が神を見いだしてその道に従ったならば，兄弟に対して人々の心は愛に変わり，国々は平和を迎えるであろう。

神は生きておられ，私たちの永遠の天父であることを証する。イエスはキリストであり，神の御子であり，世の救い主である。神は今も過去の神権時代同様，予言者たちにみこころを示しておられる。私たちが神を知りたいという真実の望みをもって神を求めることを，イエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。

小さな一歩



十二使徒評議員会会員

リチャード・L・エバンズ

宗教は異るが，信仰篤く明敏な論説者の言葉から，ふたつ引用したいと思う。彼は次のように語っている。「もしも私たちが神聖なものを侮り，……人間的なものにすべて自己を依存したなら，間違いなく私たちは悲観主義の勝利の下に屈するしかない。……真実の楽観主義は，永遠の生命とそれを与えたもう御方の限りない恩寵を信じる静かな不動の信仰を土台としなければならない。」（「ザ・インデペンデント」（*The Independent*）の論説より，1898年，p.1596）

彼は続けて語る。「霊魂の不滅を信じるのに，私たちは新しい理由を捜す必要はない。古い理由……で充分であり，……信仰心のすべて，不死不滅の希望のすべてが神から始まり，神に基づく。私たちは神のもとからいで，神のもとへ行く。神は生きておられ，私たちは生きている………どうして御父はご自身を子供たちに啓示されないというのか。どうして御父は予言者や教師を遣わさず，至高の教師，神の御子，人の子を遣わされないというのか。………一度は死に，死からよみがえった御方，その名に私たちの信仰を寄せ，死に対する勝利が私たちの勝利ともなったその御方の実在の上に，私たちは立っているのである。」（同上，4月12日号，p.1900）

この言葉から，私たちは思い浮かべる宣言がある。すなわち文字通り感情，感覚，体を持ちたもう神の実在と，救い主なる神の御子の神性と，啓示や予言者や，不朽の生命を受ける機会やその目的に関する宣言である。

「われらは，永遠の父なる神と，その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず」（信仰箇条第1条）——机上論でもなく，漠然とした実体のない存在でもなく，命を持ち，愛を持ちたもう神は生きておられ，その姿にかたどって人が造られたのである。

「われらは，すべて神のこれまでに啓示したまいしこと，すべて今啓示したもうことを信じ，なお今より後，神の王国につきて多くの偉大にして重要なることを啓示したもうことを信ず。」（信仰箇条第9条）

確かに，過去の予言者の勧告や神聖な召しについては，証拠が豊富にある。また今日，全人類が神の導きを必要としていることについて，豊富な証拠が確かにある。

ごく最近，私たちは心から愛する予言者，デビッド・O・マッケイ大管長を失った。私たちの愛と祈りを遺族に，そして69年の歳月を故人と共に過ごした愛する夫人に捧げたい。

そして私たちはきょう，この大会で支持を取ることになっている愛する後継者ジョセフ・フィールディング・スミス大管長から説教を聞いた。願わくば神が彼を祝福し，共にいて彼を強め，平安を与え，そして愛する人々と共に，生命につけるすべての良きものを与えたもうように。

神は祈りや内なるささやきや霊感，啓示などを通じて子供たちにみこころを示される。絶えざる啓示の必要なことは明白であろう。御父がいまだに私たちに語っておられないことは無限にあり，人がだれも知らないことは際限なくある。

改訂や廃棄をされない教科書があるだろうか。修正や放棄されない理論があるだろうか。改善されない方法はあるだろうか。研究にいつ最後の発見がなされ，神のみ旨やみこころが最後に啓示されるのがいつかを知っている人がいるだろうか。未知の事物の前に謙遜であることこそ，いつのときにもふさわしい。学問への過大評価は好ましいものではない。

現代の私たちは過去の遠い地に住んだ人々より神の導きを必要としないという考えの人はいるだろうか。

予言者も予言も，聖典，勧告，戒めはみな私たちの持つ貴重な遺産である。

ではこの人生や人生の目的，問題，その可能性についてはどうであろうか。私たちはみな未解決の疑問を持ち，失望，過ち，善行，愚行，悲哀も悩みもある。

この世は探求の世である。しかし大勢の人々が誤った道にあって正しいものを捜している。抗議に，破壊に走る人々がいるが，最も悲しむべきは自分の命や心や平安，幸福，未来の可能性を抹殺している人である。これらのことについて，先日の日曜日の教会の放送に重要な意味を含む言葉が出てきたが，それを御紹介して考察に供したい。

もし私たちが方向を変えなければ，今行こうとしている所に必ずたどりつく。

家庭がまずもとになる場所だが，マッケイ大管長はこう語った。「仕事や娯楽を自分の家庭より上に置くとき，その瞬間から彼は身と霊の衰弱への下り坂をたどり始める。」そして，最後にこう述べている。「家庭生活最大の敵は不道徳である。」（「大会報告」1969年10月）

私は数日前に，自分の子供にしつけをしないといって校長を非難した親の話を聞いた。しかし，家庭が一番のもとである。両親は自分の子供に教え，教えていることを自分で守りなさい。私は未亡人の愛する母のひざで語られた祈りを，感謝の心で厳粛に思い出す。彼女が私たちにこう言ったのを覚えている。彼女はまた，その言葉通りの生活をした。「自分の義務を果たしなさい。お祈りをしなさい。什分の一を納めなさい。お借りしたものは返して。正直になりなさい。働きなさい。清くありなさい。けんかをせずに。噂はせずに。信仰を持って」と。

愛する若人たちよ，このような教えに耳を傾け，その通りに生活しなさい。平安や幸福や永遠の機会を，見せかけの安っぽい世の誘惑に賭けてはならない。

あなたがたはあらゆることを自分で試してみるわけにはいかない。その時間がないからである。死を招くものは何千とあるが，あなたの命はたったひとつである。あなたの心を，徳を，体を，霊を滅ぼすことのできるものは幾千とある。だがひとつとして価値あるものはない。だからすでに立証されているもの，歴史を通じて人々が体験してきた苦労や過ちや苦悩から学びなさい。もしだれもが人の犯してきた失敗をはじめから全部繰り返そうとしたなら，大して学びもしないうちに一生が終わってしまう。私たちの持つ貴重な遺産の中には，過去に立証されたもの，発見されたもの，啓示されたものも入っている。それを受け入れなさい。そしてここから出発して，学び，悔い改め，進歩し，心身や平安や自尊の心を損なうことなく，助言を求め，愛する人々を信頼し，律法を守ってあなたのなれる最良の人になりなさい。自分には助言はいらないと考え，かたくなに我が道を突き進む人は，前途に悩みと悲劇が待ち受けている。

両親や監督や信頼できる立派な人たちに相談しなさい。スミス大管長は副管長たちに助言を求めている。十二使徒評議員会はお互いや兄弟たちと相談をする。「誰に対しても責任を問われないほどの地位にまで昇りつめた人物はいない。」（ローレンス・A・アプレー *Managers in Action*「行動の支配者」）あらゆる答えをすべて知っているような賢い人間はいない。人と話しあって得るものが何もないような頭の良い人間はいない。（地の造られる前にも，天上の大会議があった。）また，主に話すことを忘れてはならない。そしてそれから，聞きなさい。今週ハロルド・B・リー長老が，「私たちは導きを求めて祈る。しかし果たして聞いているだろうか」と話をされた。祈りによる神との交わりは確かに行なうことができる。私たちは皆，何かを決定するときに，導きを必要とする。

誘惑はどこにでもある。悪を行なう機会や善を行なう機会は，どこにでもある。しかし私たちは，誘惑を誘い出してはならない。ある人が面白いことを言っている。「誘惑から逃げるときに，移転先の住所を残して行く人たちがいる。」（ロータリー国際クラブ会報，テキサス州グラハム）もし悪いことをしたくなければ，その考えをもて遊ぶこともやめるがよい。誘惑につきまとわれたくなかったら，興味あるような言動はしないことである。絶壁に近寄らない人はそこから落ちることもないのである。

ここで，私たちの天父は理論家ではないと申し上げよう。創造は理論によって進められてはいない。春が戻り来るのも理論によるのではなく，種が育つのも理論によるのではない。物にも道徳にも霊にも，それぞれの法則はいまだ有効である。戒めは今なお力を持ち，だれもそれを無効にはしていない。無効にする権利は，戒めを与えたもうた神を除いて，他のだれにもない。

天父が私たちに勧告や戒めを与えられるとき，私たちはそれが極めて大切だと確信できる。天父が私たちに何かを語られるとき，私たちはそれを信じる方がよい。ある道を行けば私たちはその結果を得，別の道を行けばまた別の結果を得る。

多くの方々は，スペンサー・W・キンボール長老の赦しの奇跡についての素晴らしい本をお読みになったことと思う。神は，私たちが悔い改めて真心を実際生活の中で示したな

らば私たちを赦し，平安と自尊の心を得るように助けたもう愛深い御父であることを，私は証する。神は私たちにできないことは何も求められず，私たちに果たせない要求は何も望みたまわない。私たちが率先して努力し，果たしたいと願う限りは。悔い改めは，それが真心からのものであったならば，奇跡となる。

ある歴史家たちの言葉によれば，私たちの文明以前に道徳の退廃を主因として興亡していった文明が19あるという。そしてその大半は，恐らく手遅れになる時期までその状態に気付かなかったということである。私たちとて，自分の行動の結果や将来に待ち受けることを免れ得るものではない。

人類が月に第一歩をしるしたときの言葉を覚えておいでであろう。「人にとっては小さな一歩だが，人類にとっては大飛躍だ。」（ニール・A・アームストロング）そして別の人がそれに続けて，「私たちは，月に立てるところまできた。今度は隣人に手を伸ばさなければならない。……小さな一歩を続けてゆけば，人にできないことはない」（R・ハリス，*One Small Step*「小さな一歩」）

そしてもし人が律法の中で生き，戒めを守り，摂理者なる神の目的に従ったならば，人にできないことはないのである。

愛する若人の皆さん，神があなたがたを祝福されるように。風説にひきずられてはならない。すでに発見されていることを捜して，目的もなくあちこち駆けまわってはならない。現代の詭弁や誘惑に惑わされてはならない。神から与えられた勧告と戒めに従って生き，思慮と祈りのある生活，そして清い生活によって得られる平安と幸福をみつけなさい。

時代は悩んでいる。問題は多い。人は右往左往し，あるいは自暴自棄に陥り，大勢の人が恐れを抱く。しかし天には，万物に対して目的と約束と力を及ぼす神がおられる。私たちはひたすら神の勧告，戒めを守って主の道を行なうならば，この世では平安と幸福を得，来るべき世では愛する人々と共に無限無窮の機会にあずかることができる。

この世で道半ばにして放棄すること，あるいは来世での目標を下げること，これほど愚かで，目先のみにとらわれた姿勢はない。

この教会の使命，教会の伝える教えは全人類に向けられており，それを受ける人々の生活を必ずや祝福し，向上させるものである。私たちはすべての人の現世と永遠にわたる救いを願ってあなたのところへうかがう。疲れた人，さまよう人，道を失った人，孤独な人，病の人，悲しみを負う人，落胆する人，また愛する者をなくした人，人生を模索している人。捜しているものはそこにある。それを見い出すことができるよう，天父が助けたまわんことを。

私は皆様に証をしたい。神は生きておられる。神は再び人の中にみ業を確立された。イエスは私たちの救い主，贖い主である。私は現在の予言者を，また過去のすべての予言者をいただいていることを，神に感謝する。

もし私たちが方向を変えなければ，今行こうとしている所に必ずたどりつく。今私たちがどこにいようと，今までどこにいたのであろうと，もしも小さな一歩を正しい方向に踏み出してゆけば，そして日に日に悔い改めつつ進歩すれば，私たちは永遠に愛する人々と共に神が与えたもう最大の可能性を実現し，心に確信を持って，きょうもいつの日も前進できるのである。イエス・キリストのみ名によって。アーメン。



人と争わず，確固たる道を

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

たったひとつの私の願いは，兄弟姉妹，あなたがたの信仰を励ます話をしたいということである。そのために，私は聖きみたまの霊感を乞い求める。

私はこの教会の目覚ましい発展に驚くと共に感謝する。数日前，私はベンソン兄弟と共にシオンの東京ステーキ部設立に立ち会った。3週間前にはタトル兄弟と共にシオンのリマステーキ部を組織した。1，2週間前はロムニー兄弟が南アフリカのヨハネスバーグにステーキ部を組織した。こうしてみるとここ数週間の間に，日本，ペルー，南アフリカという遠い地に強力で活発なステーキ部ができている。

私たちの先祖が語った時代は，今来ている。現代は予言の成就される日であり，私もあなたがた同様，今の時代にいあわせて，世界各地の多くの民をより良く変えているこの活気に満ちた奇しきみ業に参加できることを感謝している。

この発展は人の勝利ではない。それは神の力の表われである。私たちがそれを決して誇らず，自慢しないように願っている。常にへりくだって感謝するように祈っている。

昨晩はこのタバナクルを会場に，予言者ジョセフ・スミスの見神150周年を祝って，歌と話の感動的な記念大会が行なわれた。1820年の春の朝，御父と御子が少年ジョセフに現われたもうたこの最も素晴らしい顕現を，こうして改めて思い起こせたことを感謝している。今日の教会に私たちの見るすべての進歩は，あの素晴らしい出来事が結んだ実であり，各国で何百万の人の心を動かしてきたあの証の実である。私はみたまによって与えられた自分自身の証を述べたい。予言者が語ったあの素晴らしい出来事は真実である。永遠の父なる神と復活された主イエス・キリストはそのときジョセフと，ちょうどきょう私があなたがたと話すように，実際に親しく顔を合わせて話をされた。私は声を上げて証する。ジョセフは予言者であり，彼を通じて始められた業はまさしく神のみ業であると。

私は先日の晩に，ジョセフの仕事の概略とそれを進める私たちの責任を説いた文章を再読してみた。詩的で美しいこの文章は，ジョセフの死後1年にならない1845年にパーレー・P・プラットがつづったものである。そこから引用しよう。

「彼は神の王国を興した。――私たちはその領土を広げよう。

彼はまったき福音を回復した。――私たちはそれを世に広めよう。

彼は栄光の日の夜明けを開いた。――私たちはその輝きを極限まで大きく引き上げよう。

彼は『小さきひとり』，しかしあまたになった。――私たちは『小さき群れ』，やがては強大な国となる。

そうなのだ。彼は石を切り出した。……私たちはそれを大きな山となし，全地を満たさせよう。」（「ミレニアル・スター，第5巻，1845年3月号，pp. 151－52）

私たちはこの夢の実現を目のあたりにしている。私たちは，この王国建設に際して与えられた神の信頼に誠心誠意応えたいものである。私たちの努力に悲嘆や妨害がないとはいえない。直接，間接に反対もあろう。

み業が進展するにつれて，敵はさらに力を加えると思われる。一番の防御は，神の予言者として支持した人たちからの教えを忠実に守るという静かな攻撃である。

ジョセフ・スミスは，私たちが置かれている状況に関して次のように教えた。「柔和，謹厳をもって行き，イエス・キリストと十字架にかけられた主について教えなさい。信仰や

宗教の体系について人と争わず，確固たる道を進みなさい。私はこれを戒めとして宣言する。守らない者はことごとく頭に迫害を招き，従う者は常に聖霊に満たされるであろう。これを，予言として宣告する。」

主が霊感を賜うなら，これから私がお話したいことのテーマをここから取り上げたいと思う。

「人と争わず，確固たる道を進みなさい。」

私たちは移ろう価値観と変化する標準と，朝に咲いては夕方にしぼむまやかしの活動の時代に生きている。政治に，公衆道徳に，個人道徳や人人の家庭の中にそれを見，多くの教会に，また私たち教会員の間にも，人の詭弁につき従う人々の中にそれを見る。

あらゆる国で人々は社会の力となっていた伝統を打ち捨てて暗闇で手探りし，しかしいまだに自分を導く新星を見いだせないでいるように思われる。

最近私たちは，日本で開催される1970年世界博覧会に出展する教会のパビリオンの献堂式に出席した。ひとりの日本政府代表者が話の中で，ほとんどが人類の技術を誇る出展の中で教会が参加したことを暖く歓迎していた。彼は自国の国民生活に宗教の影響力が弱まり，結果として標準や理想が退歩していることを嘆いていた。

それはどの国も同じであろう。私は何カ月か前に，ピュリツァー賞受賞の歴史学者，バーバラ・タックマンの興味ある論評を読んだが，彼女はこう書いていた。

「こと私たちの指導者となると，どちらかといえば多すぎるほどのパイド・パイパー（伝説の笛吹き，笛でねずみを誘い出して水死させたが，約束を破られたため，今度は笛の音で町の子供たちを誘い出して隠してしまったという〔訳注〕）がいて，人々を誘い出そうとうずうずしている。彼らはあちこちを走りまわって同意を集め，可能な限りの賛成を取ってくる。その彼らがきまってしないことがある。それは体を動かそうとせずにこう言うことだ。

『これは私の信じていることです。私はこうします。こうしません。これが私の行動規範で，こんなことはしません。これは良いことで，あれはつまらないことです。』標準を明示したがらないという風潮の中に，道徳の指導性欠如がある。」

彼女はこう続ける。「思うに私たちの貧しい…社会が受け継いでいるあらゆる悪徳の中で，多くの不安や混乱の根源となっているのは，標準の不在である。私たちは自分が信じられないために標準を口に出せず，標準に頼り切ることもできず，権威ある地位の人々でさえ，必要なときにも標準を定めることができない。私たちは価値観，道徳，行動，倫理の面でどっちつかずの立場に甘んじるという病いに冒されているかのようである。」（*The Missing Element Moral Courage*「欠けているもの――勇気」マッコール，1967年6月，p. 28）

一般社会で標準が揺らいでいる今，私たち教会員には同じようにぐらつく理由はない。私たちには，試しをくぐり抜けてきた確実な力ある標準がある。私たちはそれを守る限り，前進する。なおざりにすれば自分の進歩を抑え，主のみ業に停滞を招く。その標準は主から与えられた。あるものは私たちの社会で幾分時代遅れに見えようが，その正しさにいかなるかげりもなく，その効力はいささかも損なわれていない。いかに賢かろうといかにもっともらしく聞こえようと，人間のささやかな理性をもって神の言明された知恵を改ざんすることはできない。

私は先日ミルウォーキーステーキ部の祝福師の言葉を聞いたが，今この会場にもおいでの彼の言葉が忘れられない。彼はこう言った。「神は私たちの票を期待する天上の政治家ではない。そうではなく，神は私たちが見いだし，従順を捧げるべき御方である。」（ハンス・キンツ）

確かに，従順は幸福をもたらす。従順は個人に平安をもたらし，成長をもたらす。そしてその良い模範が，その人の属する教会の評判を高める。

私たちが神より与えられた標準を忠実に守ることが，周りの人々にとって不快なことになるはずはない。人と争う必要はない。私たちが確固たる道を歩み続けるなら，その模範こそが，私たちの主張の正しさを示す一番の証明となるであろう。

主は私たちに実に多くの勧告と戒めを与えておられ，主の教会員はひとりとして言い逃れの余地がない。人徳，隣人愛，律法への従順，国家への忠誠，安息日の遵守，禁酒禁煙，什分の一や捧げ物の納入，困窮者の世話，家庭や家族の指導，福音の伝道など，幾ら挙げてもきりがないほど，神は多くのことについて私たちに道しるべを立てて下さった。

そのどれについても論争を必要としない。私たちが自分の宗教を生活に実践して確固たる道を歩むならば，何の方法によるよりも一番効果的にこの大義を進めることができる。

私たちを連れ去ろうとする人々があろう。おびき出そうとする人々があろう。私たちはそしられもしよう。さげすまれもしよう。ののしられ，世に風刺もされよう。

教会内外に神のみに属する権能を侵害することがあたかも私たちの特権であるかのように，何かにつけて私たちの立場を変えさせようとする人々がいる。

私たちは人と論争したくはない。教えるのは平和の福音である。しかし私たちは，予言者として支持した人々を通じて教えられた主のみ言葉を，捨てることはできない。タックマン女史の言葉を再び借りるならば私たちは起立してこう言わなければならない。

「これは私の信じていることです。私はこうします。こうしません。これが私の行動規範で，こんなことはしません」と。

失望のときも，心配でたまらないときもあろう。私たちのすべての者の生活に，決意しなくてはならない日が必ずやってくる。これまでもそうであった。

この教会の男女はみな，私たちの先祖が自分の信仰のために払った代価について幾分なりとも知っている。ここでまた思い出すのは，最近読んだ妻の祖母の話である。祖母が13歳のときの話だが，御紹介したいと思う。彼女は，柔かな緑の丘が起伏して海まで続く，イギリスの南岸のサセックス州，美しいブライトンの町で過ごした少女時代を語っている。

彼女の家族がバプテスマを受けたのはその町であった。これは真実だというみたまのささやきを受けて，一家の改宗はごく自然に行なわれた。しかし親戚や隣人は批判的で，暴徒が民衆を扇動したりもした。自らの信じることを述べること，バプテスマを受けてモルモンと認められることには，心の底から湧き出る類まれなる勇気が必要であった。

一家はリバプールに行き，900名ほどの人々と一緒に帆船ホライズン号に乗船した。

帆が風をはらむと，彼らは「さらば，故国よ，さらば」を歌った。現在ではジェット機で6時間の距離なのだが，そこを1カ月半の航海の後，一行はボストンに上陸し，それから汽車で出立地のアイオワ・シティーへ着いた。

彼らはそこで4頭の雄牛と2頭の雌牛と，馬車とテントを買った。一家は手車隊の一隊と同行して彼らを助ける責任を受けた。

このアイオワ・シティーで，一家に最初の悲劇が訪れた。2歳にもならない最年少の子が慣れない旅の空に果てて，家族の墓参もかなわぬ土地に埋葬されたのである。

ここで13歳の少女の自筆の言葉を少し読んでみよう。

「私たちは1日に15マイルから25マイル（24～40キロ）進みました。……そしてプラット川に着きました。……その日手車隊と合流しました。私たちは手車隊の人たちが川を渡るのを見ました。川には大きな氷の塊が流れていて，ひどい寒さでした。翌朝になると14人の死者が出ました。……私たちはキャンプに戻ってお祈りをして……「恐れず，来れ聖徒，……」と歌いました。私は（その夜）母が何で泣いたのかわかりませんでした。……翌朝になると私に妹が生まれました。9月23日でした。名前をエディスとつけました。エディスは1カ月半で亡くなりました。……（彼女はスウィートウォーター川を最後に渡った場所に埋められました。）

（すごい雪の中に突っ込んで，私は迷子になりました。）手足が凍えました。……大人の人が雪でこすって足をバケツの水に入れてくれました。すごく痛かった。……

デビルゲートに着くと，寒さがいっそう厳しくなりました。私たちはいろいろなものをそこに置いてきました。……兄弟のジェームズはいつもと同じに寝たのに，次の朝は死んでいました。……足が凍傷にかかりました。兄弟もみんな凍傷になりました。ただ雪だけ。（見わたす限り雪で，ワイオミングの寒風が吹き荒れていました。）私たちはテントの杭打ちもできませんでした。……自分たちがどうなるかもわかりませんでした。（そんな）ある晩ひとりの男の人がキャンプにやってきて，……ブリガム・ヤングが私たちを助けに人と馬車を送ったと教えました。……私たちは歌を歌い，ある人たちは踊りを踊り，ある人たちは泣きました。

でも母は，よくなりませんでした。……母はリトルマウンテンとビッグマウンテンにはさまれた山合で死にました。……43歳でした。……

私たちは1856年12月11日の夜9時に，ソルトレーク・シティーに到着しました。生きている人の4人に3人が凍傷でした。母は馬車の中で亡くなったままでした。……

翌朝早くブリガム・ヤングが来ました。……彼は私たちの状態を見て，足が凍傷にかかっているのや母が死んでいるのを見て，涙を流しました。……

お医者が私のつま先を切断している間に，姉たちが母に死装束を着せました。……足を固定し終ると，私を運んでいって母に最後の対面をさせてくれました。いったい，どうしてそれが耐えられたんでしょう。その日の午後，母は埋められました。……

私は今でもよく，母がイギリスを発つ前に言った言葉を思い出します。『ポリー，母さんは子供たちが小さいうちにシオンに行きたいの。あなたたちがキリストの福音の中で育つようにね。この教会が本当の教会だって知っているからよ。』（*Life of Mary Ann Goble Pay*，「メアリー・アン・ゴーブル・ペイの一生」）

こうして13歳の少女の話は終わる。

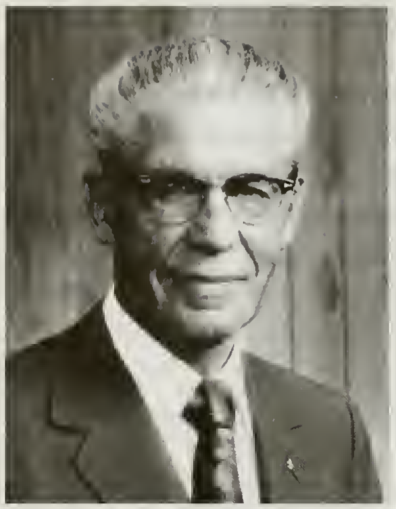
私は最後に問いたい。私たちの先祖が自分の信仰のためにこのように大きな代価を払ったというのに，私

たちが自分の信仰のために何か小さな犠牲を求められたり，ささいな批判を忍ばなければならないからといって，何の驚くことがあろうか。

私たちは争うことなく，議論することなく，立腹させることなく，確固たる道を進み，神の王国を築こうではないか。問題があるならば，落ち着いてそれに対処しよう。悪には善をもって打ち勝とう。これは神のみ業である。み業は地上に勢いを増し続け，真理の教えに応える心を持った無数の人々の生活を良きに変えている。天が下の何の力もそれをとどめることはできない。

それが私たちの信仰であり，証である。

私たちが自分たちに与えられた神聖で重大な責任にふさわしくあり，かくして神の王国を進展させるよう，神が助けたまわんことを，その神聖さを証すると共に，謹んで祈る次第である。イエス・キリストのみ名によって。アーメン。



神権の力と影響

大管長会第二副管長

N・エルドン・タナー

この会と今大会をすべて管理するスミス大管長から，私は司会を命じられたが，ここで短い話の責任をいただいた。

神の神権を持つ末日聖徒イエス・キリスト教会の神権者たちと会うときは，いつも胸が高鳴り，心を鼓舞される。さきほど聞いた美しい歌やこの場で受けた胸を打つ話は，それをいやが上にもかきたてる。

神権は，万物を造った力であり今宵バンデンバーグ管理監督が言われた通り，神が事をなされるときのその力である。また私たち個人にとっては，それぞれの職にあって神のみ名により働くようにと与えられた神の力である。その神権を授けられることは大きな特権であり，素晴らしい祝福であり，大切な責任である。

教会の若人の中には，執事や教師や祭司に相当する年令になれば，活動状況や生活態度におかまいなく神権を受けて当然と考える人がいる。そのような人たちは，神権を受けるということがどんなに大きな特権であるか，よく認識すべきである。神権を受ける人は非常に重い責任を引き受けるのである。

教義と聖約の中から，少し読んでみたいと思う。

「見よ，召さるる者は多けれども選ばるる者は少し。選ばるることなきは，これそもそも何の故ぞ。そは，人々の心甚しくこの世に属けるものの上にあり，唯々人間の誉を得ることをのみ望み，次の如き一つの戒めを知らざるによる。曰く，神権の権能は天の能力と固く結びつきて離るべからざるものにして，天の能力は正義の原則によりてのみ支配し運用し得るものなり，と。この権能のわれらに与えらるる事もあらんは真実なり。されどもし己が罪を蔽いかくさんとし，われらの高慢，空しき野望を充さんと企て，または幾分にても正しからざることによりて人の子らを支配し，統御し，強制せんとする時は，見よ諸天は退き去り，主の『みたま』悲しむ。主の『みたま』退き去らば，神権またはその人の権威は終りなり。見よその人いまだ覚らざる前，独り置かるるままにとげあるむちをけり聖徒を迫害し神に叛きて闘をなす。」（教義と聖約121：34—38）

私はこの聖句を，自分の神権の召しに全力を傾けない人や神権を間違って用いる人を指していると考える。神権の務めから次第次第に遠のいてゆき，教会から離れて行ったという例を私はたくさん知っている。

非常に活発だった男性が証をなくして，主のみたまが離れ去ると，権能ある人々を批判するようになって，やがて聖徒たちを迫害し，背教して，神に対して戦いをいどむようになるのである。

しかし，主は教義と聖約の中でこうも言っておられる。「聖霊は常に汝の伴侶となり，汝の笏は真理と正義の変ることなき笏となり，汝の支配は永遠の支配となりて強いらるることなく永遠に汝に流れ込まん。」（教義の聖約121：46）これは神権の召しを全力を尽くして遂行してこそである。

神権の誓詞と誓約についてはどなたも読んだことがあり，何度も聞いていることと思う。私にとって，これは実に大切なことである。

「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得，而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは『みたま』により聖められてその肉体再新さる。これらの者はモーセの息子たちとなり，アロンの息子たちとなり，アブラハムの子孫となり，また教会員にして王国の民となり神の選民となる。主は言う，またすべてこの神権を受け入るる者は，われ

を受くるなり。そは，わが僕らを受け入るる者はわれを受くればなり。また，われを受け入るる者はわが父を受くるなり。而して，わが父を受け入るる者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。」(教義と聖約84：33―38)

これらの祝福が，毎日あらゆる場で自分の神権の召しを全力を尽くして遂行する人々に約束されていることを，ここで強調したい。「而してこは神権に属ける誓詞と誓約によりて然るなり。この故にこの神権を受くる者は，すべてわが父のこの誓詞と誓約とを受け，而してこれをわが父は破ることも変えることも為したもうはずなし。されど何人にまれ一度この誓約を受けて後これを破り，またことごとくこれに違背する者はこの世に於ても未来の世に於ても罪の赦しを受くることなかるべし。」(教義と聖約84：39―41)

主はここで，御自分は誓約を破ることはないが，私たちがもし破れば約束は取り消されると言っておられる。

「この故に，今や神権者皆各々その義務を覚れ。また己が任命せられたる務めを全く勤勉に勤むべし。およそ，怠惰なる者はその地位に居るに値せず，またその義務を覚らず信任さるるに足る行いを示さざる者は，その地位にある値なき者なり。誠に然り，アーメン。」(教義と聖約107：99―100)

「さればもし汝ら絶えずわが善を行い，異邦人の光となり，この神権によりてわが民のイスラエルを救う者とならば汝ら幸福なり。主，このことを言えり。アーメン。」(教義と聖約86：11)

きょう何度も指摘されたように，私たちは騒然たる世の中に生きている。世間が，どこへ行くべきか，何をなすべきかの理解と指示を与えてくれる指導者を，どこかに求めるのは至極最もである。人々には，人生に目的があり，その目的とは何であるかを知ることが必要である。彼らが，あなたがた兄弟の持っている神の神権を頼りとするのもごく当然である。

すべての男性が自分の神権の召しを全力を尽くして遂行したならば，この教会にある神権が全世界にどのような影響を及ぼすか，はかり知れない。兄弟たち，神権は，全力を尽くして遂行されたならば，不動の影響力，安定の力となる。そうならなければならない。妻たち，母親たちは，神権者の夫に指導と力と指示を受ける完全な権利と責任を持っている。夫は家庭に必要な指示と保護と力とを与えられるように，自分の神権の召しを全力を尽くして遂行する責任がある。彼にはそれができる。神権の召しを熱心に務めるならば，主によって家族の目に大いなる者とされ，良い影響を周囲に与えるであろう。

私たちは，姉妹たちや少年たちにも責任がある。姉妹はたとえ12歳であろうと神権者の兄弟を重んじるべきで，神権者の模範を彼に期待し，勧告や指示や力や一緒にいるときの安全を彼に求めるのも当然である。変人は神権者と外出するときに，彼に全幅の信頼を置けるようでなければならない。神権の召しを全力を尽くして遂行している神権者であるなら，命に懸けても彼女の操を守り，それを奪おうなどとは決して考えないことを，彼女に知ってもらわなければならない。彼が自分の持っている神権と責任について考えるならば，誘惑は受けないであろう。きのう私が受け取った1通の手紙から少し読んでみたいと思う。これは，神権の召しを全力を尽くして遂行し福音の原則を守ることの大切さを述べている。大勢の兄弟たちがそうあるべきだと信じてはいても，それを実行する勇気や力を持たないでいる。福音の教えを守ったときに，仲間に及ぼす影響の大きさを私たちが認識してさえいれば，きっとよりよい行ないができるに違いない。手紙はかなり親しくしているロサンゼルス在住の有名な弁護士からで，このようなことを言って来た。

「何週間がもう何カ月になって法律業務に没頭する毎日ですが，そんな間もよく頭をよぎるのは，まれに見るひとりの青年弁護士のことです。ひとつの訴訟が終わったばかりなのですが，そのときの私の対敵が，まだ若い青年だというのに，道徳的，霊的な強さに裏打ちされて，それこそ最高の手腕を発揮していました。ひょんなことで彼が末日聖徒イエス・キリスト教会の熱心な信者だと知ったときに，ああそれでかと合点がいったわけです。」

この手紙の主は教会員ではない。また，彼が書いてきたのは法廷で対決した相手のことだが，私はその青年をよく知っている。手紙の主は私が彼を知っていることを知らないが，兄弟たち，私はもし私たちが自分の神権の召しを全力を尽くして遂行し，生きるべき道を生きたならば，世の中に影響を与え，主が私たちを力ある者となして下さることを，このことから知ったのである。これはあなたがたに対する私の証である。イエス・キリストのみ名によって，アーメン。



信仰の擁護者たちへ

大管長会第一副管長・十二使徒評議員会会長

ハロルド・B・リー

私は今晩一，二の事柄だけをお話したい。初めの事柄は旧約聖書のひとりの予言者の夢のたとえ話で説明しようと思う。それは高い塔の上でその地方一帯を見張る夜回りの話である。攻め来る敵を見張っていて，その敵がラクダか馬で砂塵をあげながら近づいてくるのをはっきりと認めた。夜回りは中庭に立つ主人に刻刻それを報告した。彼は「万事はよし，万事はよし」と，また何か危険を察したらすぐさまそれを報告した。

ところが夢のたとえ話の中では，主人が「夜回りよ，今は夜のなんどきですか，夜回りよ，今は夜のなんどきですか」と聞くのである。それは，見える日中に来る敵よりも夜中に来る敵の方が恐いことを教えている。

そこで私がひとつ取り上げたいのは，夜中に来る敵のことである。

メルケゼデク神権者の全員を指して言う「長老」という語は，信仰の擁護者を意味する。それが私たちの第一の責任であり召しである。すべてのメルケゼデク神権者は，信仰の擁護者たるべき人々である。

私たちの間には，絶えずドアをノックし，若い男女，それも特に世慣れぬ純真な人々にわなをかけようとする狡猾な敵が存在する。つまりお話したいのは，飲酒や賭事や売春やポルノとの闘いと，そして安息日を清く過ごしたいと願うキリスト教徒を援助しようとする私たちの努力についてである。私たちのしなければならないことは，安息日を聖なるものとする大切さを強調して主が言われた次のことを，胸に刻むことに尽きる。「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様，祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。」（教義と聖約59：9）従って信仰の擁護者は，勤労者や少年少女，夫や妻が週の一日を家族と一緒にいられるように，安息の一日が得られるように注意するべきである。夜回りよ，「危険な夜」を警戒しなさい！

次に少しだけお話したいことは，1913年8月に出された大管長会の声明である。教会員に対するその警告は現在まで過去何人かの指導者が繰り返し述べ，私たちもよく耳にしている。1913年に大管長会（ジョセフ・F・スミス大管長，アンソン・H・ランド，チャールズ・W・ペンローズ副管長）から出されたその書簡を読んでみたいが，題して「警告の声」

「末日聖徒イエス・キリスト教会の役員，会員各位

ハイラム・ページのとき（教義と聖約28章）以来，折々，教会員に対する偽りの霊の現われが起きている。時にこうした現われは，罪を犯したために大いなる偽り者のえじきとなった男女に起きている。またある場合には，教会の規則や儀式や様式を厳守していることを心から誇りにしている人々が悪霊によって背教に導かれている。悪霊たちは，余りにも神からでたものと酷似した影響力を行使するために，自分を『選民』と考えているこのような人々でさえ，その本質的な違いを識別するのに困難を感じているのである。サタン自身がその身を変えて，『光明の天使』を装うのである。

示現，霊夢，異言の力，予言，内なる声あるいは非凡な賜，霊感などが，これまで受け入れられている教会の啓示と調和しないものであったり，正統な権威者の決定に反するようなものであるなら，それが，どんなにもっともらしく見えようとも，末日聖徒たる者は，それが神から出たものではないと判断しなければならない。また，教会を導くための決定は教会の頭を通して，啓示によって与えられるということも理解しな

ければならない。教会の忠実な会員は皆，自分自身のために，自分の家族のために，そして自分が指名され，聖任された管理の職のために，聖霊のささやきを受ける資格がある。だが，教会の長たる者を通して神から与えられたものと一致しないものはすべて，権威ある，信頼すべきものとして受け入れられるべきではない。霊的な事柄もこの世の事柄も，聖徒たちは自分自身のことに関する導きと啓示を受けることができる。だが，これは決して，他人に指図する権威を持つというのではなく，またそうした導きが，教会の誓約や教義や規律，証明ずみの事実や真理，また良識に反する場合には受け入れないことが必要である。どんな人でも，いかにももっともらしい啓示や示現や霊夢を神から受けたと主張して，兄弟姉妹たる教会員を説いて，投機や株の売買に身を投じさせる権利はない。特にそれが，局地的なものであれ，全教会的なものであれ，承認ずみの権威に反するものである場合，なおのことである。主の教会は，『秩序の家』である。主の教会は，個人に与えられる賜や現われによって統治されるのではなく，指定された大会で教会員の挙手により支持された聖なる神権の秩序と権能によって統治されているのである。

教会の歴史には霊の現われを信じてみせかけの啓示を受けたと主張し，それを受ける人々を導こうと虎視眈々とねらっている詐欺師や熱狂者の例が数多く記録されている。そしてその結果生ずるものは，いつの場合でも，失望，悲嘆，そして不幸である。さらに財政的損失，時には完全に破産してしまうこともある。私たちは，それらを言い出した人が公言している霊的顕現と信奉者を熱中させる力以外に拠りどころのない偽りの転覆計画には反対するように，末日聖徒に警告することは私たちの義務であると感じている。私たちは，商売人の利益にしかならない株式に聖徒たちが金銭や財産を投資することのないように警告する。『シオンの贖い』や『死者の救い』などという名目で一見立派な目的を持つ金もうけの計画は，教会の秩序を知った者を欺けるものではなく，本来ならば地にも天にも記録される確実な価値ある仕事に向けるべきはずの時間や労力を，浪費する結果にしかならないであろう。」（ジェームズ・R・クラーク編，*Messages of the First Presidency*「大管長会メッセージ」ブック・クラフト社，1970年第4巻 pp. 285－286）

教会員のある人々が，扇動的な話や夢や示現，祝福師の祝福と称する文章や引用文，あるいは明らかにだれかの個人的な日記と思われる文章を言い広めていることは，何と愚かなことかとただあきれるばかりである。

例をあげれば，ある教会幹部が主の啓示に反して自分が教会を導くと言い出したという悪意ある話があり，教会幹部に分裂があるという風に宣伝しているが，調査をするとその手紙の主は教会の記録にもほかのどこにも実在しない架空の著者である。住所も偽りであった。しかし驚くことは，調査の結果まったくのでたらめであったその偽造文や偽の啓示が，扶助協会の集会や神権定員会，ファイアサイド，インスティテュート，セミナリーにまで入り込んでいたという事実である。

信仰の擁護者である神権者の兄弟たちに望みたい。聖徒たちに，悪魔の活動を助長するのはやめよと説きなさい。主のみ業に自分の時間を使うようにし，このようなことをあなたの責任下で起こさないようにしていただきたい。それはサタンのしわざであり，そのようなことを触れ歩いたり言い広めたりするような者は，悪魔の戯れに乗っている者なのである。

教会幹部のひとりが救い主の再降臨に際して教会の管理者になるという祝福師の祝福を持っていると伝えられているが，これももちろん誤りである。また，あるひとりは，今生きている人の中で救い主の来臨をその目で見る人たちがいると知らされたというが，それもまた作り事である。救い主は，再降臨は夜に来る盗人のようにやってくる，その時は天使さえも知らない，と言われた。しばし考えてみれば，権能ある者はだれひとり，そのような主張を正しいなどと言わないことがわかるであろう。

このような例は幾つもある。あるひとりの教会幹部が，カリフォルニアの民はロッキー山脈の頂上に登れ，そこだけが安全だからと言ったという報告がある。私たちはそれに反して，心の清い者たちがいる場所は安全である。どこにいようと神の戒めに従っているならば安全だと，常に教会員に説いている。

兄弟たち，繰り返して言う。悪魔の所業を私たちの中にのさばらせてはならない。説教やレッスンの題に取り上げてはならない。義しい業を語りなさい。そうすれば悪魔の力は私たちの中から消えて行くであろう。

もうひとつ，お話したいことがある。それは「啓示に続く迫害」という題のジョセフ・F・スミス大管長の言葉である。

「啓示によって導かれ，主から主の民と認められた民で，悪人や堕落した者たちから憎悪と迫害を受けなかった民はひとつもないと思う。また恐らくどの民も悪人や堕落した者たちからこんな迫害は受けなかっただろう。もしも今，昔聖徒たちが迫害

者のネロやローマ人の手に落ちたように，私たちが迫害する敵の手中に落ちていたならば，この民ほどの迫害を受けた民は出現しなかったことであろう。悪人たちの心に地上から主の王国を滅ぼし去ろうという闘志がこれほどに根強く深い時代はかつてなかった。だが，彼らは不可能なことをもくろんでいるため，失敗に終わるであろう。そしてこのことは万人の目に明らかである。……（神の）神権は地上にあり，聖徒たちまたは聖徒たちの多くが彼らの召しを全力を尽くして遂行し，自分の生活と主に捧げた自分の全財産をもって，神権と主を敬っているからである。」（*Deseret Weekly News*「デゼレト・ウィークリー・ニューズ」第24巻，1875年，p. 708）

神権を持つ皆さんはこの神権時代に末日聖徒に対して加えられた迫害はすべて，神権のことであろうと結婚のことであろうとシオンの集合あるいは神権の継承についてであろうと，どれも正しい系統を通じて与えられる啓示の原則が争点になっていることに気付いておられるはずである。恐らくこの迫害も，使徒パウロが言ったように，主が予言者を通してこの民に与えたもう啓示のゆえに私たちが度を過ぎて誇ることのないように，サタンから遣わされた私たちの肉体のとげであろう。

予言者ジョセフ・スミスは迫害され，憎悪された。命を脅かされた彼はこのように言っている。「何故真実のことを話すから私を迫害するのか。……私は示現を受けたのであるからそれが事実であるのを身を以て知っている。私は神がそれを知りたもうことを知っている。私はそれを打ち消すことはできなかった。また敢て打ち消そうともしなかった。私は少くとも，本当にあったことを打ち消すならば神の怒りを受けて罪の宣告を受けることを知っている」。（ジョセフ・スミス2：25）

2，3年前のことだが，ある人が私たちのところに来てひとりの兄弟にこう言った。「もしあなたがたがひとつの原則を破棄したら，あすにでも教会に入りたいのですがね」。その兄弟は「どんな原則ですか」と聞いた。

すると彼は答えた。「現在でも啓示があるということを信じるのをやめたら，あなたの教会に入ります。」

そのときに，教会員である兄弟が驚くことを私に言った。「どうでしょう，いいんじゃないかと私は思うのですが」と。

いったいどういうことであろうか。私たちがこの教会に啓示があることを否定し始めるとき，それは，現在私たちの間に神の力が存在しないと考えるのと同じことである。私たちは，神が啓示をされること，今も教会の過去のすべての神権時代同様，主の王国に関する万事を啓示しておられることを確かに信じて，知り，固い証を持たなければならない。

私たちがこれらのことを理解するように願っている。また，教会の擁護者であるべき兄弟たちは，与えられた召しの力と威厳をもって立ち上がり，教会員の一致を乱そうとする偽りを退散させなさい。今，私たちの間の最大の危険は恐れである。恐れは主から来るものではない。信仰と平安こそがみたまのもたらす実である。願わくは教会員に，どこに平安を求めるべきかを教えることができるように。それは議会で制定される平和，軍隊や戦車や鉄砲や戦闘機で維持される平和ではなく，主が言われたように，世のものに打ち勝つことから得られる平和である。私たちがそれを知って行ない，この試練と苦難の現代に望まれる通りの末日聖徒の生き方ができるよう，神が助けたまわんことを，イエス・キリストのみ名によりお祈りする。アーメン。

神権の召しを全力を尽くして



大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する兄弟たち，老若を問わず自分の神権の召しを一生懸命に果たしている人々に対して祝福する気持と，彼らがこの世でみたまのもたらす良きものをふんだんに受け，次の世では永遠の富を授かるよう，主に願う気持で一杯である。

戒めを守り，教会で熱心に仕え，人々の幸せと向上のために働いている人たちに心から申し上げたい。心の底から，主はあなたがたを祝福して下さる。

そして真理と義の道を歩み続けたならば主から永遠のみ国に迎えられてあらゆる時代の予言者や聖徒たちと共に受け継ぎを授かることを確信して，安らぎを得るようにと。

主が私たち一人一人に神権の全きを授け，その神権を私たちが受けて召しを全力で遂行したならば，主の王国で主と共に永遠のゆずりを与えると約束されたことを知るのは，何と素晴らしいことか。

私たちが受けたこの神権は，人の救いのために万事を代わって行なうようにと地上の人間に神が委任された力であり，権威である。神権はジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに現われた天使の手から，現代の私たちに伝えられている。

1823年9月にモロナイはジョセフ・スミスを訪れたとき，かつて主がマラキに語られた言葉を引いてこう言った。「見よ，主の大いなるおそるべき日の来る前に，予言者エライジャの手によりて，われ神権を汝に顕さん。」（教義と聖約2：1）

エライジャの来訪と結び固めの力が回復される用意をして，人が完全な神権を受けられるようにと，1829年5月にバプテスマのヨハネが来て，ジョセフとオリバーにアロン神権を授けた。それから少し後にペテロ，ヤコブ，ヨハネが来て，ふたりにメルケゼデク神権を授けた。

その後　1836年4月3日にはカートランド神殿に予言者エライジャが現われ，彼らに結び固めの力を与えた。

地にも天にもつなぎ，結び固めるために神権を行使する権能である。

また1841年，主は予言者に「完全なる神権」は主のみ名のために建てられる「家」，すなわち神殿においてのみ享受できると啓示された。1843年に予言者はこう語った。「人が神の神権の全きを受けるには，それをイエス・キリストが得られたと同じ方法で受けねばならない。すなわちすべての戒めを守り，主の家のすべての儀式に従うのである。」（*Documentary History of the Church*「教会歴史記録」第5巻，p. 244）

このことを多少異った面からとらえてみたい。あなたが教会のいずれの職にあろうと，それはかまわない。使徒であろうが祝福師であろうが大祭司であろうが……。ただ，完全な神権と永遠の報いの完きは，主の家の儀式を受けなければ得られない。それらの儀式を受けたときに，扉が開いてだれもが受けられる祝福のすべてを得るのである。

教会で自分より高い職に就いている人がいるので，自分は主の祝福を完全に受けることなど到底できないと考えてはならない。あなたが忠実ならば，長老としてそれらの祝福を自分に結び固めることができ，その祝福を受けて誓約を誠実に守ったならば，人が得られるすべてのものをあなたも得られるのである。

完全な神権を持たないで神の王国に昇栄することはできない。そこでメルケゼデク神権を受けるすべての男性は，昇栄するという誓詞と誓約と共にそれを受けるのである。

人の側の誓約は，神権の召しに全力を傾注し，神の口から出る一つ一つの言葉を守り，戒めに従うという

ことである。

それに対する主の聖約は，人が誓約を守ったならば御父の持っておられるすべてのものを彼に与えるということである。これは，主がはっきりと誓っておられる実に神聖で重大な約束である。

アロン神権を持つ兄弟たちは，大神権に属するこの誓詞と誓約をまだ受けていないが，主から大きな力と権威を与えられている。アロン神権は，後のもっと大きな祝福にふさわしくなるように私たちを訓練する備えの神権である。

あなたが執事や教師や祭司として忠実に仕えるなら，経験が蓄えられ，メルケゼデク神権を受けて召しを全うするだけの能力と資格が備わって行く。

アロン神権は天使の導きと恵み，悔い改めの福音，罪の赦しを受けるために水に沈めるバプテスマの鍵を握っている。これはみな大きな祝福であり，主の家でさらに大きな祝福を受けるための準備として欠かすことができない。人はこれらの祝福を受けて昇栄するのである。

神権の祝福が男性だけに限られていないことは，だれもが知っていると思う。神権の祝福は，妻や娘や教会のすべての忠実な女性たちに注がれる。それらの立派な姉妹たちは戒めを守り，教会で奉仕の業に励むことによって，主の家の祝福を受ける準備ができる。主は娘たちにも，息子たちが受ける霊的な賜や祝福をすべてお与えになる。なぜならば，主にあって女なしに男はないし，男なしに女はないからである。

天の祝福が聖なる神権を持つ者たちと，あらゆる天父の子供たちの上に注がれんことを。兄弟たち，あなたがたは全能の神の力と権威を持っており，自分と愛する人々を救い，昇栄させる力を手中に握っているのである。

この世の中に，神の王国につけることを生活の第一に置いて，戒めを守り，神権の召しを全力を尽くして遂行し，主の家に行って御父の王国の完全な祝福を授かることほど，私たちにとって大切なものはない。

さて，神権を持つ兄弟たちよ，私は義の業に対するあなたがたの信仰と働きを称賛する。主のみ業と，神権を用いて世の人を祝福することに懸ける熱意と献身を称賛する。

あなたがたの立派な奉仕は，その業の主である神がよく御存じである。神はこれまであなたを恵みたもうた。これからも地の良きものをあなたに恵み，さらには永遠の富をも用意しておられる。

あなたがたが物的にも霊的にも祝福されて栄えるよう，信仰と証を強めて，心に正しい望みを抱くようにと祈る。

愛と平和の精神があなたがたの家庭にあり，父と息子が神権を持ちつつ愛で結ばれて共に働き，すべての末日聖徒の中に完全な一致の精神が行きわたるようにと祈る

御父が人生の準備期にあるアロン神権者の兄弟たちを助け，困難や誘惑に遭ったときには彼らを守り，とりわけ彼らが，そして私たちのすべてが，戒めを守って聖霊の友としてふさわしいようにと，祈る。

そして，私たちすべてがこの試しの世にある間に，主のみ業に働く平安と喜びと満足を得て，やがて次の世に永遠の生命を受け継ぐようにと，イエス・キリストのみ名によって祈るものである。アーメン。

平和の鍵

十二使徒評議員会会員

マリオン・G・ロムニー



昨年の秋，3つの伝道部をまわって400人ほどの宣教師と面接をすませた終わり頃に，私はある宣教師から肝の縮む思いをさせられた。彼は，何か言いたいことや聞きたいことはないですかという私の質問に答えて，「教会幹部との面接は素晴らしいことなんですか」と聞いてきた。

私は時間かせぎに，「どういうことですか」と聞き返した。

彼はそれにこう返事した。「大抵の宣教師は教会幹部の面接を楽しみに待っていて，面接の後もいつまでもそのときの話をします。でも私はそんなに大したことだと思わないんです。」やっと立ち直った私はこう返事した。「答えはあなたがわかるでしょう。ふたりの人が並んで大会に出席して，帰ってからひとりが『あんなに素晴らしい大会は初めてだった。感激した』と言うと思えば，もうひとりが『大して良くはなかった。代わり映えのしない話だった』と言うのは，どうしてでしょうか。」

けさ，5時頃起きると，この言葉が心に浮かんできた。

「さて，私ニーファイは私の民の中に教えられたことをみなここに書き記すことはむつかしく，また書く時には話す時ほどの力がない。それは，人が聖霊の力で語るときには，聖霊がその話を人の心の中に浸みこませるからである。」（IIニーファイ33：1）

きょうの私の話に，難しいところは全くない。単純明快である。たいがいの人がよく知っていることである。話の題は，「平安を得る方法」。その大切さは筆頭級である。しかし，私が聖霊の力をもって語り，皆さんが聖霊の力によって聞くのでなければ，それも代わり映えのしないただの話になるであろう。私は，共にそのみたまと力が受けられるように，断食をして祈ってきた。ここで私と一緒に，心で祈っていただきたい。天父なる神よ，私たちが聖霊の力によって，語り，聞くように，イエス・キリストのみ名により，お祈り致します。アーメン。

私は改宗して間もない人の手紙から引用して，話を始めたいと思う。

彼女はこのように書いている。「私はほとんどの教会を見てきましたが，どこに行っても空しい気持を感じるだけでした。でも，それでも宗教は何かしら大切なのだという気持はしていました。……何年も答えを探し続けましたが，そのあと教会へ行くのをやめて，3年間はどの教会にも全然行きませんでした。でもお祈りはしましたし，そのわからない何かを求める気持はずっとありました。

そのような状態のある木曜日のお昼時にドアをノックする音がして，ふたりの感じのよい青年が立っていました。『末日聖徒イエス・キリスト教会』の宣教師で，大切なお話をしたいということでした。……私は2度目の訪問があったときに，これが一生をかけて探していたものだとわかりました。……」

彼女は続けてこう書いている。「一番印象的だったのは，私たちの神様は生きている神様だという初めて聞いた素晴らしい教えでした。そのとき初めて，神様がどんなお方かを知りました。ジョセフ・スミスが神様にお会いして，神様は私たちと同じような骨肉を持っておいででした。以前は神様はあらゆる場所を漂う霊のようなものだと思っていたので，それは私にとって素晴らしいことでした。以前の概念では，神様は捕らえどころのないお方でした。けれども今，神様は私にとって現実のお方になり，もう『あるもの』ではなく『あるお方』でした。それが，いろいろと迷い悩んだことに対する答えでした。」（*Millennial Star*「ミレニ

アルスター」1960年6月号)

まことの生ける神を新たに知ったこの謙遜な女性は，心の正しい人ならだれもが求めるもの，つまり平安の鍵，すなわち心と魂の平安，人と国家には平和と善意をもたらすその鍵を見付けたのである。

教会に改宗する人々の体験は，そのような知識が個々の人に平安をもたらすことを示している。大勢の人が心に平安を持てば，当然の成り行きとして民や国に平和が来る。

まことの生ける神を知る知識が人に平安の進を歩ませることを，ヨセフは「ユダヤ古代誌」の中で印象的に語っている。その箇所を引用してみたいと思う。

「モーセが重要視していたことがある。それは，自分の生活をうまく治め，律法を定める者は，まず第一に神の性質を慮り(おもんぱか)……そして……それに従おうと努めなければならないということである。(モーセ）自身もそのような考えを持っていなかったら，正しい心が持てず，書き物も読み手に善を志向させることがなかったことであろう。……何よりもまず，神が万物の父であり，主であること，このため神に従う人々に幸福な人生を恵みたもうこと，しかし善の道を歩まぬ者は悲劇を避け得ないことを人々に教えなければならなかった。さて，モーセがこの教えを同族の民に教えたいと思ったとき，(ヨセフスはさらにこう続けている）彼は律法の確立をほかの立法者がとるような方法では始めなかった。つまり，当時者間の契約や儀式典礼という方法ではなく，民の心を神と神がなさった世界の創造に向けさせて，私たち人類は地上の神の被造物中最も優れたものだと説くことをしたのだった。彼がいったん民を宗教に従わせることができると，他のすべてのことに従わせるのは容易だった。……（ヨセフスはこう結論している）モーセは，神が完全な徳を備えておられることを立証するがはやいか，人間も（そのような徳を）努力追求するべきだと考えた。」(*The Works of Josephus*「ヨセフス著作集」pp. 38—39)

人はまことの生ける神を正しく理解して信仰を持ったときに，徳を身につけようと努力する。神は彼らの希望の星となり，神にならうことが最高の願望となる。「天の父が完全であられるように，……完全な者と」(マタイ5：48）なろうと努めるとき，彼らは実際に神の性質にあずかる者となる。そのようにして，人々は信仰と知識と，節制，忍耐，信心，兄弟の親切，愛，慈愛など，まことの生ける神において完成されている諸諸の徳を自分に増し加えてゆくのである。これらの徳は，利己心，我欲，肉欲，憎悪，争い，闘いを心から追い出す。そして幸福と充足と喜び，平安が自然にわいてくる。

現代に平安を得るための普遍と言ってもよい道筋は，「神に立ち返ること」である。「神に立ち返って平安を得よう」という叫び声は，全世界の心正しい人々からあがっている。私たちから平和が失われているのは，平安を呼び戻す法を知らないからではなく，立ち返るべき神を知らないためである。

偽れる神に頼っても平安はない。神話の神々，異教の神々，手で彫った像，この世の知恵などに帰依しても利己心や我欲，肉欲が増し，論争と葛藤と争いが深まるばかりである。平安を得るために人のしなければならないことは，まことの生ける神を，先程の改宗したばかりの女性が見つけたその神を，見いだして神にならうことである。

神を発見し，神に従うことは，過去のどの時代もそうであったが，この時代にも一番必要なことである。

神を知る知識は，死のかなたの世界で永遠の生命を得る鍵であると同時に地上の人心と国に平和をもたらす鍵でもある。神を知る知識は非常に大切なので，神は過去の歴史を通じて折につけ，御自身を明らかにして来られた。従って，人は神について無知を押し通していてはよしとされない。

創世記の第1章で，モーセは明快な言葉で神の姿，性質をはっきり述べている。

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち，神のかたちに創造し，男と女とに創造された。」(創世1：27)

信仰ある人ならば，まがうかたないこの言葉を理解できるはずである。モーセは推測で神と人を同じ姿にしたのではない。自分で知って，語ったのである。モーセは全能の神の力によって「いと高き山の中に捉えられて行き」，そこで「神と顔を合せて相見，神と相語り……」，「神，モーセに語りて言いたまえり。見よ，われは全能の主なる神にして……」「見よ，汝はわが子なり。……」，「わが子モーセよ，われ汝に為さしむる一つの業あり。而して汝はわが生みたる独子の生写しなり。わが生みたる独子は今も将来も救い主とならん。……」(モーセ1：2—6)

永遠の父なる神と神のひとり子と，人間が御二方と似た姿で，どういう関係にあるのかを告げる明瞭なこの知識は，モーセがイスラエルをエジプトから導き出したときに与えられた。イスラエルの民が奴隷になっていた間に神についての知識が曲げられてしまったため，当時その啓示が必要だったのである。

しかし，そのような啓示はこれが最初ではなかった。創世の時代にアダムが園を追われてから祈りを捧げ

たときに，その答えとして，「エデンの園を指して行く途のかなたより声聞えて」，犠牲を捧げよと命じられた。アダムがその通りにすると，ひとりの天使が来て教えを説いた。「その日，……聖霊アダムに下りて」，御父と御子の証をした。(モーセ５：９参照)

アダムは，モーセがまことの生ける神について教えられたのと同じく，はっきりと具体的に教えを受けた。主はアダムに，「……汝はわれにありてひとつなり。神の子の一人なり」(モーセ６：68) と言われた。

アダムとイブはこれらのことをみな子孫に伝えた。しかし「サタン彼らの中に来りて言いけるは……アダムとイブの言を信ずるなかれ，と。されば，彼ら……サタンを神よりも愛でたり。……」(モーセ５：13)

神がご自身を啓示されたのは，モーセが初めてではなかったし，モーセで終わりでもなかった。時の絶頂に，神の霊の長子，イエス・キリストが，肉による神のひとり子として地上に降臨された。目的のひとつは，ご自身と御父を明らかにすることであった。イエスはそれをごくはっきりとした方法で行なわれた。パウロはそのことを理解して，イエスは「神の本質の真の姿」であると述べている。(ヘブル１：３)

イエスはエルサルムに凱旋されたときに，「人の子とはだれのことですか」と聞く人々に向かってこう言われた。「わたしを信じる者は，わたしを信じるのではなく，わたしをつかわされたかたを信じるのであり，また，わたしを見る者は，わたしをつかわされたかたを見るのである。」(ヨハネ12：34，44—45)

またあの２階家で，「わたしたちに父を示して下さい」と願ったピリポに答えて，「イエスは彼に言われた，『…わたしを見た者は，父を見たのである。……』(ヨハネ14：８—９)

これらの教えは簡明で，使徒時代の教会の人々は，イエスがアダムやモーセに御自身を啓示されたまことの生ける神と生き写しであることを信じていた。

しかし，時の絶頂の時代の民は現代の民やアダムやモーセの時代の民と少々違っていた。彼らは神よりもサタンを愛し，サタンが民の中に来て，異教の教えや詭弁を操っては「神を信じるな」と教えると，神を信じないようになった。紀元325年にはまことの生ける神を知っていた使徒の教会が没落して混乱に陥っていたことが，ニケア信経からも明白である。人類は19世紀までその深い暗黒の中にあった。

人はまことの生ける神を知り，神に信仰を持ってこそ，主を求め主の義を打ち建てようとする気持に駆られるのである。この知識と信仰がないと人に災いが下ることを知っておられる神はその無限の慈悲により，再び御自身を明らかにされた。

そして，過去にアダムやモーセやイエスなどを召して啓示されたように，この最後の神権時代にはジョセフ・スミスを選ばれた。神がジョセフをみ手に取られたとき，彼は世に対してまったく無名の若者であった。しかし神にとって，ジョセフは見知らぬ者ではなかった。彼は天において主から選ばれ，末日の回復の力ある予言者として予任されていた。

その青年予言者が1820年の早春にあの聖なる森から出て来たとき，彼にはまことの生ける神に対する確かな知識があった。彼は御父と愛する御子イエス・キリストにまみえ，言葉を交わしたからである。

ジョセフは天上のお二方が触知できるという点では人と同じ骨肉の体を持っておられ，神は本当に人間をご自分の姿に似せて造られたのだということを，アダムやモーセと同じ確信をもって知った。

その24年後，ジョセフ・スミスはまことの生ける神に対する自分の証を血で結び固めて殉教した。

この短い生涯の間に，神の神権を天から受けた彼は天よりの指示の下に，末日聖徒イエス・キリスト教会を設立した。そして教会は，全世界の生きとし生けるすべてのものにまことの生ける神を宣べ伝えよという神聖な命令を再び受けた。(教義と聖約68：８，112：28参照) これこそが末日聖徒イエス・キリスト教会の使命であり，教会は全力を傾けてそれを行なうのである。

そして今，教会内外の愛する兄弟姉妹の皆さん，私の声を聞いているすべての人に，私はまことの生ける神を証する責任と栄誉を持つ者として，神が御自身を示されたそれらの啓示，これまで私の述べてきたことが真実であると証する。また，神を受け入れて神の義を確立しようと努めるすべての人には，冒頭の改宗者が語っていたあの平安がやってくること，そして多くの民が神を知るようになれば，その知識と信仰が心に変化を生み，自分ばかりかこの騒然とした世の中にも平安をもたらすことを証する。なぜならば，個々の人間にとっても国家にとっても，平和の鍵はまことの生ける神に対する知識と信仰だからである。そうして得られる平安を避けていると，論争と争いが増して，やがては予言者たちの言う破滅に至るだけである。私たちがまことの生ける神を尋ね，見いだして，平安を選び取るよう，神が恵みたまわんことを。イエス・キリストのみ名により，へりくだって祈る次第である。アーメン。



揺るがぬ信仰

十二使徒評議員会会員

デルバート・L・ステイプレー

愛する兄弟姉妹，友人たち，ただ今話された愛するダン兄弟から私の話の題を御紹介いただきうれしく思う。使徒ヤコブの書簡にある聖句が，私の説教のテーマである。

「あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に，願い求めるがよい。そうすれば，与えられるであろう。ただ，疑わないで，信仰をもって願い求めなさい。疑う人は，風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。そういう人は，主から何かをいただけるもののように思うべきではない。そんな人間は，二心の者であって，そのすべての行動に安定がない。」（ヤコブ1：5－8）

近代の予言者ジョセフ・スミスは少年のときに，当時の信仰復興運動者たちが説く種々の教えに家族が影響されるのを見て，自分の信仰を考えさせられた。

そしてこの聖句の約束を読んで，「神に願い求め」ようと祈った。その彼の熱心な祈りを契機として，神のみこころにかなうこの最後の神権時代にキリストの教会が回復されたのである。しかし，この聖句は特別な人だけにあてはまるものではない。神は人をかたより見ない御方である。（使徒10：34参照）この約束は，光と真理を熱心に求めるすべての人に与えられている。

デビッド・O・マッケイ大管長はこのように語っている。

「信仰は行為に示されている。そこに知恵がある。知識を日常生活に生かすこと，良い行ないをすること……知恵は偶然には得られない。努力がいる。知恵の源は神である。私があなたに人間にとって最大の功績は何かと問うたなら，知識ではなく，知恵と返答してもらいたいと考えている。世の中のあらゆる知識を得たとて，知恵に欠けていたならば，均衡を持たない高性能のエンジンさながらである。」

知恵とは，ここに言われる通り，知識を正しく用いることである。

この末の時代に，神は民に知恵を求めよと告げられた。

「そは，必ずしもすべての人信仰なきが故に，汝ら努めて求め，互いに知恵ある言葉を教うべし。然り，汝ら最も善き書より智恵ある言葉を探し求めよ。また正に研究と信仰とによりて学問を求むべし。」（教義と聖約88：118）

祈りと揺るぎない信仰によらないで，奥深い知恵がどうして得られようか。いつまでも信仰を反省，評価，疑問視することが必要だと考えているなら，果たしてその人は本物の信仰を持っていると言えるだろうか。自分の信仰は堅固で揺るがぬ信仰だろうか。神の律法をあれこれ取捨せずに守っているだろうか。揺るがぬ信仰を持つことは，個々の原則を日常生活に応用することである。例をあげて説明してみよう。

何かを決意した人，例えばタバコをやめようと決意した人がいるとする。周りの人はタバコを吸っているので，やめようとする強い意志が必要である。彼は断固たる決心をもって禁煙を実行する。

あとで誘惑のことを考えたりするが，一線を画して誘惑には負けない。自分の決心を守ることで満足が得られ，もはやそれは問題ではなくなる。原則があって，彼はそれを認め，その原則に従うことができるのである。

そしてついには確心を持って，「原則？何が原則なのだろう」と言うようになる。もう自分を振り返る必要はなく，それが彼の生き方そのものになるのである。

揺るがぬ信仰を持った人は聖典に大勢出てくる。ひとり息子のイサクを主に犠牲として捧げよと神から命じられたアブラハムも，そのひとりである。アブラハムは用意をし，イ

サクをモリヤの地に連れて行って，山に祭壇を築き，イサクを捧げようとしたが，そのときに天使が言った。

「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子，あなたのひとり子をさえ，わたしのために惜しまないので，あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った。」(創世22：12)

別の例は予言者ノアである。彼は，主が人間を造ったことを「悔いる」ほどに邪悪がはびこった時代の人である。聖書には，「しかし，ノアは主の前に恵みを得た」(創世6：8) と書いてある。

ノアは破滅の道を歩む民に警告してもかえってあざけられ，ののしられるのをものともせず，神の勧めに忠実に従ったため，家族と共に神の庇護を受けて洪水から救われた。

使徒ペテロは，水の上を歩いて来なさいと主から言われたときに，信仰がぐらついた。

「しかし，風を見て恐ろしくなり，そしておぼれかけたので，彼は叫んで，『主よ，お助けください』と言った。イエスはすぐに手を伸ばし，彼をつかまえて言われた，『信仰の薄い者よ，なぜ疑ったのか』。」(マタイ14：30—31)

明るい部屋には闇が入り込めないように，真実の信仰がある心には疑いは生まれない。

揺れ動く心と，風に吹かれて荒れる海を引き比べた主の言葉は，多くの人の生活に影響を与えてきた。たいていの人は凪いでいる海を見たことがあろうし，また，強風や高波が恐ろしい力となって破壊する様を見たことがあろう。サタンの攻撃もそれに比べられる。私たちが平安で主の側にいるときにはサタンの力が感じられないが，偽りの教えや人の哲学や詭弁の風にもてあそばれるときには，不信仰の海に浸かったり，果てはおぼれてしまったりして，主のみたまが完全に自分の生活から離れて行くことがある。そのように自分を治められず，惑い，揺れ動く心の人は，主からの恵みを受けることができない。

知りつつ神の戒めを破って罪を犯した人は，真心から悔い改めて罪を捨て，神のみ旨に沿った生活をして，身と霊を清められ，罪が赦されたという気持を感じるまで，サタンに打ち叩かれる。そうして信仰を新たにした人々は，罪の中にあった時期は人生でも一番惨めな時期だったと証している。過ちの償いを経験した彼らは，これからは正しい道をまっすぐに歩もうと，揺るがぬ信仰を持つに至っている。

現代の時流は福音の教えから遠く離れている。この傾向が続く限り，行く手は破滅である。神は欺かれないからである。神の裁きは必ず悪人に下る。神は古代，近代の予言者たちを通じてそのように宣言しておられる。

動揺と挫折と増大する悪の力が福音の原則や標準を脅かしている世の中にあって，両親，教師，指導者たちには，現代の若者を待ち受ける様様な問題と堂々とわたり合う知恵と分別が必要である。

揺るがぬ信仰は人生の早いうちから培うべきである。ソロモンもそれを勧告している。「子をその行くべき道に従って教えよ，そうすれば年老いても，それを離れることがない。」(箴言22：6)

予言者ジョセフ・スミスはこのような信仰を年少の頃から養われていた。彼は，堅い信仰を持って正直に真心から，真理を知って神のみもとへ行く正しい道を見つけたいと思ったならば，主は必ず約束をかなえて下さると，心底から信じていた。

実に大勢の若者たちが，学校やその他の場所で，キリストの福音の教えと一致しない考え方を教わっている。あれを試し，これを試しして，自分で物事を知るように勧められているが，この逸脱した方法は不品行と無軌道な欲を許すものである。主はこう言われた。「……熱心にわれを求めよ。さらば，汝らわれを見出さん。求めよ，さらば与えられ，叩けよ，さらば開かるることを得ん。」(教義と聖約88：63)

これは，サタンに影響を受けた人人の気まぐれに付き合って有害なものを試してみたり不道徳な行為をしてみたりするということは違う。

信仰をぐらつかせている人は悪魔の手先が操る教えに逐一聞き従って，道を離れて行く。彼らはみたまを失い，心の闇に迷い込み，ついには義と真理に対する背教者となり果てることさえある。私たちは皆，パウロのこの勧告に従おうと努力しなければならない。「……わたしたちの告白する望みを，動くことなくしっかりと持ち続け」ようではないか。(ヘブル10：23)

私たちの責任は，心を正しく整え，不正を断ち，よこしまな思いをぬぐい清めて，悲惨な破滅に導こうとする謀略者の攻妙な誘いの言葉やむなしい幻惑にだまされないことである。

人は神の助けを必要としないほど，賢く，また虚栄心が強く自己本位なものだろうか。この世の知恵は神の前では愚かなものである。(Ⅰコリント3：19参照) それでも，尊大な心とうぬぼれを捨てきれない人々は，神の助けなしで人生を立派にやって行けると考える。人間は正しい道を神に導かれなければ，自分では何もできないことを，肝に銘じなければならない。神権はそのためにある。

人は様々な学問の分野での成長，発展，業績を見ると心にうぬぼれが生じ，えてしてそれらの理解への到達を可能にしてくれた知識の大本を忘れるものである。人類は神を忘れて生き長らえることはできない。神

を忘れることは神を捨てることであり，神を捨てた不義の民には神の裁きが下る。

若者でも年寄りでもだれにとっても，正しいことが何であり，歩むべき道がどれであるかを判断するただひとつの方法は，「とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に，願い求める」ことである。

信仰と祈りにより，へりくだって熱心に知恵と導きを求める人を，神はとがめられない。それを喜ばれる。私たちの天の父である神は私たちが願い求めて耳を傾けさえするなら，いつでも助けたいと思っておられる。しかし願うときには，心と態度が答えを得られるように正しくなければならない。神を信じる信仰は心に平安を，そして神は慰めと導きを願う祈りによってみもとへ行くことのできる自分の永遠の御父なのだという確信を与えてくれる。

テーマの聖句の最後の節は，揺れ動く人の様子を語っている。「そんな人間は，二心の者であって，そのすべての行動に安定がない。」（ヤコブ１：８）二心の安定がない人にならないように，主は取るべき道を示しておられる。

主はこう言われた。「だれも，ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し，あるいは，一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは，神と富とに兼ね仕えることはできない。」（マタイ６：24）

知恵に欠ける私たちが，ひたすら神の栄光を仰ぎ見て揺るがぬ信仰を持ちながら願い求めるならば，全身が光明に満たされてすべての事を理解するであろう。（教義と聖約88：67参照）この域に到達しないものはみな色あせて無意味になる。

神は私たちにひとりで悪の力と対決させておられるのではない。サタンの策略から逃れる道を定めておられる。

私たちは皆，救い主の犠牲による永遠の父との仲保を求め，救いと昇栄と栄光を得るために救い主の助けを求めているのではないだろうか。

救い主は言われた。「わたしは道であり，真理であり，命である。だれでもわたしによらないでは，父のみもとに行くことはできない。」（ヨハネ14：６）

私は，神の王国に行くにはこの道しかないことを証する。救い主がこう言っておられるからである。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば，これらのものは，すべて添えて与えられるであろう。」（マタイ６：33）

使徒ペテロは賢明な勧告をしている。

「だから，あなたがたは，神の力強い御手の下に，自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう。

身を慎み，目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が，ほえたけるししのように，食いつくすべきものを求めて歩き回っている。……信仰にかたく立って，抵抗しなさい。……」（Ｉペテロ５：６，８—９）

キリストの福音に従うことこそ，騒然たる罪深い世の中のたったひとつの安全な道である。世の中には，正しいものなど何もないと考える揺れ動く群衆がいる。そして一方，契約の箱をしっかり支えようとするたくさんの声も聞こえる。

予言者ジョセフ・スミスと兄のハイラムは，末日の神のみ業が真実であることの証を自らの血で結び固めたが，この行為は使徒パウロがヘブルの聖徒たちに書き送った言葉を成就するものである。

「いったい，遺言には，遺言者の死の証明が必要である。遺言は死によってのみその効力を生じ，遺言者が生きている間は，効力がない。」（ヘブル９：16—17）

私は今お聞きの皆様で，神のみこころを知りたいと真実正直に願っている人々にへりくだってお勧めする。御子イエス・キリストの福音の計画を勉強されるように。それについて祈り，ヤコブのあの約束を試していただきたい。神は必ずや答えを与えて下さると，はっきり申し上げる。みたまによる温かい気持が胸を満たし，平安と満足が心に広がるであろう。

使徒ヤコブの言葉をもう一度繰り返したい。

「あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に，願い求めるがよい。そうすれば，与えられるであろう。ただ，疑わないで，信仰をもって願い求めなさい。疑う人は，風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。そういう人は，主から何かをいただけるもののように思うべきではない。そんな人間は，二心の者であって，そのすべての行動に安定がない。」（ヤコブ１：５—８）

兄弟姉妹，私たちが常に戒めに従順に歩み，寄せられている信頼にこたえるように，私は心から祈っている。私は末日聖徒イエス・キリスト教会が真実であると知っている。この福音は真実である。福音は救いを得させる神の力である。現在私たちは神によって導かれている。

教会はあらゆる年令，あらゆる国籍の正直で誠実な神の子供たちがキリストのもとに来て，キリストの王国に入る用意をするように招いている。私たちのすべてがその望みを持つように，イエス・キリストのみ名によって謹んで祈るものである。アーメン。

真理の誕生

十二使徒評議員会会員

ヒュー・B・ブラウン



兄弟姉妹，私は再び我家に帰ることができてうれしい。地球一周の旅行をして他国の民や文化に対する理解を深めることもしばしばだったが，その旅を終えて，私は愛する祖国アメリカとその自由や機会を感謝する気持が一層強くなった。

また，どの国，どの文化の民も真理に飢え渇き，新たな真理に対して心を開いているという印象を受けた。至る所で心ある人々が光を求めている。事実，世界中が真理を尋ね求めている。

宗教界，科学界双方の指導者がこの探究の復活と，発見される場所を問わず真理に対して広量な姿勢を持つことを求めている。

良き人生とは，信仰と知識を基盤とした真の霊性を追求する人生であり，真理に自らを捧げる人生である。

信仰はあらゆる宗教の土台である。盲目の信仰は何の役にも立たない。真理に対するあくなき探求の上に築かれた信仰のみが，学究の徒の名に値する。私たちは不合理への誘いをすべて拒み，事実を歪曲あるいは無視する傾向をすべて克服し，極端な狂信を排し，何にもまして真理を求めるべきである。これこそ，私たちの宗教，すなわち神の栄光を英知と説き，人は知識を得ずして救われないと主張する宗教の堅い土台である。

ちょうど科学の真理が理論と事実に基く研究によって試され，証明されなければならないように，世界が予言者に求めている精神的，霊的な真理は，人がそれを試して立証し，確認しなければならない。あらゆる人は真理を研究するときに，自分自身に誠実でなければならない。自分の理性と良心に答えなければならない。答えられないものは人間として，神の子供としての尊厳を傷つけることになる。まことの尊厳は人と争って勝ち取るのではなく，名声が落ちたといって失われるものでもない。ことに信仰によって未知の領域に踏み込んでゆく霊的，宗教的な探求においては，真理は不信仰の試練に打ち勝ち，迫害と反対と排斥と憎悪の炎に耐えなければならない。地に押しつぶされた真理は，もう一度立ち上がるであろう。

オリバー・ウェンデル・ホームズを促して「新生の真理を生かし置くための闘い」(*The Battle for Survival of Newborn Truth*) という啓発的なエッセイを書かせたのは，恐らく，真理は永続するというこの思いであったに違いない。それはこういうエッセイである。

「時が誕生の苦しみにもだえるとき
一時一時があえぐ真理を生み出す
そこで生まれた真理は未熟で不細工に見える
家中の恐れと恥と言われ
乳母のひざにとぐろを巻く怪物と言われる
ある者はその首を絞め，あるものは餓死させようとする
だが怪物は呼吸を続けて手から手にわたり
百人のはだけた胸から乳を吸い
おもむろに姿，形を見せてくる
怪獣のごつごつした背中が平らにしずまり
蛇のような髪は輝く巻き毛に変わり
天使の装いに変貌してゆく
誕生の時をのろった人が口々に喜んで迎え
蛇を投げ捨てるように放り出したその同じ腕が，手を広げて抱きしめる」

ここで新しく啓示された真理について少し話をしよう。この詩人が語ったようにしか受けとめられなかった真理，つまり人々から「未熟で不細工」だと思われていた真理。それが姿，形を現わして，天使の装いに

も変貌しようというのである。

ほろ苦さを残す過去の歴史は，私たちが今宣言する大きな出来事の必要欠くべからざる先駆者であったようである。キリストの十字架の死以後,時の絶頂を過ぎて昼は終わり，霊のたそがれが続き，日没があり，そして暗闇の幾世紀が経ってのち夜明けのきざしが現われる。夜は明け，陰は消え去った。

主は，末日に生きとし生ける者の上にみたまを注ぐという約束を，何と見事に果されたことか。

私たちの生きているこの時代は，何と素晴らしい時代であることか。この150年間に，何と目覚ましい進歩があったことか。

伝達・交通機関だけをとっても，もし先祖が私たちのところへやってきたなら，まるで神わざと言われるほどの進歩である。ラジオ，テレビ，科学の目覚ましい発展，電気その他の力を利用して，先祖の時代には怖れられあがめられていた自然の力を従わせている有様に，彼らは唖然とするであろう。

しかしそれらの業績や偉業を誇るためのものとしないように，私たちはそれがどう用いられているかを考え，文明の所産によって私たちのこの世界に何が起きているかを心に留めるべきである。飢えと欠乏，悲惨と災いが世界に広がっており，これらの業績や偉業を生み出した文明そのものを脅かしている。神の偉大な計画には，難波船の乗組員のために，古い建物を壊して，来る人のために居場所を作る作業も含まれているようである。しかし，それだからといって責任のある人々を安穏とさせておいてはならない。主は「罪の誘惑が来ることは避けられない。しかし，それをきたらせる者は，わざわいである」（ルカ17：1）と言っておられるからである。

しかし物質がもてはやされ，霊的なものが忘れられているように見える現状から考えて，この人間の心と行動を扱う分野だけに大きな進歩を期待していてよいのだろうか。あるいは，心の進歩や霊の啓発といった点で，新たな真理や神よりの啓示を発見することが期待できるだろうか。主が，肉なるすべてのものに主のみたまを注ぐと言われたときには，物質にかかわって働く人たちだけに霊感を制限するつもりではなかったと思う。霊の領域にも新しいものが必要だからである。

御存じであろうが，ペテロとヨハネがエルサレムの神殿に詣(もう)でて美しの門にやってきたとき，そこに座っていた足のきかない男が彼らに施しを乞うた。するとペテロが彼に向かって言った。「金銀はわたしには無い。しかし，わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい。」（使徒３：６）

聖書には，彼がいやされて躍り上がり，自由になったのを喜んで叫びまわったと書かれている。それを見た群衆が驚き，不思議に思って集まってくると，ペテロは彼らに，このことは自分の力や信心によったのではなく，イエス・キリストのみ名によって行なわれたと言い，群衆に向かってさらにこう述べた。

「だから，自分の罪をぬぐい去っていただくために，悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは，主のみ前から慰めの時がきて，あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを，神がつかわして下さるためである。このイエスは，神が聖なる預言者たちの口をとおして，昔から預言しておられた万物更新の時まで，天にとどめておかれねばならなかった。」（使徒３：19－21）

使徒パウロは，時満ちたる神権時代に，天上のものも地上のものも一切を，キリストにあってひとつに集めると語った。

これも御存じであろう。ベタニヤ近郊で11人の弟子たちがイエスとまみえたとき，イエスが雲に包まれて天に上げられ，白い衣のふたりの天使が集まっている人々のわきに立ってこう告げた。「ガリラヤの人たちよ，なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは，天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で，またおいでになるであろう。」（使徒１：11）

ここでもう一度，ヨハネがパトモス島に追放されていた時に見た示現の素晴らしい予言の言葉をみてみよう。「ところが，わたしは，主の日に御霊に感じた。そして，わたしのうしろの方で，ラッパのような大きな声がするのを聞いた。その声はこう言った，『あなたが見ていることを書きものにして，それを……（アジアの）七つの教会に送りなさい』。そこでわたしは，わたしに呼びかけたその声を見ようとしてふりむいた。ふりむくと，七つの金の燭台が目についた。それらの燭台の間に，足までたれた上着を着，胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。そのかしらと髪の毛とは，雪のように白い羊毛に似て真白であり，目は燃える炎のようであった。その足は，炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり，声は大水のとどろきのようであった。その右手に七つの星を持ち，口からは，鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており，顔は，強く照り輝く太陽のようであった。わたしは彼を見たとき，その足もとに倒れて死人のようになった。すると，彼は右手をわたしの上において言った，『恐れるな。わたしは初めであり，終りであり，また，生きている者である。わたしは死んだことはあるが，

見よ，世々限りなく生きている者である。……そこで，あなたの見たこと，現在のこと，今後起ろうとすることを，書きとめなさい。』(黙示1：10－19)

このように，神の御子は使徒ヨハネに語られた。

1820年の春，ちょうど150年前の春のある朝の出来事について，この大会でも話があったが，私たちの父なる神が人間に御自身を現わされた。御父が独り子を伴い天上から自ら降られ共にひとりの青年と私たちすべてに語られたが，そのメッセージと出来事がいかに大切かについては，十分に承知されていた。そのとき以来，他の使いたちが訪れ，様々な啓示が与えられた。天使モロナイ，モーセ，エライヤスが，ペテロ，ヤコブ，ヨハネ，バプテスマのヨハネ，エライジャその他が来訪した。彼らは人々に語り，委任し，そして人間は再び神と交わるようになった。

さて私はこのような宣言が懐疑と不信をもって迎えられるだけでなく，敵対と怒りにも出会う現実を無視するわけではない。人々はこの真理に対して，義の敵が真理との闘いで必ず使う武器とまったく同じ武器を使っている。

ここにも，未熟で不細工と思われた真理があった。しかし私は聖書を信じるすべてのキリスト教徒に問いたい。あなたは，聖徒たちを迫害しにダマスコへ向かう途中で一筋の光を見，盲目になった彼がみ声を聞いたというタルソのサウロの言葉を疑うだろうか。サウロは「主よ，あなたは，どなたですか」と尋ねた。すると答えがあった。「わたしは，あなたが迫害しているイエスである。」(使徒9：5参照)

キリスト教徒はこの記録を信じているが，それでも彼らは神は人間に語られないと言う。聖書を信じる人人は，モーセとエライヤスが変貌の山に現われ，ペテロ，ヤコブ，ヨハネもそこにいて救い主と交わる彼らを見たと告げるこの記録を受け入れている。ここで注意して欲しいのが，モーセやエライヤスは当時をさかのぼる数百年前の人間だということであるが，それでも人々は，「そうです。聖書のその言葉は信じています。実際にあったことですが，もうそのようなことがあるはずはありません」と言う。

繰り返そう。人々はどうして，神が人に語られることを信じられないと言うのだろう。有史以来神はこの方法をとってこられたのではないだろうか。私たちに神は必要ないのか。私たちの文明，科学，そして私たちの誇る学識がもはや神を不要とさせたのだろうか。

きょうのあなたがたに対する宣言はほんの序幕に過ぎず，主は地を訪れ，共に父なる神も来られ，引き続いて私が先程触れたその他の人々も現われたが，それはすべて，来るべきことの序章に過ぎない。

復活祭の名残も消えやらぬ今，主のこの約束に耳を傾けていただきたい。「また，われ能力と大いなる栄光とを以て天の万群と共に天より現われ，人々と共に正義を以て一千年の間この世に留まり悪しき人々はこれに耐えざればなり。」(教義と聖約29：11)

そして再びマタイの言葉から，「人の子は父の栄光のうちに，御使たちを従えて来るが，その時には，実際のおこないに応じて，それぞれに報いるであろう。」(マタイ16：27)

「すなわち，主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに，合図の声で，天から下ってこられる。その時，キリストにあって死んだ人々が，まず最初によみがえり，」。(Iテサロニケ4：16)

救い主が再び来りたもうというこの宣言を，兄弟，姉妹，友人の皆さん，私はあなたがたに対してこれらの真理を人に教える権能と霊とによって，また主のみ名によって宣言する。私は自分の命があることを自分で知っているのと同じように確かに，これが真理であることを知っている。それは，キリスト誕生のときにガリラヤの丘で天使たちが羊飼いに告げたあの宣言を除いて，世界の歴史上最も栄えある希望の宣言であり約束である。

人の関心と努力のおもむく全分野で，真理の探究を続けようではないか。「戦いの太鼓がやみ，闘いの旗が議場で巻き収められ，世界がひとつとなるときが来るまで」，「平和の君」が来て王の王たる位置に着かれ，全地に1千年の平和があるときまで。

私たちが一人一人，主の来臨のとき主とまみえる用意ができるように祈る次第である。主は来りたもう。それも私たちが考えるよりずっと早く。この真理を，イエス・キリストのみ名により証する。アーメン



予言者の役割

十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン

兄弟姉妹，友人の皆さん，主の安息日にここで皆さんと共に礼拝できるのは大きな特権である。

今開催されている末日聖徒イエス・キリスト教会の大会は，ここ19年中最も異例の大会である。

教会の過去140年で最大の発展期を画した愛するデビッド・O・マッケイ大管長の輝かしい管理時代は今や終わった。

そしてまた今，キリストの業に長年献身して愛と尊敬を集めるジョセフ・フィールディング・スミス大管長の時代が幕を明けた。彼は明日行なわれる教会員の挙手によって，教会の第10代大管長として公式に支持されるであろう。

末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長は，単なる長にとどまるものではない。私たちにとって，大管長はモーセやイザヤやエゼキエルが召されたと同じ意味で，神の予言者に選ばれた人である。その古代の予言者たちは啓示を受ける者であった。彼らはそのときどきに啓示を受け，時に合った神の導きを民のために受けていた。

私たちはそれと同じ意味で，教会の大管長を受け入れている。彼も啓示を受ける者である。彼を通じて現在も啓示があり，様々の人生の難問に出合う私たちの助けとなっているのである。

しかしユダヤ人でもキリスト教徒でも現代の大方の人は，私たちが大管長についてそのように言うのをおかしいと思っている。

彼らはいぶかしげに「予言者ですか」と聞く。「予言者ですか。予言者というのは何ですか。現代人が予言者になれるというのですか。予言者は聖書の時代だけじゃありませんか。」

実に良い質問である。尋ねるにも，答えるにも。

一番良い説明は，聖書が予言者についてどう言っているかを見てみることである。そのような神のしもべは，古代にあっても重要な人物であった。実際に，主の民に対する主の全計画は彼らを中心に動いていた。予言者のひとりがこう語るように，それは人々の間で定着していた。「まことに主なる神はそのしもべである予言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない。」（アモス3：7）

旧約聖書でも新約聖書でも，聖書のどの箇所もこの重要な事実を示している。

神は御自身のものと認められた民を地上にお持ちであった時代にはいつでも民のために絶えることなく導きを施されたが，その導きが生ける予言者たちを通じて与えられた神よりの啓示であった。

その啓示は編纂され，その時代の歴史と一緒に聖典となった。そうして私たちの手もとにあるのが聖書である。聖典の厚みは新しい予言者が出るたびに増していった。そのようにしてもモーセやヨシュア，サムエル，イザヤ，エゼキエル，マラキ，その他の書が集まり，旧約聖書となったわけである。

新約聖書の時代もそれと同じである。

このときもマタイ，マルコ，ルカ，ヨハネ，使徒行伝，数々の書簡とヨハネ黙示録などの聖なる書き物があって，ちょうど旧約聖書の時代のようにみな主の方式に従ってできていた。

ところで，これが実際にキリスト教会の特徴だったのであろうか。旧約聖書の予言者たちがいたように，キリスト教の予言者たちがいたというのは本当だろうか。

使徒パウロは，イエスが御自身の教会にキリスト教の使徒やキリスト

教の予言者たちを置いて，教会員やみ業を導くようにされたと教えている。

では現在，キリスト教の予言者たちはどこにいるのだろうか。神は方法を変えられたのだろうか。全能者が変わられたのだろうか。それとも神はきのうもきょうも永遠に同じにおられるのだろうか。またもし神が変わっておられないとするなら，方法が変わったのだろうか。

主の方法が変わらないことを踏まえた上で，現代の私たちは遠い昔の人に語られた聖なる言葉を熟考して;なぜそれが現代に適用されてはならないのかを，考えてみるべきである。もしよければ次の言葉を思い出していただきたい。

「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない。」(アモス3：7)

偉大なキリスト教改革者たちは，この原則を認めていた。彼らは，古代に神が予言者を通じてその民を導かれたことを知り，自分たちに神の導きが欠けていることを認めた。

マルチン・ルターをあげれば彼は，初期キリスト教の霊的な力はまったく滅びたか失われたかし，救い主が興したキリスト教はもはや地上に存在しないことを述べた。

ジョン・ウェスレーは，啓示などの霊の賜は，「コンスタンチン大帝がキリスト教徒と自称したあの決定的な時期」以来なくなったと教えた。

ロジャー・ウィリアムズも同じように赤裸々に語っている。

「教会の儀式を執行する資格ある人物は地上にいない。教会の大いなる頭から私の待ち望んでいる新しい使徒たちが遣わされてくるまでは，これからもそのような人物は存在し得ない。」

トーマス・ジェファーソンはいわゆる聖職者ではないが，立派なキリスト教の徒であった。その彼も本来の福音が失われたことを認め，「原始キリスト教の回復の望み」を待ちかねていることを語った。

ほかにも聖典を注意して学ぶ大勢の人が，同じ結論に達している。彼らも，古代キリスト教にはひんぱんに見られた啓示や聖霊の賜の不在を感じ，そのような賜の回復を待ち望んでいるのである。

しかし彼らに，そのような回復があることを信じさせたものは，いったい何であったのか。聖典に予言されていたのだろうか。

聖書にはキリストが再び降臨されると教えられており，その出来事に先立って神から大いなる新たな啓示があり，本来の福音も回復されて現代世界にくまなく宣べ伝えられると言われている。

神よりの新たな啓示には天使の来訪も含まれ，それは多くの現代人にとっては実に不思議なこととされると，聖書は述べている。しかし私たちにとって大切なのは人のやり方ではなく，神の道である。

ところでこの新しい啓示はだれのところに来るのだろうか。現代の予言者や啓示を信じず，現代に天使の来訪があることを否定する人々に与えられるだろうか。信じようとせず，詭弁を弄して，神の介在という原則を拒否する人々に与えられるだろうか。

昔，み言葉を受ける予言者がいなかった時代に，神は目的を成就するために新しい予言者たちを起こされた。

主がイスラエルのエジプトからの脱出を認めたもう時まで，民は400年も予言者を持たず，真理に背いていた。そこで神が彼らを聖地に連れ帰る準備をするにあたって，モーセという新しい予言者を起こすことが必要であった。当時のイスラエルの指導者の間にはふさわしい者がいなかったからである。

キリストの地上のみ業に先駆ける使徒が選ばれたとき，神はその人をサンヒドリンの中から選びはされなかった。彼らも不信仰の者で，新しい啓示を受ける資格がなかったからである。それで神は主の道を備えることのできる新しい予言者，バプテスマのヨハネを起こされた。

聖典に言われているように，新しい啓示が与えられると予言されていた私たちの時代にも，地上にはそれを受ける予言者がいなかった。だれも近代の予言者を信じなかった。そこで神はどうされただろうか。神はジョセフ・スミスという新しい予言者を起こされ，彼は大いなる新たな啓示を受けた。その間に，聖書が予言する通り聖なる天使の来訪があった。どうして天使たちがジョセフ・スミスに現われたのだろうか。もちろん彼の好奇心を満足させるためではない。その天使たちはジョセフ・スミスに神の権威を委譲し，仕える資格を与えるために来たのであった。このようにして，福音の回復が実現した。

だが，それは一世紀以上も昔のことで，ジョセフ・スミスは大いなるかなたの世界へと旅立った。彼のあとを他の人々が継いだが，これら正当の継承者はそれぞれ同じように主からこのみ業を進める予言者，聖見者，啓示を受ける者として任命された。

現在の大管長で，今大会中に正式な支持を受けるジョセフ・フィールディング・スミスは，同様に神から指命された全能の神の予言者であり，私たちはその彼を支持するものである。

主が私たちの時代にこの古くから行なわれていた方法を回復されたと

き，大管長について教会員にひとつの戒めを与えられた。「……汝ら教会員は，彼が上より受くるままに汝らに与うる誡命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き，わが前に全く聖き道を履むべきなり。そは彼の言は，汝ら全き忍耐と信仰とを以て，あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。」（教義と聖約21：4－5）

換言すれば，現代の予言者は昔のモーセのように神の代弁者となるのである。

また主はもうひとつのことを付け加えられた。予言者の言葉を疑いながら不承不承に守る者は，何の報いも受けないと言われたのである。しかし現代の予言者の教えに喜んで従う者に全能者はこう言われた。

「……彼の言は，汝ら全き忍耐と信仰とを以て，あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。これらのことを為さば，地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して，誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い，汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。」（教義と聖約21：5－6）

これが，私たち末日聖徒に予言者がいる理由である。またこれが，私たちが真心から喜んでジョセフ・フィールディング・スミスを教会の予言者，聖見者として支持する理由である。

この方法は，聖典を知っている人人には不思議に思われないはずである。それは，不変でありながら長く忘れ去られていた，聖書が記している方法の回復と継続に過ぎない。

私たちはそしてこう言うのである。「来れ　予言者よりみことば聞け喜びてうたえ　真理の道」（讃美歌83番）

ここで私たちが語ることは夢物語ではない。それは厳然たる事実である。諸天は再び開かれた。神はまたもや人と語られる。

モーセが神を見，顔と顔を合わせて語ったように，ジョセフ・スミスは神を見，顔と顔を合わせて神と語った。

イザヤが天上の光を受けて民を導いたように，デビッド・O・マッケイは天の光のもと，民を導いた。ペテロ，ヤコブ，ヨハネがキリスト教の予言者，キリスト教の使徒として初期キリスト教会の業を指導したように，ジョセフ・フィールディング・スミス，ハロルド・B・リー，ナサン・エルドン・タナーは同じくキリスト教の予言者，キリスト教の使徒として，回復されたイエス・キリスト教会の業を指導している。

これらはすべて大いなる事実である。福音は私たちの時代に回復され，今や値なしに惜しみなく全人類に提供されている。神の啓示を受け，神の導きと霊感によって歩む予言者，その神の予言者たちを媒介として。

私たちは，この大いなる福音にあずかるようすべての人にお勧めするものである。私たちはこれが神の真理であると宣言する。パウロが偽りの教えを説くことについて語ったことをよく承知した上でも，私たちはこの教えを謹んで宣言するのである。私たちの述べることは真実である。

神は再び天から語られた。神は地上に新しい予言者を起こされた。そして私たちはここで，神が選ばれた一番新しい予言者，聖見者，啓示を受ける者の前に集まっている。私たちが彼の導きに従い，挙手の手と真心をもって支持するように，切に祈る次第である。アーメン。

たかが教師

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン



私たちはよく「時代が変わった」という言葉を聞く。それはその通りであろう。現代は医学，運輸，通信，探険などの分野で長足の進歩を遂げ枚挙にいとまがない。しかし，変化の大海にもいっこうに変わらぬ孤島は存在する。たとえば少年は依然少年で，昔変わらぬ少年らしい誇りを持ち続けている。

あるとき，よく交わされると思うのだが，そんな会話を耳にはさんだ。3人の少年が，父親の自慢話をしていた。ひとりが言った。「ぼくの父さんは君の父さんより大きいぞ」。するともうひとりが，「でも，ぼくの父さんは君の父さんより頭がいいよ」と言い返した。そこで3人目の少年が，「ぼくの父さんは医者だよ」と言い，ひとりの少年に向かってばかにしたように，「君の父さんはたかが教師じゃないか」と言った。

母親に呼ばれて話はそこで中断したが，その言葉は私の耳に響き続けた。たかが教師，たかが教師，たかが教師。この子供たちもいつの日か，霊感豊かな教師の真実の価値を知るようになり，そのような教師が自分の人生に残す貴重な足跡を真心から感謝することであろう。

ヘンリー・ブルック・アダムスは「教師は永遠の影響を残す。彼はその影響のとどまるところを知らない」と述べている。この真理はどの教師にもあてはまる。第一に家庭における教師，第二に学校の教師，第三に教会の教師。

最もよく印象に残っている教師は，私たちに最も影響を与えた教師であろう。彼女は黒板を使わなかったかもしれないし，学位を持っていなかったかもしれない。しかしその教えは永遠で，彼女の真心を伝えている。その教師とは母親である。父親でもある。事実，親は皆教師である。

神から託されたそのような教師の教室にやってくる生徒たち，つまり私たちの家庭に生まれてくる幼子は，神の家から地上に降り立ったばかりのみずみずしく愛らしい花である。

そのような思いが詩人にペンをとらせたのであろう。

「私は粘土の一塊を取り，
ある日何とはなしに形を造った。
指をつけると
粘土は私の意のままの形になった。
日が過ぎて再びやってくると，
一塊の土は堅くなり
かつての形はいまだそのままに，
もはや私に形は変えられない。
私は生ける土くれを取り，
日に日に優しくそれに触れ，
力と術(すべ)とで幼子の
感受性豊かな柔らかい心を練った。
年が過ぎて再びやってくると，
目にするのは
かっての面影を宿した立派な人
もはや私に形は造れない。

——作者不詳

初めの教育期はつかの間である。機会は失われやすい。教師という責任を一寸延ばしにする親は，何年かしてホイッターの詩の中の言葉を辛い思いでかみしめることであろう。

「……舌によりペンによる言葉のなべて悲しきもののうち最も悲しきはこれ，『もしもこうであったら』。」（ジョン・グリーンリーフ・ホイッター *Maud Muller*「モード・マラー」53節）

親が天与の教育の仕事を始めるにあたってなおも霊感が必要というなら，このことをぜひ心に留めるがよい。世にあって最も強い心の結びつきは，大宇宙の運行や小説や歴史書を見て得られるものではなく，子供の寝顔をみつめる親の中にこそあることを。「神のかたちに創造し」という輝ける聖書の一節は，親がこの経験をするたびに生きた新しい意味を加えて行く。家庭は天国と呼ばれる

安息の場となり，愛情深い両親は子供たちに「祈ることと，主の前に正しく歩むこと」を教えるのである。(教義と聖約68：28) そのような霊感に満ちた親に，「たかが教師」という言葉はあてはまらない。

次に学校の教師について考えよう。家庭教育の一部を学校の授業にまかせる朝は必ずやってくる。ジョニーもナンシーも，毎朝家の門口から学校の教室へ向かう楽しそうな子供たちの中に入るのである。そこに新しい世界が見つかる。子供たちは自分の教師に出会う。

教師は生徒に夢や希望を抱かせるだけでなく，自分と自分の将来に関する生徒の心構えにも影響を与える。もしも教師が未熟であれば，子供の人生に傷跡を残し，自尊心を深く傷つけ，自分に抱く生徒のイメージをゆがめてしまう。しかしもし教師が生徒を愛し，生徒の力を信じるならば，彼らの自信は増し，能力は伸び，将来は確かであろう。

残念なことに，良い人生への橋渡しよりも，むしろ信仰を失わせるのを喜ぶ教師がままある。指導力が間違った方向への指導力にもなり，間違った指導力は破壊の力にもなることを，私たちは忘れてはならない。

J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は次のように言った。「本源的な真理に対する信仰に疑いを抱かせる者あるいは信仰を破壊させる者は，人の身と霊を傷つけ，使えなくし，不具にしているのである。神はそのような者を厳しく責めたもう。ほかの人が日の栄光に進むのを故意にさえぎる者，この人がどれほど深い所に落ちてゆくかは測り知れない」(「不死不滅と永遠の生命」第2巻，pp. 143－144)

私たちに生徒を支配することはできなくとも，生徒たちに用意をさせることはできる。「どのようにして？」という問いには，こう答えよう。「神の日の栄の王国を目指して導き，神の真理と人の理論を区別する物差しを与えなさい」。

私は数年前にそのような指導書を手にした。それは一般に合本と呼んでいる，モルモン経，教義と聖約，高価なる真珠を一冊にした聖典であった。それは愛する父親から父によく従う美しい娘への贈り物であった。その父親は見返しのページに，次のような霊感豊かな言葉を書いていた。

「1944年4月9日

娘モーリンへ，

あなたが真理と人の哲学の誤りとを判断する尺度をいつも持ち，知識を増して霊的に成長するよう，この聖なる書物を贈ります。折あるごとに読み，生涯大切にして下さい。

愛する父

ハロルド・B・リー」

「たかが教師」と言えるだろうか。

最後に，日曜日ごとに会う教会の教師について考えよう。このような場で，過去の歴史と現在の希望と将来の約束がみな出会う。教師は特に，パリサイ人となるのは簡単で，弟子になるのは難しいことを知るであろう。教師は何をどんなふうに教えるかのみならず，生き方そのものによっても生徒たちから判断される。

使徒パウロはローマ人に勧告した。「なぜ，人を教えて自分を教えないのか。盗むなと人に説いて，自らは盗むのか。姦淫するなと言って，自らは姦淫するのか」。(ローマ2：21－22)

霊感にあふれた力強い教師であるパウロは，私たちの良い模範である。パウロの成功の鍵は，投獄された暗い牢での彼の体験が語っていると思う。パウロは兵卒の足音と自分をつなぐ鎖の音を聞いた。パウロに好意を寄せていたと思われる獄の番人が，皇帝の前でどう振る舞ったらよいか聞きたいことはないかと尋ねたとき，パウロは自分には導き手がいる，聖霊がいると返事をした。

この聖霊は，パウロがアレオパゴスの評議所に立って，「知られない神に」と刻まれた文字を読んで語ったときにも彼を導いた。パウロはこう述べている。「あなたがたが知らずに拝んでいるものを，いま知らせてあげよう。この世界と，その中にある万物とを造った神は，……手で造った宮などにはお住みにならない。……神は，すべての人々に命と息と万物とを与え，……われわれは神のうちに生き，動き，存在している……。……われわれも，確かにその子孫である」。(使徒17：23－24，25，28)

もう一度尋ねよう。「たかが教師」なのだろうか。

家庭に，学校に，あるいは神の家に，すべての人に影響を及ぼすひとりの教師がいる。彼は生と死，義務と将来について教え，仕えられるためではなく仕えるために，受けるためでなく与えるために，自分の命を救うためではなく人のために命を捧げようとして生きた人である。彼は肉欲よりももっと美しい愛と，宝よりももっと豊かな貧しさを語った。この教師は律法学者たちのようにではなく，権威ある者のように教えたと言われている。多くの人が金と名誉をむさぼり，「現われては消えてゆく」哲学の教えに支配されている今の世の中にあって，この教師が決してものを書かれなかったことを覚えていようではないか。たった一度，彼は砂に文字を書かれたが，風はそれを永久に消し去った。彼の律法は石の上ではなく，人の心に刻まれたのである。私の語るその教師とは，全人類の救い主，贖い主，神の御子イエス・キリストである。

「われに就きて学べ」という優しい

主の招きに，熱心な教師たちが応じるとき，彼らは学ぶ。そして，主の聖い力にあずかる者ともなる。私は少年の頃，このような教師に教えられた経験がある。彼女は日曜学校のクラスで地球の創造やアダムの堕落，イエスの贖いの犠牲を教えてくれた。クラスにはモーセやヨシュア，ペテロ，トマス，パウロ，イエス・キリストが主賓として招き入れられた。私たちはその人々を見なかったが，彼らを愛し，敬うことを学び，そのようになりたいと思ったものである。

ある日曜日の朝，彼女はクラスの子の母親の死を悲しそうに発表したが，そのときの教えほど，鮮やかにいつまでも心に残る教えはない。私たちはその朝，ビリーのいないのに気が付いたが，休んだわけは知らなかった，その日のレッスンは，「受けるよりは与える方がさいわいである」というテーマであった。そのレッスンの途中で，教師は自分のテキストを閉じ，神の栄光に対する私たちの目と耳と心を開いてくれたのである。彼女は，「クラスのパーティー資金はいくらありますか」と聞いた。

気持が沈んだ日だったので，かえって元気な返事が「4ドル75セントです」と返ってきた。

すると彼女は静かに提案した。「ビリーのお家の人たちはとても悲しいと思います。あとでお家を訪ねて，この資金を差し上げてはどうかしら」。

小さな一行が3丁ほど歩いてビリーの家に行き，ビリーや兄弟，姉妹や父親に挨拶したのを覚えている。母親がいなかったのが印象的であった。大切なパーティー資金の入った白封筒が教師の手から悲しみに沈む父親に手渡されたときの，みんなの目に光った涙が今も忘れられない。私たちは軽やかな足どりで礼拝堂に戻った。心はいつになく晴れやかで喜びにあふれ，理解も深まっていた。神の霊感を受けた教師は少年少女の心に，尊い真理を永遠に残してくれたのである。「受けるよりは与える方がさいわいである」と。

心には「聖書を説き明してくださったとき，お互の心が内に燃えたではないか」（ルカ24：32）というエマオに向かう弟子たちの言葉が思い出されたのではなかろうか。

さて，初めの会話に戻ろう。少年が「ぼくの父さんは君の父さんより大きい」，「ぼくの父さんは君の父さんより頭がいい」，「ぼくの父さんは医者だ」と得意気に言われたとき，こう返事できたであろう。「君の父さんはぼくの父さんより大きいし，君の父さんはぼくの父さんより頭がいいかもしれない。君の父さんはパイロットや技師や医者かもしれない。でも，ぼくの父さんは，父さんは教師なんだよ」と，

私たち一人一人が，この真心からの立派なほめ言葉に値するように，教師であり神の御子である主イエス・キリストのみ名によりへり下って祈る次第である。アーメン。



予言者が必要である

十二使徒評議員会会長代理

スペンサー・W・キンボール

きょうの大会の模様を目にして，深い感銘と同時に身のひきしまる思いがした。私は個人として，また十二使徒評議員会を代表して，ボイド・K・パッカー長老を心から歓迎したい。私たちは彼が十二使徒補助となられた最初の日から最も尊い召しを受けるきょうの日まで，彼の成長を目のあたりにしてきた。ここに彼はまことの兄弟愛の極致を見いだすであろう。

また，長年の間友愛を交わしてきたジョセフ・アンダーソン長老，そしてかねてより献身的に力強い働きをされているデビッド・B・ヘイト長老，ウィリアム・H・ベネット長老を教会幹部の席に歓迎したい。

今年は注目に値する年である。時は1月，歴史は大切な時にさしかかった。新しいページが開かれ，新しい時代を迎えるのである。

1970年1月18日，日曜日の朝，ひとりの偉人の胸の鼓動が止み，年老いた体は深い眠りに入った。さながら地震が津波を起こすようにこの知らせは全地を覆い，遠方にあってさえ真摯な心の無数の民は，この世を去った偉大な神の人に悲しみの弔辞を贈ったのである。

亡き指導者の顔を今ひとたび見ようと，雨の中にも彼を慕う人々の長い列が続いた。

タバナクルには彼を愛する人々がつめかけ，彼をたたえる言葉が聞かれた。

予言者デビッド・O・マッケイの遺体は厳かな雰囲気の中で静かに眠っている。

私たちの頭はうなだれ，心は痛むが，この霊感に満ちた予言者がジョセフやブリガムやウイルフォードなどの同胞の群れに入るとき，喜ばしい再会があるであろう。

空虚な気持の私たちには，彼をなくしてやっていけると思えなかったが，しかしひとつの星が地平線のかなたに沈むとき，新しい星が現われる。死は生命を生むのである。

主のみ業には果てがない。たとえ強力な指導者が死んでも，王国に継続性と永続性を持たせられた神の恵みによって，教会は一瞬たりとも指導力を欠くことはない。この神権時代になってからすでに8度も経験してきた通り，民は敬虔な気持で墓を閉じ，涙をぬぐって未来に目を向けた。

教会の大管長が死ぬと，充分に経験と訓練を積んだ人々がひとつのグループになって教会を指導する。以前からその召しがあり，権能が与えられ，鍵が委譲されている。5日の間，主の王国はすでに権能を持つこの十二使徒評議員会のもとで動く。「地位争い」も，選挙戦も選挙演説もない。まさしく神の御計画である。主は賢明にも人の心をよく御存じで，人間の弱さを超越した完全な組織を作られた。

注目すべきその日（1970年1月23日）が訪れて，14人の人々は敬虔な面持で神の宮居に向かった。末日聖徒イエス・キリスト教会を管理する十二使徒定員会の会員たちで，中にはこの厳粛な経験を過去にしている者もあった。

午前もだいぶまわって，14人が聖なる宮居から出て来たとき，世にも重要な出来事が起きた。短いながら空白の期間は終り，王国は十二使徒定員会から新しい予言者に，ひとりの指導者，地上における主の代表者に，再び委ねられたのである。彼はこの尊い召しに至るまで60年もの間地道な働きをなしてきた。今や教会は彼の管理下にある。

しかし，彼がこの高い職を受けたのはその名のゆえではなく，年少のときから当時の生ける予言者を通じて，この定員会の会員すなわち使徒

となるように主から召され，やがて先任使徒となり，大管長となるまで貴重な鍵の数々が預け置かれたためである。

彼は重大な神殿の会議において兄弟の十二使徒たちから教会の大管長に「按手聖任される」と，次にふたりの副管長を選んだ。雄々しく力あるふたりであった。教師，実業家，役人，特に教会指導者として豊富な経歴を持つハロルド・B・リー長老と，N・エルドン・タナー長老である。

3人の大管長会と新たに構成された十二使徒評議員会は，祝砲も歓迎の飾りも何ひとつない中，慎ましくそれぞれの事務室に向かった。こうしてみ業は大きな進歩と比類ない発展を約束された新しい時代に入ったのである。

この新世界に回復された計画を紹介したのはひとりの少年であった。教会が組織されたとき，ジョセフ・スミス（1805年12月23日－1844年6月27日）はわずか24歳であった。

彼が38歳で殉教すると，ブリガム・ヤング（1801年6月1日－1877年8月29日）が46歳で先任使徒となり，第2代大管長となって（1847年12月27日），30年間（76歳まで）教会を管理した。その後代々の大管長は62歳から84歳の間に大管長となり，79歳から96歳で亡くなっている。

ジョン・テイラー（1808年11月1日－1887年7月25日）は71歳で大管長となり(1880年10月10日),79歳で死去した。彼の死に伴い，ウイルフォード・ウッドラフ（1807年3月1日－1898年9月2日）が先任使徒となって（1887年7月25日），2年後（1889年4月7日）に82歳で大管長に支持された。彼が91歳で亡くなると，ロレンゾ・スノー（1814年4月3日－1901年10月10日）が先任使徒となり，84歳で大管長となった。（1898年9月13日)。ロレンゾ・スノーの在職期間は短く，およそ3年（1901年10月10日まで）であった。

ジョセフ・F・スミス大管長（1838年11月13日－1918年11月19日）は7日間（1901年10月10日から）先任使徒を務め，1901年10月17日，62歳で大管長となり，80歳で死去した。

ヒーバー・J・グラント大管長（1856年11月22日－1945年5月14日）は1週間足らずの間先任使徒を務め，（1918年11月23日）62歳で大管長となり，88歳で死去した。

ジョージ・アルバート・スミス大管長（1870年4月4日－1951年4月4日）は7日間先任使徒の職にあり，75歳で大管長となり（1945年5月21日），81歳で死去した。先週の土曜日は彼の誕生100年にあたる。

第9代大管長デビッド・O・マッケイ（1873年9月8日－1970年1月18日）は，5日間先任使徒に在職し，77歳で大管長に支持され（1951年4月9日），96歳で死去した。

1876年7月19日生まれのジョセフ・フィールディング・スミス大管長は1970年1月18日に先任使徒となり，1970年1月23日，93歳で大管長となった。

ジョン・テイラーからデビッド・O・マッケイに至る歴代の大管長は62歳から84歳の間に大管長となり，79歳から96歳で死去している。

これらの8人の大管長が平均年齢73歳でその管理の職を受け，85歳の死で職を離れていることは興味深いところである。彼らは平均してほぼ12年間職を務めており，大管長の平均寿命は約79歳である。

大管長というと老齢の人を思い浮かべるであろうが，青年は率先して活発に働き，一方年長者は経験や長年の神との交わりを通して冷静さと力と知恵がある。

マッケイ大管長の晩年には，物好きな人や心配性の人やよく知らない人々の間で噂が飛び交い，引退が取りざたされた。

百万人以上の教会員がデビッド・O・マッケイ以外の大管長を知らず，混乱する人がいるのもむしろ自然であった。

彼らは年齢を問題にした。しかし古代の族長たちは皆高齢で，アダムは何代もの子孫を治めている。アブラハム，イサク，ヤコブ，モーセは，それぞれ175歳，180歳，110歳，120歳で死ぬときまで民を管理した。彼らは老齢であったが，経験を積んで深い知恵と頼もしさを持っていた。

人々は先例を話し合った。先例通りであるなら，はじめから明らかにされている順序通りになるわけである。ブリガム・ヤングは先任使徒となってすべての鍵と権能を持った。今回はスミス大管長が先任使徒であった。これが主の方法である。主は指導者をみ手のうちに握っておられる。

初めて大管長の交代があったとき，回復された教会はわずか14年の若さであった。それまでは何世紀もの間，予言者はおろか「示現」さえ閉じられていた。そうした状況で，教会や示現や予言者という貴重な恵みの基と思われていた人物の命が，カーセージで凶弾に奪われたとき，民の胸に疑問が渦巻いたとて何の不思議もない。使徒たちが伝道から戻って予言者のなきがらを埋め，将来を考え始めたとき，すでにすべての鍵を持っていた先任使徒がモーセのように立ち上がり，民を率いて，すべての疑いは霧散したのである。

1844年9月2日号のタイムズ・アンド・シーズンズ紙の社説には，それについてこう書かれている。

「至る所で，『ジョセフ・スミスの後継者はだれか』を論じあう騒ぎがあ

った。

それに答えて私たちは言おう。待つように，その時が来るまでしばし待つように，そのときにはすべてを告げると。『大きな車輪はゆっくりと回る。』今現在言えることは，先月8日にノーブーで教会の特別大会が開かれ，満場一致で『十二使徒』が全教会を管理すると決まり，大管長会に交代が必要なときにはその都度声明があること，また国外の長老たちは知らないことには沈黙を守ることが最良の策であること……」（*Times and Seasons*「タイムズ・アンド・シーズンズ」第5巻，1844年9月2日，p. 632）

この波乱多い140年間に，10人の大管長が教会を管理し，78人の使徒が十二使徒定員会で働いた。

私たちは身も心も引き締め，霊感豊かな指導者たちの下，予言者ジョセフ・フィールディング・スミスに導かれ，強い意志を固めて新たな旅立ちをするのである。

彼は人格，威風，年齢，地位のすべてについて尊敬に足る人物である。最愛の夫人がけさほど，「手が清く，心のいさぎよい者，むなしい事に望みをかけない者，偽って誓わない者」と歌われた通りの人物である。彼は創造主の息子，清く気高い神の人である。彼はこの高い召しに主から任じられた。過去60年間王国の鍵を守り，今日への道を歩んで，ひとりの予言者として教会員の支持を受けてきた。きょう彼は，隅のかしら石，教会のかしらである主イエス・キリストの下であらゆる鍵を一手に託される唯一の予言者として支持を受けた。

主の予言者には，「万能選手」になることが必要なのではない。若々しい運動家，実業家，資本家，農芸家である必要はない。音楽家，詩人，芸人，銀行家，医者になる必要も，大学学長，陸軍大将，科学者になる必要もない。

フランス語や，日本語，ドイツ語やスペイン語を話す必要はない。ただ，神の言葉を理解し，天よりの教えを受けることのできる人でなければならない。

雄弁である必要もない。なぜなら神が語られるからである。主は人の弱きを強きに変えてみ言葉を伝えられる。主はモーセのかよわい声を力強い声に変え，若きエノクに人を震え上がらせる力を与えられた。モーセもエノクも神と共に歩んだからである。

主は言われた。「わが声にて言わるるも，僕らの声にて言わるるもみな一つなり。」（教義と聖約1：38）

世に必要なのは，清く，信仰深く，汚れない名を持って神にふさわしく振る舞い，愛される夫，誠実な父として模範を示す予言者である。

予言者は，祭司や牧師や長老以上の人でなければならない。彼の声は，新しい計画，新しい真理，新しい解答を啓示する神の声となるのである。私は予言者に完全無欠を要求するつもりはないが，しかし彼は神から権威ある者として認められなければならない。任命されず，権能もないのに職を受けたつもりでいる人は世に大勢いるが，彼はそうではない。彼は主と同じように，「……律法学者たちのようにではなく，権威ある者のように」（マタイ7：29）語らなければならない。

彼は，制限を緩めようという人々の声に対しても，勇敢に真理を語る。神から与えられた自分の務めと任命の神聖さと，人を召して聖任し，永遠の錠前を開く鍵を渡す権能が自分にあることを確信している。

彼は古代の予言者たちのように，「……天に於ても地に於ても，福音を信ぜず教えにそむく者たちに対する証詞を結び固むる権能……，また，誠に神の怒り限りなく悪しき人々の上に注がるる日まで，……彼らに対する証詞を結び固むる……」（教義と聖約1：8－9）絶対の権能を持っている。また，「……何にても地に於て汝の結び固むるところは天に於ても結び固められ，何にても地に於て汝のわが名によりわが言によりて結ぶところは天に於て永遠に結ばるべし。……また，何者の罪にても汝地に於て留むるところの罪は天に於て留められん……」（教義と聖約132：46）と主が言われる大いなる権能を持っている。

必要なものはパロではなしにモーセ，ベルシャザル王ではなしにエライジャ，ポンテオ・ピラトではなくてパウロである。

彼は家や学校や高層ビルを建てる建築家になる必要はない。今も永世にも耐える建物を建て，人と造り主とのみぞに橋を渡す人となるのである。

世が予言者に従ったとき，進歩があった。世が予言者を無視したとき，結果は低迷と隷属と死であった。

空中には四六時中，無数の電波が飛び交っているが，私たちは日々の仕事に追われてそれを聞くことが比較的まれである。しかし，放送局の電波は強力で，私たちが周波数を合わせていさえすればどんな番組でも聞くことができる。

過去何千年にもわたって天から大切な導きのおとずれとその都度に警告が絶えず送られている。この最強の放送局の放送は不変である。歴史を通じて，予言者たちは幾度も周波数を合わせ，民にこの放送を中継してきた。天よりのおとずれは絶えたことがなかった。

そのようなおとずれは民の眼前でダニエルにも与えられ，それに周波数をぴったり合わせた彼はこう言っ

ている。「この幻を見た者は，われダニエルのみであって，わたしと共にいた人々は，この幻を見なかった。」（ダニエル10：7）

ダマスコに向かって一団の人々が旅をしていたときにも，天よりの素晴らしい出来事がありながら，波長を合わせてその示現を受けたのはたったひとりであった。同行者には声しか聞こえなかったことが，タルソのサウロにはなすべき務めを告げる畏怖の召しとなり，彼の一生を変え，多くの人の人生を変える大事ともなったのだが，波長を合わせたのは彼ひとりだった。

あるロシア人宇宙飛行士たちが，宇宙のかなたを飛んだが神も天使も見なかったという報告をしたそうである。信仰を持たず，神を認めない飛行士たちに言うことは，いかに遠く，いかに高く飛ぼうとも彼らは神や永遠のものからほど遠いということである。霊的なことは有限なものによって理解されないからである。

アブラハムはメソポタミヤの塔で，パレスチナの山で，エジプトの天幕で神とまみえた。モーセは荒野と紅海で，あるいはシナイ山で，また「しばの中の炎のうちに」神とまみえた。

ジョセフ・スミスは冷涼な原生林やクモラの丘で神とまみえた。ペテロはガリラヤの湖や変貌の山で神とまみえた。

主なる神が，新たに召された予言者ジョセフ・フィールディング・スミスを，これより「自分の父の仕事」をなし，主の「命のパン」と「生ける水」を続けて与え，「イスラエルの明かりをともし」，まさに神の代弁者となる彼を支持されんことを。主がヨシュアにこう語られた通り，彼にも語られることこそ，私たちの祈りである。

「きょうからわたしはすべてのイスラエルの前にあなたを尊い者とするであろう。こうしてわたしがモーセと共にいたように，あなたとともにおることを彼らに知らせるであろう。」（ヨシュア3：7）

主がきょう支持の挙手をした私たちしもべと，その機会を持たないすべての人々を祝福されんことを。また，これより私たちがイスラエルの子らのように彼の手を高く掲げ，声をそろえてこう叫ばんことを。

「あなたがわれわれに命じられたことをみな行います。あなたがつかわされる所へは，どこへでも行きます。われわれはすべてのことをモーセに聞き従ったように，あなたに聞き従います。ただ，どうぞ，あなたの神，主がモーセと共におられたように，あなたと共におられますように。」（ヨシュア1：16－17）

「イスラエルよ，あなたの天幕に向かい」，堅く立って，忠実に，動じずに！

イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



世界に伝える言葉

十二使徒評議員会会員

エズラ・タフト・ベンソン

兄弟姉妹，3日間にわたる大会の7回目の部会も終わりに近づき，今会場におられる皆様は鍛えに鍛え抜かれた体力自慢の強者ばかりとお見受けする。

私はジョセフ・フィールディング・スミス大管長を予言者，聖見者，啓示を受ける者，この教会の大管長として，また彼の両脇に立つ大管長会のふたりの高潔な人物を，心から愛し，支持するものである。私は，彼らが天よりの霊感を受けて，この教会を進歩発展させる偉大な神の人であることを知っている。

私は「世界に伝える言葉」という題でお話したい。

伝道事業，すなわち福音を宣べ伝えることは，福音が地上に存在したどの時代でも真のキリスト教会の主要な活動であった。神の予言者とその他大勢の真理の使節は，「時が良くても悪くても」（IIテモテ4：2）み言葉を宣べ伝えてきた。

復活された主は天に昇る前に，伝道が非常に大切なことを使徒たちに強調し，最後の教えとしておられる。マタイは福音書の最後の2節で，その重要な教えをこうまとめている。

「それゆえに，あなたがたは行って，すべての国民を弟子として，父と子と聖霊との名によって，彼らにバプテスマを施し，あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ，わたしは世の終りまで，いつもあなたがたと共にいるのである。」（マタイ28：19－20）

マルコは次のように記録している。

「全世界に出て行って，すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし，不信仰の者は罪に定められる。」（マルコ16：15－16）

いずれの福音の神権時代もこれと同様であった。福音の救いの原則を宣べ伝えることは，第一に果たすべき大切な責任であった。

それはこの福音の神権時代も同じである。父なる神と御子イエス・キリストがジョセフ・スミスに現われたもうた輝かしい出来事に引き続いて，回復された教会に課せられた最初の大きな責任は，福音を世界に携え行くこと，すなわち御父のすべての子らに伝えることであった。

それは極めて大切な一大ドラマ，犠牲と喜び，苦難と勇気，そしてとりわけ隣人への愛のドラマであった。地の面のどこにも，これに匹敵する人間ドラマを見いだせないであろう。この愛の仕事は，血と汗と涙によって進められてきた。私たちは一体なぜ，それをしてきたのだろうか。それは天の神が命じられたからである。つまり天の神が子らを愛しておられて，地上の大勢の人間がイエス・キリストの福音の栄えある救いと昇栄の原則を聞き，自分の自由意志によってそれを受け入れ，守る機会を得ることが神のみこころだからである。

この教会がみ名をいただくイエス・キリスト御自身が，予言者ジョセフ・スミスにこう宣言された。

「而して，この福音はあらゆる国民，あらゆる血族，あらゆる国語の民，およびあらゆる世の人々に宣べ伝えられん。」（教義と聖約133：37）

「この故に，主の声は耳ありて聞かんとするすべての人々に聞かれんため地の果にまで及ぶ。」（教義と聖約1：11）

「而して，この末の世にわが選びたる弟子たちの口より，すべての人々に警めの声は及ばん。」（教義と聖約1：4）

「完全なるわが福音，弱き者たち単純なる者たちによりて世界のいやはてまでも宣べられ，また王と統治者との前に宣べられんがためなり。」（教義と聖約1：23）

これらは，再降臨を間近に控えた

主イエス・キリストが自ら下された戒めである。私たちは主の教会の会員として，この命令に応え，福音のもたらす恵みを知る者として，この先さらにこの戒めに応え続けるであろう。

何十万何百万という宣教師が乏しい財産から多額の出費をして世界の国々へ出て行った理由がここにある。それが，第2次世界大戦のさなかにも大管長会が，「我々および我が教会はいかなる場合にも神より与えられた命令を阻んではならない」と声明した理由である。

これは主の教会に与えられた命令である。命令は遂行されるであろう。地や地獄のいかなる力もこのみ業を阻止することはできない。身と霊に満足をもたらす福音のおとずれを子らに携え行くという主の目的を妨害することはできないのである。主の目的を成し遂げるために，様々な形の戦争，激動，災厄が引き起こされるかもしれない。だが神の目的は成就される。神の子らは然るべきときに救いの福音を聞くであろう。

鉄のカーテンが溶け，竹のカーテンが壊れる時は必ず来る。主の告げられた言葉は必ずや成就する。この教会員と世界各地の心の正直な人々に，神はその業を導いておられることを今一度確認しておきたい。神は死んではいない。

「静まって，わたしこそ神であることを知れ」(詩篇46：10) と言っておられる。現代の私たちにもこう告げておられる。

「この故に，汝の心をはり上げて喜べ。汝の腰を引きからげ，わが物の具をことごとく身に甲うべし，汝悪しき日に遭いて立ちむかい，すべてのこと成就し立ち得んためなり。」(教義と聖約27：15)

この福音を受け入れようとしている世界中の人々に，また彼らを助ける忠実な宣教師と熱心な家族に申し上げる。信仰と勇気をもって進みなさい。あなたがたは人の子らを救うという世界最大の事業に携わっている。この大事業に失敗は許されない。

天父の子らには福音が必要である。彼らは，福音だけが与えることのできる安心と心の平和を望み，欲している。天父の子らは本来善良である。私はある時には鉄のカーテンをまたいで60カ国余りに及ぶ国々を訪れてきた。実際にある人々は神を信じない指導者の専制下にあるが，彼らも平和に生き，良き隣人になりたいと願っている。自分の家庭と家族を愛し，生活の標準を上げたいとを望んでいる。彼らは心中，正しいことをしたいと欲している。私は，主が彼らを愛しておられることを知っている。また私は主の卑しいしもべとして，この世界に住むあまたの人々を心から愛している。

私はこの2年間，謙遜で穏やかな心のアジアの人々と接してきて，その思いを新たにし，なお一層強く感じている。主が戦争，占領，革命などの不幸を祝福に変えられるのをこの目で見てきた。主の予言は成就されつつある。数年前には不可能と思われた人々に現在福音が届いている。根強い習慣や宗教上の教理や古来の国の政策という障害があるにもかかわらず，世界各国に大きな変化が起こっている。私たちの眼前で奇跡が起きている。主が大きな不思議を起こし，福音の祝福を身に受けた子らが喜んでいる。それは驚くべきことである。説明してみよう。

「わが誡命の書のはしがきにして，その書は汝らに公にせんためわが彼らに与えしところなり」(6節) と主が言われた予言の啓示 (教義と聖約1章) の中で，主は次のように呼びかけられた。「聴け，汝らわが教会の人々よ。いと高きところに住みて，すべての人を見まもる者の声は告ぐ。日く，誠にわれ告ぐ，汝ら民よ，遙かなる所より耳を傾けよ。海の島々にある者よ，共に聴け。」(1節)

この意味深い言葉が文字通りアジアの諸国で実現している。「汝ら民よ，遙かなる所より耳を傾けよ。海の島々にある者よ，共に聴け。」

私は一教会指導者として過去2年に5回ほどアジア諸国を訪問した間に，この予言の言葉を何度も引用した。タイ，マレーシア，ベトナム，シンガポール，インドネシア，インドなどを訪れると，「汝ら民よ，遙かなる所より」という言葉が思い出された。旅行業者はこの地域から西へ行っても東へ行ってもソルトレーク・シティーまでは同じ距離だと話してくれた。また，タイ語の最初の教会出版物として前日に刷り上がったばかりのジョセフ・スミスの証の本をタイ国王に献上したときも，そのことを思い出した。

「……海の島々にある者よ，共に聴け。」モルモン経にも同様の言葉がある (IIニーファイ29：7，11) が，この2年間に島国日本へ行き，800人の若人を前にしたユースカンファレンスの4時間にわたる証会で，125人の証を聞き，次の集会予定があるために閉会してもなお85人の若者が証をしようとして待っていたあのとき，この言葉が私の心に浮かんできた。

今はすでにふたつの集会場を持ち，ひとつの教会堂が現在建築中というシンガポールの地を，昨年4月に奉献したときにも，私たちは「海の島島」という言葉を思い浮かべた。

また台湾を訪れたとき，そして7千の島々に4千万人の民を擁するフィリピンのマニラで，2千人以上が出席した地方部大会に出たときにも，「海の島々」という主のみ言葉を思った。友好的な指導者の歓迎を受けて1万4千の島々のインドネシアの

国を奉献したときにも，再び「海の島々」という言葉が胸に浮かんだ。

台湾で国の指導者と会談し，香港，韓国，その他各地で増え続ける教会員たちと語り合うと，それらの親切な謙遜で勇気ある人々が主の呼びかけに応じて，「共に聴いている」ことがわかる。

現在のように教会が力と手段を得てアジアの諸国にかくもしっかりと手を差し伸べた時代は，過去に例がない。主の時刻表に定められた時が到来している。扉が今開かれて，アジアを舞台にみ業が推進される時が来ている。訪問の回を重ねるごとに，頼もしさを感じ，あふれるばかりの霊感を受けている。み業は広がっている。その広がりがさらに大きくなるのも遠いことではない。各国で展開されている驚くべき成長には霊的な感動を禁じ得ない。そこは，何億何十億という世界人口の3分の1が住むところである。全人口から見れば，当然私たちの仕事は始まったばかりである。

妻と私は，多忙ではあったが霊的な3週間をアジアの各伝道部で過ごして帰国したばかりである。5つであった伝道部が4カ月前に6つにふえ，先日は8つになり，1年以内には最低もうひとつふえる見込みである。これはこの地域で起こりつつある発展を示している。

私は日本に滞在中，3人の教会幹部や別の3人の指導者と合流した。これはエクスポ'70として知られるアジアで初の，しかも史上最大の世界博覧会の3月14日の開幕に，大管長会から指名されて正式な教会代表者として招待を受けたのである。

前日の3月13日に一行7名とそれぞれの家族と，万博役員，数名の市長，報道関係者，それに入場可能な人数の教会員や友人が600名ほど，モルモン・パビリオンの献堂に立ち会った。パビリオンの位置は申し分なく，尖塔の突端に天使モロナイを配した建物や「幸福の探求」という魅力あるテーマと相まって，万博の人気を集めることは間違いない。初日にはこのパビリオンを2万名ほどが訪れ，最初の土曜日には4万3千名を越す入場者があった。500万から800万と見込まれる入場希望者をいかにして収容するかが早くも心配になっている。せめて入場できない人に見ていただくためにと，日本人キャストで撮った「幸福の探求」の映画が文化ホールや別の場所ですでに上映されている。宣教師あての照会カードや資料請求カードが何千枚，何万枚になることは確実である。

霊的な献堂式の間，私は昼食会や夕食会などで何度か万博役員と接したときのことや鍬入れ式の前夜に大阪で行なわれた友好的な記者会見に報道関係29社の代表が集まって，1時間半もの間教会や教会員や特にパビリオンのテーマについて質問をしたときのことを思い起こしていた。同じ日の夜，岡町の新しい教会堂を献堂したときに大勢の記者たちが姿を見せた。その翌日，正式な鍬入れ式にも彼らは同行した。鍬入れ式では万博責任者と政府，市の高官6名がスピーチをし，教会に賛辞を贈った。彼らは幸福の探求について語り，「モルモン教会が万博に出展して，人々に幸福への道を教えてくれること」を喜んでいると強調した。宣教師たちは，「あの人々に幸福をみつける道を本当に教えてあげます」と語っている。

50万部のモルモン経が用意され，数百万部のパンフレットやちらしが整い，大勢の熱心なガイドと照会カードを処理する何百人もの宣教師が待機して，まさに「海の島々」の「民は遙かなる所」で「共に聴き」，教会に迎え入れられようとしている。

日本には伝道部がふたつと，幾つかの地方部が確立していたが，数日前にさらにふたつの伝道部が組織された。日本と沖縄の島々にある4つの伝道部は，高まりつつある人々の関心に応じてくれるであろう。東京，横浜近辺は1400万近い人口を擁し，ここには優秀な指導者と安定した組織がある。3月15日日曜日に，東京に新しくステーキ部が組織されて，そのステーキ部の指導者がこの大会に出席しておられる。実に雲の上を歩くようだ，非常に幸せだとのことである。アジアで2番目のステーキ部はフィリピンのマニラに設立される。ここでは1969年に1400名近いバプテスマがあった。他のアジア諸国にも，教会のプログラムを充分に活用できるステーキ部が誕生することであろう。台湾の伝道部分割に備えて，台北の新しい伝道本部の建築が承認された。

現在日本には1万2千人以上の教会員がいる。韓国には4千人，フィリピンには6千人近く，香港には4千人ほど，そして台湾には4千人余りがいる。タイ，シンガポール，インドネシアでは伝道が始まった。沖縄には強力な教会があり，そしてベトナムでは中核となるベトナム人が教会に入っている。韓国駐留の教会員軍人がこの国の教会の基礎を置いたが，やがてベトナムに平和が訪れるときには，この民に真理を広めるための道が備わることであろう。

神よ，モルモンの軍人に恵みを与えたまえ。これらの国々に駐留する軍人たちは教会堂の建築を手伝い，友人を作り，改宗へ導いて，良い伝道の基礎を築いている。最近の旅行ではタイの基地を6カ所訪問した。ベトナムには立派に運営されている軍人の地方部が3つある。来週4月9日から12日まで日本の富士山のふもとで開催される予定のアジア軍人

の大会には，1千人ほどの参加があるはずである。

アジア各地の伝道部は水準が高くて熱心な，そして時には高名な改宗者を得ている。韓国で，教会員が50人のある小さな支部には大学教授が5人もいる。1億3千万の人口のインドネシアは1969年10月26日に，福音伝道の地として奉献された。ジャカルタで数人の宣教師によりみ業が始まったが，もっと多くの宣教師が必要である。シンガポールに本部を置く新しい伝道部も設置された。

アジア地域には，力ある教会が築かれつつあり，伝道事業の目覚ましい発展の基礎が据えられている。1969年のバプテスマは前年度を上まわり，この傾向は今後さらに続くであろう。

宣教師の増強に加えて必要なのが，建物である。フィリピン伝道部全体には建物がひとつしかない。しかしそれでも，敷地を購入し，各地に他の建物の建築計画が進んでいる。東京の中心部には6階建の大きなビルが，大管長会によって計画されている。そこにはステーキ部センターが置かれ，ワード部の施設ができ，ディストリビューション・センターや伝道部事務所，建築事務所その他の施設が入るであろう。

私たちの生きているうちに，アジアの良き民の間にステーキ部や教会堂が建ち，大勢の改宗者が生まれ，地域の指導者が力と能力をつけて，おそらく神殿も建てられることであろう。それがアジアの民の望みであり，祈りである。

前途は非常に有望である。主は新しい改宗者や宣教師や伝道部長を祝福しておられる。著名人の友好と協力の手に支えられて，アジアの謙遜な人々の間には楽観の気風がみなぎっている。

アジア諸国の無数の民，「遙かなるところ」，「海の島々にある」この選ばれた民が，地域の教会員や宣教師など，すべて神の謙遜なしもべたちの説く救いの教えを「共に聴く」とき，神が豊かに彼らを祝福されんことを。私たちの告げるおとずれは世界に伝える言葉である。末日聖徒イエス・キリスト教会は，世界の教会である。

主が予言者ジョセフ・スミスを通して告げられたように。「而して，この末の世にわが選びたる弟子たちの口より，すべての人々に警めの声は及ばん。この末の世の弟子たちは進み行けど，一人もこれを止むる者なからん。そは主なるわれ，彼らに命じたればなり。」（教義と聖約1：4－5）

このことを，私はへりくだって証申し上げる。アジアと全世界における教会の業を，主が祝福しておられることへの深い感謝を込めつつ，主イエス・キリストのみ名により。アーメン



「この日選びとりて」

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

今朝ほど，皆様の支持にあずかったことを深く感謝申し上げたい。この責任を立派に全うできるよう助けを仰ぎ祈るものである。私はジョセフ・フィールディング・スミス大管長ときょう新しく召された人々も含めて教会幹部の全員を支持する気持を今一度申し述べたい。主はいつのときも主の民に彼らを導き，助言する予言者や指導者を与えて来られた。

地上でわずか6世代目のあのエノクに対して，主は「汝この民に言え。汝らこの日選びとりて汝らを創りし主なる神に仕えよ，と」(モーセ6：33) と言われた。

神の予言者は時のはじめ以来悔い改めを叫んできたが，この先も，救い主が1千年の統治をするため地上に来られるまで悔い改めを叫び続けることは必要である。

キリストが再び降臨してサタンが縛られるその福千年が来たときに生まれていれば，主に仕えて戒めを守るのは簡単だろうと大抵の人が考える。

ヨハネはこのように記している。「またわたしが見ていると，ひとりの御使が，底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って，天から降りてきた。彼は，悪魔でありサタンである龍，すなわち，かの年を経たへびを捕らえて千年の間つなぎおき，そして，底知れぬ所に投げ込み，入口を閉じてその上に封印し，千年の期間が終るまで，諸国民を惑わすことがないようにしておいた。」(黙示20：1－3)

ルシフェルともサタンともいう悪魔が縛られるために素晴らしい栄光に満ちる地上の1千年については，数々の聖句が語っている。

聖句には悪魔が「鎖で縛られる」，「底知れぬ穴に投げ入れられる」と言っているが，これは象徴的な言い方だと思う。金属の鎖やサタンを入れる穴などは考えられない。

サタンを縛るもの，サタンを無力にする唯一の力は，正しい生活であると思う。

天上で始まった戦いはまだ終わっておらず，万人がサタンに抗する力を証明するまではその戦いに終わりはない。イエス・キリストも荒野で試みられたときにサタンを縛らなければならなかった。イエスがサタンの誘惑に屈しなかったため，サタンはイエスに対して無力になった。記録にはそれから，「悪魔は……一時イエスを離れた」(ルカ4：13) と記されている。

あなたが誘惑に対抗して，それがもはや誘惑でなくなればサタンはそれだけあなたに対して無力になり，サタンに負けなければ，それに応じてサタンが縛られる。

例を取れば，什分の一を納めることでそれが重荷でなくなり，誘惑もなくなるなら，それに関してサタンはあなたに縛られたのである。知恵の言葉や純潔の律法その他，福音の原則を守ることでも同じである。それぞれの分野について，サタンはあなたにとって無力になる。

今でもそのようにして徐々に，あなたがサタンを縛ることができる。福千年のときまで待つ必要はない。

まずひとりずつ自分から始めて，それからひとつのグループ，次いで複数のグループという風にして，全地に義が満ちて行くのである。

福千年の状態はそのようにして広がって行くと，私は考える。

現在は，地上にその輝かしい時代を招来する準備の時期である。

計画と数々の鍵と権能を備えた福音が回復されたのは，このためである。

各々の人が正しい生活をすることによってサタンを縛り，それによって，福千年に言われているような輝

やける状態を私たちで作り出すことができるのである。

地上にかつてその様な状態があったことからもそれが可能なことがわかる。主がエノクに,「汝らこの日選びとりて汝らを創りし主なる神に仕えよ」と言われたとき,エノクはその通りにした。彼は神と共に歩み,神と共に語った。彼が悔い改めを説くと多くの民がそれに従い,記録によれば彼の時代に,「………彼は一つの市を建て,それを聖なる市すなわちシオンと呼べり。」(モーセ7:19)「而して,エノクの時代に於けるシオンの代はすべて三百と六十五年なりき。エノクとそのすべての民は神と共に歩めり。彼はシオンの真中に在りしに,シオン無くなりぬ。神これをとり挙げて,自らの懐に受け入れたまいしが故なり。これよりして『シオン逃げたり』と言う言葉世に出できたれり。」(モーセ7:68—69)

モルモン経にも同様の出来事が記されている。キリストは復活の後にアメリカ大陸の住民を訪れたまい,御自身の王国なる教会を彼らの間に立て,モルモン経に記録するところによれば,民は200年間義の内に住んだという。(Ⅳニーファイ22参照) 民の正しい生活によってサタンが縛られたのである。

代々を通じて主は絶えず私たちに,サタンを縛って主が用意しておられる祝福を受けるには何をしたらよいかを告げておられる。この大会の話し手たちも,それぞれにサタンをいかにして縛るかを語っている。私は皆様にぜひお願いしたい。これらの話を,何度も繰り返して読み,勉強して,実際にあなたの生活に生かしていただきたい。

エノクの言葉は当時のように現在にもぴったりあてはまる。

エノクはこのように言った。「見よ,人の子らの中にサタン入り来り,人の子らを誘いてサタンを拝ましむる故に,人々肉欲を好み,快楽に耽り,悪事を行なうようになり,神の御前より締め出さるるに至れり。されど神はわれらの先祖にすべての人悔い改めざるべからざるを知らしめたまえり。而して神はわれらの父アダムを自らの声をもて呼んでのたまわく,われは神なり,われはこの世を造れり。また人をその肉体をとらざる前に造りたり。神はまたアダムに言いたまえり。もし汝われに心を向け,わが声を聴きて信じ,且つすべて汝の罪を悔い改め,恩恵と真理に充ちたるわが生みし独子の名により,すなわちそれによりて後に人の子らの救わるる天下に与えらるる唯一の名,すなわちイエス・キリストの名によりて水に入りてバプテスマを受くるならば,汝聖霊の賜を受くべし。而してすべてイエス・キリストの名によりて求むれば,何にてもあれ求むるところは汝に与えられん。」(モーセ6:49—52) このために,救い主の再降臨に対して準備が必要なのである。再降臨に備えて地上に主の王国を確立しなければならない。

主は来臨になぞらえて10人の処女のたとえ話をされた。用意をした5人の賢い処女と愚かな5人の処女の話で,10人の処女は,主を受け入れてバプテスマを受けた人を指している。本当に用意できていたのはそのうちのわずか半分であった。

もしも主がきょう来られたとしたら,あなたは王国の民の用意ができている半分の中に数えられるだろうか。それとも少ししか準備ができていないあとの半分に入るだろうか。あるいは,サタンを自分で縛ろうとせず,だれかが縛ってくれるのを待ちながら王国の外にいるのだろうか。

この日を選びとって,あなたがたを造られた主なる神に仕えなさい。

私は,この末の時代に主の王国が地上に建てられたことを,イエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。



なぜ予言者が

十二使徒評議員会会員

リグランド・リチャーズ

兄弟姉妹，末日聖徒イエス・キリスト教会の最も霊感に満ちた歴史的な大会も，はや終わろうとしている。歴史的と申し上げたわけは，御子イエス・キリストの指導の下この地上のみ業の長として神が選ばれた人物を，きょう支持したからである。この教会は古のパウロが述べたように主キリストを隅のかしら石として建てられている。（エペソ２：20参照）ジョセフ・フィールディング・スミス大管長を知る人々や副管長として彼に選ばれた兄弟たちを知る人々は，それを主に感謝していることであろう。私たちはこのみ業が先駆者たちの築いた土台の上に建って，大きな山となり全地に満ちるまで世界に広まり続けることを，確信している。

今大会で，予言者ジョセフ・スミスや後継者たちに賛辞が捧げられた。私は予言者リーハイが荒野で息子のヨセフに語った言葉を思い出す。主はエジプトに売られたヨセフに，末日になると彼の子孫から，ヨセフという名でしかも父の名もヨセフというひとりの予言者を召すことを約束されたという話がある。（IIニーファイ３章参照）主は必ずその言葉通りにすると言われた。そして主は私たちにモルモン経，教義と聖約，高価なる真珠その他多くの記録を賜った。記録にみる限り，近代に神が召されたこの予言者ほど，私たちに数多くの真理を啓示した予言者はない。また主はみ言葉を世に出すと言われた上にさらに，すでに世に出ているみ言葉を人々に確信させるとも言われた。

さて，私も伝道中に経験したことだが，何年も教えを受けた人々，聖職にある人を前にしても，皆さんは何時間も話を続けることができ，彼らからは何の質問も受けないという経験をしたことがあると思う。彼らがかつて聞いたことのないことを語り，それを彼らの持つ聖典から立証するからである。私は自分の経験からそれを言うことができる。30年も牧師をしてきた人がこの教会に入り，私の事務所に来たときにこう語った。「リチャーズ兄弟，今回復された完全な福音を知って，昔牧師だったときに信者の方たちに一体どれだけのことが教えられたかと思うと，私は見いだしたものを全部の友人たちに教えてあげたい気持に駆られるのです。でも今となっては，私の話に耳を貸してくれないでしょう。」

主はヨセフに対する約束の中で，近代のこの予言者について，彼は人人を救いに導くと言われた。それはなぜだろうか。そのわけは，キリストが十二使徒に次のように言って与えられたと同じ権能を，彼に授けたもうはずだったからである。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んで聖任したのである。……」（欽定訳ヨハネ15：16）「……あなたが地上でつなぐことは，天でもつながれ，あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう。」（マタイ16：19）この権能なくして，主の認められるイエス・キリストの教会は地上に存在し得ない。

主はさらにヨセフへの約束の中で予言者ジョセフに関して，「わが目の前に於て彼を大いなる者となさん」（IIニーファイ３：８）と言われた。

世がこの神権時代のこの予言者をどのように思おうと，主の目から見て彼は大いなる者となると約束しておられる。主は彼の誕生３千年も前から彼をとどめ置かれた。

ちょうど救い主がみ業に召されたように，彼にも大切な使命があったからである。使命は異なっていたが，人類を救う主の大いなる永遠の計画の一部であるという点で同じように大切であった。

予言者ジョセフ・スミスの後継者たちについても同じことが言える。ブリガム・ヤングを例に取れば，これまでの歴史に彼のような植民地開拓者はいないと思う。現在私たちが山間のこの谷間で享受しているものを，このタバナクルを，この神殿を見ていただきたい。この町そのものも，開拓者を砂漠のこの地に導いて一大社会を築き上げた彼の所産である。

彼の後に続いた各予言者も顧みることができよう。私の父親は馬車で40マイルも離れたこの場に少年であった私たちを連れてきては，教会の指導者たちになじませてくれた。ウイルフォード・ウッドラフが最後の説教をするときに（それが生前最後の説教だったと思う）このタバナクルに座って，主のみたまがどんなに自分を導き助けてくれたかを語る彼の話を聞いた少年の頃のことを今でも覚えている。ウッドラフ大管長は本当に主に近い生活をした人であった。真夜中に霊感を受けて起き出し，樹齢百年を越える樫の木につないでおいた馬車をほかに動かした話は，お聞き及びであろう。その後で旋風が起こり，樫の木が巻き上げられて，さっきまでウッドラフ夫妻が寝ていた馬車のあったちょうどその場所に叩きつけられたのである。もしも彼がみたまの促しを聞き流していたならば，命を落としたはずであった。

ウッドラフ大管長は，イギリスから開拓者と聖徒たちの移民団を導いてきた話をした。一行がニューオーリンズに上陸したとき，彼は乗船の手はずをつけて1隻の汽船に乗ろうとした。すると，「その汽船に乗ってはいけない。あなたもみんなも」と何かが言ったような気がして，彼は船長に礼を言い，その場で待つことにした。あとで汽船は川を上るどころか船火事に遭い，ひとりも生存者がなかったという。彼は，「もしも私が主のみたまの声に従わなかったとしたら，何々兄弟も何々兄弟も生きていなかったはずです」と，一行の中にいた人々の名前をあげた。

まだほかにも，知友にあずかる特権を得た予言者たちがいる。ヒーバー・グラント大管長を，私は心から愛している。私は彼によって教会の管理監督会に召された。また，新しい予言者の父君であるジョセフ・F・スミス大管長を心から愛している。彼は私の知る限りで最も偉大な予言者の中のひとりである。私は彼がこのタバナクルで話をし，人々を祝福するのを聞いた。彼の霊の力強さに，涙しない人はいなかったと思う。私が2度の伝道を終えて彼の事務室へ報告に行くと，彼は私を抱きかかえるようにして，「リグランド，私たちはあなたを愛していますよ」と言った。そのひと言に，それまでの伝道活動がすべて報われた思いであった。

それから，デビッド・O・マッケイ大管長のことを思い出す。何年間も教会のどこへ行っても，聖徒たちから「マッケイ大管長に私たちの愛を伝えて下さい」とことづてされた。ほんの小さな子供からまでも手紙を書いて，大管長に渡して下さいと言われた。彼は本当に素晴らしい指導者であった。

何年か前に東部からやってきた実業家の話を聞いたことがある。彼は商工会議所の秘書に話をしていて，「ここにいるうちにこれだけはしておきたいと思うことがあるが，一体何だかわかるかね」と聞いた。秘書が「さあ，何でしょう」と言うと，彼は「あの人だよ，モルモン教会の大管長のデビッド・O・マッケイに会いたいものだ」と言った。秘書は，「そうですか。多分会ってもらえると思います」と返事した。会見は実現し，マッケイ大管長はその実業家と1時間ほど語りあった。実業家は教会本部の正面階段を下りながら，秘書に向かってこのように言った。「一生に出会った中で，私が想像する世の贖い主の姿に一番近い人をあげろと言われたら，あの人だな。」デビッド・O・マッケイ大管長は教会の内外から愛されていた。

そして兄弟姉妹，ここに今，聖なる予言者たちの血を受け継いで私たちの前に立ち，生涯を教会に捧げて，恐らくは予言者ジョセフの時代以来福音の真理を説く書物をだれよりも数多く残したひとりの人がいる。きょうここで彼を支持した私たちの挙手を必ずや主は喜んでおられる。

私は，今大会の特色をなすテーマは，「なぜ予言者が？」ということであると思う。なぜ私たちに予言者が必要なのだろうか。そこで，ピーターセン兄弟が昨日引用した聖句が思い出される。主が予言者アモスを通じて言われた言葉である。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない。」（アモス3：7）これはどう意味であろうか。主が予言者なしで教会を建てられたり物事を行なわれたりしたという記録は皆無である。したがって聖典を心から信じる者は地上における神の永遠の真理を探すには頭に予言者を置く教会を抜きにして考えられないという意味である。

さらに，エルサレムを望んで立ったときの救い主のみ言葉が思い出される。

「ああ，エルサレム，エルサレム，予言者たちを殺し，おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど，めんどりが翼の下にそのひなを集めるように，わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それだのに，おまえたちは応じようとしなかった。見よ，

おまえたちの家は見捨てられてしまう。わたしは言っておく，『主の御名によってきたる者に，祝福あれ』とおまえたちが言う時までは，今後ふたたび，わたしに会うことはないであろう」。(マタイ23：37―39)

主のみ名によって来る者は，神の予言者以外にない。

救い主は，時の絶頂に主の来臨の道を備えるために遣わされたヨハネを証して，女から生まれた者の中でバプテマスのヨハネより偉大な予言者はいないと言われた。それにつけて思い出すのは，予言者マラキに語られた主の言葉である。

「見よ，わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求める所の主は，たちまちその宮に来る。……その来る日には，だれが耐え得よう。……彼は金をふきわける者の火のようであり，布さらしの灰汁のようである。」(マラキ３：１―２)

これが主の初めの降臨を言っているのでないことは明らかである。主はたちまち神殿に来られはしなかったし，生誕の日にだれもが耐え得たからである。また，金をふきわける者の火や布さらしの灰汁のように，すべてを清めながらやって来られたわけでもなかった。聖書には，主がまた降臨される末の時代には，不義な人々が山と岩にむかって，「さあ，われわれをおおって，御座にいますかたの御顔……から，かくまってくれ」と叫ぶであろうと記されている。(黙示６：16参照) 私の考えでは，この再臨の道を備える使者は，主のみ手に使われて大いなる末日の業を興し，再降臨の道を用意した予言者ジョセフ・スミスだと思う。

これらの聖句を読むと，私たちのこの時代になすと主が言われたと，昔の予言者たちが記している不思議な業は，一体予言者なしでどうして出来るものかと思う。使徒パウロは，主がみ旨の奥義を，すでに自分に示して下さったと語っている。(エペソ１：９参照) これは重大なことである。「それは，時の満ちるに及んで実現されるご計画にほかならない。それによって，神は天にあるもの地にあるものを，ことごとく，キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。」(エペソ１：10)この教会は使徒パウロによって啓示されたこの主のみ言葉を成就する計画を持つ，世の中でたったひとつの教会であり，この時代に主が立てられた予言者たちを持たずして，その実現は不可能である。

キリストを十字架につけた人々に向かってペテロが話したときのことが思い出されるが，そのときペテロはこう言った。「……あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを，神がつかわして下さるためである。このイエスは，神が聖なる預言者たちの口をとおして，昔から預言しておられた万物更新の時まで，天にとどめておかれねばならなかった。」(使徒３：20―21) 聖なる予言者たちがもたらすものを受けとめる予言者がいなければ，どうして万物の更新ができるだろうか。私たちはそれが，福音の回復によって成就されたことを証する。

私はマラキの言葉を思い出す。

「見よ，主の大いなる恐るべき日が来る前に，わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ，子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て，のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである。」(マラキ４：５―６)

もしエライジャ(エリヤ)が来なかったら，どういうことになるだろうか。また，もし地上に主のみ業を導く予言者がいなかったら，エライジャはだれのところに来るのだろうか。私たちは，このエライジャ(エリヤ)は来て，彼の神権時代の鍵を渡したことを証する。

イザヤを通して語られた主のみ言葉が思い出される。主はこう言われた。

「この民は口をもってわたしに近づき，くちびるをもってわたしを敬うけれども，その心はわたしから遠く離れ，彼らのわたしをかしこみ恐れるのは，そらで覚えた人の戒めによるのである。

それゆえ，見よ，わたしはこの民に，再び驚くべきわざを行う，それは不思議な驚くべきわざである。彼らのうちの賢い人の知恵は滅び，さとい人の知識は隠される。」(イザヤ29：13―14)

この教会は，イザヤが見た不思議な驚くべきわざであると思う。しかしそこに主のみこころを告げることのできる予言者がいなければ，果たしてそのわざができるだろうか。アモスは言っている。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは，何事もなされない。」(アモス３：７)

ダニエルがネブカデネザルの夢の解き明かしに呼ばれたときのことであるが，ネブカデネザルは見た夢の意味がわからず，占い師や賢人や星占術師に聞いてもだれも解き明かしができなかった。そこでダニエルを呼びにやった。ダニエルはやって来てこう言った。「……秘密をあらわすひとりの神が天におられます。彼は後の日に起るべき事を，ネブカデネザル王に知らされたのです。あなたの夢と，あなたが床にあって見た脳中の幻はこれです。」(ダニエル２：28) それから彼は，末の日に至るまでの世の王国の興亡を語り，末の時代には天の神が滅びもせず，他の人に征服もされないひとつの王国を興

し，それはあたかも人手によらないで山から切り出された石のように転がり出て，大きな山となって全地を満たすだろうと告げた。

皆さんに問いたい。なぜ予言者がいるのだろう。神がみこころとみ旨に告げてみ手に使われる予言者がいなければ，天の神はこのような業がお出来になるだろうか。

ちなみに，私が米国の南部諸州伝道部の伝道部長の任にあったとき，フロリダでひとりの宣教師が，ある晩その聖句について説教した。その会が終わって私がドアの所に立っていると，ひとりの男性がやってきて，福音伝道者だと自己紹介した。そしてこう言った。「モルモン教会がその王国だとはよもやおっしゃらないでしょうね。」私は「いえ，そう信じております。なぜですか」と聞いた。彼は「あり得ないことです」と答え，私が「どうしたわけで？」と聞くと，こう言った。「王のいない王国はないし，王がいないから，王国もないですよ。」そこで私は言った。「その先を読まれませんでしたか。ダニエル書の７章ですが，人の子のような者が天の雲に乗ってきて，天(あめ)が下のほかのすべての王国と権力と支配とを従えさせる王国が，彼に捧げられるのをダニエルが見ています。」（ダニエル７：13―14参照）

そしてその伝道者にこう話した。「人の子が天の雲に乗って来られるときに，もし王国が用意してなかったとしたら，王国を捧げることができるでしょうか。そのために，聖なる予言者たちの口から語られたすべてのことの回復があって，用意がされて，この教会があるわけです。」そして言った。「その国がどうなるか，知りたいとお思いでしょう。７章の少し先を読むと，ダニエルがこう言っています。『しかしついには，いと高き者の聖徒が国を受け，永遠にその国を保って』（ダニエル７：18）そしてそれだけではまだ足りないように，『世々かぎりなく続く』とつけ加えています。」

今，いと高き者の聖徒たちがこの大会に集まっており，あなたがたがふさわしければこの王国はあなたがたに与えられるという約束がある。そこで申し上げたい。あなたがたに大きな永遠の幸福をもたらすこの世で一番の仕事は，この堂々たるわざ，不思議な驚くべきわざを，それが全地を満たすまで押し続けることである。

このほかに，天の神が私たちの時代になすと定められたいろいろなことや，それが神の予言者なしではできないことをお話しようとすれば，たっぷり１時間はかかる。ここに立って，この教会が生ける予言者たちによって過去も現在も導かれていることを証するにとどめておく。私は心の底から，教会の新しい予言者，聖見者，啓示を受ける者と，その副管長を支持する。神が彼らを祝福されんことを。また世界中のシオンの聖徒たちを祝福されて，彼らが，神をその頭とし神の予言者たちによって導かれている偉大なこの末日のわざに携わるという素晴らしい特権にふさわしくなるよう，祈るものである。その祈りを捧げ，またあなたがたすべてを神が祝福されるようにと，主イエス・キリストのみ名によってお祈りする。アーメン。



平和への祈り

大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

兄弟姉妹，私たちは大切にしさえすれば自分の益となる数々のことを聞き，素晴らしい一日を過ごしてきた。

そして今また，総大会の幕を閉じようとしている。

私たちは共にこの場で新しい大管長会を支持し，主のしもべである予言者たちの口を通して主から勧告と指示を受けた。

また，みたまのもたらす良きものにあずかり，主からしか受けられない力を感じ，信仰と証を強くした。

私たちは，主を礼拝し，主に対する愛と主の大義に捧げる献身を確かめようと，そしてこの戒めを守ろうと心に望みながら，この場にやってきた。「……汝心を尽し，勢力と思いと体力とを尽して主なる神を愛すべし。またイエス・キリストの名によりて神に仕うべし。」(教義と聖約59：5)

私は大会の目的が果たされたと感じている。今や私たちは，御父のみ業に新たな思いを込めて献身し，天父のあらゆる子供たちを祝福するために自分の力を尽くす決意を固めて，各方面へいで行く用意ができている。

今こそ「あなたがたの光を人々の前に輝かし，そして，人々があなたがたのよいおこないを見て，天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」(マタイ５：16) という主の勧告に心を留めようではないか。

私はあなたがたを祝福し，神がその民と共におられること，私たちが従事しているこの業は主の永遠の目的が成就されるまで，勝利を収め，広がり続けることをはっきりと言明する。また，天の祝福が私たちとすべての人の中にあることを祈る。

願わくは天が全地に義と真理を注がれんことを。

あらゆる人が聞く耳を持って，主のしもべが語る真理と光の言葉に心を留めんことを！

各国あらゆる民の間に主の目的が速やかに成就されんことを！

至高者の聖徒である教会員が信仰を強め，心に義をなす望みを増し，主のみ前に畏れおののいて自分の救いをかち得るように祈る。

あらゆる民の中で善良な人々，正直な人々が，真理を求め，まことの原則を支持し，自由と正義の道を広めるよう，導きを祈る。

この苦悩する困難な時代に，すべての人が世に生まれ来る万人を照らす，かの光によって導かれ，人類を悩ます問題を解く知恵を得るように祈る。

あらゆる人々，老いも若きも，悲しむ者も飢える者も貧しい者も，不幸な境遇にある者，恵まれない環境にいる者，助けや救いや知恵の必要な者に，憐み深い御父が祝福を注ぎ，御父のみが与え得る良きもの，大いなるものを恵まれんことを。

私もあなたがたと共に，全地にいる御父の子供たちすべてに愛と関心と同情を持ち，民の状態が物心両面で向上するように祈り，また彼らがキリストのみもとに来て学び，キリストのくびきを負い，心の安らぎを得るように祈っている。主のくびきは負いやすく，主の荷は軽いからである。

末日聖徒と，末日聖徒に加わって天父の戒めを守るすべての人が，この世にあっても来るべき永遠の世にあっても平安を得られる生活ができるように，これらすべてを謙遜に感謝をもって，主イエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。

目　次

第140回
半期総大会
1970
10. 2-4

時の動き

1970

4.11　米，アポロ13号打ち上げ。事故発生のため帰途につく。17日，無事帰環。

5.31　ペルーで大地震。死者推定数万人。

7.12　パピルス船，ラー 2 世号，太西洋横断に成功。

9.13　日本万国博覧会，幕を閉じる。

10.2-4　第140回半期総大会。

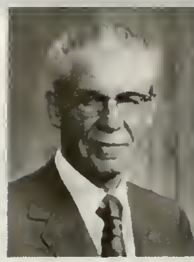
大管長会



第一副管長
ハロルド・B・リー



大管長
ジョセフ・フィールディング・スミス



第二副管長
N・エルドン・タナー

十二使徒評議員会



スペンサー・W・キンボール



エズラ・タフト・ベンソン



マーク・E・ピーターセン



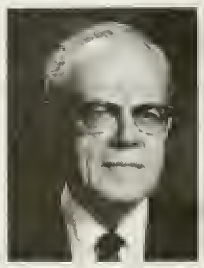
デルバート・L・ステイプレー



マリオン・G・ロムニー



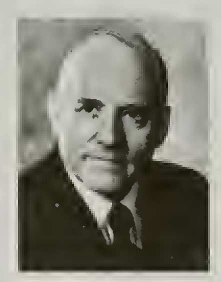
リグランド・リチャーズ



リチャード・L・エバンズ



ヒュー・B・ブラウン



ハワード・W・ハンター



ゴードン・B・ヒンクレー



トーマス・S・モンソン



ボイド・K・パッカー

大祝福師



エルドレッド・G・スミス

神権の誓詞と誓約



大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する神権者の皆さん，私は，多くの場所に集っておられる神権者の方々に話すこの機会を喜びとしている。

きょう皆さんと共に考えたいのは，メルケゼデク神権の誓詞と誓約についてである。私は，もし神権の職を受ける時に交わすこの誓約について，また召しを全力を尽くして果たしたときに主よりもたらされる約束について私たちがはっきり理解するならば，永遠の生命を得るためになさなければならないすべてのことをなそうとする気持が一層高まるであろうと考えている。

さらに言うならば，この大神権に結び付くあらゆる事柄は，神の王国において永遠の生命を受けるための備えをさせるという意図と目的を含んでいるのである。

1832年9月，主はジョセフ・スミスへの神権に関する啓示の中で，メルケゼデク神権が始めもなく終わりもないものであると言われた。この神権は福音を授ける権能であり，いつの時代にも真の教会には存在すること，さらに神の知識の鍵を保つものであると言われた。主のみ言葉によれば，人はこの神権により聖められ，神の面(おもて)を見，さらには「主の無上完全なる栄光である主の休息(やすみ)に入るのである。(教義と聖約84：17—24参照)

続いて主は，アロン神権とメルケゼデク神権についてこう言われた。「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得，而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは，『みたま』により聖められてその肉体再新さる。

これらの者はモーセの息子たちとなり，アロンの息子たちとなり，アブラハムの子孫となり，また教会員にして王国の民となり神の選民となる。

主は言う，またすべてこの神権を受け入るる者は，われを受くるなり。

そは，わが僕らを受け入るる者はわれを受くればなり。

また，われを受け入るる者はわが父を受くるなり。

而して，わが父を受け入るる者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。

而してこは神権に属ける誓詞と誓約によりて然るなり。

この故にこの神権を受くる者は，すべてわが父のこの誓詞と誓約とを受け，而してこれをわが父は破ることも変えることも為したもうはずなし。」

誓約を破り，ことごとくこれに違背する者に下される罰が，次の戒めと共に与えられている。「……汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。

そは，汝ら神の口より出るすべての言によりて生くべければなり。」(教義と聖約84：33—44)

言うまでもないが，誓約とは少なくとも二者の間で交わされる契約もしくは合意である。福音の誓約について言えば，当事者は天の主と地上の人間ということになる。人間は戒めを守ることに同意し，主はそれに対して祝福を与えることを約束しておられる。福音はそれ自体，新しくかつ永遠の誓約であり，主が人間に与えたもうすべての契約，約束，報いを含むものなのである。

このため，私たちはメルケゼデク神権を受けるとき，誓約をもって受ける。すなわち，神権を受け，神権の召しを全力を尽くして遂行し，神の口より出づるすべて言葉に従って生活することを厳粛に約束する。主はこれに対して，私たちが戒めを守るならば父のもてるすべて，すなわち永遠の生命を与えると約束したもう。これにまさる契約がほかにある

だろうか。

私たちはついつい「神権を全力を尽くして遂行する」と言いがちであるが，啓示にあるのは，長老，七十人，大祭司，祝福師，使徒として，それぞれの「神権の召し」を全力を尽くして遂行するということである。

人が受ける神権は，人類の救いのために必要なすべてのことを行なうために，神が地上にいる人間に委譲された権威であり，権能である。これに対して神権の職や召しは，その神権に対して特別に課されている奉仕の業を行なう職務上の割り当てである。従って，これらの召しを全力を尽くして遂行するには，自分が受けている職にあってなすよう求められている事柄を成し遂げることが必要である。

義務に誠実かつ忠実である限り，どの職にあるかは問題ではない。管理上ある職を持つ者が他の職を持つ者を管理したり指導したりすることは確かにあるが，かと言って職の間でこちらが偉大であるとかあちらが偉大であるとかいう区別は全くないのである。

私の父であるジョセフ・F・スミス大管長はこう語った。「この神権の職で，神権それ自体よりも偉大なものは全くない。職に伴う権能や権威は，神権から派生したものである。いかなる職も神権そのものに対して権能を与えることはない。またいかなる職も，神権の権威を高めるということはない。教会内のすべての職は，その権威と効力と権能を神権から得るのである。」

私たちは神権の召しを全力を尽くして遂行し，私たちが受けている職に付随する仕事を行なうよう求められている。神権に関する次の啓示で主が述べておられる通りである。「この故に各人皆自らの職務を守り，自らの天職を努め，……かくしてすべて互いに強め養いて，その系統完全に保たるるなり。」（教義と聖約84：109—10）

これこそ私たちが教会の神権プログラムを行なう上でのひとつの偉大な目標である。すなわち長老は長老の，七十人は七十人の，大祭司は大祭司の務めを果たすことによって各神権者が各々に与えられた固有の召しを全力を尽くして遂行し，約束された祝福を豊かに受けるのである。

さてここで，メルケゼデク神権の授与に伴う誓詞について少々話そう。

誓詞をもって誓うことは，人の口から出る言葉の中で最も神聖なものであり，かつ最も拘束力のあるものである。天父がキリストと神権に関して偉大なメシヤの予言をする時に予言者に用いさせたもうたのは，この種の言葉であった。こう記されている。「主は誓いを立てて，み心を変えられることはない，『あなたはメルキゼデクの位にしたがってとこしえに祭司である』。」（詩篇110：４）

このメシヤの予言についてパウロは，救い主が「変わらない祭司の務を持ち続けておられる」ために「朽ちることのないいのちの力」をお受けになったと説明している。（ヘブル７：24，16参照）ジョセフ・スミスは「この神権に聖任された者はすべて，祭司としての務めを続けて果たすことにより神の子のようになる」と語った。しかしこれには，誠実かつ忠実であれば，という条件が伴う。

従ってキリストは，バプテスマや他のすべての事柄の場合と同様，神権に関しても偉大な模範である。天父は，御子が神権を通してあらゆるものを受け継ぐと誓詞をもって誓われたが，私たちすべてに対しても同じ神権の召しを全力を尽くして遂行するならば，御父のもてるすべてのものを得ると誓詞をもって誓っておられる。

これが，メルケゼデク神権を持つすべての人に対する昇栄の約束である。しかしこれは条件つきの約束である。私たちは神権の召しを全力を尽くして遂行し，神の口より出づるすべての言葉に忠実に従って生活しなければならないのである。

私たちは，この特権を受け，聖なる神権を持ってキリストの使いとして働くという責任を果たすときに大いなる約束を受ける。これほど栄えある約束はないし，またあるはずもないことはだれの目にも明らかなことである。

アロン神権は，この大神権に伴う誓約を交わし，誓詞を受けるための備えをさせる神権である。

主を代表するように召され，この権能を受けている私たちが，自分が何者かを知り，それにふさわしく行動するよう祈るものである。

最後に，神権をいただいていることに対して私の感謝の気持を申し述べたいと思う。私はこれまで，自分の神権の召しを全力を尽くして遂行し，この世にあって終わりまで耐え忍び，後の世にあっては忠実な聖徒の群れに加えてもらいたいと思ってきた。

私たちには聖なる神権が実際にあることを証する。神権は神の力であり，私たちはこの神権を通して，後の世において天父の王国の完きを得ることができるのである。イエス・キリストのみ名により，アーメン。

神に逢う用意をする時



大管長会第一副管長・十二使徒評議員会会長

ハロルド・B・リー

現代の最も偉大な説教が語られてきたこの由緒あるタバナクルにおいて，主の日である本日，私はこの大会にお集まりの皆さんに，全人類にとって非常に大切な幾つかの原則に注意を向けていただくことを，話の目的としたい。まず，導入として皆さんがよく御存じの出来事をお話したいと思う。

私はこうしたことを踏まえた上で，へりくだり，この大会の精神に則した話ができるよう，神の導きを求めている。

本大会においてすでにほかの方々が話されたが，皆さんが御存じの出来事を私も例として使いたい。

数カ月前，全世界の何百万とも知れぬ人々がラジオ，テレビを通じて，アポロ13号の飛行を息をひそめて見守っていた。その時，全世界の願いはただひとつのことに集約された。すなわち，3人の勇敢な人達が無事に帰還するようにとの祈りである。

飛行士の一人が心配げに「船内に爆発が起こった」と通報してきた時，ヒューストンの司令室は直ちに技術専門家を全員召集した。彼らはこの飛行に関して綿密な計画を練ってきた科学者であった。

今や3人の生命はふたつの大切な事柄で決しようとしていた。ヒューストンの司令室にいる技術者たちの技術と知識が信頼できるかどうか，宇宙船内の人々が技術者からの指令を寸分のくるいなく実行するかどうか，という点であった。宇宙飛行士よりも技術者の方が根本的な問題の解決をはかるこいう点では優れていたからである。技術者の判断も完全でなければならない。さもなければ宇宙船は地球から何千マイルも遠ざかってしまうからである。

この劇的な出来事は，私たちが生きるこの不安定な時代と幾分似たところがある。今週の新聞にもまた驚くべき発表が報道されていた。合衆国の大統領諮問委員会が「合衆国の社会は危機に瀕している」と回答したのである。人々は世界中に信じられないようなことが起こっているのを実際に目にし，また耳にして愕然としている。至る所に政治的陰謀，戦争，不和があり，神聖な場としての家庭を破壊させる恐れのある社会問題と取り組んで挫折感を味わう親たち，信仰と道徳を覆えそうとする圧力に不安を覚えている子供や青少年がいる。

あなたとあなたの家族全員が主の道にあって究極的な平安を得るには，宇宙船内の飛行士たちが行なったように，自ら進んで耳を傾け従わなければならない。

混乱した現代には，人々が放つ苦悩の叫び声が渦巻いている。一方ではこれら膨大な問題を解決する手段，人類に及んでいるあらゆる緊張感をやわらげる方法がないものかとしきりに求める声があがっている。

しかし，昔の予言者の教えに通じている者は，周囲のすべてのものが混乱しているように見える今日にあっても，すべての出来事の意味を見失うことはない。

予言を裏の意味から定義すると歴史という言葉になる。私たちは過去の予言者たちが予言した事柄の成就を目の前に見ている。この神権時代がまさに始まった時に，主は啓示を下して，「……地より平和の取り去られ，悪魔自らの領土を支配する時は……今や近きにあり」（教義と聖約1：35）と言われた。現代の予言者たちも次のように予告を受けている。「その日，戦につきて聞かん，また戦のうわさにつきて聞かん。全世界は揺れ動き，人々は怖れおののきて言わん。キリストは世の終末までこの世に来ることを延ばされたり，と。人々の愛は冷やかになり，不法は満

つべし。」(教義と聖約45：26—27)
主が十字架につけられる前に，弟子たちは主が地上に再び戻られることを聞いていたので，その直前にどのようなしるしがあるかと尋ねた。すると主は答えて言われた。「その時，ユダヤ人とエルサレムに住む者に大いなるなやみあらん。……

もしその日少くせられずば，かれらは一人だに救わるることなからん。されど選民のため，誓約に従いてその日少くせらるべし。

……民は民に国は国に逆らいて立ち，また飢饉，疫病，地震ところどころにあらんためなり。」(ジョセフ・スミス1：18，20，29)

主は確かに，「人をその父と，娘をその母と，嫁をそのしゅうとめと仲たがいさせ……，そして家の者が，その人の敵となる」時のことを語られたのである(マタイ10：35—36)。

これらのことを考えてみると，次のような疑問が浮かんでくる。悩み苦しんでいる人は，だれに答えを求め，吹き荒れる「あらしを避ける所」をどこに求めたらよいのだろうか。

全能の神は，私たちの主である御子を通して道を示し，全人類に安全への確かな道しるべを与えられた。そして，主はその聖徒らを支配し，その真中にありてこれを統治すること，この世に審判が下ることを宣言された。(教義と聖約1：36参照)

主はすべての人に向かって言われた。「だから，目をさましていなさい。いつの日にあなたがたの主がこられるのか，あなたがたには，わからないからである。

だから，あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである。」(マタイ24：42，44)

主は勧告しておられる。「わが弟子たちは，聖地に立ちて動くことなかるべし。されど悪しき人々の中には，声を挙げて神をのろい死ぬる者たちあらん。」(教義と聖約45：32)

アポロ13号に起こった事件とこれまで引用した主の約束を心に留めて，次にしばらくの間，全人類の救いに関する驚くべき計画について考えてみたい。人はこの世の生涯を終えて究極の目的である，命を与えたもうた神のみもとへ帰るわけであるが，そのためには救いの計画に従わなければならない。主はこの方法によって，「その聖徒らを支配し，その真中にありてこれを統治」するという約束を成就されるのである。

現代の福音の神権時代の初期に，この計画には名前がつけられ，教会員に対してその崇高な目的がはっきりと示されたのである。

主は1世紀以上も前にこう述べておられる。

「またかくの如く，わが永遠の誓約を世に遣(おく)りて世の光となし，またわが民とこの光を求め来る異邦人とのために一つの旗となし，わが前に道を備うるためわが前に立つ一人の使となしたり。」(教義と聖約45：9)

こうして，この計画は誓約となった。すなわち二人以上の当事者をもつ契約という意味である。主に選ばれた者とこの計画から恵みを受ける世のすべての人にとっての標準となったのである。そして，この計画の目的とするところは，すべての人の必要を満たし，主の再臨に世の人々を備えさせることである。

前世においてこの計画が発表された場には，天父の霊の子供全員が集まっていた。私たちの持つ最も古い聖典である古代の予言者アブラハムとエレミヤの記述も，神エロヒム，長子エホバ，アブラハム，エレミヤ，その他多くの偉大な人々がその場にいたことを確認している。

地球が創造される前，すでに霊となっていたすべての組織せられたる英智がそこにいた。その中には高貴にして偉大な者が大勢いた。彼らは前世において自らの行ないにより，この永遠の計画を実施する上での統治者，指導者となるにふさわしいことを証明した者たちである。

使徒パウロは，コリント人に宛てた手紙の中で次のように教えている。「……多くの神，多くの主があるようではあるが，わたしたちには，父なる唯一の神のみがいますのである。万物はこの神から出て，わたしたちもこの神に帰する。また，唯一の主イエス・キリストのみがいますのである。万物はこの主により，わたしたちもこの主によっている。」(Iコリント8：5—6)

特に，父なる神「から」という言葉と，主イエス・キリスト「によって」という言葉に注目していただきたい。この聖句にはそれぞれの御方の役割がはっきりと示されている。主は，御父の命により，全人類のための救いの計画をすべて遂行したもうのである。(アブラハム4章参照)

私たちは，神の管理の計画におけるこの原則を理解すると，古代の予言者たちに与えられた啓示にわずかながら記録されている神々の評議会の様子を多少なりともうかがうことができる。

御父の命令のもとにエホバが指示を下し，地とそれにつけるすべてのものが組織され，形造られた。彼ら(神々)は，地に「命じ」，「見守り」，「備え」たもうた。そして，人間を含むあらゆる生き物とあらゆる物を地にもたらすことについて「神神同志議り」，この計画を実施すべく地を備えたもうた。これは青写真とも言うべきもので，「神の栄光」すなわち全人類が「不死不滅と永遠の生命」とを得る機会をもたらすという神の目的を遂行するために神の子供

たちを導き，訓練するものである。永遠の生命とは，命じられたすべてのことをなすことにより，神とキリストの住まう日の光栄の世界で永遠に続く生命を受けることである。（アブラハム3：25参照）

この救いの計画には3つの明確な原則がある。

第1に，すべての人は神の律法に従うことにより「自由と永遠の生命」を得るか，不従順により霊的な「束縛と死」を得るかのいずれかを自分で選ぶという特権が与えられている。（IIニーファイ2：27参照）

自由意志は神が人に与えたもうた賜の中で生命の次に大いなる賜である。これにより神の子らはこの死すべき第二の位において進歩する機会が与えられた。古代の聖典によると，アメリカ大陸に住んだ一人の予言者は，このことについて，主の永遠の目的を成就するには反対のものがなければならないと，息子に説明している。つまり善悪いずれの方からも誘いがなければならないのである。聖典にはこう記されている。「……禁断の実に対しては生命の木があってこれは甘くかれは苦かった。それであるから，主なる神は随意に行う自由を人間に許したもうた。しかし人間はもしもあれに誘われこれに誘われなければ，随意に選び行うことはできないのである。」（IIニーファイ2：15—16）

この神の計画の第2の原則は，救い主の必要性に関するものである。神より最も愛された御子は贖いを成就することにより救い主となられた。パトモス島のヨハネは，救い主を「世の初めから」「ほふられた小羊」と述べている（黙示13：8）。また別の予言者は神の御子の使命について，「あらゆる人間のためにとりなしをしたもう。それであるから，メシヤを信ずる者は救われるのである」（IIニーファイ2：9）と述べている。

救いの計画をよく理解していない人々は，神の恵みだけで人は救われると言っている。しかし，神の恵みに関する教義を正しく理解するには，次の説明が必要である。ある予言者は意義深い言葉を述べている。

「だから私たちが力をつくして書き記すのは，自分たちの子孫と兄弟たちを説得してキリストを信じさせ，神との一致を得させるためであり，それは人が最善をつくしてはじめて，神のめぐみにより救われることを知っているからである。」（IIニーファイ25：23）私たちが世の救い主の贖いの血によって贖われるのは確かだが，そのためには私たちが自身の救いのためにできる限りのことをなさなければならない。

救いの計画の第3の原則は，「すべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得る」（信仰箇条第3条）ということである。救いにあずかるためのこれら基本的な律法と儀式ははっきりと示されている。

第1は，主イエス・キリストを信じる信仰である。

第2は，罪の悔い改めである。これは，神の律法に従わないという罪から離れ，二度と同じ罪を犯さないことを意味する。主はこの点についてはっきりと述べておられる。「……汝ら往きて今より罪を犯すなかれ，罪を犯す者には前の罪彼に返るべしと主なる汝らの神言う。」（教義と聖約82：7）

第3は水と霊（みたま）とによるバプテスマである。主がニコデモに教えられた通り，この儀式によらないで人は神の国を見ることも，入ることもできない。（ヨハネ3：4—5参照）

救い主が復活後，このアメリカ大陸の聖徒たちを訪れた時，この教えを強調して述べておられる。これは弟子たちへの最後の言葉でもあったようである。「そもそも，清からざるものは御父の王国に入ることを得ず。信仰をし，すべての罪を悔い改め，終りまで誠をつくし，以てわが血によりてその衣を洗いし者のほかには御父の安息に入り得る者なし。

さて，世界の隅々に至る者たちよ。汝らは聖霊を受けて聖められ，また終りの日にわが前に罪なしとせられんために今悔い改め，われに来てわが名によりてバプテスマを受けよ。これ汝らに与うる命令なり。

われまことに，まことに汝らに告ぐ，以上はわが福音なり。……」（IIIニーファイ27：19—21）

この地上にいるすべての人は，国籍，肌の色，信条にかかわりなく主の子供である。かの3人の宇宙飛行士が危機に瀕した時，司令室の技術者の指示に聞き従ったように，主の子らがイエス・キリストの福音を伝える真の使者の声に耳を傾けるならば，やがて主を見，主が生きておられることを知り，自らの召しと選びとを確かなものとするであろう。彼らは，「モーセの息子たちとなり，アロンの息子たちとなり，アブラハムの子孫となり，……神の選民となる。」（教義と聖約84：34）

終わりまで忠実な者に用意されたこの栄えある約束は，放蕩息子のたとえ話の中にはっきりと描かれている。自分の生得権を無駄にせず忠実だった息子に対して，父親，すなわち主の教えの中で父なる神がこう約束している。「子よ，あなたはいつもわたしと一緒にいるし，またわたしのものは全部あなたのものだ。」（ルカ15：31）

主は近代の予言者を通して，今日の忠実で従順な人々に対する約束の啓示を与えておられる。「……わが父のもてるすべては彼に与えられるべ

し。」(教義と聖約84：38)

それとも，私たちはナイヤガラの滝のすぐ上の早瀬に近づこうとする愚か者になりたいのだろうか。安全な場所へ行くようにとの警備員の声を，無視し，笑い，踊り，酒を飲み，馬鹿にして，ついには滅んでしまうのである。

3人の宇宙飛行士も，もしヒューストンの司令室からの細かい指示に従わなかったならば，同じ運命をたどっていたことであろう。彼らの生命はまさに，宇宙の力を支配し，統御する法則に従うかどうかにかかっていたのである。

イエスは，世の人々が正気を失い，「狭くて細い道」から入って主のもとへ来るようにとの呼びかけをあざけり笑う様を見て涙を流された。この「狭くて細い道」は，救いに関する神の永遠の計画にはっきりと示されている。

今日でも私たちの耳にイエスの叫び声が聞こえるのではないだろうか。「ああ，エルサレム，エルサレム，予言者たちを殺し，おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど，めんどりが翼の下にそのひなを集めるように，わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それだのに，おまえたちは応じようとしなかった。」(マタイ23：37)

黙示者ヨハネに語ったたとえ話にあるように，主はエルサレムの人々に対すると同じように今日の私たちに対しても呼びかけておられる。

主は言われた。「見よ，わたしは戸の外に立って，たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら，わたしはその中にはいって彼と食を共にし，彼もまたわたしと食を共にするであろう。

勝利を得る者には，わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど，わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である。」(黙示3：20―21)

そして今，使徒たちや予言者たちという土台の上に，主キリストを隅のかしら石として建てられた真の教会が教える救いの計画がここにある。(エペソ2：20参照) この計画に従ってこそ平安がもたらされるのである。それは世が与えるようなものとは異なり，主御自身と同様世のものに打ち勝つ者だけに主が与えたもう平安である。

「この人による以外に救はない，わたしたちを救いうる名は，これを別にしては，天下のだれにも与えられていないからである。」(使徒4：12)

私は心からこれらすべてのことを主イエス・キリストのみ名により証する。

最近，ある集会で私は一人の少女の証を聞き，胸を打たれた。病床にふせっている彼女の父親は，医師から不治の病いと宣告されていた。この父親は苦痛で眠れぬ夜を過ごした翌朝，妻に向かって，「きょうも感謝してるよ」と言った。「ええっ，何のこと」と妻が尋ねると，彼はこう言った。「神様がもう1日君と一緒にいられる日を与えて下さったことだよ。」

私はきょうこの大会の模様を聞いておられるすべての方々も同じように，神がきょうの1日を与えて下さったことを感謝するよう心からお願いしたい。何に対してかと言えば，何かやり残したことをする機会に対してである。悔い改めること，誤りを正すこと，道を踏みはずした子供を正しい方向に導くこと，助けを求めている人に手を差し伸べること，つまり，神に逢う用意をする日がもう1日与えられたことを神に感謝するのである。

いたずらに先走ってはいけない。現在抱えている問題に立ち向かう力を求めなさい。主は山上の垂訓でこのように忠告しておられる。「だから，あすのことを思いわずらうな。あすのことは，あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦労は，その日一日だけで十分である。」(マタイ6：34)

自分にできるすべてのことをなし，あとは私たちの父である神に委ねなさい。最善を尽くしますと言うだけでは不十分である。自分の力の及ぶこと，必要なことはすべてします，と言うべきである。

ニューヨーク市の市立放送音楽会館の壁に，次のような味わい深い言葉を刻んだ額が掛けられている。

「人が最終的にどこへ行くかは，新しい知識を得，新しい発見や征服を成し遂げたかどうかではなく，教えられた事柄を受け入れたかどうかで決まる。」

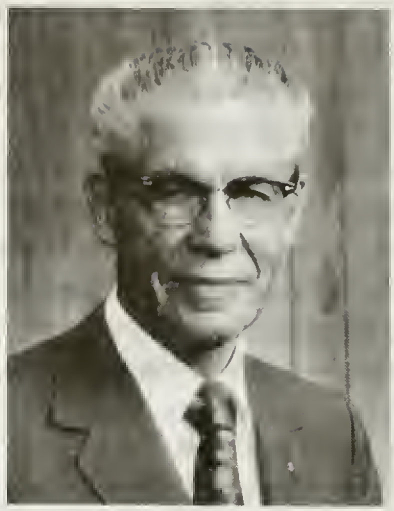
願わくは，これら知恵の言葉が，きょう大会の模様を耳にしているすべての人々に決意を促し，これによって私たちが神から離れることなく，やがては全身が光で満たされるように。こうして私たちは最早，闇の中を歩むことがなく，すべてのことを理解するようになるのである。(教義と聖約88：67参照)

神がそれを許したもうよう，イエス・キリストのみ名により祈り奉る。アーメン。

「偽善者よ，あなたがたはわざわいである」

大管長会第二副管長

N・エルドン・タナー



歴史的由緒のあるこのタバナクルを人々が埋め尽くしたこの光景は実に感動的である。この会場に集っておられる方々およびラジオ，テレビを通じて大会の模様に耳を傾けておられる方々に歓迎の意を表し，あわせてこれからの話に参加していただくようお願いしたい。

私たちはイエス・キリストの福音の教えを広く人々の間に伝えるという目的を持っている。これによって主のみ名を信じるすべての人の信仰と証を強めることができるようにしなければならない。なぜならば，主のみ名こそ，天が下で私たちを救い得る唯一の名であり，主の教えに従うことが，この世にあっては平和を得，来るべき世にあっては永遠の生命を得る唯一の方法だからである。

つい先日のこと，私がある人と話していた時，相手が突然次のように言った。「ほらあの人，あの人なら全面的に信頼できます。彼がどのような考えを持っているかよく知っていますし，決して自分をそれ以上に見せかけるような人でもありません。彼はいつも誠実で飾らない人です。」

同じ日に，今度はある人がまた別の人を指してこう言った。「あの人は本当にどういう人なんですかね。彼の言うことは全くあてになりません。ああいう人を主は偽善者と呼ばれるんでしょうか。」私も彼の意見にうなづくところがあった。

きょう私は，偽善者を話のテーマに取り上げた。特に末日聖徒イエス・キリスト教会の会員の方々にお話したい。現在私たちの教会は約300万の会員を擁している。内容は，主と隣人への奉仕に持てるすべてを投入する全く献身的で備えのできている会員から，まだ完全に改宗していなくてイエス・キリストの教えに従って生活することの大切さをわかっていない人や可能な限り積極的に奉仕しその備えをすることの大切さを理解していない人に至るまで多種多様である。

主の祝福を受け，交わる人々の信頼を得ようとするならば，福音を実生活に生かし，また正直に活発に福音の教えを実践し，人々に教える備えをしていなければならない。イエス・キリストの福音は私たちにいかに生くべきかを教えている。ここで偉大な福音の真理を幾つか引用してみたいと思う。

主は言われた。「これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」（モーセ1：39）

「わたしはよみがえりであり命である。わたしを信じる者は，たとい死んでも生きる。

また，生きていて，わたしを信じる者は，いつまでも死なない。」（ヨハネ11：25—26）

主を試そうとして「律法の中でどのいましめがいちばん大切なのですか」と尋ねた律法学者に答えて主は次のように言われた。「『心をつくし，精神をつくし，思いをつくして，主なるあなたの神を愛せよ』。

これがいちばん大切な，第一のいましめである。

第二もこれと同様である，『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。

これらの二つのいましめに，律法全体と預言者とが，かかっている。」（マタイ22：36—40）

またこうも言われている。「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは，困っている孤児や，やもめを見舞い，自らは世の汚れに染まずに，身を清く保つことにほかならない。」（ヤコブ1：27）

十戒は非常に明確な表現で規定されており，そこに何らの注釈も必要ないし，疑問の余地もない。山上の垂訓は人類に対するキリストのメッセージであり，私たちが自らの導き

として主の祝福とみたまを得るには何をなすべきかを教えたものである。この点についても疑問の余地はない。さらには信仰箇条，これには生活を営む上での高度な規範が定められている。

イエスは言われた。「わたしにむかって『主よ，主よ』と言う者が，みな天国にはいるのではなく，ただ，天にいますわが父の御旨を行う者だけが，はいるのである。」（マタイ7：21）

この末日に主はこう言っておられる。「汝らわが言うところを行わば，主なるわれこれに対して責任あり。されど，汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」（教義と聖約82：10）

そして，素晴らしい約束が与えられている。「…この誡命に従って歩むすべての聖徒らは，そのへそに健康を受けその骨に髄を受けん。

また智恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。

而して走れども疲れず，歩けども気を失うことなからん。

主なるわれ彼らに一つの約束を与う。すなわち，さつりくの天使はイスラエルの小児たちが如く，彼らを過ぎ越して居ることなかるべし。」（教義と聖約89：18—21）

私たちは信仰に対して忠実であるよう命じられ，悪と偽善に対抗するよう警告を受けている。事実，主は偽善という悪を非常に強調しておられる。主は言行が一致しない人々をきびしく非難された。「偽善な律法学者，パリサイ人たちよ。あなたがたは，わざわいである。…へびよ，まむしの子らよ，どうして地獄の刑罰をのがれることができようか。」（マタイ23：29，33）

辞書によると，この「わざわい」には，悲しい状態，大きな苦悩，不幸，苦難，悲惨な状態などの意味がある。偽善者とはありもしない信念や主義をさも持っているかのように装う人，自分を偽る人，特に徳や信仰があるかのように見せかける人のことである。

福音書の中で救い主は偽善に関して様々の例をあげておられるが，いずれの場合も次のように言っておられる。「偽善な律法学者，パリサイ人たちよ。あなたがたは，わざわいである。」

私は偽善を問われる例を幾つかあげたいと思うが，それらが私たちにあてはまるかどうか，自分を振り返ってみるとよいと思う。今日の世の中の状態を見れば，正義の原則や慎しみがないがしろにされ，偽善がはびこり，その結果国家や個人が悲しむべき状態に追い込まれていることは一目瞭然である。

主は言われた。「重い荷物をくくって人々の肩にのせるが，それを動かすために，自分では指一本も貸そうとはしない。

そのすることは，すべて人に見せるためである。

また，宴会の上座，会堂の上席を好み，

…あなたがたは，やもめたちの家を食い倒し，見えのために長い祈をする。だから，もっときびしいさばきを受けるに違いない。

…はっか，いのんど，クミンなどの薬味の十分の一を宮に納めておりながら，律法の中でもっと重要な，公平とあわれみと忠実とを見のがしている。それもしなければならないが，これも見のがしてはならない。

盲目な案内者たちよ。あなたがたは，ぶよはこしているが，らくだはのみこんでいる。

…杯と皿との外側はきよめるが，内側は貪欲と放縦とで満ちている。

…あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが，内側は死人の骨や，あらゆる不潔なものでいっぱいである。

このようにあなたがたも，外側は人に正しく見えるが，内側は偽善と不法とでいっぱいである。

…あなたがたは預言者の墓を建て，義人の碑を飾り立てて，こう言っている，

『もしわたしたちが先祖の時代に生きていたら，預言者の血を流すことに加わってはいなかっただろう』と。」（マタイ23：4—6，14，23—25，27—30）

クリスチャンを公言している私たちにもこのような過ちがないかどうか，考えてみる必要がある。現代でもよく見られることであるが，当時も人々は兄弟たちの間では律法を厳格に守った。だが，一歩外へ出ると，彼らは他の民に軽べつと非難の目を向けていた。このように表面的には異教を避けていても，精神的には異教を受け入れていたのである。

律法を表面的に守るだけで律法の精神を忘れ，隣人に愛と信仰を表わしていないという人が私たちの中にいないだろうか。私たちは心を変えることよりも，人の目につく表面的な行ないをする方に重きを置いていないだろうか。杯の内側を清める方法はひとつしかない，それは，へりくだり，悪の道を離れ，能力の限りを尽くしてイエス・キリストの福音に従った生活を送ることにより，清い心を持つことである。私たちは人を欺くことはできるかも知れないが，神を欺くことはできない。

今日の文明は，白く塗った墓に似てはいないだろうか。目を見張るような機械類，高層建築，その他私たちが進歩と呼んでいるしるしが無数にある。しかしその裏には，不安，人と国家の争い，救いがたい貧困，大規模な戦争による死人の骨が山積している。

あらゆる種類の犯罪，人口の都市集中，道徳の低下，ポルノ映画，ポルノ文学等が横溢する現代社会にあ

って，私たちはなお一層義を断固として守らなければならない。酒類の消費量の増加と社会問題の増加に相関関係があることを知りながら，全くの利己的な理由に基づいてアルコール性飲料規制法の制限を緩和しようとしている人々がいる。このような偽善が放置されていてよいものだろうか。

旅行者や業者の歓心を買うために酒類の販売を容易にし，その結果，新聞紙上をにぎわしている通り，高速道路での自動車事故，死，健康問題，家庭の崩壊を招いている。社会と個人が被っている損失は，いかなる救済金をもってしてもまかなえるものではない。

アメリカ・アルコール問題協議会は以下の宣言を決議している。「国民の大多数がマリファナの普及を憂慮しているが，私たちはアメリカにおける麻薬問題の第一位を占めるのはこれまでと同様アルコールであり，人々の生命，肢体，福祉に及ぼす害は，他をはるかに圧するものがある。」

私たちは，麻薬に対しても同じような関心を持つべきである。麻薬は人生を台無しにし，本人だけでなくまわりの者にも大きな不幸をもたらす。しかし若者をこのような形の反抗に追い込んでいるのは，大人の生活に見られる偽善である。つまり，一方ではカクテルパーティーやその他首をかしげたくなることをしながら，他方ではそうした両親の行動を別な方法でまねしようとする若人に対してヒステリックに叱りつける偽善が，彼らに大きな影響を与えているのである。子供が大人の言葉に耳を傾けるのは，大人が正しい模範を示している時だけである。

法律やその他の手段によって，若人を悪にひきずり込もうとする者たちの手から守る私たちの責任は年々増大しているが，同時に悪い習慣に陥った若人を立ち直らせる責任もおろそかにすることはできない。クリスチャンを自称し，隣人すなわち援助を必要としている人を愛していると言うのならば，アルコール中毒患者，麻薬中毒者，仮釈放中の人々を助ける施設を作ろうと努力している人々に協力できないはずはない。けれども自分たちの町には御免だと言って，そうした施設の建設を妨害している人々が現実にいる。こうした不幸な人々にこそ私たちの助けが必要なのである。私たちは良きサマリヤ人になって，可能であればいつでも人々を助ける備えをしなければならない。

知恵の言葉を厳格に守りながら，他人に対して偏見と非難の目を向けることにはおさえのきかない人が私たちの中にいないだろうか。また会社員としては神経質なほどに礼儀正しく，教会の集会も欠かさず出席していながら，社会の明らかな不公平に何の声もあげず，隣人に対して不公平や不正な扱いをしている人が私たちの中にいないだろうか。

私たちは本当の意味で隣人の福利に関心を持っているだろうか。未亡人や孤児を訪問し，貧しい人や困っている人に食物と衣服を提供し，慰めを与えているだろうか。予言者アルマは当時の人々の中に「人民相互の間に非常な不平等があって，ある者は甚しく傲慢になってほかの者をいやしみ，貧しい者や着物のない者や飢えている者や渇いている者や病気をしている者や悩んでいる者をかえりみないことを認めた。

これはまことに民を非常に悲しませるもとになったことであるが，一方には…およそ救助を要する者を救助し，たとえば貧しい者に持物を分け与え，飢えた者に食物を与えて，…あらゆる艱難をその身に受けた。」（アルマ４：12―13）

最近扶助協会の組織とプログラムに手直しがあり，姉妹たちはこれまで以上に彼女たちの組織の大きな目的に時間と精力を注ぐことができるようになった。すなわちシオンの母親と娘たちの霊的，精神的，道徳的な福祉を見守ることである。扶助協会の姉妹たちは福音を教え，あらゆる世代の女性により良い家庭を築くための備えをさせ，助けを必要とする人に心からの奉仕をすることを求められている。

この大いなる組織に属する姉妹たちは毎週何千時間もの慈善奉仕を行なっている。しかしながら，まだ手を差し伸べられていない病人，一人暮らしの人，慰めを必要としている人は数多い。私たちはあらゆる機会をとらえて周囲にいる困っている人に助けと慰めを与えなければならない。利己的な世の楽しみや世の富を得ることばかりに熱中して，この義務と特権をおろそかにしてはならないのである。

私たちはよく，隣人に愛を示したり，欠かさず教会の集会に出席するという宗教活動を，ほかの分野で求められている事柄と比較し，ほかの人に決して負けないだけのことはしていると言って，逃れようとすることがある。ある人たちはこう言う。「あの人みたいに偽善者になりたくないから私は教会へ行きません。湖や山で自然と接しながらでも神を礼拝することができます。」

だが主は次のように言っておられる。

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様，祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。

そは誠にこの聖日は，汝命ぜられて働きを休み，いと高き者に礼拝を捧ぐべき日なればなり。

さりながら汝の誓言は，正しく毎日常に神に捧げられざるべからず。

されどこの主の聖日に於ては，いと高き者に汝の捧物と聖式とを奉り

て，兄弟たちに向い主の前に於て汝の罪を告白するを忘るべからず。」(教義と聖約59：9—11，12)

福音のどの部分が正しいとか，どれを実践するとかを私たちは選ぶことができない。私たちは生活を幾つかに切り離すことはできないのである。主は言われた。「…それもしなければならないが，これも見のがしてはならない。」(マタイ23：23)

私たちは行ないにおいてクリスチャンでなければならない。生活を通して主なる神に愛を示し，隣人に愛と関心を示すのである。私たちはすべて自分の家を整えるべきであり，偽善者であってはならない。

牧師であり作家であった米人ハリー・エマーソン・フォスディック(1878—1969)は，偽善にはふたつの種類があると述べている。すなわち，実際よりも自分を良く見せようとする偽善と，実際よりも悪く見せようとする偽善である。これまで話してきたのは，実際よりも良く見せようとする偽善である。しかし，教会員の中には，心の中で知って信じていながら，人の口を恐れる余り教会員であることを認め公言しない人がいる。これも重大な偽善行為である。これでは人々の尊敬を勝ち得ることはできないし，私たちが教会に忠誠を尽くしためらうことなく信仰を公言すると思っている教会員に対しても悪影響を及ぼすことになる。

キリストの教えに従おうと真剣に努力しなければ，本当の霊的成長はない。私たちはどのような場所にあっても恐れることなく自分の信念を貫き，教会の標準に従って行動すべきである。人はとやかく言い，あざけり笑うかも知れないが，それでも私たちが信念を貫き，教会の標準に従うことを期待し，そうする私たちに尊敬の念を抱くのである。高い標準に従った生活を送ることが，良心的で公正な人々に不快感を与えるはずがない。

最近私は改宗して間もない家族と話す機会があった。話を進めてゆくと，この家族は教会に出席していないことがわかった。そこで私は父親に理由を尋ねた。すると，宣教師たちは善良で清い生活を送り，義を行なう立派な人だったが，いざワード部へ行ってみると教会で教えていることを実践していない人，言行が一致していない人が目につき，失望して教会に対する信仰を失ってしまったという答えが返ってきた。私はふたつの重大な教訓がこの出来事に含まれていると思う。第一は，私たちは人々に良い影響を与えるような生活を営む責任があり，私たちの生活の中に見られる偽善の故に人々に疑問を抱かせるようなことがあってはならないという教訓である。

もうひとつの教訓は，私たちは他人の生活にある偽善に左右されたり，ほかの人の偽善を見て福音の教えに従って生活することに疑問を持ち，ついには否定したりすることのないよう，常に自分自身を守らなければならないということである。

私たち教会員は真理と義の業に一致団結して揺らぐことのないようにすることが非常に大切である。私たちはキリストの福音を持ち，悪に立ち向かうことを世に宣言している。私たちは断固として立とうとしているのだろうか。それとも風の吹くままに揺れ動こうとしているのだろうか。心ではなく口先だけで主を礼拝すればよい，あるいは何か政治的な圧力が加わるからと言って世の人々を喜ばせるために義の業をやめてしまうのだろうか。

私たちは，以下のヨハネが述べたような者になってはならないのである。「しかし，役人たちの中にも，イエスを信じた者が多かったが，パリサイ人をはばかって，告白はしなかった。…

彼らは神のほまれよりも，人のほまれを好んだからである。」(ヨハネ12：42—43)

もし私たちひとりひとりが世の人人に向かって言明している通りの人間になるならば，約300万人の会員を持つこの教会がどれほど大きな影響力を及ぼすことになるか想像していただきたい。私たちひとりひとりが本当の意味で献身的なクリスチャンとして毎日を送り，偽らず，正直，真実，貞潔，慈善，高徳であってすべての人に善を行ない，徳高きこと，好ましきこと，よき聞えあること，あるいは褒むべきことを尋ね求めるのである。

予言者の言葉に耳を傾け，実行しようではないか。いにしえの律法学者やパリサイ人のように救い主を拒み，生命と共に与えたもうた救い主の教えを拒んで，救い主をさらに苦しませることのないようにしようではないか。私たちはそうした罪を退け，この世にあっては幸福を，来るべき世にあっては永遠の生命を受けるのである。私たちは，主が偽善者を戒めて言われた数々のみ言葉の結びにあたる者とならないようにしようではないか。

「見よ，おまえたちの家は見捨てられてしまう。

わたしは言っておく，『主の御名によってきたる者に，祝福あれ』とおまえたちが言う時までは，今後ふたたび，わたしに会うことはないであろう。」(マタイ23：38—39)

神は生きておられ，イエスはキリストであり生ける神の御子であること，また福音が回復されたこと，福音の教えに従って生活するならば私たちは永遠の生命を得ることを証し，イエス・キリストのみ名によりへりくだり祈る。アーメン。

「完全なるわが福音…宣べられんがため」



大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する兄弟姉妹の皆さん，末日聖徒イエス・キリスト教会の第140回半期総大会を開会するにあたり，歓迎の意を表わしたいと思う。

私たちは霊とまことをもって主を礼拝するために，再び一堂に会している。この特権を与えて下さった主に感謝すると同時に，この大会を通じて主のみたまが豊かに注がれるよう祈るものである。

また特に，ラジオ，テレビを通じてこの大会に参加している方々，信仰を異にしているが献身的で善良な御父の子らに対しても歓迎の意を表わしたい。

私は皆さんの信仰と祈りの力に支えられて話したいと思う。私は声をあげて教義を語り，証を述べ，感謝を表わすことのできるこの特権に感謝している。

私はこれまで60年以上にわたり，教会のステーキ部，伝道部において福音を宣べ伝えてきた。聖徒たちには戒めを守るよう求め，御父の他の子らには現在の神権時代に啓示によりもたらされた救いの真理を受け入れるよう勧めてきた。

私はこれまでの生涯，ひとときも休むことなく聖典を勉強し，その真の意味を理解できるよう主のみたまの導きを求めてきた。そして主はそれに答えて下さった。私は主が与えて下さった知識と，これまで救いの原則を教える特権にあずかってきたことを心から喜んでいる。

私は福音の諸原則に思いをめぐらすと，強く心を打たれることがある。それは，長年にわたり，幹部の兄弟たちは私が考えていることと同じ方法でそれらを教えてきたということである。福音の真理はとこしえに変わることがなく，神御自身と同じように，きのうもきょうも，永遠に同じである。私はこれまで教え，記してきたことを，状況が同じであれば同じように教え，書くであろう。

そして私自身について言うことは，すべての幹部の兄弟たち，すべての教会の長老たちにとっても同じことである。私たちはすべて，福音を宣べ伝え，キリストの教導者となり，警めの声をあげ，「互いにこの王国の教義を教」（教義と聖約88：77）えるように求められている。

この神権時代の初期に，主は導きと教えを施す業に召された人々に対して次のように言われた。「あらゆる人々主なる神すなわち世の救い主の名によりて語らんため，……完全なるわが福音，弱き者たち単純なる者たちによりて世界のいやはてまでも宣べられ，また王と統治者との前に宣べられんがためなり。」（教義と聖約1：20，23）

また，主の福音を「宣べんために出で行く」よう召された人々，主の教会のすべての「長老，祭司および教師たち」に対して，「『みたま』に導かるるまま」「聖書とモルモン経」と他の聖典に「誌されたるわが福音の原則を教うべし」と主は言われた。（教義と聖約42：11—13）

主の代理人である私たちは，世の哲学や現代科学の仮説を教えるために召され，権威を受けているのではない。私たちの使命は，啓示され，聖典に記されているままに，救いの教義を簡潔明瞭に宣べ伝えることである。

主は，標準聖典に記されている福音の原則をみたまの導くままに教えるよう指示し，次いで，教会において福音を教えるすべての人を拘束する偉大な宣言を発しておられる。「この『みたま』は，信仰の祈りによりて汝らに与えらる。而して汝らもし『みたま』を受けざる時は教うべからず。」（教義と聖約42：14）

以上の啓示の精神に則り，また全人類に対する心からの愛に基づいて，

教会員が福音を学び福音に従って生活し，能力と精力と財力とを使って世の人々に福音を宣べ伝えるよう，私はお願いしたい。私たちは主からひとつの使命を与えられている。主は私たちに，不屈の精神をもって出て行き，ジョセフ・スミスに啓示された救いの真理を世の人々にもたらすよう命じられた。

救いの計画の立案者は永遠の父なる神である。そして，この計画はすなわちイエス・キリストの福音である。「キリストの贖罪により，すべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得る」のである。（信仰箇条第3条）

いずれの時代であっても，福音が地上に存在するには，主の予言者にそれが啓示されなければならない。予言者は，その時代の人々のために救いの儀式を執行し，それを指示する正式な管理者として召されなければならない。

ジョセフ・スミスは，救いにかかわる真理を回復し，これら救いの真理を教える鍵と力とを受ける予言者として主がこの時代に召された人である。

主はジョセフ・スミスに対して，「今の代の人々には，汝によりてわが言を与うべし」（教義と聖約5：10）と言われた。また，ジョセフ・スミスを通じて回復された福音に関して，次のように言われた。「王国のこの福音は，すべての国民に証をなさんため全世界に宣べ伝えられん。而して後に，終りすなわち悪しき者の滅亡は至るべし。」（ジョセフ・スミス1：31）

このようにして私たちはイエス・キリストのみ名とジョセフ・スミスの名前を結びつけるのである。キリストは主であり，贖いの犠牲を成し遂げられた。キリストはよみがえりであり，命である。キリストにより，全人類はよみがえって不死不滅となる。さらに主の律法を信じて従った人々は永遠の生命を受ける。

ジョセフ・スミスは，この末日に，救いをもたらす福音の真理を，啓示によって受ける者として，福音の儀式を執行するために至高者より権能を受けた正式な管理者として召された予言者であった。

ジョセフを通じて明らかにされたこれらの真理は，キリストの再臨の前にすべての国に広められるはずである。従って，モロナイがジョセフ・スミスに対して次のように言ったのも大して驚くにはあたらない。「汝の名は，あらゆる国民，あらゆる血族，あらゆる国語の民の中に善くも悪しくも覚えられ，あらゆる人々の中に善くも悪しくも語らるべし。」（ジョセフ・スミス2：33）

後に主は予言者に対して次のように言われたが，これも驚くようなことではない。「地のいや果にある者すら汝の名を訊ね，愚なる者ども汝を嘲弄し，地獄は汝に向いて怒りを起さん。

然るに心の潔き者，賢き者，貴き者，徳ある者たちは汝の手の下よりいさめと権威と祝福とを常に求めん。」（教義と聖約122：1－2）

現在，地の隅々からジョセフ・スミスの名を尋ねる声があがり始めている。そして多くの国々で多くの人人がジョセフを通じて回復された福音の恵みにあずかっている。

ジョセフ・スミスに明らかにされたイエスに関する証は，この神権時代の初期より，合衆国，カナダ，イギリス，ヨーロッパ各地，太平諸島で宣べ伝えられている。

近年のメキシコ，中南米諸国における発展は信じがたいほどのものがある。

また，現在アジアの各地において福音のおとずれに対して門戸が開かれつつある。これも過去に見られなかったことである。日本，韓国，台湾，香港においてすでに確立し，タイ，シンガポール，インドネシアにおいても伝道を開始しようとしている。

まだ真理のおとずれを聞いていない国々においても，主のみこころにより門戸が開放される日がやがて来ることであろう。そこでイスラエルの長老たちは出で行き，予言者ジョセフ・スミスを通して今の世にもたらされたキリストの王国の福音とキリストについてそれらの国の心の正直な人々に語るのである。

今や私たちが宣教師を送りきれない程，多くの国々の門戸が開かれている。私たちはすべての資格ある末日聖徒の青年が主の使いとして出で行く特権にあずかり，世界の国々に真理の証し人として立つ日が来ることを待ち望んでいる。

現在多くの安定した年配の夫婦がこの宣教師活動に携わっている。そしてさらに多くの夫婦を宣教師に召すことができると考えている。資格があり，条件が許す人々は，身の周りを整えて，福音を宣べ伝える召しに応え，その責任を立派に果たしていただきたい。

この業に関して若い姉妹たちに課せられている責任は兄弟たちのそれと同一のものではないが，現在多くの姉妹たちが宣教師として働いている。若い姉妹に関して私たちは，主の宮居で結婚をすることに，より大きな関心を抱いている。

私たちは，教会員の皆さんに対し，財政的にこの宣教師活動を援助し，福音を広めるために自由意志に基づいて自らの財産を捧げるようお願いしたい。

この偉大な伝道活動に雄々しく携わっている方々に対し，私たちは心からの賛辞をおくりたいと思う。ジ

ョセフ・スミスはこう述べている。「様々なことが語られてきたが，結局，最も偉大で最も大切な務めは，福音を宣べ伝えることである。」

(*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」，p. 113)

全世界に住む天父の子らに申し上げたい。地のもろもろの国民に手を差し伸べている宣教師の言葉にどうか耳を傾けていただきたい。

人々が自分たちの神として主を受け入れ，霊とまこととをもって，主イエス・キリストのみ名により神を礼拝することを願ってやまない。

私たちはあらゆる人が，キリストを信じ，キリストを天父の生みたまいし独り子，神の御子として文字通りに受け入れるよう願っている。また，主の聖きみ名を信じ，主の戒めを守り，福音を宣べ伝えるよう主から遣わされた人々を受け入れ，主に対する愛を表わしていただきたい。

もし人々がキリストを信じ，自らの罪を悔い改め，バプテスマにおいて主の戒めを守ると誓約し，権能を受けた人の按手により聖霊を受け，戒めを守るならば，この世においては平和を得，来るべき世においては永遠の生命を受けるのである。

さて，世を捨て教会に加わる方々，あるいはすでに教会員となったすべての人々に対して申し上げておきたい。教会の会員であることは必ずしも福音の完全な祝福を約束し，日の光栄に入る保証を与えるものではないのである。バプテスマを受けた後，私たちは戒めを守り，終わりまで耐え忍ばなければならない。

ニーファイは教会員に対して次のように述べている。「……あなたたちはこの真直ぐで狭い道に入ったら，それで万事終りであるか。」

ニーファイは自ら答えている。「ごらんそうではない。あなたたちがもしもキリストの功徳に全く頼らなかったなら，あなたたちはここまで進んでくることさえできなかったのである。

それであるから，あなたたちはこれからもキリストを確く信じて疑わず，完全な希望の光を抱き，神とすべての人とを愛して強く進まなればならない。それであるから，この後もたえずキリストの言葉をよく味わいながら強く進み，終りまで堪え忍ぶならば『永遠の生命を受ける』，かくの如く天の御父が言いたもうた。」(IIニーファイ31：19—20)

福音を受れ入れ，その栄えある祝福を受け継ぐ以上に大切なことはこの世の中に存在しない。

教会員にとって，バプテスマの後戒めを守るようにとの勧告以上に大切なものはない。主は，悔い改めと主の律法に忠実であることを条件に，私たちに救いを得させたもうからである。

世の人々にうったえたい。悔い改めて真理を信じ，キリストの光を自らの生活のうちに輝かし，正しい真理の原則を大切にし，さらに今日啓示によってもたらされた光と知識をそれらに加えていただきたい。末日聖徒イエス・キリスト教会に加わり，福音の祝福を刈り取っていただきたい。

教会員に対しては，戒めを守って義を行ない，みたまを求め，主を愛し，神の王国につける事柄を第一に行なうようううったえたい。このように主のみ前におそれかしこんで自らの救いを得ていただきたい。

私は，教会の内外を問わずあらゆる人に証する。この末日の業は真実であり，神のみこころにかなうものである。

神は生きておられ，イエス・キリストは神の御子である。私は，1820年の春，御父と御子がジョセフ・スミスに姿を現わし，時満ちたる神権時代を開くよう命じたもうたことを，完全に知っている

ジョセフ・スミスは神の賜と力によりモルモン経を翻訳した。この書物は「ユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして，万国の民に現われたもうことを確信させるため」に世に出された。

末日聖徒イエス・キリスト教会は地上における神の王国であり，主の認めたもう方法で組織され，管理されており，主の示された道を歩んでいる。

この教会はまさしく主の教会であり，主が教会の諸事を指示しておられることをあらゆる人々に知っていただきたい。このような神の組織に名を連ねるということは何と素晴らしい特権であろうか。

私は，福音が広く伝えられ，あらゆる国の心の正直な人々が主イエス・キリストを知ることができるように祈っている。

宣教師と新しく改宗した人々の上に神のみ守りがあるように，また父なる神が愛とあわれみをもって彼らを助け，彼らの心に義しい望みを与えたもうよう祈っている。

また福音の標準が特に必要とされるこの混乱した時代に住む教会と世の若人のために私は祈りを捧げている。

私はこの世と主の教会と私たち一人一人の上に豊かに注がれている主の愛と恵みと祝福に感謝している。主イエス・キリストのみ名により，アーメン。



従順の律法

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

もしこの人生を最大限に役立たせようと思うならば，あるいはこの人生から最大の利益を受けようと思うならば，私たちはまず，どのような目的でこの地球が創造されたか，また私たちはなぜここにいるかを知る必要がある。

主は，アブラハムに，この地球の創造を計画する神々の会議の様子を示現によって示された。神は言われた。

「……われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而してこれらの材料をとりて，これらの者の住まうべき地を造らん。

而して，これによりて彼らを試し，何にてもあれ，主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。

而して，最初の位を保つ者は更に附け加えられ，最初の位を保たざる者は，最初の位を保つ者と同じ王国にて栄を得ることなからん。而して，第二の位を保つ者は，とこしえに栄光をその頭に附け加えられん。」(アブラハム3：24—26)

これがこの地球の存在する主な目的の詳細な説明である。

「これによりて彼らを試し」とは，何であれ主なる神が命じたもうすべてのことを私たちが行なうかどうかを確かめる，私たちを試すという意味である。

天の第一の律法は従順の律法であると言ってもおかしくはない。サムエル記上15：22には，従うことは犠牲にまさると記されている。犠牲のもたらす祝福と利益はすべて従順の結果なのである。

アダムとイブに対して最初に教えられた律法は従順の律法であった。二人がエデンの園を追われた後，アダムは祭壇を築き，犠牲を捧げた。「多くの日を経て，主の天使一人アダムに現われて言いけるは，汝何故に主に犠牲を捧ぐるやと。アダム彼に言いけるは，われその故を知らず，ただ主の誡命に従うのみ。」(モーセ5：6)

すると天使はその理由を「御父の生みたもう恩恵と真理に満てるただ独りの御子が犠牲となりたもうことのひながたなり」(モーセ5：7)と説明した。

戒めが与えられるときには，私たちにその理由を明らかにされず，後になって知らされることがしばしばある。

私たちはいわゆる盲従ということを恐れ過ぎることがある。盲目的であろうとなかろうと神に従うことは常に正しいことなのである。主はアブラハムに言われた。

「また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう。あなたがわたしの言葉に従ったからである。」(創世22：18)

申命記には次のような主の言葉が記されている。

「見よ，わたしは，きょう，あなたがたの前に祝福と，のろいとを置く。

もし，……命令に聞き従うならば，祝福を受けるであろう。

もし，……命令に聞き従わ……ないならば，のろいを受けるであろう。」(申命11：26—28)

パウロは神の御子イエス・キリストについて，ヘブル人に次のように述べている。「彼は御子であられたにもかかわらず，さまざまの苦しみによって従順を学び，」(ヘブル5：8)

神の御子であるイエスが従順を学ぶ必要があったとすれば，私たちにはどれほど必要であろうか。

予言者ジョセフ・スミスは次のように述べている。

「そもそも創世の以前より天に於て定められたる一つの変らざる律法ありて，あらゆる祝福はこれに基くなり。

すなわち，われら何にても神より祝福を受くる時は，この祝福の基く律法に従うによりて然るなり。」(教義と聖約130：20―21)

神の律法に従いたいという気持を目に見える形で表現できる律法が幾つかある。その例として，什分の一，献金，安息日などをあげることができる。私たちに安息日を聖く過ごすよう強制する法律をつくろうとする動きがあるが，私にはその意味がわからない。

私たちはまた，聖餐会に出席するよう命じられている。そのほかにも目に見える形で表現できる戒めはたくさんある。

主は次のようにも言っておられる。

「およそこれらの言葉を憶えて守り且つ行い，この誡命に従って歩むすべての聖徒らは，……。」(教義と聖約89：18)

これは什分の一，献金，安息日，聖餐会などすべての戒めを含んでいる。主は健康が祝福されることを約束した後，さらに次のような約束を付け加えておられる。「また智恵と知識の大いなる宝まことに隠れたる宝を見出さん。」

イエス・キリストの福音が真実であることの証以上の「秘れたる宝」があるだろうか。この「秘れたる宝」は神の律法に従った結果もたらされるのであって，健康であるために与えられるのではない。私は多くの改宗者から，どのようにして知恵の言葉を守るようになり，そして教会に加わったかを聞いている。教会に入る条件は健康ではなく従順である。改宗者は異口同音に，「それを主が望んでおられることでしたら，喜んで行ないます」と語る。

次になすべきことは明らかである。主のみこころを行ないたいと思うならば，主に助けを祈り求めなければならない。過去の習慣を変えることは決してなまやさしいことではない。主の助けが必要である。主の助けを求めて祈ることによって，それが一層たやすくなるのである。

そしてふたつの結果を得る。タバコやコーヒー，その他の習慣の味や欲望を忘れ去るようになる，と同時にイエス・キリストの福音が真実であることの証も得るのである。

今年の9月号の「インストラクター」誌に，昔からよく耳にするその例が掲載されている。求道者だったマリオン・プロクター夫妻は什分の一の律法と知恵の言葉を聞いて愕然とした。

「……私のようなスコットランド人にとって，これがどれほどの衝撃を与えるかを理解していただければと思います。最初私たちはこう答えました。『収入の10パーセントも納めるなんてとてもできません。』けれども長老たちは，私たちが納めれば主が祝福して下さると約束しました。私はしばらく考えて，什分の一を納めると言いました。

その夜，妻はよく眠っていましたが，私は眠れませんでした。寝返りをうちながら宣教師に言ったことを考えていました。『今すぐタバコをやめることはできません。でも明日の夜まで待って下さい。』私は起きあがると居間へ行ってひざまずき，祈りました。バプテスマを受けて神の王国に入ることができるように，助けて下さい，力を与えて下さい，タバコを吸いたい気持を取り去って下さいと天父にお願いしました。私はそれまでに何度もタバコをやめようとしました。タバコをやめる器械まで取り寄せもしました。けれどもことごとく失敗に終わっていました。しかしその夜私はひざまずいて祈っている時，天父は助けて下さると心に強く感じました。私は声を聞いたのです。『明日まで待たないで，今すぐタバコをやめなさい。私が助けてあげる。あなたは必ずタバコをやめられるでしょう。』私は祈りを終えて立ちあがった時，心の中に喜びと平安が満ちているのを感じました。

翌朝仕事に出かける前，ふとタバコが目に入りました。けれども手を伸ばさず，吸うのをやめようと自分に言い聞かせました。そして帰宅した時，タバコの箱を火の中に投げ込んで焼いてしまいました。それ以来，私はタバコを吸いたい気持が全くなくなってしまいました。」(『人生の半ばに』「インストラクター」1970年9月号，pp. 331―32)

彼の妻も同じような経験を語っていた。私は同じような話を何百も聞いている。

私は南部に住む二人の年老いた未亡人を決して忘れることができない。この二人は姉妹で，姉の方の未亡人が私にこう語ってくれた。二人は宣教師から知恵の言葉について聞いた時，これについて真剣に考えた。友達にも意見を聞いてみた。彼女はそれまで半生を通じてずっとタバコを吸っていたのである。友達は80代の半ばを越えて今さらやめるなんて意味がないと言った。そこで彼女は医師に相談した。医師はタバコをやめるとその反動がきて，とても耐えられないだろう，命にかかわるかも知れないと警告した。

それから彼女は自分を納得させるために理由を考え始めた。「私はもう80を過ぎている。どの道たいして生きられるわけではない。でも天のお父さまに合う準備をしなければ。努力していればたとえ次の世に召されても，『私はお父さまの望んでおられると思うことを一生懸命してきました』って申し上げることができる。」

とにかく彼女は天父が望んでおられると思うことをしようと決意した。

それは文字通り命をかけた決意だった。

彼女はタバコをやめ，何かが起こるのを待っていた。だが何も起こらなかった。命が危うくなるどころか，一日中良い気分で過ごすことができるようになったのである。

彼女は事の次第を妹に話した。すると妹は言った。「お姉さんにできるのなら私にもできるはずだわ。私を待っていて下さい。一緒に教会に入りましょう。」

それから1年後に二人は私の事務所を訪れて，この話をしてくれたのである。二人は神殿に入り，それぞれの夫との結び固めを受けていた。

80歳を越えたこの二人が得たのは健康の祝福だけではなかった。永遠の結び固めの祝福までも受けたのである。

知恵の言葉を守る者への祝福は，健康の祝福だけだろうか。もし知恵の言葉を守るならば，什分の一，安息日を聖く過ごすこと，隣人を愛することを含むすべての律法に従うようになるであろう。救い主は言われた。「あなたはその頭にとこしえに栄光をつけ加えられるであろう。」

ひとりの律法学者が，イエスをためそうとして質問した。

「先生，律法の中で，どのいましめがいちばん大切なのですか。」

イエスは言われた，「『心をつくし，精神をつくし，思いをつくして，主なるあなたの神を愛せよ。』

これがいちばん大切な，第一のいましめである。

第二もこれと同様である，『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。』

これらの二つのいましめに，律法全体と予言者とが，かかっている。」（マタイ22：36—40）

もし私たちすべてがこの勧告に従っているとしたら，この世はどれほど違う世の中になっていることだろうか。

私はジョージ・アルバート・スミス大管長の言葉を好んでいる。

「……私は子供のころ，主の戒めは私たちを導くために設けられた主の律法と規則であると理解していた。あるいは理解していると思っていた。私はまた，これらの律法に従わないと罰を与えられることをも知っていた。そこで子供ながらに私は，主は私が律法を必ず守るように，さもないとすぐさま懲らしめを受けるように，この世の様々な状態をつくり，定められたと思っていた。しかし成長して，別の見方があることを知った。現在では，主の律法つまり聖典に記された勧告，古今の主の啓示は私にとって，天父が私たちを愛すればこそ与えて下さる快い音楽となっている。これらの律法は，この世の両親よりも私たちの幸福を気にかけておられる天父の助言であり，忠告なのである。このようにして，私にとっては律法という冷たい名を冠しているように思えたものが，今は全知全能の天父の愛に満ちた優しい助言となったのである。」（大会報告1911年10月，pp. 43—44）

救い主は「もしあなたがたがわたしを愛するならば，わたしのいましめを守るべきである」（ヨハネ14：15）と言っておられる。願わくは，私たちが全力を尽くして主の戒めに従うことができるように，イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。

家族を強める



十二使徒評議員会会員

エズラ・タフト・ベンソン

私たちは，一個の民として，神と家族と，国家に対して忠誠を尽くさなければならない。

きょう私は皆様に対して家族を強めていただくことを念じながら話を進めてゆきたいと思っている。

「救いは家族単位で受けるものである。……家族は現在と永遠の未来にあって最も大切な組織である。」この言葉はまさしく真実である。

教会は実に家族を助けるために造られたのであって，教会がその使命を果たした後も，なお日の光栄の族長制度は存続するのである。ジョセフ・F・スミス大管長はこれを踏まえた上で，次のように述べている。「立派な父親，立派な母親になることは，立派な将軍や政治家になることよりも偉大である。」マッケイ大管長はさらにつけ加えてこう述べている。「人は家庭よりも仕事や娯楽に重きを置いたその瞬間から，物心両面で凋落（ちょうらく）の道を歩み始める。」

ついきのうも，ハロルド・B・リー副管長は，「教会は，家庭が神より与えられた使命を果たすよう，さらに多くの援助を行なわなければならない」と語っている。これも前述の理由と同じである。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は次のように述べている。「現在は，教会の歴史上かつてなかったほど多くの誘惑，落とし穴，危険が横溢し，教会員を義務と義の道からそらせようとしている。」(*Take Heed to Yourselves*，「自分に気をつけよ」p. 127) さらに，「現代の世の中はより良い状態に向かって前進しているとはいえない。……邪悪が増え続けている。」(同上，p. 207) 悪魔がこれほどまでにその力を結集し，数多くの強力な使いをそろえたことは，かつてなかった。私たちは家庭と家族を強め，守るためにあらゆる手段を尽くさなければならない。

「子供たちが，真理，名誉，徳，自制などの人生の教訓，教育と正直に働くことの価値，そして人生の意義と特権とを学ぶ上で，最初の場となるのが家庭である。そしてこれは最も効果的な場でもある。子供たちを教え育てる場として家庭に代わるものはない。いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできないのである。」(デビッド・O・マッケイ「家庭の夕べ」テキスト，1968―69) このことは悪魔も十分に承知している。

今日，悪魔は父親を家庭の長としての地位から引きずりおろし，子供たちに反抗心を植えつけようと懸命になっている。その結果，家庭と家族の崩壊が相次ぎ，なお増加する傾向を見せている。モルモン経はこの状態を次のように描写している。「わが民は小児にしいたげられ，女に治められる。」そしてこう続く。産児制限や堕胎を奨励する政治指導者を頭に描きながら，次の言葉をよくかみしめていただきたい。「ああわが民よ，汝らを導く者たちは汝らを誤たせ汝らの道を破る。」(IIニーファイ13：12) 私は姉妹たちに対して真剣に警告したい。堕胎を行なっている人，健康な体で生まれてくるはずの子供を避ける手段を取っている人，あなたがたは，自らの昇栄と神の王国の一員となる特権を喪失する危機に瀕していると。

両親には子供を正しく育てる直接の責任がある。そしてこの責任は，親戚，友人，隣人，学校，教会あるいは国家に任せておくことはできないものである。

J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は次のように述べている。「両親の皆さんにお願いしたい。子供に関してはどんなことでも決しておろそかにすることのないように。もちろん，大多数の子供は善良である。しかし，私たちの中には，子供

が真理と義の道からそれ始めているのに，それに気付かない者がいる。いつも気を付けていなさい。心遣いと注意を怠ってはならない。福音の精神と神権の精神に則り，愛をもって治めなさい。子供たちに義の道を歩ませたいと思うならば，そのように治めなさい。」何でも許す親は問題である。

私は塔の上の見張人のひとりとして現代の青少年を誤った方向に導き，家族を崩壊させている大きな原因のひとつは，教育制度にあると警告したい。ジョセフ・F・スミス大管長は，教会員の間に見られる3つの脅威のひとつに，間違った教育思想をあげている。教会が若人に対して，家庭に近く，インスティテュートに出席できる大学を選ぶよう勧めているのは，少なからぬ理由がある。まず，両親は子供の近くにいることができる。そして，昨年マッケイ大管長が勧告したように，両親が注意を怠らず，子供の状態についてよく知っているならば，シグモンド・フロイドやチャールズ・ダーウィン，ジョン・デューイ，カール・マルクス，ジョン・ケインズ等の誤りを見抜けるように助けることができるのである。

大学を中途退学する学生も相当数にのぼり，これは親の心痛の種になっている。しかし，今日，これよりも大変なことが子供たちの身にふりかかっている。大学に出席している私たちの子供が，道徳を無視する教授の手にゆだねられているという事実である。

カール・G・メーザーは言った。「わが子を腐敗した教師の手に渡して堕落させるよりは，むしろ天然痘やチフス，コレラ，その他不治の病い，死の病いに引き渡す方がよい。偉大ではあるが不純な哲学者よりも，無知であっても心の清い教師のもとで教えを受ける方が，はるかによい。」

子供のために職業教育，通信教育，家庭管理技術の習得を考えている親の数が年々増えている。

私たちが現在築いている類の文明を打破することを目的とした，カール・マルクスの共産党宣言の第10項は，「公立学校における全子弟の無償教育」の確立を提唱している。マルクスが政府に学校の経営を求めた理由は幾つかある。A・A・ホッジ博士はそのひとつとして次のように述べている。「合衆国内のあらゆる関係者が，公立学校から，正しくないと信じている事柄を締め出す権利を有しているとすれば，おおむね信じている人は，ほとんど信じていない人に，ほとんど信じていない人は，全く信じていない人に，それぞれ道をゆずらなければならないということが現実に起こり得る。無神論者や不可知論者がどれほど少数であってもかかわりなくである。もしこの方法を国中で継続して実施してゆくとすれば，合衆国の教育機構は無神論の普及に他に類を見ないほど効果的な手段となるであろう。」

法廷が祈りに関して悲しむべき判決を下したとき，デビッド・O・マッケイ大管長は次のように述べている。「合衆国最高裁判所は，合衆国の公立学校と，英知の源である創造主とをつなぐ糸を切断した。」（*Relief Society Magazine*，「扶助協会誌」1962年12月号，p. 878）

これはあなたに対してどのような影響を及ぼしただろうか。キリスト教とアメリカへの愛国心を基とする私立学校の数を増やすようにとの要求の声が，良識ある親たちの間で高まっているのも，このためではないだろうか。

現在，ブリガム・ヤング大学は合衆国内で最大規模を誇る私学である。そして，この大学はかつてないほど，広く多くの親たちの注目を集めている。

あなた方の子供がこの種の学校に在学しているいないを問わず，大切なことは子供の身近にいて，できることなら学校でどのようなことを学んできたかを毎日話し合い，どんな教科書を読んでいるかを知っておくことである。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は，彼の知る限りどの公立学校でも，無意味な内容を含んだ，いわゆる「学問」を教える教科書が使われていると語っている。（「自分に気をつけよ」p. 32）

私は，子供たちが教わってきたことの内容を，定期的に調べている立派な父親を知っているが，彼は子供たちが誤った教えを学んでくると，子供と一緒になって真理を追求している。あなた方の子供が試験の際に，教えられた通りの誤りを書かなければならない時は，ジョセフ・フィールディング・スミス大管長の勧告に従うとよい。すなわち，答案の冒頭に，「先生から教わったことは，次の通りです」とか，「教科書には次のように書いてあります」という言葉を書くのである。

もし，子供たちが公立学校で，あるいは教会の学校であっても，進化に関して誤ったことを学んできたら，それに反証する優れた書物であるジョセフ・フィールディング・スミス大管長の筆になる「人間，その起源と行く末」（*Man, His Origin and Destiny*）を読ませていただきたい。

最近の新聞に数名の親たちが子供たちの学校の校長にあてた公開状が掲載されていた。その一部を読んでみたい。

「以下のことを告知申し上げます。以下に署名する両親は，性，人類の

生物学的発達，心構え，自覚，個人および家族生活，集団療法，情緒訓練，自己批判，および上記の類の教授訓練もしくは教育について，私たちの書面による同意と署名なくして，これらを息子に参加もしくは教えることを禁じます。

私たちは，道徳と性の領域において自分の子供を指導する親の権利を保持し，行使するものであります。従って，学校当局よりいかなる関与，干渉も受けたくありません。

私たちの息子は，これまで広く実施されている情緒訓練，集団療法，自己批判などを教えられてきましたが，これらは道徳の標準を低下させ，アメリカ人一人一人が持つべき責任を，集産主義の多数決という考え方に転換させるものにほかなりません。

上記の事柄やこの公開状を無視した事柄が行なわれた場合，直ちに教室を出，親に報告するよう息子に指示しています。」

主は，末日にサタンが家族を崩壊させようとすること，法廷からポルノグラフィーを許す判決が出ることを知っておられた。

神が半世紀も前に予言者に霊感を与え，毎週の家庭の夕べプログラムを定められたことを，私たちはどれほど感謝すべきであろうか。このプログラムは，両親が子供に教える責任を果たすようになるための踏み台である。週に1度以上家庭の夕べを開いている忠実な聖徒の数が日増しに増えている。彼らはみたまの導くままに家庭の夕べのテキストに追加削除して教えている。

（毎週1度行なう）家庭の夕べプログラムは，家族を強め，守ることを目的として，父母が息子，娘たちと家で一緒に過ごすために設けられたものである。祈り，讃美歌その他の歌を歌い，聖典を読み，家庭内の事柄を話し合い，タレントを発表し，福音の原則を教え，ゲームを楽しみ，リフレッシュメントを食べる。

さて，毎週家族の夕べを開く人々には次のような約束がある。

「この勧告に従う聖徒に対して，私たちは大いなる祝福を約束する。家庭における愛と両親に従う気持とが増すことであろう。イスラエルの若人は信仰を増し，悪魔の力や誘惑と戦う力を得るであろう。」（大管長会，1915年4月27日，*Improvement Era*「インプルーブメント・エラ」第18巻，p. 734）

さて，今日の若人はどのような娯楽を楽しむことができるだろうか。テレビ，ラジオ，雑誌，ロックミュージックのレコードなどにより，知らず知らずのうちにあなたの権利を奪われてはいないだろうか。ロックミュージックの大多数は，両親が知らない陰語を使って，故意に不道徳や幻覚剤，革命，無神論，虚無主義へと人を駆り立てるものである。

このことに気付いた親は，ロックミュージックが風紀を乱す耳ざわりで騒々しい音楽であること，感覚を麻痺させ，感受性を鈍くし，野蛮さを呼び起こす音楽であることを，子供たちに警告すべきである。

J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長はこのように述べている。

「現代の芸術，文学，音楽，演劇の実に多くのものがはなはだしく風紀を乱していることを少し考えていただきたい。……たとえば現代音楽にしても，私はジャングルのタムタムとどのように違うかを知らないが，たいして違いがないと考えている。……

あなた方はこれらのものに注意しなければならない。例外なく子供たちに影響を与えているのである。あなた方の家庭生活をできる限り天国に近いものとしなさい。」（「扶助協会誌」1952年12月号，p. 798）

若人の指導者の皆さん，あなたは私たちの標準を高く掲げているだろうか。それとも一般の低俗な主張に妥協して教会内に偽りや悪の存在を許しているだろうか。文化ホールで行なわれているダンスや音楽は，徳高く，好ましい，よき聞(きこ)えある，あるいは褒(ほ)むべきものだろうか。それとも，短いスカート，騒々しさ，ストロボの閃光，暗がりに表わされる現代のソドムの様相を呈しているだろうか。

若人の指導者は，若き日のジョン・ウェスレーが母親から受けた標準を受け入れているだろうか。彼女の優れた勧告に耳を傾けていただきたいと思う。

「楽しいことであっても，それが正しいか間違っているかを判断しなさい。理性を弱め，良心を曇らせ，神に対する思いにかげりを与え，霊的な事柄への感受性を鈍くするもの，心よりも肉体を重視するものはすべて，あなたにとって悪いものです。それ自体はどれほど無害に見えても関係ないのです。これを規準にしなさい。」

モロナイが警告しているように，私たちは「神の聖い教会を汚したか。」（モルモン8：38）教会の補助組織は両親と神権者が家族を神のみもとへ導こうと努力する時の妨げではなく助けとならなければならない。私たちの中には，いわゆる「平和運動」の象徴であり，反キリストのしるしである折れた十字架を身につけている者はいないだろうか。

「わたしの民は知識がないために滅ぼされる」とホセアは嘆いた（ホセア4：6）。今日，ある人々は知識を得た後に，立って子供たちに諭すという過程を無視したために，子孫を徐々に肉体的，霊的に破滅の状態に追い込むという結果をなめている。もしも私たちが善悪を知って神のよ

うになることができるとすれば，私たちは何が私たちをだめにするのか，どうしたらそれを避けられるのか，そのために何ができるのかをはっきりと知ることができるはずである。

今こそ，私たち父親の心を子に向け，子の心を父親に向ける時である。そうしなければ，父親も子供ものろいを受ける。母親が家を空けて外で働く時に，離婚の種がまかれ，子供たちが受けるはずの祝福が引き延ばされることが多い。仕事を持っている母親は，子供たちが必要としているのは金銭よりも母親であることを，よく認識すべきである。

世の中が退廃の一途をたどる現代にあって，家族が義のもとに結集し，家族の一致を確立することは極めて重大なことである。ある人の言葉を借りると，「現代では，人々を家庭から引き離そうとするものが非常に多くなっている。私たちは，活動や関心事が多すぎて，家族や子供たち，すなわち主なる神から愛し，養い，教え，助けるように与えられた者たちに使う時間と配慮をおろそかにしていないかどうか，真剣に考えなければならない。」

「ひとつに結ばれた家族は，兄弟姉妹が勝手な道を歩んでいる家族よりも，はるかに幸せである。
世の中で一番幸せな人とは，暖炉を囲んで語り合う人々。いかなる人も彼らの輪を打ち砕くことはできない。
天(あめ)が下の最も素晴らしい語らいは，忙しく働いた日の夕べに共に集まる家族の中にある。
自らを賢いと考える金持ちもいれば，貧しい人もいる。
彼らは家族の絆をいとも簡単に砕き，それぞれが気ままに楽しみを求めて去って行く。
それぞれが見知らぬ人とさ迷い歩き，遊び歩くことを楽しみしする。
しかし彼らは苦しみを刈り取り，空しい喜びを見いだす。賢い子らは一致しているからである。
人々は愚かな思いを抱く。喜びは放浪の果てに見い出し，真の笑みと真の友は故郷より遠き地にあるものだと。
こうして彼らはさ迷い歩き，彼方の喜びを求めて人生を無為に過ごす。
だが，真の喜びを味わう人は，一日の働きを終えて，兄弟姉妹と共にその日の出来事を楽しく語り合う。
この世の喜びを勝ち取るのは，美しい音楽を共に楽しむ，ひとつとなった家族である。
古き家庭にこそ人生のもたらすあらゆる喜びがある。最も楽しい遊び場と最も幸せに暮らす場所がそこにある。
さ迷い歩き疲れた兄弟よ，心の安らぎを求めているならば，家族と語り合う暖炉に戻りなさい。」
(エドガー・A・ゲストの詩より改作)

私たちは家族を強めようではないか。朝夕の家族の祈り，個人の祈りは家庭に主の祝福を招くものである。食事時は一日の出来事を振り返り，肉体を養うだけでなく，家族が聖典，特にモルモン経を読むなどして霊をも養う素晴らしいひと時である。忙しい父親にとって，夜は子供たち一人一人の枕もとへ行き，語り合い，質問に答え，愛していることを知らせる大切な時間である。そのような家庭には「世代の隔差」などあるはずがない。この欺瞞(ぎまん)に満ちた言葉は，家庭と家族を弱める悪魔の武器のひとつである。両親を敬う子供たちと子供たちを愛する両親のいる家族は，家庭を安全な避難所，小さな天国とすることができる。

次に読む詩はあなたの家族の集いを表わしているだろうか。

「全員が揃っています
　お父さん，お母さん
　姉妹，兄弟
　愛し合っている全員がいます
空いた椅子がひとつもなく
　みんな家にいます
今晩，この家を訪ねて来る人は
　いません
古いこの暖炉のまわりに
　家族が集まっているのです
この集いとこの場を祝福して下さい
すべての煩いを忘れ
安らぎと親切な思いが
　このひとときを支配しますように
私たちは一人残らずここにいます
(チャールズ・スプレイグの詩より改作)

願わくは，狡猾(こうかつ)な悪魔のはかりごとを避け，主の清い道を歩むことにより私たちの家族が強められるように。また，時が至って，天父の日の光栄の家に行き，互いに愛し合った父，母，姉妹，兄弟全員が揃っていることを報告できるように。空いた椅子はひとつもなく，全員が家に戻っていると。

イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

私たちの宗教のかなめ石



十二使徒評議員会会員

マリオン・G・ロムニー

兄弟姉妹の皆さん，私はきょう「私たちの宗教のかなめ石」というテーマでお話ししたい。

予言者ジョセフ・スミスは1841年11月28日付の日記に次のように書いている。

「私はヤング会長の家に十二使徒と共に集い，様々なテーマについて語り合って一日を過ごした。私は兄弟たちにこう語った。モルモン経は地上で最も正確な書物であり，私たちの宗教のかなめ石であって，人がその教えに従って最も神に近づくことのできる書物である。」(*Documentary History of the Church.*「教会歴史」第4巻，p. 461)

モルモン経の真実性，福音が回復されたことの真実性，これらは共にふたつの根本的な事実にかかっている。すなわち第一は近代の啓示が実在すること，第二はジョセフ・スミスが神の予言者であったという事実である。これらふたつの事実は，モルモン経と福音の回復から切り離すことのできないものであり，一方を受け入れることはもう一方をも受け入れることになる。

1823年9月21日の夜ジョセフ・スミスが睡眠をとるためベッドに入った時，彼はモルモン経について全く考えていなかった（それまでも考えたことは一度もなかった)。その時ジョセフの心にあったことは，主と自分自身との関係が正しい状態にあるかということであった。そこでジョセフはこの点についてのみこころを求めて祈った。モロナイの訪れを受けた。神のみ前から遣わされたモロナイはジョセフに次のように言った。「アメリカ大陸の先住民の記録とその起源とを金版に刻んだ一部の書物が埋められてあって〔クモラ付近に〕，その中には古代の住民に救い主がお伝えになったままの完全な福音が載せてある。……また，銀のつるにはめた二個の宝石があって金版と共に埋めてある。…かの書物を翻訳するために神はこの宝石を豫め備えて置きたもうたのである…」(ジョセフ・スミス2：34—35)

予言者ジョセフはこの時初めてモルモン経について知った。その夜から書物が出版されるまで，ジョセフは聖なる記録の取得，扱い，翻訳に関して天より絶えず導きを受けたのである。モルモン経に関して特筆すべきことのひとつは，主御自身がその真実性と神聖さについてしばしばしかもはっきりと証されたことであろう。

モルモン経を世に出すにあたり主御自身が関与されたことについて，主は1830年8月に予言者に対して述べておられる。「…われ…完全なるわが永遠の福音を載せたるモルモン経を汝らに顕さんために天より遣わしたるモロナイ…と共に飲む時来ればなり」(教義と聖約27：5)

主は教義と聖約のはしがきで，「ジョセフ・スミス（二代目）は神の恩恵を通して神の能力によりモルモン経を翻訳する能力を与えらるるを得」んために，「わが僕ジョセフ・スミス（二代目）を呼び天より語りて彼に誡命を下せり」と語っておられる（教義と聖約1：29，17)。また主は三人の見証者に，予言者が「その書を翻訳した」ことを告げ，さらに「このことは汝の主，汝の神生きたもうが如く真実なり」と言っておられる（教義と聖約17：6)

予言者は翻訳している間に多くの偉大な，驚くべき真理を学んだ。そしてモルモン経を貫く概念は主イエス御自身の考えが中心になっていることを知ったのである。すなわち記録のもととなった資料と刻まれた版は共に義しい人々が神の命を受けて作成したものであったということである。

この書物の基礎資料の蓄積は，紀元前2200年頃から開始された。このように記録されている。「主はジェレドの兄弟にその御前を去って山を下り，かれの見たことを記録せよと仰せになった…」(イテル4：1)。このようにして始められた記録は，主の命令によりジェレド人の時代が終わるまで続けられた。そして，ジェレド人の完全な記録は奇跡的な方法でモロナイの手に渡った。モロナイは紀元400年頃，それを現在イテル書と呼ばれている短い記録にまとめた。モロナイの言葉によれば，ジョセフが翻訳していた事柄はモロナイ自身が版に記したものである。モロナイはこう語っている。「主はこれを書けと私に仰せになったから」「私はジェレドの兄弟が見たことをさながらそのままこの版に写した。…主はこれとその解訳器とを封ぜよと私に仰せになったから，主の命令通り解訳器も封じておいた。」(イテル4：4－5)

ニーファイ人の記録に関しても同様の指示が与えられた。

「ここに主が私に命じたもうたから，私は私の民の記録を刻むために金で版をつくり，…

私はこれを記録してしまってから，私の民に私の死んだ後になすべきことを…命じた。」(Ｉニーファイ19：1，4)

このように，神の命令と指示によく従ったため，のちにモルモンが要約したニーファイの大版は千年近くの間保存された。

その記録の一部はイエス御自身が編集しておられる。イエスは復活後ニーファイ人の間で導きと教えを施しておられた時，彼らに教えられたことを書き留めるよう命じられた。また人々は，レーマン人予言者サムエルの予言すなわち主の復活の時に多くの聖徒が死者の中からよみがえることを，記録していなかった。主はこのことに人々の注意を向けさせた。すると弟子たちは，予言とそれが成就したことを思い起こした。(そしてイエスがこのことも書きしるしておけと言いたもうたのでイエスの言葉のように記録をした。)

予言者ジョセフはモルモン経の序文から，この書物のふたつの目的のうちのひとつは，「ユダヤ人と異邦人とにイエスはキリストである」ことを確信させることであると知った。

この目的を達成するため，この書物は始めから終わりまでキリストに対する証で一色に塗りつぶされている。最初の章には，リーハイが真昼の太陽よりもまばゆく光り輝く中を「天の真中からおりてくる」イエスを見た示現の様子が記されている。そして最後の章は，キリストのみもとに来てキリストによって全くなれという勧告で締めくくっている。ここでモロナイは次のように断言している。「すべて神のみこころに背くことを捨てよ。もしこのようにして勢いと心と力をつくして神を愛するならば，神があなたたちに与えたもう恵みは充分である。…あなたたちはこの恵みを受けて…聖くなる。」(モロナイ10：32—33)

このふたつの章を結ぶ500ページ（英文）は，無数の偉大な証で彩られている。

私はモルモン経が，予言者ジョセフが述べた通りであるということをはっきりと知っている。すなわち，モルモン経からは予言と啓示のみたまが放射されている。モルモン経は救いの大いなる教義を簡明に教え，人をキリストのもとに向かわせる正しい行動の原則を教えている。このみたまを受け，この教えに従う者は，へりくだり，ダビデのように一心に祈るのである。「神よ，わたしのために清い心をつくり，わたしのうちに新しい，正しい霊を与えてください。」(詩篇51：10)

人はこの世のあさましい事柄を離れ，神の王国に上げられるとき，霊としてシーレム山のジェレドの兄弟と共に世に生まれる前の贖い主のみ前に立って，主のみ言葉を聞くのである。「見よ，われはわが民を贖うために創世の前より備えられたる者なり。われはイエス・キリストなり。…わが名を信ずる一切の者はわれによりて永遠に光を受け，…

…汝らがわが形にかたどりて造られたることを今汝は見ずや。最初に一切の人々はわが形にかたどりて造られたり。

見よ，今汝が見るこの体はわが霊体なり。われはわが霊の体にかたどりて人を造れり。われは今わが霊のまま汝に現わるると同じ形の肉体を具えてわが民にもまた現われん。」(イテル３：14—16)

人はまた地を離れて，霊において「バウンテルフの地にある神殿のまわり」の群衆と交わる。モルモンは彼らのことをこう言っている。「民が集って共に怪しみ驚きまた共にあの大きな不思議な変化を示し合い，

すでにその死のしるしが現われたイエス・キリストについて話し合った。

民がこのように話し合っていた時に，天から出てくるような声が聞えた…この声は荒々しい声でもなく，また高い声でもなかったが，小さい声でありながらもこれを聞いた者たちの骨の髄までつき通るようであって，かれらは全身ことごとくふるえおののいた。

…その声は，

『わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け』とかれらに仰せになっていた。

群衆は…天から一人の男の方が降りたもうのが見えた。このお方は白

い衣を召して，降ってきて群衆の中に立ちたもうた。群衆の目はみなこのお方の上に注がれたが，互いに物を言う勇気がなかった。みなは自分らに現われたこのお方を天使であるとは思ったが，そのお方が降りたもうたわけは知らなかった。

時にそのお方は手を伸ばして群衆に話しかけて仰せになった。

『見よ，われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。

われは世の光にしてまた世の生命なり。…』」(IIIニーファイ11：1－3，6－11)

アルマは父アルマがモルモンの泉で教会に加わった聖徒たちと経験した事柄を記している。これを読む人はことごとく，人を肉と霊の捕らわれから脱出させるにあたって主が慈愛と忍耐を示しておられることを感じ，彼らが聖きみたまの力によってどのようにして死への深い眠りから目覚め，心が大いに改まったかを知ることができるのである。このような驚くべき変化を心に深く考える人は，すべてそれを望まないではいられなくなると私は申し上げたい。

アルマは兄弟たちに次のような質問をしているが，これらに自分の力だけで答えることのできる人はいない。

「〔1〕あなたたちは今日霊によって生れ神の子になっているか。〔2〕あなたたちは神の御姿を自分の身に受けているか。〔3〕あなたたちは今言ったような大きな改心をすでに感じているか。

〔4〕あなたたちは自分を造りたもうたお方が贖い救いたもうことを本当に信じているか。〔5〕あなたたちは信仰の目で未来を見通し，死んで亡びるはずのこの肉体がよみがえって不死不滅となるところ，すなわちこの朽ちるはずのものが復活して朽ちないものとなって現世でわが身のした行いに応じて裁判を受けるために神の御前に立つところが見えるか。

あなたたちは裁判の日に主の御声が自分たちに聞えて『さいわいなる者たちよ，われに来れ。汝らが地上にてなしたる行いは義し』と言いたもうことを今から思いはかることができるか。

〔6〕あなたたちはいつも神の御前に罪を犯さずに居ったか。〔7〕あなたたちがもしも今にも死ぬとするならば，…『私は充分へりくだっている』と言い，また『私の衣は，…キリストの血で洗われて白くなっている』と言えるであろうか。」(アルマ5：14－16，27)

私は申し上げる。モルモン経の持つみたまを受けた人は，これらの鋭い質問に正直に答えるならば，必ず大いなる日に「はい」と答えられるような生活をしようと決意するに違いない。私は予言者は自分が何を語っているかよく知っており，しかも神の真理を述べておられることをへりくだり証する。予言者は言った。

「私は兄弟たちにこう語った。モルモン経は地上で最も正確な書物であり，私たちの宗教のかなめ石であって，人がその教えに従って最も神に近づくことのできる書物である。」

神のすべてのみ業と同様，モルモン経はそれ自体でその真実性を証明している。

兄弟姉妹友人の皆さん，私の声を聞いているすべての方々に，強くお勧めしたい。モルモン経の教えとみたまをよく知っていただきたい。これは「私たちの宗教のかなめ石」である。モルモン経の教えとみたまは私たちはキリストと永遠の生命に導くものである。私はこのことを厳粛にイエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。



愛の持つ価値

十二使徒評議員会会員

デルバート・L・ステイプレー

兄弟姉妹および友人の皆さん，聖典は私たちの神が愛の神であると教えている。愛は神が私たちに与えることのできる最大のものであると同時に，私たちが神に与えることのできる最大のものでもある。神を愛することを示す本当の尺度は，一切の尺度を取り払って愛することにある。私たちに対する神の愛は，神がその生みたまいし独り子を世に遣わし，彼によって私たちを生きるようにして下さったことに表わされている。（Iヨハネ4：9参照）

永遠の御父と御父の生みたまいし独り子との間の愛は，私たち父と子の間にも見られる。私たちはそのような愛を受けることも与えることもできないなどと考えてはならない。キリストはこの神が与えられた特質を完全に備えておられる方であり，私たちは救い主が示されたような完全な愛を持つことはできないかも知れないが，これはすべての人が目指さなければならない目標である。

今日の世がその愚行と問題を解消する上で一番必要とされることは，愛をもって神に立ち返り，神のみこころに従うことである。愛がなければ，世の状態はますます悪化し，ついには悪と罪がその極みに達するまで苦しみ続けるであろう。その時，神の裁きが世の悪人の上に下るのである。人類が苦難，悪行，苦労，悲しみ，犯罪などから救われる道はただひとつ，愛である。

もし愛が正しく行ないに表わされるならば，世のすべての人に理解する心と平安がもたらされるであろう。今日，幸福で喜びにあふれる人生を求めるという名目で最も乱用されているものに愛という言葉がある。

イエスが模範を示し，また人々に勧めておられる親切と憐れみにあふれる愛が世のすべての人の心に宿るならば，人間社会の最も高邁な理想，栄えある理想が実現し，この世は天の王国と化すであろう。愛は真に地上における天国である。天国に愛がないとしたら，それは天国でなくなるからである。

使徒パウロは愛を，完全と平和に結ぶ帯であると言っている。愛は古くも新しくもある偉大な戒めである。なぜならば，愛は律法を成就するものだからである。

愛は憐れみの心に具現される。愛を構成する要素は数多くあるが，そのすべてが，生活様式，個人の行動，目的を高く掲げさせる。そしてそれらは，キリストに倣う模範，言葉，行動，思いやりのこもった関心，親切な行ないとなって表われてくる。

他人の注目や報いを求める愛は真の愛ではない。従ってその愛は感謝されることもなく，報われない。こうした態度は一種の利己心であって，感謝や礼節，尊敬の念が欠けていることが明らかである。このような人は，物事を自己中心に考える人であって，自分が礼儀をわきまえていないことや感謝を表わしていないことなど全く意に介そうとしない。

愛は心を浄化することであり，強い性格を築き，人生のあらゆる面で積極性を発揮させる。愛するということは，人類に与えられた最大の賜である。真の愛は無限無窮であり，今日そこかしこに見られる粗暴な行動や自己顕示とは無縁の平等で純粋なものである。

愛は，両親が子供たちに愛情を注ぎ，愛に満ちた養育を行なうときに始まる。両親は息子や娘の愛と信頼を得るために，愛と理解をもって子供たちに接する。また，子供の福祉と幸福にも大きな関心を抱いている。

使徒パウロはこのように勧告している。「もしある人が，その親族を，ことに自分の家族をかえりみない場合には，その信仰を捨てたことにな

るのであって，不信者以上に悪い。」（Iテモテ5：8）

子供の肉体的，物質的必要を満たしたからといって，最も必要としていることを満たしたことにはならない。両親の正しい教え，良い模範が大切である。家族は物事を一緒に行ない，互いに愛し合い，家族との生活を喜びとすることにより，固くひとつに結ばれていなければならない。

子供が最初に身につけ，また求める感情は愛であり，また最初に表現する感情も愛である。子供は愛を受ければそのように行動し，愛を受けなければまたそのようになる。首に抱きついて「大好き」と言う子供を持つことほど，うれしいことはないのではないだろうか。愛は人生の基盤である。

両親が未熟で，子供との間隙（かんげき）を怒りや暴力，大声を上げることなどでしか解決できないとしたら，子供は非常に不安定な状態に置かれることになり，やがて成長すると，ただ楽しくない家庭環境から抜け出したいために好ましくない友達と交わることになりかねない。

成長期にある子供に家庭で愛されていない，あるいは無視されていると感じさせるような事柄がないかどうか私たちはよく調べてみる必要がある。子供は自分が十把（ぱ）ひとからげの人間でないことを確かめるために，首をかしげたくなるような友達つまり標準が自分より低い人と交わることがある。残念ながらそういった標準が低い人は，相手の標準に自分を引き上げるのではなくて，相手を自分の水準まで下げることが多いのである。

愛されていないと感じている少女は特に，へつらいが上手な少年の言いなりになってしまうことが多い。愛されたいというだけで純潔までも犠牲にしてしまうのである。こうした悲劇の責めはだれに向けるのが本当であろうか。愛されることだけを思い詰めた少女だろうか。それとも愛を娘に気付かせる責任を怠った両親だろうか。

少年の場合はどうだろうか。彼は家庭でどのような教えと愛を受けているだろうか。家庭生活で覚えたことに基づいて少年はデートの相手の少女をどのように扱いまた守っているだろうか。

放任主義は家庭の霊的な環境と秩序を崩壊させることが多い。両親が心から関心を寄せていることを感じている子供は，両親の望みを無視しないものである。互いを愛し尊敬する雰囲気のある家庭には，家族に喜んでもらいたいという気持が芽生える。両親が自分たちの身なりに関心を寄せていることを感じている子供は，慎みのある服装を選ぶようになるであろう。

最近私はオーストラリアを訪れたが，若い女性のほとんどが極端なミニスカートをはいていることに気付いた。それは他人に好ましくないことを想像させる以外の何物でもないといった類のスカートだった。慎みを全く感じさせないあきれるほどの服装だったが，彼女たちは一向に恥じらう様子もなく平然としていた。彼女たちの服装を見て助言するような人が一人としていないのである。恐らく彼女たちの母親もミニスカートをはいていて，慎みの模範など全く示していないのだと思う。これと同じ状態がこの合衆国にも見られる。

ミニスカートがファション界に登場した直後，ある女性服飾デザイナーがラジオインタビューを受け，ミニスカートは若い女性の道徳的退廃に関係すると思うかという質問を受けた。彼女は全くその通りだと答えた。未婚の母親に関する統計がこの言葉の真実を裏付けている。母親と娘たちはこのまま慎みのない服装を身に着けていて良いものだろうか。それとも，ミシンを出して，それぞれの標準に合った服を作るべき時が来ているのだろうか。

毎週開かれる家庭の夕べで服装の標準について話し合うことにより，これらの好ましくない服装を慎みのあるものに変えることができるはずである。これは男女ともに言えることである。今日の青少年が抱える問題の多くは，愛と両親の賢明な教えによって解決することができる。

ジョセフ・F・スミス大管長は次のように警告している。「子供が両親の保護と導きのもとにあり，……間にもしも両親が子供に対する義務を無視するならば，シオンの両親は，子供が8歳になるまでだけでなく，全生涯にわたる子供の行動に責任を問われることになるだろう。」（「福音の教義」第2巻，p. 20）

両親が怠っている義務の中に，子供を正し，しつけることがある。子供を放っておくことは愛でもなんでもないし，子供の愛を金銭で買うこともできない。子供の過ちを見過ごし，子供にもそれに気付かせないままにしておくことはできない。子供は過ちを犯したら，相当の罰を覚悟するようでなければならない。しかし，怒りに任せて罰を与えるようなことをしてはならない。罰を与えることによって親子間の意志の疎通が良くなることも往々にしてある。子供の肩に優しく手を回すことが，両親の愛を表わし，心の扉を開くことも多い。子供が話そうとした時，両親は何時間かかろうともじっと耳を傾けるべきである。

ソロモンはこう勧告している。「わが子よ，主の懲らしめを軽んじてはならない，その戒めをきらってはならない。

主は，愛する者を，戒められるか

らである，あたかも父がその愛する子を戒めるように。」（箴言3：11―12）

両親が自分の楽しみや友人のことしか考えないとしたら，子供はどうなるだろうか。世間体を保つことだけに心を奪われて家を留守にすれば，子供は一人家庭に残される。そして子供に家を自由に使わせ，食べ物や飲み物を色とりどりあてがい，子供の友達がだれか家にいてくれれば，両親がいないことの穴埋めが十分にできると考えている。

次に何が起こるだろうか。子供たちはその夜を，時には夜の1時2時まで孤独な思いで過ごす。退屈になったら子供たちはどうするだろうか。その答えを聞いたら怠慢な親たちは驚くことだろう。

私たちの愛するデビッド・O・マッケイ大管長はこのように述べている。「幸福な家庭生活を築くもうひとつの要素は，互いの奉仕である。家族の一人一人がお互いのために働くのである。……」（*Treasures of Life*「人生の宝」p. 330）互いに仕えようと努める家庭よりも美しい光景があるだろうか。子供には，家の中に避け所，外界の危険や悪から身を守る所があることを意識する権利がある。この必要を満たすのが家族の一致と高潔さである。子供には，互いに喜んで助け合う両親，理想に向かって楽しげに努力する両親，利己心のない純粋な愛を子供に向ける両親が必要である。つまり個人としてバランスのとれた人であること，ある程度物事を見通す力を具えていること，健全な情緒を築く環境を整えることが両親に求められる。そして特に最後の点は，子供に物質的な豊かさを与えることでなく人間としての進歩成長をもたらすものだからである。

社会の最も安全で強固なとりでは家族である。しかし，これが目に見えない形で損なわれている。現代社会はこの家庭の基盤をも崩壊させせようとしているのである。信頼と愛があり，秩序がある家にこそ，最良の人生がある。愛のない家庭は本当の家庭とは言えない。愛によって家庭は永遠のものとなるのである。

「愛は下方に流れるものだと言われている。子供に対する両親の愛は，両親に対する子供の愛よりも，常にはるかに強固なものである。人の子らのうちで，神が私たちに示された愛の千分の一でも，神に対して愛を示した者がいるだろうか。」（ヘア）

現代の親や青少年は，純粋な愛の真の意味を忘れかけている。その意味は変わっていないのである。だが，正しい行動の標準の要素とされている他の多くの徳と同様，愛も削り取られて，真の意味があいまいになり，憎しみが愛の中に入り込み，全体を占めようとしている。

男であれ女であれ，互いに愛していると言う一方で，他の人と性的な関係を持つことができるだろうか。私たちは最も愛すべき人を自分の行動で傷つけているのである。

家庭を崩壊させる親はどうだろうか。両親と子供たちのいずれが大きな打撃を受けるだろうか。私はある人たちの利己心を見てぞっとすることがある。彼らにとって結婚の誓約を破ることなどさほど重大なことではないのである。

両親が協力して，家族の理想的な関係を維持することほど大切なことはない。両親の皆さん，家庭の夕べを必ず毎週開いていただきたい。これは親子の間を一層近づけるものである。家族が一緒に祈りを捧げ，家庭内に義を行なう伝統を築いていただきたい。愛と一致，助け合う態度を培っていただきたい。家庭内の状況を観察していただきたい。上昇傾向にあるだろうか，それとも下降気味だろうか。家族が家族としての機能を果たさなくなる時に，青少年の非行が始まるのである。

愛に満ちた家庭ほど大きな祝福はない。子供たちが幼い頃や十代を振り返って幸せな日々を思い起こすとしたら，これに勝る祝福はない。両親の皆さん，子供たちにこの幸福な日々，幸福な思い出を与えていただきたい。世の中は目まぐるしく動いている。個人が使うことのできる時間も少なくなっている。多くの父親が家族をないがしろにしている。子供を家に置いて働きに出ている母親も同様である。家族と一緒に物事を行なう時間を作っていただきたい。

私はデビディナ・ベイリ姉妹の証を皆さんと共に分かち合いたいと思う。彼女は子供たちの将来の養育，福利，進む方向，それに幸福を一心に考える素晴らしい母親だった。彼女は今年の7月に他界したが，これは16年前に書かれたものである。子供を本当に愛する母親からの美しいはなむけの言葉である。

「今晩の私はどうしても眠れません。いつもなら床に入ったらすぐに眠ってしまう私ですが，きょうはどうしたと言うのでしょう。私はいま子供たちに言っておきたいことがあります。……もしあなたたちが私を愛しているならば，自分たちのためでなくとも私のために，神さまの戒めを守って欲しいのです。それは，お父さんと私が行く栄光にあなたたちと一緒に行きたいからです。

たとえ私が今のようにこの世にいてあなたたちを見守ることができなくなっても，この福音から離れないで下さい。お互いにねたんだりしないで下さい。私は子供たちを同じように愛してきました。みんなに公平であろうと努めてきました。……お互いに非難し合うことのないように，……この世だけの快楽を求めること

のないようにして下さい。サタンや悪魔の力に用心して下さい。サタンの力は強く，侮り難いものです。

あなたたちみんなを愛しています。このことをいつも覚えておいて下さい。あなたたちは神さまの霊の子供です。お父さんと私は，この世であなたたちの親となるよう任命され，私たちがもう一度家族として永遠に生活することができるように導く責任を与えられたのです。」

子供たちの養育，福祉，幸福を考える時に，私たちが愛と知恵と正しい判断力を持つことができるよう，また子供たちが正義に基づいて生活し，真理を愛し，善を行なう者となる助けができるよう，神に願うものである。

若人が，愛と模範によって導く両親の知恵ある教えに従い，家族全員が同じ理解を持ち，一致し，平安を得ることができるよう神の祝福を願うものである。

兄弟姉妹，私たちは子供に福音とその原則，標準，理想を教え，子供に「私に従って来なさい。私のすることを見てその通りにしなさい」と言えるような模範を示すという義務を負っている。私はへりくだり，この義務を私たちが果たすことができるよう祈っている。

私は教会を愛している。またこの教会が真実であることを知っている。私は，福音は今日の世のあらゆる状態に立ち向かう私たちの導きとなるよう主が与えられた生命の計画であることを知っている。願わくは，私たちが義の道に固く立ち，忠実であることができるよう，イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。



「奇しきみ業もて」

十二使徒評議員会会員

リグランド・リチャーズ

兄弟姉妹の皆さん，私は再び偉大な教会の大会に共に集うことができて喜んでいる。タバナクル聖歌隊と共にただいま歌った讃美歌がいまなお私の胸にこだましている。「奇しきみ業もて神なしたもう」（讃美歌85番）

私は長年伝道に携わってきたが，常に心に感じていることがある。それは，この神権時代に地上に福音を回復するにあたって主は大いなる不思議な業をなさったということである。現在は世に多くのことが起こる不思議な時代である。もし過去150年間で最も素晴らしい出来事は何かと問われるとしたら，ほとんどの人は宇宙飛行士の月面着陸だと答えると思う。これはまさしく奇跡であった。この計画に参画した人でなければ，どうして月まで行けたかを説明することはできないであろう。

カプセルから出た飛行士が無重力状態の月面を歩く様子を，私たちは家庭で椅子に座り，テレビで見ることができた。次に私が考えるのは，その結果私たちはどうなるのかということである。（実は私は科学にそれほど強くないので，私や私の家族にとって月面着陸がどのような利益をもたらすかよくわからない。）

次に，私は過去150年間に起こったもうひとつの出来事を考えてみたい。この出来事はその尊厳，重大さにおいて，また私と私の家族，さらには本当に主を愛し主に仕えたいと望む全世界の人々にもたらす恵みにおいて他をはるかに圧するものである。それは，少年ジョセフ・スミスが使徒ヤコブの言葉を読んで，祈りを捧げるために森に入った時の出来事である。ヤコブはこう約束している。「あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に，願い求めるがよい。そうすれば，与えられるであろう。」（ヤコブ1：5）ジョセフはこの約束を信じて森に入り，祈りを捧げた。するとタルソのサウロがダマスコへの途上で経験したと同じように，天からひとつの光の柱が下りてきた。そしてその光の柱の中に父なる神と御子イエス・キリストがおられた。

少年がすべての教派のうちいずれに加わるべきかを尋ねると，御父は御子を指して，「こはわが愛子なり，彼に聞け」と仰せになった（ジョセフ・スミス2：17参照）。そして「汝はその何れにも加わるべからず，彼らことごとく誤れるを以てなり」という答えを受け，さらに来るべきみ業について告げ知らされた。

私は真実であることを知っているが，もしこの話が真実だとしたら，世界中を探してもこれに比肩し得るような出来事があるだろうか。天が開かれ，天使が現われ，御父とこの地球を創造した御子とが現われたもうた。神が生みたまいし独り子の手によって地球を創造されたことを私たちは聖典で教えられている。この150年間で，御父と御子がこの地上を訪れたもうたことに比肩するような出来事があっただろうか。きょうこの大会に集ったすべての人々，このメッセージを試してみた全世界数百万の人々は，これが真実であることを厳粛に証する。イエスがニコデモに対して言われたように，「わたしたちは自分の知っていることを語り，また自分の見たことをあかししているのに，あなたがたはわたしたちのあかしを受けいれない。」（ヨハネ3：11）私たちはこの栄えある出来事が起こったことを全世界の人々に証するものである。

イエスが40日間にわたり弟子たちと共に過ごし，500人の兄弟たちが見ている前で天に昇って行かれた後，彼らが天を見つめていると，白い衣

を着たふたりの人が彼らのそばに立って言った。「ガリラヤの人たちよ，なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは，天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で，またおいでになるであろう。」（使徒1：11）ふたりの天使が主はまたおいでになると言っているのに，どうして主がおいでになることを信じられないのだろうか。私たちは主の降臨を待ち望んでいるのではないだろうか。私は，予言者たちが主の再降臨の前に起こると語ったすべての事柄を考えると，神は驚くべき方法で不思議な業をなしたもうと言わざるを得ないのである。

私の好きな聖句がマラキ書の第3章にある。主は予言者マラキを通してこのように言われた。「見よ，わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求める所の主は，たちまちその宮に来る。……

その来る日には，だれが耐え得よう。……彼は金をふきわける者の火のようであり，布さらしの灰汁のようである。」（マラキ3：1―2）

この聖句が，主の降誕を言っているのでないことは明らかである。主はたちまちその宮に来るようなことはなさらなかった。すべての人がその来る日に耐えることができた。主は金をふきわける者の火や布さらしの灰汁のようにはなさらなかった。しかし，末日に主が来られる時には，悪人は岩に向かって，「さあ，われわれをおおって，御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから，かくまってくれ」と叫ぶと言われている（黙示6：16）。従って神が主の前に道を備える使いを送られる時，その使いは必ず予言者でなければならない。

皆さんは，イエスがバプテスマのヨハネについて語った言葉を覚えていることと思う。彼は時の絶頂の時代に主の降臨のための道を備えるために遣わされた。主はイスラエルの中でバプテスマのヨハネより大いなる予言者は起こらなかったと言われた。そこで私たちは世の人々に対して厳粛に証する。神がこの神権時代に立てられた予言者は，予言者ジョセフ・スミスであると。ジョセフは主の再臨の道を備えるために世に遣わすと約束された使いであり，これら不思議な業が行なわれるための道を備えるべく遣わされた使いであった。

ジョセフはこの時満ちたる神権時代の予言者であった。聖典によれば，主は，再臨を宣言してから3千年以上もジョセフを待っておられた。予言者に召されたエレミヤの場合のように，主はジョセフの時が来るのを待っておられたのである。エレミヤは自分がなぜ召されたのかわからなかった。すると主は言われた。「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに，あなたを知り，あなたがまだ生れないさきに，あなたを聖別し，あなたを立てて万国の予言者とした。」（エレミヤ1：5）この神権時代の予言者は，この世に生まれる前に予言者となるよう聖任されていた。この予言者は主の目に大いなる者であると，私たちは主から告げられている。（IIニーファイ3：8参照）

ここで私は，ペンテコステの日の後にペテロが語った言葉を心に思い浮かべている。ペテロはキリストを死に追いやった人々に対して，「このイエスは，神が聖なる予言者たちの口をとおして，昔から予言しておられた万物更新の時まで，天にとどめておかれねばならなかった」（使徒3：21）と述べた。世の初めからすべての聖なる予言者の口を通して，神が語られた万物更新が必ず起こるというペテロの予言は信じ難いことなのだろうか。私の知る限りでは，過去の神権時代の予言者の来訪も含めて，この万物更新を主張している教会は，私たちの教会以外にない。

予言者ジョセフに御父と御子が訪れたもうてから数年して，紀元400年頃アメリカの地に住んだ予言者，モロナイがこの地の先住民と記された記録すなわちモルモン経について告げるため，予言者ジョセフを訪れた。

〔マリオン・G・〕ロムニー兄弟は昨日，この書物の教えに関する霊感あふれる説教をして下さった。この書物は，ユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして，万国の民に現われたもうことを確信させるためにとっておかれた。しかも全能の神の手により保存されでたのである。エゼキエルは神の命令によって，ふたつの書物のことを書き記したが，そのひとつがこのモルモン経である。エゼキエルはふたつの記録が保存されるはずであること，すなわち「ユダおよびその友であるイスラエルの家のために」ひとつの記録，「ヨセフおよびその友のために」ひとつの記録が記されることを述べている。主はエフライムの手にあるヨセフの記録をユダの記録に合わせ，主の手でひとつにすると約束された（エゼキエル37：16―17参照）。私たちは神がなさると言われたことをその通り実行したもうことを信じることができないのだろうか。モルモン経がその記録でないとしたら，その記録はどこにあるのだろうか。

この書物がどのような書物かを十分に理解するには，ヤコブの十二人の息子たちに交わされた約束をよく調べてみる必要がある。ヨセフに与えられた約束はヤコブの他の息子たちに与えられた約束をはるかにしのぐものであることがわかるであろう。

ヨセフはヤコブを通じて多くの祝福を約束された。「あなたの父の祝福は永遠の山の祝福にまさり，永久の丘の賜物にまさる。……」（創世49：26）

兄弟たちから離れて生活することになるヨセフに与えられる新しい地を指して，モーセはわずか4節の中に5度も「尊い」という言葉を用いて表現している。（申命33：13—16，訳注「欽定訳」の場合は5度であるが，日本聖書協会訳では4度）新しい地とは，ほかでもないこのアメリカの地である。末日に福音が回復されるときまで，主がこの地をとっておかれたのである。

世の人々はヨセフのこの記録について何を知っているだろうか。なぜ人々はこの記録を受け入れようとしないのだろうか。この記録を受け入れるならば，たとえユダヤ人であっても彼らのメシヤがだれかについて疑問をはさむ余地がなくなるのである。この記録は世の救い主の誕生と十字架上の死に伴なうしるしについて，また昨日ロムニー兄弟が語ったように主がこのアメリカの地を訪れ，民と会われたときのしるしについて事細かに述べているからである。

もしこの書物が，ある男が畑を耕しているときに見つけたものだとしたら，19世紀最大の出来事だと考えられただろうという人がいる。しかし，私たちには教会員でない多くの人々の証がある。この書物は読む人に，聖霊の力によって主がその真実性を明らかにしたもうという約束をしている。（モロナイ10：4参照）

数年前，ニコラス・G・スミス兄弟はこの壇上から，カリフォルニア伝道部を管理していた時に彼が経験したことを語ってくれた。南カリフォルニア大学の宗教学部長が彼にモルモン経を1冊分けてくれるよう頼んできた。スミス兄弟はそこで宣教師たちが重要な聖句にしるしをつけ，下線を付したモルモン経を渡した。それからしばらくして，この宗教学部長はスミス兄弟と宣教師たちを彼の主催する集会に招いた。その集会で学部長はモルモン経を手に取り，声を出して読み始めた。そしてこう言った。「これは死に絶えた書物ではない。生きている。私たちは100年もの間この聖典を目の前にしながら，内容については何も知らなかった。」そして聴衆に向かってこう述べたのである。「素晴らしい教えではないだろうか。今日私が皆さんに読んだような素晴らしいことを信じている人々に対して私たちは友好の手を差し伸べようではないか。」これは，この業が神のみこころにかなう業であることを示すひとつの証である。主はこの書物を保存し，あらゆる地の中で最も選ばれたこのアメリカにおいてヨセフへの約束を成就されたのである。

世の人々にとっては神秘的な方法で主がなしたもうたほかの素晴らしい事柄については，時間の関係上触れることができないが，ここにそびえる神殿についてだけ述べたいと思う。イザヤとミカは共に時の流れを越えて（3000年）末日をかいま見ることを許された。二人は末日を指して，主の家の山がもろもろの山のかしらとして堅く立ち，すべての国はこれに流れてくる時であると言っている。また二人は言う。「さあ，われわれは主の山に登り，ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる，われわれはその道に歩もう。」（イザヤ2：2—3参照）私の知っている限りでは，創世以来この地上に存在した建物で，この神殿ほど万国の民を集めた建物はない。この場に集っている皆さんの多くも，この地に集められた人々の子孫に違いない。

私がオランダで宣教師として働いていた時，ある非常に熱心な求道者がいた。彼は実業家で，私にこう言った。「私は絶体にあなたの教会に入りませんよ。」理由を問うと，「アメリカへ行きたくないからです」と答えた。「結構ですよ。この地にとどまって，支部を強めて下さい」と私は言った。彼が私の事務所に駆け込んで来たのは，バプテスマを受けてわずか数カ月後のことだった。彼は言った。「リチャーズ兄弟，事業が売れそうなんです。」「事業を売ってどうなさるんですか」と尋ねると，「私はシオンへ行きたいのです」と言った。できれば，私が伝道部の書記をしていた時代の伝道部記録を見ていただきたいのだが。そこには，ヨーロッパに神殿がなかった頃オランダの人人がこの地を訪れるために小銭を貯えていた様子が記録されている。

1906年にロッテルダムでジョセフ・F・スミス大管長が，全ヨーロッパに主の宮居が点在する日が来ると語ったとき，私はその場にいた。私は生き長らえてそのふたつが建設されたのを目にした。これも世の人に驚くべき方法で不思議な業をなしたもうことのひとつである。集合に関する予言を調べてみると，主は主の民の集合の地とするためにこの地を世の人々の目から隠しておられたことがよくわかる。

兄弟姉妹の皆さん，私たちはこのことに心から感謝すべきである。昨日バートン兄弟は予言者エライジャの来訪について語ったが，しばしの間このマラキの約束を考えてみたい。「見よ，主の大いなる恐るべき日が来る前に，わたしは予言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ，子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て，のろいをもってこの国を撃つことのないようにするた

めである。」（マラキ4：5―6）聖典を信じていながら，エライジャの来訪を祈り求めることをしないなどということができるだろうか。私たちはエライジャが来たことを世に向かって厳粛に証する。

昨年の7月，私はイスラエルを訪れ，ツアーに加わって3カ所のユダヤ会堂に入った。その会堂のひとつは，壁にひじかけ椅子をつるしていた。私がラビに何のためにそうしているのかを尋ねると，彼はこう答えた。「エライジャが来られた時に座っていただくためです。」もちろん私はエライジャがすでに来たことなど言えなかった。また，この大会で話されたようにエライジャの来訪により，私たちは結婚の誓約が永遠に続くものとなる約束を受けたことも話すわけにはいかなかった。これだけではなく，神はイエスの指導の下に続く1千年を準備しておられる。そしてすべてのひざがかがみ，すべての舌がイエスがキリストであることを告白する。つまりこのメッセージは永遠の世界まで行くということである。

私は，これが神の業であることを厳かに証する。私はこのことを全身で知っている。イザヤが見たと語った事柄を私は知っている。「この民は口をもってわたしに近づき，くちびるをもってわたしを敬うけれども，その心はわたしから遠く離れ，彼らのわたしをかしこみ恐れるのは，そらで覚えた人の戒めによるのである。

それゆえ，見よ，わたしはこの民に，再び驚くべきわざを行う，それは不思議な驚くべきわざである。彼らのうちの賢い人の知恵は滅び，さとい人の知識は隠される。」（イザヤ29：13―14）

これは私たちが全世界に向かって述べるメッセージである。主を愛する人でこの教会の本質を知る時間をとりながらこの教会に加わろうとしない人は，正直な人とは言えない。私は以上のことを証し，神が皆さんを祝福したもうよう，主イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。



次代を担う人々へ愛をこめて

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

私は，教会の将来であり国家の希望であるすべての青少年の皆さんにお話したいと思う。

私は先日南アメリカのある空港で飛行機の出発が遅れたため待っていた。その時一人の青年と交わした会話の中から今日の話のテーマを取り上げたいと思う。彼の身なりを紹介すると，髪は長く，ひげを蓄え，丸い大きなメガネをかけていた。足にはサンダルを履き，服装も一般の標準からすると奇異な感じのするものだった。

私はあまりこのことを気にしなかった。見るからにまじめそうな青年だったからである。合衆国北部のある著名な大学を出ているしっかりした青年だった。彼は仕事に就かず，父親から旅費をもらって南アメリカを旅行していたのだった。

人生で何を追求しているのかと尋ねると，彼はすぐさま「平和，それに自由です」と答えた。幻覚剤も常用していた。平和と自由を得る手段だそうである。幻覚剤の話から道徳の話に移っていった。彼は新しい道徳について，かつて人類が享受し得なかった大きな自由をもたらすものであると，いとも簡単に言ってのけた。

私は自分が教会に属していることを初めに紹介しておいた。彼はいんぎんな態度でこう言った。私の世代が言う道徳などたわ言にすぎないと。そして，どうやって個人の徳や道徳的な純潔を守り通せるのかと熱っぽい口調で尋ねた。そこで私は少なからず彼にショックを与えるような話し方をした。「君の言う自由は妄想でしかない，平和にしてもまやかしだ。理由を説明しよう。」

間もなく塔乗のアナウンスがあり，私たちは別れた。その後私は青年と話し合ったことを何度も考えてみた。きょう，どこかでその青年が私の話を聞いていてくれたら良いのだが。とにかく彼は何百万とも知れぬ新しい世代の一人である。彼らは道徳上の拘束からの自由，良心の呵責からの平安を求めて，自らを拘束し汚すような行動に走っている。これを放置していると，個人だけでなく国家の破滅をも招くことになる。

つい先頃，私は事務所で若い男女の訪問を受けたが，再びこの自由と平安について考えさせられた。男性は背が高く，ハンサムで見るからに男らしく女性の方は美しく，情緒の豊かな感じのする人だった。

女性は泣きじゃくり，男性の目からも涙が流れていた。二人は共に大学の1年生だった。二人は翌週に結婚を控えていた。けれどもそれは二人が夢見ていたような結婚ではなかった。二人は3年後，卒業してからと考えていたのだった。

今や二人には後悔の気持ちしかなかった。それに二人とも結婚の準備がまったくできていなかった。学業の夢も消え失せ，競争の社会で生き抜くための準備もほとんどできていなかった。二人はすぐにも家庭を築き，男性は未熟な技量で収入の多い仕事を捜し，家族を養ってゆかなければならない。

この青年は目に涙を浮かべながらこう言った。「私たちはお互いに欺されていたのです。」

「いいえ，お互いに偽っていたのです。お互いと両親，それに自分自身をも偽っていたのです。徳を大切にすることなど偽善にほかならないという偽りの教えに欺されていたのです。罪というものは心の中の問題でしかないとする新しい道徳こそ，私たちを滅ぼすわなだったことが今やっとわかったのです」とこの女性は言った。

二人はここ数週間にわたる恐れと心痛の日々の中で心を悩ましてきた

数々の思いを打ち明けた。堕胎すべきだろうか。前途を閉ざされた彼女はそう考えもした。いや，それだけはいけない。たとえどんな場合でも命は神聖なものだから。たとえこのような状況に置かれているとはいえ，もし生まれてくる幼子の命を滅ぼすようなことをしたら，彼女は果たして自分に耐えて行けるだろうか。

だれも知らない土地へ行って，学業を続けることもできるだろう。子供は養子に出してもよい。子供を欲しがっている家族も多いし，紹介を世話してくれる制度もある。しかし二人はこうした考えを打ち消した。

彼はとても彼女一人に試練を背負わせることはできなかった。彼にも責任があった。たとえ二人の夢がくじかれようともその責任をとろうと彼は決意した。

私は，この困難な状況にも最善を尽くそうとする彼の勇気と決意に敬意を表したい。しかし，希望を失くし，泣きじゃくる二人を見ると私の心は痛む。まさに悲劇と悲しみに打ちひしがれた姿がここにあった。これこそわなであり，束縛である。

二人は自由を求めていたはずだった。悪は考え方の問題でどうにでもなると吹き込まれていた。しかしその結果，自由をなくしていた。平安もなかった。二人は自由と平安を引き換えにしたのである。すなわち，結婚したいと考える時に結婚する自由，二人の夢であった教育を修める自由，そして自己を大切にすることから得られる平安を失ったのである。

空港で会ったかの青年は，彼らはやり方がまずいと言うかも知れない。確かに，身の処し方に知恵を用いていれば，悲劇は生まれなかったであろう。

私の事務所に来た二人のような例は決して珍しいことではない。それどころかその数は急増している。1968年に合衆国内で未婚女学生の出産が165,700件あった。年間平均増加数は12,000件である。（*Reader's Digest*「リーダース・ダイジェスト」1970年9月号，p. 170）

不道徳な行為の結果悲劇をもたらした人々の心に平安があるだろうか。またその生活に自由があり得ようか。

責任をとらずにただ情欲を満足させること，これ以上の偽り，不正直があるだろうか。

私は韓国で戦争のむごいつめあとを見てきた。軍人の父と韓国人の母の間に生まれた何千という孤児である。この孤児は，見捨てられた不幸な子供たちである。望まれて生まれてきたわけではない。悲惨な不道徳の波間に漂う浮き草である。

ベトナムも同様である。それも何万といるそうである。気の向くままに欲望のはけ口を見つけ，情欲がもたらした悲しむべき犠牲者を見捨てる者に，平安や自由などあろうはずがない。

男性は不道徳な行為を競い合い，しかもそれを得意気に吹聴する傾向があるようである。何と下劣で愚かな競争だろうか。このような競争に勝利などあり得るはずもない。ただそこにあるのは悲しむべき自己欺瞞（きまん）だけである。征服して満足を得るのは自己を征服した時だけである。「自己を治める者は町を征服する者よりも偉大である」ということわざ通りである。

テニソンは言った。「私の力は10人の力に匹敵する。それは私の心が清いからだ。」（アルフレッド・テニソン卿 "*Sir Galahad*"「サー・ガラハド」）この言葉は今なお生きているのではないだろうか。

こういう話し方はどうかと思うが，著名な歴史学者であるウィル，アリール・デュラント夫妻の言葉に耳を傾けていただきたい。このような場には多少そぐわない下品な感じのする文章であるが，若人にはかえってわかりやすいかも知れない，千年間の歴史をつづった豊富な経験から，デュラント博士夫妻は次のように語っている。

「だが，たとえどんなに聡明で知識の豊富な人でも，その人が属している社会の習慣や制度に正しい判断を下して取捨選択するだけの分別を持つことは一生掛かってもできるはずがない。というのも，歴史という研究室の中で幾世紀もの間実験を重ねた代々の知恵がそこにあるからである。ホルモンを沸騰させている若者はなぜ性欲を思うままに発散してはならないのかと考えるだろう。もし習慣や道徳，法律で規制されなかったら，大人になるまでに人生を台無しにしてしまうだろう。大人になってはじめて，セックスは火の川であって，個人やグループを無秩序に消耗させるのを避けるには，幾多の制限を設けて堤防を築き，冷やさなければならないことが理解できるからである。」（*The Lessons of History*「歴史が教えるもの」pp. 35—36）

自己修養は過去においても決して簡単なことではなかった。そして現代は一層難しくなっている。現代の世の中はセックスが氾濫している。政府はこの事実を認め，その方向に動いているが，うれしいことに多くの人々がこれに対して否定的である。私は多くの若人が，さらには成人した人々も，周囲の言葉巧みな誘いに陥りその犠牲者となっていると考えている。この合衆国だけでも年商1兆5千億円といわれるポルノ文学，無軌道なセックスをあおり容認する低俗映画，男女をいとも簡単に結び付ける服装の標準，法の規制を打ち砕く裁判所の判決，愛する子供を後悔するような状況に知らず知らずのうちに追いやっている両親，などが

それである。

状況を実に適確に捕らえている作家がいる。彼はこう語る。「新しい宗教が全世界に広がりつつある。第一に礼拝すべきものは肉体であって，そのほかは一切無視する宗教である。

肉体の快楽を追求することが祭式である。……そこには何の努力も必要とされないからである。

私たちは，神聖を便宜と，…知識を求める知恵を快楽を求める喜びと，伝統を流行と，引き換えにしてしまったのである。」（アブラハム・ヘシエル，*The Insecurity of Freedom*「自由の危機」p. 200）

多くの大衆娯楽で裸が容認されている。さらにはサディズムの領域にまで及んでいる。ニューヨークの有様を見た人はこう言っている。「裸というよりは，あからさまと言った方がよいだろう。」

ポルノという風をまいて，崩壊というつむじ風を刈り取っている以外のなにものでもない。（ホセア8：7参照）

私たちはもっと歴史を勉強する必要がある。国家や文明が栄華を極め，そして死に絶えている。自らの道徳的な病が原因である。ある解説者は，ローマは城壁内にゴート人があふれたときに滅びたと言っている。だが，「それは城壁が低かったためではない。ローマ自体が堕落していたからである。」（ジェンキン・ロイド・ジョーンズ，*U. S. News and World Report*, 1962年5月26日，p. 90）

いかなる国家も，いかなる文明も，その人民の家庭に力がなければ存続することができない。この力は，家庭を築く人々の高潔さから生まれるものである。

いかなる家族も，いかなる家庭も，道徳と誠実と相互の尊敬という基盤の上に築かれるのでなければ，平和を得，逆境の嵐から免れることはできない。信頼のないところに平和はないし，誠実のないところに自由はあり得ないのである。愛という暖い日光は，不道徳という湿地からは輝き出さないのである。

花は芽の状態に大きく左右される。青少年期は，将来家族としての花を咲かす種の状態である。無分別な性から平安と愛と喜びを求めることは，空しい夢に過ぎない。不道徳の中に自由を見いだそうとすることも同様である。救い主は言われた。「すべて罪を犯す者は罪の奴隷である。」（ヨハネ8：34）

徳を守ることは本当に確かな道だろうか。後悔から自由へと人を導く道はこれしかない。徳の道を歩むことによってもたらされる良心の安らぎこそ，唯一の偽りのない平安である。

とりわけ，これは神の約束でもある。ナザレのイエスは山上から宣言しておられる。「心の清い人たちは，さいわいである。彼らは神を見るであろう。」（マタイ5：8）これは，それを成就する力を持っておられる方が交わした誓約である。

現代の啓示も，簡潔な戒めの後にたとえようもないほど大きな約束を宣言している。

その戒めとはこうである。「……絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。」そしてこれが約束である。「然る時は，汝の自ら信ずること神の前に強くなりて，……

聖霊は常に汝の伴侶となり，…汝の支配は永遠の支配となりて強いらるることなく永遠に汝に流れ込まん。」（教義と聖約121：45—46）

この大いなる約束について少し述べたい。

私は，合衆国の大統領をはじめ外国政府の要人と会見する特権に浴してきた。私は会見を終えるといつも，著名な指導者の前で憶することなく立つことができた自分を振り返ってみる。そして，神のみ前で自信を持って，すなわち憶することなく，恥じることなく，戸惑うことなく立つということが，どれほど素晴らしいことかを考えるのである。これは徳を守るすべての男女に与えられた約束である。私は，「絶えず徳を以て想を飾る」人に与えられた約束以上に大きな約束を知らない。

チャニング・ポラクはかつて次のように語った。「すべての人が女性の純潔と男性の高潔の大切さを信じ，これに基づいて行動する世界は，現在の状態とははなはだしく異なっているが，住むには最高の世界であろう。」（*Reader's Digest*「リーダーズ・ダイジェスト」1960年6月号，p. 76）

若い友人の皆さん，私は断言する。その世界こそ，人が想像を絶するほどに成長を遂げる自由の世界であり，汚れのない良心と愛，誠実，確かな信頼と忠誠のもたらす平安の世界である。

これは，現在の世の中を考えると見果てぬ夢のように思えるかも知れない。しかしあなたがた一人一人は必ずこれができる。皆さん個人の徳によって世の中はより豊かに，より強くなるのである。

願わくは皆さんの上に神の祝福があって，この自由を実現し，この平安を知り，この祝福を得ることができるように，へりくだり祈る。またこれらのことが真実であることを証する。私は主のしもべとして，皆さんが徳をまくならば，現在と将来にわたって喜びを刈り取ることを約束する。イエス・キリストのみ名により，アーメン。

いなごの食べた年



十二使徒評議員会会長代理

スペンサー・W・キンボール

兄弟姉妹，友人の皆さん，特に海外からおいでの皆さん，言語を異にする皆さん，私はこの偉大な大会に皆さんと同席できることを喜んでいる。

この会場から右手90メートルの所に美しいみかげ石の球に2羽の青銅製のかもめがとまっている記念碑がある。そして何百万にものぼる旅行者がこの記念碑の前に立ち止まり，「モルモン開拓者への神の恵み」と題する興味深い話に耳を傾けてきた。

このかもめは，教会がその手を大きく伸ばしているように，世のすべての人を包み込もうと翼を大きく広げている。そしてみかげ石の球は全世界にあまねく行き渡る教会の姿を予言し，人手によらず山より切り出された石が転がり出でて，ついに全世界に充ち満つるとダニエルが解き明かした言葉を思い出させる。

また銘板には，不毛の未開地や牛車隊，農夫がそこかしこに種をまいた物語が刻まれている。情容赦なく押し寄せるいなごの大群との望みなき戦いに人々はただぼう然と頭を垂れ地にうずくまるだけだった。女性たちも疲れ切った体で，無情な空を見上げていた。行く手に何の望みを抱くべくもなかった。そのとき，人人は頭上に飛来するかもめを見た。この上かもめまでもが破滅に拍車をかけようとするのか。だが，かもめはいなごを撃退し，収穫の絶滅を救った。こうして飢餓は免れたのである。

いなごやその他の虫に襲われて被害を受けたのはエジプト人が初めてでもないし，ましてやモルモンで終わりを告げたのでもない。数年前私はオーストラリアを訪れた時，「束を落とした」という言葉をよく耳にした。これは私たちがよく口にする「うまくいかなかった」，あるいは「取り返しのつかない失敗をした」という意味の言葉であることがあとでわかった。旧約の聖典を開くと，昔の人々はこういう状態を「イナゴの食べた年」（ヨエル2：25）という言葉で表わしていたことがわかる。

いなごは短かくて太い触角と長い後足を持ち，太いももで前の羽をこすって鳴き声を出す昆虫で，群生すると言われている。川沿いの低地や日当たりのよいくぼ地で繁殖し，驚くほどの率で増える。しかも太陽の光を隠すほどに空を覆って飛ぶ。合衆国西部だけでなく世界の各地でこの大群により何十億ドルもの被害が出ている。このいなごの大群によって飢餓が起こり大量の死者を出すことも珍しいことではない。

ユタのいなご戦争と同様，この昆虫についてはエジプトの話にもたくさん出てくる。

モーセとアロンは奴隷たちを解放するようパロに嘆願したり，脅迫の手を使った。王は冷酷な上になかなかのくわせ者で，がんこな人だった。災いを被るたびに約束をし，災いが去ると自分の約束を無視するのである。

モーセはこう警告している。「……神，主はこう仰せられる，『いつまで，あなたは，わたしに屈伏することを拒むのですか。』」（出エジプト10：3）

そして災いが襲った。「川の水は，ことごとく血に変り」「かえるはのぼってエジプトの地をおおい」，「おびただしいあぶがはいり」，「地のちりはぶよとなった」。またモーセがかまどのすすをまき散らすと，これは「人と獣に付いて，うみの出るはれものとなった。」

次に「雷と雹」があって「火は地にむかって，はせ下った。……雹は……すべて畑にいる人と獣を打った。雹はまた畑のすべての青物を打ち，野のもろもろの木を折り砕いた。…

…亜麻と大麦は打ち倒された。大麦は穂を出し亜麻は花が咲いていたからである。」（出エジプト7：20，8：6，24，17，9：10，23，25，31）

パロの度重なる拒絶に対して業を煮やしたモーセは，主の言葉を引用して言った。

「民を去らせ……なさい。もし，……拒むならば，見よ，あす，わたしはいなごを，あなたの領土にはいらせるであろう。」（出エジプト10：3―4）

「あなたが多くの種を畑に携えて出ても，その収穫は少ないであろう。いなごがそれを食いつくすからである。」（申命28：38）

「朝となって，東風は，いなごを運んできた。……地は暗くなった。エジプト全国にわたって，木にも畑の青物にも，緑の物とては何も残らなかった。」（出エジプト10：13，15）

毛虫が残したものをいなごが食べ，いなごが残したものを芋虫や青虫が食べた。そして他の穀物もすべて食べつくされた。

私は「いなごが食べた年」という言葉を思い出すたびに，多くの人々が無為に過ごした週末や歳月を深く考えさせられる。

ここから遠く離れたある州で1年前にバプテスマを受けた人から以前に手紙をもらったが，その一部をここで読んでみたい。

「教会の名簿から私の名前を抹消していただきたいと思います。教会の要求があまりにも大きいのです。私は宣教師からレッスンを受け始めました。……やがて私は自分のバプテスマが計画されていることを知りました。このことを後悔する気持はまったくありません。私のためになったからです。

しかし私はあまりに深く教会に首を突っ込み過ぎたようです。

私はタバコ，酒，コーヒー，お茶をやめることができませんでした。不安が先に立って，努力する気が起こらないのです。……それに，知恵の言葉を守ると仲間から遠ざかるような気がします。私は友達を失いたくありません。

それだけでなく，日曜日に3時間から5時間も時間を使ったり，給料の10分の1を払うなんてできません。私はそういったことができる人間ではないのです。……

あなたにこのような御迷惑をかけて申し訳ありません。だれも責任を感じる必要はありません。……私だけの問題ですから。私を許していただきたいと思います。私の決心はもう変わりません。」

私は彼がこのような決心をしたことを非常に悲しく思う。彼の年月は追いかけっこのようなものであり，この世へ戻って行って迎える年月は，いなごに食べられ，青虫に食べられ，その他多くの害虫に食べられてしまう。

これと対照的に，私たちの民は一般に，安息日の4，5時間を捧げてもいらいらすることはないし，収入の10分の1を納めたり，4つの禁止事項を守ることに苦痛を感じることはないと思う。

マーデンはこう言っている。「水車は流れ去って行った水で粉をひくことはできない。」（オリソン・S・マーデン，*Pushing to the Front*「前線に立つ」第1巻，p. 13）

何日か前に，バプテスマを受けて間もない家族と握手をしたが，彼らは輝きを放っていた。教会員になってどのくらいかと尋ねると，「2カ月です」という返事だった。それから熱を込めて，同時に残念そうな様子も見せながらこう言った。「これまでの年月を考えると，教会に来ていればもっと幸せな日々が送れたろうにと思います。」いなごが彼らの年月を食べていたのである。

こう言う人もいる。「『ああそれはやった』とか『ああそれはやらなかった』とかいう言葉は，人生を後戻りのために使い，昔の過失を取り戻せたらと考える多くの人々の無言の叫びである。」（マーデン，p. 15）

1834年，予言者ジョセフ・スミスにより高等評議員会が組織された。次の文はL・D・ヤングの記したものである。

「私は重大な過ちを犯してしまった。そこで私は他の人の教訓となるよう，記録を残しておきたいと思う。私は予言者からこの高等評議員会に選ばれた兄弟たちに加わるよう求められた。だが私はそうしなかった。このように責任ある地位を果たす力が自分にはないことを熱心に訴えた。

しかし，予言者はどうしてもこの職を受けるようにと言った。それでも私が断り続けたので，予言者は他の人を指名した。その後予言者が私を神権の重要な職に召さなかったのはこれが原因であったと思う。それ以来私はどのような召しを受けてもそれを受けなければならないことを知った。そして神の王国において導きを与えるよう召された人の判断に逆らってはならないと思ったのである。」

いなごが活動を続けていたのである。この善良な人がどれほど多くの機会を失ったかを考えてみていただきたい。

ハリエット・ウィンスローは「機会」について次のように述べている。

「絶好の機会というものは，二度あるものではない。
幸運の女神がほほ笑み，自らの進むべき道を知ったその瞬間を逃してはならない。
遠い彼方の見果てぬ夢をなぜ追い続けるのか。
あなたの周りにある美しいものが

絶えず賛美を捧げているというのに。」

ある人がステーキ部長から呼ばれ，ワード部の監督として働くようにとの召しを受けた。彼は顔面が蒼白になり，どうしても受けられないと言った。イスラエルの判士，民の父，指導者となる特権を断ろうとしたのである。これに対してステーキ部長は，彼が単に恐れをなす気持と，自分を卑下する気持からそうしているのだと感じて，説得を続けた。しかし，彼はとうとう受けなかった。

その日から「いなごの食べた年」が始まったのである。

このほかにも，シドニー・リグドン，オリバー・カウドリ，マーテン・ハリスをはじめ，自らの手で機会を逃してしまった人々は大勢いる。

「取り返しのつかないことが4つある。すなわち，口に出してしまった言葉，弓の弦を離れた矢，過ぎ去った人生，無にしてしまった機会である。」（マーデン，p. 67）

教会に活発なある青年が教会外の美しい女性に夢中になってしまった。二人の交際が発展して，結婚することになったが，それは「死が二人を分かつまで」の民事結婚だった。青年は反対することはしたがいかにも弱々しく，結局女性に押し切られてしまった。彼女にとって，神殿における永遠の結婚など何の意味もなかったのである。

彼はいつか妻を教会へ連れて行こうとした。しかし，年月の流れは速かった。家庭に福音のないまま子供が生まれ，成長していった。数々の機会と年月が過ぎ去っていった。光陰矢の如しのことわざ通り，時間を呼び戻すことはできないのである。これもいなごの食べた年であろうか。シェークスピアは書いている。

「人事にはおよそ潮時というものがある。うまく満潮に乗じさえすれば成功するが，かりにもこいつを捕えそこなうと，人間一生の航海は，不幸災厄つづきという浅瀬にとじこめられてしまう。今ちょうどそうした満潮の海にわれわれは浮んでいるのだ。まさに潮時がわがほうに有利である時に，これを捕えるが，でなければ，賭荷もなにも失くしてしまうだけのことだ。」

（中野好夫訳「ジュリアス・シーザー」4幕3場）

いなごはいつも世の中にいる。文明は害虫に悩まされている。

ベンジャミン・フランクリンは言った。「この世の生活を愛しているならば，時間を無駄に費してはならない。人生を構成しているものは時間だからである。」

別の人の言葉を借りると，「たとえ一瞬であっても，失った時は永遠に取り戻すことができない。」（*Ancient Post*）

「私は時を浪費した。そして今や時が私を浪費している。」（シェークスピア）

幼い頃，私は民事結婚をしたばかりのある若夫婦を見て非常に考えさせられた。彼はハンサムな，いわゆるだて男で，立派な馬とゴムタイヤの馬車を持ち，さらにかなりの資産もあった。妻は「舞踏会の花」ともてはやされた良家の娘で，着ているものやしぐさひとつひとつに至るまで町の娘たちからうらやまれていた。

二人の結婚式はまさに豪華極まるものだった。

両家とも子だくさんであったが，二人が最初に決めたことは，「子供はいらない」ということであった。

二人はある種の手術を受けた。そしてこの家庭には子供が生まれなかった。ダンス，乗馬，パーティーに明け暮れる日が続いた。そして年と共に，二人は老け込み，寂しそうになっていった。夫が先にこの世を去った。町の目抜き通りに住むこの未亡人のすることと言えば，郵便局と食料品店へ行くことだけだった。歳月が矢のように過ぎ去り，腰の曲がった彼女はつえにすがってようやく歩いていた。孤独だった。彼女の兄弟姉妹はそれぞれの家族のことで手が一杯なために，めったに彼女を訪れることもなく，来ることがあってもすぐに帰ってしまう状態だった。テレビやラジオのなかった時代である。目がかすんで読書もままならなかった。こうして町の人々は，彼女をめったに見かけることもなく，次第に彼女のことも忘れていった。

そしてある日，死後数日を経た彼女が発見された。生涯孤独であったように，死んだ時もひとりだった。彼女を埋葬してくれる子供もいなければ，涙を流し，嘆き悲しんでくれる人もいなかった。すべて空しい年月だった。これもいなごが食べた年月だったのであろうか。

「運命はあなたのまわりではなく，あなたの内にある。あなたがあなた自身を作るのだ。」（マーデン，p. 404）

無計画がもたらすのは，不毛という結果だけである。好運はその翼をもって人を養いみがくが，好運を作り出すのは主としてその人自身である。カール・G・メーザーは次のように言っている。

「そして数々の書が開かれ，私の傍らに立つ守護天使がそれを見てこう言うだろう。『見よ』と。そこで私はそれを見て，『なんと素晴らしい』と言う。すると天使は言う。『これはあなたがやればできたことだ。』ページをめくって天使は続ける。『これはあなたが行なったことだ。』」

インガルスの詩にはこう書かれている。

「人の運命を決するのは　その人自身

名声，愛，好運が　私の行く手に待っている
私は都会や野原を歩き　遠い彼方の砂漠や海に入って行く
あばらや，市場を通り過ぎ　やがて招かれてもいない宮殿の扉を叩く
眠っているなら，起きよ　遊んでいるなら，私が立ち去る前に目を覚せ　自分の運命を決める時は今なのだ
私に従う者はどんな望みもかなえられ，死を別にしてどんな敵をも打ち負かすことができるのだが，これを疑い，躊躇する者は
失敗，窮乏，苦悩に行き着く
いたずらに求め，懇願する者に報いはない

──ジョン・ジェームズ・インガルス（"*Opportunities*"「機会」）

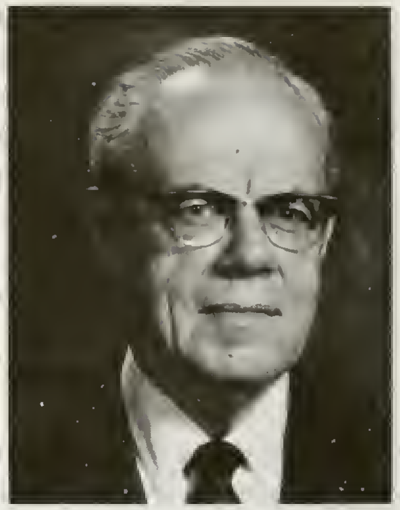
この世は，逸した機会で満ちている。今大会では，印象深い話がたくさんあった。福音を目の前にして受け入れなかった人，高校，大学そして職業までをも中途でやめた人，幻覚剤や不道徳な行ないで人生を台無しにした人，教会や社会の責任を引き受けない人，伝道の責任を回避した人，永遠の結婚をしないでこの世だけの結婚をした人，避妊薬の使用，堕胎，その他人類を存続させるのに不可欠な家族と家庭生活を崩壊させる手段をとっている人，これらの人人についての話があった。私たちは世にあっても世のものになる必要がないことが改めて強調されたのである。

願わくは，私たちが機会を捉えてそれを生かし，福音に完全に従って生活し，私たちが目的とする永遠の光栄を得る備えができるよう，イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。

天父から賜った命

十二使徒評議員会会員

リチャード・L・エバンズ



愛するスミス大管長，兄弟姉妹，そして天父の子供である全世界の皆様，私は只今演奏された青年たちのコーラスを聞き，全世界にはこのほかに，人生をどのように過ごしたらよいかその方法を探し求めている無数の若人がいることを今一度考えている。私がこれから述べることが世の人々と皆さんの心を捉えるとしたら，それは皆さんの信仰と祈りのゆえである。私はまたそうなることを祈っている。

ある所に，娘が自分の才能と機会を十分に生かしているかどうかに深い関心を寄せている母親がいた。しかし娘は母親の期待を全く裏切っていた。ある日，母親はどうしても耐えられなくなり，娘の肩をつかんでこう言った。「お母さんはあなたを生んで命をあげたけど，あなたの生活は自分でどうにかしなきゃ，だれもどうすることもできないのよ。」

天父も私たちに対して同様のことを言っておられるに違いない。「私はあなたに命を与えた。この命は生かすも殺すもあなたにかかっている。最大限に活用しなさい。また，時間と英知，よき地と地より出づるあらゆるものを与えた。あなたはそれらを活用しなければならない。」

世の中には様々な種類の浪費があるが，その最たるものに，時間，機会，労力の浪費がある。学び取ろうとする意欲がなく，働こうとする気持のない，つまり「どうでもいい」，「学校を中退する」，「それが何になるのか」といった態度である。確固たる人生を築く方法，すなわち不安や不服，不一致を最少限に抑える方法がある。それは，天父が私たちの肩をつかんで，「私はあなたに命を与えた。この命は生かすも殺すもあなた自身にかかっている」と言われていることを自覚し，能力の限りを尽くして効果的に活用することである。（私たちは気付いていないが，実際は天父は繰返しこのことを述べておられる。）

天父は最初の人をエデンより追われたとき，労働の原則を教えられたと私は考えている。「あなたは顔に汗してパンを食べ，…」（創世3：19）「地はあなたのためにのろわれ，…」（創世3：17）と言われた。

天父は「あなたのために」と言っておられるのだ。働くことは，原則であり特権であり祝福である。のろいではなく，基本的な，肉体と霊に必要なものである。

現代の若人が感じている不安と困難の多くは，レジャーを増やし，労働をできるだけ少なくして，大切な責任を遠ざけようとしすぎたためにもたらされたのである。たとえ望む限りの富を手に入れた人であっても，その人は自分の体と霊のために働く必要がある。これと逆に，富をほとんど持たない人も同様である。働くことは肉体的に，また霊的にも必要なのである。

良いものをもたらす仕事の一端を担い，報いと意義のある仕事を持たない人は，年齢に関係なくだれであっても必ず心が休まらない日々を過ごすに違いない。

世の中には物がどういう過程で自分の手に入るようになっているかを知らない人さえいる。店やマーケットへ行けば何でも手に入るので，土地を耕し栽培する苦労，物を作り出す苦労を考えたり，どうしてそれが手に入るようになったかを意識するのはむずかしいことかも知れない。しかしだれかがその過程に横たわるすべてのことをしなければならないのである。簡単な作業や魅力的な仕事だけでなく，きまりきった退屈な仕事もある。だれかがそれらすべてをしなければならないのである。

私たちは若人たちに対して，人生

の道徳面や霊的面ともに経済面も教える必要がある。生産することの意味，使用人に給料を支払うことの意味，借金をしないことの大切さも教えなければならない。私は，生産的で他人に役立つような仕事をしている人はある意味で英雄だと考えている。私はそういった人々を助け支えたもう神に感謝している。

さて，ほかの事柄についても二，三述べたいと思う。

私たちの人生にはおきてというものがある。すなわち神より与えられた標準があり，私たちはどのような生活をしたらよいかを知っている。いくら自分の非を言い逃れしたところで，結果を変えることはできない。徳は徳であり，悪は悪であって変わることがない。

きょう，私は実に簡単なことであるが，神は理屈をもて遊ぶような方でないことを皆さんにお話しようと考えてこの壇上に立っている。トーマス・A・エジソンはこう述べている。「私はこの世は無限の英知を持つ御方によって治められていることを知っている。地球を創造し，それを一定の軌道に維持するには，無限の英知を持つ御方が必要である。…その正確さはまさに数学的である。」

四季，日光，種の生長，寒暖，子供の成長，収穫，これらは理屈ではない。また，宇宙をこのように正確に運行させている御方は私たちに戒めも与えられた。その戒めは今もなお効力を有している。私は天地の管理者が示された方法以外に，有意義な人生を送る方法を知らない。いずれにしても，大した知恵を持たない私たちにどういった方法が考えられるだろうか。主は私たちに不必要な戒めは与えたまわなかった。私は，物質界を支配するおきてと同様，霊的，道徳的律法も与えられていることを証する。また人は，どのように生きるかによってその人となりが決まるのである。

マッケイ大管長がよく引用した言葉に，ウイリアム・ジェームズの言葉がある。「ジェファーソンの芝居に登場するリップ・バン・ウィンクルは怠けるたびにこう弁解している。『これだけは見逃すことにしよう。』さて彼は見逃すかも知れない。愛にあふれる天もそれを見逃すかも知れない。だが実際は見逃していないのである。彼の神経細胞，繊維組織，分子がそれを認め，彼を攻撃する時のために記録しているのである。」（*The Laws of Habits* 「習慣の法則」）

だが，幸いにも神は悔い改めの原則を与えたもうた。私たちに必要なことを御存じであるためこの原則をお与えになったのである。私たちは真心から悔い改めなければならない。その後も愚かな過ちを繰り返すようであってはならないのである。平安と幸福に満ちた生活を望むならば，弱点や意識して犯した過ちを離れて，正直にしかも断固たる悔い改めをしなくてはならない。

悪は醜く，下劣であるばかりか，大胆で恥を知らず，貪欲である。しかし世の中には，若人の人生や道徳と引き換えるだけの値打ちのある物があるだろうか。

程度のいかんを問わず悪に加担してはならない。家庭や，町，国を清く健全な環境にするよう全力を傾けるべきである。私たちが本当に望むならば，道徳的にも，物質的にもよりよい環境を築くことができる。心から支持し，支援し，代価を支払おうとする事柄の多くを実現できるのである。しかし，無関心であっては実現できない。各自が自分の行ないと思いの結果すなわちどのような生活をしたかの結果を心によく思い計る必要がある。

愛する若人の皆さん，答えを探し求めているあなたに，過ちを犯したあなた，いい加減に教えられたあなたに，事実に反することを信じ込んでいるあなたに申し上げたい。人生の可能性を追求するにあたっては，高慢な心や悪い習慣，欲望，愚かな考えを捨てなさい。

青春時代はあっと言う間に過ぎ去って行く。衰退の時はあなたが考えているより早くやってくる。次いで世を去る時が訪れ，その後は終わりのない未来である。

心安らかでいられるように生活しなさい。愛する若人の皆さん，清くありなさい。清いという言葉は最も素晴らしい言葉のひとつである。清くない者に平安はない。律法に従い，戒めを守り，天父の前にへりくだって生活するならば，心の中に平安と確固たる希望のある，素晴らしい生活を営むことができるのである。

いついかなるところにいても自分自身，天父，そのほかだれとでも顔を合わせられるような生活を送りなさい。

皆さん一人一人が貴重な値の知れない大切な存在なのである。皆さん一人一人が天父にとってとても大切なのである。あなたの人生はあなたのものである。愛と徳を大切にし，両親を尊敬しなさい。祈りによって物事を決めなさい。愛をもち，心から奉仕し，威厳と正直と名誉を重んじなさい。事実をよく見極めて，それを神から与えられた標準に照らして判断しなさい。律法に従って生活しなさい。そうすれば救い主の福音があなたを導いて，平安と幸福，永遠の世にあっては進歩への最高の可能性を得ることができるであろう。

若人の皆さん，救い主は決して皆さんを欺くことはないことを覚えて下さい。救い主は，この道が広く容易であるとも，無関心や放縦に走る

者が到達できるとも言われなかった。主ははっきりとこう言われた。「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく，その道は広い。そして，そこからはいって行く者が多い。

命にいたる門は狭く，その道は細い。…」（マタイ7：13—14）

何の注意も必要とせず，安易に行ける近道は結局どこへも行かないのである。人はその行ないによって本当にどこへ行きたいのかを決めるのである。

神は生きておられること，これは神のみ業であり，神の教会であり，子らに対する神の計画と目的であることを証する。この福音は心から求め，受け入れるすべての人のために回復された。彼らはあなたと同じように日々の生活の中に神の訪れを受けるであろう。神はすべての人に向かってこう言っておられる。「私はあなたに命を与えた。この命は生かすも殺すもあなたにかかっている。」

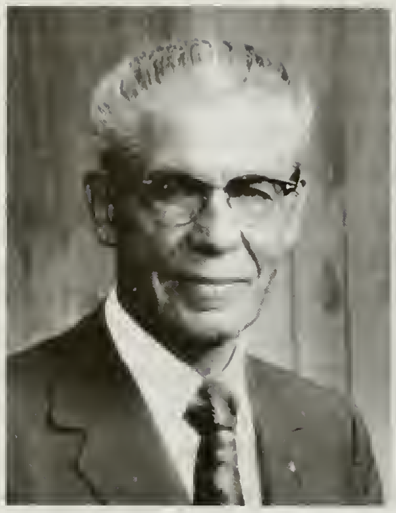
美しい世界を作るには長い時間を必要とする。美しい人生を築くにも長い時間が必要である。しかし，崩壊はまたたく間に終わる。愛する若人の皆さん，天父は理屈をもて遊ぶ御方ではない。天父が言われたことはその通りなのである。天父を信頼しなさい。真理を教えるためにあなたに命を与えたもうた天父を信頼しなさい。天父をおいてほかに信頼できる人がいるだろうか。

また自分自身だけでなく他の人々を尊敬しなさい。人生や法律を大切にしなさい。忠実，公平であり，常に前向きの姿勢でありなさい。清く平安な生活を送りなさい。人生はあなたの持てるすべてである。清さと名誉と正直を大切にすることにより人生を実りあるものとしなさい。真理から離れてはならない。

トーマス・エジソンは公衆を前に最後にこう述べている。「私が皆さんに申し上げたいのは，勇気を持ちなさいということである。私は長い人生の中で歴史が何度も繰り返すのを見てきた。

…あなたの先駆者である父祖と同じように勇敢でありなさい。信仰を持ち，前進しなさい。」

願わくは神が皆さんを祝福し，いつまでも平安が皆さんと共にあるように，救い主イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。



神権にあずかる特権

大管長会第二副管長

N・エルドン・タナー

大管長の要請で，簡単にお話したい。私はこのようにして神権者の前に立ち，話をするたびに特権と霊感を感じている。これはまた大きな責任でもある。

スミス大管長の説教はそのほとんどが対象をメルケゼデク神権者に置いたものであった。私は，全世界で最も素晴らしい若人のグループすなわちアロン神権者の皆さんにお話したい。

私は私の孫たちに話したいと思う。私の家族には，メルケゼデク神権者の義理の息子が5人，メルケゼデク神権者の孫が4人，アロン神権者の孫が6人いる。さらに8人の孫たちが神権を受ける準備をしている。私はこの8人の孫に向かって話をしたい。

若人にとって神権を持つことほど大きな責任はない。この神権は，若人が与えられた職務の中で主のみ名において行動し，メルケゼデク神権を受ける準備をし，さらには神権に対して忠実な者に与えられる祝福を享受するよう神から委譲された権能である。

アロン神権は非常に大切なものであるため，主はバプテスマのヨハネを遣わしてジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに授けさせたもうた。バプテスマのヨハネはこの神権を授けるにあたって次のように述べている。

「汝ら，われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて，われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み，悔改めの福音，罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして，まことにレビの子孫が主の御前に再び義しきに適いて捧物を捧ぐる時まで，この世より決して再び取り去らるることなし。」（教義と聖約13）

神権を持つことはどれほど大きな特権であり，機会と責任をもたらすものだろうか。スミス大管長がメルケゼデク神権者に対して読み上げた誓約はそのままアロン神権をも拘束するものである。なぜならばこの誓約はふたつの神権のいずれを持つ者にも適用されるからである。そして，この誓約を基準にして私たちの地位が決められる。

私たちは試しを受けて自らがふさわしいことを証明するとき，このメルケゼデク神権にあずかる機会が与えられる。中学校から高等学校，高等学校から大学へ進学すること，さらにはこの死すべき世から永遠の世へ行くことと似ている。私たちはどのように生活したかによって祝福を受ける。生活によっては，次のような言葉を受けるのである。「良い忠実な僕よ，よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから，多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」（マタイ25：21）

神権を受けている私たちはどれほど幸福であろうか。現在，皆さんの年齢の青少年は全世界で1000人に1人がアロン神権を受けている。この会場を埋め尽くしている全会衆のうちわずか8人がアロン神権を受けている勘定になる。何と素晴らしい特権であり，機会と責任であろうか。

主のみたまと祝福を受けられるように生活し，両親や友人，教会の指導者，さらには主を尊敬し，信頼できるような生活を送り，特に良心に恥じることなく自分を見つめ，鏡の中の自分を見，そして主の求めておられる生活をしていると断言できるような日々を過ごすこと，これは実に大切なことである。

主は，サタンを投げ落とす時に次のように言われた。

「而して彼はサタンと成れり，実にあらゆる偽りの父なる悪魔となりて人を欺きだまし，以てわが声に聴き

従わぬすべての者を欲するままに虜となすなり。」（モーセ4：4）

サタンは執事からキリストに至るまで私たち一人一人を誘惑しようとしている。サタンはどのようにキリストを誘惑しようとしたか皆さんは覚えていると思う。サタンは自分に従う人々，弱くて善を行なえない人人を手下にしている。これらの使いは，個人や教会の指導者，組織その他の弱点を折あらば捜し出し，それを指摘しようとしている。そして彼らはこう呼びかけている。「それでいいのだ。怖がることはない。」

私は若人の皆さんに申し上げたい。福音の教えに従って生活し，自らの神権を敬っている人は，決してそのような誘いを受けることがない。

主は恐れることなくサタンにこう言われた。「サタンよ，退け，」私は，私たちがこの世の1,000人の1人として恐れることなく神権を尊ぶよう願っている。誘惑に負けた者は悔い改めない限り，挫折感と悲しみの中に取り残される。

アメリカ合衆国の元副大統領スパイロー・アグニュー氏が先日大管長会を訪れ，語ったところによると，彼がBYUを訪れた時，私たちの教会の若人に関して心ひかれることがひとつあったそうである。それは青少年の自己修養がよくなされていること，また自分が関心を抱いている事柄を追求する，すなわちなすべきことをなし，しかもそれを喜んで行なうという姿勢であった。

不満を抱いている人，不平を言う人，なすべきことをしていない人は幸福でないことを若人の皆さんに知っておいていただきたい。彼らは挫折感を抱いている。悪を行なっていて幸福を味わうことはできない。彼らは問題を持ち，何も成し遂げようとしないのである。残念ながら，彼らは私たちが知っているように，私たちすべてが神の霊の子供であることを知らない。神が本当に生きておられること，イエスがキリストであることを知らない。またイエスの降誕と死と復活を通して私たちがことごとく復活すること，この世の生涯はそれだけで終わるのではなく永遠の生活の始まりに過ぎないことを知らないのである。

願わくは，私たちがこのことをよく認識し，それにふさわしい生活をするよう全力を尽くすように。また鏡に自分を写して，「克服し，退ける力が私に与えられていることを主に感謝します」と言えるように，願うものである。何かの理由で落胆している人，タバコやその他のものを手にした人に申し上げたい。今晩それをやめて，幸福になる努力をしていただきたい。そうすれば必ず幸福になれるはずである。皆さんの上に主の祝福があるように皆さんは人々から尊敬を受けるであろう。皆さんは人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす上で果たすべき義務を成し遂げることができるであろう。

私たちがこれをなすことができるよう，私はへりくだりイエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。



あなたは神から こられた教師である

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン

スミス大管長，私はあなたの前に立つと勇気の原則が心に浮かんでくる。15年前，この会場の南にあるアセンブリーホールで開かれた大会において私はステーキ部長会の一員に召された。スミス大管長が管理者だったその大会の模様を私は今なおよく覚えている。私はアロン神権者のコーラスに入って歌っていた。当時私は監督だったが，私たちの監督会はアロン神権者のコーラスに必ず加わることにしていたのである。

スミス大管長は壇上に進み出ると，ステーキ部長会の一員として私の名前を読み上げた。私は自分の召しをその時まで知らされていなかった。そして大管長は次のように私を紹介したのである。。「モンソン兄弟がこの召しをお受けになるなら，彼から話をうかがいたいと思います。」

私たちがその時歌い終えた讃美歌の最後の一節を紹介したい。「少年よ，勇気を持て。きっぱり否定する勇気を持て。」私は壇上に立って「少年よ，進んで受け入れる勇気を持て」というテーマで話をした。私はこの壇上に立つたびに勇気を奮い起こす必要に迫られている。

私は大管長会から，新しい教師養成プログラムを皆さんに紹介するようにとの指示を受けている。これは教会内で教師の責任を持つすべての人々の教授技術を高めることをねらいとしている。

子供をお持ちの兄弟たちは，次のような質問を息子にしたことがあると思う。「ディック，きょうの日曜学校はどうだった。」すると，こういう答えが返ってくる。「たいしたことなかったよ。だって教師がこなかったんだもん。」恐らく皆さんはこう答える。「うん，お父さんのクラスのキャンベル兄弟も一生懸命なんだが，何を教えているかわからないんだ。」

私たちも正直に自分自身を見つめてみれば，すべての末日聖徒の家庭で，形こそ違えこれと同じ会話が交わされていると思う。日曜学校だけでなく，初等協会，MIA，扶助教会，神権定員会についても同じことが言える。

ジョン・ミルトンはこの状態を，「飢えた羊は見上げているのだが，餌を与えようとしない」（“*Lycidas*”哀詩）と述べている。主も予言者エゼキエルに語っておられる。「わざわいなるかな，……イスラエルの牧者…群れを養わない。」（エゼキエル34：2－3）

賢い牧者すなわち技術を具え，義を重んじる教師が今日の世の中にも必要ではないのだろうか。目まぐるしく変わる現代は，過去にはなかった新たな圧迫と誘惑を生み出している。

現在，ポルノ文学に年間1兆5千億円を越える金銭が投じられている。こうして邪悪な人々が「泥の中から金を掘り出そう」としている。雑誌，映画，テレビ，その他のマスコミは道徳の標準を下げ，ふらちな行動を誘発させるために利用されている。犯罪，青少年の非行が横行し，霊的な事柄の価値が疑問視されている。この世において何が真実で何が大切かを私たちに理解させ，永遠の生命に至る道を常に選ぶ強さを育んでくれる教師が是非とも必要である。

こうした状況から，大管長会は積極的な措置を講じる必要を感じ，1968年10月に，全教会における教え方の質の向上を図ることを目的としたひとつの委員会を組織した。大管長会が示したプログラムの骨子は次の3項目である。

1. 神権組織のもとに全教会で実施する。

2. 教師および指導者の向上を図る。

3. 将来教師に予定している人が，必要な訓練と霊的な事柄を理解した

上で責任につけるように援助する。

今年1月に行なわれたデゼレトニューズとの記者会見で，ジョセフ・フィールディング・スミス大管長と副管長は，教師の役割の大切さを再度強調している。「神の戒めを守るよう教会員に教えること，末日聖徒イエス・キリスト教会の新しい大管長会はこれを最大のチャレンジとして取り上げた。」

福音を教えることは，生徒に情報を流すことではない。教師にどれほどの知識があるかを誇示することでもなく，教会に関する知識を増すだけのことでもない。教会で教える際まず第一に目標とすべきことは，年齢を問わず人々の生活を正しい方向へ変えるよう援助することである。そのためには，福音の原則に従って生活することについて個人個人に考え，意識させ，次にそのための行動に移させる必要がある。

この目標を達成するための手助けとして，私たちは神権者の皆さんに，新しい教師養成プログラムを紹介する。

1970年10月1日木曜日に開かれた十二使徒会地区代表のための特別セミナーにおいて教師養成プログラムが詳細にわたって提示された。これらの献身的で有能な兄弟たちは，今後6週間の間にステーキ部長に対してプログラムの概要を説明するはずである。そして1971年1月1日を期してプログラムは開始される。1971年前期のステーキ部四半期大会に出席する教会幹部はこのプログラムの実施を呼びかけ，また状況を大管長会へ報告することになっている。

産業経営の基本原則に次のようなものがある。「実績を測定すると実績が上がる。実績を測定し報告すると，向上の比率が倍加する。」私は教会幹部が各ステーキ部を訪問することによって，一層改善を見ることができると考えている。

時間の関係もあるので，プログラムを箇条書きに説明したい。

1. この新しいプログラムは神権組織が管理し，現行の全教師養成プログラムに代わるものである。

2. ステーキ部長はステーキ部内の教師養成に関して責任を持ち，高等評議員の一人をステーキ部教師養成指導主事として召す。この高等評議員は傑出した教師であって，人々に霊感を与え，改善への意欲を駆り立てる能力を具えていなければならない。

3. 監督はワード部内の教師養成プログラムに関して責任を持ち，有能なメルケゼデク神権者をワード部教師養成指導主事として召す。

4. 伝道部の伝道部長，地方部長，支部長はこれと同様の責任を持つ。

5. 教師養成プログラムは三部門から成る。すなわち（a）基礎コース，（b）現職プログラム，（c）教授監督（1971年9月1日に紹介の予定）

6. 基礎コースは，将来教師に予定されている人と現在教師の責任にある人に，福音をさらに効果的に教える上で必要な知識と技術を身につけさせることを目的としている。このコースは11週間で終了し，通常は日曜学校の時間に行なう。参加者は約8名とし，監督の面接と召しを受ける。基礎コースの教師はワード部教師養成指導主事が務める。

7. 現職プログラムは基礎コースから派生したプログラムであって，霊的原則と教授技術の双方を扱う。現職教師用レッスンは，年間10回すべての神権定員会および補助組織の教師を対象に行なう。

8. 基礎コースと現職プログラムのテキストは間もなく配布される予定である。指導手引きはステーキ部とワード部の各指導者に無料で配布される。これと共に監督に対して特別に注文用紙が送付されるので，プログラムを始めるために必要な資料はこの用紙を使って注文する。資金はワード部およびステーキ部の予算から捻出する。個人用のバインダーと資料はそれぞれワード部またはステーキ部から購入する。一括購入により送料負担を軽減するためである。

9. プログラムには多くの柔軟性を持たせている。プログラムはワード部単位で実施すべきであるが，状況に応じてワード部合同もしくはステーキ部単位で基礎コースと現職レッスンを行なってもよい。

10. プログラムは小グループ制の長所と利点を生かしている。すなわち，実際に学習経験を行ない，これに参加することを強調している。

これが新しい教師養成プログラムである。モニュメント・パーク，ウォールナット・クリーク，ガニソンの各ステーキ部およアラスカ－ブリティッシュ・コロンビア伝道部のビクトリア地方部において，綿密な監督と管理のもとに実験的に行なわれた。あなたのワード部やステーキ部でも期待するような成果をあげることができるだろうか。すでにコースを終了した二人の証に耳を傾けてみよう。

「私は生まれて初めて，どのように教えたらよいかに気付きました。」

「福音のもたらすすべての祝福と同じで，このプログラムも活用しなければ意味がないと思います。『私はこれまで教師として立派にやってきたのだから，いまさらこんなプログラムに参加する気なんてありませんよ』と言う人もいるでしょう。こういった人には何の役にも立たないでしょう。『またプログラムですか。教会には集会が多すぎます』と言う人も同じです。けれども『このプログラムから何か新しいことを学び取ろう』と言う人は，多くのものを得るに違いありません。そして主のみ業

の前進に貢献することができるのです。」

末日聖徒イエス・キリスト教会のすべての会員および神権者は，いつか教師として働く機会が与えられるはずである。これほど気高くまた報いの大きい仕事はない。私は神権者の皆さんに，教師養成プログラムに参加するよう呼びかけたい。またヤコブの言葉を借りて皆さんにチャレンジしたい。「御言を行う人になりなさい。…ただ聞くだけの者となってはいけない。」（ヤコブ１：22）このような言葉がある。

「聞いたことは忘れてしまう。
だが，見たことは忘れない。
さらに行なったことは身につく。」

ほかの人々は皆さんの模範に従うことであろう。教え方が改善され，その結果人々は戒めを守るようになり，祝福に満たされた生活を営むようになるであろう。

偉大な教師である主イエス・キリストは，ガリラヤで教えを説き，海辺に足跡を残された。そして，主は教師として従うべき原則を，教えたすべての人々の心と生活に残していかれた。主は弟子たちに指示したと同じ言葉で，私たちに語っておられる。「あなたはわたしに従ってきなさい。」だが，愚かな人々は，自分の耳をふさぎ，目を閉じ，心を閉ざしている。自らの意志で耳を閉ざす耳しいは，永遠にその状態にとどまることを忘れないでいただきたい。また自ら見ようとしない目はいやされることもなく自ら知ろうとしない人はいつまでも無知の深みから脱出することはできない。

私たちは，いにしえの，トマスのような信じない者でなく，信じる者となって，「さあ，やってみよう」と答える者になろうではないか。今こそ教師養成プログラムの紹介と実施を進めようではないか。この従順の精神をもって行なうとき，贖い主が呼ばれたと同じ名で呼ばれるのである。すなわち，「あなたは神からこられた教師である」と。皆さんがそう呼ばれる教師となることができるよう，イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。

光をともし続けなさい



大管長会第一副管長・十二使徒評議員会会長

ハロルド・B・リー

「何かが起こるということはすなわちその考えが形になって現われるときが来たということである」という言葉がある。

来年の4月で私は十二使徒評議員会の会員に召されて30年になるが，その間ずっと，教会の雑誌を統一しようとする動きがあった。それが必要だということはわかっていたが，まだ時が来ていなかった。そして今，これが実現したのは，時が来たからである。

これらの雑誌は英語を話すあらゆる国の教会員のもとに届けられる。では現在福音が宣べ伝えられている19の言葉についてはどうかと問われる向きもあろう。そのうちの11カ国語に教会のテキスト類が翻訳されている。こうした外国語を話す人々のためには，統一機関誌があることを申し上げたい。機関誌の原稿は数ページを残して教会の編集部が編集する。この数ページについては，各伝道部がそれぞれの必要を満たすために使用する。各国語に翻訳される原稿は皆同じものである。これは翻訳事業部が置かれている地域の全会員に対して教会の神権指導者から直接の指示や情報を伝えるためである。

この点については十分な検討が行なわれた。毎月第一木曜日に，神殿の一室で教会幹部全員が断食して集う非常に大切な集会が開かれる。この集会の前半はビジネスに当てられる。それまでの1カ月間に種々の検討を加えた新しい考え，方法，活動がそこで提議され，全教会幹部がそれらを吟味検討し，決を下す。これは教会幹部の正式な裁決であって，教会すなわち地上における神の王国の規則となるものである。

このような過程を経て新しい雑誌が生まれたのである。将来，改正する場合もこの過程を踏む。全教会で実施される運びとなった監督訓練プログラムも同様である。全教会予算制度もこの過程を踏む。その他教会幹部から全教会員に指示されるすべてのプログラムも同じ方法で実施されるのである。

私たちがなぜこれほどまでに深い関係を寄せているのかをおわかりいただけると思う。

6月大会で青少年向けの雑誌が発行されることを発表したら，青少年は大喜びするだろうと話し合っていたとき，タナー副管長はこう語った。「忠実な教会員のことを考えると，私たちは絶対に正しいと確信することしか発表できませんね。」全くその通りである。私たちは断食と祈り，慎重な検討の結果，この確信を得たのである。すなわち，「主の意，主の言，主の声，世を救いに導く神の能力」を得るために，私たちはこのような過程を踏まなければならないのである。(教義と聖約68：4参照) 従ってこれらのことは正式に承認を得た上で発表されたことをおわかりいただけると思う。神権者の皆さんは，これらの雑誌がどのようにして生まれたかを理解していただきたい。また全世界の教会員が読むことのできる最も大いなる雑誌であることを認識していただきたい。

もうひとつの別のことをお話しよう。もし皆さんが，私たちのように壇上に座ってまばゆいばかりの照明を浴びたら，先程ここに立ったモンソン長老，また私自身もそうであるが，額に汗がにじんでくる。皆さんが座っている所とここでは温度の差が華氏で15度はある。従って皆さんの方がいくらか楽な思いで座っておられることになる。

先日私は集会所を献堂するためにアイダホ州のプレストンへ行った。私はその立派な集会所の椅子に腰かけてこう思った。「冷暖房付きの集会所を持てるようになるとは進歩した

ものだ。私が幼い時にはとうてい考えられなかったのに。」そして集会が進んで行き，途中で監督が立って冷房器が動いていないと言った。とたんに私は暑くてたまらなくなった。思いが事実に先行するということが起こる。

私はかつてエバンズ兄弟にこう言ったことがある。「このライトは全くひどい。まるで罰を受けているようだ。」するとエバンズ兄弟は「もし人から見られたければ，ライトを浴びなければなりませんよ」と言った。私は彼の言葉からひとつのことを思いついた。

皆さんと一緒に彼の言葉を言い換えて考えてみたいと思う。もしあなたが神権の力を自分や世のために使いたければ，それを働かさなくてはならない。つまり使わなければならないのである。

主は言われた。「また，あかりをつけて，それを枡の下におく者はいない。むしろ燭台の上において，家の中のすべてのものを照させるのである。そのようにあなたがたの光を人人の前に輝かし，そして，人々があなたがたのよいおこないを見て，天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」（マタイ5:15—16）

もしあなたが神権者として見られたいのであれば，あなたのランプを輝かせなければならない。

主は大いなる啓示の中で次のように言っておられる。「汝らもし，日の栄の世界に一つの所を得んことをわれに願わば，わが命じて汝らに求むるところを行いてその備えを為さざるべからず。」（教義と聖約78:7）

さらにもうひとつ申し上げたいことがある。イエス・キリストの福音に定められている標準に到達しない社会の標準に対して神の王国は，絶えず改革を求めなければならない。一般市民としての生活においては，合衆国憲法に規定されている基本原則に反する提議に対して絶えず改革を求めなければならない。合衆国憲法は，この目的のために神より立てられた人々により制定されたものである。このことを常に心に刻んでおくならば，社会を滅ぼすあらゆる敵に対して私たちは進んで戦いをいどむことであろう。

エルドレッド・G・スミス兄弟は，末日聖徒に安息日を清く過ごさせるのに法律はいらないと語った。私たちはこの言葉に感銘を受けた。現在各地に集まっている15万の神権者とその家族が，日曜日に営業する事業に今後一切関与しないことを決意するならば，人々が日曜日に営業を控える日が遠からずやってくるであろう。皆さんは日曜日に営業して利益を上げている事業をやめさせる力を振るうことができるのである。彼らは日曜日の営業を要求する人々がいるため，営業しているに過ぎないのである。兄弟たち，この点について考えていただきたい。

ポルノ文学について申し上げたい。わいせつな書物を調査した委員会の報告を読み，露骨に性を描写した書籍を禁止する法律を廃止しようとする動きを知って，私たちは非常な衝撃を覚えている。実にショッキングな状態である。神権を持つ兄弟たち，私たちはこれらに断固として反対し，あらゆる手段を使って，ポルノ文学，ポルノ映画，広告を私たちの社会から締め出さなければならない。デゼレトニューズはポルノ映画の広告を一切掲載しないと発表した。これは喜ぶべきことである。各地でこれが実施されることを望みたい。もし兄弟の皆さんが地域社会の中で断固とした態度で立ち上がるならば，私たちの眼前にくりひろげられている道徳の低下に最早耐えることができないという事実に気付く人が出て来ると思う。

最後にもうひとつ申し上げたい。スミス大管長は神権に属ける誓詞と誓約について語った。主は啓示の中でこのことを別な表現で述べておられる。日の光栄の王国を受け継ぐ者について語られた時のことである。主は言われた。「これらの者は，イエスの証詞を受け入れ，その御名を信じ，…バプテスマを受け，…按手によりて聖霊を受け，…約束の聖き『みたま』によりて結び固めらる。」（教義と聖約76:51—53）

主は別の啓示で，約束の聖きみたまにより結び固められた夫婦は，「彼処に置かれたる諸天使諸神の前を通り過ぎ，各々その頭に結び固められたる如く，各々最高の栄に進むを得てあらゆる事に光栄を受くべし」と述べておられる。

約束の聖きみたまにより結び固められるということの意味を，ある教会幹部は次のように説明している。「私たちは，地上において結び固め，天においてもそれが結び固められる権能を持つ神権者の手より永遠の祝福を受けるが，この啓示は，約束の聖きみたまによっても結び固められなければならないことをはっきりと述べている。人は欺き偽って主の宮居に入り，これらの祝福が与えられるという聖なる神権の宣言を受けるかも知れない。私たちは人を欺くことはできるが，聖霊を欺くことはできない。私たちの受ける祝福は約束の聖きみたまによって結び固められない限り，永遠の祝福とはならないのである。聖霊は，人々の思いと心を読み人々の頭に宣言された祝福を確認し承認する方である。この聖霊の承認を受けてはじめて，祝福は効力と力を発揮するものとなる。」（メルビン・J・バラード，"*Three Degrees of Glory*"「光栄の三段階」

従ってこのことを踏まえれば，ア

イダホフォールズ神殿の献堂式において政治等に関する私たちの取っている立場について幹部の兄弟たちが説明したことの意味を理解できると思う。間もなく選挙が始まる。私たちは，その献堂式での祈りを今一度考えてみる必要があると思う。

「この国の民はあなたの導きのもとに自由を得，その結果数々の祝福を得ています。願わくは，王，統治者，天が下のあらゆる国民がこの祝福の価値を知り，これをもたらすような政治形態をとるよう心を動かして下さい。このようにして，『律法はシオンから出，主の言葉はエルサレムから出る』というイザヤの予言が成就しますように。」

神権者の皆さん，もし私たちが一致し，光を輝かせ，光を枡の下に隠すのではなく正しく働かせるならば，またイエス・キリストの祝福に定められた標準や霊感を受けた人々により起草された合衆国憲法の定める標準を下げようとする社会の風潮や試みに対して神権の召しに基づく行動をとるならば，私たちは世にあって力となるに違いない。それはまさしく，主が神の王国を指してかくあるべきと言われた「不思議な驚くべきわざ」である。私はこれを実現できるように，またスミス大管長が語ったように神権の召しを全力を尽くして果たすことができるように，主イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。



家族と柵

十二使徒評議員会会員

ボイド・K・パッカー

この安息日の朝に，私は新たな責任を帯びてこの壇上に立ち，今までにも増して主のみたまが私を支え，導きたもうよう，この会場に出席している皆さんとラジオ・テレビを通じて耳を傾けている皆さんが信仰と祈りを寄せて下さるよう願っている。私は，わがままで道に迷った子供を持つ方々に対してお話したいと思う。

先日，息子のことで深刻な問題を抱えたひとりの父親と会う機会があった。彼はこう言った。「息子が外出しても，私たちはどこへ行ったか分からないのです。とても心を痛めています。でも息子が家にいればいるで，みんなの悩みの種になるのです。」私はこの心痛についてお話したいと思うが，大聴衆を目の前にしていると，足がすくむ思いがする。

息子や娘がどこでどうしているのか知っている人はいないだろうかと，心配し，祈っている母親は大勢いる。また，仕事に身が入らず，「私たちのどこが悪かったのだろうか。子供を立ち返らせるにはどうしたらいいだろうか」と思い悩んでいる父親も多い。

一生懸命に努力している両親でさえ，その心痛を味わっている。多くの親たちがあらゆる手を尽くして子供たちを守ろうと努めてきたが，子供たちは親のもとを離れてさ迷っている。今や家庭と家族はあらゆる方面からの攻撃にさらされている。次の言葉について考えてみていただきたい。

不信仰
裸体
不道徳
離婚
ポルノ
麻薬
暴力
性倒錯

これらの言葉はここ数年のうちに全く新しい意味をもつようになっている。

近くの映画館を見ていただきたい。つい10年前までは，上映が禁止され，フィルムが没収され，劇場主が告発されていた映画が，今では青少年にまで開放されている。こうした映画がテレビを通じて家庭に持ち込まれるのも，そう遠い日のことではあるまい。

使徒パウロはテモテに対して次のように予言している。

「しかし，このことは知っておかねばならない。終りの時には，苦難の時代が来る。

その時，人々は自分を愛する者，金を愛する者，大言壮語する者，高慢な者，神をそしる者，親に逆らう者，……」（IIテモテ3：1－2）

聖句はまだ続くが，「親に逆らう者」という箇所までにとどめたい。

私たちは皆さんをさらに苦しませるためにこのテーマを取り上げるつもりではないし，皆さんの失敗を非難するつもりもない。しかしながら，あなたは失敗しており，それが心痛の種になっているのは現実である。過ちを終わらせたいと思うならば，どれほど辛くともその問題を直視しなくてはならない。

数年前のこと，私は朝方，体を悪くして病院で検査を受けている母親に呼ばれた。

病室へ行くと，母は「家へ帰ります。こんな検査は我慢ができないから，今すぐ連れて帰って下さい。もう一日もいたくありません」と言った。

「でもお母さん，検査は受けなくてはなりません。癌かも知れないと言われてますから。それも，悪性かもしれないのです。

とうとう口に出してしまった。陰で話すようにして，母には決して知らせまいとしていたのに，つい口をすべらしてしまったのだった。

母は口を閉ざして長いことベッドに腰かけていたが，ようやくこう言

った。「そうかい。もしそうだったらそれでしようがないんだから，私は病気と闘いますよ。」デンマーク人特有の負けん気が頭をもたげてきたのである。母は闘い，そして勝った。

母がその病気との闘いに負けたではないかと考えた人もいるかも知れない。だが，母は闘って，栄えある勝利者となった。たとえ辛くとも現実に立ち向かったときに，母の勝利は約束された。そして勇気を得たのだった。

両親の皆さん，あなたが抱えている問題の中で一番痛い所を最初に考えることができるだろうか。息子や娘を元に戻したいと思うならば，しばしの間だけ子供を変えようとする努力をやめて，自分自身のことを考えていただきたい。最初に変わるのは子供ではなく，親である皆さんでなければならない。

あなたの行動がある結果を生み出し，子供にはそうなって欲しくないと思うならば，（たとえ正しいと思っていることでも）それをやめなくてはならない。

これが答えである。問題を口にするのを避け，わがままな子供に気を遣い，ほかの人々を責め，両親と仲良くできるようにと様々な手だてを尽くしたあとの結果がこれである。

今すぐに考えなければならないのは子供ではなくあなたである。

さて，皆さんが受け入れて下さるなら，具体的な方法をお話したいと思う。この方法は決して易しいものではないことを付け加えておきたい。問題が重大であるだけに，方法もそれ相応に困難になってくる。飲んだ途端に治るというような特効薬はあり得ないのである。

両親の皆さん，信仰や教会の教えを無視した治療方法を捜してもそれは決して見付からないことを覚えておいていただきたい。面白いことに，教会の原則や教義，聖句を引用する話には興味を示さない人が多いが，家族と皆さんの問題，その解決法をお話すると，多くの人が耳をそばだてて聞く。

他のことを語らずにあることを語ることはできないし，問題の解決も期待できないことを知っていただきたい。両親が神が生きておられることと，私たちは神の子供であることを知れば，この種の問題にも立ち向かい，打ち勝つことができる。

あなたが無力でも，神はそうではなく，
あなたが迷っても，神は迷わず，
あなたが次に何をすべきかを知らなくても，神は知っておられる。

奇跡でも起こらなければ不可能だ，とあなたは，言うかも知れない。

もし奇跡が必要であれば，それが起こらないはずがあるだろうか。

私たちはまず予防から始める必要がある。

「柵か救急車か」という詩がある。崖の下に救急車を配置する次第を述べたあと，次のように結んでいる。

「年老いた賢人がそこで言った。
原因を防ぐことよりも，結果のとりつくろいに精出すとは全く愚かなことだ。
予防を考えた方がはるかに効果があるというのに。
災いのおおもとを断つのだ，老人は叫んだ。
皆の衆，集ってくれ。崖に柵を作れば，谷底に救急車を置いておくこともないのだ。
年老いてから連れ戻すより，若者のうちから導く方が賢明なのだ。
真の知恵ある者は言う。『落ちた人を救い出すことは良い，
だが他の人が落ちないようにすることの方がはるかに良いことだ。』
土牢や奴隷船から救出するよりも，誘惑や罪の源を閉ざした方が良い。
谷底に救急車を配備するよりも，崖にがんじょうな柵を築くほうがはるかに良いのだ。」

——ジョセフ・マリンズ

私たちは免疫をつくって病気を防ぐ。皆さんが苦しんでいるこの心の痛みも同様に，かつては簡単な方法で予防できたはずのものである。幸いなことに，予防の各段階は，病をいやす段階でもある。言い換えると，たとえ事態が進行していたとしても予防は最良の治療法なのである。

さてここで，子供たちを守るにも，さ迷っている子供を救う場合にも役立つ実際的で有効な方法をお話しよう。

私が今手に持っているのは「家庭の夕べ」のテキストである。これは発刊以来7冊目にあたり，世界の17カ国語に訳されている。お読みになれば，これが新約聖書を基として書かれていることがわかる。テーマは自由意志である。新約聖書の時代からレッスンがとられているといっても，内容まで昔に戻るわけではない。時代を越え，あなた自身にも，身の周りのどこにでも見られる内容を含んでいる。

カラーがふんだんに使用され，どの年代の子供でも参加できる有意義な活動がたくさん載っている。

たとえば，ここには（p. 39）クロスワード・パズルがあり，こちらは（p. 23）色彩豊かなゲームのページである。切り取って，ボール紙に貼り，家族全員で楽しめるようになっている。「天の宝」と「この世的な楽しみ」の間を動いて行くわけである。

ここには「我が家の成り立ち」（p. 51）というレッスンがあり，「今度は，あなた方がどのようにして出合い，恋をして結婚したかを子供たちに話すときです。2人で一緒に話すようにして下さい。絵を使ったり，大切にしまっておいた結婚衣裳や案内状，結婚式の写真などの記念品で説明し

て下さい。いつの日か孫にも聞かせられるよう，あなた方ふたりの説明をテープにとっておくのも良い考えです」と書かれている。

また，ほかにレッスンのテーマをあげると，「家庭管理」，「礼拝」，「清い言葉使い」，「家庭経済」，「両親」，「神聖なる機会」，「権能を尊ぶ」，「ユーモアの価値」，「新しい地へ行こうとしているあなた」，「予期せぬ出来事が起きたら」，「救い主の誕生」がある。

これは「自由を得させるもの」というレッスンである。中には本物そっくりの色刷りの証明書がはさまれており，「家族の人たちがやったことのないような活動を選ぶこと。証明書の形式をとった一枚の紙を封筒に入れて，家族に一枚ずつ渡す」，父親が「この証明書はあなたが家庭の夕べにおいて，ピアノを一曲弾くことを許可するものである」と書いてサインをするようになっている。（もちろん，その子はそれまでにピアノを習ったことがない）

子供の年齢に合わせて，ほかにも証明書を作ることができる。「逆立ちをして歩くこと，外国語を話すこと，油絵を描くこと」など。そして，家族がそれぞれ許可されたことをできないと言うと，なぜそれを自由にできないかを話し合う。こうして，「家族は，能力を伸ばすには一定の法則があってそれに従わなければならないことを学ぶ。従順は自由をもたらすのである。」

ここには，小さな子供のいる家族のための提案がある。それによると，おもちゃの自動車をテーブルの上にのせて，どっちでも好きな方向に，好きな方法で走らせてよい，と記されている。幼ない子供たちでもその結果を予測できるはずである。

このレッスンだけをとっても，子供を家族という輪の中に引き入れるための優れた方法が幾つか記されている。

このプログラムは週に一回行なうように計画されている。全教会で，月曜日は家族が共に集まる日として，ほかの日と分け，そのように指定されている。最近出た指示の中から少し引用しよう。

「全教会を通じ，月曜日の夜が一様に守られるよう，神殿活動，青少年体育活動，学生活動等も含め，神権組織と補助組織プログラムは，この決定に注意を払わなければならない。家族は教会の活動を行なわず，家族がそろって家庭の夕べに集うためである。」（「神権会報」1970年9月）

このプログラムには生ける予言者の約束が伴なう。すなわち，両親が週に一度，子供たちを周囲に集めて福音を教えるならば，そのような家庭の子供たちは決して道を踏みはずすことがないのである。

教会外のある方々や残念なことに教会内でも多くの方々は，イエス・キリストの福音と教会の会員としての責任，さらには聖典を完全に受け入れることは困るが，この種のテキストだけなら欲しいと言われる。どうぞ手に入れていただきたい。（理想的な家族を築くことを許可する「証明書」をさしあげてもよいと思っている）けれども律法に従わなければ，そうした家族を築くことはできない。福音を抜きにしてこのプログラムを行なうことは，命にかかわる病気の免疫を子供に与えるための注射器を入手しながら，肝心な血清を受け取ろうとしないようなものである。

両親の皆さん，家族の霊的指導者として責任を果たしていたのは，もう昔のことになっているかも知れない。現在の信仰に中身がなくなっていたら，勇気をもって真理を求めていただきたい。

現在の若人は，有史以来指折りの優れた人々である。伝道に出ている若人を目にしたことがあるはずである。彼らの訪れを断わった方もいると思う。しかし，あなた方は彼らを捜す必要がある。何の変哲もないかも知れないが，彼らこそ，若人が誇りをもって生きることができるという証拠なのである。こうした真の聖徒，末日聖徒が何千何万といるのである。

さて，両親の皆さん，私は皆さんに希望の光を投げかけたいと思う。心痛む日々を過ごしている方も決してあきらめてはならない。どれほど暗くとも，道が遠くとも，どれほど息子や娘が闇に落ちていても，決してあきらめてはならない。決して。

私は皆さんの心を希望で満たしたいと願っている。

「新たなおとずれを携えた
　天使のささやく声のように，
静かな言葉にのせた希望は
　慰めを与えてくれる。
闇が去り，夜明けがもうすぐ来る。
　明日は太陽が昇るのだ。
心にささやく希望の声，
　何と喜ばしいおとずれか。」

心を痛めている両親の皆さんに神の祝福があるように，子供を失うほど辛いことはないが，その子供を元に戻したときほど大きな喜びもまたない。

私は特別な証し人として聖任された十二使徒の一人として，証を述べたいと思う。私は，神が生きておられ，イエスがキリストであることを知っている。世の人々は神が生きておられることを「見ようともせず，知ろうともしない」。心が張り裂けんばかりの思いでいる両親の皆さん，「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る」（ヨハネ14：17—18）との主の約束に信頼を置いていただきたい。イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

希望の光

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター



私たちは人類の歴史上実に興味深い時代に住んでいる。人類の進歩は初めはゆっくりしたペースであったが，それにはずみがつき，次第に速度をあげ，現在に至っている。この勢いで行くと将来は一体どういうことになるのかと思わせるほどである。科学の急速な進歩により，日常生活は便利の度を増している。医療施設の進歩により人々の健康が促進され，寿命も長くなっている。多くの分野で社会が画期的な変革を遂げ，人類の福祉に貢献している。商工業もかつてないペースで発展している。現代の生活水準は人類史上最高に達していると言えよう。華やかな業績の上に築かれた現代に住む私たちはそれを誇りとしている。

だが，この急速な進歩はすべて将来も人に利益をもたらすのだろうか。私たちの子供や孫にも恵みとなるのだろうか。これらはだれもが関心を寄せていることであろう。社会の安定の原動力となっている家庭や家族は今後も変らないのだろうか。市町村や国家の連帯感はどうなるだろうか。インフレや負債がこのまま進んで行くと経済はどうなるのだろうか。道徳の退廃がこのまま進むとどうなるのだろうか。それは個人，家族，国家さらには世界にどのような影響を及ぼすのだろうか。このように，私たちが進歩と考えている事柄も将来に重大な結果をもたらすことになることを認めざるを得ない。

現代人の指導者と自認する多くの人々がいわゆる現代思想を信奉する時代に私たちは差し掛かっている。あるいはすでに入っていると言った方が良いかも知れない。同胞に対する責任を省みない自由な思想，自由な行動に走る極端な者たちも出ている。もし私たちがこういった幻覚剤使用の自由，道徳の自由を唱道する人々について行ったら，どのような所へ行き着くのだろうか。自由恋愛，堕胎の自由，同性愛，法によるポルノグラフィーの容認，これらが全世界にまんえんすると，その結果はどうなるのだろうか。

これまで社会の安定に大きく寄与してきた霊的なものの価値や宗教上の理想はどうなるのだろうか。現代の思想家は，これらが現在彼らが追求している自由を妨げるものであると主張している。いわゆる現代主義者は，過去の宗教の信条や教義を，自分たちの危険な追求や現代的な考えに同化させようと懸命である。彼らは現代特有の論法で聖書の教えを弱め，聖典が霊感に基づいて書かれたものであることを否定している。キリストは神の御子ではないと教え，全人類に救いをもたらす贖いの犠牲の教義を否定し，世の救い主が復活した事実を打ち消し，さらには救い主を単なる倫理の教師の地位にまで下落させている。ではどこに希望を見いだしたらよいのだろうか。一体，信仰はどうなってしまったのだろうか。

旧約聖書には，神が天と地を創造された次第が記録されている。私たちはこの記録を無視して，現代主義者の論理に従った創造に書き改めなければならないのだろうか。エデンの園は存在しなかった，アダムとイブはいなかったと言うことができるだろうか。現代主義者が洪水の物語は非論理的であり事実無根であると言うから，私たちは旧約聖書に記されているノアと洪水の話を信じなくともよいのだろうか。

主がオリブ山で弟子たちに語った言葉を吟味してみよう。弟子たちは，主の再臨と世の終わりの時がいつかと尋ねた。するとイエスは答えて言われた。「その日，その時は，だれも知らない。天の御使たちも，また子も知らない，ただ父だけが知ってお

られる。

人の子の現れるのも，ちょうどノアの時のようであろう。

すなわち，洪水の出る前，ノアが箱舟にはいる日まで，人々は食い，飲み，めとり，とつぎなどしていた。

そして洪水が襲ってきて，いっさいのものをさらって行くまで，彼らは気がつかなかった。人の子の現れるのも，そのようであろう。」（マタイ24：36—39）

主は，洪水の物語をいささかも現代風に改作しないで，事実を確認された。主のある言葉は真理だとして受け入れ，ほかの言葉を偽りだとして否定してよいものだろうか。

マルタはイエスが来られると聞いてイエスを出迎え，兄弟の死と復活について尋ねた。「イエスは彼女に言われた，『わたしはよみがえりであり，命である。わたしを信じる者は，たとい死んでも生きる』。」（ヨハネ11：25）

これら，ノアと洪水の事実に関する言葉，そして「わたしはよみがえりであり，命である」と宣言した言葉は共に，主が言われたものである。一方を信じて，他方を信じないなどということができるだろうか。洪水の話を現代風に変えたり，あるいは神話として片付ける一方で，ほかのことは真理として受け入れるなどということができるだろうか。聖書を現代風に改作して，それを指針とし，信仰の拠り所とすることなどということができるだろうか。

聖書を信じることなどもう時代遅れだと主張する人々がいる。神と，生ける神の御子イエス・キリストを信じることは時代遅れだろうか。御子の贖いの犠牲と復活を信じることは時代遅れだろうか。もしそうだとすれば，私は自分が時代遅れであり，教会が時代遅れであると申し上げたい。主は，信仰を持つ者に幸福をもたらす永遠の生命の原則と教えを非常に簡潔に述べておられる。主の教えを現代風に変える必要は全くないと私は思う。主の語られた教えは永遠の原則に関するものである。これらの原則に従った無数の人々が，それぞれの生活で霊的な体験を味わっている。現代の人々も人生に有意義な目的を持とうとそれを探している。また多くの人が霊的な体験を求めている。これは単なる黙想や霊媒術の集会で体験できるものだろうか。幻覚剤やグループ性行為の中に有意義な経験が見いだせると言うのだろうか。これらは主が示された道とは全く異なるものである。

主は仮庵の祭のときに，パリサイ人に対して次のような表現で教えられた。「『よくよくあなたがたに言っておく。羊の囲いにはいるのに，門からでなく，ほかの所からのりこえて来る者は，盗人であり，強盗である。』

そこで，イエスはまた言われた，『よくよくあなたがたに言っておく。わたしは羊の門である』。」（ヨハネ10：1，7）

霊的な体験はその門すなわち主イエス・キリストを通じてもたらされるのである。これ以外に道はない。

いつの時代にも，しるしを見なければ信じようとしない人がいる。主が導きと教えを施しておられたとき，人々は何度もしるしを求めた。

「パリサイ人とサドカイ人とが近寄ってきて，イエスを試み，天からのしるしを見せてもらいたいと言った。

イエスは彼らに言われた，『あなたがたは夕方になると，「空がまっかだから，晴だ」と言い，また明け方には「空が曇ってまっかだから，きょうは荒れだ」と言う。あなたがたは空の模様を見分けることを知りながら，時のしるしを見分けることができないのか。

邪悪で不義な時代は，しるしを求める。……』」（マタイ16：1—4）

恐らく当時の人々も同様であったと思うが，今日の多くの人々も何か劇的なことがないと真理を真理と認めないのである。たとえ主が人々の好奇心を満足させるために天から雷や稲光を送り，星を落下させ，あるいは海を分けたとしても，それが何になるだろうか。恐らく彼らは，これは悪魔の仕業だとか目が欺かれたのだと言ったことだろう。

しかし，忠実な者の間には多くのしるしがある。病人はいやされ，祈りは答えられ，戒めを信じ受け入れ従う者の生活は変えられる。私たちは主の福音の原則に従って生活することによってキリストを証するのである。主は戒めに従う人々に大いなる祝福を約束しておられる。「汝らわが言うところを行わば，主なるわれこれに対して責任あり。されど，汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」（教義と聖約82：10）多くの戒めには拘束が伴なうものであるが，それは戒めが人のために与えられているからである。このほかに積極的な勧告もある。その内の二つの大いなる命令は，神を愛することと，隣り人を愛することである。

「『心をつくし，精神をつくし，思いをつくして，主なるあなたの神を愛せよ。』

これがいちばん大切な，第一のいましめである。

第二もこれと同様である。『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。』

これらの二つのいましめに，律法全体と預言者とが，かかっている。」（マタイ22：37—40）

人類に平和と繁栄と進歩をもたらす上で，これ以上の律法があるだろうか。もし人が愛の戒めに忠実に従

うならば，これらの祝福は保証されるのである。

この急速な変革の時代にあって，私たちは神を信じ，神を愛し続けるならば，押し流されることはないのである。しかしながら，神を愛するためには神の子らをも愛さなければならない。この神の子供たちすべてが隣り人である。彼らを心から愛することは，階級，文化，人種，皮膚の色，宗教の別を超越するものである。

末日聖徒イエス・キリスト教会の会員はあらゆる人々に友好の手を差し伸べている。回復されたキリストの教会に課せられた責任は，全世界の隣り人に愛をもってイエス・キリストの福音を宣べ伝え，福音を受け入れた人が主の教えに従って生活できるように援助することである。

物質的には急速な進歩を遂げているが，混乱したこの世の中にあって，私たちはキリストのもとへ純粋な意味で立ち返る必要がある。キリストを愛し，敬い，礼拝する必要がある。霊性を身につけ，霊的な生活をするには，現代主義者の操る教えに惑わされていてはならないのである。私たちは主が教えられた基本的な真理を学び，これに反するものを退ける必要がある。神に対する信仰は真実のものでなければならない。推論に基づくものであってはならないのである。回復されたイエス・キリストの福音は，人々の心を動かし，行動に駆り立てる力を持っている。そしてこれを心から受け入れるならば，霊的な経験を味わうことができる。モルモンの教えの特長のひとつは，このように信じていることを日常の思いや行ないに取り入れることである。こうして苦しみや混乱が平和と安定にとって代わるのである。

私たちの教会は，道徳の問題についての妥協や変更に断固として反対している。また，いわゆる新しい道徳に対しても反対の声を上げている。霊的な価値というものは，現代主義者がいかにけなそうが，決してないがしろにはできないものである。私たちは，現代主義者に追従しなくとも，現代的であることができる。もし，聖書を信じることが時代遅れであるとしたら，時代遅れになる特権を与えて下さった神に私たちは感謝すべきである。

最後に私の確信と証を述べさせていただきたい。私は，旧新約聖書に述べられていると同じ神が生きておられることを知っている。イエス・キリストは神の御子である。イエスは大いなる贖いの犠牲を全うするために命を捧げ，それによって私やあなたの救い主，全人類の救い主となられた。私はまた，今日地上に神の予言者がいて，昔予言者たちが神の子らに語ったと同じように，主のみこころを人々に語っていることを知っている。願わくは，私たちが予言者の教えを理解する力を得，それに確信をもって従う強さを得ることができるように，イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。



大いなる白い神

十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン

ここ数カ月間，アメリカインディアンが苦境に立たされていることが報道され世間の注目を浴びている。

その結果，この民族の行く手が多少なりとも明るくなるよう手だてが講じられることと思う。この大陸に住む少数民族のうち最も軽視されているのがアメリカインディアンである。

私たちは，多年にわたり彼らに対して積極的な援助を提供している末日聖徒に感謝している。特に教育の分野で私たちは援助の手を差し伸べている。

ちなみに，今年セミナリーで学んでいるインディアン学生は1万5千人を越えており，そのほかに，教会の援助により全日制の小・中学校，高等学校に通っている生徒は5千人にのぼる。

大学教育においては，今年475人の学生がブリガム・ヤング大学に登録されており，そのうち426人が単位を収得している。

ブリガム・ヤング大学で今年学士号を受けたインディアン学生は85人，修士もしくは博士号を受けた学生は20人にのぼる。また現在大学院で学んでいる学生は20人を越えている。

ブリガム・ヤング大学はこのほかに，アメリカインディアン研究所を設けており，この機関を通じて合衆国西部に住むインディアンのために30を越える農業事業が行なわれている。

3万5千人を越えるインディアン教会員に対しては福音の教えに関する教育も実施されている。

彼らは陽気で，環境への順応が早い民である。また先祖から受け継いでいるものを誇りにしている。彼らは偉大な民の子孫であることを知っているからである。

最近私たちは，ソルトレーク・シティー在住のメキシコ人の集まりに出席し，彼らがインディアンを先祖としていることに大きな誇りを持っていることを知った。これはもっともな話である。

私たちは，メキシコの先住民について知れば知るほど，彼らが本当に偉大な民族であったことがわかるからである。

マヤ文明の権威者のひとりアルフレッド・V・キダー博士もこれと同じ説を唱えている。博士は著書，*A Guide to Quirigua*「クィリグアの紹介」で次のように述べている。

「古代マヤ帝国の大都市は紀元後の初期に築かれた。この恵まれた民は約600年間，芸術，建築，数学，天文学の各分野において指導的立場を堅持していた。彼らは私たちよりもある点で正確な暦を作っている。……詳細な点では異なるところもあるが，インディアン文明の成長過程は，エジプトやメソポタミヤを発祥地とする私たちの文明の成長過程と驚くほどよく似ている。……社会および経済機構が確立され，都市開発が行なわれ，宗教が発達し，礼拝のための神殿が建立されている。」

歴史学者ムーニョースもこの点についてその著書，*Marvels of Copan*「コパンの驚異」で次のように述べている。「建築，天文学，数学，絵画，織物，その他生活を彩るあらゆる芸術が，かつてこの地で栄えた。」

彼は，インディアンの祖先が決して野蛮な民族ではなかったこと，現在では驚異と考えられている事柄がマヤ人の間では当然のこととして知られていた事実を強調している。

ウィスラー博士はマヤ文明に関する著書の147ページで，マヤ人は，エジプト人がパピルスから作ったと同じ方法で紙を作っていたと述べている。

The American Heritage Book of Indian「アメリカがインディアンから

受け継いでいるもの」の19ページには次のように記されている。

「マヤ人は，古代アメリカで発達した中で最高の文明，さらには世界中でも最も高い古代文明を成し遂げている。」

また彼らは，技術的に高度な灌漑施設，ダム，水道を敷き，山腹を耕し，灌漑によって豊かな農地を作り出した。この水道施設はスペイン人が訪れる2千年前に築かれたもので，現在もなおその幾つかは残っている。

初期のアメリカ大陸にはかなりの数にのぼる住民がいた。スペイン人に征服された時，中央メキシコだけでも2千5百万の人々が住んでいた。

しかし，古代アメリカ住民にまつわる数々の事実の中で最も印象的なものは，約2千年前に聖なる御方が彼らの先祖を訪れた時の模様である。この御方は長期にわたって彼らの間に滞在し，教えを説き，祝福を与えられた。

高度の知性と技術を具えた古代アメリカ人は，この御方が神の教えを宣べ伝え，病人をいやし，死者を生き返らせ，新しい農耕法を教え，公平と平和を基本理念とする管理体を確立したと断言している。

彼らの記述によると，この御方は超自然的な方法で前触れもなくやって来て，また突然去って行かれたという。古代住民はこの御方を人の形をとって地上に来られた創造主であると考えた。

この御方がキリスト教の教える神であることは歴然としている。

この御方の教えは聖書のそれと酷似していることも明らかである。

チリからアラスカに至る各地に住むインディアンはこの出来事を代々伝えていった。そして実に興味深いことであるが，ハワイからニュージーランドの一帯に住むポリネシア人もこの話をよく知っているのである。これはポリネシア人と古代アメリカ人の密接な関係を裏付けるひとつの証拠である。

この出来事に登場する名前や詳細な点については島や国によって異なるが，大筋では一致している。すなわち，2千年近く前に天上の人が彼らを訪れたということである。

ポール・ハーマンはその著書，*The Conquest of Man*「人類の征服」でこの出来事の真実性についてこのように述べている。

「この話を綿密に検討してみると，光の神ケツァルコアトルは実在の人物で，スペイン人の宣伝活動のために作られた人物でもなく，インディアンの伝説による虚構でもないという結論に到達せざるを得ない。」(p. 72)

この話は，天文学，数学，灌漑，建築学の知識を持つ知性豊かな古代アメリカ人から語り継がれたものであることを忘れてはならない。これは無知な民や迷信深い民のたわごとではない。古代の最も高度な文明を築いた民から伝えられたものである。

この大いなる御方はメキシコの一部特にチョルラ地方ではケツァルコアトルと呼ばれ，チヤパスではボタン，オアクサカではウィクシペチョチャ，ガテマラではグクマツ，ペルーではビラチョチャとユストス，ブラジルではスメ，コロンビアではボチカとそれぞれ呼ばれている。

ペルー人はコンティシもしくはイラティシと呼んでいる。ティシとは創造者と光の意味である。マヤ人はククルカンと呼んでいた。

ポリネシア諸島では，ロノ，カナ，カネ，あるいはコン，時には大いなる光もしくは大いなる輝きという意味のカナロアという名称を用いた。またポリネシアの一部で，大いなる先祖という意味のカネアケア，海の太陽神という意味のトンガロアという名称が用いられていた事実もある。

ではこの聖なる人とはどのような御方だったのだろうか。

いにしえの人々の記述によると，この御方は背が高く，ひげを生やし，青い目をしていたという。また，ゆったりとした衣を身につけていた。大いなる権威を持ち，それでいて測り知れないほどの慈愛に満ちておられた。彼には山々を平原に変え，平原を高くそびえる山に変える力があった。彼は堅い岩から水を吹き出させることができた。

この御方の来訪に関して特筆すべきことは，数日間暗闇が続いた後に現われたことである。その間人々は太陽が顔を出すよう祈り続けた。ペドロ・デ・レオンの著した*The Incas*「インカ人」によると，この闇が支配していた間，人々は非常な苦難を強いられ，失った光が戻るよう神に熱心に祈りを捧げた。

そして，ついに太陽が輝き続めたとき，この御方が現われたのである。ペドロ・デ・レオンはこう述べている。「彼は大柄な白人だった。彼の態度と人格に打たれた民は彼を尊敬し，崇拝した。……そして彼の持つ力を目の当たりにした民は，万物の創造主，創始者，太陽の父と彼を呼んだ。」(「インカ人」)

この御方は御自身の教えを説き，礼拝のための神殿を建てるよう民に求めた。そして人々は熱心に従った。(ペリー・オナレイ*In Quest of the White God*「白い神を求めて」) 彼は民のもとを去る時，再び来訪することを約束した。その結果，ユダヤ人が約束された救い主を待ち望んでいるように，この民は代々その再臨を待ち望むようになったのである。

しかし，この信仰が二度にわたって民に苦難を招くこととなったのである。スペイン人がアメリカ大陸を訪れた時とクック提督がハワイ諸島

に航海した時である。だがこれらの悲劇も，継承された話が真実であることを示す証拠となる。

コルテスがメキシコに着いた時，海岸地方の原住民は彼を大いなる白い神だと思い，すぐさまモンテズマ王のところに走って行き，大いなる白い神がついに戻って来られたと告げた。

モンテズマはこれを聞いてそのまま受けとめた。彼は王位を受ける時，自分たちの宗教の聖職者から言われたことを忘れてはいなかった。「この王位はあなたのものではない。あなたは借り受けているのである。時至らばあなたは大いなる御方にお返ししなければならない。」（オナレイ，p. 66）

スペインの作家デュランはその著書，*The Aztecs*「アズテカ文明」で次のように記している。モンテズマはコルテスを歓迎し，宮殿まで案内させるために忠実なしもべを遣わした。しもべはコルテスに向って，「主よ，真の神よ。あなたの国，あなたの王国へようこそおいで下さいました」と述べた。デュランはさらに，インディアンはコルテスの同行者も天上の人だと考えていたと語っている。

デュランの言葉を続けよう。

「モンテズマは，ベルクルツ海岸から去る時に再来を約束したケツァルコアトルが戻られたと信じ込んでいたに違いない。

モンテズマと王国の高官たちが，コルテスとケツァルコアトルを同一人物だと確信していたことは記録にも明らかである。

1864年，ブロンドのひげをたくわえたマクシミラン皇帝がベルクルツに到着した時に至ってもなお，インディアンはケツァルコアトルの再臨の約束を心に思い浮かべたといわれている。」

モンテズマはコルテスが神であると考えていた。しかしスペイン人たちの裏切り行為に間もなくそれをひるがえすこととなり，戦いが始まった。非運なモンテズマは王位だけでなく命までも失った。だが，この伝説は依然として伝えられていったのである。

イギリスの探険家ジェームズ・クック提督がハワイにやって来た時も同じような場面が展開された。クックが上陸した時，折しも土着民はマカヒキ祭を祝っていた。これはポリネシア人の間の白い神の言い伝えに基づく祭である。クックも神としてうやうやしく迎えられ，ロノの神殿へ案内された。しかし彼の一行は天使とは全くかけ離れたような男たちであった。略奪行為は土着民の怒りを買い，その結果戦いが展開された。そしてクックも殺されてしまった。

では一体，大いなる白い神とはだれなのだろうか。クック提督ではなかった。コルテスでもない。この御方はだれだったのだろうか。

イエス・キリストはパレスチナで導きと教えを施しておられた時，次のように言われた。ヨハネによる福音書の第10章の記録を見てみよう。「わたしにはまた，この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも，わたしの声に聞き従うであろう。そして，ついにひとつの群れ，ひとりの羊飼となるであろう。」（ヨハネ10：16）

ナザレのイエスこそこの白い神だったのである。主は聖地で復活された後，古代アメリカを訪れたもうたのである。ではその根拠はどこにあるのだろうか。

古代パレスチナ地方と同様に西半球においても，予言者たちは人々に教えと導きを施し，霊感を受けて人人に指示を与えていた。聖地の予言者たちと同様に彼らも大切な出来事をすべて記録したのである。

予言者たちはキリストの来臨を予言し，人々はその期待に胸をふくらませていた。

闇が支配した3日間の後，人々が神殿のまわりに集まっていると，天から次のような声が聞こえた。

「わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。」

この声に人々が天を仰ぐと，栄光に包まれた御方がくだってきて人々の前に立たれた。古代の記録はその模様を次のように説明している。

「……このお方は白い衣を召して，降ってきて群衆の中に立ちたもうた。群衆の目はみなこのお方の上に注がれたが，互いに物を言う勇気がなかった。……

時にそのお方は手を伸ばして群衆に話しかけて仰せになった。

『見よ，われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。』

われは世の光にしてまた世の生命なり。われは御父がわれに授けたまいしかの苦き杯をすでに飲み，世の人の罪をわが身に引き受けて御父の栄光を示したり。……』

『汝らわが肋にその手をさし入れ，わが手足にある釘あとに触れて，われがイスラエルの神にして全世界の神なること，またわれが世の人の罪を負うて一度殺されたるを知るために起ちてわれに近づけ』と。

そこで群っている人々は近よってその手をイエスの肋にさし入れ，またイエスの手足にある釘あとに触れた。かれらは，一人一人みなイエスに近よってこれをなし，各々みな目で見，手で触れて，この御方が予言者たちによってこの世に来ると誌されたお方であることを確に知り，また証をすることができた。

人は各々みな近よって親しくこれ

を見，親しくこれに触れたからみな一せいによばわって，

『ホザナよ。いと高き神の御名を讃美す』と言い，イエスの足下にひれ伏してイエスを拝した。』」（Ⅲニーファイ11：7―11，14―17）

イエスはパレスチナにおいてなさったように，彼らに真の宗教を教え，病人をいやし，子供たちを祝福し，西半球における主の教会を設立された。

これがインディアンとポリネシア人の伝説のおおもとをなすものである。そして代々，現在に至るまで伝えられてきたのである。

しかしそれが確かにキリストであったことをどうすれば知ることができるだろうか。

先に述べたように，古代アメリカの多くの予言者はパレスチナの予言者たちと同じように，彼らの歴史と受けた啓示を書き記した。その記録も膨大な量にのぼった。そして，最終的に紀元400年頃にこのアメリカ大陸に住んだモルモンという名の予言者によって要約された。

彼が編集者であったため，この本はモルモン経という名が付けられた。この書物は近代に奇跡的な方法で世に出された。この書物はキリストが古代の白い神であることを証明している。そして聖書と同様，聖典である。イザヤ書の第29章に，この新しい聖典が世に出ることを予言し，その出現の様子を述べたイザヤの言葉が記されているが，モルモン経が実際に世に出た状況そのものである。これは単なる偶然ではない。聖書の予言の成就である。

イザヤは封じてある書物だと述べたが，事実その通りだった。

また，この書物が識者に渡されるがその人はこれを拒むと言ったが，その通りになった。さらに，注目に値することがある。イザヤはこの書物が無学な者たちの手を通じて人々に渡され，世の注目を集めると言ったが，全くその通りになっている。

出版される時を指して，パレスチナが肥えた畑となる末日にこの書物は世に現れると言ったが，その通りだった。

「その日，耳しいは書物の言葉を聞き，目しいの目はその暗やみから，見ることができる。柔和な者は主によって新たなる喜びを得」ると言ったイザヤの言葉はことごとく成就した。

そしてこれが行なわれる時，神を信じない世の人々の間で全能者は不思議な驚くべきわざを行なわれると言ったが，これもその通りになった。

モルモン経はイザヤが語った書物である。これは近代の人々に光を与えるために世に現わされた聖典であり，古代アメリカ人の聖なる書物である。

モルモン経はキリストが神の御子であることを証する新しい証人であり，キリスト教徒の救い主，ユダヤ人のメシヤ，古代アメリカの白い神，全人類の贖い主であることを証するものである。またそれは私たちの証でもある。私たちはこのことを主イエス・キリストの聖いみ名により証する。アーメン。



大管長の手を支える

大管長会第一副管長・十二使徒評議員会会長

ハロルド・B・リー

スミス大管長の説教に入る前に，一，二申し上げたいことがある。

この教会が組織されたとき，正しく言えば組織されたその日に，主は教会に対して語られた。しかし主が語られたのは教会設立に加わった6名の教会員に対してだけではない。すなわち主はその啓示の中で，教会の大管長について言及されたのである。当時予言者ジョセフ・スミスがその職にあった。主はこう言われた。

「この故に汝ら教会員は，彼が上より受くるままに汝らに与うる誡命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き，わが前に全く聖き道を履むべきなり

そは彼の言は，汝ら全き忍耐と信仰とを以て，あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。

これらのことを為さば，地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して，誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い，汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。」（教義と聖約21：4—6）

今は主を迎える最後の神権時代である。主が主の教会と世に対する業を終えられる前に，私たちは困難な時期を切り抜けなければならない。まず主を迎える備えをさせるために福音が回復された。これからサタンの力は強大なものとなっていくだろう。その徴候は至る所に現われている。教会の内部でもそれは起こるであろう。タナー副管長が語ったように，「偽善者は信仰を公言する。だがその心の中は死人の骨で一杯なのである」といった事態が起きるであろう。教会員であることを公言しながら，主がこの教会を管理するために召したもうた指導者に従わないよう，陰で手引きをする人が出てくるであろう。

さて，私たちにとって最も安全な道は，主が教会設立の日に語られた言葉に従うことである。私たちは主が予言者を通じて下された言葉や戒めによく従わなければならない。この言葉や戒めは，「心にとめてよく聞き」，主の前に「全く聖き道を履」み，さらに「あたかもわが口より聞くが如くに」受け入れるように与えられたものだからである（教義と聖約21：4—5）。信仰と忍耐を必要とするものもあるだろう。教会幹部からのメッセージを快く思えないこともあるかも知れない。あなたの政治上の見解や社会観と相容れないものもあるだろう。またあなたの社会生活を多少なりとも犠牲にしなければならないようなメッセージかも知れない。しかし，これらのメッセージを神の口から出た言葉として忍耐と信仰をもって従うならば，主は次のような約束を実行して下さるであろう。「地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して，誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い，汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。」（教義と聖約21：6）

さて私たちには，長年の経験を積み進歩してきた大管長がいる。6カ月前の就任以来，大管長はスミス姉妹と共にメキシコを訪れ，アリゾナ神殿へ赴いて，新しい神殿長会に結び固めの鍵を授け，さらにはハワイ諸島を訪れてハワイチャーチカレッジの創立記念式典および教会歴史の初期に当地で起こった幾つかの出来事を記念する集会に参列した。

この大会でも大管長の日程はぎっしり詰まっている。

一週間前の木曜日，教会幹部は全員この大会のために霊的に自らを備えるべく断食して神殿の一室に集まり，祈りを捧げた。私たちはみたまが注がれるのを感じた。それは私たちの祈りに対する主の答えの証拠だ

った。スミス大管長は幹部の兄弟たちに語った。大管長は扶助協会大会に出席して姉妹たちに教えを述べ，日曜学校大会でも話をした。総大会の最初の集会，神権部会，そしてこの集会でも話をする。

私はタナー副管長と共に副管長の責任があるが，私たちの果たすべき役割について考えるとき，モーセが置かれていた状況を思い出す。当時も，今と同じように数多くの教会の敵があった。教会の業を崩壊させようと機をうかがっていた。モーセは丘の頂に座って，神のつえすなわち神権の鍵を立てた時，イスラエルは敵を打ち敗った。しかし時間がたつにつれて，手が重くなり，だんだん下がり始めた。そこで彼らは力を維持し，つえが傾かないように，モーセの手を支えた。いと高き神の聖徒たちが教会の敵に打ち破られることがないようにモーセを支えたのである。(出エジプト17：8－12参照)

私は，これがタナー副管長と私が果たすべき役割だと考えている。スミス大管長の腕が疲れてくるかも知れない。重責のゆえに大管長の手が下がってくるかも知れない。けれども私たちが大管長の手を支え，大管長の傍らに立って大管長の指示の下に指導するなら，地獄の門はあなた方とイスラエルに打ち勝つことがないのである。私たちの安全は，主が主の教会を管理するよう召された人に従うかどうかに懸かっている。主はこの教会を管理させたいとお考えになる人を御存じである。決して誤ることはない。主は気まぐれに物事をなす御方ではない。過去にそういったことは一度もなかった。世の科学者，哲学者は，神の御存じないことを発見したり，知ったことは一度もないと私は考えている。世の学問をすべて寄せ集めても，その力，意義，内容において主の啓示にかなうものではない。

私たちは大管長に目を向け，大管長の手を支えようではないか。タナー副管長と私はそれを続ける覚悟でいる。

スミス大管長，私たちは主から高い地位に召されているあなたを尊敬し，支持する。この大いなる大会を閉じるにあたり，私たちは愛する大管長から祝福を賜りたいと願っている。



感謝の心をもって

大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する兄弟姉妹，この偉大な大会を閉じるにあたり，皆さんの上に祝福があらんことを願っている。

神権は人類を祝福する力であり，神権者はすべてその責任の範囲内で神権を用いて隣り人に祝福を与えなければならない。私たちが聖きみたまの導くままに，正しくこの権能を用いるならば，私たちの行ないはこの世にあっても，また永遠の世にあっても主により結び固められ，認められるのである。

そこで私は聖徒たち，つまり主を愛し，主の戒めを守ることによって主のみ業への献身を表明しているすべての人々を祝福したいと思う。彼らが物質的にも，霊的にも恵まれ，父なる神の祝福によって義にかなうことにおいて繁栄するよう願っている。

私は，私自身だけでなく，皆さんの思いも込めて，私たちに豊かに下したもうた恵みを主に心から感謝したいと思う。

私たちは天父の力によって立てられた自由の民である。自然の美も恵みもすべて私たちのものであり，私たちには真理が与えられている。もし私たちがこの真理に従い，神が喜ばれるような生活をするならば，この世で平安と喜びを得，永遠の王国で神と共に豊かな生活をする約束を得るのである。

永遠の父なる神よ。末日にあなたの福音のもとに集まってきた聖徒たち，イスラエルの残りの子孫の上にあふるるばかりのみたまを注ぎたまえ。

私たちはひとつの民としてあなたに仕え，戒めを守り，真理と義のメッセージを世界中の人々に宣べ伝えたいと願っている。そのために私たちは世界各地に宣教師を遣わしている。私の息子たちもここ数年来，伝道地で絶えずその業に励んでいる。そのうちのひとりは今も外国の地で伝道している。

私たちは天父がこの大会で，しもべらの口を通して，大いなる真理と光明を授けて下さったことに心から感謝している。それは，聖きみたまの力によって世界中の正直な人々の心に浸透していったに違いない。

また日ごとの糧を与えられ，霊的にも強められていることを感謝している。今や私たちは再新され，新たな活力を受けあなたの使いとして，命じたもうことを全力を尽くして行なうつもりである。

天父よ。あなたが与えて下さったすべてのものに私たちは感謝している。私たちはあらゆるものにあなたのみ手を感じている。願わくば，この地上においてその目的が達成され，勝利を得るよう祈っている。

あなたが昔と同じように今日も，人々に語りかけておられることを知っている。私たちはあなたのみ言葉を世に伝え，人々が私たちの善い行ないを見てあなたの栄光に導かれるよう世の光として立つ，あなたの器である。私たちは喜んでその器になりたいと願っている。

私たちはすべての事柄において，あなたの聖きみ名に誉れと栄光がこの世と永遠とにわたって増し加えられるよう，イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。

目　次

第141回
年次総大会
1971
4. 3-6

時の動き

1970
- 11. 3　米，中間選挙。
- 11. 9　ソープ・B・アイザックセン長老死去。
- 11.12　東パキスタン，ガンジス河口地帯を台風による高潮が襲う。死者推定数十万人。

1971
- 1.15　アラブ連合，アスワンハイダム完成。
- 2.10　ロスアンジェルスで大地震。
- 3.26　バングラデシュ独立宣言。
- 4. 3-6　第141回年次総大会。

大管長会



第一副管長
ハロルド・B・リー



大管長
ジョセフ・フィールディング・スミス

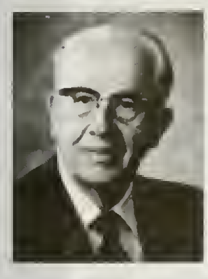


第二副管長
N・エルドン・タナー

十二使徒評議員会



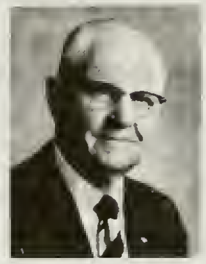
スペンサー・W・キンボール



エズラ・タフト・ベンソン



マーク・E・ピーターセン



デルバート・L・ステイプレー



マリオン・G・ロムニー



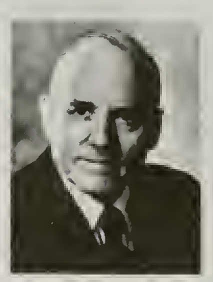
リグランド・リチャーズ



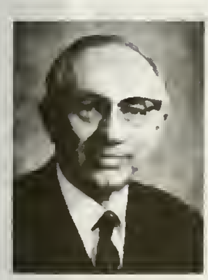
リチャード・L・エバンズ



ヒュー・B・ブラウン



ハワード・W・ハンター



ゴードン・B・ヒンクレー



トーマス・S・モンソン



ボイド・K・パッカー

大祝福師



エルドレッド・G・スミス

闇より出でて



大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する兄弟姉妹，この場に列席の皆さんとラジオ，テレビを通じて大会の模様を見聞きしているすべての人々に歓迎の意を表したい。末日聖徒イエス・キリスト教会の第141回総大会に皆さんを歓迎する。

私たちがきょうここにいるのは，主に仕え，霊とまことをもって主を礼拝し，命のパンを食べ，主の教会の諸業務を管理するよう主より選ばれた者たちから助言と教えを受けるためである。

私はここに出席しているすべての人々が，また大会の説教を通して感動を覚えたすべての人々が，みたまの導きを受けられるように自らを備え，そうして信仰と証を築き，主の戒めを守り，主に喜ばれることをしたいという気持を高めることができるよう心から望んでいる。

私たちは主の業に携わっている。この教会は主の教会である。主が救いの計画を立てられた。この時代に天が開かれて，私たちが受けたのは主の福音である。従って，主が啓示したもうた真理を信じ，それに従って生活することこそ，この世における私たちの望みと目的のすべてでなければならない。教会の内外を問わずいかなる人も，神のみこころと一致しない教えを信じたり，活動を提唱したり，主義主張を支持してはならない。救いの真理について私たちの目的とするところはただひとつ，主が明らかにしておられることを知り，そしてそれらを信じ，それらに従って行動することだけである。

主はこの時代に永遠の福音を再度明らかにし，末日聖徒イエス・キリスト教会をその救いにかかわる真理の管理人とし，世に分け与える者とされた。このため私は教会員と世の人々に対して，救いを得るためには必ず受け入れなければならない永遠の原則を幾つか述べてみたい。これらの簡潔で深遠な教えはこの神権時代に啓示によって私たちにもたらされた。

私たちは，天父が栄光にあふれた，昇栄された御方であり，あらゆる権能，力，支配権を持ち，万物を知りたもう御方であることを知っている。天父は，その生みたまいし独り子を通して，この地球をはじめとする無数の世界を創り，それらすべてに霊の子供たちを住まわせておられる。

天父は限りなく永遠であり，霊の子らが進歩成長して，天父のようになるための律法を定められた。

救いはキリストのうちにある。キリストは永遠の御父の長子であり，天上の会議において限りない永遠の贖罪を成し遂げるよう選ばれ，予任された御方である。またキリストは神の御子として地上に生まれ，福音によって生命と不死不滅を得る方法を世に明らかにされた。

キリストは，アダムの堕落によって世にもたらされた肉体と霊の死から人々を解放し，悔い改めを条件に全人類の罪を身に受けられた。私たちはこれを一点の疑いもなく信じている。

イエス・キリストの福音は救いの計画である。主の贖いの犠牲によりあらゆる人はよみがえって不死不滅となり，肉においてなした行ないに応じて裁きを受ける。福音のすべての律法を信じ，守る人もよみがえって，御父の王国において永遠の生命を受ける。

私たちはなし得るすべてをなした後，恵みによって救われるのである。すべての人は，キリストの贖いという基の上に立ち，主のみ前に畏(おそ)れおののいて自らの救いを勝ち取らなければならない。

私たちは宣言する。人が救いを得るには，主イエス・キリストを信じ，自らの罪を悔い改め，権能を持つ者

により水に沈められるバプテスマを受け，按手により聖霊の賜を受け，その後，戒めを守り，終わりまで耐え忍びながらキリストを固く信じて進まなければならない。

この救いの計画すなわち福音の計画は，最初の人，父祖アダム以来の各神権時代に継承されてきた。エノク，ノア，アブラハム，モーセに知らされ，古代アメリカの住民にもはっきりと宣言された。イエス，ペテロ，パウロ，さらには時の絶頂の時代の聖徒たちが教えたと同じ福音の計画である。

次に，現在生きているすべての人にとって極めて大切なことを申し上げたい。闇と不信仰，純粋で完全なキリスト教の真理から離れるという長い闇夜の後，主はその無限の知恵により，完き永遠の福音を地上に回復された。

私たちはジョセフ・スミスが予言者であることを知っている。1820年の春，御父と御子はジョセフに姿を現わし，この最後の福音の神権時代の幕を開け放たれた。ジョセフは神の賜と力によりモルモン経を翻訳した。また，その目的のために遣わされた天使たちから鍵と権能とを受けた。そして主は予言者ジョセフに救いの教義を明らかにされた。

末日聖徒イエス・キリスト教会は地上における神の王国であり，真の救いの教義を学び，聖なる神権の権能を見いだすことのできる唯一の場所である。

聖霊は啓示を与える御方であって，あらゆる地に住む心の正直な人々に，イエス・キリストが神の御子であること，ジョセフ・スミスが予言者であること，この教会が「全地の面に於ける唯一の真にして生命」ある教会（教義と聖約1：30）であることを証したもう。

もはや，いかなる人も闇にとどまっている必要はない。永遠の福音の光がここにある。真心から求めるすべての人は，主の業が真実のものであり，神の業であることを，聖きみたまから個人的な証を受ける。

ペテロはこのように述べている。「神は人をかたよりみないかたで，神を敬い義を行う者はどの国民でも受けいれて下さる。」（使徒10：34—35）すなわち，主は忠実な人にみたまを注いで，この教会が真実であることを自分でわかるようにして下さるということである。

私は，主が最後の機会として地上に再び福音を回復し，主の王国を確立されたことを聖霊の力により知った者のひとりとして，これまで述べたことが真実であることを証する。

神は生きておられる。イエス・キリストは御父の生みたまいし独り子である。ジョセフ・スミスとその後継者は主のみ手の中にあって働く器となり，現代の地上の人々が天の祝福にあずかれるようにしている。

願わくは，教会の内外において，地における主の目的がすみやかに果たされ，主が忠実な聖徒らを祝福したもうように。真理を求める人々，主の前に正しい心を持つ人々が，私たちと共に回復された福音の完き祝福にあずかることができるように。

これらを主イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

鉄の棒

大管長会第一副管長・十二使徒評議員会会長

ハロルド・B・リー



私は，ここに立っているしばしの間この大会を通じて注がれてきたみたまが引き続きとどまるよう，心から祈る次第である。

先ごろ，「ウォールストリート・ジャーナル」に掲載された記事を読んで私は深く考えさせられるところがあった。それはコロンビア大学の著名な神学者の筆になるもので，「無目的とその対策」と題してあった。ユダヤ教の律法学者アーサー・ヘルツァーグ氏によるこの記事から引用してみたい。

「人々は何のために宗教を求めるかといえば，物質では応じ切れない飢えを満たすためである。しかし，宗教がその飢えを満たせないと，その宗教は衰退するほかない。……聖職者が世俗化するその瞬間から，世は地獄への落下を始める。

……宗教とは，人間の本質，人生の意味，天地万物と個人との関係といった疑問に対して，人が数千年間にわたって築き上げてきた見識である。実は，人が抱いている不安の根源はほかならぬここにあるのである。

人は自らの混乱と空しい状態，現代風に言えば無目的への不安を解消させるものを探し求めている。宗教の説く真理が果たしてこの必要を満たすことができるかどうかはわからないが，ただはっきりしていることは，政治行動ではなく，ここに宗教の関与すべき道があるということである。」

目的もなくさ迷っている人，自らの必要を満たし，混乱と空しさから抜け出すために何かを探し求めている人々への答えとして，私は紀元前600年頃のリーハイという古代の予言者にもたらされた驚くべき示現を中心にして2，3の考えを述べてみたい。忠実な教会員は，このモルモン経に記された出来事をよく耳にしていることと思う。しかしながら，私たちと信仰を同じくしない人々であっても，これを現代社会に見られる多くの傾向や趨勢にあてはめて真剣に考えてみるならば，大きな意義を見いだすものとなるであろう。

この夢の中で，あるいは示現と言った方が良いかも知れないが，その中で予言者リーハイはひとりの天使に導かれて，暗く，ものすごい荒野を通り，人を幸福にするに足るおいしい実のなった1本の木のもとへ行った。そして一筋の川を見たが，その川は，おいしい実のなった木まで通じているまっすぐな狭い道に沿って流れていた。川岸と道の間には1本の鉄の棒があって，これは旅人が狭い道から川へ落ちるのを防ぐためのものと思われた。

リーハイが見ると，多くの人の群れが見え，彼らはあの実をつけている木がある広い野原に向かって進んでいた。人々が進んでいると，暗黒の霧が起こった。非常に深い霧であったため，多くの人々が道を見失い，道に迷い，にごった川に落ちておぼれたり，横道に踏み迷って姿が見えなくなってしまった。けれども，一寸先も見えない霧のために同じように迷い込む危険に遭いながらも，招かれるままに鉄の棒をしっかりと握って道を歩き続け，危険な旅を乗り越えておいしい実を食べた者たちもいた。川の向こう岸には大勢の人々がいて，旅を無事に終えた者たちを指差してあざけった。

聖書に登場する多くの古代の予言者の場合にも見られるように，主はこの種の夢または示現を予言者である指導者に下し，民にそのみこころを示された。主が予言者リーハイに示されたこの夢にも大きな意味があった。実のなった木は，あらゆる人の子らに差し伸べられている神の愛を表わしていた。神の大いなる愛がどのように表わされているかについ

ては，主御自身が地上で教えと導きを施す業に携わっておられたとき，ニコデモに説明しておられる。「神はそのひとり子を賜わったほどに，この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで，永遠の命を得るためである。」そして主はこう付け加えておられる。「神が御子を世につかわされたのは，世をさばくためではなく，御子によって，この世が救われるためである。」（ヨハネ３：16—17）

示現の中で見た鉄の棒は，神のみ言葉すなわちイエス・キリストの福音であり，人々を命の木まで導くものであった。主はこれを，サマリヤの泉でひとりの女に「永遠の命に至る水がわきあがる生ける水の泉」と説明しておられる（ヨハネ４：14参照)。

川の向こう岸で指差しあざけった者たちは，神の子羊の使徒たちに対して戦いをいどむために寄り集まった世の大勢の人々を表わしている。従って，主が明らかにされたように，あざけった者たちはいわゆる世の賢者を，彼らが集まった建物は「世の人々の高慢」を表わすものであった（Ｉニーファイ11—12参照)。

すべての男女，若人が人類を悩ませている問題の答えを必死に探し求めているこの混乱と挫折の渦巻く中で，もし彼らに最も必要とされるものがただひとつあるとすれば，それは「鉄の棒」である。あらゆる「徳高きこと，好ましきこと，よき聞えあること」を最終的には破壊し，破滅させる奇妙な曲りくねった道の多い中で，この鉄の棒は，永遠の生命に至るまっすぐな道に沿って設けられた安全標識である。

現在モルモン経と呼ばれているこの聖典が地上にもたらされる時の状態を予言者たちは予見していたのである。これからその予言を読んでみたいが，今日私たちを取り巻いている状態を同時に考えていただきたい。

「あなたたちが心の中に誇り高ぶることと，あなたたちの中に……ねたみ，争い，怨み，迫害し，あらゆる悪い事を起こすほどにおごり高ぶっていない者は僅しかいないと言うことと，またあなたたちの慢心によって，……すでに汚れ果てていると言うことが前以て私に解る。

ごらん，あなたたちは金銭と自分の財産と自分の華やかな衣と自分の教会の華やかな飾り物とを，貧しい人々，病気の人々および悩んでいる人々よりも愛するのである。」（モルモン８：36—37）

使徒パウロも苦難の時代を指して語っている。「その時，人々は自分を愛する者，金を愛する者，大言壮語する者，高慢な者，神をそしる者，親に逆らう者，恩を知らぬ者，神聖を汚す者，

無情な者，融和しない者，そしる者，無節制な者，粗暴な者，善を好まない者，

裏切り者，乱暴者，高言をする者，神よりも快楽を愛する者，

信心深い様子をしながらその実を捨てる者となるであろう。……」（IIテモテ３：２—５）

自ら信心深い者，あるいはキリスト教徒と名乗る者は多い。ところがそういった人は，「聖典を霊感と道徳的な真理のより所としてしか受け入れず」，「神より与えられた啓示は，果たして主の使いがリーハイに語ったように神の王国へと続く手すりとなるのだろうか，それとも単なる指針に過ぎないのだろうか」と平気で質問している。

残念なことに私たちの教会の会員と称する者の中にも，リーハイが示現で見た「あざける者」と大して違わない者がいる。彼らは，教会幹部を福音に関する神の特別の証し人として，また教会の諸業務を指示する神の代理人として受け入れている忠実な人々から離れ，彼らを愚弄しているように思われる。

教会には，自らを自由主義者と主張し，かつての大管長が述べたように，「自分のうぬぼれた考えに照らして読む」者たちがいる（ジョセフ・Ｆ・スミス，「福音の教義」第２巻，p.116）私はかつて教会の教育関係の指導者に自由主義者をどのように定義するかを尋ねたことがある。彼は一言でこう答えた。「教会内の自由主義者とは，証を持っていない人，これだけです。」　十二使徒評議員であり著名な教育家でもあった故ジョン・Ａ・ウィッツォー博士は，教会内の自由主義者について次のように述べている。

「(教会内で）自らを自由主義者と称する者は，通常自らの属している組織の基本原則または指導原理すなわち信条を破っている者であり，組織の一員であると主張しながらその基本原則を信じておらず，基礎を揺るがして組織を改革しようとしている者である

不変の真理の上に建てられていると主張しながら，自由主義を信奉する宗教などというものはありえない。」

そしてウィッツォー博士はこのように結んでいる。「自分たちがまたは自分たちの教会は自由主義に基づいていると公言する人々に充分注意すべきである。彼らの信仰の家は砂の上に建てられていて，真理の嵐に耐えられないからである。」(『証拠と一致』「インプルーブメント・エラ」第44巻，1941年，p.609）

ここで再びリーハイの示現での言葉を用いるならば，彼らは暗黒の霧で目が見えなくなり，しかも「鉄の棒」にしっかりととりついていない人たちである。

主がいまだ答えを明らかにするのをよしとされないため，答えのわからない疑問がある。しかしそうした状況に置かれていても，アブラハム・リンカーンがかつて語ったように「私は聖書を読み理解できたことをすべて受け入れる。そして理解できないことは信仰によって受け入れる」と言うことができるとすれば，それは素晴らしいことではないだろうか。

地球がどのようにして創造されたか，人はどこから来たのかなどという疑問に答えられぬまま不安を覚えている知識人が，広く名を知られ，かつ忠実な教会員である，かの科学者のように答えることができるとすれば，どれほどの慰めを得ることであろうか。ある姉妹が，「なぜ主はこれらのことについてはっきりと述べられなかったのですか」と質問したのに対し，かの科学者はこう答えている。「たとえ主がそうされたとしても私たちは理解できないでしょう。それは8歳の子供に原子力の理論を説明しようとすることと同じようなものだからです。」

もしこの世の学問を修めた人すべてが，人の考えた理論に惑わされて不信仰と背教というにごった川に落ちることなく，信仰によって理解へと導く「鉄の棒」すなわち神のみ言葉にしっかりと従ってゆくことができるとすれば，何と素晴らしいことではないだろうか。

私は教会のある有名な科学者が，このように語るのを聞いたことがある。「多くの大学教授がアダムの堕落と救い主の贖いを哲学的に解明しようとしたり，論理付けようとして，その結果教会を去っている。」これは，主の予言者を通して，また聖なる場所においてさらに完全に「神の奥義」を理解できるよう主が私たちに明らかにされたことよりも，人の哲学を受け入れたためである。

主の時代にも同様の疑問や論争があったことは明らかである。主はその簡潔な答えの中で不確実な事柄に惑わされないための原則を示している。

弟子たちが神の王国でだれが一番偉いかということについて論争していたとき，主はそれを静めるために次のように言われた。「……心をいれかえて幼な子のようにならなければ，天国にはいることはできないであろう。」（マタイ18：3）

聖典によれば，心をいれかえるすなわち改宗とは，心を変えて，罪により支配されていた人の道徳観念を義の生活へ方向転換するという意味である。祈りが答えられ，使徒の時代の信仰の擁護者であったシプリアンのように心に証を受けるまで，「主に忍耐強く仕えよ」という意味である。シプリアンの言葉を引用しよう。「あらゆる罪から清められた私の心に，いと高き所よりもたらされた光が入り，そして突然驚くべき方法で私は確かに疑問が解けた。」

改宗とは，単に什分の一領収書，会員記録，神殿推薦状等を持つ「正式」な教会員になることだけではない。批判的な性癖を克服し，外見だけでなく内面の弱点をも改善するよう絶えず努力しなくてはならない。

主は人々の信仰を破壊しようとする者，神のみ言葉から遠ざけようとする者，「鉄の棒」から手を離させようとする者に対し，警告を発しておられる。鉄の棒は，贖い主を信じ，この地球と人類に関する主の目的を信じている者を守るものである。

主は警告しておられる。「しかし，わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は，大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が，その人の益になる。」（マタイ18：6）

真に信じている者を破滅に追いやるようなことをするよりも，またそのことにより自らの永遠の行く末に罰を招くよりも，この世で死んでしまう方がよいと言われたのである。

使徒パウロも悪い模範によって偽りの教えを伝えることの危険について述べている。「しかし，あなたがたのこの自由が，弱い者たちのつまずきにならないように，気をつけなさい。

するとその弱い人は，あなたの知識によって滅びることになる。この弱い兄弟のためにも，キリストは死なれたのである。

このようにあなたがたが，兄弟たちに対して罪を犯し，その弱い良心を痛めるのは，キリストに対して罪を犯すことなのである。」（Ｉコリント８：９，11－12）

予言者ヤコブは当時の学識ある人人について述べているが，これは今日においても繰り返し述べる必要のあることである。「……人間は学問があると自分は賢いと思って神の訓戒に耳をかさず，自分独りで解ると思って神の訓戒をうち捨てるから，その智恵は愚であって何の益にもならず，かれらはついに亡びるのである。

しかし，人間がもしも神の訓戒に従うならば，学問のあるのも善いことである。」（IIニーファイ９：28－29）

教会の内外において，実業界で高い地位にある人々，政界や法曹界で要職にある人々，医師，社会福祉事業家，看護婦，科学および芸術界の人々が忠実にまた献身的に働いておられることを，私たちは主に心から感謝している。特に教会において指導者の責任を引き受けている人々，ホームティーチャーや神権および補助組織においてクラスの指導者として働いている人々，教会の内外を問わず世界各地でまた少数民族の中に

あって恵まれない者たちに心を配り，未亡人や孤児の必要に特別の関心を払っている人々に感謝している。

私はイエスがザアカイに言われたように，これらすべての人々に申し上げる。「きょう，救がこの家にきた。」（ルカ19：9）これを受ける人は，私たちすべてを安全に命の木に導くことのできる「鉄の棒」にしっかりととりついている人である。

最近私は「ワシントンポスト」紙に掲載されたジョージ・ムーアの筆になる記事を読んだ。彼は自らを「マウントバーノンの隠とん者」と称している。（マウントバーノンとはもちろんジョージ・ワシントンの先祖代々の家のことである。）この記事でムーアは次のように述べている。「私はこれまで20年間マウントバーノンで過ごすことにより幾らかでも自分の無知を補うことができた。」ムーアは，人は自分がいかに小さい者かを知らなければ何も学ぶことができないと主張している。この記事でムーアはジョージ・ワシントンを非常に適確に捉えている。

「ワシントンは学校教育を受けなかった。だからこそ識者になり得た。勉強を終えるということがなかったからである。」

ジョージ・ムーアが自らを語った言葉は，私たちの多くについても言える言葉であろうと思う。「私は60年を越えるこの半生をひたすら自分の無知を減らすことに努めてきた。」

この言葉の中には，いずれの分野であれ，その方面で秀でている人にも適用されるチャレンジがあると思う。ある人は学校を卒業すると勉強をやめてしまう。ある人は伝道を終えると福音の勉強をやめてしまう。教会内外を問わず管理職や高職に就くと勉強をやめてしまう人がいる。

またワシントンについて語ったこの言葉も忘れてはならない。「もし勉強をやめなければ，たとえどのような境遇に置かれていても私たちは教育のある人になることができる。」

故ドワイト・D・アイゼンハワー大統領はこのように記している。「自分の仕事をよく果たしている人，怠け者や皮肉屋の冷笑にたじろぐことなく本当の意味での自信を持っている人，正しい目的を固持する人，他人を思いやる人，こういった人は本質において指導者である。特に選ばれて名声を得ているいないにかかわらず，その人は必ず優れた仕事を成し遂げ，心に大きな満足を得る。

ちなみに，主が私たちをこの地上に送られた目的はここにある。」（『指導者とは』「リーダーズ・ダイジェスト」1945年6月，p. 54）

イエス・キリストの真の福音が回復され，時満ちたる神権時代に教会が再び確立されたことに加えて，私たちには啓示を通して指示と教えが与えられた。故ブリガム・H・ロバーツ長老が説明しているように，このことにより「バプテスマが水に沈められるべきか，罪の赦しのために行なわれるべきかという点が明らかにされただけでなく，歴史を通じて蓄積されたごみが一掃され，岩があらわにされ，神の王国の礎が再び置かれたのである。」

末日聖徒イエス・キリスト教会の教えの中にこそ，世の落し穴，挫折，邪悪から守るものがあると宣言すれば，多くの人は「そんなばかなことが」と思うかも知れない。天上において立案された救いの計画は，永遠の生命に至る狭くて細い道を示している。だが多くの人はその道に従うことを拒んでいる。

主は大いなる啓示の中で初期の時代の教会指導者に対して，多くの分野で真理を追求するよう戒め，指示を与えられた。

その第1はもちろん，「汝ら互いにこの王国の教義と神の王国に就けるすべての事を教ゆべし」である（教義と聖約88：77—78参照）

ついで主は私たちに広範囲の学問を求めるよう勧めておられる。主の教会はこの世の種々の学問について全く知らずに運営されるべきではない。

また，信仰を持たない人々に対しても啓示を与えておられる。「また正に研究と信仰とによりて学問を求むべし。」（教義と聖約88：118）

どのようにして「信仰によって学問」をするかと問う人もいることであろう。ある予言者がその方法を説明している。まず，主のみ言葉を全力で試し，信じようとする望みを持たなければならない。そして，主のみ言葉の一部分でも受け入れるほどの信仰ができるようになるまで，この望みを育ててゆく。その際，種子をまいたときと同じように，大事に育て，世のすべての人を照らす主のみたまを拒まないようにしなければならない。やがて，それがよいものであるに違いないと心の中で感じ始める。なぜならば，それはあなたの心を大きく開き，理解力を増すからである。リーハイが示現で見た木の実と同じように，良い味を感じるのである。（アルマ32章参照）

ある英国の小説家は次のように述べている。「神を探し求めている人はすでに神を見いだしている。」

「信仰によって学ぶ」とは，安易な怠惰な方法で知識を得，それが知恵となることであるなどと考えてはならない。

これは神より命じられていることであるが，さらに，天よりの導きを熱心に求めた人々の経験からしても，信仰によって学ぶには，主の聖きみたまに調和するような生活を送るために全身全霊を傾けること，知恵の限りを尽くすこと，そしてみたまに

よる真の証を得られるような努力をすることが求められることがわかる。

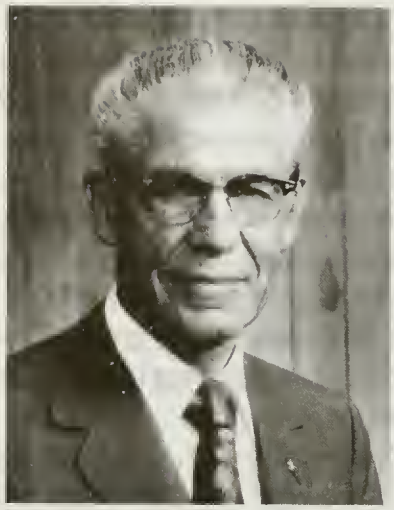
この教会の使命は，福音の真理を証し，不安と無目的の原因となるあらゆる偽りの教えを退けることにある。この不安と無目的は，人々の心の錨となるべきまっすぐな道を見いだしていないすべての人を脅かすものである。

私はキリストの真の光を全世界に輝かすことができるように心から祈っている。研究と祈りと信仰とにより私が知ったと同じようにあらゆる人が，ラザロの死に不平を言っていたマルタに言われた主の言葉が真実であることを確かに知ることができるよう願っている。すなわち主はまことに「よみがえりであり，命である。わたしを信じる者は，たとい死んでも生きる。

また，生きていて，わたしを信じる者は，いつまでも死なない……」（ヨハネ11：25—26）

私はマルタやペテロのように，「あなたこそ，生ける神の子キリストです」（マタイ16：16），「主よ信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト，神の御子であると信じております」（ヨハネ11：27）と答えることができることを主に感謝している。

私はこの厳粛な証を主イエス・キリストの聖きみ名を通して申し上げる。アーメン。



「きょう，選びなさい」

大管長会第二副管長

N・エルドン・タナー

私たちは最近，「最後の説教」と題するシリーズで，たくさんの説教を聞いた。これは話者が，人生最後の説教と仮定して主題を選ぶのである。同様に，私もこれが最後の説教であると仮定してこの大会の説教のテーマを選んだ。すなわち私が人々に残すことのできる最も大切なメッセージをお伝えしたいと思う。

私の選んだテーマはヨシュアの言葉から取ったものである。「…あなたがたの仕える者を，きょう，選びなさい。ただし，わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」（ヨシュア24：15）ヨシュアはこれを告別の言葉として間もなく世を去った。110歳であった。

本大会を通じてこれまで数々の素晴らしい説教をうかがい，またこれからも幾人かの幹部の兄弟たちから話をうかがうが，すべての人が主に仕えることの大切さを説かれると思う。

私たちは，モーセがどのようにしてイスラエルの子らを束縛の地から連れ出し，エジプト人が紅海でどのように滅ぼされたかを知っている。またイスラエルの民に住むべき地を与えるため，主はどのようにしてアモリ人とエリコの民を彼らの手に渡されたか，ヨシュアがどのようにして民の心を主に向けさせたかを知っている。

主は言われた。「そしてわたしは，あなたがたが自分で労しなかった地を，あなたがたに与え，あなたがたが建てなかった町を，あなたがたに与えた。そしてあなたがたはいまその所に住んでいる。あなたがたはまた自分で作らなかったぶどう畑と，オリブ畑の実を食べている。」

そして，ヨシュアは言った。「それゆえ，いま，あなたがたは主を恐れ，まことと，まごころと，真実とをもって，主に仕え，あなたがたの先祖が，川の向こう，およびエジプトで仕えた他の神々を除き去って，主に仕えなさい。

もしあなたがたが主に仕えることを，こころよしとしないならば，あなたがたの先祖が，川の向こうで仕えた神々でも，または，いまあなたがたの住む地のアモリびとの神々でも，あなたがたの仕える者を，きょう，選びなさい。ただし，わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」

さらに，ヨシュアは警告して言った。「もしあなたがたが主を捨てて，異なる神々に仕えるならば，あなたがたにさいわいを下されたのちにも，ひるがえってあなたがたに災をくだし，あなたがたを滅ぼしつくされるであろう。」すると恐ろしくなった民は答えて言った。「われわれの神，主に，われわれは仕え，その声に聞きしたがいます。」（ヨシュア24：13—15，20，24）

これと同じことが，私たちの先祖の開拓者の歴史にも見られる。彼らは信仰を守るために美しい町と家を捨てなければならなかった。開拓者は多くの苦難を受け，多くの死者を出したが，終始自らの信仰に忠実であった。平原を横断するにあたってなめたあらゆる艱難辛苦の只中にあってさえも，彼らは「旅を終わらず死すも，すべては善し」と歌ったのである。開拓者たちは主なる神のみ名をたたえ，神に仕え続けた。主は彼らの正しい努力のゆえに彼らを祝福し，彼らとその子孫に繁栄をもたらしたもうたのである。

聖典や世界の歴史を読むと，主に仕えることを選んだ個人，社会さらには国家までもが救われ，繁栄した例を数限りなく見いだすことができる。これは人間の努力の結果ではなく，神のみこころによるのである。一方主に仕えなかった人々は神の怒

りを受け，滅びている。

モルモン経には次のように記録されている。「ごらん，この土地はすぐれた土地であるからこの土地を所有する民はこの地の神に事えさえすれば，奴隷とならず自由を奪われず天下のどのような国からもすべて支配を受けることがない。この地の神とは…イエス・キリストである。」（イテル2：12)

何と素晴らしい約束であろうか。しかし，この約束にはヨシュアが民に警告したときと同様，「もし」「さえすれば」という制約条件が付いている。「もしあなたがたが主を捨てて，異なる神々に仕えるならば，…ひるがえってあなたがたに災をくだし，あなたがたを滅ぼしつくされるであろう。」イテル書の約束も「この地の神すなわちイエス・キリストに仕えさえすれば」という条件付きである。私たちはイエス・キリストに仕えることを怠り，主の教えに従って生活していないために，破滅に向かって進んでいるのではないだろうか。

アーノルド・J・トインビーは1948年出版した著書「文明の試練」（*Civilization on Trial*）の中で，文明の興廃について述べているが，彼はこの聖句の意味を捕らえ，文明の衰退する理由を悟っているようである。トインビーは歴史と歴史の繰り返すパターンを定義した後，こう述べている。

「我々の現在の社会は実に恐るべき状態にある。我々の知識に照らして歴史をながめてみると，現在の西欧諸国が属している人間社会が生まれるまでに，約20回にわたり同じ歴史を繰り返している。我々の社会は例外となる可能性があるが，文明と呼ばれるこれらの社会様式はことごとく廃れているか消滅しかかっている。さらに，これらの廃れた文明や消滅しかかっている文明の歴史を詳しく調べ，互いに比較してみると，文明の衰弱，衰退，崩壊の過程に一定のパターンが表われていることを知ることができる。当然のことながら，今日の歴史は同じように繰り返すかどうかという疑問が湧いてくる。衰退と崩壊というパターンはあらゆる文明が逃れることのできない運命であって，我々もそれらを逃れることはできないのだろうか。」

トインビーはさらに過去の成功や失敗のパターンは必ずしも繰り返されないとする意見を述べ，続いてこう語っている。「我々人間には選択の自由が与えられている。そして我々の責任を神や自然の双肩に押しつけることはできない。我々は自分で背負わなければならない。だが背負うかどうかは我々に任されている。」さらに彼は政治，経済，宗教の各分野で救われるために私たちがなすべき事柄を提案している。「これら3つの分野の中で長期に見て最も大切なものは，もちろん宗教である。」（ニューヨーク：オックスフォード出版社，pp. 38—40)

もし私たちが霊的に健全な状態を維持し，イエス・キリストの教えに従って生活するならば（個人として国家として生き残るにはイエス・キリストに仕えなければならないが）政治，経済の問題は解決するはずである。なぜならば，十戒をはじめとする神の教えに従えば，私たちは平和と繁栄を享受することができるからである。これらの教えは，私たちが従うならばあらゆる点で一層の幸福と善きものをもたらすものばかりである。

ソドムとゴモラの崩壊を考えてみると，ソドムはエホバの園の中部で第一の町であった。ツロとシドンの場合も，ツロは大いなる富と美に恵まれた都市で，救い主が訪れた都市の中で最大の都市であったと思われる。エルサレムをはじめとする大都市や文明も，神から離れ，民が邪悪で姦淫を行なったために崩壊している。私は，これが私たちの国にも急速にやってくるのではないかと恐れている。

ルドヤード・キプリングの予言的な詩「古（いにしえ）より知られたる我らの父祖の神」は，強大な大英帝国が栄華を極めていた時に，同国に向けられた警告であった。そしてこれはあらゆる国家に対する警告でもある。

「古より知られたる我らの父祖の神
広き戦場の主
主の恐しき手の下にて
我らはしゅろや松を支配す
万軍の主なる神よ
我らが汝を忘れぬ限り
我らと共にとどまりたまえ
混乱と叫びは絶え
将と王は離る
汝の古の犠牲は立てり
へりくだる心にて
万軍の主なる神よ
我らが汝を忘れぬ限り
我らと共にとどまりたまえ
我らが海軍は消えうせ
砂丘と岬は火に沈む
見よ，昨日のあらゆる栄華
我ニネベとツロと共にあり
国々の判士よ
我らが汝を忘れぬ限り
我らを助けたまえ」

（末日聖徒讃美歌76番〔英文〕)

以上の例から謙遜の中に強さがあり，おごりの中に弱さがあることは歴然としている。私たちは悔い改めて道を変えない限り，ソドムとゴモラの歴史を繰り返すであろう。私たちがこれまで成し遂げてきたことを分析して，私たちの価値がどこにあるかを考えてみようではないか。私たちは科学の分野において非常な進歩を遂げた。人を月へ往復させ，原子爆弾を作り，戦争の方法を著しく

変えた。だが平和に関しては何をしたであろうか。人間関係においては何をしたであろうか。霊的にはどれほど進歩したであろうか。

私たちも邪悪でみだらな世界に住んでいることはだれの目にも明らかである。私たちは神に仕えるのを怠っている。ほとんどすべての新聞，雑誌，ラジオ，テレビの番組を見，また聞けば神の律法がことごとく守られておらず，私たちが破滅への道をまっしぐらに歩んでいることが明らかである。盗み，放火，略奪，殺人，姦淫，暴行，死，飲酒による不幸，日曜日には教会は閑散とし，一方商店，公園，道路は人と車であふれているといった報道に満ちている。キリスト教徒を称する非常に多くの人々がこれらの罪を犯しているのである。

ある人はこのように言っている。「もし，私たちがキリスト教徒であるということで逮捕されるとしても，私たちをキリスト教徒と認めるに足る証拠があるかどうか疑問である。」私たちは繰返し警告を受けている。知らなかったと言うことはできない。もし，自分と家庭と国家の救いを望んでいるのであれば，私たちはパウロが教えたように，悔い改めてバプテスマを受け，生活を改め，心を入れ替えて主に仕え，主の戒めを守らなければならない。その責任は私たち個人にある。私たちは霊的な復興が必要である。

もしすべての人が福音の教えに従って生活し，神を愛し，神の戒めを守るとしたら，どれほど素晴らしい世の中になるか想像できるだろうか。すべての人が互いに愛し合い，陰口，殺人，盗みがなく，すべての人が正直，真実，貞潔，慈善を行なうとしたらどうであろうか。戦争がなくなり，地上に平和と天国が訪れるであろう。現在戦争や法の施行，犯罪に使われている金銭を，貧しい人，病人，不幸な人に向けられるようになるであろう。

主がアブラハムにソドムをその邪悪のゆえに滅ぼそうとしていることを話したとき，アブラハムはもし50人の正しい人がいたら赦してくれるように，そして最後には10人いたら見逃してくれるように願った。主はこの願いを聞き届けられた。しかし，正しい人10人すらも見いだすことができず，ついにソドムは滅ぼされた。私たちは正しい人の中に数えられて，そのために主が私たちの町と国とを滅ぼしたまわないようにしようではないか。主に仕えるか否かを決意することは非常に大切なことである。主は言われた。「だれもふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し，あるいは，一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは，神と富とに兼ね仕えることはできない。」（マタイ６：24）

神に仕えることは，正しくそれを選ぶならば，必ずしも家庭や十分な金銭と収入，その他喜びと幸福をもたらすこの世の物を棄てるという意味ではない。この世のものを追求しても，神とイエス・キリストの教えから離れてはならないという意味である。

私はこれまでの経験から，主に仕え主の戒めを守り，イエス・キリストと予言者たちが教えられたように福音の原則に従って生活するならば，物質的にも霊的にも価値ある事柄を人生において獲得できることをはっきりと知っている。私たちは，主を否定し，主の教えを無視する人々よりも，立派な家庭を築き，社会に大きな貢献をするであろう。事実，皆さんの周囲で本当のキリスト教徒の生活を送っている人々を見れば，彼らはそうでない人々よりも幸福で，愛され尊敬され，永遠の生命への準備をしていることに気付くはずである。

主はこのようにも言われた。「あなたがたは自分のために，虫が食い，さびがつき，また，盗人らが押し入って盗み出すような地上に，宝をたくわえてはならない。

むしろ自分のため，虫も食わず，さびもつかず，また，盗人らが押し入って盗み出すこともない天に，宝をたくわえなさい。

あなたの宝のある所には，心もあるからである。」（マタイ６：19―21）

私は宮殿や記念碑のような財産にあくことのない関心を寄せている人人を見ると不思議に思う。これらの物質はやがて崩壊し，朽ち果てるものである。先日私はリンカーン記念館の荒廃をとりあげた新聞記事を読んだ。これは国家を建設し，国家に身を捧げた人々を尊敬している私たちにとっては，まことに憂慮すべきニュースである。記事をもう少し詳しく読んでみると，48年を経た記念館の石灰石の壁と大理石の柱は変色し，建物のモルタルははげ落ち，地下室は鐘乳石と石筍（せきじゅん）が変形して薄気味悪いほら穴と化し，天井にはおびただしい数のくもとぶよが群らがっているそうである。これはまさしく，地上の宝は虫が食いさびがつくことの代表例と言えるのではないだろうか。私たちは，人や場所の記念物に敬意を表わすと同時に，時の経過に影響を受けない宝を蓄え，霊的な義務を果たすようにしようではないか。

ヘンリー・バンダイクの書いた小説「大邸宅」を御存じだと思う。この小説では，地上で大邸宅に住んでいた金持ちの男が天国に行った時，つまらない帽子をひとつしか手に持っていないことに気付き大いに驚いた。ところで，貧しい男も天国に行った時，自分に大邸宅が与えられて

いるのに気付いて驚いた。だが，この貧しい男は天に宝を蓄えていたのである。

私たちは生涯，人生から何を得るかを決める選択をし続けている。私たちはあらゆる機会を捉えて自己の改善に役立てているのだろうか。それとも時間を浪費しているだけだろうか。私たちは善と悪のいずれを行なおうとしているのだろうか。私たちは教会に出席しようとしているだろうか。それとも安息日を汚そうとしているだろうか。私たちは神と富のいずれに仕えようとしているだろうか。私たちは二人の主人に兼ね仕えることはできない。人生はその主人にだれを選ぶかで決まるのである。

これは人が絶対的に善であるとか，絶対的に悪であるとかいう意味ではなく，人はいついかなるときもいずれかを選択しなければならず，神を選ぶか富を選ぶかによって人生のほかの選択も決まってくるということである。

神に仕え神の戒めを守る者に約束された祝福を完全に受けるためには，両親が子供に神への信仰を教える必要がある。主はこのように警告しておられる。

「また，シオンまたは組織せられたるシオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば，その子供八歳の時，悔改め，生ける神の子キリストの信仰，バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば，罪その両親の頭にとどまるべし。

また両親はその子供たちに祈ることと，主の前に正しく歩むこととを教えざるべからず。」（教義と聖約68：25，28）

教会はそうした教育の重要性を認識しているので私たち自身と子供たちに主に仕える備えをさせるために，家庭の夕べを行ない，セミナリー，インスティテュート，学校，大学，補助組織等に参加するよう勧めている。私たちはこの義務を果たすのを引き延ばしてはならない。

私はBYUの同窓会会長アーネスト・L・ウィルキンソン博士がソルトレーク・シティーにある末日聖徒病院の冠状動脈治療病棟に緊急の呼出しを受けた時の話を聞いて非常な感銘を受けた。病院では，長年の親友が冠状動脈血栓で危篤状態であった。ウィルソン博士は次のように語った。「ベッドに近づくと，友人は私の手を握り，苦痛で身をよじり苦しそうに息をしながらも，酸素マスクの中からこのようにささやきました。『ああ，先生，どうか助けて下さい。私はこれまで延ばしてきたことやしたいことがまだたくさんあるんです。』

私たちは近代科学の粋を集めた電子器機をすべて使って，治療に努めました。けれども助かる見込みが次第に薄れていったとき，友人の言葉が頭に浮かんできました。私たちはただ考えるだけの者だろうか。それとも行なう者だろうか。私たちは人生で大切な決断を先延ばしにしてはいないだろうか。私たちも生死の境に立ったときにし残したことに気付き後悔するのではないだろうか。」

これは実に重大で急を要する質問である。私たちはすべて生と死の岐路に近づきつつある。選択ができる私たちはどれほど幸運であろうか。自分の道を選び，自分の行く末と受ける祝福を決めることができることはどれほど素晴らしいことであろうか。まだ選択の時期を逸してはいない。選択をするのは私たちである。だが，仕える者をきょう選ばなければならない。

私は，父なる神が私たちの御父であり，生きておられ，私たちが目的を達成するよう望んでおられることを知って，毎日主に感謝している。父なる神は，「そのひとり子を賜ったほどに，この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで，永遠の生命を得るためである。

神が御子を世につかわされたのは，世をさばくためではなく，御子によって，この世が救われるためである。」（ヨハネ3：16－17）

イエス・キリストは私たちのために命を捧げ，私たちが完き命を受け，救いに到達することのできる計画を与えられたのである。リチャード・L・エバンズはこれを見事に表現している。「天父は私たちを締め出そうとする審判ではない。私たちを負かそうとする競争者でもなく，私たちを有罪にしようとする検察官でもない。天父は私たちの幸福と永遠の進歩を望んでおられる愛にあふれた父であり，私たちが天父を求めさえすれば，できる限りの助けを与えて下さる御方である。」

願わくは，私たちがへりくだり，救い主イエス・キリストを受け入れ，主に仕えて，主が約束された祝福にあずかる勇気と力を得るよう，イエス・キリストのみ名により心から祈る。アーメン。



過去・現在・未来からの声

十二使徒評議員会会長代理

スペンサー・W・キンボール

愛する兄弟姉妹ならびに友人の皆さん，私はスミス大管長が只今話されたことすべてがまことにその通りであると申し上げたい。また，スミス大管長が現在地上における神の予言者であることを証する。

歴史は繰り返す。従って現在と未来の問題の解決方法を知るには，過去を振り返ってみればよい。コリント人は現在私たちが耳にしているのと同じ矛盾に困惑していたようである。パウロはコリント人にこう語っている。

「また，もしラッパがはっきりした音を出さないようなら，だれが戦闘の準備をするだろうか。

…それでは，空にむかって語っていることになる。

世には多種多様の言葉があるだろうが，意味のないものは一つもない。」（Ｉコリント14：８―10）

パウロの声は印象的で，力にあふれる大きな声であった。現代の神権時代に至るまで人々の心の中に生きてきた。

私たちの周囲にはいろいろな声がある。耳ざわりな声や騒々しい声，また快い声もあれば私たちの心を貫き通すような声もある。

パウロが語った啓示には，この末日に関する示現も含まれている。その声はこう言っている。

「…後の時になると，ある人々は，惑わす霊と悪霊の教とに気をとられて，信仰から離れ去るであろう。

それは，良心に焼印をおされている偽り者の偽善のしわざである。

これらの偽り者どもは，結婚を禁じたり，食物を断つことを命じたりする。」（Ｉテモテ４：１―３）

こんな声もある。「悪霊の教え」を宣言する耳ざわりな声である。「罪などというものは存在しない。悪魔はいない。神などいない」と。そして大洪水など決して起こらないと信じていたノアの洪水以前の人々のように，「食え，飲め，楽しめ」と言っている。

人を誘惑しようとする霊たちが口口に，肉欲の楽しみを得よ，自由奔放に肉体を満足させよと勧めている。現代は，かつてニーファイ人の予言者が次のように語った時代と非常に似かよっている。「もしも…義人たちの祈りがなかったならば，お前たちはすでに全く滅ぼされていたことであろう。…」（アルマ10：22）言うまでもなく，すべての戒めに従って生活している高潔で忠実な人々も数多くいる。彼らはその生活と祈りによって，この世を破滅から救っている。

私たちは，不安定な恐ろしい末日に生きている。闇はその暗さを増し，暗黒が忍び寄って私たちを包み込もうとしている。

パウロの声がはっきりと聞こえる。

「…終りの時には，苦難の時代が来る。

その時，人々は自分を愛する者，金を愛する者，…神をそしる者，親に逆らう者，神聖を汚す者，

無情な者，…無節制な者，…

…神よりも快楽を愛する者，…

となるであろう。」（IIテモテ３：１―５）

ある著名な論説員は現代を指して次のように書いている。

「確かなことがひとつある。悠長に構え，苦しみのないまま，衰退を続けるなどということはあり得ない。私たちには今敵がいる。それは，冷酷，粗野，残忍，うぬぼれという敵である。この敵は道徳の退廃などを憂うる必要のない進歩した世界に住んでいると信じている。彼らは折あらば，私たちの息の根をとめようとねらっているのである。」（ジェンキン・ロイド・ジョーンズ，*Human Events*, 1961年11月24日）

最近，道行く人々に「純潔を尊ぶことは古い考え方でしょうか」という質問を投げかけたところ，次のような答えが返ってきたそうである。

「道徳に対する考え方は変わったのですよ。純潔なんて過去の遺物ですよ。愛があればそんなこと問題じゃないでしょう。」「純潔を守り通した人なんて気味が悪いですね。。」「今の世の中に貞淑な人なんていないでしょう。」ある少女はこう言った。「純潔なんて古いわ。だって文明の発達とともに人は自由になったんですもの。」

そう，罪を犯すのも律法を破るのも自由である。性病にかかるのも自由なら命を縮めるのも自由，神を否定するのも自由であるし，すべての真の自由から遠ざかることも自由である。

私たちはこの世の中が堕落への道をたどっているのを目のあたりにしている。パウロが警告したすべての罪が今この社会にはびこっている。

男も女も「自分を愛する者」と化し，先を争って自分の成功を自慢している。また神を冒瀆している。もうひとつの罪は，子が親に従わず，親が律法に従わないことである。多くの人々が人間本来の愛情をなくしてしまい，利己的な願望の追求に明け暮れ，家族の生活はむしばまれている。

人間本来の愛情を捨て，求婚期間や普通の結婚関係を無視するという堕落に走った人が何百万人もいると言われている。こうした悪魔の策略は平原を焼き尽くす火のように広がり，現に世界を変えつつある。このような人々は，神に対してもまた配偶者や子供に対しても「人間本来の愛情」に欠けた人間である。

パウロは，世の人たちがほとんど忘れてしまったかのような言葉，自制心について述べている。辞書の中には今なお，自制心とは克己心，特に性欲上の節制のことと記されている。多くの善良な人々が大胆とも言える時代の風潮に影響されて，夫あるいは妻に対して手術を受けることを求めている。こうして妊娠を避け，子供の数を減らすよう求めるかん高い声に応じているのである。子供を生み，育てるということは決して容易なことではない。しかし容易なことをしていたのでは成長も進歩もない。にもかかわらず，今日，「子供を少なく」とどなり立て，ピルや避妊薬さらには手術までをも勧め，そして堕胎を行なっている。世界の人口の制限を提唱する人々が，自制心などをまったく口にも出さないのも不思議なことである。

書店には衝撃的な写真の載った本が所狭しとばかりに並び，情欲の満たし方を教えている。これに対して自制を教えるような本はほとんど見られない。「人生はセックスのためにある」を表看板に，人々はいわゆる「性的満足」をいかにして得るかと知恵をしぼっている。こうして家族，家庭，永遠の生命をはじめすべてのものを犠牲にしているのである。出版物，教壇あるいは説教壇を通して私たちは肉欲を離れて清く聖なるものに心を向けるよう人々に大声で訴える必要がある。

パウロは自制心と克己について教え，伝道中ずっとこのことを実践した。パウロの次の言葉は，そのことを言っているのではないだろうか。

「わたしとしては，みんなの者がわたし自身のようになってほしい。……彼らはわたしのように制するのがよい。」（Iコリント7：7－8）

「すなわち，自分のからだを制して服従させるのである。」（欽定訳Iコリント9：27）

パウロは「神よりも快楽を愛する者」と言ったが，これは現代のでたらめな性倒錯を指しているのではないだろうか。

またこうも言っている。「彼らの中には，人の家にもぐり込み，そして，さまざまの欲に心を奪われて，多くの罪を積み重ねている愚かな女どもを，とりこにしている者がある。」（IIテモテ3：6）

かつては誉れあると言われていた人々も，今や不道徳に対しては黙認しているように思われる。放蕩からは決して良いものは生まれない。パウロは言っている。「これに反して，みだらな生活をしているやもめは，生けるしかばねにすぎない。」（Iテモテ5：6）また，天からの声はこう告げている。「汝ら姦淫することなかれ。姦淫をなして悔い改めざる者は捨てらるべし。」（教義と聖約42：24）

大きな耳ざわりな声が，教育者，実業家，社会学者，心理学者，作家，映画俳優，国会議員，裁判官などから，さらには牧師の間からさえも聞こえてくる。それは彼らがわずかばかりのことを学んですべてを知っていると思い込んでいるためである。

この利己主義と高慢は，狡猾な偽りの父から吹き込まれたものである。「悪魔の狡猾な謀ごと」にかけられた人々について述べたニーファイ人の予言者の言葉に耳を傾けてみよう。

「…人間がもし神の訓戒に従うならば，学問のあるのも善いことである。（IIニーファイ9：29）

「…人間は学問があると自分は賢いと思って……自分独りで解ると思って……その智恵は愚であって何の益にもならず，かれらはついに亡びるのである。」（IIニーファイ9：28）

ペテロは確信に満ちた声で，悪を行なう者を分別のない動物と呼び，彼らは不義の報いとして罰を受けると言った。さらに，「…だましごとにふけっている…しみであり，きずである。」「その目は淫行を追い」，「心の定まらない者を誘惑し」と彼らのことを述べている。また彼らの「肉欲と色情」について語り，清められてから罪に立ち帰る者は，犬が自分の吐いた物に帰り，豚が洗われてもまたどろの中にころがっていくよう

なものであると言っている（IIペテロ２：13―22参照）

ペテロを支持する声が，パウロからテトスへの手紙の中に見られる。

「きよい人には，すべてのものがきよい。しかし，汚れている不信仰な人には，きよいものは一つもなく，その知性も良心も汚れてしまっている。

彼らは神を知っていると，口では言うが，行いではそれを否定している。彼らは忌まわしい者，また不従順な者であっていっさいの良いわざに関しては，失格者である。」（テトス１：15―16）

若人が不満としていることについて多くのことが言われている。私たちは，彼らの常軌を逸した行動，不従順および明らかな信仰の欠如を正当とすることはできないが，責めの一端は，国の法律と神の律法に従わない両親の悪い模範にあると言えるだろう。

確かに教壇や編集室，放送局，さらには説教壇から発せられた声も責めを受けるべきである。

彼らはそのあとあとまで影響を及ぼす偽りや，悪との戦いで正しい指導をしなかったことに対して，「…その民も祭司もひとしく」（イザヤ24：２）責任を取らなければならない。ここでいう「祭司」とは，あらゆる宗派の指導者全員を指している。イザヤは言っている。「地はその住む民の下に汚された。これは彼らが律法にそむき，儀式を変え，とこしえの契約を破ったからだ。」（欽定訳イザヤ24：５）

耳ざわりな声の中に，人々の汚れを促し，人々が堕落して行くのを黙認し，神の全知を否定する多くの聖職者の声があることに，私たちは衝撃を受けている。自らの宗教を固く擁護するはずの彼らが，俗世の叫びに屈してしまったのである。

ここで，新聞，雑誌から記事を幾つか引用してみたい。

「多くの聖職者はマリファナについて是か非かの解答を出すことをしぶっている。」「マリファナの是非は情況において異なる。」（*Time*，「タイム」1968年８月16日）

このようにして，彼らはすべての罪を闇に葬ってしまう「情況倫理」を作り出したのである。

ある宗教の指導者たちはこう述べている。「…キリスト教徒に与えられている厳格な行動規範は，必ずしも性的な問題にあてはめる必要はない。」（ロンドン―英国教会評議会，（*British Council of Churches*）

次にこれと対象的な，予言者の力強い声を聞いてみよう。ペテロは次のように予言している。

「しかし，民の間に，にせ預言者が起ったことがあるが，それと同じく，あなたがたの間にも，にせ教師が現れるであろう。彼らは，滅びに至らせる異端をひそかに持ち込み，自分たちをあがなって下さった主を否定して，…

また，大ぜいの人が彼らの放縦を見習い，…。」（IIペテロ２：１―２）。

ちょうど今月の新聞に，多くの会員を持つある教会の辞任した指導者が，「古来の形式に則る婚約式の復興」を提唱したという記事があった。「これは，教会の祝福によって若い未婚の男女が床を共にすることを認めるものであって，道徳的な意味での婚前交渉とはみなされない」とのことである。

また次のような評論家の声もある。「最近，映画界は，今後，性倒錯や同性愛が映画から締め出されることはないだろうとの声明を発表した。…私たちは，居間に通じるパイプを使って，青少年に暴力，冷笑，サディズムを浴びせかけようとしている。」（ジェンキンス・ロイド・ジョーンズ）

ごく最近の出版物から引用してみよう。「―――教会は本日開かれた協議会において，成人が合意の上で行なった同性愛は，罪とならないとする動議を承認した。…」

多くの読者を持つある雑誌は次のように報じている。「サンフランシスコの―――の聖職者グループは，教会は同性愛に対する非難を取り下げるべきだと考えている。」

男女の同性愛を提唱する者たちが主催して，性倒錯プログラムの資金集めパーティーが開かれた折，牧師たちのグループが妻を伴ってそのパーティーに出席したことを報じた雑誌から引用してみよう。

「もし，現在学校関係の仕事をもつ同性愛提唱者がすべて明らかにされ，州法に照らして解雇されるとすれば，港湾地区のすべての学校はただちに閉鎖しなければならないであろう。」（*Newsweek*，「ニューズウィーク」1967年２月13日）

前述の牧師は次のように述べたと報道されている。「…同性の二人の人間が愛を語り，性交によってその愛を深めることができるのです。」（同上）

実に醜い耳ざわりな声である。

私たちはなぜこのような事柄を口にするのであろうか。なぜもっと楽しい話題があるというのに，悔い改めを叫ばなければならないのであろうか。それは，世の人々の生き方が変わらない限りだれかが世に向かって世の滅亡を警告しなければならないからである。

ポープの詩を思い起こしてみよう。

「悪，一目見し時憎しみの念湧く如き，
いと恐しき顔つきの魔もの。
否，幾度が見し毎にその顔つきに慣れ，
耐える気持があわれみに，
あわれみの情は悪しきを入れるものとなる。」

(アレキサンダー・ポープ，*Essay on Man*，作品，第2巻，135)

だれかがこのようなことに対して警告を発しなければならない。そして私たちは口を閉ざしているわけにはいかないのである。

偉大な指導者モーセにとって，これら性倒錯は汚れた忌むべき，死に価するものだった。パウロにとっては，不自然で卑きょうで罪深く，姦淫と同列に加えられる卑しい感情であり，王国へのすべての門を閉ざしてしまうものであった。

両親が性的な行為において，無節制であったり，作家や宗教指導者たちがこのような罪を黙認するような状況を作り出しているのに，模範や自分をひきとめる杭，信じられるような正しいもの，すなわち安全な港を求めてさ迷い，欲求不満に陥っている若人たちを私たちはどうして暗闇から救い出すことができるであろうか。

「性の混乱を黙認する人々は，彼ら自身も危険にさらしているのである」と，社会学者ソロキンは語っている。

高い尖塔のついた建物はたくさんあるが，その中では「罪」という言葉が長い間述べられていないし，それに反対する説教も全くなされていない，とある著名人が語っている。

これらの優柔不断な声とは対象的に，主の教会からは権威ある声が発せられている。J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長の説教に耳を傾けてみよう。

「人間は生物学上の一単位としては，動物かもしれない。しかし，人間はそれ以上のものである。すなわち不死不滅の霊を宿している。この霊は，肉体よって汚すこともできる。純潔の律法を破ったときである。

私たちの文明は，純潔や神聖な結婚，聖い家庭という基盤の上に築かれている。これらを破壊するキリスト教徒は，野獣と化すのである。

…家族の関係は永遠に続くものである。これは，私たちの知っている最も荘厳で神聖な人間関係である。」(大会報告，1938年，p. 137)

末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長会は次のようにはっきりと警告している。

「…性的な罪，すなわち男と女の誤った性的関係は殺人に次ぐ大罪である。主は婚前交渉，姦淫，売春の間に何ら根本的な区別をしておられない。いずれも主の厳しい非難を受けるものであり，…主がこの罪に対して宣告された裁きと罰とを決して逃れることのできないものである。裁きの日は，夜の次に朝が来るように必ずやってくる。」

そして，出版物，放送，説教壇から悪を黙認し，正当化している者たちに対してその声はさらに続く。

「この犯罪をいいつくろい，そのような情欲にふけることを飢えや渇きを満たすとの同じように自然の欲求を満たす罪のない行為だという者は，唇をもって汚しているのである。そのような者たちの忠告は滅亡を招く。その智恵は偽りの父から来たものである。」(『大管長会メッセージ』「インプルーブメント・エラ」1942年11月，p. 685)

再びパウロの声が響きわたる。

「あなたがたは神の宮であって，神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。

もし人が，神の宮を破壊するなら，神はその人を滅ぼすであろう。」(Iコリント3：16—17)

神の声は語る。「われは，イエス・キリストなり。…

われ汝に再び命ず。汝の隣人の妻を貪り，また隣人の生命を取らんとすることなかれ。」(教義と聖約19：24—25)

結婚によらずして性的関係を結ぶことは神殿への戸口に錠をおろすことになり，その結果永遠の生命に至る道を閉ざすことになる。

私たちは今この話を聞いておられるすべての方々を，水潤う庭，心地よい木陰へ，また不変の真理のもとへと心から招きたいと思う。

私たちと共に，確信と安寧と一致を得ていただきたい。ここには冷たい水が湧き出ており，その泉は涸れることがない。

来て予言者の声に耳を傾け，神のみ言葉を聞いていただきたい。

主は不変のお方である。きのうもきょうも，いつまでも変わることのないお方である。従って主の教会は揺るぎなく変わらずに立っている。罪は黙認されない。しかし心から悔い改めるならば，赦される。

私たちのために苦しみを受けられた主は，次のように言っておられる。

「…われ汝に命ず，悔い改めよ…汝の痛苦甚しからざらんがために…すなわちその痛苦の如何に甚しきかを汝知らず，その如何に強烈なるかを汝知らず，また如何に堪え難きかを汝知らざるなり。

見よ，われは神なるに，人もし悔い改むるならばこの苦しみを受けざらんがために，すべての者に代りてこの苦しみをわが身に受けたり。

されど，人もし悔い改めずば誠にわれと同じ苦しみを受けざるべからず。

その苦しみたるや，われ神，すなわちすべての中最も大いなる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ，あらゆる毛の孔より血を湧かせ…」(教義と聖約19：15—18)

主のしもべらの声があまねく響き渡るよう，イエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。



永遠なる生命

十二使徒評議員会会員

エズラ・タフト・ベンソン

この大会に集っておられる兄弟姉妹，および全世界の兄弟姉妹。厳粛な中にも喜びあふれるこの大会において，私は，聖典に裏付けられた私の確信に基づいて，皆さんをこう呼ばせていただきたい。私たちはまぎれもなく兄弟姉妹であり，同じ天の父の霊の子供であると。

私たちの存在は永遠である。この死すべき世に来る前は，英知を有する霊として存在していた。そして今生活しているのも永遠の一部である。地上への誕生が初めではなく，だれでもが味わう死も終わりではない。

「われらの誕生は，ただ眠りと前世の忘却とにすぎず。

われらと共に昇りし魂，生命の星は，

かつていずこかに沈みて，

はるかより来たれり。

すぎ去りし昔を忘れしにはあらず，

また赤裸にて来たりしにもあらず，

栄光の雲を曳きつつ，

われらの故郷なる神のもとより来たりぬ。」

ウイリアム・ワーズワース
「幼年時代を追想して不死を知る頌」田部重治訳

永遠に存在する者として，私たちは神の持ちたもう性質を帯びている。私は，鉄のカーテンの内外を問わず世界各地を旅してきたが，その経験からひとつの確信を得た。すなわち，天父の子供たちは，本質的に善なる存在なのである。人々は，平和に暮らすことを望み，良き隣り人でありたいと願っている。家庭を愛し，家族を愛している。より高い標準に基づいた生活を求め，正しいことをしたいと考えている。人間は本来善なのである。私は，神が私たち人間を愛しておられることを知っている。

そして，神の小さきしもべである私も，天父の子供たちを愛する気持ちで一杯である。私はこれまでに，いわゆる上層階級から下層階級に至るまでの様々な人々に会ってきた。彼らの家や畑，農場や商店を訪れ，高速道路や飛行機の中でもいろいろな人々と話を交わしてきた。大小の集会に集い，彼らの教会で共に礼拝する特権にあずかってきた。ソ連のモスクワでは小さなバプテスト派の教会堂にあふれんばかりの会衆が集まっていたこともある。

兄弟姉妹，繰り返して申し上げるが，天父の子供たちは本質的に善なのである。主は彼らを愛しておられるのである。主の取るに足らない一介のしもべとして私も彼らを心より愛している。願わくは，神があなた方をいずこにあろうとも祝福を与え，みたまを通して，あなたの近くにとどまりたもうように。

この誘惑や様々な問題が横溢し，罪のはびこる現代，物事の判断が，逆になっているような世を生きて行く時に，私たちは死の訪れ，予断を許さない人生，そして神の力と愛を知り，頭を下げずにはおられない。愛する人々を失う悲しみはだれもが経験する。しかし，そこには感謝もある。この命が永遠であることへの感謝。わけへだてなくだれにでも与えられる偉大な福音の計画への感謝。主イエス・キリストの生涯と教えと犠牲に対する感謝がある。私たちは間もなく主の復活を祝う日を迎えようとしている。

私たちは主の生涯とみ業を神に感謝している。世の光であり命である主イエス・キリストは，全人類のために，死の縄目を解き，模範を示し，道を明らかにされた。主は言われる。

「わたしはよみがえりであり，命である。わたしを信じる者は，たとい死んでも生きる。

また，生きていて，わたしを信じる者は，いつまでも死なない。」（ヨハネ11：25—26）

昔，予言者ヨブは，「人がもし死ねば，また生きるでしょうか」と尋ねた（ヨブ14：14)。私の良き友人である合衆国上院議員のエベレット・ダークセン氏（1896—1969）は，亡くなる少し前に，このヨブの質問の答えともなるべき印象的な言葉を残している。「見えるものと見えないものとを隔てている幕の彼方には一体何があるのだろうか。永遠への入口に立ちながら，このことを考えない人がいるだろうか。

不思議な本能で地上の体が朽ちる時が迫っていることを直感しながら，墓の向こうに何があるかを考えない人が，かつていただろうか。人生の旅の終焉（しゅうえん）を奇妙なあきらめをもって迎えながら，永遠の未来がどのようなものであり，どのようなところであるかを考えない人がいるだろうか。

何世紀も昔，ヨブという人は長年あらゆる物質的な恵みを受けていたが，晩年になって，人間にふりかかるあらゆる艱難を一挙に受けた。友と地に座した彼の口から出た言葉は，歴史を通じて問いかけられてきた質問である。『人がもし死ねば，また生きるでしょうか。』復活祭の季節には，あらゆるキリスト教徒が復活について考え，様々な疑問への答えを求める。その第一が，ヨブの言った『人がもし死ねば，また生きるでしょうか』という疑問である。

もし私たちの住んでいる地球と宇宙が計画されたものであるとしたら，設計者がいなければならない。全人類についての計画があり，計画者もいると信じなければ，どうしてこの不可解な宇宙の神秘を受けとめることができるだろうか。…

『人がもし死ねば，また生きるでしょうか。』まさしく人はまた生きる。夜のあとに朝が来るように，星がその軌道上を運行するように，海のうねりが峰を作れば谷を作るように，確実に。」（*U. S. News and World Report*, 1965年11月8日号, p. 124）

確かに，生命は永遠である。たとえこの偉大な真理を見失うことがあろうとも，私たちは地上の生活を終えた後も生き続けるのである。

私たちは，いつかは朽ちてしまう取るに足らない物事に，あまりにも執着し過ぎるきらいがある。この世の宝は人生という学校にいる間，教室と黒板を提供してくれるに過ぎないのである。金，銀，家屋，家畜，土地，その他この世のものは，その本来あるべきところに置かなくてはならないのである。

この世の生涯は一時的なものでしかない。私たちは，昇栄を得るために第一に学ぶべき事柄，すなわち主の福音の計画に従うことを学ぶために，この世へ来た。

確かにだれもが死ぬ。しかし，実のところ，永遠の別離という意味での死はないのである。復活は実際に起こるものであり，その証拠は聖典の至る所に見られる。マタイは，主の栄光の復活の直後に起こった出来事をこう記している。

「また墓が開け，眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。

そしてイエスの復活ののち，墓から出てきて，聖なる都にはいり，多くの人に現れた。」（マタイ27：52—53）

パトモス島の使徒ヨハネは，「死んでいた者が，大いなる者も小さき者も共に，御座の前に立っているのが見えた」と記している。（黙示20：12）

古代，近代の聖典から復活の証は幾らでも取り出すことができる。

霊界はそう遠くにあるわけではない。

この世と次の世を隔てている幕が非常に薄くなることが時々ある。すでに亡くなった私たちの愛する人々は，私たちから遠く離れた所にいるのではない。ある偉大な指導者が「いったい霊界はどこにあるのだろうか」と問い，自ら「霊界はここにある」と答えている。「(霊たちは) この組織された地球の境界を越えた彼方へ去るのだろうか。いやそうではない。彼らは永遠にわたってここに住むために，この地球に遣わされているのである。」「…霊は肉体を離れると，父なる神のみもとへ行く。そして，霊的な事柄を見聞きし理解する備えをさせられる。…もし主が許されるならば，またそれが主のみこころであるならば，あなたはこの世を去った霊たちを，今あなたが肉眼で体を見るようにはっきりと，見ることができるであろう。」（ブリガム・ヤング「説教集」*Journal of Discourses*, 第3巻, pp. 367—69）

確かに生命は永遠なのである。

「きょうの空が暗くても
あすは青空かも知れない。
雲がすべて払われると
神の摂理が輝きわたる」
（作者不詳）

死とは一体何だろうか。合衆国上院付きの牧師であるピーター・マーシャル博士の語った出来事を紹介しよう。

ある家庭で，幼い一人息子が不治の病に冒された。来る月も来る月も母親は一心に看病したが，いつまでたっても回復に向かう様子がなかった。その息子は次第に死ぬということを考え始め，自分は間もなく死ぬのだと思うようになった。ある日，母親がアーサー王と円卓の騎士の物語を読んで聞かせ，本を閉じると，しばらく黙りこくっていた息子がこう尋ねた。恐らく来る日も来る日も考え続けていたに違いない。「お母さん，死ぬってどんなこと。こわいの。」母親の目にはみるみるうちに涙があふれてきた。彼女は何かを取り

に行くような素振りで台所に駆け込んで行った。母親は息子に何と答えるべきか心の中で主に祈った。そして主はそれに答えられたのである。母親はとって返すとこう言った。「ケネス，あなたは小さい時のことを覚えているでしょう。一生懸命に遊んで疲れてしまって，洋服も着替えずにママのベッドに飛びこんでそのまま寝てしまったことがあったわね。そして，次の日目を覚ますと自分のベッドに寝ていたことがわかって，びっくりしたでしょう。それは，夜のうちにお父さんが大きな腕でよいしょと抱いて，あなたの部屋に運んで下さったからよ。ケネス，死ぬってこともそれと同じなの。私たちはある朝目をさますと，自分のお部屋にいるんだわ。イエス様は私たちのことを愛していらっしゃるから，連れてって下さるの。」息子は顔を輝やかせて母親を見つめると，「もう，ぼくこわくなんかないよ。天のお父さまのところへ行くときは，天のお父様におまかせする」と言った。そして，二度と死について尋ねなかった。数週間後，息子は母親の言った眠りについたのだった。死とはこういうものである。（キャサリン・マーシャル「ピーターという人」*A man Called Peter*, pp. 272—73）

その通り，生命は永遠である。死は終わりではない。この復活祭の季節は，私たちが主イエス・キリストの復活という最も栄えある出来事に心を向けるに一番ふさわしい時期である。

私はこれまでにも幾度となく感謝の気持をもって証してきた。

私はイエスがキリストであり，世の救い主，贖い主であり，神の真の御子であることを知っている。イエスはベツレヘムで幼子として生まれ，人々の間で生活し，導きと教えを施された。イエスはカルバリの丘で十字架につけられ，その３日後に復活された。

墓の傍らで嘆き悲しんでいる婦人たちに天使は告げた。「あなたがたは，なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは，ここにはおられない。よみがえられたのだ。」（ルカ24：５—６）「そのかたは，ここにはおられない。よみがえられたのだ。」この言葉に匹敵する劇的な言葉を，歴史の中に見いだせるだろうか。

救い主イエスほどこの世に重大な影響を及ぼす生涯を送った人が果たしているだろうか。私たちはキリストの教えのない人生というものを考えることができない。キリストがおられなかったら，私たちは，肉欲と物質が支配する恐れと闇から生まれた妄想的信仰と崇拝の中にさ迷うことであろう。私たちは主が私たちに定められた目標にまだまだほど遠いが，決してその目標を見失ってはならない。また，主の教えとその生涯，死，復活なくして，私たちは光と完全へ到達することができないことを忘れてはならないのである。

願わくは，全地の民がイエスの教えと模範，イエスが神の御子であることを受け入れる日，すなわち全人類のために死の縄目を解いた主の栄えある復活を事実として受け入れる日を，神が速めたまわんことを。

主が教えられた愛の福音を受け入れて実践し，主のみこころを行なってはじめて，私たちの目を覆っている無知と疑惑のかせを絶ち切ることができるのである。私たちはこれを繰り返し繰り返し学ばなければならない。この世と永遠の世において霊に喜びを受けるには，この簡潔で栄光あふれる真理を自分のものとしなければならないのである。利己心を捨てて主のみこころを行ない，生活の中で主を第一に置く必要がある。確かに，私たちが主の愛を隣人と分かち合うときに，祝福は幾倍にも増し加えられるのである。

この「ガリラヤ人」が示された道から離れてゆけば，それだけ世との戦いに負けているのである。だが，私たちには主の助けがある。主は，繰り返し弟子たちに，そして私たちにこう言われた。

「あなたがたは，心を騒がせないがよい。…

何事でも私の名によって願うならば，わたしはそれをかなえてあげよう。

わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。

わたしは平安をあなたがたに残して行く。」（ヨハネ14：1, 14, 18, 27）

私たちは子供の素朴な祈りや，福音を生活の中に浸透させている人々の隠やかなしかも不変の信仰の中に，主の慰めのみたまを感じる。自分の祈りを通して，また主を知り，主の実在を感じている人々の，聖く厳かな証を通して主を知ることができるとは，何と素晴らしい賜であろうか。

兄弟姉妹の皆様。主の復活から19世紀を経た復活祭の朝を迎えようとしている今，私は，救い主イエスが生きておられることを厳粛に証したい。主は確かに死からよみがえり，私たちもいつかよみがえる。主はよみがえりであり，命である。

主は復活の後，旧世界で多くの人人に現われたもうた。

聖なる近代の聖典によれば，主は天に昇る前の３日間を新世界アメリカの「他の羊」と共に過ごされた。

1832年２月16日に予言者ジョセフ・スミスと同僚のシドニー・リグドンに与えられた示現を引用してみたい。

「さて，この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句，われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きた

もう』こと是なり。

われらは，彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。

すなわち諸々の世界は彼の手により，彼の手を経て，また彼に因りて先に作られ，また現に作られ，これに住む者たちも皆神より生まれたる息子と娘なることを証したもう。」（教義と聖約76：22―24）

イエスはキリストであり，生きておられる。イエスこそ死の縄目を絶ち切られた方であり，私たちの救い主，贖い主，神の真の御子である。

そして，聖書が告げるようにイエスは再び地上に来られるのである。「…あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは，天に上がって行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で，またおいでになるであろう。」（使徒1：11）

この同じイエスが私たちの時代にすでに地上に来られた。栄光に満ち，昇栄した御方であり，御父のもとにこの世の神である復活したキリストが，1820年に少年ジョセフ・スミスに姿を現わされた。アブラハム，イサク，ヤコブの神，モーセの神，天地の創造主であるイエスが，私たちの時代に訪れたもうた。御父は，イエスを，ジョセフ・スミスにこのように紹介された。「こはわが愛子なり，彼に聞け。」（ジョセフ・スミス2：17）

父なる神と御子イエス・キリストが少年予言者ジョセフに現われたもうたことは，救い主の復活以来この世で起こった最大の出来事であった。回復されたイエス・キリストの教会として，私たちは，謙遜に，感謝をもって，この証を全人類に述べるものである。これは全世界に伝えられるべきメッセージであり，天父の子供たちすべてに向けられた真理の訪れである。全世界300万の教会員はこれを厳粛に証する。

今日，2万の宣教師と300万の末日聖徒イエス・キリスト教会，モルモン教会の会員は，神は天から再び語られ，イエス・キリストが再び人に現われたまい，復活は事実であるとの証を述べている。

私は，彼らの宣べ伝えるメッセージが真理であることを証し，自らの証を付け加える。イエス・キリストの御名によって，アーメン。



大いなる偽り者 サタン

十二使徒評議員会会員

マリオン・G・ロムニー

愛する兄弟姉妹および友人の皆さん，私がこれから話すしばしの間皆さんの信仰と祈りをお寄せいただきたいと思う。私はきょう，主の敵である「大いなる偽り者サタン」について話すつもりであるため，是非とも主のみたまが必要なのである。

これから申し上げる娘の言葉を覚えておいていただきたい。そして私の話す間それを思い起こしていただきたい。ある娘が母親に言った。「私，ジョンと結婚できないわ。だって彼は悪魔を信じていないんですもの。」すると母親はこう答えた。「かまわないから彼と結婚しなさい。あなたと私できっと信じさせることができるから。」

神が死んだとする偽りの説が流布されているが，悪魔の存在を否定する教えも同様に有害なものである。このふたつの偽りは共にサタン自身から生まれたものである。これらを信じることは，サタンに従うことである。そしてこれは必ず破滅を招く。

末日聖徒は神の実在を知っている。それと同様に，サタンも生きており，強大な力を持った霊であり，神と人と義の敵であることを知っている。

神と悪魔の両者が実在することは聖典から，また人類の経験から明らかである。

前世における天上の大会議に関するアブラハムの記述を読むと，神とサタンの双方がこの会議に出席したことがわかる。(アブラハム3章)

この記述の中で驚くべき，重要な事柄が明らかにされている。すなわち，遠い過去の事物の姿，父なる神とその霊の子ら，この地球の創造の計画が明らかにされている。また，福音の計画，キリストとサタンについても触れている。

主はアブラハムに啓示されたこれらの真理をさらに詳しくモーセに述べておられる。「われ主なる神，モーセに語りて言いけるは，汝がわが生みたる独子の名により退けと命じたるかのサタンは太初より在りし其者なり。彼わが前に来りて言いけるは，見たまえ，われ此所に在り。われを遣したまえ。われ汝の子と成らん。われことごとく人類を贖いて一人だに失うことなからしめん。われ正にかくの如くすべし。これを以てわれに汝の誉を与えよと。」(モーセ4：1)

旧約の予言者たちはサタンと大会議におけるサタンの役割について知っていた。イザヤはサタンに直接話しかけるように述べている。

「黎明の子，明けの明星よ，あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ，あなたは切られて地に倒れてしまった。

あなたはさきに心のうちに言った，『わたしは天にのぼり，わたしの王座を高く神の星の上におき，……いと高き者のようになろう』。

しかしあなたは陰府に落され，穴の奥底に入れられる。」(イザヤ14：12—15)

主は大会議におけるサタンの役割に関してこれまでの神権時代に明らかにしてこられた事柄を，この最後の神権時代でも確認しておられる。1830年9月，主は予言者ジョセフに言われた。

「…悪魔はアダムより先に在りし者なり，彼，われに叛きて曰く『われに汝の光栄を与えよ。その光栄はわが能力なり』と。かく言いて，また彼は天群の三分の一をその自由意志によりてわれに叛き去らしめたり。」(教義と聖約29：36)

ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンは，1832年2月次のような示現を受けたと証している。「…神の御前に於て権威ありし神の一天使，…神の生み給える独子に叛きて，神と御子の前より突き落され，

天の衆群彼のために泣き悲しみたれば『滅亡』と呼ばる。彼はすなわちルシフェルなり。暁の子なり

き。」(教義と聖約76：25—26)

ジョセフ・スミスは前世でのこの大論争を次のようにまとめている。

「天上での論争の各々の主張は次の通りだった。イエスは，救われない霊が出てくるだろうと言った。これに対して悪魔はすべての霊を救うことができると言い，大会議の前にその計画を提示した。そして大会議はイエス・キリストの案を採択した。すると悪魔は神に背いて立ち上がった。」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 357)

サタンとサタンに従う者たちは，投げ落とされて，地球にやってきた。

モーセに示された示現の中で主は言われた。

「…サタンわれに叛きて，われ主なる神のすでに人に与えたる人の自由意志を滅ぼさんとなし，しかもまたわが持てる権能を自らに与うべきことを求めたるにより，われわが生みたる独子の権能によりて彼を投げ落さしめたり。

而して彼はサタンと成れり，実にあらゆる偽りの父なる悪魔となりて人を欺きだまし，以てわが声に聴き従わぬすべての者を欲するままに虜となすなり。」(モーセ4：3—4)

サタンは，アダムとイブが堕落する前，エデンの園で二人と共にいた。それだけでなく，二人が園を追い出された後も引き続き二人とその子孫を誘惑した。アダムとイブは福音を授けられたとき，喜んで「神の御名を讃め，息子娘らにすべてのことを知らしめたり。

ここにサタン彼らの中に来りて言いけるは，われもまた神の子なりと，また彼らに命じて言いけるは，アダムとイヴの言を信ずるなかれ，と。されば彼らアダムとイヴの言を信ずることなくサタンを神よりも愛でたり。人はその時より，肉体，肉欲，悪魔に従う者となり始めたり。」(モーセ5：12—13)

以来今日に至るまでサタンは地上にいる。ヨブ記にはこう記されている。

「ある日，神の子たちが来て，主の前に立った。サタンも来てその中にいた。

主は言われた，『あなたはどこから来たか』。サタンは主に答えて言った，『地を行きめぐり，あちらこちら歩いてきました』。」(ヨブ1：6—7)

予言者ジョセフは，1831年8月11日付の日記に，次のように書いている。

「…マクイルウェインス・ベンドのある川岸に野営したときのことだった。フェルプス兄弟が白日の示現の中に破壊者がものすごい力で水の面を進んで行くのを見たのである。他の者には音は聞こえたが何も見えなかった。」(*Documentary History of the Church*,「教会歴史」第1巻，p. 203)

サタンは邪悪な存在である。全くしかも常に邪悪である。サタンは常に福音の計画を覆そうとし，「人々の身も霊も亡ぼさんと」している(教義と聖約10：27)

「…悪魔とその使たちまた自分から悪魔に従う者たちは，このように働いて誰一人にも決して善いことをせよとすすめない。」(モロナイ7：17)

イエスはゲッセマネの園で苦しみを受ける直前に行なわれた最後の晩餐で，ペテロに対して次のように言われた。

「シモン，シモン，…サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。」(ルカ22：31)

サタンは，人々に注がれるキリストのみたまの影響力に対抗し，これをくじこうとやっきになっている。リーハイは息子のヤコブに「すべての物事には必ずその反対のものがなければならない」と教えたが，サタンは「その反対のもの」の代表者であり，促進者であり，提唱者である。(IIニーファイ2：11，14—18参照)

サタンのとる方法は多種多様であり，狡猾である。

「…サタンは人を攻撃するとき，可能な限りの手段を使ってまず心をあいまいにさせ，次にうそと，真理の様相を呈した偽りを吹き込む。サタンは模倣にたけている。純粋な福音の真理が急速に世の中に広められているが，その一方でサタンは偽りの教えを広めているのである……『偽りの父』であるサタンは，邪悪な業を長年続けているため，非常に熟練している。そして，選ばれた者さえをも可能であれば陥れようとしている。」(ダニエル・H・ラドロー，*Latter-day Prophets Speak*,「末日の予言者は語る」ジョセフ・F・スミスの言葉，pp. 20—21)

サタンは神権時代が幕開けを迎えようとするときに必ず，真理の出現に対して真っ向から攻撃をしかけている。すでに述べたように，最初の神権時代にアダムとイブの息子娘たちをだました。

モーセの神権時代の初めに，「サタン来りて彼を誘惑し言いけるは，人の子モーセよ，われを礼拝せよと。」(モーセ1：12)

イエスの時代には，主をも攻撃した。(ルカ4：1—13参照)

この最後の神権時代の幕開けにもサタンは登場し，戦いをいどんできた。予言者ジョセフ・スミスは次のように記録している。

「……私は何とも知れぬ力によって捉えられ，ついに私は全く抵抗力を失った。またその力は私の舌さえしびれる程の驚くべき力を振ったので私は物言うことができなかった。そしてあたりはだんだん暗くなり，一時はあたかも私はこのまま急に死んでしまうかのように思われた。」(ジョセフ・スミス2：15)

モルモン経が世にもたらされると

きもサタンは攻撃した。その詳細は教義と聖約第10章に記されている。

サタンは福音が世に広められるのを妨げようと懸命になっているが，その証拠がヒーバー・C・キンボールの記録の中に見られる。1837年にイギリスに福音を携えて行った兄弟たちはサタンから攻撃を受けた。（オルソン・F・ホイットニー，*Life of Heber C. Kimball*,「ヒーバー・C・キンボールの生涯」pp. 143—45）

今日の社会の退廃は，「悪魔はないものであるから私は悪魔ではない」（IIニーファイ28：22）と言うサタンの言葉をほとんどの人が信じているという事実から説明できると思う。

私たち末日聖徒は，サタンが実在するかどうかについて，人の考えに惑わされる必要はないし，また惑わされてはならない。一個の人格を持った悪魔が存在する。私たちはこれを信じる方がよい。目に見える見えないを問わずサタンとその無数の手下が人々を支配し，今日の世界の諸事を支配している。

現代とその行く末を示現でかいま見た古代アメリカの予言者は，もしサタンのなすがままにしておくと，この世は滅びると予言している。ニーファイは現代の私たちの状況についてこう述べている。

「悪魔の王国は必ずゆり動き，またこの王国に属する者たちも必ず動かされて悔い改めなければならない。そうでなければ，かれらは悪魔の永遠の鎖に固くしばられ怒らされて亡びてしまう。

ごらん，その時に悪魔はある人々の心に入って荒々しい行いをさせ，またこの人たちに善い事を怒らせる。

またほかの人々をなだめ，この人たちをすかして肉欲をほしいままにさせるから，その人々は『シオンの中では万事よろしい。シオンは栄えて実に何事もみなよろしい』と言う。このように悪魔はこの人々をだまし，心を配って地獄へつれて行くのである。

悪魔はまたほかの或る人々にへつらってこの人々を迷わせ，地獄はないものであると言い，また悪魔はないものであるから私は悪魔ではないと言い，このように耳にささやいて一度かかったら決して逃れられない恐ろしい鎖でとうとう縛ってしまう。」（IIニーファイ28：19—22）

さて，私は別に人を怖がらせたり，敗走させたり，おじけづかすために，こういったことを話しているのではない。私は以上のことが真実であると知っているので，また「サタンに打ち勝」ち，「また現にサタンの仕事に力を与うるサタンの僕らの手より免れ」（教義と聖約10：5）ようとするには現状を理解し認識しなければならないので，述べているのである。今は末日聖徒があいまいな言葉を使う時ではない。

また慌て惑う時でもない。私たちが現在遭遇している困難は突然やってきたのではない。主は140年前にこの時代の行く末をはっきりと啓示された。救い主の再降臨が近づくにつれて，人々に対するサタンの動きに拍車がかかることを私たちは知っている。再降臨までは，人々が試しを受ける年月となるのである。

私たちはまた，神が生きておられること，神の「永遠のみこころが……続けて行なわれる」ことを知っている。サタンとその邪悪な軍勢に対抗することができるよう，私たちにはイエス・キリストの福音が与えられている。キリストのみたまと神権の力は，サタンに対抗する大いなる楯である。私たちは聖霊の賜を受けることができる。この賜には，悪魔を間違いなく見分ける力が与えられている。この世の人々をいとも簡単にだましている偽物を見分ける識別の賜を伴なう啓示の力である。私たちの進むべき道は，はっきりと示されている。すなわち，聖典に記されている通りに，現代の予言者が語る通りに，主の戒めを守ることである。

結びとして，私はこれまで話してきたことが真実であることを証する。

私は神が生きておられることを知っている。私は自分の経験から神のみたまと神の力を知っている。私はサタンが生きていることも知っている。私は悪霊を見破り，悪霊の力を感じたことがある。予言者ジョセフが経験したほど大きなものではないが，似たような経験をした。

キリストの再降臨の時には，「サタンは縛られて，人の子らのこころの中に入るべき所を与えられざらん」（教義と聖約45：55）ことを私は知っている。そして今やそのしるしは現われつつある。

私はまた，救い主の再臨のときに主御自身が予言された事柄が真実起こると証する。「賢くして真理を受け入れ（すなわち福音を受け入れ）聖霊の導きに従い騙されざれし（サタンとその力に）者は，……その（主の来る）日に堪うるべし。

地はゆずりとして彼らに与えられ……

主は彼らの中に在りてその栄光は彼らの上に輝き，主は彼らの王にして立法者たるべし。」（教義と聖約45：57—59）

願わくは，私たちが聖きみたまを導き手とし，サタンとその手下と彼らの業を見分け，決してだまされることなく，やがて約束された祝福にあずかる者となることができるよう，へりくだり，主イエス・キリストのみ名により祈り申し上げる。アーメン。

過去よりの警告の声



十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン

この西半球に興った三大文明のうち二つはすでにその姿を消している。

その滅亡は自ら命を断ったためであるとしか言いようがない。犯罪の横行，性倒錯，その他あらゆる種類の罪を重ね，国と神とを汚したからである。

現在，国々はこの西半球の隅々に至るまでその領土を広げている。しかし，今日私たちの中に見られる堕落の多くは驚くほど各国共通したものがあり，それらが国家を滅亡に向かって駆り立てているのである。

たとえば，南北アメリカ大陸の各国では，犯罪数の激増にただぼう然としている状態であり，合衆国だけでも犯罪の取り締まりに年間400億ドル以上の官費が費やされている。

道徳的退廃もすさまじいものがある。しかも，その多くが正当化されようとしている。つい数週間前にも，多くの会員を擁するある教会の最高幹部のひとりが，若人間の婚前交渉を容認する発言をし，それがAP通信を通じて全世界に伝えられた。

性の倒錯，この恐ろしい社会病はついに流行病に指定されるほどになっている。ある保健衛生関係の係官は，もはや流行病の域を通り過ぎ，疫病が定着しつつあると語っている。この社会病は今や普通の風邪よりも感染率が高い。

西部のある有名な都市の保健担当者の話によれば，14歳から25歳までの青少年は10人に1人が性病にかかっているそうである。全く信じられないような数字である。

日刊誌「インターナショナル・ヘラルド・トリビューン」(*International Herald Tribune*) の最近の報道によると堕胎が容易に実施できるようになったため，人々は不道徳な行為を恥としなくなり，フリーセックスに拍車がかけられているという。

無節操はまさに極限にまで達しようとしている。

性に対する混乱を新しい生き方だとし，姦淫は神聖であるべき結婚や家庭を破壊することを知りつつもこれに対して声をあげようとしない人が何百万人といるというのに，公共の場で祈りを捧げることに対しては違法を強く叫ぶ。

学校でセックスを教え，映画を通して卑しい醜いものを衆目にさらしておきながらクラスに聖書を持ち込む牧師や主の祈りを生徒に暗誦させる教師をとがめている。価値観を失くしているとしか言いようがない。

アメリカ人の中には，国旗への忠誠の言葉の中で全能者という言葉が登場するのに反対を唱える人がいるかと思えば，硬貨に刻まれている「神に忠誠を」という文の削除を求める人々もいる。

ほとんどの宗派では，集会への出席数が激減している。また聖書の販売高は25パーセントも下落し，ある聖職者たちは信仰をなくしているといった有様である。

全能者は私たちに毎週聖なる安息日を守るよう命じられた。私たちは神の面前でこの律法を侮辱しているのではないだろうか。ほとんどの人は主の聖なる日を娯楽の日や通常の仕事の日としている。しかし，安息日は，創造主への忠誠のしるしとして与えられたのである。

「始めは憐れみ，次にそれが忍耐に変わり，そしてついには容認と化す。」全くもって真実である。悪は繰り返し繰り返し，執拗に侵入してくる。

私たちは無神論の大波にのまれ，堕落の底に沈んでいるのだろうか。

かつてこの地で栄え，そして罪のゆえに崩壊した文明と私たちの文明と何ら変わるところがないのだろうか。

これらの文明のもとにあった人々

は，この西半球に住むことについて厳しい教えを与えられていた。

この地は全能者にとって特別の意味がある地であって，神に仕える国民のみがここにとどまることを許されると言われていた。

現代に生きる私たちも，生き残るためにはこの警告に耳を傾けなければならない。

私たちは，別の地へ行けばそれほど罪を非難されることはないとか，多少なりとも減免されるとは考えない。罪は罪であり，人がどのような論理を打ちたてようとも，罪をどこで犯そうとも関係ないのである。

だが，この西半球が置かれている状況は他と異なる。神が愛する御子のみ業をなす地として奉献されたのである。したがって，この地を汚すのをいつまでも放ってはおかれないのである。

神はこの地の神聖な目的として指定するにあたり，次のように宣言された。「……この約束の地が備えられた後いつであってもこの土地を所有する者たちは，ただ一つ真の神に仕えなければ主の烈しい怒りがかれらに下ってかれらは亡ぼし去られる……」(イテル2：8)

要するに，この地を占める国は神に仕えなければ死に定められるということである。

近代アメリカの偉人たちはこぞって同様の警告を発している。

約30年前，当時わが国第一の経済学者のひとりに数えられていたロジャー・ボブソンは次のように語っている。「民主主義の規則を暴徒の規則と化すのを防ぐのは宗教しかない。国家が繁栄するには，国民が宗教を尊び，知恵を生かし，奉仕を行なう能力を持ち，それを実施するしかない。」次の言葉は大いに注目を要する。「私たちがこれまで経験した大恐慌はすべて，国民が宗教の原則を無視したことに起因している。」

アブラハム・リンカーンは当時の人々にこのように語った。「アメリカは外部からの脅威を危惧する必要はない。……もし合衆国が脅威にさらされるとしたら，それは内部から生まれる。自由主義を信奉する我々は，どのような時にあっても困難を排して，切り抜けてゆくか，それとも自殺行為によって死を味わうかのいずれかである」

そしてこの偉大な奴隷解放者は次のように付け加えている。

「われわれは国民の数，富，力において大きく成長してきた。……しかし神を忘れてしまっている。……従ってわれわれは罪を犯してきた神に対してへりくだり，国家の罪悪を告白し，慈悲と赦しを求めて祈らなければならない。」

初代大統領ジョージ・ワシントンはこう述べている。「天が自ら定めた秩序と義の永遠の原則を無視しながら，天よりのほほ笑みを期待することはできない。……」(1789年4月30日，就任演説)

ダニエル・ウェブスター議員の警告には非常に厳しいものがある。「もし私たちおよび私たちの子孫が宗教の教えと権威とをなおざりにし，永遠の正義のおきてに背き，道徳律を軽率に扱い，私たちを保護している憲法を向こう見ずに破棄したりするようなことがあれば，いつ破局が訪れるかわからない状況に陥るであろう。私たちの栄華は一夜にして消え去るであろう。」

神は末日に，暴風雨，地震，津波によって人々に警告することを明らかにしておられる。私たちは今神の声を聞いて，それに気付いているだろうか。

パキスタンで50万もの人々がハリケーンに襲われ，チリで10万もの人人が1回の地震で家屋を失った。この大災害は数週間のうちに起こったのである。私たちはこれらが発している警告に耳を閉ざしていられるだろうか。

ミシシッピーでは，4，5カ月間に起きたふたつのハリケーンで流域の全村落が壊滅し，ロサンゼルスでは数回の地震で死者を出し，5億ドルもの被害を受けた。この中から私たちに向けられている神の警告が聞こえるだろうか。

地震，火災，暴風の損害には保険をかけているからといって，安閑としていられるだろうか。

損害保険でハリケーンや地震を予防できるだろうか。

このような恐るべき力をだれが抑えられるだろうか。

自然を制する神は一体だれだろうか。

風に出合い，おびえた漁師たちを乗せた舟に立って嵐を叱責し，「静まれ，黙れ」とだけ言って，風をやませ，大なぎにした方はだれだろうか。

死滅した過去の文明が歳月のちりの彼方から今私たちに語りかけている。滅亡をもたらした同じ状態に対する警告の声である。

彼らの声に耳を傾けようではないか。

このアメリカ大陸でかつて文明の崩壊を体験した古代の予言者たちは，啓示の目を通して今日の私たちの有様を見た。そこで私たちは異邦人と呼ばれている。その予言者のひとりの言葉に耳を傾けてみよう。「異邦人よ。その時お前たちがもしも悔い改めてその悪い道から立ち帰らないならば，どうしてよく神の力の前に倒れずに居ることができよう。

ごらん，お前たちは神の御手の中にある。神は全権全能を持ちたもう。また神の大きな命令があるならば，大地も巻物のように巻かれるであろう。

それであるから，異邦人よ。悔い改めて神の御前にへりくだれ。へりくだらないならば，神はその正義を以てお前たちを責めたもう。……」（モルモン5：22—24）

死後幾世紀を経たもうひとりの古代アメリカの予言者が，ちりの中からこう語りかけている。

「この土地はすべてほかの地よりも勝っている地であるから，この地を所有する者が神に事（つか）えない時に亡びてしまうことは神がとこしえに定めたもうたところである。それであるから，この地に住む民はその罪悪が頂点に達しなければこのように亡びてしまうことはない。

さて異邦人よ，私は神が定めたもうたことをあなたたちが知るように，またあなたたちに悔改めをさせ，あなたたちが罪の極るまで罪悪をつづけないように，またあなたたちに今までこの土地に住む民が自分の上に神の烈しい怒りを招いたようなことをさせないためにこの歴史をあなたたちに伝える。」（イテル2：10—11）

1500年前にアメリカ大陸に住んでいたモルモンという古代の予言者はこのように述べている。「見よ，私はあなたたちが今目の前にあるかのように話しているが，本当はあなたたちはまだ生れないのである。しかし，イエス・キリストが前以てあなたたちを私に見せたもうたのであなたたちの行いが今私に解るのである。

あなたたちが心の中に誇り高ぶることと，あなたたちの中に非常に華やかな衣を着，ねたみ，争い，怨み，迫害し，あらゆる悪い事を起すほどにおごり高ぶっていない者は僅かしかいないと言うことと，……前以て私に解っている。」（モルモン8：35—36）

この西半球には，イスラエル族の血が流れている人々が大勢いる。これらの人々に対してモルモンはこう述べている。「あなたたちは自分がイスラエルの家に属していることを知れ。

悔い改めなくてはならぬことと，悔い改めなければ救われないこととを知れ。

その先祖のことを知り，自分の罪と悪事とをことごとく悔い改めて，イエス・キリストが神の御子であることを……信じなくてはならない，この事もよく知れ。」（モルモン7：2—3，5）

今日の状態についてこのような警告もある。「これらのことは『みたま』が私に示したもう。よって私はあなたたちすべてにこれを書き伝える。私があなたたちに書き伝えるのは，まことにアダムの家に属する全人類が一人のこらずキリストの法廷に出て，各々その行いの善悪に従って裁判を受けなくてはならないことをあなたたちに知らせるためと，

将来あなたたちが受けるキリストの福音をあなたたちに信じさせるためで……」ある。（モルモン3：20—21）

そして最後に，古代アメリカで最も偉大な予言者に数えられる人の言葉に耳を傾けてみよう。

「私はこれらの事をあなたたちが忘れないようにすすめる。なぜならば，あなたたちが神の法廷で私と逢う時が速に来て，その時主なる神が『この人の書きしわが言葉は，われが墓の中より叫ぶ者，または土の中より声を出して語る者と同じくこれを汝らに宣べ伝えしにあらずや。』とあなたたちに仰せになるので，あなたたちは今私が偽を言っているのではないことが解るからである。

さらに神は私の書いたことが真実であるのを確にあなたたちに証明したもう。

さて，私はさらにあなたたちにすすめる。あなたたちはキリストの御許へ来て一切の善い賜物をつかめ。悪いたまものまたは汚れたものにかかわってはならない。」（モロナイ10：27，29—30）

現代のアメリカ大陸諸国が悔い改め，主に仕えるならば，大いなる祝福がもたらされるに違いない。予言者がそう言っているからである。「……この土地はすぐれた土地であるからこの土地を所有する民はこの地の神に事（つか）えさえすれば，奴隷とならず自由を奪われず天下のどのような国からもすべて支配を受けることがない。この地の神とは……イエス・キリストである。」（イテル2：12）

全能者は，主を無視し拒む私たちをいつまで耐えたもうであろうか。

神はいない。聖書は神話に過ぎない。モルモン経は真実の書物ではない。従って悔い改めることなど必要ないとする人生観を受け入れてよいものであろうか。

私たちは証する。神は真に生きてましまし，神は全人類の永遠の裁き主である。私たちは裁きの日に各々の行ないの記録を目の前に突き付けられるのである。

イエス・キリストは生きておられる。イエスはこの地の神である。私たちを破滅から救い得るのはキリストの福音をおいてほかにない。

願わくは，私たちが今置かれている状況に目覚め，時があるうちに生活を正すことができるよう，へりくだり祈るものである。イエス・キリストのみ名により，アーメン。



神権者の義務

大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する神権者の皆さん，私は，信仰の家に住む仲間であり，神の王国の兄弟であり，聖なる神権を持つ者である皆さんを心から歓迎したい。今晩，私は皆さんと共に，主の神聖な権能を持つが故に私たちに課せられている非常に大切な責任を考えてみたい。

私たちは主の代理人すなわち主を代表する者である。主は，私たち自身と世のすべての人々が救いと昇栄を受けるために必要なあらゆる事柄を行なう権能を私たちに授けられた。

私たちは主イエス・キリストの大使である。そしてその任務は主を代表することである。私たちは主の福音を宣べ伝え，救いの儀式を執行し，人類に祝福をもたらし，病人をいやしさらには奇跡を行なうよう命じられている。つまり，主がこの地上におられたらなしたもうと思われるあらゆることを行なうよう命じられているのである。これはすべて私たちが聖なる神権を持っているためである。

私たちは主の代理人であるが故に，個人の感情や世の誘惑にかかわりなく主が望んでおられることを行なうよう律法によって義務づけられている。私たち自身は，何ら救いのメッセージを持っているわけではない。私たち自身には，人々が受け入れなければならない教義もなければ，バプテスマを施し，聖任し，永遠の結婚を執行する権能もない。これらはすべて主から与えられるものである。従って私たちがこれらのことを行なうのは，権限を委譲されているからである。

教会に加入し，神権を受けるとき，私たちは多くの世のならいを捨て，聖徒としてふさわしい生活を送らなければならない。私たちはもはや世の人々と何ら変らない服装，言動，思いであってはならないのである。世の多くの人は，お茶，コーヒー，タバコ，酒をたしなむ。幻覚剤におぼれている人さえいる。また神を冒瀆し，低俗なものにふけり，不道徳で不浄な生活を送っている。しかし私たちはこれらと全く無縁である。私たちはいと高き神の聖徒，聖なる神権者である。

主はモーセを通して，古代イスラエルの民に言われた。「それで，もしあなたがたが，まことにわたしの声に聞き従い，わたしの契約を守るならば，あなたがたはすべての民にまさって，わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所有だからである。あなたがたはわたしに対して祭司の国となり，また聖なる民となるであろう。」（出エジプト19：5—6）

これは私たちにも約束されていることである。もし徳と高潔の道を歩み続けるならば，主は私たちに想像を絶する大きな祝福を与えて下さる。そして，ペテロが述べたまさしく「選ばれた種族，王国の神権者，聖なる国民，神につける民」（欽定訳Iペテロ2：9）となるのである。そして私たちは，これらの標準を守らない人々とは異なるようになり，特異な民と呼ばれるようになるのである。

すでに世の誘惑に打ち勝ち，特異な清い民になっている人もいる。反面，私たちの周囲には神の王国の諸事を第一に考えず，教会の標準と異なる生活をしている不幸な人々もいる。

私は，教会と全教会員に対して，世の諸悪を捨て去るよう強く求める。私たちは伝染病に対処すると同じように，純潔でないもの，あらゆる形の不道徳から遠ざからなければならない。出産を制限することにより，生命の泉をせき止めてはならない。不義で邪悪な行為である堕胎の罪を犯してはならない。

礼儀をわきまえず，律法を無視した生活に終始している教会員は教会員としての資格がない。律法に違背しながら主と共に歩むことはできないのである。主はこのように命じておられる。「……今ある権力に服従し，統治すべき権能を持ちてすべての敵を脚下に踏みつくる者の統治する時の至るを待つべし。」（教義と聖約58：22）その主が降臨されるのはこの時代である。

主のしもべである私たちの目的とするところは，主が示された道を歩むことである。私たちは単に主に喜ばれることを行ない，語るにとどまらず，生活そのものを主に近づけることを望みとしている。

主はあらゆることについて完全な模範を示し，私たちにこう言われた。「わたしに従いなさい。」主はニーファイ人の弟子たちに「汝らはいかなる人物にてあるべきか」と尋ね，自ら答えておられる。「まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」（IIIニーファイ27：27）

さて，私たちはこの世で最も偉大な業に携わっている。私たちが持つこの神権は，主御自身の権能であり，権威である。そして主は，もし私たちが召しを全力を尽くして遂行し，主が光の中におられるように光の中を歩むならば，御父の王国においてとこしえに栄光と誉れを主と共に受けると約束しておられる。

このような栄えある望みを持っている私たちは，どうして世の邪悪な道を捨て切れないことがあろうか。神の王国につける事柄を第一に考えて生活できないことがあるだろうか。「神の口から出る一つ一つの言で生き」られないことがあるだろうか。召しを全力を尽くして遂行し，実際に祭司の王国となり，義の兄弟となろうではないか。

戒めを守るときに私たちが受ける祝福は，我々の理解をはるかに越える素晴らしいものである。私は福音と教会すなわち地上における神の王国に感謝している。また主より与えられた永遠の生命への希望に感謝している。

私はこのみ業が真実なものであることを証する。願わくは，私たちが一人残らず，交わした聖約に忠実であって，この世にあっては平安と喜びを得，来るべき世にあっては永遠の喜びと栄光を受けることができるよう祈るものである。私はこれらのことをへりくだり，主イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



「必要なるものをことごとく調(ととの)えよ」

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター

商品の展示方法や包装で顧客の購買意欲は大きく左右される，と商売をしている人々は言う。容器の色，包装方法，包みの形で売れるかどうかが決まるという。視覚に訴えるイメージから商品が売れたり，売れなかったりする。たとえば，アイスクリームはお皿にのせたらそれでよさそうなものだが，まわりを生クリームで飾って，アイスクリームの上からチョコレートをかけ，刻んだナッツをふりかけて，一番上にチェリーをのせる。ひとつひとつが加わるたびに，人々は目を見開き，舌なめずりをする。レッスンを教える際にもこの原理を応用できる。すぐれた視覚教材，教授資料は生徒の関心を増し，学習過程で貴重な働きをする。

教会は付属図書館には，教会で教師たちが使う資料が収められている。これらを使って教師はレッスンを興味あるものにし，概念を教え，要点を明確にし，福音を教える方法に趣向をこらすのである。つまり教会付属図書館は，チョコレートとナッツをかけ，チェリーをのせる役割を果たす。教え方が非常に優れている人であっても，教材を使えばさらに良くなる。抽象的な概念の理解は難しいものだが，原則を視覚に訴える方法で説明すると，生徒はいとも簡単に理解する。

旧世界におけるパウロの旅のレッスンは楽しいものである。しかし，キプロス，ガラテヤ，マケドニヤ，エペソ，テサロニケなどの地名が登場しても，心の中の地図では位置がはっきりしないことがある。一方，大きな地図をひろげて教える教師と，熱心なまなざしで聞く生徒の姿を想像していただきたい。話の進行にあわせて，パウロが旅行した地にピンが置かれる。そして旅行ごとに色を変えた毛糸で行程を示す。最後はローマへの旅である。こうしてレッスンに熱が帯びてきた。「百聞は一見にしかず。」広告業者や商人はこのことわざをよく知っているが，実は生徒を気遣う教師こそが知るべきことわざなのである。

主は，福音を教える責任が神権者の上に置かれていることをはっきりと述べておられる。教会が組織されて1年に満たない時に，主はカートランドにおいて予言者ジョセフ・スミスを通じて啓示を下されたが，その中で教えることについて次のように述べておられる。

「また当教会の長老，祭司および教師たちは，聖書と完全なる福音を載せたるモルモン経とに誌されたるわが福音の原則を教うべし。

また彼らは誓約と教会の信条とを守りてこれを実行すべし。而して彼らは『みたま』に導かるるまま以上のことを以て教えとなすべし。」（教義と聖約42：12—13）

そして教義と聖約の第88章を開くと，次のような主の言葉がある。

「そは，必ずしもすべての人信仰なきが故に，汝ら努めて求め，互いに智恵ある言葉を教うべし。然り，汝ら最も善き書より智恵ある言葉を探し求めよ。また正に研究と信仰とによりて学問を求むべし。」（教義と聖約88：118）

主は互いに教え合い，最も善き書(ふみ)より知恵を求め，学問を求めよとの命令を下されてから，さらに指示を与え，これらの責任を遂行するためのプログラムを確立するよう，極めて短い言葉で述べておられる。これが主の言われた方法である。「汝ら組織して必要なる物をことごとく調えよ。……」（教義と聖約88：119）

互いに教え合い，知恵を求め，研究と信仰によって学問を求めるには，私たちはすべての必要なものを準備し，調えなければならない。以上の主の言葉を土台にして教会付属図書

館の概念が生まれたのである。すなわち，より効果的に教えることができるよう「必要なる物をことごとく調え」るために。
多くの聖句から，幾つかの点が明確になってくる。すなわち，

1．すべての神権者は言葉と模範によって福音を教える責任がある。つまり，福音に従って生活する模範と，言葉と学習経験と教材によって教えるべきであるということである。

2．すべての神権者は，研究と祈りと信仰により，効果的に教えることができるように備えをする必要がある。

3．すべての神権者は自らの生活にみたまの導きを求め，また教えるときに霊感を求めなければならない。

4．すべての神権者は神の王国において聖なる管理の職を有している。この管理の職の対象には，私たちの時間，才能，財産，神権の召しが含まれる。

このように，私たちは教える責任を通して，人を救いに導く神の計画に参画する機会が与えられるのである。私たちは奉仕するときに成長し，管理の職を充分に果たすことができるようになるのである。そして教会付属図書館プログラムは，私たちが一層効果的に教えることができるように援助を提供している。

1968年に大管長会の指示に基づき教会付属図書館委員会が組織され，全教会付属図書館に適用する方法と手続きの調整を図る責任が与えられた。この委員会は教会付属図書館プログラムの実施を監督する。このプログラムの詳細は昨年の前半に各地に伝えられたはずである。またプログラムの確立と運営に関する印刷物も出版されている。「教会付属図書館手引き」と「教会付属図書館技術便覧」がそれである。

プログラムの特徴，指示事項，管理系統について，ここで少し触れておきたい。

1. 大管長会は，各教会集会所にひとつの教会付属図書館を設置するという方針を決定した。建物を使用しているワード部や支部の数に関係なく，設置はひとつに限定する。この施設の設計図および仕様書は教会建築部から入手することができる。なお教会付属図書館の設計図は6種類ある。

2. ステーキ部段階でのプログラムは，ステーキ部長がステーキ部図書主任を通じて監督する。

3. 教会付属図書館は教会付属図書館図書主任が監督するが，複数のワード部もしくは支部で使用する場合は図書係を任命することができる。個別に組織を担当する図書委員を図書館員の一員として召してもよい。

4. 教会付属図書館には，レッスンを教える上で必要なすべての器材と教材を収める。器材としては，映画，スライド，オーバーヘッドの各プロジェクター，テープレコーダー，レコードプレーヤー，スクリーン，ドライマウントプレス，その他が含まれる。教材には，書籍，雑誌，手引き，楽譜，印刷物，絵，図表，地図，スライド，フィルムストリップ，オーバーヘッド・トランスペアレンシー，映画フィルム，その他教師が使用する資料が含まれる。

教会付属図書館プログラムは，今や福音の原則を一層効果的に教えるための援助を提供する教会の常設プログラムとなっている。数々の教材を収めるこの図書館プログラムを実施することにより，レッスンの質が大幅に向上すると思われる。昨日開かれた十二使徒会地区代表セミナーにおいて発表された報告によれば，現在全集会所の72パーセントが図書館を設置している。実施の遅れている地域は，可能な限り歩みを早めるよう強くお願いしたい。

次にレッスンを教える上で図書館が重要な位置を占めていることについて少し触れてみたい。私が今手にしているのは，印刷があがったばかりの小冊子である。皆さんは近寄って内容を見ることができないので，少々説明させていただきたい。これは「教材カタログ」（*Instructional Materials Catalog*）と呼ばれる冊子である。ここには，神権および補助組織のクラスで現在取り上げている主題に関係するすべての絵が写真入りで載っている。また来年度のテキスト類もある。1972―73年度のレッスン用教材セットはこのカタログにないが，教会付属図書館を通じて注文し，各クラスで利用できるようにしていただきたい。

このカタログを見ると，絵に番号がついている。これは注文番号である。この番号を使って地元の教会ディストリビューション・センターに注文していただきたい。レッスンのテキストで使用する教材を指示する際は，この番号が記されている。なお，このカタログは図書館と教師全員が入手できるようになるはずである。テキストを執筆する人々にもこのカタログが配布され，レッスンで使用する教材の指定を，統一した方法で行なうようにする予定である。

「教材カタログ」はルーズリーフ形式になっていて，追加分を挿入できるようにしてある。このほかにもオーバーヘッド・トランスペアレンシー，映画，フィルムストリップ，スライド，テープ等が追加される予定である。

これは画期的なプログラムである。教師がさらに効果的に教えるための貴重な援助を提供するに違いない。整理を徹底し，必要な教材を収め，図書館員を完全に組織した図書館を設置するならば，ワード部や支部の

教授技術は大幅な改善を見ることであろう。全神権および補助組織の教師を援助するにあたり，私たちはその統一化を図っている。それには，主が啓示の中で言われたように，教会付属図書館に「必要なるものをことごとく調え」ることが不可欠なのである。すべての神権者はこの教会付属図書館を活用していただきたい。同じく教会で教師の責任を持つ姉妹たちも含むあなた方がさらに効果的にレッスンを教えることができるよう，教材と器材を用意することがこの図書館の目的である。

教会付属図書館プログラムは神よりの霊感に基づいて設けられたものである。教会におけるレッスンがもっと効果的なものとなるよう天父は導きをお与えになった。これによって，全教会員が福音のメッセージを生活に結びついた力あるものとし，さらに活発になることは目に見えている。私は以上のことを証し，「必要なるものをことごとく調え」ることができるよう，イエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。

迷える人々を捜す



大管長会第二副管長

N・エルドン・タナー

私は神権を持つ兄弟たちと共に集会を持つ特権が与えられていることをいつも幸せに思っている。前にも申し上げたが，私はこれまで様々な国で重い地位にある人々，要職にある人々，指導者，行政関係者など多くの人々に会ってきた。しかし私は神権者と会う時には，ほかのどのような人々と会う時にも感じることのできない特別な気持を感じる。

私はこの場で語られた素晴らしい話に耳を傾け，御出席の皆さんを拝見し，リー副管長の弁によれば今晩のひとときを共にしている兄弟たちは17万人にものぼるらしいが彼ら一人一人のことを考え，神権を持つ兄弟のもつ友情と兄弟愛を強く感じている。こうした中で，私はまた，この場に出席しない人々，私たちと同じ群れにいない人々のことを思いめぐらしていた。彼らは自分は必要でなく，理解されることもなく，愛されていないと思っているのである。

すべてのワード部には，本人はそれを否定するかも知れないが，兄弟愛に飢え，教会に活発に参加したいと望んでいる兄弟たちがいる。年齢は12歳から70歳までに及ぶ。

指導者だけでなく私たちすべても，あらゆる人が幸福を求めているということを心にとどめ，決して忘れないようにしようではないか。だれもが幸福になることを望んでいる。これは私たちにとって大きな特権であると同時に責任でもあるが，私たちはすべての人に幸福と成功に至る道を示さなければならない。ほんのささいなこと，わずかな誤解が不活発の原因となることがある。自分が顧みられない。感情を傷つけられた，あるいは罪を犯してやましさを感じているなどの理由で，自分はすべてから見離され，居るべき場所がないとか，何の価値もない必要のない人間だとか思い込んでいる人々がいる。彼らはそうした結果，不活発になっている。自分たちは道を踏みはずし，赦されるはずがないと感じている。私たち指導者は，私たちが彼らを愛していることを感じさせ，主が彼らを愛しておられること，心から悔い改めるならば主は赦したもうことを理解させなければならない。

合衆国に「迷える息子は今宵いずこに」という古い歌があるが，私はこの歌詞を「わたしの息子は今宵なぜ迷う」に変えた方が，私たちにとってもっと深い意味を持つことになるのではないかと思う。

もし，〔ウエンデル・J・〕アシュトン兄弟の２人の息子さんが父親の教えに従い，今宵ブラウン監督の話を聞いた人，この総大会で説教を聞いたすべての人々が，その教えに従うならば，決して迷える息子にはならないであろう。

しかし前にも申し上げたように，周囲の扱いや無視，あるいは自分が必要とされていないと感じること，これらの理由で少年たちは迷うことがある。

主は迷える羊のたとえ話をされた。私はこのたとえ話が重要だと思うので，ここで読んでみたい。

「さて，取税人や罪人たちが皆，イエスの話を聞こうとして近寄ってきた。

するとパリサイ人や律法学者たちがつぶやいて，『この人は罪人たちを迎えて一緒に食事をしている』と言った。

そこでイエスは彼らに，この譬をお話しになった，

『あなたがたのうちに，百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなったら，九十九匹を野原に残しておいて，いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。

そして見つけたら，喜んでそれを

自分の肩に乗せ，
家に帰ってきて友人や隣り人を呼び集め，「わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから」と言うであろう。
よく聞きなさい。それと同じように，罪人がひとりでも悔い改めるなら，悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが，天にあるであろう』。」（ルカ15：1－7）

あらゆる監督，ステーキ部長，組織の指導者は，注意を向ける必要のある人を知っているはずである。私たちは行ってその迷える羊を見つけ出す責任がある。私たちはもし今迷っている青年を知っているとすれば，おぼれかけている人に気付いたとしたら，一刻の猶予も置かずに，迷える人，おぼれかけている人，助けを必要としている人の救出に全力を尽くすことだろう。教会に不活発な人，活動に参加しないなどの原因から教会を離れている人は，若い人も年配の人も変わりなく私たちの関心と助けを必要としている。

ひとりを救うことによって家族全員を救うことにもなるのである。さらには次代の人々を救うことにもなる。ひとりを失うことも，その個人だけにとどまらず家族や子孫をも失うことになるのである。従って責任は大きい。ある人は出席率が40パーセントから70パーセントもあれば上上だと考えている。もし40パーセントの出席者がいれば，欠席者は60パーセントいるわけである。もし70パーセントの出席者であれば欠席者はまだ全体の30パーセントいるわけで，このような人にこそ私たちの関心を向ける必要がある。

私はあるステーキ部大会に出席したとき，ある監督の話を聞いて非常に心を動かされた。その監督は涙を流しながら次のように話すのがやっとだった。

「私は今晩ここで私のホームティーチャーに感謝の気持を申し上げたいと思います。私は不活発な成人アロン神権者でした。そんな私を励ましてくれたのがホームティーチャーでした。初めのうちは，ホームティーチャーに会うのも嫌で，断わり続けていました。それにもかかわらず，ホームティーチャーは何度も私の家に足を運んでは，私を導いて下さいました。そして，今私は監督という召しを受けています。私はこのホームティーチャーに心から感謝したいと思います。」私は，迷う人々を救うために全力を尽くすこのような立派な人々を与えたもうた主に心から感謝申し上げる。

私はこの体験を前にもお話ししたことがあると思う。ステーキ部長を務めていた時に，私は一人の青年に会った。彼は非常に有能な青年で，農業の専門教育を受けていた。私たちはその時福祉委員会の農業顧問を必要としていたのである。彼は教会に活発でなく，知恵の言葉を守っていないことも私は知っていた。ある日，私はそれを承知で彼を昼食に誘った。テーブルに着くと私は用件を切り出した。「あなたはこの仕事に最も適した人です。私たちはあなたを必要としているし，あなたにも何か仕事が必要だと思います。」

しばらく話した後，青年はこのように言った。「タナー部長，あなたは私が知恵の言葉を守っていないのを御存じでしょう。」

「ええ，けれどもあなたにそれが守れないことはないでしょう。」恐らくこれは彼にとって意外な答えであったのだろう。

青年は言った。「ステーキ部長，あなたは変わったことをおっしゃいますね。先月，監督が私の所へ来て，ワード部の仕事をするつもりがあるかどうかを聞かれました。私は自分が知恵の言葉を守っていないことを言いますと，監督はこう言われたのです。『それではだれかほかの人にあたってみましょう』」

こうして私はその青年としばらく話を続けた。「兄弟，よく聞いて下さい。あなたは教会で活動することが必要なのです。それだけでなく，私たちは本当にあなたが必要なのです。」

青年はこう言った。「私がその仕事を引き受けたら，コーヒー1杯も飲めなくなるんですか。」

「そうです。おっしゃる通りです。指導者は指導者らしく振る舞わなくてはなりません。つまり模範にならなくてはならないのです。もしあなたがステーキ部の委員になったら，福音に従って，人間本来の生き方をする必要があります。」

「それは少し考えてみる必要がありそうだ。」

私は言った。「そうだね。よく考えて下さい。でも，いいですか。あなたは教会で活動する必要があるんです。そして私たちもあなたを必要としているのです。」

「わかっています。後で御返事します」と青年は答えた。

翌日彼は電話をかけてこなかった。その翌日，またその翌日も電話はなかった。6日目，その日もやはり何の連絡もなかった。彼は知恵の言葉を守れないことを認めたくないのではないのだろうか，と私は思った。

8日目に連絡がきた。彼はこう言った。「タナー部長，あなたは今でも私があの仕事をするよう望んでおられますか。」

「もちろんですとも。先日お話したのはそのためなんですから。」

「それではお引き受けしたいと思います。ステーキ部長がおっしゃった条件も守ります」と青年は言った。

青年はその言葉通り実行した。彼は30を過ぎていたが，まだ独身であった。彼は教会に活発になった。そんな時，ステーキ部YWMIAの会長をしている素晴らしい女性がいた。二人は親しくなり，愛し合い，そして結婚した。

それから彼は監督になり，高等評議員となり，ステーキ部長会の一員となった。この青年が活発になり，彼の家族が活発であることを知った時，私が心に大きな満足を感じたことを皆さんはおわかりいただけると思う。二人には何人かの子供がいるが，全員活発である。

兄弟の皆さん，私たちはどこにいようと何の職にあろうと，周囲には不活発な若人や年配者が必ずいることを認識すべきである。私たちが彼らに関心を寄せ，彼らが活発になりたいと思っていることを本人に気付かせることができるならば，彼らはそれを望むようになるのである。

私は今晩，皆さんに次のようなチャレンジを与えたい。監督は来月までに不活発な青年を活発にするために積極的に行動を起こしていただきたい。副監督も同様である。ワード部，ステーキ部で責任を持っている方々も同様の努力をしていただきたい。兄弟たち，人を救うこと以上に大切なことはこの世にないのである。私たちには数々のプログラムがあり，教師は教え方を知らされている。教材もある。とにかく出席した人々のためにはありとあらゆるものがそろっている。そこで私が心配していることがある。私たちは出席率が50パーセントか60パーセントあれば満足すべき状態だと言って，常時出席していない人々のことを忘れたり，無視したりはしていないだろうか。

私はパーセンテージや統計上の数字にこだわるつもりは全くない。私が本当に関心を抱いているのは，私たちの群れにいない青少年のことである。兄弟の皆さん，私は今晩，神権を持っているすべての方々，特に教会で責任を受けている方々に次のことを強調したい。主が言われたように，迷える羊を見いだして連れ戻すよう努力していただきたい。そうして皆さんが天父のみ前へ行く時に，連れ戻したその人と共に喜びを味わっていただきたい。

若い方々に申し上げる。福音から離れることに楽しいことなどひとつもない。皆さんが常に神権を尊び，それができない友達を助けて彼らも神権を尊ぶことができるようにしていただきたい。そうすれば皆さんは迷うことがなく，彼らも幸福になるのである。

私たちは神の神権を持っている。この教会は神の教会であり神の王国である。神は私たちに，隣人を救うために教え助ける責任を与えられた。願わくは，私たちが主のみこころにかなう方法でその責任を果たし，それによって喜びを得，永遠の生命を得る備えをなすことができるように，イエス・キリストのみ名によりへりくだって祈る。アーメン。



現代の若人

大管長会第一副管長・十二使徒評議員会会長

ハロルド・B・リー

タナー副管長ありがとうございました。私は今日，マービン・J・アシュトン兄弟が語った素晴らしい話を心に留め，忘れることのないよう皆様にお願いしたい。アシュトン長老は，息子，娘，夫または妻への義務を放棄した家庭は失敗であると語った。その仕事がいかに困難であろうとも，私たちは決して放棄してはならないのである。

アブラハム・リンカーン時代の偉大な教育家であったホレス・マンは，ある立派な男子校の開校式において次のように語った。「この校舎は数十万ドルの巨費をかけて建設されている。しかし，この学校がたったひとりであっても生徒を救うことができるならば，これだけの費用をかけても少しも惜しくはない。」式が終って，ひとりの親しい友人が彼のもとへ来て，こう言った。「君はついつい調子に乗ってあんなことを言ってしまったんだろう。数十万ドルもかけたこの学校がたったひとりの少年でも救うことができれば，もうそれで十分な役目を果たすなんて，本当はそういうつもりで言ったんじゃないんだろう。」

するとホレス・マンは友人を見て，「その通りだよ。その少年が私の息子だったら，それだけの価値があるね。」

私は，その少年が私の息子あるいは孫であっても，それだけの価値が十分にあることを皆さんに知っていただきたい。それが皆さんの息子であっても，全く同じことである。

本日，この壇上から語られた説教を伺っていると，現代の若人が直面している恐るべき状況に多大の関心が寄せられていることを感じる。また，成人指導者は青少年指導者を教え導き，青少年指導者は責任をすべて抱え込むのではなく同じ青少年と一緒に果たすべきこと，さらには，成人指導者は青少年指導者の責任に介入せず彼らに正しい原則を教えるべきことが強調された。

数年前リーダーズ・ダイジェストに掲載された故〔ドワイト・D・〕アイゼンハワー大統領の話が思い起こされる。氏はこう述べている。「残念なことに，現代の多くの若人は，合衆国の少数の若人の過激な行動に心をかき乱されている。彼らは，大多数の国民の良識というものに目を背けている。これはあなたがた若人にとって権利の侵害であり，合衆国全体にとっても大きな損失と言える。

モンタナ州で青少年の非行防止に多大の働きをなしているレスター・H・ロブル判事の話によれば，現代の若人の97パーセントは過去の時代にひけを取らない善良な若人であるが，残る3パーセントの不良青年は過去の時代よりも深刻であるという。私はさらに一歩進んで言えば，現代の若人は私の世代よりも多くの点で優れていると思う。確かにあなたがた若人は私たちがあなたがたの年齢だった頃よりも，優れた教育を受け，世界の情報をたくさん与えられ，また人生に対して幅広い見方ができる。私は毎年学生の集会や政治集会において数多くの若人と話す機会があるが，ほとんどの人が立派な目的を心に抱き，善悪に対して正しい態度を具(そな)えている。」(「アメリカの若人について思う」 *Reader's Digest*：1966年4月，pp. 88—92)

私はこの記事を読んだとき，アメリカボーイスカウト連盟教育部長を務めておられたフィッシャー博士の言葉を思い出した。フィッシャー博士はこのテンプルスクェアにあるアッセンブリーホールで次のような興味深い言葉を残しておられる。「現代の青少年は，二世代前の青少年の2倍の善良さが要求される。そうでないと善良とは言えないのである。」こ

の言葉をよく吟味してみると，なぜ彼がこのように語ったかを理解できると思う。

終わりにあたって，教師や指導者の養成，資料の整備では達成できない事柄について読んでみたい。これは主がその大いなる啓示を通して語られたことである。

「見よ，われら汝らにすべての事を悉く命ずるは至当ならず。そは，すべての事已むを得ざれば為さざる者は怠惰なり，賢き僕にあらざればなり。これを以て彼は良き報いを受くることなし。

われ誠に汝らに告ぐ，人は努めて善き業に従い，多くの事をその自由意志によりて為し，多くの正しき事を為し遂げよ。

そは人自らの中に自由の意志ありて己れの事を自ら為す者なればなり。従って人善を為さば決してその報いを失わざらん。

されど命令を受くるまでは何事をもなすことなく，疑いの心を以て命令を受けこれを不精不精に守る者は救われず。

われ命を下すに人これに従わずば，われ我約束を取消し祝福を与えず。

その時，人々心の中に言わん。こは主の御業にあらず，主の約束果されざればなりと。されどかくの如き人は禍なるかな。その報いは地の下に潜み，天よりの報いあらざればなり。」（教義と聖約58：26―29，32―33）

神権を持つ兄弟たち，あなたがたは友人の間で，家庭の中で，また自分の生活の中で，自由意志を用いて最大限の努力をし，多くの善をもたらさなければならない。私たちの仕事は周囲にいる人々を見守ることである。ひとりを見つけて正しい道に連れ戻したら，次にほかの人を見つける。こうすれば必ずや輝かしい未来を迎えることができるであろう。

願わくは，私たちがそう努めるとき，主が助けたもうよう，へりくだり主イエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。



「主が家を建てられるのでなければ‥」

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

愛する兄弟姉妹，私はへりくだり聖きみたまの導きが与えられるよう願い求めている。

この4月は，自然の息吹がよみがえる，1年のうちでも最も輝かしい時期である。4月は約束の季節であり，美の季節であり，人が恋を語る季節でもある。

今朝，私は立派な青年と美しい娘が手をつないでこの建物に向かって来る姿を見かけた。女性の指にはダイヤの指輪が光っており，二人はやがて結婚するのであろうと私の目に映った。この4月から6月にかけては，そうした若いカップルが何万と結婚することであろう。

私はその時，数年前に結婚式の司式を頼んできたカップルのことを思い出した。その二人をかりにティムとスーと呼ぶことにする。二人は素晴らしい将来を約束された若者たちだった。共に立派な家庭に育ち，教育も申し分なかった。互いに深く愛していると言った。そして二人の結婚式は今でも忘れることのできない素晴らしいものだった。神の神権の権能により永遠の祝福が宣言された。

それから何年かが過ぎ，二人の家庭には3人の子供が生まれていた。表面的には依然として幸せそうな家庭だった。ところが，最近になってティムとスーが私に会いにやってきた。今度は一人ずつ，しかも顔には，ほほ笑みもなく，涙さえ浮かんでいた。離婚の相談に来たのである。かつての愛の言葉は非難の言葉に変わっていた。信じ難いことだった。春のうららかな日に，突然嵐が襲ってのどかな空気を消散させてしまうようなものだった。

「子供たちはどうしているのですか」と私は尋ねた。スーは子供たちに両親の口論をいつも聞かせるよりも，むしろ離婚した方が良いと思うと答えた。彼女の話によれば，子供たちはそうした口論の愚かさがわかる年齢であり，とても感じやすい年頃なので心に深い傷を残すことになるのではないかとのことだった。

ティムとスーの間に一体何が起こったというのだろう。また同じような何万という夫婦に起こっている問題とは一体何だろうか。この国では3組か4組の夫婦につき1組が離婚しているが，それはどういう理由があるのだろうか。

合衆国では毎年約40万組の夫婦が離婚している。彼らの子供は50万人を越える。現在，この国の600万を越える大人が離婚もしくは別居中である。

離婚が不可能ではないが，かなり難しい国々においてさえ，同じ病弊が見られる。すなわち，家庭内の不和，別居，放棄，不道徳かつ不法な関係から生じるののしりや退廃という罪悪である。

急増する少年犯罪の悲しむべき原因のひとつもここにある。犯罪に走った何百万という子供たちは，親に愛がなく，そのために放っておかれる家庭の子供である。莫大な額の公共福祉費が食いつくされている原因もここにある。これは創世の始めより神が定められた家庭のあり方を否定するものであり，ここから悲嘆と失敗が生じるのである。

この問題をこれ以上長々と論じることは避けよう。すべてはあまりにも明らかである。ただ，このような悲劇を避ける方法について少し述べておきたい。

結婚への夢と家庭を築くことに胸をふくらませている方々へ，私はいにしえから言われている言葉を繰返したい。「主が家を建てられるのでなければ，建てる者の勤労はむなしい……」（詩篇127：1）

その家を築き上げるための4つの礎石について申し上げたいと思う。

まだほかにもあるが，私は特に4つを選んでみた。この4つの礎石はイエス・キリストの福音に基づいており，容易に理解できるし，これに従うことも困難ではない。ほんの少し努力すれば手の届くところにある。もしあなた方が夢に描いている家庭をこの礎石の上に建てるなら，私は次のことをあなた方に約束する。すなわち，結婚生活を危うくするような事態はなくなり，お互いの愛情は歳月を経ると共に深まり，あなたの子供たちと孫たちの生活にも恵みをもたらすことであろう。このようにして，この世においては幸福を，来るべき世にあっては喜びを得ることであろう。

第一の礎石となるものは，互いに敬うことである。敬うとは，伴侶をこの世で最も大切な友と考えることであり，自分のわがままや気まぐれに合わせて無理強いできる所有物や財産などと考えないことである。

パール・バックは次のように述べている。「愛は強いることができない。……愛は，求めず探さずとも天からもたらされるものである。」（「宝の小箱」*The Treasure Chest*, p. 165）

この尊敬の気持ちはどこから生まれるのだろうか。それは，お互いが神の息子，娘であって，神の属性のいくばくかを付与されており，それぞれの才能を伸ばし表現する権利を有しており，寛容と忍耐，理解と礼儀，思いやりを受けるに足る者であるという認識である。真実の愛に必要なのは単なるロマンスではなく，伴侶の幸福を心から気づかう気持である。

結婚生活におけるお互いへの意識というものは，それに慣れてくると次第に薄れてくる傾向がある。この意識を高尚にしかも霊感あふれる水準に保つ方法が幾つかある。しかし，夫が時々，自分の傍らに立つ協力者が神の娘であって，神と共に永遠の目的を遂行するため偉大な創造の業に携わっているという事実をよく考えてみること以上に良い方法を私は知らない。また，妻が夫への愛情を常に新鮮なものとするには，天父のすべての息子が受け継いでいる神聖な資質に目をとめ，それらが尊敬と称賛，励ましによって呼び起こされることを重んじ，望むことが大切である。これらの目的に向かうひとつひとつの行動が，互いに絶えず理解し合う気持をはぐくむのに役立つのである。

第2の礎石は極めて簡単なことであるが，根底をなすものであると考えている。適切な言葉がないため，「柔らかい答え」と呼んでおこう。

「柔らかい答えは憤りをとどめる」と昔から言われている（詩篇15：1参照）

穏やかに話していて，問題が起こるということはめったにない。声を荒立てたときにのみ，火花が飛び，小さなもぐらの塚が大きな山となるほどの論争にふくれあがるのである。私はいつも予言者エライジャがバアルの祭司たちと争った時の描写に何か大切な意味を感じる。聖典には次のように記されている。「……大きな強い風が吹き，山を裂き，岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかった。……

地震の後に火があったが，火の中にも主はおられなかった。火の後に静かな細い声が聞えた。」（列王上19：11—12）

天の声は静かな細い声である。同様に家庭内の平和の声も静かな声である。

結婚生活においては，伴侶にでなく自分に対して多大の修練が必要である。

現在父親である人にとって，また将来父親になる人にとって，デビッド・O・マッケイ大管長の勧告ほど意味深長な言葉はないと思う。マッケイ大管長はこう述べている。「父親がその子供になし得る最も偉大なことは，子供の母親を愛していることを子供に感じさせることである。」

夫婦がお互いに穏やかに話し，子供にもそうするならば，家庭内の平和はどれほど増し，子供たちの生活の安全はどれほど保証されることだろうか。また，これにより離婚や別居といった悲劇がどれほど減り，どれほど大きな愛と喜びがもたらされるだろうか。

パウロは言っている。「父たる者よ。子供をおこらせないで……彼らを育てなさい。」（エペソ6：4）

私はもう一度繰り返す。家庭の平和をもたらす声は穏やかな声である。

堅固で幸福な家庭を築く第3の礎石に移ろう。私はそれを神と人とに対する正直さと呼ぶことにする。

弁護士，カウンセラー，教会指導者として多年の経験を持つある人が語ってくれたところによれば，夫婦間のひずみは金銭問題がからんでいる場合が最も多く，またこれが起因すると悲惨な結果を招くとのことである。

先程話した若い友人は，妻がぜいたくで浪費家であると言って非難し，一方妻は夫がけちで稼ぎが少ないと夫を責めた。ささいな金銭上の口論が愛の破局を招いたのだった。

家庭を築く人とその家族にとって，予言者マラキを通して古代イスラエル人に与えられた戒めを守ることほど，実り多い祝福と訓練はほかにないことを私は確信している。「……十分の一全部を私の倉に携えてきなさい。これをもって私を試み，わたしが天の窓を開いて，あふるる恵みを，あなたがたに注ぐか否かを見なさいと，万軍の主は言われる。」（マラキ3：10）

結婚には普通多くの義務が伴なう。そこで，若い友人の皆さんに申し上げたい。神に対して正直に生活することで十分の一と献金を納めることをその第一の義務としなさい。皆さんは神の祝福を必要としていることと思う。いや，絶対に必要である。神は約束したことを必ず果たされると，私は厳かにあなた方に証する。それらの祝福の中には，家庭の平安と心に生じる愛が含まれる。

まず天父への義務を果たすことを第一にして財産を使うよう自らを訓練するならば，家庭内のごたごたの原因となる利己心は，あなたの生活から消え去るであろう。なぜならば，目に見ることのできない主と分かち合うなら，見ることのできる人々に対してはもっと親切に，正直に，寛大に振る舞うことができるはずだからである。神に対して正直に暮らすとき，私たちは互いに正直に生活するようになるに違いない。

さて最後に，第4の礎石として私は家族の祈りをあげたい。一日の始めと終りに共にひざまずくことほど，生活に素晴らしい影響を与える習慣を私は考えることができない。主の前にひざまずき，相手を前にしてお互いに相手がいることを主に感謝し，そして生活の上に，家庭の上に，愛する人々の上に，また希望がかなえられるように主の祝福を願い求めるとき，どういうわけか，結婚生活を襲う小さな嵐は消え去ってしまうのである。

この家族の祈りによって神はあなたの良き友となり，神との毎日の会話はあなたの心に平安をもたらし，ほかからでは決して得ることのできない喜びを味わうことであろう。伴侶との結び付きは歳月を経ると共に強くなり，愛が強まり，相互理解はさらに深められるであろう。

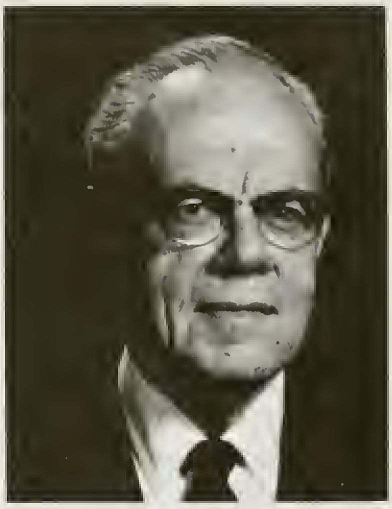
子供たちは主のみたまが宿る家庭に平安を感じるであろう。あなたは教会で勧めているように，子供たちを集め，愛をもって教えるのである。子供たちは両親がお互いを尊敬し合っていることを知り，彼らの心に尊敬の念が芽生える。そして穏やかに語る親切な言葉のうちに平安を感じ，彼らの生活に起こる嵐も静まる。両親が神とお互いに対して，さらには隣人に対しても正直な生活を送っていることを知る。また子供たちは両親が祈りの中で，大きな祝福にも小さな祝福にも感謝を述べているのを聞いて，感謝を忘れずに成長する。そして生ける神への信仰をもって成人するのである。

家庭の中にとげとげしい感情をもたらすさつりくの天使はあなたを過ぎ越し，あなたは永遠に続く人生を通じて平安と愛を味わいつつ生活するであろう。皆さんの上にこの大いなる祝福があることを願いつつ，イエス・キリストのみ名により，へりくだり祈り奉る。アーメン。

あなたはどこへ行こうとしているのか

十二使徒評議員会会員

リチャード・L・エバンズ



全世界に住む愛する兄弟姉妹の皆さん。

数週間前，私は何人かの人々と共に混雑した空港に立って，それぞれに目的をもって各地へ行きあるいは各地から来る人々を眺めながら，一体この人たちはどういうことに関心を持っているのだろうかと考えてみた。その時心に浮かんだのが，あの質問である。「あなたはどこから来たのか。あなたはなぜここにいるのか。あなたはどこへ行こうとしているのか。」この質問のひとつを変えてみよう。「あなたは一体どこへ行こうとしているのか。」そして，これに加えて「実際，あなたは何を望んでいるのか」と尋ねたい。

私たちは，自分がどうあるべきかあるいはまた何が本当に重要なのかを考えずに，煩雑なことに時間の大半を費している。

時折，行なわなければならないと思った事柄に全力を傾け，達成してみると，それほどの意味がなかったことに気付くことがある。

このようにして年月が経ち，まだ若いと思っていても，知らず知らずのうちに年をとっていることに気付くのである。

振り返ってみると，今年もすでに4分の1が過ぎ去った。大して意味のない事柄に費した時間もあることだろう。こうして考えていると，ジョン・ラスキンが見たという夢を思い出す。

ラスキンの夢はこうである。「私は子供たちのパーティーの夢を見た。賢く親切な主催者のお陰で，そこではいろんな遊びができた。子供たちは部屋と庭で自由に遊び，どうしたら楽しく過ごせるだろうかなどと心配する必要はまったくなかった。……そこには音楽があり，面白い本がすべて揃っており，遊び場があり，おいしそうな食物が山と積まれたテーブルがあり，子供が欲しがるようなものは何でもあった。……そうするうちに，いたずら好きの子供が2，3人，椅子に打ってあるきれいなびょうに目を止め，早速抜きにかかった。たちまちのうちに，全員がこれに加わって，びょうを抜き始めた。こうしてびょうを全部抜いてしまった。だが，子供たちはこれだけで満足できず，今度はほかの子供の持っているびょうを欲しがるようになった。そのうちに〝リーダー格〟の子供が，びょうをとりあげろと大声で叫んだ。……とうとう子供たち同志の取っくみ合いが始まった。一本たりとも取ってならないことははじめからわかっていた。だが，何たることか。『一番多いのはだれだ。みんなと同じくらいなければ安心して家に帰れない』と子供たちがだだをこね始めた。その子供たちの騒ぎに私は目を覚した。そして考えた。『子供たちの夢にしては，何とばかげた夢なんだろう。……子供たちはこんなばかげたことはしない。こんなことをするのは，大人だけだ。』」[1]

ところで，私はラスキンが語ったような夢を見たことがない。しかし私はこのことを数え切れないほど調べ，祈り，考えてきた。

愛する若人の皆さん，そして年配の方々，あなた方は本当にどこへ行こうとしておられるのだろうか。

数カ月前，私は愛する旧友の葬儀の席で話をした。この人は大した財産もなかったと思う。しかし，私はこの人の孫が次のように言うのを聞いた。「週に一度，祖父は孫たちも含めて家族全員を集め，福音を教えてくれました。消極的なことを口にしたことは1度もありませんでした。いつも信仰を行ないに表わし，私たちを励ましてくれました。そこには『世代の相違』はまったくありませんでした。」

私はこの短くて，いつ終わるかも知れないこの世での命が尽きたとき，私の孫たちが私のことについて心からこのように言ってくれるとしたら，それは何という祝福であり心安らぐことであろうかと思った。

私は，かつて訪れたことのある，読み書きを覚える機会のない何億という人々がいる国々のことを考えた。次いで，機会がありながらも途中で投げ出したり，放棄している若人がいる国々のことを考えた。教育，技術，能力の要求が一層強まるこの世界において，彼ら若人は一体自分がどこへ行くと考えているのだろうか。

愛する若人の皆さん，毎日毎日が永遠の一部分である。今ここで起こっていることは永遠に重要なことなのである。

私はあなた方に心からお願いしたい。永遠である将来のために備えると同時に，今ここであなたを待っている機会に対して備えていただきたい。ジョージ・エリオットはこのように語っている。「機会を利用できぬ者にとって機会とは何なのか。」[2]

自然の律法と神の律法，そして命の律法はひとつであり，同じものであり，とこしえにその効力を有している。私たちは律法の世界に住んでいる。冬のあとには春が来る。太陽は明日の朝，再び時間通りに顔を出す。私たちはこれを否定することはできない。

道徳の律法も霊の律法もこれと同じく完全にその効力を有している。私たちはこれをも否定することはできないのである。こうして，どのような生活をすればどのような結果になるかがわかる。神の戒めを無効にしたり，拒絶する権威や力が，単なる人間にあると言わせてはならない。神の戒めは，人にとって守ることができるものであると同時に守らなくてはならないものである。また生活の一部分であり，健康，幸福，平和を人にもたらし，正直，徳，清さ，卓越，その他人生に関するあらゆる善きものを人にもたらす。

愛する若人の皆さん，もしだれかがあなたに，結果を見るまでもなく神の与えたもうた戒めには従わなくともよいと言うならば，その人は真理を知らないか，真理を語っていないのである。

神が与えたもうた，素晴らしい機能を持つこの心と身体は，この世の生涯の続く限り保持することができる。感覚器官を麻痺させたり鈍くさせたり，身体の機能を損傷あるいは酷使したり，注意を怠ること，すなわち身体を破壊し，精神を鈍らせ，霊を損なう事柄にふけるのは，愚かで邪悪なことである。人にとって良くないものは用いるべきでないし，また行なうべきでもない。

命の律法に反すると，外的な罰を被るだけにとどまらない。精神的霊的な罰，心の苦脳をも味わう。ジュビナルは言った。「あらゆる罰の内最も過酷な罰は，罪を犯した人が自らの良心という法廷で，罪の宣告を受けることである。」[3]

さて，私たちは定められた道に従って生活すべきである。これは単に，神に喜ばれるためや両親を喜ばせるためだけではなく，自分自身のためである。なぜならば，神が与えたもうたどの戒め，どの要求も，私たちの幸福，健康，平安と進歩のためにあるからである。愛する若人の皆さん，たとえ自分のことしか考えない利己的な気持からであっても，神の戒めを守ることは，賢明なことである。

外的な面での公害と共に，精神や霊の汚染にも注意を払わなければならない。ポルノを生み出し，悪用している人々に注意を払わなければならない。金もうけやその他の目的で，退廃的な絵や写真を印刷しては人々の心を汚そうとしている人々に注意を払わなければならない。

私たちは，放っておけばとどまるところを知らない悪を覆すために，あらゆる手段を講じなければならない。

私たちは，無邪気で正直な子供たちを安全に守る責任がある。肉体上の公害に対して立ち上がるばかりでなく，精神や礼節や道徳への公害を一掃することにも関心を払おうではないか。肉体をむしばむ公害に関心を払うよりも人の精神と霊をむしばむ公害に関心を向けることの方が急を要する。

さて，私たちが人生を歩んで行く上で深く考えるべきことがふたつある。それは，予防の力と悔い改めの力である。

なぜ，命の律法に反する方向に走るのか。なぜ，健康を害し不幸に至る道に飛び込むのか。なぜ，良心に逆らって生活するのか。正しく生活すれば防ぐことのできる失望や浪費，後悔について考えてみなさい。行動には必ず結果がつきまとう。だれもそれから逃れることができない。セシル・B・デミルはこう言っている。「私たちは戒めを破ることができない。ただ，戒めに対して自分を破滅させるだけである。」[4]予防の持つ力についても考え，これに従って生活し，また教えようではないか。マルクス・アウレリウスは，「正しくなければ行なうべからず。真実でなければ言うべからず。」[5]と語った。

しかし，そのように行なうことができなかったならば（神は失敗しないように助けて下さるが），心から悔い改めの道を歩まなければならない。

悪の荷は重く，背負うことができない。リー副管長が，この世で最も重い荷は罪の重荷であると語ったのを聞いたことがある。それが若人で

あれ老人であれ，しなければよかったと思いながら，罪の重荷を背負って苦悶して歩く姿を見るのは辛いものである。

しかし，神の恵みにより私たちには悔い改めの原則が与えられている。天父は，私たちを理解し，真心から悔い改めるならばそれを受け入れて下さる。主は次のように言われた。

「人罪を悔い改めしや否やは，見よ，彼は自らこれを告白しその罪を捨つべければ，その悔い改めたることはこれによりて知るを得べし。

……およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され，主なるわれもはやこれを忘るべし。」（教義と聖約58：43，42）

私たちはこれに頼ることができる。だれもが望まないような所へあなたを連れて行こうとする道から離れなさい。そして，平安，自尊心，清さ，良心へと導いてくれる道を歩みなさい。

私は，御父の計画と目的がどのように遂行されるか時間的なことはわからない。しかし，私たちが究極の目的とする所へ行く道に立ち返り，歩み始める時は，今をおいてほかにないことを知っている。

私たちは本当にどこへ行こうとしているのか。私たちは生ける救い主のよみがえりを祝う季節を迎えるにあたり，神の計画と目的とに思いをはせている。すなわち，時至らば私たちはこのはかない世を去り，愛する人々と共に永遠に住まう真に終わることなき世へと行くのである。これが御父の計画であり，目的である。このため私たちがどこへ行こうとしているのか，またなぜそこへ行く方法を教えてくれる福音が必要なのかということが肝要なのである。

主が過去と現在にわたって予言者を通じ啓示を下したまい，また私たちを寄る辺なきままに放っておかれないことを神に感謝する。神はこれまで，私たちの従順さの度合いよりもはるかに多くのことを語ってこられた。もし私たちが神に仕え，神の戒めを守るならば神はさらに多くのことを明らかにされるであろう。

世界中に住む愛する友人の皆さん，私の証を申し述べたい。人をそのかたちにかたどって造られた神は生きておられる。神は私たちを死から贖い，生命の道を示すために，救い主である御子を遣わされた。神の目的は人に不死不滅と永遠の生命をもたらすことである。私たちがそのように望み行なうならばひとり残らず救いを得させ，昇栄にあずからせるために，諸天が開かれ，完き福音が回復されたのである。

私は贖い主が生きておられることを知っている。そして，この世に住むあらゆる人々に主の平安と祝福があるように祈る。救い主イエス・キリストのみ名により願い奉る。アーメン。

1. ジョン・ラスキン：イギリスの芸術評論家，作家（1819—1900）「小さな飾りびょう」"*Little Brass Nails*"
2. ジョージ・エリオット：マリー・アン・エバンズの筆名，イギリスの小説家（1819—1880）「牧師生活からの一場画：アモス・バートン」
3. ジュビナル：デシマス・ジュニアス・ジュベナリス，ローマの風刺詩人（60—140）「風刺」*Satires*，xiii
4. セシル・ブラント・デミル：映画監督，作家（1881—1959）「1957年，ブリガム・ヤング大学卒業記念講演」
5. マルクス・アウレリウス・アントニウス：ローマ皇帝（121—180）「瞑想録」*Meditations*，第12巻17章68行



「みたまは証す」

十二使徒評議員会会員

ボイド・K・パッカー

一年前のきょうも私たちは同じように聖会において教会幹部を支持する挙手を行なった。十二使徒定員会の一員として支持の挙手を求めるため，私の名前が読み上げられたのは昨年の4月の朝であった。こうして，この世における主イエス・キリストの特別の証人として召された他の兄弟たちと共に立つことが私の責務となった。

皆さんは，なぜ私にこの召しが来たのか不思議に思われたに違いない。私も同様であった。私は召しのあった時にたまたまふさわしい状態であったのではないかと時々考えることがある。しかし，私は導きを受けている，備えられているという気持は絶えず心の奥底に持っていた。

さて私たちは今朝，教会の大管長を支持する特権に浴した。私は，これが大いなる特権であると同時に特別な義務であると考えている。なぜならば私は大管長に対して証を持っているからである。

昨年4月の総大会を数週間後に控えたある金曜日の午後，私は週末に訪れる大会での割り当てについて考えながら事務所を出て5階から降りてくるエレベーターを待っていた。

エレベーターのドアが静かに開くと，そこにジョセフ・フィールディング・スミス大管長が立っておられた。私は一瞬驚いた。というのは，スミス大管長の事務所は下の階にあったからである。

そしてそこに立っておられる大管長を見て私はある強い証を感じた。神の予言者が立っておられる。光のような，すなわち純粋な英知のようなみたまの快い声が，この方は神の予言者であるとはっきり私に語ったのである。

末日聖徒に対してこの体験をこと細かに述べる必要はないと思う。このような証は私たちの教会に特有のものである。それは高い職にある人だけに与えられるものでなく，すべての会員が得ることのできる，大切なものである。

大管長に対すると同様に，副管長に対しても証を持つことができる。

ここから北方を見渡すと，ワサッチ山脈の3つの峰が目にとまる。詩人であれば，それらを雄々しくそびえる石のピラミッドと形容するであろう。地図を見ると真ん中の最高峰はウィラード・ピークとある。しかし開拓者たちはこれらの3つの峰を「ザ・プレジデンシー（大管長会)」と呼んだ。ウィラード地方へ行って東方を見渡すと，彼方の「ザ・プレジデンシー」の偉容を肌で感じることができる。

大管長会を与えたもうた神に感謝する。あの3つの峰のように大管長会はだれよりも天に近くいる。そして私たちの支持を必要としている。このように崇高な指導者の召しは時として孤独を感じさせるものである。なぜならば，彼らの召しは人を喜ばすものではなく，主に喜んでいただくことをなすよう求められる召しだからである。願わくは神がこれらの偉大な義人を祝福したもうように。

過去1年の間に私は様々な質問を受けてきた。その多くはキリストの証人として立つための条件についてであったが，好奇心から生まれたとりたてて意味のないものであった。「イエス・キリストを見たことがありますか」という質問である。

私はこのような質問をしたことがない。定員会の兄弟たちにも尋ねたことがない。私はこのような質問は非常に神聖な個人的なものであり，質問をするにも何か特別な霊感，言葉を換えて言えば認可が必要だと考えているからである。

非常に神聖なため話すべきでない事柄が幾つかある。神殿に関するこ

とがそうである。神殿では神聖な儀式が執行され，私たちはそこで神聖な体験をする。だが，それらが神聖な性質を持つものであるがゆえに，私たちは神聖な壁を一旦出ると，話さないのである。

それは決して秘密ではない。神聖なものである。語り合うものではなく，心にとめ，深い畏敬の念をもって守り，熟慮すべきものである。

私は予言者アルマが次のように述べた意味がわかるようになった。

「神の奥義を知ることは多くの人に許されている。しかしその人々は神が世の人に下さるほかには，何の教えも伝えてはならないと言う神のきびしい命令を受けている。神がその教えを世の人に許したもうのは，世の人が神に仕える熱心と従順の度合による。

それであるから心をかたくなにする者は僅ばかり神の教えを賜わり，その心をかたくなにしない者は全く一つのこらず神の奥義が解るまで教えを賜わる。」（アルマ12：9―10）

この教会において高い職にある指導者や，ワード部・支部の会員たちが一様に「私は神が生きておられ，イエスがキリストであることを知っています」と証するのを聞いた人々は，こう尋ねる。「なぜもっと明解な言葉で言わないのですか。」「そんなに気取らないでわかりやすく言えないのですか。」「使徒たちはもっとほかに言うことはないのですか。」

神殿での神聖な経験がどれほど私たちの証を培うことであろう。証は神聖であって，それを言葉として述べようとすると，同じ言葉になるのである。使徒たちも初等協会の小さな子供たちや日曜学校の若人が述べると同じ言葉でこう証する。「私は神が生きておられ，イエスがキリストであることを知っています。」

予言者の証であれ，子供の証であれ，それを軽んじてはならない。それは，「神は天使によって男ばかりでなく女にも御言葉を伝えたまい，それればかりでなく，またたびたび賢人や博学の人の知識も及ばない御言葉を子供に与えたもう」からである。（アルマ32：23）

何か新しい劇的な方法で与えられる証を求めている人がいる。

証を述べることは愛を伝えることと似ている。時の初めより，ロマンチストや詩人，愛し合う男女は，言葉や歌や文章にもっと強く表現できないかと求めてきた。そして，あらゆる形容詞，最高の言葉，詩的な表現を駆使してきた。いかに言葉を選び，表現に心を傾けても，最も力にあふれた言葉は，結局「あなたを愛しています」という簡単な表現になるのである。

心から求めている人にとっては，これらの簡単な言葉で述べられた証で十分である。証をするのはみたまであって，言葉ではないからである。

実際に存在し，感覚で捉えることができるという点で，電気にも似たひとつの伝達の力がある。人間は空気中に映像や音を送り，アンテナで捉えて再生し，見たり聞いたりする手段を編み出した。このもうひとつの伝達方法も，それより百万倍も強力であるということを除けば，その手段と似ている。そして，この伝達手段が伝える証は常に真理である。

純粋な英知が流れ込み，私たちが何の疑いもさしはさむことなく確かに知るには，ひとつの過程を経なければならない。

私は先程，みたまの導きがなければ決して軽々しく扱ったり，答えてはならない質問があると申し上げた。私自身はそのような質問をしたことがない。けれども，質問されなくともそれに対する答が述べられたのを聞いたことがある。彼らは「みたまが証す」る神聖な時に，みたまの勧めによってそれに答えたのである。（教義と聖約1：39）

私は幹部の一人が次のように語るのを聞いたことがある。「私は余りに神聖であるため口に出すことができませんが，自分の経験からイエスがキリストであることを知っています。」

またある幹部はこう証した。「私は神が生きておられることを知っています。主が生きておられることも知っています。それだけでなく，私は主を知っています。」

彼らの証に意味をもたらし，力を与えたものは，その言葉ではない。みたまである。「……人が聖霊の力で語るときには，聖霊がその話を人の心の中に浸みこませるからである。」（IIニーファイ33：1）

私は，この聖なる職に召された人人の中では自分があらゆる点で最も小さな者である，という気持を常に抱きつつ，謙遜にこの話をしている。

私は証はしるしを求めることによって得られるものではないことを知っている。断食と祈り，行動，実行，従順によって得られるものである。また主のしもべたちを支持し，彼らに従うことも必要である。

カール・G・メーザーが宣教師の一団を連れてアルプス山脈を越えたときのことである。一行が頂上にたどり着くと，メーザーは休憩を指示した。そして，後方の氷河を渡る道を示すため雪の上に点々と立っているポールを指して言った。「兄弟たち，あれが神権なのです。あのポールは私たちと同様，何の変哲もない普通の棒です。けれども立っている位置が大切なのです。もしあのポールの示している道からそれたら，私たちは迷ってしまう[1]。」

私たちはここで挙手し，主のしもべを支持したが，行ないによっても

それを表わさなければならない。これが私たちの証を決めるのである。

さて，私も皆さんと同じように，なぜ私のような者が聖なる使徒職に召されたのか不思議に思っている。私には多くの点でこの召しを果たすに必要な条件が欠けている。求められるように仕えるためには，相当の努力をしなければならない。このことについて考えてみたとき，私はたったひとつ，恐らくこの職に召された理由だと思われることに気付いた。それは私が先程述べた証を持っているということである。

私はイエスがキリストであるということを皆さんに証する。私はイエスが生きておられることを知っている。イエスは時の絶頂に生まれ，福音を教え，試しにあい，十字架にかけられた。そして3日後に復活された。イエスは復活の初穂であり，骨肉の体を持っておられる。これらのことを証する。私はイエス・キリストの証人である。イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

1. アルマ・P・バートン，*Karl G. Maeser, Mormon Educator*「モルモンの教育者カール・G・メーザー」p. 22

失われた大隊



十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン

昨年の11月，私はフランスの北部を緩やかに流れるソンム川にかかっている，ある非常に古い橋の上に立った。1918年の休戦協定と大戦の終結から，すでに50年という月日が過ぎ去っていた。私は52年前のソンム川の様子を思い浮かべようとした。一体どれだけの兵士たちがこの橋を渡って戦地に向かったことだろうか。ある者は生き長らえて再びこの橋を戻ってきた。だがこのソンム川がまさに帰らざる川となった者たちもいたのである。ヴィミー・リージュ，アルマンチェール，ヌーブ・シャピュルの戦場では数知れない命が奪われた。立ち並ぶ白い十字架は，決して忘れることのできない面影を残している。

「フランダースの野原，
　ひなげしが立ち並ぶ十字架の間を
　　かけ抜ける。
　空には，ひばりがさえずりながら
　　飛び交う。
　だが銃声にかき消されて，私には
　　聞こえない。
　私たちは死んだのだ。
　つい数日前までは，陽が昇り，沈
　　むのを見ていた。
　人を愛し，また愛されていた。け
　　れども，今はフランダースの野
　　原に埋められている。」
　　　　　　　　——ジョン・マクレー

私は思わず，「戦争は悲惨なものだ。しかしそれでいて，人を愛に基づいた勇気ある行動に向かわせるとは，一体どういうことなのだろうか」とひとりごとを言っている自分に気が付いた。

私は少年の頃，「失われた大隊」の話を夢中になって読んだ。「失われた大隊」とは，第一次世界大戦の第77歩兵師団のことである。ミューズ・アーゴンの攻撃のとき，ひとりの少佐がこの大隊を率いて敵の前戦内に入り込みざんごうをぬって進軍した。しかし側面の隊が進軍を阻まれ，大隊が完全に包囲されてしまう。食糧と水は底をつき，負傷者を避難させることもできない。攻撃すれば倍の攻撃を受けるし，黙っていれば敵は大隊に降伏を求めるであろう。新聞はこぞってこの大隊の粘りに称賛をおくった。人々は悲惨な結末を想像した。こうした絶望の孤立状態にある「失われた大隊」を救出したのは，同じ第77師団の別の部隊であった。従軍記者はこの救出隊が戦友を救おうとする愛に燃えていたと速報を書き送った。彼らは自ら進んで志願し，勇敢に戦い，雄々しく死んでいった。これこそいつの時代の人々の心にも響くあのオリブ山の教えそのものではないだろうか。「人がその友のために自分の命を捨てること，これよりも大きな愛はない。」(ヨハネ15：13)

しかし，私たちはこの「失われた大隊」の精神を忘れてはいないだろうか。その救出のために支払われた犠牲はどうだろうか。今日でも「失われた大隊」がいるのではないだろうか。もしいるならば，彼らを救うために私たちは何をしなければならないだろうか。彼らはカーキ色の軍服も着ていなければ，進軍ラッパの音を響かせることもないかもしれない。しかし，彼らも同じあせり，同じ失意を感じ，孤独がもたらす暗い気持を味わっているのである。

世の中には手足がきかない，言葉が話せない，目が見えないといった肉体に障害を持つ「失われた大隊」がいる。皆さんは，盲導犬を頼りに後からぴったりとついて歩いている人，あるいは白いつえを頼りにコツコツと足元を確かめながら歩いている人を見て，助けたいのだけれどもどうしたらいいかわからない，といういらだたしさを経験したことはないだろうか。この人跡未踏の暗黒の荒野でさ迷っている人は多いのであ

る。

「失われた大隊」の救済事業を知りたければ，盲人の施設を訪問し，彼らのために本を読んであげている人人の無私無欲の奉仕を見ていただきたい。目の不自由な人々に技術を教えている様子を観察していただきたい。そして彼らにも職に就く機会を与えようとしている人々の精神を感じ取っていただきたい。

不幸にしてそのような状態になった人々のために，喜んで働き，惜しみなく与える人々は，盲人の生活に光をもたらすことの中に十分な報酬を見いだしているのである。

盲人がその器用な指先で点字版の新約聖書を読むときに覚える喜びを私たちは知っているだろうか。彼はヨハネ伝の第12章で指の動きを止め，平和の君が与えたもうた約束の意味をしばし考える。「わたしは光としてこの世にきた。それは，わたしを信じる者が，やみのうちにとどまらないためである。」(ヨハネ12：46)

老人，未亡人，病人という「失われた大隊」のことを考えていただきたい。彼らのほとんどは，孤独という潤いのないさびれた荒野に住んでいる。若さが消え，健康を損ない，気力が衰え，希望の光が消えかかっているとき，それはまさに「失われた大隊」の状態に陥ろうとするときである。そうした彼らをも，援助の手と憐れみの心によって助け支えることができるのである。

現在，ニューヨーク州のブルックリンにある教会の支部に属している一人の青年を紹介したい。彼は13歳のときにソルトレーク・シティーで先頭に立ってそのような人々の救済に乗り出した。この少年の住む地域には貧しい年老いた未亡人がたくさん住んでいた。彼は仲間の少年たちと共に1年前から貯金し，クリスマスパーティーを計画した。しかしクリスマスの精神はほかの人々のことを考えるところにあることを知った。それまで彼らは全く自分のことしか考えたことがなかった。少年たちの指導者であったフランクは，そのお金をパーティーに使うよりも，近所に3人で一緒に住んでいる年老いた未亡人のために使ったらどうかと提案した。そして計画はすべて少年たちが行なった。監督である私はただその計画に従うだけでよかった。

新しい目標に胸を躍らせながら，少年たちは特大のローストチキン，ポテト，野菜，クランベリー，そしてクリスマスに必要な物をすべて買い込んだ。そして，その贈り物を未亡人の家まで抱えて行った。雪の降りしきる坂を登って，彼らは崩れかかった玄関に立った。ドアをノックすると，ゆっくりとした足音が聞こえ，ドアが開かれた。

13歳の少年たちの調子っぱずれの歌声が響いた。「聖し，この夜，星はひかり。」それは昔，かの栄えある夜に歌った天使たちのように美しく，博士たちの贈り物のように素晴らしい贈り物であった。

私たちはこの悦ぶ婦人の顔を見詰めながら，「彼女たちもだれかの母親なのだ」という思いに駆られた。そして，少年たちを見ては，「だれかの息子なのだ」と思った。その時マリー・ドウ・ブラインの不滅の詩が心の中によみがえってきた。

「女は年老いて，やつれ，髪は灰色と化す
冬の日の寒さにその腰はかがむ
街は雪にぬれ女の歩みは滑る
交差点に立つ女はじっとただ待ち続ける
行き交う群衆はだれひとり手を差し伸べることもなく
助けを求める女の目に気付くこともない
笑い声と大声を残して去って行く
授業からの解放感にひたりながら
そこへ雪まみれの，まるで羊の群れのような少年たちが通りかかった
ひとりが女のわきに立つと小声でささやいた
『よかったら，一緒に渡りましょう』
少年たちよ，彼女もだれかの母親なのだ
たとえ年老いて，貧しく，歩みがのろくとも
もし私の母が年老いて，貧しく，髪が白くなっているのを見たら，
どうか手を貸してやってくれ，息子は今遠く離れているのだから
そして年老いた母は夜床に入る前にこう祈るだろう
『神よ，どうぞかの気高い少年に祝福を，
満たされた気持ちと喜びをお与え下さい』」

主は言われる。「……これらの最も小さい者のひとりにしたのは，すなわち，わたしにしたのである。」(マタイ25：40)

このほかに，思いやりのない言葉によって互いに孤立している父と母，息子と娘が集まる「失われた大隊」がある。このような悲劇をかろうじて避けた若者を紹介しよう。かりに，彼をジャックと呼ぶことにしよう。

ジャックはこれまで，父親と何度も激しい口論を繰り返してきた。ジャックが17歳を過ぎたある日，二人はこれまでになく激しい口論を始めた。そしてとうとうジャックは父親に向かってこう言った。「けんかもこれで最後だよ。ぼくはこの家を出て行く。絶対帰ってこないからね。」ジャックは部屋に入ると荷物をまとめ始めた。母親の思いとどまるようにとの頼みも耳に入らなかった。ジャックは玄関で泣く母親を残して出て

行ったのである。

庭を突っ切って門を出ようとしたとき，父親の呼ぶ声がした。「ジャック，お前が家を出て行くようにさせた責任はわたしにある。心から済まないと思っている。家に帰りたいと思ったら，いつでも帰ってきなさい。今度はもっとましな父親になると約束するよ。いつもお前を愛していることを知っておいてくれ。」

ジャックは何も言わずにバス停へ行き，切符を買った。バスに乗ったジャックは窓から過ぎ行く景色をながめながら，父親の言葉について考え始めたのである。そして，あのような言葉はよほど愛していなければ言えるものではないことに気付いた。父は謝り，戻って来るように言った。そして「お前を愛している」という言葉がどうしてもジャックの耳から離れなかった。

その時，ジャックは今度は自分が行動しなくてはならないことに気付いた。心に平安を取り戻すには，父親が見せたような分別と優しさと愛を父親に示さなくてはならない。ジャックはバスを降りた。そして帰りの切符を買い，家に向かった。

ジャックが家に着いた頃はもう真夜中を過ぎていた。家に入り，電灯のスイッチをひねると，そこに両手で頭を抱え込んで椅子に座っている父の姿があった。父親が頭をあげると，息子が目に映った。そして二人は駆け寄ってしっかりと抱き合った。のちにジャックはその当時を思い出して，よくこう言った。「私が家にいた間であの頃が最高に幸せでした。」

この少年は一夜にして大人になった。また，激情を抑え自尊心を制したこの父親は，息子が「失われた大隊」に加わる前に，親子関係が崩れて家庭が崩壊する前に，息子を救い出したのである。愛こそ二つのものをつなぐ絆であり，苦痛を和らげる鎮痛剤である。愛とは，それを感じることは多いが表わすことは少ないものである。

シナイ山よりとどろく声がする。「あなたの父と母を敬え。」(出エジプト20：12) また神は，「汝相愛して共にこの世に生きよ」(教義と聖約42：45) と命じておられる。

このほかにも「失われた大隊」はいる。罪の密林でもがき，無知の荒野でさ迷う人々である。事実，私たちは人類の失われた大隊すなわち永遠の死に追いやられた大隊となる可能性もあったのである。

「……死がひとりの人によってきたのだから，……アダムにあってすべての人が死んでいる……」(Ⅰコリント15：21―22) 私たちはすべて死を味わう。だれもこれを避けることはできない。もし私たちが救われないままでいるとしたら，求めている天国を見ることができず，愛する家族を失い，親しく語り合った友をも失うであろう。私たちはこの真理を悟ってはじめて，世の救い主の誕生に伴う無上の喜びを感じることができるのである。高らかなみ使いの言葉が聞こえる。「彼女は男の子を生むであろう。その子をイエスと名づけなさい。彼は，おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである。」何と栄光あふれる言葉であろうか。

フランスを流れるかの川は，第一次大戦中に「失われた大隊」を救出するために進軍した兵士たちを目撃している。また万物の救い主，聖なる贖い主がその導きと教えを施す業を始めるのを目撃した川もある。聖典はこう記録している。「すると天から声があった，『あなたはわたしの愛する子，わたしの心にかなう者である』。」(マルコ1：11)

今日では，救い主のガリラヤでの伝道の中心地であった湖畔の町カペナウムはその遺跡を残すにとどめている。救い主はこの町の会堂で教えを説き，湖畔で説教し，家々でいやしを行なわれた。

あるとき，イエスはイザヤ書から引用して教えを説かれた（ルカ4：18)。「主なる神の霊がわたしに臨んだ。これは主がわたしに油を注いで，貧しい者に福音を述べ伝えることをゆだね，わたしをつかわして心のいためる者をいやし，捕われ人に放免を告げ，縛られている者に解放を告げ……」るためである。(イザヤ61：1) これは私たちが属している「失われた大隊」を救う神の計画があることを明らかにしたものである。

しかし，ガリラヤにおけるイエスの伝道はその始まりに過ぎなかった。人の子はゴルゴタの丘に行くまで，絶えず恐ろしい出来事に遭遇されたのである。

イエスは，最後の晩餐の後ゲッセマネの園で捕らえられ，弟子たちに見捨てられた。その上，人々からつばを吐きかけられ，法廷に立たされ，辱められた。そして，大きな十字架を背にカルバリに向かってよろめきながら歩かれた。主は，裏切られ，責められ，十字架で死を味わい，それらすべてに打ち勝たれたのである。

讃美歌にこういう歌詞がある。「……時は移り，さびしい丘に十字架の影がのびた。そのとき，うめき声が凍りつき，……」天父は私たちに御子を下さった。私たちの長兄は私たちのために命を差し出されたのである。

主は最後の瞬間まで引き返すこともできた。しかしそうはされなかった。主は万物，すなわち人類，地球，地球に住むあらゆる生き物を救うために，よろずの物の下に身を落とされたのである。

マグダラのマリヤたちが主の遺体

の世話をするために墓まで来たとき，み使いが泣き悲しむ彼女たちに言った。「あなたがたは，なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは，ここにはおられない。よみがえられたのだ。」（ルカ24：5－6）キリスト教徒にとってこれほど大きな意味を持つ言葉はないと思う。

この宣言によって，人類の「失われた大隊」すなわち過去に生まれ死んだ人々，現在生きておりいつか死を迎える人々，やがて生まれそして死ぬ人々，この失われた人類の大隊は，ここに救出されたのである。

私は，私たちを永遠の死から解き放って下さった方が真理の教師であり，しかも教師以上の御方であることを証する。主は完全な生活の模範であり，単なる模範者ではない。主は偉大な医者であるが，医者以上の御方である。人類の「失われた大隊」を救った御方は，文字通りの世の救い主，神の御子，平和の君，イスラエルの聖者，よみがえられた主である。主は言われる。「われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり。父と汝らの間の仲保者なり。」（教義と聖約110：4）

私は主の証し人として，主が生きておられることを証する。イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

主の家の山



十二使徒評議員会会員

リグランド・リチャーズ

この霊感あふれる大会の最後の集会において私は兄弟姉妹の皆様の前に立ち，まず天父への愛を申し述べたい。また生みたまいし独り子を私たちに与えて下さった天父への愛，主の大いなる贖いの犠牲に感謝している。私が長年にわたって永遠の真理を携える使いのひとりとして，イエスが神の御子であることの証し人としての大いなる名誉と特権に浴してきたことにも感謝している。私はキリストが生きてましまし，世の贖い主であること，また予言者ジョセフ・スミスを通じてこの神権時代に主の教会を回復したもうたこと，さらには私たちがこの世において喜びと幸福を得，次の世にあっては昇栄を得るための福音を通していかに生くべきかを明らかにしたもうたことを証する。

けさ，私たちのマリオン・D・ハンクス兄弟から素晴らしい説教をうかがったが，彼は先週の金曜日に開かれた十二使徒会地区代表との集会で，兄弟たちに次のような話をして下さった。樹木の古い葉は新しい葉の生える場所を提供するために散らなければならないというものであった。私はこれを自分自身に当てはめて考えてみた。私もこの教会では古い葉のひとりであろう。最古老のひとりであろう。確かジョセフ・フィールディング・スミス大管長を除けば，生きている人で私ほど多くこの総大会の説教壇に立った人はいないと思う。記憶が確かであれば，私に話す特権を与えられた総大会はこれで74回になる。私は幹部の兄弟たちの証をうかがっていて，心の中に讃美歌の歌詞が浮かんできた。

「来たれ予言者より　みことば聞け
喜びてうたえ　真理の道
昔の予言者を　道を知りて
今他の予言者を　また送らる
(讃美歌83番)

全世界を捜しても，きょう私たちがここで耳にしているような説教を聞くことのできるような場所がほかにあるだろうか。人々を高め，愛する人たちや聖められた贖われた天父の子らと共にこの世で幸福を，次の世にあっては昇栄を得させるような説教をほかで聞くことができるだろうか。

次に心の中によみがえってきたのは，いにしえのエレミヤの言葉である。エレミヤは現代をかいま見た。この予言者の言葉を聞いてみよう。

「主は言われる，背信の子らよ，帰れ。わたしはあなたがたの夫だからである。」何と素晴らしい聖約であろうか。「町からひとり，氏族からふたりを取って，あなたがたをシオンへ連れて行こう。わたしは自分の心にかなう牧者をあなたがたに与える。彼らは知識と悟りとをもってあなたがたを養う。」(エレミヤ3:14—15)

この大会で私たちが目撃しているこの宣言の成就を，今日の世の中でほかに見ることのできる場所があるだろうか。予言者ジョセフ・スミスを通して私たちに与えられた信仰箇条の一節を考えてみたい。「われらは，正確に翻訳されたる限り，聖書は神の御言葉なりと信ず。またモルモン経（英文）も神の御言葉なりと信ず。」(信仰箇条第8条)

私は心からこれらの聖典を信じ，これらの聖典を与えたもうた神に感謝する。

また信仰箇条の別の一節にはこうある。「われらは，すべて神のこれまでに啓示したまいしこと，すべて今啓示したもうことを信じ，なお今より後，神の王国につきて多くの偉大にして重要なることを啓示したもうことを信ず。」(信仰箇条第9条）私はこのことを心から信じている。

私は聖書の予言を調べることを喜びとしている。その多くはこの時満

ちたる神権時代に成就している。そして今後成就するものもある。

イエスは言われた。「聖典を調べなさい。あなたがたは，聖書の中に永遠の命があると思って調べているが，この聖書は，わたしについてあかしをするものだからである。」（欽定訳ヨハネ5:39）何と素晴らしいみ言葉であろうか。主は復活の後，エマオに向かう二人の弟子の傍らを歩いて行かれた。聖典によればこの二人の弟子は目がさえぎられて，主を認めることができなかった。彼らがイエスとイエスのみ業と十字架上の死について話し合っているのを耳にした主は，それまで彼らに教えようとしてきたことを彼らが理解していないことに気付き，こう言われた。「ああ，愚かで心のにぶいため，預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。」（ルカ24:25）そして，モーセやすべての予言者からはじめて，すべてのことについて予言者たちはイエスを証していることを解き明かした。今，これらの約束や予言をひとつひとつ取りあげる時間はないが，ただ申し上げておきたいことは，予言者はイエスのはりつけのときに，人々がイエスの衣をくじ引きにすることまでも予言していたということである。

ペテロは聖典を理解できるように彼らの理解の眼を開いたと言っている。

「こうして，預言の言葉は，わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたがたも，夜が明け，明星がのぼって，あなたがたの心の中を照らすまで，この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして，それに目をとめているがよい。

聖書の預言はすべて，自分勝手に解釈すべきでないことを，まず第一に知るべきである。

なぜなら，預言は決して人間の意志から出たものではなく，人々が聖霊に感じ，神によって語ったものだからである。」（IIペテロ1:19—21）

私は，予言者たちの言葉は今日この世で私たちを導く最も確かな指針であること，また次のイエスの言葉が真実であることを信じている。「天地が滅び行くまでは，律法の一点，一画もすたることはなく，ことごとく全うされるのである。」（マタイ5:18）

私たちの前に展開されているこれらの事柄に思いをはせることは実に楽しいことである。時間の関係から，私はそれらを列挙するにとどめたいと思う。

イザヤは現代の有様をかいま見た。砂漠は喜びてさふらんのように花咲き，全能者の導きにより大灌漑用水が敷かれて砂漠に川が流れるのを見た。私たちの祖先がこの峡谷，荒野に導かれて来たとき，彼らには汗して働く手しかなかった。輸送機関も日用品もなかった。またイザヤは，この要塞に備えおかれた水が高地から流れ出るのを，シオンの娘たちが歌いつつシオンに来るのを見た（イザヤ35章参照)。タバナクル聖歌隊は42年もの間，休まず歌い続けている。これと同じ予言の成就を世界の歴史の中に見いだすことができるだろうか。現在では通信衛星テルスターを通じて全世界にその歌声が響いている。昨年の11月，ニクソン大統領が当地を訪れたとき，タバナクル聖歌隊を指して世界で最も優れた合唱団であると語ったのも何ら不思議はない。

イザヤはまた，末日に主の家の山がもろもろの山のかしらとして堅く立つこと，多くの民がこのように言うのを見た。「『さあ，われわれは主の山に登り，ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる，われわれはその道に歩もう』と。律法はシオンから出，主の言葉はエルサレムから出るからである。」（イザヤ2:3）

私は，この地のヤコブの神の家において，これがまさくし文字通り成就していると考えている。この神殿は，記録に残っている他のいかなる建物よりも，多くの人々をあらゆる地から集め，主の道とその道を歩む方法を教えている。

エレミヤは，もはや「イスラエルの民をエジプトの地から導き出した主は生きておられる」とは言わず，「イスラエルの民を北の国と，そのすべて追いやられた国々から導き出した主は生きておられる」と言われる日を予見している（エレミヤ16：14—15)。

この言葉をしばし考えてみていただきたい。過去数世紀の間，ユダヤ人とキリスト教徒はモーセがイスラエルを捕らわれの身から解放したことについて主をたたえてきた。しかし，エレミヤの聖なる予言の言葉にあるように，今や人々は，そのことよりも，神がイスラエルの民をその追いやられた地から集められておられることをたたえているのである。

エレミヤはまた，主がまさしくこのことを行なわれる日が来るのを見た。すなわち主は多くの漁夫と多くの猟師を呼んで，彼らは「もろもろの山，もろもろの丘，および岩の裂け目から彼らをかり出させる。」（エレミヤ16：16）偉大な予言者エレミヤの語るこれらの漁夫と猟師はどこにいるのだろうか。1万4千人に及ぶこの教会の宣教師，それに予言者ジョセフ・スミスが真理を受け，それを全世界の人々と分かち合うために送り出した時以来の宣教師がその漁夫であり猟師なのである。こうして彼らは出て行って，もろもろの山，もろもろの丘および岩の裂け目から人々をとり，かり出しているのであ

る。私は，ある人々が考えているよりも文字通りそのことが起こっていると思っている。

合衆国南部諸州伝道部長を務めていたときのことである。私は南フロリダで開かれる大会に出席した。150キロ行っても家一軒見当たらないような旅だった。やっと，小さな礼拝堂に着くと，そこは250人の会衆であふれていた。私はこう言った。「もし皆さんが岩の裂け目から出てきたのでないとしたら，私には皆さんがどこから来たかわからない。主は御存じだろうが，私にはわからない。」文字通りそうだったのである。私たちは目の前でこの予言が成就しているのを見ている。

マラキは，主が言われた主の大いなる恐るべき日の前に，予言者エライジャが遣わされ，「彼は父の心をその子供たちに向けさせ，子供たちの心をその父に向けさせる。これは私が来て，のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」(マラキ4：6)様を見た。この聖句をしばし考えてみていただきたい。ユダヤ人はいまだに主の降臨を待っているのである。

昨年の7月私はイスラエルを訪れたが，観光コースで3箇所のユダヤ会堂に立ち寄った。壁に大きなひじかけ椅子がつるしてあったため，ラビにその理由を尋ねた。「エライジャがおいでになったときにそれを下げて座っていただくためです」とラビは語った。私はその時，彼らがまさしく暗闇の中にいると思った。ここにいる私たちはエライジャがすでにこの地を訪れたことを知っている。エライジャの来訪によってこの世に起こった事柄は常人では理解が及ばないほどのことである。この壮大な系図事業がそれである。世界に類を見ないこの図書館，数百万の記録が納められている山中の保管庫がそれである。

イザヤがこれを指して不思議な驚くべきわざと呼んだのも無理からぬところである。その時，人々は口をもって主に近づき，くちびるをもって主を敬うけれども，その心は主から遠く離れる。そして，教義に代えて人の教えを教える。(イザヤ29：13—14参照) これらはその一部でしかない。予言者の言葉を成就する出来事が今日数多く起こっている。予言者が語ったこの言葉は真実である。「われらは，すべて神のこれまでに啓示したまいしこと，すべて今啓示したもうことを信じ，なお今より後，神の王国につきて多くの偉大にして重要なることを啓示したもうことを信ず。」

詳細にわたって検討する時間の余裕はないが，エレミヤは，教会の歴史記録者たちが記している通りの方法で，この山間地方に民が集められると述べた。すなわち川に沿って旅すると。実際に私たちの先祖はプラット川に沿って800キロを旅した。そしてエレミヤは民が大勢の人々と共に来ると述べている。「若い者も老いた者も共に楽しむ。わたしは彼らの悲しみを喜びにかえ，彼らを慰め，憂いの代りに喜びを与える。わたしは多くのささげ物で，祭司の心を飽かせ……」(エレミヤ31：13—14) このため私たちの民はあらゆる召しに応えるのである。天の神は人の胸に心を与え，かのニーファイが語るように，主は「私の肉体が燃えんばかりに，私の中にその愛を満し」(IIニーファイ4：21) たもうからである。

これから成就する事柄もたくさんある。ここではその2，3をあげるにとどめたいと思う。私は青年時代にユダヤ人を愛する気持を主から受けた。いつの日か，彼らはこの教会の一大勢力となることであろう。モルモン経のはしがきには，この書物は「ユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして，万国の民に現われたもうことを確信させる」ために保存されたと記されている。私たちがユダヤ人のもとへこれを持って行かなければ，どうしてこの書物がそうできるだろうか。従って，主はその定められた時と方法とにより，私たちの指導者に霊感を与えて，この民に使いを遣わしたもうはずである。

私たちは彼らに心を向けなくてはならないとモルモン経には記されている。残念ながらこの予言を読む時間がない。ニーファイは多くの異邦人が「聖書か聖書か。われらはすでに聖書を持てり。このほかには聖書あるべからず」と言うのを見た。しかし主は言われる。「かれらはユダヤ人より受けたる聖書に対してユダヤ人に何の礼をなすか。」(IIニーファイ29：3—4)

予言者ジョセフ・スミスはこの教会が組織されてから3年後に，教義と聖約98章に記されている次の啓示を受けた。主は言われる。「この故に汝ら戦を棄て平和を宣言し，子らの心にその先祖を思わせ，先祖の心に子らを思わせんことを熱心に求むべし。而して，またユダヤ人の心に予言者らを思わしめ，予言者らの心にユダヤ人を思わしむることを勉めよ。これ，われ来りて咀いをもて全地を打ちすべて生くる者のわが前に焼尽されざらんためなり。」(教義と聖約98：16—17) 人の知恵を全面的に信頼してはならない。これは永遠の御父が現代に予言者ジョセフに下された神の知恵である。

エレミヤはユダヤの家がイスラエルの家と共に歩む日が来るのを見た(エレミヤ3：18参照)。そしてエゼキエルが語るように，彼らはもはや二つの国に分かれずに一つの国となり，ひとりの神が彼ら全体を支配す

る日が来る（エゼキエル37：22参照)。

願わくは，主の助けがあって私たちがさらに前進を続け，主がこれまでに啓示し，いまだ成就していないすべてのことが成就されるように祈るものである。また，私は生き長らえて，この大いなる福音の神権時代に起こるこれら驚くべき事柄を少しでも多く目にしたいと希望している。

私は心の底から，この業が神の業であること，永遠の父なる神がその行く末を定めておられることを証する。この業は，使徒と予言者とを土台とし，主なるキリストを隅のかしら石として築かれている。主は今日この教会を導いておられる。そして，聖なる予言者たちが宣言したように主は，天の雲に乗って訪れるときまでこの教会を導き続けたもう。私はこのことを，主イエス・キリストのみ名により証する。アーメン。

アダムの祝福にあずかる

大祝福師

エルドレッド・G・スミス



アダムとイブはエデンの園を追われた後，福音の原則と救いの計画すなわち天父のみもとに帰るための計画を教えられた。また二人は，子供たちにもこの福音を教えるようにとの指示を受けた。

しかし，アダムのほとんどの子供たちはアベルを除いて教えを受け入れなかった。そしてアベルが殺された後に生まれた子供たちの中にセツがいた。セツはアダムの教えを受けいれた。

主はアダムに，子孫の中に必ず義を行なう者がいて，それは世の終りまで続くと約束された。そのことがモーセの書に記録されている。「その日，父と御子の証を為したもう聖霊アダムに下りて宣いけるは，……汝堕ちしが故に贖わるることを得ん。贖われんと欲するありとあらゆるすべての人類もまた然りと。」（モーセ5：9）

次の章にはこのように記されている。

「さて始めより在りしこの神権は，この世の終りにも在るものなり。

さて，アダム聖霊に感じてこの予言を語りたれば，一つの系図神の子たちに就きて保たる，……」（モーセ6：7―8）

これは，王国の子孫の記録となった。また，少なくとも一部はこの約束の成就の記録でもある。この記録こそ，一部ではあるが私たちが手にしている聖書である。

近代の啓示は次のように告げている。

「この神権はアダムの時代に制められ，左の如く子孫に相伝されたるものなり。

すなわち，アダムよりセツに伝わる。セツは六十九才にしてアダムより神権を受く，またかれ（アダム）の死ぬる三年前に祝福を授けられたり。而して彼の子孫は主の選びたまえる民となり，また世の終りまで護らるべき神の約束を父アダムよりて受けたり。」（教義と聖約107：41―42）

この約束はセツの子孫であるアブラハムにも繰り返し与えられた。

「あなたを祝福する者をわたしは祝福し，あなたをのろう者をわたしはのろう。地のすべてのやからは，あなたによって祝福される。」（創世12：3）

「また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう。あなたがわたしの言葉に従ったからである。」（創世22：18）

高価なる真珠のアブラハム書には，この祝福が今日の私たちとどのように関連を持つかを説明した貴重な記録がある。主はアブラハムに言われた。

「われ汝を大いなる国民となし，汝を限りなく恵み，汝の名をすべての国民の中に大いならしめ，汝は汝の末の子孫にとり祝福の基となりて，汝の子孫は万国の民にこの導きと教えを施す職と神権とを携えて行かん。

われ万国の民を汝の名によりて祝福せん。この福音を受くる者は皆汝の名によりて呼ばれ，汝のすえに数えられ，立ち上りて汝をその父として祝福すればなり。

われは汝を祝する者を祝し，汝を咀う者を咀わん。また汝（すなわち汝の神権）により，汝のすえ（すなわち汝の神権）による，そはこの権能は汝によりて継続し，また汝のすえ（すなわち文字通りのすえ，汝の体より出でたるすえ）によりて世界の眷族ことごとく祝福を得ん，すなわち福音の祝福にして救いの祝福，すなわち永遠の生命の祝福を得んと言う約束を汝に与うればなり。」（アブラハム2：9―11）

この祝福はアブラハムの息子イサクに，そしてイスラエルとなったヤ

コブに，さらに十二支族の基となったヤコブの12人の息子たちに受け継がれた。

祝福師の祝福を受ける人は，イスラエルの祝福の宣言，すなわち自分の祝福の経路となるイスラエルの支族の宣言を受けることができる。これはアダムの時代に始まった覚えの書に名を連ねている人々の祝福にあずかる権利である。

アブラハムの子孫はあらゆる国々に散在しているとはいえ，世のあらゆる民族が文字通りアブラハムの子孫になるという意味ではない。ここで言われているのは，すべての人はアブラハムの子孫を通じて祝福を受け，彼のすえに数えられ，立ち上りて彼をその父として祝福するということである。(アブラハム2：10)

教会員が文字通りのアブラハムの子孫であれば，その人は前述の祝福を受ける。アブラハムの文字通りの子孫でなく，教会に加わり，福音を受け入れた人は，イスラエルの家に属する者もしくは養子縁組によってイスラエルの家に属した者を通して，神権の祝福さらには永遠の生命をも受ける。

したがって，忠実であればあらゆる人は福音のもたらす祝福と永遠の生命にあずかることができるのである。アダムに与えられたこの約束を成就するには当然のことながら，神の予言者を通じて神権に基づく指導を適宜行なわなければならない。この区分された時代を神権時代と呼ぶ。そしてこれはアダムに始まり，セツ，エノク，ノア，アブラハム，モーセ，エライヤス，バプテスマのヨハネ，イエス・キリスト，使徒ペテロ，ヤコブ，ヨハネと続く。

それぞれの神権時代では神権が改めて強調される。悪の力を退けて自らがふさわしいことを証明することにより福音の祝福にあずかる機会があることも強調される。

最後の神権時代は時満ちたる神権時代と呼ばれる。パウロはエペソ人へあてた手紙の中でこのことを説明している。

「御旨の奥義を，自らあらかじめ定められた計画に従って，わたしたちに示して下さったのである。

それは，時の満ちるに及んで実現されるご計画にほかならない。それによって，神は天にあるもの地にあるものを，ことごとく，キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。」(エペソ1：9—10)

予言者ジョセフ・スミスはこのように述べている。「時満ちたる神権時代は，世の始めより今日に至るあらゆる神権時代を総括するものである。」(フランクリン・D・リチャーズ，*Compendium*，「概説」1898年p. 143) この時は，福千年にこの地上で統治する主イエス・キリストの降臨に備える最後の時であるとされている。

私は今がその時であることを証する。主の再降臨の道を開く神権のすべての鍵と共に，イエス・キリストの福音が今ここにある。

ジョセフ・スミスは古代の予言者と同様，啓示によって召された。バプテスマのヨハネは，ジョセフとオリバー・カウドリにアロン神権の鍵を回復した。その後，ペテロ，ヤコブ，ヨハネがメルケゼデク神権の鍵を回復した。エライジャはカートランド神殿を訪れて，生者と死者を結び固める祝福の鍵を回復した。

ジョセフ・スミスは亡くなる前にすべての鍵を十二使徒定員会に授けた。神権の権能の鍵はこのようにして今日に至るまで維持されてきた。そして救い主イエス・キリストが福千年の統治を始める時まで保持される。

私たちはあらゆる人がこの福音に耳を傾け，受け入れるよう勧めるものである。あらゆる人が永遠の生命の祝福を受け，子羊の覚えの書にその名を記録され，義の民に約束された祝福，永遠の生命の祝福にあずかるよう，私たちは世界のあらゆる民に呼びかけるものである。私はこの教会が神の王国であることを証し，イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

正直と高潔



十二使徒評議員会会員

デルバート・L・ステイプレー

信仰箇条第13条の最初の部分に，「われらは正直なるべきことを信ず」という言葉がある。この正直という言葉は多くの意味を含んでいる。高潔，誠実，真理に従う，公平，誉れ，徳，清い生活，善を行なう性格，人との交わりにおける公正さなどである。

これらは末日聖徒にとって是非とも必要な徳である。

末日聖徒イエス・キリスト教会は，人に知られているうちでは最も崇高な理想と原則と標準を掲げている。教会，その教え，あるいは教会を表わしているもので，私たちが恥ずべきものは何ひとつない。私たちの教会は，世界の人々の生活に測り知れないほどの良い影響を及ぼしているのである。

ロバート・バーンズは次のように言った。「正直者は神の最高の傑作である。」高い地位にある人々の間でも正直と高潔が退潮し，徳が失なわれつつある今日，だれかがこれらの原則を熱心に教え，実践し，人格を形成する上で欠くことのできない要素であることを強調しなければならない。わが国の行く末を決定する人に完全な高潔さがますます要求されてきている。さもないとこの国の自由は脅かされるであろう。国内の政界，実業界，財界，金融界の不正直，汚職，腐敗などが，世界の指導者としてのわが国の立場と力を弱めているのである。

私たちはへりくだりかつ誠実に，私たちよりも優れた方がおられ，その方から，私たちの人生に意義と目的をもたらす律法が与えられていることを積極的に認める必要がある。また，正直，尊敬，名誉などは街角で安売りしているような代物ではないことを知る必要がある。これらはすべての人が日常生活の中に取り入れなければならない要素である。

カーライルは言った。「正直になりなさい。そうすればこの世から悪人が一人減ったことがわかる。」正直であって善良でないという人がいるだろうか。逆に善良であって正直でないという人がいるだろうか。正直はまず自分から始めるべきであろう。そうでなければ，他人が正直であるかどうかわかるはずがない。私たちが他人を見るとき他人がどうあるかではなく，私たち自身がどうあるかという尺度で見るのである。私たちは一人一人がまず正直になること，すなわち他人との交わりにおいて正直であること，教会員として正直であること，また神の戒めを正直に守ること，これらの責任がある。

モーサヤの息子たちについて次のように記されている。「かれらはみな神の命令に服従することと，神の前に正しく真すぐに暮すこととを教えられ，真実な心を持つ真面目な青年であった。」（アルマ53：21）

両親が正直，高潔という徳を完全に備えているならば，それらは子供たちに受け継がれ，子供たちへの大きな贈り物となるであろう。両親は自分たちが持っていないものを子供に与えることはできない。従って私たちは，福音の教えであるこれらの完全な理想と原則に加えて，立派な人格と人生を約束するあらゆる徳を身につけなければならない。そしてそれらが完全に具わると，もはや私たちの性質の一部となり，親となったときも容易にそれらを子供たちに伝えることができるのである。箴言には次のように記されている。「正直に歩む義人―― その子孫は彼のゆえにさいわいを受ける。」（欽定訳箴言20：7）この言葉はまことに真実であり，私たちが基本とすべきことである。

親として私たちは子供に正直だろうか。責任逃れにうそを方便にして

はいないだろうか。両親の間違った模範に従っている子供を責めることができるだろうか。両親に対する指示が教義と聖約の中に記されている。「また両親はその子供たちに祈ることと，主の前に正しく歩むこととを教えざるべからず。」（教義と聖約68：28）

子供に正直を教えるには，親が模範を示さなければならない。結婚している皆さんは，伴侶に対して正直だろうか。道徳的に清く正しい生活を送っているだろうか。私たちは不正を支持することはできない。もしそのようなことをすれば，私たち自身と子供たちの永遠の救いが危うくなるからである。私たちは主の前に正しく歩み，あらゆる点で正直でなければならない。そうしてはじめて，高度の道徳観と倫理を持ち，あらゆる行動にその影響を及ぼすという祝福を受けることができるのである。

ジョージ・エリオットはこう述べている。「人生に失敗があるとすれば，それはただひとつ，自分の知る最善のものに誠実でないことである。」

私たちは生涯を通じて，自分にとって不利な過ちだけでなく，益になることであってもそれが過ちであれば正していかなければならない。そのときはささいなことのように見えても，人格を築く上では大切な要素となるのである。わずかな怠慢から重大な過ちと悪習が生まれるからである。買い物に行っておつりを余分にもらったりする経験はだれにでもあると思う。逆におつりが足りない場合もある。自分に不利になる過ちにはだれでもすぐにそれをとがめるものである。しかし，正直は，心からの，そして非の打ちどころのないものでなければならない。

従業員を使って事業をしている人は，彼らに対して正直だろうか。規則は全員に適用しているだろうか。それとも特定の人だけは適用を除外するような規則の守り方をしているだろうか。

雇われている人は，1日の仕事を誠実に果たしているだろうか。昼休みの時間を超過したり，うその口実をもうけて不必要な外出をすることはないだろうか。同僚に対しては，期待されている以上の援助をしているだろうか。それとも最少限にとどめているだろうか。

商売をしている人は，だれにもわからないからと言って，請求書を水増ししてはいないだろうか。このようにしてもうけているつもりでも，その人は必ず自分の不正直は意識しているし，だまされた人もわかるのである。だますことも一種の不正直である。これは当事者だけでなく周囲の人々をも傷つける。

教師である皆さんは正直に採点しているだろうか。生徒の努力に応じて評価しているだろうか。それとも生徒の個性を無視しているだろうか。チームを勝たせるために採点をごまかしたり，規則を無視したりすることは不正直な行為であり，これは避けなければならない。活動が本来目的としている人格の形成や霊的な価値よりも，勝つことの方に重きが置かれるような状態を招いた場合，その指導者の指導には何か欠けている点があるはずである。法律や規則に触れないからといって，不正を正当化してはならない。法律や規則は人を正直にすることはできない。間違った習慣は若人を不正直へと追いやる。小さなさして重要とも思われない習慣がやがては，不正直，名誉を重んじない，誠実な心の欠如といった重大な習慣へと発展するのである。人生で遭遇する数々の問題を克服するために是非とも必要な徳を人々の心と人格の中に植え付けなければならない。

学生や青少年のために一言申し上げたい。私たちは彼らの望みや必要に対して誠実にまた正直に耳を傾けているだろうか。私たちは本当に彼らを理解しようと努めているだろうか。それとも，単に私たちが彼らに必要だと思うことを与えているにすぎないのだろうか。

教会の各組織で教師の責任を受けている人は，教えていることを実践しているだろうか。二通りの標準を掲げてはいないだろうか。最近，ある既婚女性の教師が非常に短かいミニスカートで教会にやって来た。彼女は自分で守っていないのに，教会の服装の標準について教えることができるだろうか。シェイクスピアはこれをうまく表現している。「さて，最後にいちばん大事なことは，おのれに忠実なれ，ということだ。さすればかならず，夜が昼につぐごとくにじゃな，他人に対しても誠実ならざるを得ん。」（中野好夫訳，ハムレット，第1幕第3場）

私たちの人生の目的には，正直と誠実が具体的な形で表われるものでなければならない。同意したことは必ず守り，自分の過ちに対しては進んでその代価を支払わなければならない。正直と高潔は友情と信頼を生み，さらには人々から絶えず好意と援助を受けるという配当まで付く。人は，正直で高潔な人を見ると，自分の生活を変えてまでもそのように誠実で頼りがいのある人の役に立とう，助けをしたいと望むようになるものである。

何年も昔のこと，ある父親は幼ない息子にこのようにして正直を教えた。この息子は父親が2人の友人と共同経営している店に行った。以前からポケットナイフを欲しいと思っていた彼は自然にショーケースの方に足が向いて，ナイフを1本取りしまいこんだ。だがこのことは父親に

知れてしまった。父親は息子を連れてショーケースまで行き，元に戻させた。そして，父親は，この店の持ち主は自分のほかに2人いること，従ってポケットナイフの三分の二は彼らのものであることを説明した。店がすべて父親のものではないので，息子といえども何ひとつ取ることはできないと諭した。この父親は仕事の上でも正直で誠実な人だった。彼は取り引きをする時，自分がどのような損失を被ろうとも，絶対に正直を通した。このため彼は公平な人だという評判を受けていた。彼にとってこの特質は金銭よりも大切だったのである。

人は多くの罪を見逃がすことができるが，不正直という罪はなかなか許しがたいものである。人の弱さには同情を寄せ寛大になることができる。しかし，不正直な人とかかわりをもっていると，耐えがたい不安感に襲われるのである。

ジョージ・ワシントンは正直を強調して次のように述べている。「私はすべての肩書きの中で最もうらやまれる肩書，つまり正直な人と常に言われるような堅い意志と徳とを持っていたい。」

救い主が十字架にかけられるまでの出来事を語らずに，正直について語ることができるだろうか。イエスが祭司長や律法学者たちから裁判を受けるために，ピラトの前に引き出されたとき，ピラトは救い主に何の罪も認めなかった。しかし，ピラトはイエスの命をねらって騒ぎ立てる者たちを満足させるために，正直，高潔よりも名声を大切にして，彼らの要求を受け入れた。

兄弟姉妹の皆さん，私たちはキリストのまことの教会に属している。この教会の会員であることは，栄えある特権であり，機会であり，祝福である。私たちは，主が子らを導くために与えられた啓示を堅く守らなければならない。私たちはあらゆる行動，あらゆる人との交わりにおいて，原則，理想，標準，誓約に忠実であろうではないか。また正直に，真実の心をもって物事に対処しようではないか。常に誠実であって，人人に教えることは自ら完全に実践しようではないか。

「われらは正直なるべきことを信」じている。また私たちは「真実，貞潔，慈善，高徳なるべきこと，およびすべての人に善を行うべきを信」じている。

兄弟姉妹，私はキリストの福音の真理について揺るぎない証をもっている。私はこれらの真理が私たちに導きと恵み，祝福と救いをもたらすために与えられたことを知っている。

私は皆さんに以上のことを証する。隣人との交わりにおいてキリストを手本にしなければならない。そうすれば，私たちは模範となり，救い主イエス・キリストのしもべとしてふさわしい者となるであろう。これらのことをへりくだり，イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。



証と祝福

大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する兄弟姉妹の皆さん，間もなく栄光と霊感にあふれた大会を終えようとしている。私たちの心は，私たちの上に豊かに注がれた祝福に対する感謝の気持で満たされている。

私たちはこの大会を通じてキリストのみ言葉を心ゆくまで味わってきた。また聖霊の力によって理解が早められ，霊とまことをもって主を礼拝してきた。

私はこれまで語られてきた数々の説教に加えて，この大いなる業が真実なものであって神のみ業であることを証し，さらに全世界の忠実な聖徒に祝福を与えたいと思う。

私は皆さんをはじめとする全教会員に，さらにこのことについては全世界の人々に申し上げたい。すなわち，恵みと愛の父は，この末日に天より再びそのしもべである予言者たちに語っておられると。

御父は，すべての人々に愛子のもとへ行くよう呼びかけておられる。そして御子を知り，御子にならい，御子のくびきを負い，福音の律法に従うことにより自らの救いを得るよう勧めておられる。御父のみ声は，栄光と誉れの声であり，この世にあっては平和を得させ，次の世にあっては永遠の生命を得させる声である。

私は神が生きておられること，神は限りない永遠の贖罪を成し遂げるため生みたもうた独り子を世に遣わされたことを知っている。

イエス・キリストは神の御子である。イエスは，アダムの堕落によって世にもたらされた肉体と霊の死から人々を解放する力を御父からお受けになった。

主は地上に主の教会すなわち王国をお建てになった。主が教会をお建てになるのはこれが最後である。そして，この末日の王国には聖なる神権の権威と権能とがある。この教会は福音を教え，信じ従うすべての人に祝福をもたらしている。

私は，あらゆる宗派，団体の善良で献身的な人々を決して無視しているわけではない。彼らは，そのすべての良き行ないに対して祝福と報いを受けるであろう。しかしながら，厳然たる事実がある。すなわち，天上の住まいで完き報いを受けるよう人々を備えさせる律法と儀式を完全な形で有しているのは私たちだけである。従って，私たちはあらゆる地に住む善良で気高い人々，高潔で献身的な人々に申し上げたい。現在持っている良いものを大切にし，あらゆる正しい原則に忠実であっていただきたい。けれども，さらに一歩進んで，昨日も今日もとこしえに変わることのない神が再び民に注がれた光と知識を手にしていただきたい。

ここで私は，天父が主の民を豊かに祝福したもうよう，最大の祝福を与えたもうよう祈る。

願わくは，聖徒たちが世の圧力や誘惑にもめげずに固く立ち，神の王国につける事柄を第一に考えて生活し，あらゆる信頼にこたえ，あらゆる誓約を守るように。

若き次代を担う人々が思いと体を清く保つように祈る。不道徳，幻覚剤の使用，また国中に広がっている反抗の風潮や不作法とかかわりを持つことがないように。

父よ，あなたのみたまを子らに注ぎ，彼らが世の危難から守られ，清く純粋であって，あなたのみ前に帰り共に住むにふさわしい者となるよう祝福して下さい。

また，あなたのみ顔を仰ぎ見ることを望み，徳高くあなたの前を歩むすべての人々を守り，彼らが世の光となり，地上におけるあなたの目的を成就するしもべとなることができるよう祝福して下さい。

また，みたまがこれより後とこしえに私たちと共にあるよう，主イエス・キリストのみ名により祈り申し上げる。アーメン。

目　次

第141回 半期総大会
1971
10.1-3

時の動き

1971

5.23　トルコ東部に大地震，死者推定3千人。

6.17　沖縄返還協定調印。

7.30　全日空機に自衛隊機が接触。両機墜落。死者162人。史上最大の航空機事故。

8.9　北アイルランドにおける“宗教戦争”激化，最悪の事態。市街戦で14人死亡。

8.27-29　英国マンチェスターにおいて初の地域総大会。

10.1-3　第141回半期総大会

大管長会


第一副管長
ハロルド・B・リー

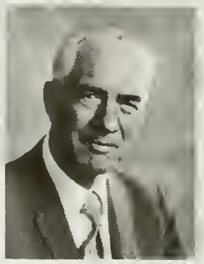

大管長
ジョセフ・フィールディング・スミス


第二副管長
N・エルドン・タナー

十二使徒評議員会


スペンサー・W・キンボール


エズラ・タフト・ベンソン


マーク・E・ピーターセン


デルバート・L・ステイプレー


マリオン・G・ロムニー


リグランド・リチャーズ


リチャード・L・エバンズ


ヒュー・B・ブラウン


ハワード・W・ハンター


ゴードン・B・ヒンクレー


トーマス・S・モンソン


ボイド・K・パッカー

大祝福師


エルドレッド・G・スミス

「主は生けりと知る」



大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する兄弟姉妹の皆様。再び巡って来た末日聖徒イエス・キリスト教会の総大会に集う皆様を，心から歓迎申し上げる。私は，皆様の前に立ち，この偉大な末日の業が，真理の業であり神のみ業であるという証を述べる特権のあることを，喜ばしく思っている。

私たち末日聖徒は，祝福された民であり，恵まれた民である。「祭司の国となり，また聖なる民となる」（出エジプト19：6）ことは，私たちに与えられている特権である。主は，いにしえの父祖たちを選ばれたときと同様，「地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで，自分の宝の民」（申命7：6）とされたのである。

私たちの立場は，永遠の真理に基を置くがゆえに力強いものがある。私たちは，この最後の福音の神権時代に恵み深い御父が私たちに豊かに注いで下さっている光の中を歩む限り，悪魔の火矢を恐れる必要もないし，世の状況に煩わされる必要もない。

主は，限りない知恵をもって，古代の予言者たちと交わされた誓約や約束を果たすために，この末の日に，完全なる永遠の福音を回復された。この福音とは救いの計画である。この救いの計画は，この世の基が置かれる前，永遠の大会議において定められ，確立されたものである。そしてまた，世界各地にいる御父の子供たちの救いと祝福のために，今日再び啓示されたものである。

この偉大にして永遠の計画によれば，救いはキリストのうちにある。キリストが自らの血を流すことによって果たされた，無限にして永遠の贖いがあってはじめて，この救いは可能となった。主は神の御子であって，いわゆる堕落によってもたらされた肉体と霊の死から人類を贖うために，この世に来られたのである。

主の慈悲と恵みにより，すべての人は墓より出で来たり，この世でなした行為によって裁かれる。それから，主の律法を信じ，それに従った人々は，御父の王国において永遠の生命を受け継ぐのである。この栄えある祝福は，主の贖いの犠牲のゆえに可能になったのであり，全力を尽くして主を愛し主に仕える人々に与えられるものである。

さて私は，人が救いを得るために従わなければならないこれら一連の律法が，イエス・キリストの福音であって，今日，予言者や使徒たちに啓示されたことを証する。また，現在，主が再びこの地上に設立された教会によってその儀式が執り行なわれていることを証する。

だが，これら偉大にして永遠の真理も，人が救われたいと思うなら必ず従わなければならないものではあるが，ただ単に私たちのためにのみ啓示されているのではない。あらゆる国民，血族，国語の民のものなのである。

キリストの降臨をさかのぼることおよそ600年，偉大な予言者ニーファイは，その民に向かい，次のように言った。「……全世界を治め導きたもう神にして羊飼である御方はただ一人だけいますから……

この羊飼が……よろずの国民に現われたもう時がくる。」（Ｉニーファイ13：41－42）

この約束の日は，今や，明けようとしている。この時代は，福音を全世界に宣べ伝え，あらゆる国々に主の王国を打ち建てるために，特別に定められた時である。どの国にも善良で正しい人々がおり，その人々が真理の呼びかけに答え，教会に入って来て，自国の民を導く光となるのである。

最近，英国のマンチェスターで開

かれた地域大会でも，私たちは，英国民の持つ力強さと指導力を示す数多くの実例を目のあたりにした。英国にあっても，この教会は既に立派に独り立ちし，英国の聖徒たちも，自国の人々のために福音を教え管理する備えと力ができている。

そして，英国の聖徒たちと同様のことが，他の諸国においても言えるし，また将来言えるようになるであろう。福音は全人類のためのものであり，主は，福音を受け入れる人々がその真理に従って生活し，またその真理を自国の人々にそして同じ言語の人々にも伝えるよう，望んでおられる。

そのためここで，兄弟愛の精神から，私たちは，あらゆる人々が永遠の生命なる言葉に耳を傾けて下さるよう勧める。この言葉は，今日，予言者ジョセフ・スミスとその同僚たちに啓示されたものである。

私たちは，御父の他の子供たちが，「キリストの御許に来てキリストによって全く」なり「すべて神のみこころに背くことを捨て」るよう勧める。(モロナイ10：32)

また，御父の他の子供たちがキリストとその福音を信じ，キリストの教会へ来て，聖徒らの群れに加わるよう勧めるものである。

私たちは，既に福音の実を味わい，それが良いものであることを知っている。それゆえ，あらゆる人が同じ祝福を受け，私たちの上にこれほど豊かに注がれてきたみたまと同じみたまを受けるよう，心から願っている。

教会における私たちの責任は，霊とまこととをもって主を礼拝することである。私たちは，心をつくし，力をつくし，精神をつくしてそうしたいと努めている。イエスは言われた。「主なるあなたの神を拝し，ただ神にのみ仕えよ。」(マタイ4：10)

私たちは，礼拝とは，祈りや説教や福音の実践をはるかに越えたものであると信じている。礼拝の最高の行為とは，戒めを守ることであり，神の御子の足跡に従うことであり，神の喜ばれることをすることである。単に口先だけで主に仕えることと，主の示された模範に従うことによって主のみこころを敬いあがめることとは，全く別のことなのである。

私たちの救い主イエス・キリストは，偉大な模範である。私たちの使命は，キリストに倣った生活をし，キリストが望んでおられることをすることである。「汝らはいかなる人物にてあるべきか」と，ニーファイ人の弟子たちに問われたキリストは，次のような解答も与えられた。「まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」(IIIニーファイ27：27)

私は，キリストの足跡に従う特権のあることを喜びとしている。また，私がこの世で受けてきた永遠の生命なる言葉に心から感謝している。さらに，終わりまで忠実に真理に従って歩むならば，来るべき世では，私自身が永遠の生命にあずかることができるという希望に，心から感謝している。また，そのように言えることを心からうれしく思っている。

私は生涯を通じ，福音の諸原則について研究し，深く考え，そして主の律法に従った生活をするよう努めてきた。その結果，私の心の中には，主に対し，主のみ業に対し，さらにこの地上にあって主の目的を果たそうとするすべての人々に対し，大いなる愛が育まれた。

私は，主が生きておられることを，主が天の高きと地の深きとを治めておられることを，そして主の目的があまねくゆきわたることを，知っている。キリストは私たちの主であり神である。主御自身がジョセフ・スミスに次のように言われたのである。「主は神にして，主の他に救い主なければなり。

主の知恵は偉大にして，その為したもうところは驚嘆すべく，その御業の終は誰も知る者なし。」(教義と聖約76：1－2)

私は，いにしえのヨブと共に，声をそろえて申し上げたい。このヨブの知識は，私の知識と同じ源から与えられたものである。「私は知る，わたしをあがなう者は生きておられる，末の日に彼は必ず地の上に立たれる。」「私は肉に在りて神を見るであろう。しかも私のこの目で見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。」(欽定訳ヨブ19：25－27)

さらに，私は，ヨブの証に私の証を加え，あの苦しみと悲しみの底から叫んだヨブと心をひとつにして，感謝を込めて叫びたい。「主が与え，主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな。」(ヨブ1：21)

私たちが皆，聖なるみたまの力によって導きを受け，主の前に正しく歩むことができるよう，また，従順な者のために備えられている王国の住まいにおいて永遠の生命を受け継ぐことができるよう，切に祈っている。

主イエス・キリストのみ名により，祈り申し上げる。アーメン。

「汝ら警めて備えを為せ」



大管長会第一副管長・十二使徒評議員会会長

ハロルド・B・リー

愛する兄弟姉妹の皆様，そして放送に耳を傾けておられる友人の皆様。私は，皆様の前に立っているこれからしばらくの間，みたまの導きを受けることができるよう，祈っている。

しばらく前のこと，私は，この地方でも大きな，ある新聞社から派遣された，ひとりの女性記者の訪問を受けた。彼女の質問は，専ら，教会の伝道活動に集中した。私たちは，世界中にまたがっている伝道活動について，一通り説明した。伝道部も今では世界中に広がり，フィージー諸島，韓国，香港，インドネシア，タイ，スペイン，イタリアといった新しい地域から，遠方のラテン・アメリカ地域やインディアンの部族の中にまで及んでいるのである。こうして説明を受けた後，彼女はこの世界的規模の伝道活動についてしばらく考え，やがてこう尋ねた。「あなたたちは，世界中の人々を改宗するつもりでいるのですか。」

私は，救い主が初期の弟子たちに命じられたときの言葉を引用して答えた。

「そして彼らに言われた，『全世界に出て行って，すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。

信じてバプテマスを受ける者は救われる。しかし，不信仰の者は罪に定めらる。』」

それから主は，信ずる人々に伴うしるしについて語られ，

「主イエスは彼らに語り終ってから，天にあげられ……た。」

そして，福音書の記録者たちが書いているように，「弟子たちは出て行って，至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き，御言に伴うしるしをもって，その確かなことをお示しになった。」（マルコ16：15―16,19―20）

それから私は，彼女に，この神権時代の初期に主の弟子たちに啓示された言葉について話して聞かせた。そこには弟子たちの働きによって，次のようになると書かれている。「福音の言は世界の果まで出で行く……なり。すなわちまず異邦人に行き，然る後見よみよ，ユダヤ人に復り来らん。

その日……この能力を授けられたる者たちの口より，あらゆる人々は己が国語と己が言葉にて完全なる福音を聞かん。」（教義と聖約90：9,11）

私たちは，この教会の業が世界中に急速に広まっているのを目にしている。主が教会に与えられた初期の啓示は，私たちに今日の時代のために備えをせよと言っているように思える。主は次のように約束されたのである。

「見よ，みよ，われ汝らの羊群（これはもちろん，教会員たちのことである）を護り，長老たちを起して彼らに遣わさん。

見よわれその時期に於けるわが業を急ぐべし。」（教義と聖約88：72―73）

ここ数カ月の間，私たちは極東諸国とヨーロッパ諸国を訪問して，しばしの時を過ごした。私たちは，訪問した先々で，数多くの教会員や，信仰を異する人々と直接お会いする機会に恵まれた。

私たちはこの訪問を通じ，霊的な導きが必要とされていることの紛れもない証拠が，これまでになく数多く見られたように思える。私たちは，どこの国でも，様々な種類の問題に直面して解決を求めている人々と出会ったからである。私たちはいたるところで，人々が自分の所属している教会に対して，かなりの不満を抱いていることを感じた。こうした諸教会の衰退の本当の原因は，ある評論家が指摘した，次のような事実にあるのではないかと思われる。「既存の宗教は，外部からの攻撃を受けて

いるわけではない。ジェーン・フォンダやその類の人間の流行に遅れを取るまいとして，絶えず自殺行為を繰り返しているのである。」そして「彼らは，聖書をあざ笑って排斥し，かび臭い教会と決別し，さらに，最近の流行に一喜一憂するのである。」（Dr. Max Rafferty, "*Church Should Examine own Action in Decline of Religion*"『宗教の衰退する中で，教会は己が行為を省みよ』「ソルトレーク・トリビューン」1971年9月19日，p. A-13)

人々は神から授けられる権能とはどういうものなのか，その真の定義を求めているのである。

人々は，安全や救いを求めて騒いでいる。単に来世での救いだけではなく，この世で，まだ死なないうちに手に入れることのできる現世的な救いも求めているのである。そうした人々のどの教会でも，個人的な面の福祉にも関心を払う必要性が叫ばれている。そうすれば，教会全体の活動や，私たちの教会に見られるような兄弟愛の結び付きを通して，お互いの自立を助け合うことができるのである。この兄弟愛があらばこそ，霊的な面で必要なことだけでなく，物質的に，また社会的に必要なことにも関心が払われるのである。

人々が探し求めている教会というのは，そこに集っている会衆の中に一致が見られるだけの教会ではない。その上に，人類が直面している様々な大問題に対処するために，皆一致して努力しようとする教会であり，一国の教会員が，同じ信仰を持つ人人と，大陸や大洋を越えて手をつなぎ合うことのできる教会であり，人類は皆兄弟であると宣言している教会である。この兄弟愛があれば，人人は，健康や教育の面でも，家族のきずなを強めるという面でも，建設的な教会活動の運営，促進の面でも，確信をもって助け合うことができるからである。さらにまた，人々が求めている教会というのは，青少年に正しい原則が教えられていて，彼ら自身も立派な指導者になれるような教会であり，教会全体の活動が豊富なために，あらゆる面で誘惑の手を伸ばしている悪に手を染める時間のないような教会なのである。

簡単に言えば，世界中いたるところで求められているのは，使徒ヤコブが次のように定義している，キリスト教としての基本理念の上に固く立っている教会なのである。「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは，困っている孤児や，やもめを見舞い，自らは世の汚れに染まずに，身を清く保つことにほかならない。」（ヤコブ1：27）

こうした宗教には，中央に強力な権能があって，その権能を持つ人々の指し示す道は絶大の信頼をもって迎えられる。そうすれば，力ある者たちは，惜しみなくその指導力や資産や才能を提供することであろうし，力のない者であっても，持てる力の限りを尽くして自立しようとすることであろう。また，緊急時にも，兄弟愛がはぐくまれるような方法で対処することも可能となり，聖典に書かれている「貧しい者の顔をすり砕く」（イザヤ3：15）ような，愚かしい方法はとらなくなるであろう。

私たちの教会で，今ほど，指導者の養成や，効果的な教授法の訓練などの必要性が叫ばれている時はない。「人々をなだめ，この人たちをすかして肉欲をほしいままにさせる」悪魔の，悪賢い，あくどい手だてに対抗するためである。また悪魔は，人々をそそのかして怒らせ，万事がよろしいと言い，そして，人々にへつらって，地獄や悪魔などは存在しないと言わせている。これこそ，古代の予言者たちが警告した，悪魔の手口である。「このように悪魔はこの人々をだまし，心を配って地獄へつれて行くのである。」（IIニーファイ28：20―22参照）

偉大な繁栄を築き上げながら，かつての神権時代の民のように，繁栄の暁には神のことを忘れてしまっているという紛れもない証拠を世界各地で見せられ，これには驚かされる思いであった。彼らは，金銭でなんでも買えるという点では豊かであったかもしれないが，金銭では買うことのできない，貴いものを，ほとんど持っていなかったのである。

予言者たちは，安楽で隆盛を極めるがためにおごり高ぶる人々にどのような兆候が現われるか，はっきりと警告を与えている。

「また主がその民を栄えさせ……たもうことも明らかである。……が，同時に民は安楽で隆盛を極めているためにその心をかたくなにし，その神である主を忘れて聖者を足の下にふみにじることも明らかである。」（ヒラマン12：2）

私たちもまた，こうした事態を現実に目にしている今，先人たちと同じ嘆きを覚えるのである。

「ああ，世の中の人はいかにもおごり高ぶってたやすく大言を吐き，もろもろの罪を犯すが，かれらはその神である主を思いその訓えに耳を傾け，智恵の道をふむのがおそいではないか。」（ヒラマン12：5）

こうして考えてくると，山上の垂訓を終わるにあたって主の言われたみ言葉が私たちにとってどういう意味あいを持つかがはっきりとしてくる。この時，主は，現在の試練の時代を生き残れる人，そして教会（もちろん，これは個々の人々の集合という意味の教会である）は，岩を土台として建てている人であり，また教会であると言われた。これはつまり主が語られたように，惑わしの風

が吹こうとも，不潔と邪悪の洪水に飲み込まれようとも，そしてまた，批判と嘲笑の雨が，真理と固く結び付いている人々の上に降り注ごうとも，真の教会の土台となっている根本的かつ不変の原則に耳を傾け，さらにこれに従うことなのである。

私たちの所へは，引きも切らず，各界の有名人の訪問があるが，彼らが，教会とその広汎な活動について知って，等しく口にする言葉は，ある意味では，使徒パウロが昔ローマ人にあてて言った言葉を，再確認しているにすぎない。

「わたしは福音を恥としない。それは……すべて信じる者に，救を得させる神の力である。神の義は……啓示され……（そして，これから読む箇所に特に注目して欲しい）神の怒りは，不義をもって真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して，天から啓示される。」（ローマ1：16—18）

ボネビル・ナイフ・アンド・フォーク・クラブの有名な講師であるジョージ・ローニー氏は，私に次のように言った。彼の求めに応じて，私たちの教会の福祉活動の一部を案内したあとのことである。「あなたたちの教会の福祉計画は，世界中で実施されるに違いありません。私は，その計画が実際に実行されているのを拝見した今，いつか，これが，キリスト教徒の生活規範になることを信じて疑いません。」

著名な訪問者たちが，教会の教育制度について尋ねることもしばしばある。この制度のもとで，教会や学校施設の外でも，またセミナリーやインスティテュートを通じて，教会はあらゆる家庭にまで手を差し伸べている。小さな子供のためには，週日にホーム・プライマリーがあり，青少年のためには，週日に家庭学習コースがあり，こうしてキリスト教徒としての生活に必要不可欠な原則が教えられているのである。

訪問者たちは，ほとんど例外なく，教会の学校の講内でどうやって規則が守られ，秩序が保たれているのか，そのひけつを尋ねる。このような質問が出れば，当然，家庭の夕べのプログラムについて説明することになる。教会の青少年の大部分は，そうしたプログラムを行なっている家庭で育てられているからである。また，大学に籍を置く青少年の，学生組織の方にも説明が及ぶ。また学生たちは，教会組織に加入し，主の計画にあるままに，人はいかにして責任をもって人と交わることができるかということについての訓練を受けるのである。

こうした事例や，類似するその他多くの事例を見てみると，私たちは，もっとえりを正す必要があることも感ずる。私たちは，一層熱心に，私たちに与えられている完全な計画を実行するよう努めなければならないこともわかる。この計画によって世が救われるからである。だがそのためには，どの人も皆，「何事も結局は好都合となる」よう，また主のみ名の栄光のために，「熱心に求め，常に祈りて信」ずるようにならなければならない。（教義と聖約90：24参照）

私たちは，イギリスのマンチェスターで開かれたイギリス諸島の教会員のための，歴史的な大会から帰って来たばかりである。そこには，イギリス全土から，1万2千人以上にも及ぶ大会衆が詰め掛けた。そして，そこに表われた関心の強さは，神の王国，つまり末日聖徒イエス・キリスト教会が，今や世界的な教会となり，イギリスの教会員たちは，その母国で，今までに増してしっかりと教会を打ち建てようと固く決心していることの証でもあった。これが劇的に表現されたのは，3日間の大会の最後に，地元の指導者のひとりがこの大会のために作曲してくれた歌を歌ったときのことである。「ここぞ我らの地」という題名のこの曲は，次のような印象的な歌詞で終わっているものである。

「神のみ業は我らのもの。破れることはなし。
我らの心と力とをもて働かん。
神我らと共に在(ま)せば，恐るることなし。
ここにて我ら生き，ここにて我ら仕えん。」
（アーネスト・ヒューエット，
ライセスターステーキ部長）

私たちは，この種の最初の総大会をイギリス諸島で開催した。教会の初期の発展に多大の貢献をしてくれたことに敬意を表わすためである。これは，イギリス諸島に住む人々の間に，イスラエルの民の血が流れていることの証拠である。

私たちは様々な国々を訪問しているが，それが極東の国々であろうと，ヨーロッパの地域であろうと，ラテンアメリカ諸国であろうと，あるいはまたその他の国々であろうと，私たちは，どの国でも，イギリス諸島で経験したのと同じように，自分たちの母国で教会を発展させたいという地元教会員たちの強い願いのあらわれを，はっきりと見て取ることができた。どの国の教会員も，いつか自国の教会員がもっと指導力を身に付けて，地方部や伝道部や神殿を管理する，責任ある地位に就ける日が到来するのを待ち望んでいる。すでに正しい原則が教えられているのであるから，充分な力のあることが実証されれば，自ら治めることも可能となろう。

各国の指導者たちが，教会の訓練をいとも簡単に受け入れてしまうのには，いつも驚かされる。教えを受け，道を示されれば次は自分たちで

進んで行くのである。教会員たちは，み業の真髄に触れると，聖なる神殿へ行きたいという強い願望を持つようになる。神殿では，約束されている神権の祝福を受けることができるからである。この祝福により，人は忠実であれば，来世において，天上で最高の特権にあずかることができるのである。

私たちの訪問先では，アメリカと言わず，外国と言わずどこでも，いわゆる恵まれない人々のために私たちはどんな努力を払っているのか，と尋ねられる。このような質問は，私たちに，色々のことを説明する機会を与えてくれる。新しい改宗者を見つけ出すことから始まり，一段階ずつ説明を続けていく。家庭の夕べのプログラムについても説明する。親たちが家族の問題を解決するのに助けを受けることのできるプログラムだからである。次に小さな単位組織から，日曜学校の集会，支部，地方部，そして最後には，ステーキ部へと話を進めて行くのである。ステーキ部が設立される目的は，主の啓示にあるように，「防御のためとなり，また暴風雨の避所となり，憤りのありのままに全地に注がるる時に一つの避所ともならんため」（教義と聖約115：6）である。

私は，この神権時代のごく初期に天の使いが青年予言者に語ったときの言葉について考えている。このみ使いは，教会を回復する目的は，人人に主の再臨の備えをさせることであると言ったが，私はこの言葉を思い出すたびに，弟子たちが，主の去られる前に，主のまわりに集ったときの光景を思い出す。このとき，弟子たちは，主に，再臨や世の終わりに伴うしるしについて尋ねた。また世の終わりのときの，悪人の滅亡についても尋ねた。主は，弟子たちに，再降臨が間近に迫ったとき，その前兆となる確実なしるしを幾つか教えられた。主は，大きな災難や，戦争や，ききんや，地震について語られたのである。

主が語られた数々のしるしの中でも，最も重大なもののひとつは，私自身もよく不思議に思っていたことであるが，主の再降臨の前に，偽キリストや偽予言者が現われるということである。彼らは，大いなるしるしと不思議な業を行ない，救い主が再び地上に戻って来られる栄光の日を待ち望んでいる信仰深い人々までも惑わそうとするという。私たちは，今日，現実にこうした状況を目の当たりにしている。ある人々は自ら全能者だと名乗り，人々の間で指導者になろうとしている。このように，大詐欺師は，今の時代に現実に存在している。自ら，神と名乗った者もいる。私たちは，更に，偽キリストや偽予言者が現われると語った主の予言を成就として，他にも同じような人々が現われ出ることが予想できるのである。

救い主は，聖徒たちが，主の再降臨の前兆について，はっきりと知ることができると，約束された。次の聖句は，救い主御自身が，どのようにして再降臨されるのかを語られた言葉である。

「だから，人々（偽キリスト）が『見よ，彼は荒野にいる』と言っても，出て行くな。また『見よ，へやの中にいる』と言っても，信じるな。

ちょうど，いなずまが東から西にひらめき渡るように，人の子も現れるであろう。」（マタイ24：26—27，ジョセフ・スミス1：25—26も参照）

私たちがこの聖句を心に留め，救い主がどのようにして現われるのかということについて，愚かな考えを捨てることができたとき，主の再臨の備えができたと言えよう。

この驚くべき出来事の備えとして，主は次のような勧告を与えられた。「だから，目をさましていなさい。いつの日にあなたがたの主がこられるのか，あなたがたには，わからないからである。

だから，あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである。」

そして，忠実な暮らしをしていたしもべたちに与えた，次のような約束がある。「主人が帰ってきたとき，そのようにつとめているのを見られる僕は，さいわいである。」（マタイ24：42，44，46，ジョセフ・スミス1：46，48，50も参照）

数日前のこと，私たちは，ペルー伝道部を管理する責任から解任されたばかりの若い伝道部長夫婦から，信仰あふれる報告を受けた。最近ペルーでは，歴史上最悪ともいえる惨禍が起こり，推定7万の人々が，地震の時に起こった山津波のためにその下敷きになったということである。この山津波はふたつの市に襲いかかり，両市とも完全に壊滅したと言われる。私たちは，それぞれの市にふたりずつ，計4人の宣教師を送り込んでいた。地震が起こった時，4人とも，主のみ業に携わっていたのである。ふたりの長老は，町はずれの家で家庭集会を開いて，福音を教えていたところであり，他のふたりの長老は，他の市で，準備の集会をしていたところであった。

息の詰まるような土煙のために，3日の間，なかば暗黒という恐ろしい状態が続いたが，彼らは，救い主が十字架にかけられたとき，3日間暗黒が続いたというが，それはこのような状態だったのではないだろうかと考えた。また主の再臨のとき，ふたりの人がうすをひいていると，ひとりは取り去られ，ひとりは残され，また，ふたりの者が畑で働いていると，ひとりは取り去られ，ひと

りは取り残されると書かれている聖句のことを思い浮かべた。(マタイ24：40—41参照)

地震が起こったときには，人は皆，そのときの状態で，すなわち映画館にいようが，居酒屋にいようが，酔払って人事不省になっていようが，そのときの状態のままで取り去られることになろう。だが，神の真のしもべたる者は，その義務を行なっており，主の勧告通り，こうした日の来たときに，「聖き所に立ちて動くことなかれ」という教えを実行している限り，守られ，生き長らえることができるのである。(教義と聖約87：8)

このためあらゆる国々に住む教会員たちに申し上げたい。自分の国内に立って，イギリスの聖徒たちが歌ったように言って欲しい。「神のみ業は我らのもの。破れることはなし。我らの心と力とをもて働かん。神我らと共に在せば，恐るることなし。ここにて我ら生き，ここにて我ら仕えん。」

世界中の忠実な聖徒たちと，心の正直な友人の皆様に申し上げる。この偉大な大会が終わったら，それぞれの故郷へ帰っていただきたい。

家族の祈りを持ち，家族の絆を強め，愛ある家庭を営んでいただきたい。

神権者として，見守る責任が与えられている人々には，「常に教会員を守護し，彼らと共にありて彼らを強くすべきものとす」(教義と聖約20：53) という神聖な務めをおろそかにしないでいただきたい。

指導者には，全精力を尽くしてすべてのプログラムを実行していただきたい。これは，なだれのように全地を押し流そうとしている邪悪の流れに対抗するために，今日，天から与えられたプログラムだからである。

指導者たちには，他の人々にも活動の機会を与えることによって，自分ひとりの重荷を軽くしていただきたい。人が皆，分け持つことにより，益を受けることができるからである。

なかんずく，権威と権能とをもってイエス・キリストの福音を教えていただきたい。そして，私たちの主イエス・キリストの神聖な使命について，絶えず証し続けていただきたい。

そして，心の正直な友人の皆様と，真心から真理を求めている人々に申し上げる。私たちは，「キリストの贖罪により，すべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることにより救われ得る」(信仰箇条第3条) と，厳粛に証する。生ける者と，死にし者の救いの鍵を持つ，権能を授けられたしもべたちの手により儀式が執り行なわれるとき，それが可能となるのである。

私は，私の声に耳を傾ける人々がすべて，この神権時代にあって，慰めを受けることができるよう，切に望んでいる。他の困難な時代に生きた人々も，こうして慰めを得，悪魔の誘惑から身を守ってきたのである。ここで，主のみ言葉に耳を傾けてみよう。主は，御自分の民のことを，幼児(おさなご)たちと呼んでおられる。

「怖るるなかれ，幼児らよ。そは，汝らはわがものなり。われは世に打ち勝ちたり。汝らは御父がわれに与えたまいしものに属すればなり。

御父がわれに与えたまいしものは一つも失わるることなし。

この故にわれ汝らの中にあり。われは善き牧者にしてイスラエルの首石なり。この磐の上に築く者は決して倒るることなし。

而して汝らがわが声を聞き，われを見，われ在るを知るの日来らん。」

そして，主は言われた。

「この故に，汝ら警めて備えを為せ。」(教義と聖約50：41—42，44—46)

私は，心から，この約束が，今日，あなたたちのために，また私のために与えられたものであることを信じている。私たちは，主に幼児らと呼びかけられるにふさわしい者とならなければならないのである。

これをイエス・キリストのみ名により，証申し上げる。アーメン。



「あなたはどこにいるのか」

大管長会第二副管長

N・エルドン・タナー

ここに集っておられる大会衆ならびに，放送に耳を傾けておられるすべての方々に，このように話をする責任が与えられ，私は心からへりくだる気持で一杯である。私は，話をする間，主のみたまと祝福が私たちの上にとどまるよう，心から祈っている。私は今日，神が最初にアダムに尋ねたもうた「あなたはどこにいるのか」という言葉について，その意味を話そうと思う。この質問は，今日の私たちひとりひとりにもあてはまる，直接的かつ鋭い質問だからである。

検討の過程を知的に進めるために，私たちはまず，人がこの地上に存在する目的について理解し，さらに神がなぜアダムにこのような質問をされたのかということについて理解する必要がある。アダムは全人類を代表してこの質問を受けている。世の造られる前の，天上の大会議において，神々は，人類の住まうべき地を造ることを決定した。そして神は言われた。

「……これによりて彼らを試し，何にてもあれ，主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。

而して，最初の位を保つ者は更に附け加えられ，最初の位を保たざる者は，最初の位を保つ者と同じ王国にて栄を得ることなからん。而して，第二の位を保つ者は，とこしえに栄光をその頭に附け加えられん。」（アブラハム３：25－26）

「われ神，わが像の如くに人を造れり。わが生みし独子の像の如くにこれを造り，すなわちこれを男と女とに造りたり。

われ神，彼らを祝福して彼らに言いけるは，豊に生めよ，殖えよ，地に充ちよ，地を従わせよ，また海の魚と空の鳥と地の上に動くすべての生物を治めよと。」（モーセ２：27－28）

「われ神，エデンの東の方に一つの園を設けてわが造りし人をそこに置きたり。……この園の手入れをなさしめ，またこれを守らしめたり。

……その人に命じて言いけるは，この園のすべての樹よりは汝の意のままに食うことを許さる。

されど善悪を知るの樹よりは汝食うべからず。然はあれども，食うと食わざるとは汝に任す，そは汝に与えられたればなり。されど，わが汝に禁じたるを忘るな。……」（モーセ３：８，15－17）

それゆえ，地球が人の住まうべき場所として造られ，その中にあるものがすべて，人の利益と，楽しみに用いるために与えられたことは，明らかである。だが，神は，アダムを通じて私たちに，生涯を心ゆくまで楽しみたいと思うなら，しなければならないことと，してはならないことがあることを，あわせて指摘された。言葉を換えて言えば，私たちには，利益と楽しみのためにあらゆるものが与えられてはいるが，「禁断の実」も幾つかあることを忘れてはならないということである。私たちは「禁断の実」をとると，人生を心ゆくまで楽しむことができなくなり，悲しみと後悔の念を味わうことになるのである。

天上の大会議において，人類の救いのために，ふたつの計画が提案された。キリストの計画が承認され，キリストは，世の救い主として選ばれた。そして，サタンの計画は，退けられ，彼は背いた。次のように記録されている。

「これを以てそのサタンわれに叛きて，われ主なる神のすでに人に与えたる人の自由意志を滅ぼさんとなし，しかもまたわが持てる権能を自らに与うべきことを求めたるにより，われわが生みたる独子の権能によりて

彼を投げ落さしめたり。

而して彼はサタンと成れり，実にあらゆる偽りの父なる悪魔となりて人を欺きだまし，以てわが声に聴き従わぬすべての者を欲するままに虜となすなり。」（モーセ4：3－4）

教義と聖約の中には，次のようにある。

「サタンは人々を煽て上げかくてかれらを亡びに導かんとす。

而して，かくの如くサタンは一つの奸計を企てて神の業を破らんと考えるなり。……

然り，サタンは人々に向いて言う。彼を亡ぼさんために欺きて待ち伏せを為せ。……彼はまたかくの如き甘き言をもて彼らに言う。……偽るとも罪にあらず，と。

かくの如く，サタンは……彼らを導きて，ついに彼らを地獄に引きずり落し，……

かくの如く，サタンはこの世をこなたかなたにさまよい歩きて人々の身も霊も亡ぼさんとす。」（教義と聖約10：22－23，25－27）

神がアダムとイブを園に置き，あらゆる木の実を自由に食べてよろしい，ただし，ひとつの木の実だけはとって食べてはならないと命じて，園を去られた直後，サタンは，ふたりを滅ぼすための極悪非道な計画を開始した。サタンが誘惑に成功したあと，神は園に戻られた。だが，アダムとイブは恥ずかしく思ったため，神の目から身を隠した。すると，神は言われた。「あなたはどこにいるのか。」私たちすべてに対して，個々にも，全体としても，あてはまり得る問いかけである。また，私たちと神や同胞との関係について，同様に自問してみるだけの価値のある問いかけである。

アダムは答えた。「『園の中であなたの歩まれる音を聞き，わたしは裸だったので，恐れて身を隠したのです。』

神は言われた，『あなたが裸であるのを，だれが知らせたのか。食べるなと，命じておいた木から，あなたは取って食べたのか。』

アダムはここで，私たちも皆，同じような気持ちになることがあろうが，他の人に責任を転嫁しようとして，言った。

「わたしと一諸にしてくださったあの女が，木から取ってくれたので，わたしは食べたのです。」

するとイブが言った。「へび（つまり，サタン）がわたしをだましたのです。それでわたしは食べました。」（創世3：9－13）

アダムとイブを取り巻く状況や今日の私たちを取り巻く状況から，はっきりわかることは，サタンの影響力や，人の誘惑に陥りやすい性質，そして人がその生涯で直面しなければならない誘惑や問題が確かに存在しているということである。だが，主は，人がそれを克服するための方法も，備えて下さっている。

神が，「あなたはどこにいるのか」と言われたとき，神は，アダムがどこにいるか知っておられた。全知全能の神は，何が起こったかを知っておられたが，アダムに自分のとった行為の重大さについて考えさせ，それを神に報告させるために，アダムを呼ばれたのである。だがアダムは，恥ずかしさのあまり，身を隠してしまった。

私たちも皆，「禁断の実」を取って食べたり，してはならないと命じられていることをしたりすると，その時のアダムのようになる。恥ずかしく思って，教会や神のもとから離れ，身を隠す。そして，罪の生活を続ける限り，神のみたまは，私たちから離れているのである。不従順や罪の中に，幸福は存在しない。私たちは皆，子供の頃から，正しいことをしていれば，もっと幸福になれると学んでいるはずである。

時には，私たちは，戒めを守ることがなぜ必要なのか，また，祝福を受けるには，それに伴う条件を満たす必要があるということを理解できないことがある。言えることは，主がそのような戒めを与えられたからということだけである。私たちはまた，なぜバプテスマを受けなければならないのか，なぜ，按手礼やその他の儀式を受けなければならないのか，説明することはできない。神の教えに疑いをさしはさむ人さえいる。だが，信仰によって，神の戒めに従うならば，私たちは約束されている祝福を受けることができる。イエスは，私たちが幼子のようになって，大きな信仰を持たなければ，天国に入ることはできないと，言われた。私たちはそのような信仰が必要なこともはっきりと知らなければならない。

さらにまた，私たちは，従順の大切さも理解しなければならない。予言者サムエルは，「従うことは犠牲にまさり，聞くことは雄羊の脂肪にまさる」（サムエル上15：22）と教えた。聖典には，信仰を唯一の根拠に従順を続けた例が，数多く記されている。アダムとイブがエデンの園から追放されたあと，主は，「彼らに誡命を下して宣いけるは，主なる汝らの神を礼拝し，主に供物としてその羊の群の中の初子を捧ぐべしと。アダムは主の誡命によく従いぬ。

多くの日を経て，主の天使一人アダムに現われて言いけるは，汝何故に主に犠牲を捧げるやと。アダム彼に言いけるは，われその故を知らず，ただ主の誡命に従うのみ。

ここに天使語りて言いけるは，この犠牲を捧ぐることは，御父の生みたもう恩恵と真理に満てるただ独りの御子が犠牲となりたもうことのひ

ながたなり。」（モーセ５：５－７）

ニーファイが，その民の歴史を記録していたときに，彼は，２種類の記録を作るよう戒めを受けたと説明している。ひとつは，民の教務についての記録であり，もうひとつは，諸々の王の治世と民の戦争と不和についての記録であった。ニーファイは次のように言っている。

「それであるから，主はある賢いみこころがあって私にこの版をつくれと命じたもうたが，そのみこころが何であるかは私に解らない。

しかし，主は始めから一切のことを知って居たもうから，そのすべての御業を世の人の中に成就するためにある方法を備えて置きたもう。……」（Ｉニーファイ９：５－６）

この聖句は，今では周知の事実であるが，この記録の翻訳の際に，極めて重大な聖句であることがわかったのである。私たちが戒めに従う信仰さえ持っていれば，その戒めを完全に理解していようが，いまいが，祝福は与えられるのである。また，それと同様に，不従順な場合も，やはり，その結果の実を刈り取るのである。

私がまだほんの幼い頃のことであるが，教会の教えに従順に従おうとして，お茶やコーヒーやアルコール飲料やタバコを取らないと決心した時のことを，よく覚えている。その頃は，こうしたものの飲用が体に害になるとか，人のためにならないとかいったことを，世の中の人々は悟っていなかったし，科学者たちもまだ証明してはいなかった。だが今日では，そうしたものの有害性と，飲用すべきでないことが立証されている。だが，そのようなことを知っているにもかかわらず，今日の世界には，そうした「禁断の実」を取り入れたばかりに，病いや不幸に悩んだり，死さえ招いたりする人も，数多くいる。

事実，世の中の不和や争いや不幸の大部分は，主の戒めに従って生きることを拒むことが原因で起こっているのである。前に指摘したように，私たちが現世にある目的は，自らを証明するためである。私たちは，どんなに忙しかろうと，どんなに成功していようと，死が必ずやって来ることを，しかも遠からずやって来ることを認識していなくてはならない。次のように自問してみるのもよい。自分は，死や永遠の生命に備えるために，一体どんなことをしているだろうか。自分は，神や同胞に対する義務を，どの程度まで果たしているのだろうか，と。

私たちの義務とは，神のみ言葉を研究し，神を信ずる信仰を強め，自らの行ないによって信仰を支えることであり，さらにまた，自分の家族にその義務を教えるという重要な責任を果たすことである。再び，次のように自問してみるとよい。自分はどの程度まで家族を教えているだろうか。言葉だけではなく，模範によって，主の前に義しく歩むことを教えているだろうか。主に対して什分の一や断食献金を納めることも含めて，あらゆることに正直で，徳高い者となるよう，教えているだろうか。安息日を聖日としているだろうか。事柄によって妥協してはいないだろうか。知恵の言葉を厳密に守っているだろうか。すでに定められている「禁断の実」に手を出してはいないだろうか。不法な麻薬が次第に入手しやすくなっていることを知っているだろうか。子供たちに，麻薬のとりこになることがいかに危険なことか，よく警告しているだろうか。麻薬の常用，アルコール中毒，乱交，性病といった問題を一掃するために，地域にあって，一体どんな活動をしているだろうか。こうした問題は，多くの親たちの認識以上に一般化しているのである。あなたたちの住む地域でも，こうした問題は，あらゆる家庭の子供たちを脅かしているのである。

自分の国家に対しては，どの程度，忠誠を尽くしているだろうか。自分の家族に，立派な社会人となるよう教えているだろうか。生活の中で良いものを亨受するために，国民としての責任を果たさなければならないことや，より良い社会作りのために貢献しなければならないことを教えているだろうか。自分の家庭は，愛と調和と平安の模範となっているだろうか。家族の結び付きを強めるために，毎週，家庭の夕べを開いているだろうか。主に自分たちがどこにいるのかを報告し，主の助けと導きを求めるために，欠かさず家族の祈りを捧げているだろうか。

先日，私は，家族についてのある記事を読み，強く心を動かされた。この記事の筆者が言うには，現在の青少年犯罪の数は，そのまま大多数の青少年の動静を反映しているわけではないが，少なくとも，大人たちが自分の責任をどの程度果たしているかはうかがうことができるという。この所見は，最近，カナダのオンタリオ州の最高裁判所長官が表明したものである。ほとんどの問題の原因を作っている青少年グループというのは，彼の主張によれば，訓練の行き届いていない家庭と無責任な親たちの産物なのである。

私たちは，良い隣人になる，とりわけ，身寄りのない人々にとって良い隣人になるということや，病んでいる人，貧しい人，困っている人を訪問してやるということが，私たちの義務であり特権であるということを，認識しなければならない。主は，第二に大切な戒めは，私たち自身を愛するように，私たちの隣り人を愛

することであると，言われた。この点，自分の家族や自分は，ふさわしい行ないをしているだろうか。私たちはそうした人々の福利に関心を払い，可能なときはいつでも喜んで手助けする用意ができているだろうか。ヤコブ書を読むと次のように書かれている。「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは，困っている孤児や，やもめを見舞い，自らは世の汚れに染まずに，身を清く保つことにほかならない。」(ヤコブ1：27)

私たちは，善と悪の間に絶えず争いがあることを知っている。こうした争いに対処するために自ら備えなければならないし，また子供たちに教え，さらには，他の人々が正しい選択をして，誘惑に陥いることのないような決断を下せるよう，手助けもしなければならない。先日，私に，なぜ私たちにはこうした誘惑があるのか，なぜ主は私たちに欲望や情欲を与えられたのか，そして私たちはなぜ誘惑を受けたり，試されたりしなければならないのか，と尋ねた人がいる。

ひとつの理由は，この世の生涯で経験する様々な訓練を通じて進歩し，成長できるよう，私たちを助けることである。ブリガム・ヤングは言った。「私は誘惑を受けることのできる特権に……喜びを覚えている。」(*Journal of Discourses*「説教集」第3巻，p. 195) 誘惑は私たちの進歩と成長のために必要なものである。「誘惑に襲われたら，へりくだって祈りの気持ちを持ち，必ず克服できると確信しなさい。そうすれば，祝福を受けるとの約束を得て，誘惑から解き放たれ，忠実でいることができるであろう。」(「説教集」第16巻，p. 164)

こうした誘惑は皆，欲求も，激しい感情も，私たちの益と楽しみのために与えられている。だがそのためには，思慮分別の声に聞き従わなければならない。誘惑は，だれかれ問わずに来る。だが，誘惑を受けるずっと以前から，私たちも子供たちも，どの道を歩むのかを決めておかなければならないのである。誘惑が来るときまで，決意するのを待っているのでは，遅すぎる。私たちが，いつも正しいことを選び，悪に立ち向かうよう教えられ，決意しておいたならば，私たちは，いつも克服できるだけの強さを持ち合わせることになるのである。

私たちは，サタンが，主のみ業をくじき，人類を滅ぼそうと固く決意して，いつも忙しく立ち働いていることを忘れてはならない。私たちは，義の道からそれるや否や，滅ぼされる危険にさらされるのである。聖典を読んだり，歴史を調べたりすると，高い地位にあった人々が，主の教えを見くびり，背いたときに，あるいはまた義の道からそれたときに，多くの悲しみを味わい，地位を失い，友を失い，家族までも失ったという例を数多く見ることができる。

今日の世界の情勢を考えるとき，パウロがテモテにあてた予言の言葉に思い当たる。パウロは次のように言っている。

「しかし，このことは知っておかねばならない。終りの時には，苦難の時代が来る。

その時，人々は自分を愛する者，金を愛する者，大言壮語する者，高慢な者，神をそしる者，親に逆らう者，恩を知らぬ者，神聖を汚す者，

無情な者，融和しない者，そしる者，無節制な者，粗暴な者，善を好まない者，

裏切り者，乱暴者，高言をする者，神よりも快楽を愛する者，

信心深い様子をしながらその実を捨てる者となるであろう。こうした人々を避けなさい。」(IIテモテ3：1－5)

この聖句から，次のように尋ねてみたい。個人的に，今の聖句にひとつでも当てはまる箇所がないだろうか。また国家として，世界として，どうだろうか。この偉大な国家であるアメリカ合衆国の情況や全世界の情況が，ソドムやゴモラやローマやその他の文明の没落の原因となった情況と酷似してはいないだろうか。こうした諸文明は，道徳が退廃したために，滅びてしまったのである。私たちは，神とその教えから，どれほど遠く離れただろうか。またどれほど急速に離れつつあるのだろうか。再び問おう。私たちが，個人としても，国家としても，世界としても，悔い改めて神に心を向けることを拒み，神からその身を隠しているとすれば，私たちは今，一体どこにいるのだろうか。私たちの行く末はどうなるのであろう。

イエス・キリストの福音を指針として持ち，そして，主に仕える限り，滅びから救われ，さらに，この世で心ゆくまで人生を楽しみ，来世では，永遠の生命を受けると約束されている私たちは，なんと幸いなことであろうか。キリストの全使命は，私たちが不死不滅と永遠の生命を享受できるようにすることであった。そのために，キリストは，私たちがそうした祝福にあずかることができるように，計画を備えて下さったのである。

もし教会の家族がことごとく，福音の原則に従って生活していたら，世界中に，驚くほど良い影響を及ぼすことであろう。そして，もし世界中の家族が，イエス・キリストの教えを受け入れて生活したら，現在はびこっているような問題はなくなり，人は皆，愛と平和のうちに，共に住むようになるであろう。そのような状態が来るとは思えないだろうか。

だが，モルモン経には，そのような状態が存在したという記録がある。

「……全地の住民がみな心を改めて主を信ずるようになったので，その間に何の不和争論もなく一人のこらずみな互いに正しく扱った。……民はその心に神の愛を保っていたから，……

また，嫉妬，争闘，暴動，みだらな行い，虚言，人殺し，および何らみだりがわしい行いがなかったから，まことに神が造りたもうたすべての民の中でこの民ほど幸福な民があるはずがなかった。」（Ⅳニーファイ2，15－16）

個人として，家族として，社会として，指導者として，そして国家として，私たちは神に心を向け，森羅万象の造り主として，また私たちすべての御父として神を認め，その導きを求めて，戒めを守らなければならない。キリストの贖いによってのみ，人類は救われ得るという永遠の真理を明白に述べて，これが過ぎるということもなければ，強調してこれが過ぎるということもない。キリストの贖いの犠牲があったればこそ，全人類は，不死不滅となってよみがえり，復活体として永遠に生きるのであるが，キリストの律法を信じてこれに従った人のみが，昇栄と永遠の生命とを享受できるのである。

私たちが弱さに打ち勝ち，悔い改めるに足る知恵と知識と望みと勇気と強さをもつことができるよう，私は謙遜に祈っている。また，教会の若人に対しては，常に自分を清く汚れない状態に保ち，そして，自分や家族に悲しみをもたらしたり，恥ずかしさのあまり主から身を隠さなければならないと感じたりするような，罪深い行ないを決してすることのないよう，特に強く訴えたいと思う。

教会員一人一人に次のように自問してみるよう訴える。自分は一体どこにいるのか。なすべきことを行ない，神に会う備えをしつつ，自分のいるべきところにいるだろうか，と。私たちは皆，へりくだり，悔い改めて，自分が偉大な約束を受けるにふさわしい者であることを証明しようと，決意しようではないか。第二の位を保つ者には，その頭に永遠に栄光が加えられると約束されているのである。私たちが，そのように幸福な行く末にあずかることができるよう，イエス・キリストのみ名により，へりくだって祈るものである。アーメン。

天国をかいま見て

十二使徒評議員会会長代理

スペンサー・W・キンボール



愛する兄弟姉妹，そして友人の皆様。今日，天の窓を曇らせるような罪深い行ないについて，多くのことが言われている。私たちは，数々の不道徳な行為に驚き，身震いする思いである。また身近に起こる離婚や家庭の崩壊，そして少年の非行に恐怖すら覚える。だが時には立ち止って，全部が全部罪深いというわけではない，全部が全部悪いというわけではない，全部が全部反抗的というわけではない，と思い直してみることも必要ではないだろうか。

一度ならず，私は自分の肖像画を描いてもらった時の経験についてお話ししたことがある。

神殿の4階には，十二使徒評議員会の部屋があり，その中には大きな椅子が半円形に並べられている。ここで評議員会の大切な会合がもたれるのである。その部屋の壁には，十二使徒の兄弟たちの肖像画が掛かっている。私はこの召を受けたころ，感嘆と情愛とを込めて，この絵を見上げたものである。それと言うのも，私と同じ業に働くこの兄弟たちは，真に偉大な人々だったからである。

しばらくたって，大管長会から認可が下りて，私の肖像画も，他の兄弟たちの絵に加えられることになった。

リー・グリーン・リチャーズ氏が，描くことになり，私たちは，すぐさま製作にとりかかった。私は彼のアトリエの一段高くなった台の上に椅子を置いて腰掛け，他の兄弟たちのようにハンサムに描いてもらおうと，一生懸命ポーズをとった。絵の具，筆，そしてパレットをそろえると，彼は，私の顔かたちを細かく観察しては，カンバスに筆を走らせていった。私は何度もアトリエに通った。数週間の後，私の肖像画は大管長会に披露され，その後，私の妻と娘にも披露された。

しかし，その絵は大管長会の許可が得られず，もう一度やり直すことになった。

アングルを変え，何時間も費して，とうとう新しい肖像画も完成真近になった。その日も，いつものように，特別忙しい日であった。その日，私は白昼夢でも見ていたのだろうか，思いはこの世から離れて，はるかかなたにあった。彼が，私の夢見るような目つきをカンバスに描き出すのに腐心している様子がよくわかった。彼はパレットと絵の具を置き，腕を組んで，私をまっすぐに見つめた。その時，私は，突然質問されて，驚きのあまり，夢から呼び覚まされてしまった。「キンボール兄弟，あなたは天国へ行ったことがありますか。」

私の答えは，同じ位強い驚きを彼に与えたようである。私はためらわずにこう言ったのである。「ありますよ，リチャーズ兄弟，もちろんですとも。このアトリエへ来る少し前にも，天国を見てきたところです。」彼は楽な姿勢をとって，私をじっと見つめていたが，その目には驚きの色が見えた。私は続けた。

「ちょうど一時間前のことです。向かいの神聖な神殿の中で見たんですよ。結び固めの部屋は，厚い白壁で，外界の物音を遮断していました。明るく暖かい感じのカーテン，質素なしかし風格のある調度品，向かい合って同じ像を無限に映し出す鏡，私の正面で平安な輝きを見せる美しいステンドグラスの窓。そして白い衣に身を包んで部屋に集う人々。そこには，平安と調和と心からの期待がありました。きちんとした身なりの青年とこの上なく美しく装った女性，何と表現していいかわからないほど美しいふたりが，祭壇をはさんでひざまずきました。私は，私の持つ権能により，この天国の儀式を執り行

ない，ふたりをこの地上にあっても，また永遠にも結び固めました。心の清い人々がそこにはいました。そこは天国でした。

永遠の結婚の儀式が無事にすみ，穏やかに祝福の言葉が交わされているとき，幸福そうな父親は，満身に喜びをたたえて，私に手を差し出して，こう言いました。『キンボール兄弟，私たち夫婦はごく平凡な人間で，特別成功を収めたわけではありませんが，自分の家庭には大きな誇りを持っています。神殿結婚のためにこの神聖な宮居に入るのは，８人目のこの子で最後です。他の子供たちも皆今日伴侶を連れて，この末っ子の結婚式に参加してくれています。今日は最高に幸福な日です。８人の子供たちが皆正しく結婚してくれたんですから。みんな教会活動も一生懸命しています。上の子供たちはもう立派に子供まで育てていますよ。』

私は彼の節くれだった手と，丈夫そうな体つきを見て，こう思いました。『これこそ，自分の使命を立派に果たした，本当の神の息子だ。』

『成功ですって？』と，言いながら私は彼の手を握りしめました。
『私は今までこれほどの成功談は聞いたことがないですよ。株や債券で大もうけをしたり，預金や不動産や産業界で稼ぐこともできましょうが，それでもまだ失敗ですよ。あなたはこの地上へ送られて来た目的を一生懸命果たしているじゃないですか。自分で正しい生活を送り，この立派な子供たちを育て上げ，しかも信仰と勤労の点で充分な訓練を施したんですから。これほどの成功がどこにありますか。本当におめでとう。』」

私の話は終った。画家の方を見上げると，彼は身じろぎもせずに，物思いにふけったまま立っていた。それで私は話を続けた。「兄弟，私は，何度も天国を見たことがありますよ。

ある遠くのステーキ部の大会に出席したときのことです。土曜日の昼頃，ステーキ部長の質素な家に着きました。ドアをノックすると，赤ん坊を抱いた愛らしい母親が中へ入れてくれました。彼女は，メイドや召し使いのいる家など見たことがないといった感じの母親でした。絵のモデルといったタイプでもなく，社会的地位のある女性でもありませんでした。でも髪の毛はきちんとまとめ上げ，着ているものも上品な趣味の慎み深いものでした。いつも笑みを浮かべ，年若くとも，豊かな経験と目的ある生活の喜びといったものが見事に溶け合った人柄がうかがえました。

大きな家ではありませんでした。私たちの通された部屋は，多目的用の部屋らしく，道具が一杯でした。部屋の真ん中には長いテーブルと椅子がたくさん置いてありました。私たちは小さな寝室でひと休みしましたが，その部屋も，私たちを泊めるために，子供たちを何人か近所の人にあずけて空けてくれた部屋でした。私たちはまた居間に戻りました。母親は台所で忙しく働いていました。御主人のステーキ部長も間もなく仕事から帰って来て，私たちを歓迎してくれました。そして子供たちがお手伝いや遊びから帰ってくると，ひとりひとり，誇らしげに紹介してくれました。

まるで魔法のように，夕食の準備が整いました。人手が増えれば仕事は減りますからね。どの子も慣れた手つきで，手際よくやっていました。みんな，責任ということについて教えられていることがはっきりわかりました。どの子も必ず手伝うことになっていたんです。テーブルクロスを素早く広げる子もいれば，ナイフとフォークとスプーンを並べる子もいる。またその上に大皿をふせる子もいるといった調子です。（皿は高価なものではありませんでした。）それから，クリームミルクの一杯入った大きな水差しが運び込まれ，自家製のパンが山と積まれ，それぞれの席に受け皿が置かれ，保存食の中から果物が出され，チーズも出されました。

ひとりの子供が，椅子の背をテーブルにつけると，皆一勢に，テーブルに向かって椅子の所にひざまずきました。ひとりの男の子が，家族の祈りをささげるよう，言いつかりました。その子はすぐに引き受けて，主にお祈りしました。家族や学校の勉強のこと，そして宣教師や監督を祝福してくれるようにと祈りました。また，大会のためにやって来た私たちが『よい話ができるよう』，また父親が教会の責任をよく果たせるよう，そして自分の兄弟たちが『よい子になって，皆仲良くするよう』祈りました。そして，この寒い冬の夜に丘の羊小屋の中で生まれかかっている小羊のためにも祈ったのです。

一番幼い子が食物の祝福の祈りをしました。13枚の皿の表が出され，料理が盛り付けられ，夕食が始まりました。食事のことでも，家のことでも，子供たちのことでも，言いわけがましいことは一言も聞かれませんでした。会話は活発で楽しいものでした。子供たちのしつけも行き届いていました。この両親は，どんな状況にも，威厳を持った落ち着いた態度で対処していました。

家族数が限られ，子供のいない家庭も多い昨今，ひとりふたりの子供がわがままいっぱいに甘やかされて育てられたり，召し使いを雇って豪勢な暮らしをしたり，家庭を顧みずに崩壊するにまかせたりすることが多い中にあって，このような大家族が，互いに助け合い，愛し合い，励まし合い，そして子供たちもわがま

まなことを何も知らずに成長している様子を見て，心が洗われる思いでした。この美しくも質素で健全な家庭のただ中にあって，私たちは心から満たされ，くつろぐことができました。不ぞろいの椅子，古びたじゅうたん，質素なカーテン，あるだけの部屋を使ってもまだ入りきれないほどの大家族，そうしたことは何も気になりませんでした。」

私は一息入れた。「リチャーズ兄弟，私はその日も天国を見ましたし，他の所でも何度も見ました。」彼は，絵を描くことなどまるで眼中にない様子だった。もっと話してくれと言わんばかりに，立ったまま耳を傾けていたので，私は思わず知らず，天国をかいま見た思い出をまた話し出してしまった。

「今度は，インディアン居留区での話です。ナバホー族の女性はたくさんの子宝に恵まれることが多いんですが，この愛らしいレーマン人女性は，結婚して何年たっても，自分の子供というものに恵まれませんでした。御主人はかなり良い職に就いていました。教会へ改宗したばかりのこのふたりは，ある時，週末の買い物に出かけました。一杯につまった大きな買い物袋の中をのぞくと，一見して，健康な食料品ばかりでした。ビールも，コーヒーも，たばこもありません。『ポスタム（小麦から作られた飲物）がお好きのようですね』と尋ねた私たちは，その答えに強く心を動かされた。『はい， 以前はコーヒーやビールを飲んでいました。でもモルモンの宣教師が来て知恵の言葉のことを教えてくれてからは，ポスタムを飲んでいます。この方が子供のためにいいですし，子供たちもこれが好きですから。』

『子供たちですって。あなた方夫婦には子供がいなかったんじゃないですか。』この質問に答えてふたりは，様々な年齢のナバホーの孤児を18人面倒を見ていると説明してくれました。このふたりのホーガン（ナバホー族の住居）も広いものでしたが，ふたりの心の方がもっと広かったわけです。他の人を思いやる心，それは人間の優しさを育てるミルクです。偽りのない愛です。このような時代にあって，思いやりの心も持たずひとりよがりの生活を送る人たちは，この善良なインディアンを見たら，恥ずかしく思うことでしょうね。」

私は画家に言った。「リチャーズ兄弟，天国はホーガンの中にもテントの中にもありますよ。天国というのは自分で作り出すものですからね。」私はそろそろ絵の方に戻ろうとしていたが，彼の方は全くその気がないようだった。立ったまま，熱心に耳を傾けているのである。

「今度はハワイへ行ったときのことです。ライエの美しい小さな神殿の中で，宣教師と集会をもちました。そこにはみたまがありました。宣教師たちは自分の順番を待ちかねて，次々と，主の福音について証を述べました。最後に，小さな日本人宣教師に順番が回って来ました。彼女は演壇のわきに敬虔な様子でひざまずき，福音と福音が与えてくれた様々な機会に感謝する気持ちで胸が張り裂けんばかりになりながら，全身全霊を天に向けて証しました。

兄弟，そこは天国でした。太平洋の楽園の，聖なる場所の小さな部屋の中に，キリストのために闘う兵士として聖別された美しい若人の群れの中に，天国があったのです。」

私は話を続けた。「天国は私の家にもありました。リチャーズ兄弟，家庭の夕べの時です。何年もの間，子供たちで部屋が一杯になっていました。みんなが順番を待ちわびながら，歌を歌い，ゲームをし，信仰箇条を暗唱し，話をし，大好きな両親から信仰を強める話や福音の話を聞いたものでした。

ヨーロッパでも天国を見つけました。

ボーゲル長老という，地元で改宗した，信仰の強いドイツ人青年がいました。彼の両親は，伝道に出たがっている彼の資金援助を断わりました。しかし親切なアメリカ人教会員が，彼の伝道費用を出してくれることになりました。彼はそれから一年半，一生懸命伝道し，立派な成果を上げていました。ところがある日，このスポンサーの奥さんから手紙が来て，夫が自動車事故で亡くなったためにもう伝道資金を送ることができなくなった，と言ってきました。

ボーゲル長老は，落胆の色を隠し，良い解決法を求めて一心に祈りました。ある日，彼とアメリカ人同僚のスミス長老が病院の前を通りかかったとき，彼の心には，自分の資金問題に対するある解決法が浮かびました。その翌日，彼はちょっと外出すると言ってどこかへ出かけて行きました。戻って来るとほとんど口もきかず，早々にベッドにもぐり込みました。理由を尋ねても，ちょっと疲れているだけだと言うばかりでした。数日後，スミス長老は，ドイツ人同僚の腕に小さな包帯が巻かれているのに気が付きましたが，何を聞いても，あっさり言いまぎらわされてしまいました。

何日かたち，スミス長老は，同僚の腕に包帯が定期的に巻かれることに疑いを抱きました。そんなある日，もはや隠しおおせなくなったボーゲル長老は，こう言いました。『実は，アメリカの友人が亡くなって，伝道費用を援助してもらえなくなったんだ。両親はまだ援助してくれる気はないし，それで，病院の血液銀行へ行って，伝道が終わるまで頑張ることにしたんだ。』人を救うために，自

分の大切な血液を売るとは！　貴い犠牲のために体中の血を流したというのは，あの救い主だったのではないでしょうか。

天国の存在を信じますか，リチャーズ兄弟」と尋ねて，また話を続けた。「確かにあるんですよ。天国というのは，ある場所のことですが，同時に，ある状態のことも言うんです。天国というのは，家庭であり家族であり，また理解であり親切であり，そして助け合いであり，自己の利益を度外視した活動であるわけです。また静かで穏健な生活であり，個人の犠牲であり，あるいはまた心からのもてなしであり，他の人に対する深い関心でもあるわけです。虚飾や偽善なしに神の戒めを守って生活することもそうですし，自分を忘れて人を思いやることもそうでしょうね。私たちのまわりに天国はいくらでもありますよ。ただそれに気付くことさえできれば，いつでも天国は見られるんですよ。そういうわけで，兄弟，私は何度も何度も天国を見たことがあるんですよ。」

私は姿勢を正して，またポーズをとった。画家はパレットと筆と絵の具を持って，肖像画に何か手を加えていた。そして満足そうにため息をつくと，言った。「仕上がりました。」

やがて，その絵は，他の十二使徒の兄弟たちの肖像画と並んで，ソルトレーク神殿の4階にある十二使徒評議員会の部屋に掛けられることになり，今日に至るまで，そこに掛かっている。

イエス・キリストの福音は，人に正しく生活するよう教え，また，家族を最高のものに，家庭を神聖なものとするよう教えている。福音は，それを信ずる者が完全無欠となるよう導いてくれる。それは真理の道である。正しく生活するなら，人は神のように気高い存在となるであろう。

救い主の真の福音が，私たちすべての者の生活のすみずみまで行き渡るよう，祈っている。イエス・キリストのみ名により，アーメン。

唯一の真実にして命ある教会



十二使徒評議員会会員

ボイド・K・パッカー

ここ30日の間，私は恵まれて，英国，南アメリカ，南アフリカそしてここ北アメリカにいる宣教師や教会員にお会いする特権が与えられた。そして私たちが顔を合わせるたびに決まって解答を求められる質問がある。教会員，とりわけ宣教師たちは，よく次のように言われる。「何がいやかと言って，自分だけが正しくて，他の人は皆間違っているという人ほど，いやな人間はいない。」もちろん，そのように言う人々はこの教会だけに神権の権能が与えられているという主張に，反感を持っているのである。

もちろん私は，人がなぜそのように感じるのか承知している。しかしながら，私ならこう答えるであろう。「待って下さい。ちょっと考えてみて下さい。それではあなたは，多種多様の教会各派がある中に，正しい真実の教会はひとつもないとおっしゃるのですね。」

こうした主張は無神論を生み出す。私は無神論者のことを思うにつけ，キャロル・リン・ピアスン姉妹が無神論者に捧げるために書いた詩に，共感を覚える。

「神様は，きっとユーモアのセンスに富んだ御方に違いない。

神はいないと言い触らすあなたに一あわ吹かせてやろうという誘惑を一生懸命抑えておられるのだから。」

もうひとつの考え方は，最も広範な支持を得ているものであって，どの教会も皆正しく，皆似たようなものであるという考え方である。宣教師に返って来る典型的な答えとしては，このようなものである。「私はもう教会に入っています。どの教会も同じようによいものですし，どの教会の信者かということも大した問題じゃありません。とにかく，結局は皆同じ所へ行き着くんですから。」

真剣に考える人なら，そのような立場をとらないことは，明らかである。それにもかかわらず，多くの人人は，そうした立場をとり，それでいて，少しでも生活の他の面に適用させたり，関連付けたりしようとはしない。例えば，教育に関してはそれと同じ立場をとろうとはしない。どの学校も皆同じで，どの学校も皆同じように良く，どの学校に籍を置こうと，どの課程をとろうと，どれ位在籍しようと，同じ卒業証書をもらえるのであると言ったら，笑わない人がいるだろうか。

学生がどんな学校へ行っても，どんな課程をとっても，建築学でも法学でも医学でも，なんでも自分の希望する分野の学位が与えられるなどということに，賛成できる人がいるだろうか。そのような態度は，必修の課程をとった人も，別に勉強しなかった人も，同じように立派な外科医になれると言わんばかりである。人は，事の本質を思い巡らせば，決してそのような立場はとらない。また，そのような方式で訓練を受けた，いや，訓練を受けていないと言うべきであろうが，外科医からは，だれひとりとして執刀してもらいたいとは思わないであろう。

そうだとすれば，これほどまでの多くの人々が，宗教に関しても同じ考え方が適用できるとしているのは，奇妙なことではないだろうか。そのような人々の主張は，こうである。どの学校へ行ってもよいし，どの課程をとってもよい。全然学校へ行かなくてもよい。結局は皆，同じ所へ行って，同じ天の卒業証書をもらえるのだから。

そのような考え方は，理にかなわず，しかも真実でない。

末日聖徒イエス・キリスト教会が地上における唯一の真の教会であるとする立場は，まずもって最重要の

原則である。もし私たちが，そうした立場を撤回すれば，恐らくこの教会にとっては，もっと都合がよく，人に気に入られて，人気も出るであろうが，私たちは，断じてこの立場を守るべしという神聖な義務を負い，神聖な信頼を担っている。しかもそれは単に自認しておればよいことではなく，積極的に宣言せよとの戒めなのである。実に，こうした根本原則であるがゆえに，私たちは，この点に関して，決して譲歩することはできないのである。

さて，私たちを寛大でないと思っている人々に申し上げる。これは私たちが考え出したことではない。主が宣言されたのである。主は，初期の教会の兄弟たちに対して，次のような戒めを与えられた。そこから引用してみよう。「……この教会の基礎を置き，人に知られぬ所よりまた暗き所より，全地の面に於ける唯一の真にして生命あり，而も主なるわれの悦ぶこの教会を明るみに出す能力を与えらるるを得。われ悦ぶとは一人一人を指すにあらずしてわが教会員全体に就きて言えるなり。」（教義と聖約1：30）

さて，こうは言っても，他の教会が皆，どれひとつとして真理を持っていないと言うのではない。どの教会にもいくばくかの真理はあるし，教会によっては非常に多くの真理を有しているところもある。神を敬う態度も持ち合わせているし，聖職者や信者が献身的なところも多い。さらに，そのような人々の多くは，キリスト教で教える諸徳を実によく実践している。しかし，それでもなお，彼らの教会は不完全である。主のみ言葉を借りて言えば，「……彼らは人の誡命を教えとして教え神を敬う様をすれども神の力を否む」（ジョセフ・スミス2：19）のである。

福音はピアノの鍵盤に例えることができよう。充分練習を積んだ人なら，全部の鍵盤の中から任意の鍵を選び出して，際限なく，様々な曲を弾くことができる。愛の表現にはバラードを，元気づけるためにはマーチを，心を和らげるためには歌曲を，霊感を与えるためには讃美歌をと，その時々の雰囲気に合わせ，必要を満たして，数限りない変化を楽しむことができるのである。

それなら，たったひとつの鍵を選んで，ひとつか，あるいはせいぜい，2，3の音符だけを単調に弾き続けるなどということは，なんと近視眼的なことではないだろうか。すべての鍵盤を使えば，無限のハーモニーを生み出すことができるのである。

完全な福音，すなわち全鍵盤がこの地上にあるというのに，数多くの教会が，たったひとつの鍵だけを叩いているということは，本当に残念なことではあるまいか。そのような教会で強調している音は，宗教的経験という，完全なハーモニーを作り出すためには，不可欠な音かも知れない。しかし，それでも，すべての音が含まれているわけではない。完全ではないのである。例えば，ある人は信仰によるいやしの鍵を弾き，信仰によるいやし以上に大きな強さをもたらす他の多くの諸原則を無視する。またある人は，安息日を守ることについて述べられている鍵をおぼろげに叩く。その鍵は，鍵盤上の他の不可欠な音符と和音を作るはずなのに，全く間違った音を出してしまう。そのように使われた鍵は，不協和音を作り出すのである。またある人は，バプテスマの様式が述べてある鍵とほかの1，2の鍵をいつまでも弾き続ける。まるで，それで鍵盤のすべてだと言わんばかりに。その鍵も，必要不可欠ではあるけれども，他の鍵を無視して単独で弾いているのでは，完成された音楽を奏でることはできない。

ほかにも例は挙げられる。そうした例の多くは，福音の一部だけをいつまでも強調し続け，その上に教会を建てている例である。イエス・キリストの福音と完全に融け合っていれば，そのような単独での音は出て来ないのである。私たちは，信仰によるいやしという鍵が不必要だなどと言っているのではない。私たちはそれを認めているし，信頼も置き，体験さえしている。だがそれでも，それは福音そのものでなく，ましてや，完全な福音でもない。

私たちは，決して，バプテスマが必要ないなどと考えているのではない。むしろ，絶対に不可欠なものである。それと言うのも，バステスマは，神の王国である教会に正式に登録されるためには，どうしても必要な要素だからである。だが，その鍵が，それに対応する神権という鍵なしに，単独で弾かれたら，音色の豊かさもハーモニーも失われ，不協和音となってしまう。また，信仰や悔い改めという鍵がなければ，バプテスマは無意味なものとなってしまう。いや，恐らくは，一層悪くなって，バプテスマはまがい物となってしまう。これは，権能というものが欠如しているときに起こるのである。

さて，私たちは，他の教会が不完全であるとは言うけれども，他の教会は悪いなどと言うつもりはない。だが，完全な福音は，すでに回復されている。また，主に代わって働く権威や権能は，この私たちと共にある。神権の権威と権能は，この教会に与えられている。次のような主の啓示がある。

「……而してこの大神権は福音を授け，また王国の奥義の鍵，すなわち神の知識の鍵を保つものなり。

この故にこれを以て礼式を執り行なう時に神の能力顕る。

而して，この神権を以てする礼式と神権の権能なくしては，肉身を持てる人間に神の能力顕るることなし。」（教義と聖約84：19—21）

この末の日にあって，途方もない悪の力が私たちにその矛先を向けている今，聖典の中で予言されている大背教が，その避け難い結末に向かって，着実に歩みを進めている。そうした悪に対抗して防壁になるはずのキリスト教諸宗派は，会員や聖職者にとって，ほとんどその存在意義を失いかけているように思える。集う者のいなくなった教会や聖職者の恐ろしい亡霊が，だれよりも先に抵抗しなければならないはずの悪事を助長している。

最初に申し上げたその旅行中，私は諸教会の門が閉ざされ，扉に板が打ちつけられ，庭には雑草が生い茂り，あるいはまた門が開いていても中には人がだれもいないという光景を見て，随分驚かされた。神のみ言葉に何の接触も持たない世代が台頭して来ることを思うと，戦慄を覚える。

末日聖徒イエス・キリスト教会に興味を持ちながら，この教会に完全な福音があるという理想には，ほんの気まぐれ程度の注意しか払わない人々がいるのは，別に珍しいことではない。

そのような人々は異議を唱えたり，反対したりする対象としてひとつの鍵すなわちひとつの教義に興味を示す。彼らはあるひとつの教義についてだけ探究を行う。そうなると，他のものには目もくれず，しかも異議を唱えたり拒否したりしながら，その分野のことだけは何もかも知りたくなるのである。

彼らは，その鍵だけの音を何度も何度も聞こうとする。しかし，彼らは完全なものがあるということに気付かなければ，何の知識も得られないのである。他の理想や教義とも補い合って，暖かみや豊かさやハーモニーをかもし出すために，それぞれの鍵が，最もふさわしいときに働くのである。もし，それぞれの鍵を単独に弾いたら，不協和音に聞こえて当然であろう。

さて，そのような危険は，ひとり求道者にのみ潜んでいるのではない。もっと分別があるはずの教会員の中にも，自分の好みの鍵をひとつふたつ取り出して，そればかりをひっきりなしに弾いて，周囲の人々をいらだたせている人がいる。そのような人の霊的な感受性は鈍ってくるし，完全な福音がある道から迷い出る。また個人としても，他の数多くの教会のような状態になってしまう。自分の好みの音に執着して，完全なものを拒んでしまうかもしれない。これがやがて誇張を生み，偏見を生みそして，背教への道へとつながって行くのである。

私は，このことについて深く考えて欲しいと申し上げた。だが，それにも増して，お願いしたいことは，このことについて祈って欲しいということである。ひとり静かに考えることは，知恵の基となりうる。だが，みたまによる交流という，もっと完全な方法もある。「……御霊はすべてのものをきわめ，神の深みまでもきわめるのだからである。」（Iコリント2：10）

パウロは，コリント人に対して，次のように言っている。「この賜物について語るにも，わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで，御霊の教える言葉を用い，霊によって霊のことを解釈するのである。

生まれながらの人は，神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また，御霊によって判断されるべきであるから，彼はそれを理解することができない。」（Iコリント2：13—14）

人は皆だれでも，真実の教会は存在するのか，という疑問の答えを祈り求める権利を，いや本当は義務を持っている。知っての通り，14歳の少年が森の中へ入ってこの質問をしたことから，すべてのことが始まったのである。彼は，ふたつの質問をした。数ある教会のうち，どれが真実の教会か。またどの教会に加入すべきか，と。そこで彼は，御父と御子が現われるという驚嘆すべき示現を経験した。そして時満ちたる神権時代が始まったのである。その結果，主に代わって働く権能は回復され，今日，この教会が保持している。私たちは，この集会で，神の予言者ジョセフ・フィールディング・スミスの声を聞いた。

私は，スミス大管長が神の予言者であると証する。私には，イエスがキリストであるという証がある。イエスは生きておられる。末日聖徒イエス・キリスト教会こそ，この地上における唯一の，真にして命ある教会である。これらを，イエス・キリストのみ名により証する。アーメン。



決　断

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

一緒に，この地球が創造される前の時代までさかのぼり，天上の大会議の頃のことを考えてみよう。その大会議で，あなたたちも私も皆そろって，天父から，この地上の生活の目的と機会について，教えを受けていた。

「これらの者の中に，神の如き者一人立ちて共に在りし者たちに言いけるは，われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而してこれらの材料をとりて，これらの者の住まうべき地を造らん。

而して，これによりて彼らを試し，何にてもあれ，主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。

而して，最初の位を保つ者は更に附け加えられ，最初の位を保たざる者は，最初の位を保つ者と同じ王国にて栄を得ることなからん。而して，第二の位を保つ者は，とこしえに栄光をその頭に附け加えられん。

主，宣いけるは，われ誰を遣わさんか。一人，『人の子』の如くに答えて言いけるは，われここに在り，われを遣わしたまえ，と。別の一人答えて言いけるは，われここに在り，われを遣わしたまえ。主宣いけるは，われ先の者を遣わさん。

而して，第二の者怒りて，その第一の位を保たず。而してその日多くの者たち彼の後に従えり。」（アブラハム３：24－28）

私たちの兄のひとりであった暁の子ルシフェルは，非常に心を動かされるような申し出をしたに違いない。私には，ルシフェルの言った言葉が想像できる。「私に従って来なさい。そうすれば，新しい計画を教えてやろう。古い計画は，もう時代遅れだ。いちかばちかの冒険なんかやってみる必要はない。私なら，ひとり残らず帰って来れるよう保障してやる。」ルシフェルは，なかなかの心理学者であった。人の望む保障ということに力点を置いたのである。彼の計画が非常に心をひくものであったため，天の軍勢の３分の１が彼に従った。

ルシフェルに従った人々は，自由意志を行使する権利を捨てた。だが，そうした決断が，どれほど大きな結果を生むのか，知る由もなかった。とにかく選択する権利を失った。自ら決断を下す権利を失ったのである。

そののち，天上で戦いがあり，ルシフェルとその部下たちは投げ落とされた。そして，地上に置かれて，私たちを試すことになった。その点では，なかなかうまくやっているようである。

自由意志というからには，選択できなければならない。そして，敵対する勢力も存在しなければならない。成長や進歩や達成といったものは，こうした敵対する勢力に打ち勝ってはじめて可能なのである。

ルシフェルとその部下たちは，その敵対勢力となった。そのために私たちは，この生涯で自由意志を行使することが可能になったのである。

以来，決定を下す権利は，私たちのものとなった。この権利は，地上で最も素晴らしい宝である。主はこの権利を私たちから取り去ろうとすることもなく，取り去ることもできず，また取り去ることもない。むしろ，私たちがそれを使うことを望んでおられる。また主は，私たちがその権利を私たちのために，また進歩のために，さらには永遠の生命に到達するために行使するよう，その方法を絶えず助言し，教えて下さっている。

神が，ルシフェルに全権を与えて地球に送り込み，私たちを試みに遭わせながら，私たちにはルシフェルに対抗し，それに打ち勝つ力を与えて下さらなかったとしたら，私は神

が不公平な御方だと思ったことであろう。

だが忘れないでいただきたい。ルシフェルは，自ら進んでこの地上にやって来たのではない。ルシフェルは，天上での戦いに敗れ，ある務めを果たすためにこの地上に置かれたのである。そして，結構，成果をあげている。

神は公正な御方である。それで，ルシフェルは，この地上で許されていることだけしかすることができないのである。

ヨブの話を覚えておいでだろうか。ヨブに試練を与えようとするたびに，ルシフェルは，ヨブを試みるために許可を願い出た。そしてルシフェルには，1度にひとつの試みをする許可しか与えられなかったのである。最初の試みでヨブは財産を失った。次の試みでは家族を失い，その次には健康を失った。その後ではサタンはヨブのことをすべて任せられた。ただヨブの命をとることだけはできないことになっていたのである。

ヨブは試練をひとつひとつ克服するたびに，着実に強くなっていった。そして，ヨブは，あの不滅の証を述べるのである。今日私たちがその聖句が何度も引用されるのを耳にした。

「わたしは知る，わたしをあがなう者は生きておられる，末の日に彼は必ず地の上に立たれる。

わたしの皮のうじがこの体を滅ぼしたのち，わたしは肉にあって神を見るであろう。

しかもわたしのこの目で見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。わたしの心はこれを望んでこがれる。」（欽定訳ヨブ19：25－27）

もし私たちが，完全の域に到達したいと思うなら，私たちもヨブと同じような段階にまで行き着かなければならない。主は，必要とあらば，サタンに，命を奪う以外の全権を与えて，私たちの上に解き放つこともできるのである。私たちは，そうした力に抵抗してはじめて，完全の域，すなわち昇栄に到達することができるのである。

ヨブと同じことが私たちについても言える。主は，サタンに，私たちが抵抗し得る限度を越えた試みに合わせることを，許してはおられない。ただし，その場合，私たちは主に助けを仰ぐ必要がある。

ここに，私たちが正しい決定を下すための手助けとなる鍵がある。主は，オリバー・カウドリが記録を翻訳しようとしたとき，次のように言われた。

「見よ，汝いまだ悟らず。汝はひたすらわれに願いし時はこれを与えらるるならんと思えり。

されど見よ，われ汝に告ぐ，汝心の中によく思い計り，その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば，その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感ぜしむ。

されどもし願うところ正しからずば，かかる感なくして汝の心は次第に鈍くなり，そはついに悪の悪たるを忘れしむるに至らん。」（教義と聖約9：7－9）

主は言われた。「捜せ，そうすれば，見いだすであろう。門をたたけ，そうすれば，あけてもらえるであろう。求めよ，そうすれば，与えられるであろう。」（マタイ7：7，ルカ11：9参照）

それは，あなたたちの決めることである。人は皆，自ら決定を下さなければならない。だれも，ほかの人に人生を代わって送ってもらうことはできないのである。

主に助けを求めるなら，主はあなたたちに，サタンに打ち勝ち，その攻撃に抵抗するだけの強さと力と才能とを与えて下さるであろう。そうすれば，あなたたちは強められ，もっと完全な者となるのである。私たちは，祈りによって主の助けを求めなければならない。

主は，なんでも自分の力でやろうとする人々には，何の約束もされなかった。悪魔に勝つには，独力で充分であって主の助けはいらないと思い始めたその瞬間，戦わずして既に敗れているのである。

自分の生活習慣を変えようとした人の話を数多く聞いたことがある。知恵の言葉を守って生活しようとしたり，什分の一を納めようとしたが，主の助けを求めずに，独力でやろうとしたため，ことごとく成功しなかった人々である。だが，ひとたび主に助けを求めたとき，事態は一変して，なにもかも容易になり，さらには，福音の証まで得ることができたのである。

主は私たちに数多くの律法や戒めを与えられた。私たちは，そうした律法や戒めに従うために，主の助けが必要である。こうしたものは，その大部分が，私たち自身の決定を下す能力を試すために与えられている。つまり，一般に天の第一の律法と言われている従順の律法を受け入れるかどうかをみるために与えられているのである。

ただ主が望んでおられるという理由で，主の望まれることをしたいと願うなら，まず主に助けを願い求めなさい。そうすれば，律法や戒めを守ることが容易になってくる。

皆，あなたがたの決めることである。

「汝知らずや，人皆自由なるを。
己が人生も行く末も選べることを。
永遠の真理は与えられたり，
神，人を天に強いたまわじと。
神，人に説きて正しく導きたまい，
知恵と愛と光明とをもちて恵みを

たもう。
その慈しみと柔和なること，言い
表わし難し。
されど，人の心を強いたもうこと
はなし。」(英文讃美歌90番)

私は，あらゆる人々が，私たちに与えられている自由意志という宝の重要性を認識するよう，勧める。また，その自由意志を賢明に行使し，祈りを通じて主の助けを受けて，決断を下すよう，勧めるものである。

主の祝福が，主のみこころを求めるすべての人々に与えられるよう，イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン

若人に襲いかかるサタン

十二使徒評議員会会員

エズラ・タフト・ベンソン



「社会全体に神聖なものを汚す風潮が著しくなり，そのために次代を担う若人が不当な圧力を受けて，光の道と暗黒の道との間で，正しい選択ができなくなる時代がやって来る」とは，まことに当を得た言葉である。

(Hugh Nibley, *An Approach to the Book of Mormon*「モルモン経の読み方」1957年)

私たちは，邪悪な世界に住んでいる。悪の軍勢がこれほどまでに恐ろしい隊列を組んで戦闘態勢に入っている時代は，私たちの記憶にはない。悪魔の組織は見事である。今日ほど，悪魔が自分のために働く使者を多く従えている時代もない。こうした数多くの手下を使って悪魔は，宣戦を布告し，えり抜きの世代である若人をことごとく滅ぼそうとしている。

悪の軍勢による卑劣な行為が，その数を増しているという証拠は，多多ある。どこを向いても，胸を引き裂かれるような悲痛な結果ばかりが目に入る。悪魔に扇動された破壊軍の勢いは，文学，芸術，映画，ラジオ，服装，ダンス，テレビ，そして現代の，いわゆるポピュラーミュージックの分野にまで及んでいる。サタンは数多くの武器を駆使して，家庭や家族，そしてとりわけ若人たちを弱め，滅ぼそうとしている。今日，悪魔は，いまだかつてなかったほど，青少年に攻撃の的を絞っているように思える。

数多くの手紙の中に，こうしたポピュラーミュージックの悪影響に関心を持つある父親からの手紙がある。若人にかなり精通した教師であるこの父親の手紙の中から引用してみよう。

「音楽は雰囲気を作り出す。雰囲気は環境を作り出す。環境は行動に影響を与える。では，この過程はどうなっているのだろうか。

リズムは，音楽の中でも，最も物理的要素の強いものである。音楽の中でこのリズムという要素だけが，音の助けがなくとも，体の動きだけで存在できる。麻薬やアルコールで鈍くなった神経でも，連続したドラムの音には反応を示す。

音量が大きいと，神経の混乱に拍車をかける。苦痛を感じる極限ぎりぎりまで，音量を上げると，肉体的にも不快になり，高度な思考や推理の過程をたどれなくなる。(だが，音量を小さくしても，この破壊的な音楽の，他の悪い要素までなくなることはない)

極端な繰り返しもまた，ロックという原始的な音楽の一表現である。

ロックのリズムの分身とも言える，体を回転させる振り付けは，清い手と汚れのない心を持つ者なら，そのこびるような性格を決して見まがうことはないはずである。

暗闇（そして薄暗い光）もまた，ロックに見られる一側面である。自分の正体が人にわからず，そのために良心まで弱めてしまう暗黒のミサである。暗やみに紛れて正体を隠してしまうため，責任に対する平常の感覚も麻痺してしまう。

目もくらむばかりに暗闇の中を走り回るストロボ光線も，尋問者が拷問に用いる光線のように，また，催眠術師の使う振子のように，人の抵抗力を弱め，行動までを支配しようとしている……。

サイケデリックな模様は，(と，この父親の手紙はなおも続く）どれも，人を麻薬，セックス，反抗，不信仰へといざなう。わいせつな歌詞を金切り声で歌い叫ぶこの催眠術的な音楽は，これまで，卑わいな実を結んできた。ロック愛好者のリーダーたちは，自分たちが堕落していることを公言してはばからない。……

この醜悪な音楽の，最も欺瞞的な点は，絶対的なものの存在を悪とし

て否定するところにある。私たちの宗教も絶対的なものであり，いわゆる『自由派モルモン』と称する人々が唱道するような，相対的な哲学へとねじまげてしまうことはできないのである。義しいものをねじまげることはできないと言っても差し支えなかろう。

『もし教会の指導者がロック音楽を認めなかったら，数多くの若人を失うことになるかもしれない』（MIA音楽委員会）という恐れほど，私たちのとるべき道を誤らせるものがあるだろうか。現在でさえ，サタンの歌声に，麻薬に，セックスに，暴力に，そして背教にと，数多くの若人を失っているのである。私たちは，『モルモンの奇跡』という野外劇で言われている言葉を，深く心に留めようではないか。『モロナイは，あなたたちが悪と妥協できないことを知っていた。ひとたび妥協すれば，悪が必ず勝利を収めるのである。』」（リチャード・ニブレーの手紙より抜粋）

青少年の教師であり，大学の音楽学部にも籍を置くこの父親からの手紙は，分析的ではあるが，他の多くの親や青少年の指導者の考え方をよく言い表わしている。

教会は大衆の要求に迎合して，その標準を落とすことがあってはならない。タバコを吸い，コーヒーやアルコール類を飲む人々が，現代のミニスカートに対すると同様，教会の妥協のない標準のために，段々と遠ざかっていくことも事実である。

教会には現在，これまでに見られなかったほど素晴らしい若人たちが，数多くいる。皆，えり抜きの霊であったればこそ，歴史上最も問題の多い，また最も重要なこの時期に，地上に送り込まれたのである。地上に神の王国を打ち建てるという偉大な責任を課せられたこの若人たちには，恐ろしいまでの課題が与えられている。

この偉大で重要な責任や課題は，極めて困難な時期を迎えている。悪の力がこれまでになく，はびこり，しかも狡猾で，欺瞞に満ちているからである。右を向いても左を向いても，美しいもの，良いもの，そして私たちを高めてくれるものがことごとく，軽んじられ，弱められ，低俗化しているのである。こうして青少年たちに攻撃の的が絞られているというのに，一方親たちの多くは，なだめすかされて，誤った安心感を持ち，気持ちよく自己満足に浸っているのである。

シオンの中では万事がよろしいというわけではない。霊感を受けたモルモン経の予言者たちは，今日の時代を先見し，塔の上の見張り番として，重大な警告を発している。それを引用してみよう。

「ごらん，その時に悪魔はある人々の心に入って荒々しい行ないをさせ，またこの人たちに善いことを怒らせる。

またほかの人々をなだめ，この人たちをすかして肉欲をほしいままにさせるから，その人々は『シオンの中では万事よろしい。シオンは栄えて実に何事もみなよろしい』と言う。このように悪魔はこの人々をだまし，心を配って地獄へつれてゆくのである。

悪魔はまたほかの或る人々にへつらってこの人々を迷わせ，地獄はないものであると言い，また悪魔はないものであるから私は悪魔ではないと言い，このように耳にささやいて一度かかったら決して逃れられない恐ろしい鎖でとうとう縛ってしまう。……

それであるからシオンでのんきに暮らす者は禍である。

何事もみなよろしいと言う者は禍である。

実に人の誡命に聞き従い，神の権能と聖霊の賜とをしりぞける者は禍いである。」（IIニーファイ28：20—22，24—26）

主は近代の予言者を通じ，私たちに重大な責任を与えられた。

「誠にわれ汝らすべてに告ぐ，汝ら起ちて己が光を輝かせ。これ汝らの光よろずの国民のはたじるしとならんため……なり。」（教義と聖約115：5）

「すなわちシオンはその美と聖とを増し，その境域は拡がりそのステーキ部は堅うせられざるべからず。われ誠に汝らに告ぐ，シオンは起ちてその美しき衣を着けざるべからずと。」（教義と聖約82：14）

「この故に，汝の心をはり上げて喜べ。汝の腰を引きからげ，わが物の具をことごとく身に甲うべし，汝悪しき日に遭いて立ちむかい，すべてのこと成就し立ち得んためなり。」（教義と聖約27：15）

私たちは教会の若人を愛している。また，主が若人を愛しておられることも知っている。教会の若人を助け，救うのが適切とあらば，教会は何でもする用意がある。若人は教会の未来である。私たちは若人を信頼している。また，若人に幸福になって欲しいと願い，さらに，それぞれの選んだ分野で成功を収めて欲しいと願っている。さらにまた，私たちは，若人に日の光栄の王国で昇栄して欲しいと願っている。

若人たちに申し上げる。あなたたちは永遠の存在である。人生は永遠である。悪いことをしながら正義感に浸ることはできない。善良で，有益で，しかも喜びに満ちた生活は，充分に報いのあるものである。だから，深い後悔や心痛に悩まされることのない生活を送っていただきたい。あのまだ見ぬ，力ある御方に近づき，触れることができるような生活をし

ていただきたい。この御方の助けなくして，だれひとりとして，最善を尽くすことはできないのである。

すべての物事には反対のものが必要である。選択の自由は，神が与えられた永遠の原則である。主に従うことにより，サタンの狡猾なわなやはかりごとから逃れることは，私たちの責任である。だが，それは決してたやすい責任ではない。

人生を実験室に見立てると，まるで顕微鏡をのぞきでもするように，他人の生活を細かく観察し，研究することができる。神を信ずる人は幸福な人であることを知っていただきたい。「したいことをせよ」と叫び，罪深い，いわゆる快楽を求めて生活するような享楽主義者が，幸福であったためしはない。そのような偽物の快楽という仮面の裏には，永遠の死という，避け難い悲劇が潜んでいる。享楽主義者は，そうした黒い影につきまとわれながら，有益で幸福な生活を，麻薬やアルコールやセックスやロックによるつかの間の忘却とに引き換えているのである。

サタンの手口を研究すると，サタンの誘惑に対して警戒する方法を知ることができる。狡猾なサタンは，どこを，どのように攻撃したらよいかをよく知っている。最もサタンのえじきになりやすいのは，青少年である。青春時代はまさに人生の春であって，なにもかも清新に感じられるときである。青春とは，冒険と目覚めの精神である。肉体的には活力も健康度も飛躍的に増大する時期であり，時には節制の警告に目もくれないことすらある。青春とは，時の流れが無限に感じられる時期であり，歳月という地平線が遙か彼方にかすんでしまうこともしばしばである。こうして，「今を楽しむ」世代の若人は，現在も間もなく過去となり，その生涯を無為に過ごしたか，豊かに過ごしたか，振り返る時が来ることを忘れている。こうしたことが，青少年に特有の要素であって，そのために，サタンの「現品先渡し，お支払いは後で」という計略に，はまりやすくなっているのである。まったく悪魔の用いる手口は，多種多様である。

「混乱状態は，サタンにとって，活動しやすい環境である。今日，混乱の場が数多く見られる。サタンは，そうした混乱を作り出すために，様様な手だてを用いる。そのひとつは，定義をねじまげることである。麻薬の体験を記述するのに，『心の広がり』という表現を用い，一層正確な定義である『現実からの逃避』とは，表現しない。

気高い伝統を持つ言葉であるはずの自由という語も，混乱を引き起こす道具として好んで使われている。暴動，爆破，放火そして殺人が，自由という名の下に行なわれている。わいせつなものが，表現の自由にいどんでいる。ポルノや麻薬や不道徳な行為が，ミニスカートやヌードと共に，個人の自由の表現であると主張されている。放縦と無秩序は，こうした偽りの自由の所産である。

定義の混乱は，ポルノにも見られる。子供さえ，それを見分けることができるのに，現代の偉大な法律家と思われる人の中に，そうした定義すらできない人もいる。

寛容という言葉も，サタンの働きには便利な言葉である。アレクサンダー・ポープは，200年前に，次のように戒めている。

『悪徳は，恐ろしい様をした妖怪なり。
憎まれもするが，見つめられもする。
度々見るうち，親しみもわき，
はじめの我慢も，憐みに変わり，
最後には抱きしめてしまう。』

（人間論）

あざけりは，混乱と歩調を合わせて働く。物を見る目の確かな年代の若人たちを混乱させるために，皮肉屋たちは，むちゃなたとえで若人たちの批判をあざけり，自分たちの堕落の道を守ろうとしている。ロック用に歌詞の変えられた『山の上に』などは，決して讃美歌の中に入れてはならない。そのような愚弄によって，安直な笑いを引き起こし，『シオンにあっては万事がよろしい』という安心感を与えるかもしれないが，それは，悪魔のへつらいなのである。

相対主義という考え方が，永遠の真理の原則に，攻撃を加えている。そうした考え方に立つ人たちは『もしポピュラーソングに卑わいなことを連想する人がいれば，それは，その人の心が，すでに汚れているからだ』と言う。だがそう主張する人々は，連想という言葉の使い方を誤っている。そうした歌の多くから，卑わいなことが連想されるのではない。卑わいなことが堂々と歌詞として歌われているのである。

ロックが悪魔の狡猾なはかりごとであることに，いささかでも疑問を持つ人があるなら，その実によって見分ければよい。ロックにかぶれる者たちの堕落ぶりが広く報道されているが，それだけでも，ロックの悪影響を非難するには充分である。こうしたロックの勢いは，とどまる所を知らず，今では，巨大なロックフェスティバルを開くまでになっている。こうした不健全な催し物の数は，数百にも上り，何千何万という若者が，その悪影響を受けている。そして，現に今開かれているそうしたロックフェスティバルの中で，ひとつでも，麻薬やセックスや暴動のフェスティバルになっていないものがあるだろうか。」（リチャード・ニブレー）

主のみたまは，人を啓発し，キリストのもとへ導くものに力を及ぼす。LSD やマリファナやスピードでしか直せないような人類の退歩とでもいうべきこうしたうみただれた催し物に主のみたまが留まって祝福を与えるというようなことがあるだろうか。厚顔無恥なヌードや乱行が，人前にさらされることを主は喜ばれるだろうか。ロックフェスティバルで使われる言葉も往々にしてみだらなものである。原始的な偶像崇拝で使われた騒音と同様，人の感覚を麻痺させてしまうようなロックの音楽は，物質的なものを讃美して，霊の低下を助長している。人類の長大な歴史の中で，この青少年のロックフェスティバルは，サタンの最大の収穫のひとつである。古代ギリシャやローマの伝説にある酒神バッカスの祭でさえ，現代の麻薬や不道徳や暴動やポルノ音楽といった掃きだめに見られる途方もないわいせつさに比べれば，物の数ではない。あの有名なウッドストックのフェスティバルは病める国家の一大現象であった。しかしながら，いまだかつてなかったほど卑わいな内容をもつ，そのいかがわしい映画やロックのレコードが，私たちのふるさとのこの山岳地方でも，十分に採算の合う事業になり得たのである。

主は言われた。「すべて心の歌は，われの悦びなり。然り，義しき者の歌はわれに対する祈りなり。……」（教義と聖約25：12）モルモン経のニーファイ第三書には，主が喜ばれたことが次のように書かれている。「……一同歌い出して神を讃美した。」（IIIニーファイ4：31）一方，サタンが喜んだことについては，ニーファイ第一書に次のようにある。リーハイの息子たちと「イシメルの息子たちおよびその妻たちはみな……心が浮かれ，おどりをおどり歌を唱い無礼な話を始め……た。」（Iニーファイ18：9）

さて，この音楽専門家は，次のように指摘している。「ロックや麻薬の文化は，新しい方向に動き出しており，そうした流れを，多くの牧師や音楽業界は，まるで『飴も降るし地も固まる』とでも言うように，手を叩いて迎え入れている。宗教ロックは，ポピュラー音楽の『ベストテン』に入りつつある。ロックや麻薬の作り出す状況に反対しようとする動きも出ているが，この動きも，今述べたように新しい道徳が一見，穏健に手を引いているように見えるため，勢いがそがれている。だが宗教ロックの内容を調べてみると，狡猾に偽装した反キリストの仮面がはがれてくる。啓示による宗教を神話に引き下げることにより，ロックは正義という外套でその身を隠しつつ，罪の存在を否定する。こうして罪を認めずにいるため，新しい道徳は，見せかけの聖衣の陰に隠れて，不信心な反抗を続けていられるのである。イエスとユダの役割を全くさかさまにした内容で，著しく売り上げを伸ばしているロックのレコードアルバムがあるが，これなどは，イザヤの警告（5：20）と寸分違わない。『わざわいなるかな，彼らは悪を呼んで善といい，善を呼んで悪といい，暗きを光とし，光を暗きとする。』」（リチャード・ニブレー）

教会の指導者たちが，こうした不敬な欺瞞行為に反対して，何か声明を発表するよう強く心を動かされ，1971年8月の「神権会報」で特別の項目を設けて，教会員たちがこうした罪悪に注意するよう，促したのも，何ら不思議なことではない。

確かに，私たちは最良の時代に生きている。イエス・キリストの回復された福音が世界中に希望をもたらしているからである。だが同時に最悪の時代にも生きている。サタンが猛威を振るっているからである。サタンは，執拗なまでに精力的に，刈り入れに向かって突進しているのである。

このサタンの策略をいかにしてくじくことができるだろうか。昨年のMIA のテーマ聖句には，私たちが従うべき良い模範が書かれている。教会の信仰箇条第13条が，その重要な鍵である。「……もし何にても，徳高きこと好ましきこと，よき聞えあること，あるいは褒むべきことあらば，われらはこれらをたずねもとむるものなり。」

しかし，私たちは，本当に，たずね求めているだろうか。たずね求めるためには，努力が必要である。

レコードの収納箱は，色彩豊かな，そして時には無彩色のジャケットで飾り立てて若人の心を奪い，愚かな商業主義という巨大な怪物の足下で，徳高く好ましい名作の多くを踏みにじっている。

テレビやラジオは，凡庸な大衆の要求におもねることにより，視聴率を稼いでいる。こうした素晴らしい機器の発明者は，主の霊感を受けていた。だが，ひとたび，このような有益な発明品が世の中に紹介されると，暗黒の勢力が，私たちを破壊に陥れるために，これらの機器を悪用し始めた。蓄音機，映画，ラジオ，テレビといったどの伝達媒体をとってみても，皆，発明者の意図を転じて，その目的を低下させようとしてきた跡が，容易にうかがえる。

長年にわたって，音楽が行動にどう影響を及ぼすかという点を研究してきたある音楽家の話を引用してみよう。

「サタンは，音楽には，野蛮な獣をなだめたり，興奮させたりする魔力があることを知っている。音楽には雰囲気を作り出す力があるというこ

とは，ハリウッドができる前から，周知の事実である。雰囲気は環境を作り出し，環境は行動に影響を与える。バビロンの民のようにすることも，エノクの市の民のようにすることもできるのである。

不快なサイケデリック調の音の鳴り響くラジオやレコードを聞いて，吐き気を催す親がいたら，不平を言う前に自分の収集したレコードのリストを作ってみるとよい。量も少なく，全く単調なものばかりで，しかも使われていないとすれば，その非は親の側にあると言われざるを得ない。文明の種がまかれるための最良の土壌は，幼児期の模倣，という肥沃な土である。10代になってからどれ程不平不満を言ったとしても，幼い頃に模範を示してやらなかった失敗を償うことはできない。子供に英雄視される機会を失した親は，10代の青少年の描く英雄像と自分たちとの間に，大きな相違を生み出してしまったのである。」（リチャード・ニブレー）

今日，こうして魅せられた英雄の大半は，もはや品位もなく，やる気もなく，謙遜さもなければ，正義も感じないでいる。書籍や雑誌や新聞，それも特に青年欄の報告を読むと，彼らはみだらで，卑わいで，不品行で，貪欲で，そして場合によっては残酷でもあることがわかる。若人たちの称賛する仲間たちが，教会の若人の前で繰り広げるような生活こそ，現在，私たちが避けなければならない種類の生活である。青少年がこうした醜い生活の実例を賞賛することがないように，私たちは幼い時から教育を始めなければならない。子供たちの世話や養育にあたっては，肉体的，精神的，知的生活はもとより，情緒的生活についても同様の関心を払う必要がある。

若人にとって，世にありながら世のものとならずにいることが，今日程，困難な時代はない。だが，この重荷は，両親が一緒になって背負ってやらなければならない。家庭の夕べは，サタンの攻撃に対抗するための，重要なとりでである。MIAのプログラムによって教会の若人をあらゆる邪悪な影響から守り，また世の中の誘惑を拒んで空白になっている若人の心を満たしてやらなければならない。そして，もちろんのこと，あらゆる問題と個人的な疑問を解くための一大万能薬となるのは，祈りである。朝に夕に，ひとりで，また家族で捧げる祈りである。

批判したり不平ばかり言っている大人は，関心を持ち理解を示す人たちほどの効果は生み得ない。そして，純粋な若人には，愛と理解のみが，効果を持ち得るのである。また純粋になるためには，若人は愛によってその心が動かされなければならない。私たちは，若人たちが義しい生活をしていようが，間違った生活をしていようが，この教会の若人を愛さなければならない。このようにすれば，私たちは，若人たちに，識別したり，学んだりする機会を与えることができるのである。だが同時に，私たちは，若人に，正しい選択をさせてやる必要もある。今日，これに失敗している人が多い。

確かに「社会全体に神聖なものを汚す風潮が著しくなり，そのために次代を担う若人が不当な圧力を受けて，光の道と暗黒の道との間で，正しい選択ができなくなる時代がやって来る。」

願わくは，私たちが親としてまた青少年の指導者として，若人に「正しい選択」をさせるだけの力と良識とを身につけることができるよう，へりくだって，イエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。



戒めは書き直されるべきか

十二使徒評議員会会員

リチャード・L・エバンズ

最近，非常に興味深い質問と，同じくらい興味深い答えを耳にしたが，そこから話を始めたいと思う。その質問というのは，「戒めは書き直されるべきだと思いませんか」というものであり，その答は，「思いません。むしろ読み直されるべきです」というものであった。

これは仲々示唆に富んだ指摘である。そのため，この点から，基本的な真理を幾つか考えてみたいと思う。言い換えれば，神の戒めについてである。戒めは，皆，神聖な源から与えられたものである。長い歳月に及ぶ経験から，私たちは戒めの必要性というものがわかってきたし，戒めを無視したらどうなるかということもわかってきた。

それなのに，どうしてその戒めを拒もうとして自分の生活を正当化し，不満と不幸と悲しみと悲劇のうちに生活を送るのだろうか。

十戒から始めてみるとよいと思う。再三再四読み返し，十戒を額面通りに受け入れまいとするような人生を過ごさないのも，意義のあることである。

戒めの中には，これこれしてはいけないと書かれているものがある。そして，もしそう書かれていれば，それは書かれている通りの意味であり，それには理由があるのである。

また，これこれしなさいとしている戒めもあるが，それにも理由がある。

いつか，私たちの天父が私たちにしなさいと言われていることと，してはならないと言われていることとを調べて，一覧表にしてみると，面白いかも知れない。親の忠告についても，医師の勧告についても同じことが言える。

本質的には，これが福音の中身である。つまり，生ける御父が，子供たちに，次のように言って聞かせる助言である。「あなたたちは，限りない永遠の可能性を秘めている。また，自由もある。それをどう使うかは，あなたたちに任されている。つまり，私の助言に従ったときには，どうなるか，また従わなかったときには何が起こるかが決まるのである。どちらを選ぶかは，あなたたちに任されているのである。」

私たちは皆，毎日何かしら選択をしている。そして，自分のその選択の結果を受けて生活しなければならない。

これは単純明快なことである。奥義についてあいまいなことを言ったり，つまらぬことにこだわったり，議論をしたりするたぐいの問題でもないし，神の言われたことを無視しながら，神のまだ言われていないことを思案するようなたぐいの問題でもない。戒めや求められていることに不平を唱えるのをやめ，ただ事実のみを見つめようではないか。

創造主と私たちの御父以上に，肝要なことと肝要でないこととに精通している御方があるだろうか。

賢人や哲学者などが，幾世紀にもわたって，これら一連の問題と取り組んではきたが，いまだに互いに一致が見られるような解答には到達していない。

私は，学問や教育や研究に対し，また優れた研究成果や，誠実な探求者のなし得た素晴らしい業績に対し，心からの尊敬の念を持っている。だが同時に，神のみ言葉や神の予言者，そして人生の目的にも，敬意を払っている。それゆえ，どこに私たちの信頼を置くかが問題なのである。

私は，これまで，数々の有能な人人と知り合う機会に恵まれてきた。その中には，種々の宗教家，知識層の人々，立派な業績を達成した人々などがおり，その範囲は，150カ国近くにも及んでいる。だが私は，自分

の永遠の生命をかけてまで信頼がおけるような人物には，ついぞお目にかかることがなかったのである。

時折，人は聖句の意味についてあいまいなことを言い，してはならないとよく知っていながら，それを行なっている自らの行為を合理化し，正当化している。そのような人たちは，例えばこのように言う。「『姦淫してはならない』とあるが，これはその他の様々な不道徳な行為について言っているのではない。知恵の言葉にしても，人のためにならないことがはっきりしている物や商品や製品や，有害な薬物などすべてのものについて言っているわけではない。」

もちろん，戒めの中に，すべてのものが網羅されているわけではない。ベンジャミン王の言葉にあるように，「終りにのぞんで，私は罪を犯す手段をみなあげてお前たちに話すことはできない。罪を犯す手段方法はいろいろあって，数えつくすことができないほど多いからである。」（モーサヤ4：29）

主は，私たちが，知恵と良識とを用いて，肉体や精神や霊や人の道徳にとって，明らかにためにならないものについては，言いのがれをしないよう，望んでおられる。何かしたり，飲んだり，食べたりする前に，立ち止まって次のように正直に尋ねてみるがよい。「これは健康によいか。幸福に結び付くか。神から喜んでもらえるか。自分や他の人々に恵みや益をもたらすか。それとも自分をだめにしてしまうか。良いことなのか，悪いことなのか。」

人がそれをどう呼ぼうと問題ではない。要は，それが何なのか，また何をするのかが，問題なのである。シェイクスピアの言い方を借りて言えば，どう呼び方を変えようとその本質には何ら変わりなく，それをどう呼ぼうと，する事には何の変わりもないのである。

もし，道徳的な罪や汚れのすべてが聖典の中でとがめられているわけではないとして反論しようとする人があれば，聖典の中で，あらゆるたぐいの悪事，汚れ，罪，不純な行為，不節制，愚かな習慣，ふさわしくない振る舞いなどが禁じられている箇所を引き合いに出して，そうした誤りを納得させることができる。

なぜぐずぐず言っているのか。どうして，事実を素直に受け入れて，自分に対して正直になろうとしないのか。

「……神を恐れ，その命令を守れ。これはすべての人の本分である。」（伝道12：13）

救い主は言われた。「もしあなたがたがわたしを愛するならば，わたしのいましめを守るべきである。」（ヨハネ14：15）

だが，私たちは，ただ自分のためだけだとしても，やはり戒めは守るべきである。

何年も前に，エマソンは，「つぐない」と題するエッセイの中で，次のように書いている。

「世界は九九表や方程式のようなものである。いかにひねくりまわしても，その釣り合いはくずれない。……秘密は皆明るみに出され，罪は皆罰せられ，徳は皆報われ，悪は皆除かれる。沈黙のうちに，しかも確実に。……

原因と結果，手段と目標，種と実，どれも分かち難い。結果はすでに原因の中に実を結んでいるからである。種の中の実も同じである。……

あなたたちは何を手に入れようとしているのか，と神は言われる。代価を支払って持って行くがいい。……丁度自分がした分だけ支払われるのだ。それ以上でも，それ以下でもなく。

人は語れず，己を裁くのみ。……あらゆる意見は，皆語った本人にその反動が返ってくる。……

悪事を行なえば，必ず悪事に悩まされる。……

盗人は自分のものを盗み，詐欺師は自分を陥れる。……

……代価を支払わずに物を手に入れることはできない。

罪を犯してみよ，厚く積もった新雪の上を歩くようなものだ。丁度，森の中を動き回るウズラやキツネやリスやモグラが，その足跡を残すように。ひとたび口から出た言葉は呼び戻すことができない。足跡も消すことができない。はしごも引き上げることができない。いくら手掛かりを残さぬようにしても。

……我々は，誘惑に抗する力を得る。……

人は皆，愚かな迷信のもとに長い生涯をおくる。その迷信にだまされたりしながら。だが，……人が己からだまされることは決してない。」

私は，リー副管長が，エマソンが言った内容と同じようなことを，極めて短い言葉で言われたのを聞いたことがある。「成功した罪人はいない」という言葉であった。このすぐれた言葉を深く考えてみていただきたい。

償いの律法が人生には組み込まれているのであるから，私たちは，常に時間を割いて立ち止まり，自分が何をしているのか，何をしていないのか，そして，何をすればよいのか，と深く考えてみるべきなのである。

青少年の皆さんに申し上げる。神の戒めなどには根拠もなく，そんなものを破っても大した結果を招くわけではないと，言葉巧みに言い寄る人々がいる。

だが，だれに従うべきか，そしてだれが正しいことを言っているのかを見分けるための指針が欲しいのな

ら，いつも次のように自問するとよい。「この人が私にさせようとしていることを行なったら，私は幸福になり，平安を得られるだろうか。自分の可能性を最大限引き伸ばせるのだろうか。それとも，卑しい道を歩き出すのだろうか。」

理想をこわし，戒めを拒み，低い水準に落とし込もうと画策している人々に従ってはならない。

以前，〔ヒュー・B〕ブラウン副管長が，次のように質問するのを聞いたことがある。「あなたは悔い改めたいのですか。それとも言い訳がしたいのですか。」

クロムウェルの言葉から引用しよう。「私はあなたたちにお願いする。……あなたたちも誤りを犯すことがあるということを考えていて欲しい。」

もし，自分のしていることのために，肉体的にせよ，精神的にせよ，道徳的にせよ，以前より低下したとするならば，また，平安が乱れ，天父からその心が離れ，永遠の生命をそこなうことがあれば，その人は過ちを犯しているのである。

ジョン・ラスキンは言っている。「高慢がすべての大きな過ちの根底にある。」

少なくとも，高慢は，悔い改めの大きな障害のひとつである。それは，過ちを正すためには，まず最初に，その過ちを認めなければならないからである。

神が，私の愛する青少年諸君と共におられて，祝福を授けて下さり，あなたたちが，高慢さを克服し，過ちを認めて正すだけの謙遜さを身に付けることができるように。

両親を敬っていただきたい。信頼していただきたい。自分自身を尊んでいただきたい。神を敬い，神から授けられた知識を大切にしていただきたい。人生をもてあそんではいけない。私たちには一度の生涯しかないのだから。

誘惑に近づいてはならない。自分が危険や悪にどれくらい近づけるか調べてみたり，どれくらい絶壁に近づけるか調べてみたりするような，愚かなまねはするべきではない。してはならないこと，行ってはいけない場所，飲み食いしてはならない物などからは，遠ざかっていなさい。

そして，もし，袋小路に迷い込んだり，道を間違ったりしたら，できるだけ早く，今すぐにでも戻って来て欲しい。そして，悔い改めの原則のあることを神に感謝するのである。

すでに知らされていることを求めて，あちこち目的もなしに捜し回るようなことをしてはならない。昨今の詭弁や誘惑に従って生活してはならない。

心身の破壊を助長するようなものごとに，決して手を貸してはならない。肉体的にも道徳的にも，心して最高の装いをし，決して汚いもの，不潔なものに手を染めてはならない。

親たちには，子供たちの前に，正直と誉れと，清さと義しさと，そして義務に対する忠誠の模範を示していただきたい。

子供たちには，両親を愛し，大切にして欲しい。あなたたちに命を与えた人であり，あなたたちのためなら死をもいとわない人である。家族には，互いに親密になるよう勧める。愛と思いやりのうちに家庭を営み，家族同志互いに誇りを感じ，家族の一員であることを感謝し，現在の自分の境遇に感謝できる伝統を築き上げていただきたい。

戒めは書き直されるべきであろうか。決してそんなことはない。むしろ，私たちが健康や幸福や平安や自尊心を望むならば，何度も読み直し，私たちの生活の指針とも，標準ともすべきものである。

私は，愛するあるステーキ部長の言葉を思い起こしている。私は彼が私の心に深い思いを刻み込んでくれたことを感謝している。数カ月前のこと，彼は私にこう言ったのである。「私は昔，父と馬を並べて，迷った羊や牛を見つけ出そうと，よく放牧地を捜し回ったものです。そして，山の尾根まで登り，遠くのくぼ地や木立を見下ろすと，父はこう言ったものです。『あそこにいる。』父は私よりも遠目がききました。私には見えないことも度々でした。でも私には，確かにそこにいることがわかりました。父がそう言ったのですから。」

愛する兄弟姉妹の皆様，私にもあなたにも，そこにあることがわかっているものが数多くある。御父がそう言われたからである。私は御父が生きておられることを知っている。御父が私たちをその姿にかたどって造られ，またその御子，救い主を遣わされて，生命の道を示し，私たちを死から贖って下さったことを，よく知っている。また私は，神が，私たちの受け入れる度合いに応じて，私たちの生活の中に入り込んで来て下さることを，そして，神の王国と福音と生命の道が，現に，地上にあり，私たちがそれにあずかっていることを知っている。私たちが神の与えられた勧告を受け入れるならば，私たちは，自分の持つ最高の可能性に気付くことであろう。反対にその戒めに背くことがあれば，自分がなれるはずのものになれず，手に入れられるはずのものも手に入れられず，どこかでつまずいてしまうことであろう。私はこのことを知っている。神があなたたちを祝福し，常にあなたたちと共にいて下さるよう，イエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。

予言者エライジャ

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター



少し前のことであるが，私は，ある著名な人物が，若者の最近の傾向について話しているのを耳にした。彼は，最近の若者がその親たちのたどった道とは異なった道を歩んでいる，ということに論点を合わせ，親たちが子供たちの動向に懸念を抱いていることを指摘した。子供たちは現代の社会変革のためにその進む方向を誤っていると，親たちが信じているというのである。

彼はかなりの時間をさいて，現代の家庭において若者とその親たちの間に見られる「世代間の断絶」ということについて論じた。そのとき，彼は若者を擁護する側に立ち，世の中が本当の意味で進歩するためにはこの世代間の断絶がなければならないと主張した。親というのは過去の世代の人間であり，私たちには新しい考え方，新しい思想，そして古い考え方からの脱皮が必要だからだと言う。彼の論旨はこうである。子供が親と同じ道を歩んでいたのでは，絶対に進歩がない。だから，既成のものに反対する若者の動きに強制されてでも，新しいものを受け入れる必要がある，と言うのである。そして次のように質問した。「新しいものを試してみなければ，古いものの方が良いとは言えないんじゃないでしょうか」と。

彼はさらに話を続け，親と若者との間の断絶とか相違といったものは，永遠に続ける必要はないが，新しい思想を植え付け，前進するためには，もっと密な関係を作るための一準備段階として，一時的には必要であろう，と言った。そうすれば，親も子供の考え方や努力がもっとよく理解できるし，子供の方でも親をもっと理解することができるようになる。両者の関係も，こうして調整を図れば，一層強められるし，また両者間の不一致が，こういう知的な歩み寄りによって解消されれば，若者と年長者とがうまく溶け合うこともできるようになるであろう，と言うのである。

それから彼は，自分の論拠を支持するものとして，珍しく，聖典から引用した。旧約聖書の最後の書の，最後の2節である。

「見よ，主の大いなる恐るべき日が来る前に，わたしは予言者エリヤをあなたがたにつかわす。

彼は父の心をその子供たちに向けさせ，子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て，のろいをもってこの地を撃つことのないようにするためである。」（マラキ4：5―6）

マラキ書の「父の心をその子供たちに向けさせ，子供たちの心をその父に向けさせる」ためにエライジャ（エリヤ）をつかわす，と書かれているこの聖句程，旧約聖書の研究者たちに，解釈上の問題点を投げかけている聖句はない。主の大いなる恐るべき日が来る前に遣される，このエライジャとは一体，どういう人物なのだろうか。彼の生涯の中から，重要な出来事を振り返って考えてみよう。

エライジャが最初に記録に登場するのは，彼がガリラヤ地方，ヨルダン川東部にあるギリアデのテシベの出身であると述べられている箇所である。彼に関連する出来事は，キリストの生誕から9世紀前に起こっている。この偉大な予言者は，バアル崇拝をすすめている人々に反対し，エホバこそイスラエルの真の神であると主張してやまない指導者のひとりであった。彼の生涯には，数多くの奇跡が見られる。

エライジャはアハブ王に向かい，かんばつが起こると予言した。そして事実，その地はかんばつに見舞われた。予言者はヨルダンの東部に移り，ケリテ川のほとりに住んだ。彼は川から水を飲み，主はからすをおくって，夜に日に彼を養わせた。だ

が，かんばつのため，川の水も干上がり，他に避難の地を求めた。

主の導きを受けた彼は，ひとり息子と暮らしている貧しいやもめ女の所へ行った。エライジャは，町の門のところでその女を見つけ，水とパンを乞うた。するとそのやもめ女は答えて言った。「あなたの神，主は生きておられます。わたしにはパンはありません。ただ，かめに一握りの粉と，びんに少しの油があるだけです。今わたしはたきぎ2,3本を拾い，うちへ帰って，わたしと子供のためにそれを調理し，それを食べて死のうとしているのです。」(列王上17：12)

エライジャは女に言った。「恐れるには及ばない。ひと握りの粉も，びんの油も決してなくなることはない。」事実，かんばつの間中，不足することはなかった。

この間に，このやもめ女の息子が病気になり，死んだ。というより，死にかかった。エライジャが主を呼び求めたため，その少年は再び息を吹き返した。

その後，主はエライジャのもとに現われ，アハブ王の所へ行くよう告げた。また，かんばつも終わると言われた。アハブは，ツロの王の娘であるイゼベルを妻にめとっていた。ツロでは，バアル神の礼拝が行なわれており，イゼベルはこの宗教を持ち込んだ。そしてヘブル人にバアル信仰を伝え，ヘブル人の宗教とイスラエルの神に対して，敢然と戦いをいどんだ。

エライジャがアハブ王のところへ行って，かんばつの終わりを告げたとき，アハブは，エライジャのためにイスラエルが悩まされたと言って責めた。そこでエライジャは，王こそ主の戒めを捨てて，バアルに従っていると，アハブを非難した。エライジャは，イゼベルに養われているバアルの予言者たちに戦いをいどむことになり，カルメル山へ行って，主が神か，バアルが神か決着をつけようと申し出た。

アハブはイスラエルの人々を皆，カルメル山に集めた。人々が見守る中で，エライジャは，450人のバアルの予言者にただひとりで相対していた。そこには，祭壇がふたつ，ひとつは主のために，もうひとつはバアルのために築かれ，祭壇に載せた火のついていないたきぎの上には，供え物の子牛が置かれた。そして，火をもって答える神を，神として受けいれることになったのである。まず，450人の予言者たちが始めた。彼らは，朝から昼までバアルを呼び求めたが，答は何もなかった。彼らは，狂ったように祭壇のまわりを踊り，刀ややりで身を傷つけ，血を流した。だがそれでも答はなかった。

次にエライジャの番となった。彼はかめに水を入れて持って来るように言い，その水を自分の用意した供え物の上に注がせた。そして彼は言った。「『アブラハム，イサク，ヤコブの神，主よ，イスラエルでは，あなたが神であること，わたしがあなたのしもべであって，あなたの言葉に従ってこのすべての事を行ったことを，今日知らせてください。

主よ，わたしに答えてください，わたしに答えてください。主よ，この民にあなたが神であること，またあなたが彼らの心を翻されたのであることを知らせて下さい。』

そのとき主の火が下って燔祭と，たきぎと，石と，ちりとを焼きつくし，またみぞの水をなめつくした。

民は皆見て，ひれ伏して言った，『主が神である。主が神である。』」(列王上18：36—39)

空が黒くなって，雲と風が起こり，大雨が降ってかんばつは終わった。

これを聞いてイゼベルは怒り，エライジャを殺すと脅した。エライジャは南へ逃れ，ベエルシバへ行って，シナイの荒野に入った。その荒野での主とエライジャの出会いは，メンデルスゾーンの作曲した「エライジャオラトリオ」という美しい音楽の主題となっている。

山の上でエライジャは，強い風に吹かれた。シナイ山の岩も細かく砕かれた。地震もあり，火もあった。そしてその後に訪れた静寂の中から，主のみ声が聞こえた。「エライジャよ，あなたはここでなにをしているのか。」エライジャは答えた。「……イスラエルの人々はあなたの契約を捨て……わたしの命を取ろうとしています。」(列王上19：9—10) エライジャを捕らえるために軍勢が2回送られたが，エライジャは天から火を呼んで，軍勢をことごとく焼き尽くした。

エホバの偉大な擁護者エライジャとその友エリシャは，一緒にエリコからヨルダンに向かって歩いて行った。エライジャは外套を取って水を打った。水が左右に分かれたので，ふたりは乾いた土の上を渡って行った。

「彼らが進みながら語っていた時，火の車と，火の馬があらわれて，ふたりを隔てた。そしてエライジャはつむじ風に乗って天にのぼった。」(列王下2：11)

エライジャの話は旧約聖書の中に書かれており，新約聖書にも多少，言及した箇所がある。しかし，それ以上の啓示がなかったら，私たちは，エライジャの使命やマラキの言った約束の意味などについては，全くわからずじまいだったことであろう。この神権時代になって最初に記録された啓示は，天使モロナイが予言者ジョセフ・スミスに語った言葉であるが，これは，ほぼマラキの使った言葉の繰り返しであってエライジャが間もなくやって来るということを暗に示していた。8年後，カートランド神殿の献堂式から数日たったあ

る日，ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリが神殿でそろって祈っていると，驚くべき示現がふたりの前に開かれた。教義と聖約第110章の中から少し読んでみたいと思う。「われらの心より覆い取去られて覚りの眼開かれたり。」

主が教壇の胸欄の上に現われ，ふたりに語りかけられた。モーセが現われ，エライヤスが現われ，さらに記録は次の様に続いている。

「この示現閉ぢらるるや，また別の雄大にして栄光ある示現突如開かれたり。すなわち，死を味わうことなく天に上げられし予言者エライジャわれらの前に立ちて曰く，

見よ，ここに於て正にその時は全く至れるなり。そは嘗てマラキの口によりて言われしことにして，すなわち主の大いなるおそるべき日の来らん前に，彼（エライジャ）遣わさるべし。

すなわちエライジャは来りて先祖の心に子らを思わせ，子らの心に先祖を思わせん，然らずば，全地は呪いをもて打たるべし，と言われしことを証する時なり。」（教義と聖約110：1，13—15）

過去何世紀にもわたって，多くの人々が，福音の知識なくして，生活し，死んでいる。この知識がなかったら，どのようにして裁かれるのであろうか。ペテロは，キリストが十字架上で殺された後の様子を，次のように言っている。「霊においては生かされ……彼は獄に捕われている霊どものところに下って行き，宣べ伝えることをされた。」（Ⅰペテロ3：18—19）さらに次のように付け加えている。「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは，彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが，霊においては神に従って生きるようになるためである。」（Ⅰペテロ4：6）こうして，福音の知識なくして死ぬ人人にも，福音を聞き，受け入れ，そしてバプテスマを受ける機会が与えられるのである。

この地上に生を受け，バプテスマを受ける機会もなく死んで行った人人には永遠にわたってその機会が与えられないなどということが，筋の通った論理と言えるだろうか。現に生きている人が死者に代わってバプテスマを執り行なうということに，何か不合理な点でもあるだろうか。恐らく，死者のための身代わりの業のうち，最大の模範は，救い主御自身であろう。救い主は，身代わりの贖いとして，その命をささげられた。死んだ者が再び生き，永遠の生命にあずかるためである。救い主は，私たちが自分の手でやれないことを，私たちに代わってして下さった。同じようにして，私たちも，生きている間に自分で儀式を受ける機会がなかった人々のために，代わって儀式を執り行なうことができるのである。

死者に代わって行なわれるのは，何もバプテスマだけではない。エンダウメントもそうであるし，結び固めもそうである。この結び固めにより，妻はその夫の永遠の伴侶となり，子供たちとは家族として，結び固められるのである。家族という単位の結び固めは，神の家族が完全なものとなるまで続けて行なわれる。これは，時満ちたる神権時代に行なわれる偉大な業である。この業により，父の心が子供たちに向けられ，子供たちの心が父に向けられるのである。神の家族がひとつとなり，贖いを受けるということは，地の基が置かれる前に，神が定められた計画であった。

私は証申し上げる。この予言者こそ，あの，からすに養われ，決してつきることのない粉と油とによって生活した予言者である。また，やもめ女の息子の息を吹き返らせ，燃えない火によって，自分の供え物を焼き尽くさせ，火の車に乗って天に取り上げられた，あの予言者であって，この同じ予言者が，マラキの予言通り，今日現われたのである。彼は，現在，今の世代の人々と昔の世代の人々の心を互いに向けさせ合う働きをしている。

この時代になって神殿の建設が始まる前までは，また，エライジャが現われる前までは，昔の家族を捜し出したり，調べたりすることにはほとんど関心が払われていなかった。しかし神殿が建設されて以来，系図に対する関心は，世界中で加速度的に高まっている。世界の45カ国を代表する数百人の人々がソルトレーク・シティーに集まって，世界記録会議が開かれたことは，こうした関心の高まりを示す，ひとつの証左である。

ここで，現代の若者の傾向について語ったあの人物の話に戻ろう。マラキの言葉は，末の日におけるエライジャの使命は，親と子の間の不一致を解消し，家庭に平穏を取り戻し，世代間の断絶に終止符を打つということだったのであろうか。もちろん，そうではない。現代に与えられた啓示を読めば，その本当の意味がわかる。今の質問に答えるために，ジョセフ・スミスの言葉を読んでみよう。

「……これがエライジャのみたまである。すなわち，このみたまにより，私たちは死者を贖い，天にいる先祖と私たち自身とを結び付け，第一の復活によみがえるよう死者を結び固めるのである。……」（*Documentary History of the Church*「教会歴史」第6巻，p. 252）

エライジャのみたまが私たちの心の奥深く燃え，私たちが神殿に心を向けることができるよう，イエス・キリストの御名により，へりくだって祈る。アーメン。



救いの原則——正直

十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン

末日聖徒イエス・キリスト教会の信仰箇条の中に，次のように宣言している箇所がある。「われらは，正直……なるべきこと……を信ず。」（信仰箇条第13条）

だが私たちは単なる方針として，正直ということを信じているのではない。正直ということは，それよりはるかに大切なことである。正直は，神の王国で救いを受けるための，一原則である。正直でなければ，救いはあり得ない。いかなる人もバプテスマを受けずして救われることがないように，正直でなくして救われる者はだれひとりとしていない。復活なくして天の王国で進み行くことができないように，正直でなくして日の栄の王国に入ることはできない。

神は不道徳を責められると同様，偽善をも非難される。偽善は，不正直の中でも最悪のもののひとつだからである。神が地獄について語られるとき，特に，不正直なものがそこへ行くことになると言われる。清くない者が神のみ前に出ることができないように，うそをつく者も，だます者も，偽善者も，神の王国に住まうことはできない。

不正直は利己心と固く結びついている。利己心が不正直の根源だからである。ほとんどあらゆる混乱の根底には利己心があり，私たちはそれで心を痛めている。お互いに思いやる心がないために，無数の悲しみが引き起こされている。

もし人類が皆正直であったなら，この地上に天国を作ることができるだろう。軍隊を持つ必要もなければ，どんな小さな地域にも警官を配置するようなことをしなくてすむであろう。と言うのも，そのような状態になれば，犯罪もなく，他人の権利を侵害することもなく人が人に暴力を振るうこともなくなるからである。

離婚の原因もなくなるであろうし，過ちを犯す夫も不貞な妻もいなくなるであろう。親子の間の争いも消えうせ，青少年の犯罪も終わりを告げることであろう。

だがしかし，私たちの社会の中で，うそをついたりだましたりする傾向ほど広くはびこっているものがほかにあるだろうか。

麻薬業者はうそをついて，子供を悪習に陥れようと誘い，好色漢はうそをついて，少女に純潔を捨てさせようと口説く。

詐欺師はうそをついて，詐欺商法の犠牲者を作り出す。

脱税者はうそをついたために，被告席に座らなければならないはめになる。また，学校で学生が行なうカンニングも，うその一種と言える。

子供がうそをついたり，また親がうそをついたりすると，世代間の断絶が生まれる。

いかさま職人はうそをついて，満足に修理もしていないのにそれを隠す。

うそにうそを重ねて生活していくと，人は偽善者になる。

夫婦間の不信を生み出すのも，ふたりの間のうそである。横領犯人はうそをついて，帳簿を偽造する。

うそをついたりだましたりしたいと思っていると，母親は万引きを働くようになり，それを助ける子供は将来犯罪者になる可能性がある。

隣近所のうわさすずめの口にのぼるうそのために，多くの罪のない人たちの人格が犠牲にされる。

不正直な人は，仲間をだまそうとしたり，恥をかかせようとしたり，故意に傷つけたりしようとする。

家長が不正直だと，小さい子供が新聞配達をして集金したお金をだまし取るようになる。

婚前交渉は試験結婚のひとつの型にすぎないと教えるような牧師は，うそをついて，少女たちに，貞潔を

捨てさせようと口説いているのと変わりない。少女たちは純真で何も知らないから，そのような牧師の言葉を信用するかも知れない。だが，婚前交渉は罪ではないと教えたために，この牧師は神の裁きの座で，どれほど大きな代価を支払わなければならないだろうか。全能の神がシナイ山の山上から，「あなたは姦淫してはならない」(出エジプト20：14) と雷鳴のような声で語られたのを，よく知っているはずだからである。

妻をののしり，子供を馬鹿にし，家庭で獣のように振る舞う偽善者は，うそをついて，日曜日に敬虔に責任を果たし，聖歌隊で歌を歌い，主の晩餐の聖なるしるしを取る。

のぼせ上った女の子はうそをついて両親をだまし，ただただ堕落させることしか考えない男の子と，罪の生活を始める。

「うそをついてまで生きようとは思わない」と一度も自分に言い聞かせたことのないほど，心の腐り切った人間がいるだろうか。

私たち末日聖徒は，神の存在を信じている。そして神の存在を信じればこそ，私たちは悪魔の存在も信ずるのである。だがこの悪魔こそ，偽り者なのである。あらゆる偽りの父である。だからだましたり，うそをついたり，欺いたり，誤ったことを教えたりする人間は，悪魔の奴隷になるのである。

聖典に次のように書かれているのに，なんの不思議もない。

「主の憎まれるものが六つある。
　否，その心に，忌みきらわれるものが七つある。
　すなわち，高ぶる目，偽りを言う舌，罪なき人の血を流す手，
　悪しき計りごとをめぐらす心，
　すみやかに悪に走る足，
　偽りをのべる証人，
　また兄弟のうちに争いをおこす人がこれである。」
(箴言6：16－19)

聖典はこの聖句のほとばしるような勢いの後を受けて，続く節で別の憎むべき罪をあげている。この罪も，うそや偽りとは切り離せないものである。これは，快楽を求める性的な罪であって，神は，この罪は人を滅ぼすと言っておられる。近代の啓示でも，主は来るべき世の地獄の様子について語られ，地獄に落ちる人を次のように列挙している。

「これらの者たちは偽りを言う者，魔術を行う者，姦淫を行う者，娼婦を買う者，また何人にまれ偽りを好みてこれを言う者たちなり。

これらの者は地に於て神の怒りを受くる者なり。

これらの者は永遠の火の報いを受くる者なり。

これらの者は……地獄に投げ入れられ，全能の神の怒りを受けて苦しむべき者なり。」(教義と聖約76：103－106)

私たちはほとんど皆，キリスト教徒だと自称している。キリストのみ名を受け，その聖なるみ名によって礼拝しているからだという。だが私たちは，本当に，正真正銘のキリスト教徒であろうか。私たちの礼拝は，本当に主に受け入れられているだろうか。これを判断するためには，私たちが本当に主の戒めを守っているかどうか自問してみればよい。もし守っていなければ，私たちは，キリストのみ名を受ける資格があるだろうか。

ある人がこう尋ねた。「あなたが法廷でキリスト教徒であることを実証しなければならないとしたら，あなたは何を証拠にあげるだろうか。」

キリスト教徒たる者は，キリスト教徒にふさわしいということの中には，かけらほどの偽りも入る余地がないことを知っていなければならない。偽善の中には，正義はなく，うその中には良いことはなにもない。

私たちが認識しなければならないことは，神の目から見て，正直でなかったら，私たちは決して清くはなく，また，清くないものは神のみ前に出ることはできないということである。不正直な行ないに走ることは，キリスト教徒としての生活の道からはずれることである。キリストに背く者は，反キリストとなる。私たちの中で，そのような状態に甘んじられる人がいるだろうか。反キリストということは，キリストに敵対することであり，キリストに対して戦いをいどむことである。また口に出さなくても，従わないこと自体が反キリストである。キリストに対して戦いをいどむということは，私たちの生活の中から神を追い出すことであり，とどのつまりは，自己の破滅を招くことである。

人は哲学者ぶって，神はいないと言うこともできよう。宗教を神話と呼ぶことも，自分自身の知的概念を作り上げることもできよう。だがそんなものは何の役にも立たない。神が存在する証拠は，圧倒的に多い。神を否定しようとしてどれ程異議を申し立てようと，どれほど，空虚な理論を集めようと，遠くその足下にも及ばない。ある詩人が言っているように，「神はいないと言い張るのは，愚か者だけである。」

偉大な進歩を遂げた今日，私たちの記憶にある限り，今の時代ほど，神の存在を信ずる理由が整っている時代はない。どの探険をとってみても，どの科学上の業績をとってみても，あるいは人類を月に送ったことをとってみても，ことごとく，神の存在と力を断言している。

偶然の中には，なんの精密さもなく，自然発生の中には，なんの確実性もない。だが，宇宙には，精密さ

も確実性もある。そして現代の偉大な科学者たちも言っているように，こうした宇宙の森羅万象は，神の栄光を表わしているのである。そして，いにしえの詩篇作者と共に，声をあげて歌い叫ぶのである。

「地と，それに満ちるもの……は主のものである。」(詩篇24篇参照)

もし私たちが福音に少しでも関心があるのなら，真心からそれに従って生きるべきである。自分を欺いても，己の無分別の犠牲になっても，何ら得るところはない。子供でさえ理解できる単純な真理がここにある。すなわち，天の王国に救われたいと思うなら，私たちはその律法を，正直に，完全に，しかも真心から守って生活しなければならないということである。中途半端な態度は，主の望まれることではない。主はなまぬるい者に向かい，そのような者は口からはき出す，と言われている。

主が私たちに，心をつくし勢力をつくし思いをつくし体力をつくして仕えるよう戒められたことに，どうして疑いをさしはさむのであろうか。

疑いの心をもって命令を受け入れ，これを不精不精に守るものは罪に定められると主が言われたことを忘れてはいないだろうか。(教義と聖約58：29参照)

私たちが本当の意味のキリスト教徒になりたいと願うなら，次の言葉を常に心に留め，実践すべきである。

「……祭壇に供え物をささげようとする場合，兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを，そこで思い出したなら，その供え物を祭壇の前に残しておき，まず行ってその兄弟と和解し，それから帰ってきて，供え物をささげることにしなさい。」(マタイ5：23－24)

「だから，何事でも人々からしてほしいと望むことは，人々にもそのとおりにせよ。」(マタイ7：12)

「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。」(マタイ22：39)

そして，主が次のような特別の戒めを与えられたことを覚えているだろうか。「偽善者たちのようにするな。」(マタイ6：5) さらに次のように言われた。「だれも，ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。……あなたがたは，神と富とに兼ね仕えることはできない。」(マタイ6：24)

また次のような，極めて重大な聖句がある。「欺くことをする者は，わが家のうちに住むことができません。偽りを言う者はわが目の前に立つことができません。」(詩篇101：7)

全能の神はシナイ山から，盗んではならないという戒めを与えられたとき，同時に次のように言われた。「あなたは隣人について，偽証してはならない。」また，隣人のものをむさぼってはならない，とも言われた。(出エジプト20：16－17参照)

近代の啓示の中で，主は次のように力強く言われている。「汝ら偽りを言うなかれ。偽りを言いて悔い改むるこころなき者は捨てらるべし。」(教義と聖約42：21)

また主は，キリスト教の教えの重要な部分を，次のような偉大な言葉で言い表わされた。「汝ら隣人の悪口を言いまたこれに害を与うることなかれ。」(教義と聖約42：27)

それから，全く違った観点に立って，人々に，貪欲はあらゆる形の不正直をもたらすからこれを避けるようにと教えると同時に主は私たちに，もっと高い次元の道を歩むよう求めておられる。私たちは，同胞から取るのではなく，与えることを学ぶ必要がある。文字通り良きサマリヤ人となって，周囲にいる多少なりとも恵まれない人々に分け与え，また同胞に対して本当の愛を示さなければならないのである。主は言われた。

「……汝ら貧しき者のことを思い起こし，彼らに与えざるべからざる扶助のために，……己が財物を神に奉献せよ。また汝らの財物を貧しき者に分ち与うれば汝らこれをわれに為すなり，……」(教義と聖約42：30－31)

救い主は，罪の重荷が大きいことを知っておられる。主は，私たち一人一人のために，ゲッセマネと十字架上において，その重荷を背負われたのである。主は，罪深い生活が代価も大きく悲惨なものであり，また罪悪が決して幸福を生じたことはない，ということも知っておられる。主は私たちにもっと軽い荷を背負うように，つまり，喜びや安心感や深い満足感といった荷を背負うようにと，招いておられる。主は次のように言われた。

「すべて重荷を負うて苦労している者は，わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。

わたしは柔和で心のへりくだった者であるから，わたしのくびきを負うて，わたしに学びなさい。そうすれば，あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。

わたしのくびきは負いやすく，わたしの荷は軽いからである。」(マタイ11：28－30)

主ははっきりと，私たちは皆悔い改める必要があると言っておられる。また，私たちが真実悔い改めて，主の愛と赦しと，また従順というくびきを受け入れるならば，主も私たちを受け入れてくださる，と明言しておられる。

いにしえのしもべヨハネを通じ，主は次のように言われた。

「……神が光の中にいますように，わたしたちも光の中を歩くならば，わたしたちは互に交わりをもち，そして御子イエスの血が，すべての罪からわたしたちをきよめるのである。

もし，罪がないというなら，それは自分を欺くことであって，真理はわたしたちのうちにない。」

しかし一方では，主はこう言われた。

「もし，わたしたちが自分の罪を告白するならば，神は真実で正しいかたであるから，その罪をゆるし，すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。」（Ⅰヨハネ1：7－9）

「兄弟を愛する者は，光におるのであって，つまずくことはない。

兄弟を憎む者は，やみの中におり，やみの中を歩くのであって，自分ではどこへ行くのかわからない。やみが彼の目を見えなくしたからである。」（Ⅰヨハネ2：10－11）

さらに私たちには，行ないのない信仰は死んだものであるというヤコブの言葉もある。私たちは，行ないを信仰に結び付け，信仰を行ないに結び付けて，本当のキリスト教徒にならなければならない。私たちの行ないは，真実の行ないでなければならないのである。（ヤコブ2：17－18参照）

神のみたまは，真理のみたまである。救い主は真理そのものの御方である。救い主は御自分のことを指して，次のように言われた。「わたしは道であり，真理であり，命である。だれでもわたしによらないでは，父のみもとに行くことはできない。」（ヨハネ14：6）

真理によらなければ，神の王国における救いはない。そしてその真理とはキリストである。この証を，主イエス・キリストのみ名により，皆様に申し上げる。アーメン。



「光は輝く」

十二使徒評議員会会員

マリオン・G・ロムニー

愛する兄弟姉妹の皆様，そして教会員，非教会員の皆様。私がこれからお話する間，お互いが高められるよう主のみたまによる導きを求めたい。それは，私がこれから引用してお話したいと思っている箇所が，主が，現代について，またその時の私たちの状態について，そして近い将来のことについて語られた言葉の書かれている箇所だからである。

「光はやみの中に輝いている。そして，やみはこれに勝たなかった。」（ヨハネ1：5）イエスの愛された弟子はこう書いている。

私がこの聖句を思い出したのは，最近，前国連総会議長のチャールズ・H・マリク博士の話を読んだときのことである。その話の中で，博士は，今日必要とされるものとして，次のものを挙げている。

「真に万人に共通するメッセージを追い求める心，偉大で力強い未来像，何か英雄的な使命を果たせとの呼びかけである。……現代の状況は，まさに最後の審判の様相を呈している。あらゆるものが，はかりにかけられている。人の命も，人の価値も，文化も，そして，我々人類全体の文明の生命力も，皆，はかりにかけられているのである。

現代は，正に末日の感がする。信仰ある者は，神が実在すると言い，またたとえ神がなお人類をひどく懲らしめられるとしても，それでも神がその創造物を見守っておられることは疑い得ないと言うであろう。」（“*Public Speaker's Treasure Chest*”「演説珠玉集」〔Harper Row, 1964〕p. 42より引用）

私たちの社会の憂うべき状態について分析したこの言葉を深く考えてみるとき，私たちを取り巻くこの状態がもたらされたのは，適切な指導がなかったためではなく，聞く耳を持たなかったためであるという結論に達する。

今朝，私が皆様にお話する目的は，この喧噪たる世の中にあって，140年もの間，安全で確かな導きの光が存在し続けているということを力説することにある。その光は，それに従う国々に，民族に，国語の民に，ことごとく喜びと平安と幸福とをもたらすものである。

私たちの愛する救い主イエス・キリストは，地上におられたとき，今日の私たちを取り巻く環境について先見し，予言されたことを私は皆様に証する。主はまたその時に，私たちが現在とっている進路が招く結末について明らかにし，また，それを避けるために備えて下さった種々の方法についても教えられたのである。

主がその時言われたことは，当時も今も，極めて重要なことであるため，主は，3つの聖典の記録に留めさせた。聖書（マタイ24章参照)，高価なる真珠（ジョセフ・スミス1章)，教義と聖約の3つである。

主がこれを語られた当時の環境は，極めて印象的である。主は，最後に，エルサレムからベタニヤへ向かわれたとき，弟子たちと共に，オリブ山へ登られた。弟子たちは，主が神殿の建物について，石がひとつとして残ることはないと予言されたことに深い関心を抱き，主に説明を求めた。彼らはこう尋ねた。「どうぞお話し下さい。いつ，そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や，世の終りには，どんな前兆がありますか。」（マタイ24：3）

私はここで，主が当時エルサレムに迫り来る破滅について言われた部分を読み上げるつもりはない。しかしながら，主がその再降臨と「世の終り」に伴う前兆について言われた部分に関しては，私たちの現在の，そして将来の福利にかかわることなので，ここで私と一緒に真剣に考え

ていただきたいと思う。まずその前兆となる出来事について，主は次のように言われた。「異邦人の時始まるに及び，暗きに座する者の中に光輝き出でん，この光はわが完全なる福音なりとす。」(教義と聖約45：28)

この予言で，現代について言われたことは，この啓示で言われているその「光」が1820年の春，御父と御子が少年予言者ジョセフ・スミスの前に現われたときに，輝き出でたという事実によって成就している。その直後の数年間で，「(キリストの)完全なる福音」は予言者ジョセフ・スミスを通じて地上に回復された。

こうした一連の偉大な出来事は，「異邦人の時」の到来を告げるはずのものであって，また実際にその役割も果たした。この「異邦人の時」とは，この最後の神権時代にあって，福音がまず第一にユダヤ人以外の人人に宣べ伝えられる時代のことである。皆様の中には，時の絶頂において，福音はまずユダヤ人に伝えられ，それから異邦人に伝えられたことを覚えておられる方もあろう。

だが，ここで再度，救い主の言葉に戻ってみよう。

「異邦人の時始まるに及び，暗きに座する者の中に光輝き出でん，この光はわが完全なる福音なりとす。

されど彼らはその光を受け入れず。そは，彼ら光を認めざれば，人の教えの故によりてわれにこころを背くればなり。」(教義と聖約45：28－29)

今日，この予言が成就していることは，残念なことではあるが，明白である。福音を聞く機会にあずかった人々は，その大部分がこれを拒んでいる。導きとなる光がないためでなく，こうして拒むがゆえに，この時代の人々は，その進路を変更しない限り，イエスが先見し，予言された災難を，これまでと同様，これからも避けることができないであろう。主が，福音の宣べ伝えられるこの時代には，「彼ら光（イエス・キリストの福音）を認めざれば」「われにこころを背く」と言われているからである。

「この時に当り，その世に立ちて而も地に溢るる懲しめを見終りて後始めて過ぎ行く人々在るべし。世を滅ぼすべき疫病，地を覆うべければなり。

されどわが弟子たちは，聖地に立ちて（私は，先程リー副管長が話をされている間，この聖句のことを考えていた）動くことなかるべし。されど悪しき人々の中には，声を挙げて神をのろい死ぬる者たちあらん。

また地震も至る所に起り多くの荒廃は来らん。されどなお人々はわれに向いてこころを頑固にし，互いに剣を執りて殺し合うべし。

さて（これは救い主のみ言葉である。主は予言者ジョセフ・スミスにこの同じ予言を繰り返されたのである）主なるわれ，これらのことを弟子たちに語りし時彼らこころを悩ませり。

さらばわれ彼らに言えり。汝らこころを悩ますことなかれ。そはすべてこれらの事起る時は，汝らに為せる約束の成就するを汝らの知らんが故なり，と。」(教義と聖約45：31－35)

それから，イエスは，光が輝き出ずることに再度ふれて，弟子たちに次のように予言を続けられた。

「この光の輝き初むる時に起ることは，汝らに示さんとする一つのたとえの如くなるべし。

汝ら，いちじくの木を眺めてこれを見るに汝らの眼を以てす。而して，若芽萌え出でてその葉なお柔かなるや夏すでに近しと汝らは言う。

人々すべてこれらのこと起るを見るその日に於て，誠にかくの如くならん。その時人々時すでに迫れるを知るべし。

およそわれを畏るる者は，来るべき主の大いなる日，すなわち人の子の来る徴を待ち望みつつあらん。

而して，人々種々の徴と驚異とを見ん。これらの徴は仰げば天にあり，伏して見れば地に示さるべければなり。

人々は，血と火と烟霧とを見ん。」(教義と聖約45：36－41)

こうしたしるしの中には，既に私たちが目にしているものもある。そのほか残りのしるしもやがて，目にすることであろう。イエスが，次のように続けて言っておられるからである。

「主の日来る前，日輪は暗くなり，月は血と変り，諸々の星は天より落つるべし。

而して，残れる人々はこの地に集めらる。(主はこの時，オリブ山頂に立っておられた)

その時，彼らわれを求めん。見よ，われ来らん。而して彼ら，われ能力と大いなる栄光の衣を着けて天の雲に乗り，すべての聖き天使らと共に来るを見ん。而して，およそわれを油断なく待たざる者は断ち切られん。」(教義と聖約45：42－44)

しかしながら，義人が断ち切られることはない。福音を受け入れて，それに従って生きる人々に対して与えられた主の約束に耳を傾けてみよう。

「されど主の腕の下らんとする前に，まず一人の天使ラッパを鳴り響かせん。然る時は，眠り居たりし聖徒ら雲の中にてわれと遇わんために出で来らん。

この故に，汝ら（使徒たちのことを指している）穏かに眠り居たらば幸福なり。そは汝ら今やわれを見てわが在るを知る如く，汝らはわれに来りて汝らの身も霊も生き，汝らの贖い完うせらるべければなり。而し

て，聖徒らは地の四方より出で来るなり。」(教義と聖約45：45－46)

私たちは，これらの言葉から，私たちが主の来られる前に死のうと，あるいは生きてこの世に留ろうと，私たちが誠実でまた忠実である限り，主と共にあって，主の降臨を喜ぶことになると約束されているのである。

そしてさらに，復活した人々が主のもとに現われ出て，主の再臨時に生きていた義人が地の四方より出て来た後には，

「……主の腕は諸々の国民に下らん。それよりして主，その足をこの山の上に置けば山は二つに裂け，地はかなたこなたに揺れ動き，諸々の天もまた震い動かん。

而して，主声を発すればその声地の極までも響きわたりて，世にある諸々の国民嘆き悲しみ，これまでわらいたる者もその愚を覚らん。

かくて侮る者は災を蒙り，嘲る者は焼きつくさるべし。また悪を待ち構えし者は叩き伐られて火に投げ込まれん。」(教義と聖約45：47－50)

「サタンは縛られて，人の子らのこころの中に入るべき所を与えられざらん。

わが栄光をもて来るその日に，十人の処女につきてわが語りしたとえは成就すべし。

賢くして真理を受け入れ聖霊の導きに従い騙されざりし者は，誠にわれ汝らに告ぐ，彼らは伐られて火に投げ入れらるることなくその日に堪うるべし。」(教義と聖約45：55－57)

「賢くして真理を受け入れる者」とは，福音を聞いたときにそれを受け入れる人のことである。「聖霊の導きに従い騙されざりし者」とは，ただ単に聖霊の賜を受けているだけでなく，その後，だまされることのないよう，聖霊の導きを受けられるような生活をした人のことである。そのような人々は，主の再臨時に復活しようと，まだこの世に生きていようと，キリストの再降臨の「(大いなる) 日に堪える」者である。

「地はゆずりとして彼らに与えられ，彼らは殖え満ちて強くなり，その子孫らは罪を犯すことなく育ちて救いに入らん。

主は彼らの中に在りてその栄光は彼らの上に輝き，主は彼らの王にして立法者たるべし。」(教義と聖約45：58－59)

このイエスの偉大な予言の言葉は，今日私たちが直面している苦境の原因について教えてくれている。この苦境を察知したマリク博士は，現代文明の将来について深い関心を抱いたのである。これを見れば，イエス・キリストの回復された福音こそ，現代の騒然とした世の中という闇の中に輝く確かな光であることが確信できる。予言者ジョセフを通じて回復された福音こそ，あの高名な博士が求めて止まなかった「偉大で力強い未来像」であり，「何か英雄的な使命を果たせとの呼びかけ」であり，そして「真に万人に共通するメッセージを追い求める心」なのである。あの善良な博士の言う，今日必要なものなのである。「現代の状況は，まさに最後の審判の様相を呈している。あらゆるものが，はかりにかけられている。人の命も，人の価値も，文化も，そして，我々人類全体の文明の生命力も，皆，はかりにかけられているのである」と結んだ彼の言葉にも充分うなずける。また現在の時代が「まさに末日の感がする」ばかりでなく，紛れもなく末日なのであって，神が，真に「実在」して，「その創造物」を見守っておられることが，はっきりと理解できるのである。

これまで考察してきた聖典の言葉が真実であることを，私は証申し上げる。そのみ言葉を語られた御方が，神の御子であり，この地とこの地に住む人々の創り主にして贖い主であったことを，また今もなおそうであることを知っている。また御子は，世の始めから，あらゆることを知っておられることを承知している。さらに，御子が永遠の真理を語られたことをよく知っている。

私は，完全なる永遠の福音が現在，地上に存在すると証申し上げる。予言されていた光は，既に輝き出た。その他，キリストの降臨に伴うしるしが，予言された通り，数多く与えられている。今現に，目に見えるものもあり，その他の現在は見えないしるしも近い将来，必ず現われてくるのである。

私は，神が死んではおられないと証する。神は実際に導いておられる。神の力，すなわち神権は地上にある。神の計画は，日々刻々と進められている。神の「誓約がことごとく果されるまで，主の永遠のみこころは必ずつずけて行われる。」(モルモン8：22)

私は，以上のことを，キリストの特別な証人として，私たちの主イエス・キリストのみ名により，厳粛に証申し上げる。アーメン。

福千年のための土台を築く

十二使徒評議員会会員

リグランド・リチャーズ



私は，この午後，あなたたち忠実な末日聖徒と共に，再び教会の総大会に集うことのできる特権に浴し，天父に心から感謝している。

救い主は言われた。「人はパンだけで生きるものではなく，神の口から出る一つ一つの言で生きるものである。」（マタイ4：4）この総大会のこれまでの一般大会に出席する特権に浴した人々は，本当に，永遠の生命のパンを食したという実感を抱いていることと確信している。私たちは，主のしもべたちから，素晴らしい勧告を受け，霊感を与えられた。

パンにより，肉体は活気づく。だが霊を活気づけておくことは，それ以上に大切なことである。音楽も素晴らしいものであった。リックス・カレッジの合唱団に賛辞を呈したいと思う。私はほんの数週間前に，リックス・カレッジの礼拝説教に出席させていただいたが，私は，教会の教育機関やそれによる教育の機会が，教会の青少年にとって大いに役立っていることを知り，主に感謝せざるを得ない。

今日，私が少しお話したいことは，自分の信仰の土台は何か，何のために生きているのか，そして，私たちが目標として向かって行くものは何であり，何を本当に望んでいるか，ということである。私は，この区域に，美しい神殿が建てられた頃のことを考えている。100年以上も前のことである。基礎が置かれたとき，その幅は，確か，4.8メートルだったと思う。ある時，ブリガム・ヤング大管長がやって来て，職人たちが細かく砕いた花崗岩を投げ込んでいる光景を目にした。大管長は，それを取り出すように言い，そして現在あるような巨大な花崗岩の塊を置かせて，次のように説明した。「私たちは，福千年の間も持ちこたえる神殿を建てているのだ。」素晴らしい考え方ではないだろうか。私たちも皆，福千年の間生き続けることができるよう，自分の生活設計を立て，また家族の生活設計を助けたいと思っている。

午前の集会でロムニー兄弟は，予言者や救い主御自身が再降臨について述べた約束に関してお話をして下さったが，神のラッパが鳴って死者がよみがえるとき，愛する者たちと共にその中に数えられ，主のみ前に出られるよう，そのための確実な道を歩みたいと願わない者が私たちの中にいるであろうか。

私は使徒ヨハネの言葉について考えている。ヨハネはパトモス島に追放され，そこで天使によって，サタンが投げ落とされた天上の戦いに始まって最後のときに至るまで，あらゆることを示現により明らかにされた。彼は，死者が小さき者も大いなる者も神のみ前に立つのを見た。数数の書物が開かれ，死者は，その書物に書かれていることにしたがい，そのしわざに応じて裁かれた。単に信仰だけでなく，また口先の言葉だけでなく，その行ないに応じて裁かれたのである。死と黄泉はその中にいる死者を出し，皆そのしわざにより裁きを受けた。（黙示20：12－14参照）

「……彼らは生きかえって，キリストと共に千年の間，支配した。（それ以外の死人は，千年の期間が終わるまで生きかえらなかった。）……この第一の復活にあずかる者は，さいわいな者であり，また聖なる者である。この人たちに対しては，第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり，キリストと共に千年の間，支配する。」（黙示20：4－6）

ひとたび神のみたまに心を動かされて証を得ながら，神のラッパが鳴り，人が皆備えを完了しているときに，1千年の間，自分がそのままと

どまらなければならないとしたら，そんな境遇に満足できる人はいるだろうか。そして，神殿を福千年の間持ちこたえさせるために4.8メートルの基礎が必要だとしたら，私たちは，その栄えある出来事に備えるために，もっともっと従順を必要としているのではないだろうか。

救い主は言われた。「命にいたる門は狭く，その道は細い。そしてそれを見いだす者が少ない。」（マタイ7：14）私たちは，その，命にいたる狭くて細い道の上を確実に歩んで行きたいと思っている。また主はある時，このように言われた。

「……わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを，岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。

雨が降り，洪水が押し寄せ，風が吹いてその家に打ちつけても，倒れることはない。岩を土台としているからである。

またわたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を，砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。

雨が降り，洪水が押し寄せ，風が吹いてその家に打ちつけると，倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。」（マタイ7：24－27）

私たちが生活を確立する上で，どのような土台を築くかということは，私たちの永遠の幸福にとって極めて重要なことである。それは聖なる神殿を福千年の間も持ちこたえさせるためには，どのような基礎の上に建てなければならないかという問題に匹敵するほど重要なことである。

何年か前，私が南部諸州伝道部の伝道部長だった頃，ある晩，ジョージア州のクイットマンという所で，結婚の聖約と家族の結び付きの永遠性という内容で説教したことがある。私はルーロン・S・ハウウェルズ兄弟の著作「人は自分の教会の教えを信ずるか」から，話を引用した。その本の中には，主立った教会が一覧表となって載っており，主な教義上の原則に対するそれぞれの教会の立場や態度が説明されている。その中には，結婚の聖約の永遠性について書かれている箇所もあるが，これを信じている教会は他にひとつもない。

聖書を読みながらそれを信じないなどということは，そして世界中の教会で死がふたりを分かつまでという条件で結婚が執行されているなどということは，私にはとても理解できない。なんと浅はかな概念であろうか。神がこの地球の創造を終えられたときまで，時代をさかのぼって考えてみることができないのであろうか。神は地球を見て，これを良しとされ，アダムを置いてこう言われたのである。「人がひとりでいるのは良くない。」（創世2：18）神はアダムのためにふさわしい助け手を造られ，言われた。「それで人は……一体となるのである。」（創世2：24）さて，神が合わせてひとつにされたものを，もし人が分けたら，不完全なものがふたつできこそすれ，決して完全なものがふたつできることはないのである。イエスは，このことを何度も繰り返し教えられた。

「『……それゆえに，人は父母を離れ，その妻と結ばれ，ふたりの者は一体となるべきである。』

……だから，神が合わせられたものを人は離してはならない。」（マタイ19：5－6）

その集会の終わりに，私は戸口に立って，帰る人々と握手をした。するとひとりの男性が私の所へやって来て，自分はバプテスト教会の牧師だと名乗った。「今晩，何か間違って引用でもしましたでしょうか」と尋ねると，彼は「いいえ，リチャーズさん。あなたのおっしゃる通りです。私たちもみんながみんな，教会で教えられていることをことごとく信じているわけではありません」と言った。「あなたもやはり，信じておられないわけですね。では，どうして信者の方々に本当のことを教えないんですか。信者の方々は，あなたからなら話は聞くでしょう。まだ，モルモンの長老から話を聞くというわけにはいかないでしょうが。」「またお会いしましょう。」その晩の話は，それで終わりとなった。

再び，私がその支部を訪れて大会を開いたのは，それから4カ月程たった日のことであった。私が伝道部長であったため，私の来訪のことは新聞で報道されていた。私がその小さな教会に向かって歩いて行くと，あのバプテスト教会の牧師が私を迎えてくれた。彼と握手をすると，私はこう言った。「私の先日の説明のことをどう思っておられるか，是非とも伺いたいのですが」。彼は言った。「リチャーズさん，私はあれからずっとそのことを考えてきました。私はあなたの言われたことをことごとく信じます。」そしてこう重ねた。

「ほかの話も是非聞かせて下さい。」妻や子を真実愛している人に，その原則を信じたいと思わない人がいるだろうか。

私は，アンダーソン・M・ベイトンという人が書いた「妻のボーラへ」という短い詩が好きである。それを読んでみよう。

「私は君と永遠に結婚する。現世の
　間だけでなく，
地上の短い仮の生涯だけもなく。
私は君と結婚する。涙を越えて，
心の苦しさを越えて，気持のふさ
　ぎも越えて，はるか彼方まで。
愛には墓はない。愛があればどこ
　へでも行ける。
たとえ，人生で使い減らしたろう
　そくの炎が揺れ，小さなともし

びしかなくとも。」

このように，結婚というものが永遠のものでなければならないと信じている人々はいる。だが，私の知る限り，私たちの教会を唯一の例外として，世界中のいかなる教会も，結婚の誓約の永遠性を信じてはいない。

私たちが永遠に生き続けるとわかったとき，私たちの生活には一体どんな変化が起きるか，ちょっと考えてみていただきたい。死によって妻子と別れ，二度とまみえることはないと考えることができれば，死によって肉体も霊も完全に無になるということも，すぐにでも信ずることができよう。だが，そうなれば，将来に希望を託するものは，ほとんどない。この地上で固く結び付けられていた愛の絆が断ち切られるとしたら，どうして人は永遠に生き続けたいと思うだろうか。

私たちは時折，幼児誘かい事件を耳にする。何年か前，確か1932年のことだったと思うが，リンドバーグ大佐の子供が誘かいされて，身代金1,500万円を要求するメモが残された事件があった。大佐は，子供が自分の手に戻ってくるのなら，いくら要求されても，喜んで支払いに応じたことであろう。さてここでも，永遠の生命という問題が浮かび上がって来る。マリオン・G・ロムニー兄弟は，午前の集会で，主の啓示を引用したが，その啓示は，復活のときには子供もよみがえり，罪を犯すことなく育って救いに入る，というものであった。(教義と聖約45：58参照)

私たちの中には，幼い子供を墓に葬らなければならなかった経験をお持ちの方もいる。私たち夫婦もそうした経験をした。私がオランダの伝道部長だったとき，そこで，私たちの間にひとりの娘が生まれた。私たちはその子を3歳半まで育てて亡くした。それ以来私の妻は，折に触れて，「天使が私のところへあの子の霊を連れて来てくれているわ。天使がいることを感じるの」と言う。だがそれでも娘を墓の中に葬ったことには間違いがない。もし，それですべてが終わりだということになれば，私たちはこの世の何を失っても，なんとかして娘を取り戻したいと思うようになるであろう。だが私たちには，福音の回復によってもたらされた偉大な知識がある。それによれば，娘は，永遠の世界において再び私たち夫婦のもとへ帰り，私たちは，娘が罪を犯すことなく育って救いにあずかるのを見る喜びにあずかるのである。時折，私は，恐らくそうした選り抜きの霊の中には，他の子供たちのようにこの地上での生活を経験する必要がないものもあるのではないかと考えている。そして，それだからこそ，主はみもとへ呼び戻すのがふさわしいと感じられたのではなかろうか。

私たちには，娘が4人生まれたあと，息子が生まれた。私たちはカリフォルニアへ派遣されて，そこでステーキ部を管理していたが，ある時，息子は，高等評議員の兄弟やその子供たちと一緒に外出し，そこで事故に遭い，命を失った。これまで，そのとき以上に大きな悲しみを感じたことはない。だが，言わば，この世の生涯というはしごを昇りつめようとしている今，私たちは，こうした愛の絆こそ，永遠の父なる神がとこしえに存続するよう定めておられることを知って，その日を待ちわびている。私たちの愛する大切な人々といつか会えるということを知れば，死によってもたらされた悲しみも取り除かれる。この知識を神に感謝する。私はこの地上でしっかりと基礎を築き上げて，愛する人々と共に，また清められ贖われた御父の子供たちと共に，立てるようになりたいものだと思っている。

兄弟姉妹たちよ，私たちは祝福された民である。私たちは恵まれて，福音が回復されている時代にこの地上に生を受け，その真理の知識にあずかるという特権に浴している。私たちは恵まれて，私たちの信仰を築き上げるための基礎を持っている。そして，その基礎があらばこそ，愛する人々と共に交わる毎日に幸せを感じるのである。マッケイ大管長が常々，いかなる成功も家庭における失敗を償うことはできないと言っておられたことに，なんの不思議もない。そして，人が皆，神の戒めを守って神に近い生活をすればするほど，家庭における愛も大きなものとなり，またその愛は来るべき永遠の世にも続き得るという知識に感謝するようになるであろう。

私が南部諸州伝道部の伝道部長だったときのことである。ある学校の教師が，モルモンの子供に本を貸した。そして，その本が返って来たとき，その中に信仰箇条のカードがはさんであった。その教師は，それを読み，自分の教会の牧師のところへ行って尋ねた。

「どうして私たちの教会にはこのようなものがないのですか。」牧師は満足できる説明はしてくれなかった。そこで，彼女はソルトレーク・シティーの案内所へ手紙を書いた。案内所では，彼女にパンフレットを送り，また伝道本部に彼女の名前を知らせてくれた。そして宣教師が彼女を訪問し，彼女は教会に入ったのである。

私は，予言者ジョセフ・スミスによって書かれたこの信仰箇条を読むたびに（ジョセフがここには挙げなかった重要な教義は，他に数多くあるが)，どうして，この信仰箇条を読みながら，私たちの教会に真理があるということを信じない人がいるのだろうかと考える。世界のどの教会

をとって見ても，このような基礎の上に築き上げられているものはない。終わりにあたって，私は，信仰箇条の中から，少し読んでみたいと思う。

「われらは，永遠の父なる神と，その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。」予言者ジョセフは，御二方は，それぞれ骨肉の体を持たれた別々の御方であり，聖霊は霊の御方であると教えた。

「われらは，人は皆各々其身にてなしたる罪に対して罰を受け，アダムの咎に対して罰を受けざることを信ず。」これを信じている教会は，それほど多くはない。

「われらは，キリストの贖罪によりすべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず。」今日，諸教会の教えでは，そのほとんどが，イエスを救い主として告白しさえすればよいと言っているが，私たちの教会では，主の言われることを行なわなければならないと宣言している。

「われらは，福音の第一原則と儀式とは，第１，主イエス・キリストを信ずる信仰，第２，悔改め，第３，罪の赦しを受くるために水に沈めらるるバプテスマ，第４，聖霊の賜を授かるための按手礼なることを信ず。」この基礎の上に建てられた教会は，世界中どこを探しても存在しないはずである。そしてさらに，ヘブル書の第６章を開くとパウロは次のように言っている。

「……わたしたちは，キリストの教えの初歩をあとにして，完成を目ざして進もうではないか。今さら，死んだ行いの悔改めと神への信仰，バプテスマについての教えと按手，死人の復活と永遠のさばき，などの基本の教をくりかえし学ぶことをやめようではないか。」（欽定訳ヘブル６：１－２）

これは，私たちの教会の信仰箇条で言っていることと，全く同じ内容である。

「われらは，福音を宣べ，且つその儀式を執り行うためには，啓示と，権威ある者の按手により，神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。」他にこれを信じている教会はない。彼らは，聖書を読むことにより，権威が与えられると考えているのである。

「われらは，教会には，初期の教会に在りたると同一の組織，すなわち使徒，予言者，監督，教師，祝福師等のあるべきことを信ず。」パウロは，主の教会は，使徒と予言者という土台の上に建てられたものであって，キリスト御自身が隅のかしら石なのであると，言っている。そして，他に，このような土台を持つ教会はない。

「われらは，異言を語る力，予言する力，啓示，示現を受くる力，病を直す力，異言を釈く力等の賜あることを信ず。」

「われらは，正確に翻訳されたる限り，聖書は神の御言葉なりと信ず。またモルモン経（英文）も神の御言葉なりと信ず。」聖書を信ずる者ならだれでも，神が他にも聖典を世に出すと約束しており，やがてそれを聖書と合わせ，み手の中でひとつにされるということを知っている。

「われらは，すべて神のこれまでに啓示したまいしこと，すべて今啓示したもうことを信じ，なお今より後，神の王国につきて多くの偉大にして重要なることを啓示したもうことを信ず。」

そしてさらに「われらは，イスラエル人は，文字通りに四方より集合し，その十支族の元に立ちかえることを信ず。われらは，シオン（新エルサレム）はこの（アメリカ）大陸に建てられ，キリストは御自ら地上に王となりて治めたまい，地球は元にあらたまりて楽園の栄えを受くることを信ず。」私たちは以上のことを知っている。イザヤの予言にあるように，その日になると，新しい天と新しい地とが造られ，その中で小羊とししが共に住むのである。私たちは家を建ててその中に住み，ぶどう畑を作って，その実を食べることになる。また，ほかの人が住む家を建てることはなく，皆自分自身の手のわざを楽しむ。主によって祝福された者たちとなり，またそのすえも共に祝福されるのである。（イザヤ65：17－23参照）

私たちが，あの聖なる神殿が建っている基礎に匹敵するような基礎を築きたいと願うことは，至極当然のことである。そうして始めて，私たちは，確かに，福千年の間中，愛する人々と共に過ごすことができるようになるのである。なにとぞ，神の助けがあって，私たちひとりひとりが，また私たちの家族が，そうすることができるよう，主イエス・キリストのみ名により祈ると共に，私の祝福を残す次第である。アーメン。

世を救う 私たちの責任



十二使徒評議員会会員

デルバート・L・ステイプレー

今年の四月の総大会が終わった直後，悩みを持つ，ある信心深いキリスト教徒の紳士から，次のような手紙を受け取った。「神が，あなたがたと，あなたがたの素晴らしい業とを祝福して下さるように。私たちの教会は，サタンを追放することに失敗しましたので，私は，あなたがたの教会でサタンを追放して下さるよう，祈っています。」

残念ながら，私たちは，まだ，私たちの――もっと適切に言えば，主の――教会から，完全に，サタンを追放し切ってはいない。私たちのすべてが義しく生活することによって，サタンやその部下たちの勢力から，身を守っているとは言えない。

私は，末日聖徒イエス・キリスト教会こそ，気高く，霊的で，価値があり，なおかつ人生に益をもたらすあらゆるものを守る最後のとりでであると，心から証申し上げる。私のこの証が真実であるかどうかということは，教会員が皆，良い模範を示し，良い行ないをなすかどうかにかかっているのである。

主はその子供たちに警告を与えて，末日にはサタンが自らの領土を支配するようになると言われた。(教義と聖約1：35参照) 現在，そうした状況が現われている。殺人，不法行為，道徳的な罪の増加がその証拠である。かつて神聖なものと考えられていたものがことごとく，不可知論者や無神論者，そして破壊分子や過激分子といった輩の，神をも恐れぬ勢いに押されて，崩壊しつつある。悪を企てる人々は，麻薬やアルコールや売春やポルノなどを商売にして暴利をむさぼり，人生の道徳的，倫理的，霊的価値といったものを破壊している。

サタンを縛りつけておくことのできる唯一の方法は，人々が，悪事を行なえとのサタンの誘惑を振り捨て，主のみ前に正しく，慎重に歩むことである。(Ⅰテモテ6：5－7参照)

サタンとその部下たちは，絶えず，私たちの霊を守るよろいの弱い個所を捜し出そうと懸命になっており，ひとたび捜し出すと，あらゆる力と策略とを使って攻撃をその部分に集中し，遂には，私たちの中に侵入して，滅ぼしてしまうのである，

確かに，もし人々の罪悪がこれ以上増加の一途をたどり，世の中に邪悪がはびこるようになれば，神の裁きは，地上の悪しき人々の上に容赦なく下されるであろう。私たちが天の守りを受けたいと望むなら，その方法はただひとつ，世界中の人々の心の中に，正義と謙遜さとを確立することである。主は，主の聖徒らを支配し，その真ん中にあって統治すると約束しておられる。真の聖徒らしい生活を送るためには，本当の勇気と目的が必要なのである。

神の御言葉を持ち，それを理解している限り，教会員は悪の誘惑に心を動かされるはずがない。私たちは，これまで正しく教えられてきている。だが，ひとり残らず，教えられた通りの生活をしているとは言えない。私たちの中に，自分で神の戒めを守れなかったばかりに，自分の生活に，家庭に，神の宮居に，そして聖餐式や他の教会の集会に，悪の影響を取り入れている人々が，どれほどいるだろうか。私たちの前には，聖典の言葉があり，また，私たちの生涯を通じ，あらゆる活動に導きと教えを与えてくれる，神の生ける予言者が私たちのただ中にいる。主は，私たちが世の民とは異なっているように，望んでおられる。私たちは，主にとって特別の民でなければならない。だが，私たちは，その特別であることを，私たちの行ないや振る舞い，そして主の戒めに従順であることによって，立証しなければならないの

である。

少し前のこと，教会員ではないが，全国でも著名なあるスカウトの指導者が，ソルトレーク・シティーを訪れ，教会のスカウト指導員たちと会合を持った。彼は，教会が，青少年のためにスカウトプログラムを導入しているその素晴らしい利用法について論評し，その中で，次のように所信を述べた。「……私は，この教会が世を救い得ると信じている。……これは大胆な言い方かもしれない。……だが真実である。私は，あなたがたが決して自分の責任を忘れることのないよう，心から望んでいる。」

私は，この言葉を引用する許可をいただくために，この友人に手紙を書いた。その返事の中で，彼は次のように書いてきた。「あなたが手紙の中で触れている私の言葉については，私の考えはその時からいささかも変わってはいないと，喜んで申し上げておきましょう。実際，あなたがどこでも適当と思われる場で引用して下さることを，私自身，この上なく誇りに思います。あなたやあなたの同僚たちは，実に素晴らしい仕事をしておられるのです。どうぞ，今後も努力を続けて下さい。」

なんと驚くべき，そして高邁な見解を，この友人は，教会と教会員に対して持っていることであろうか。

私は，もし教会員が神の聖徒として，望まれている通りの生活を送るならば，末日聖徒イエス・キリスト教会は世を救い得ると信じている。私たちが，福音の原則に従って生活するという標準からそれるたびに，必ずと言っていいほど，だれかが私たちの行ないを注視しており，私たちに対し，また教会の霊的価値に対し,好ましくない見解を抱くのである。私たちが忠実であれば,.私たちの教えている教義も意味のあるものとなる。救い主は，このことを強調して，次のように言っておられる。「あなたがたの光を人々の前に輝かし，そして，人々があなたがたのよいおこないを見て，天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」(マタイ5：16)

世を救うということは，偉大な責任である。この責任は，ひとり，教会の指導者たちだけに課せられているのではなく，すべての教会員にも同様に課せられているのである。キリストの真の福音は，世の希望である。民族と民族，国と国とを結び付け，今日人類を分けている障害を打ち破るための，唯一の計画というのが，この福音なのである。歴史を研究すれば，人類が，神やその御子である救い主に背を向けては，決して平安で安全な生活を送ることはできないということがわかる。いかなる人も，いかなる民も，神の戒めに反抗しながら，神と調和を保って生活することはできない。今日，世界の多くの地域では，礼儀や，神と人の律法に対する忠誠といった，旧来の秩序に対して，公然と反旗を翻す傾向が見られる。

教会員として，私たちは，世を救うために何をしようとしているのであろうか。まず第一に，戒めを守って生活しなければならない。自分自身にも他人にも正直でなければならない。道徳的に清くなければならず，二重の道徳標準をもって生活してはならない。また，二重人格であってもならない。日曜日の自分と，他の六日間の自分が異なっていてはならないのである。

最近改宗したある人から手紙を受けた。その中で，この改宗者は，モルモンの宗教が，ちょうど「かぐわしい朝の空気を吸う」ようであると言っている。そして，彼が前の教会を去って末日聖徒イエス・キリスト教会に加入した理由を，8つ挙げている。私はこれを全部挙げ，またそれぞれ私自身の注釈を付け加えたいと思う。

1，健全な家族生活。友人や仲間，学校や大学，そして職業や社会的生活といったもの以上に，人の態度や目的を決める上で，はるかに大きな影響力を持つのが，家庭の力である。家庭こそ，青少年にとって，初めての重要な訓練の場である。末日聖徒の理想的な家庭とは，信頼，平安，連帯，そして幸福が維持されていて，高い標準が見られる家庭である。

2，自立心と責任。教会員は皆，生まれ落ちてから死ぬまで，自立心と責任について教えられている。永遠の生命に到達するのは，個人の責任である。

3，道徳的・肉体的訓練。使徒パウロは，ガラテヤの聖徒たちに向けて，次のように勧告している。「肉の働きは明白である。すなわち，不品行，汚れ，好色，……ねたみ，泥酔，……しかし御霊の実は，愛，喜び，平和，寛容，慈愛，善意，忠実である。」(ガラテヤ5：19，21－22)

デビッド・O・マッケイ大管長が，常日頃語っておられたことは，道徳律を正しく保つために，克己，自己訓練，自制心が必要である，ということである。

ジョセフ・F・スミス大管長も，次のように言っている。「人はだれでも，己を支配できない限り，安全ではない。統制できない欲望や感情ほど，無慈悲で，恐るべき暴君はいない。」(「福音の教義」第1巻，p. 296)

救い主は，次のように警告しておられる。「誘惑に陥らないように，目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが，肉体が弱いのである。」(マタイ26：41)

4，子供たちが両親に対して従順であること。使徒パウロは，エペソ

の若人たちに次のように勧めている。「子たる者よ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことである。『あなたの父と母とを敬え。』これが第一の戒めであって，次の約束がそれについている，『そうすれば，あなたは幸福になり，地上でながく生きながらえるであろう。』」(エペソ6：1－3)

また，ヘブルの聖徒たちに向けて，パウロはキリストについて次のように書き送っている。「彼は御子であられたにもかかわらず，さまざまの苦しみによって従順を学ばれた。」(ヘブル5：8)

この従順さは，地上の両親に対する従順さよりも，はるかに高いものである。私たちには皆，天父の子供として，天父の律法と戒めに対して従順であることが，義務として求められているのである。

5，あらゆる面で，完全と卓越とを求めること。福音は，聖徒たちを完全な者とするためのものである。救い主は次のように言われた。「それだから，あなたがたの天の父が完全であられるようにあなたがたも完全な者となりなさい。」(マタイ5：48)

イエスは，弟子たちに向かい，次のように尋ねられた。「……汝らはいかなる人物にてあるべきか。」イエスは，この問いかけに自ら答えて言われた。

「まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」(IIIニーファイ27：27) イエスは完全な生活をされたがゆえに，イエスに従う人々に次のように求められた。「われにならいて，汝らの見たるわれの行いを汝らもせよ。」(IIニーファイ31：12)

6，純潔と神聖な結婚の誓約の遵守。このたびミス・アメリカに選ばれたローラ・リー・シェーファーについて書かれた記事を読み，心が躍るのを覚えた。彼女は，その最初の公式記者会見で，様々な質問に対して，勇気ある回答をしたのである。彼女は，婚前交渉というものを信じないし，また反対していると発言した。また，マリファナを常用していると重度の麻薬中毒になるし，堕胎は違法だと感じていると発言した。さらに付け加えて次のように言った。「私が女子学生の典型というわけではありませんが，私の仲間や大多数の若い人々は，私と同じように感じていると思います。」彼女の持つ行動の規範は，アメリカの青少年にとって，なんと優れた模範であろうか。

不貞は，結婚の誓約を冒瀆するものであり，その結果，離婚にまで発展することがしばしばである。離婚は，子供たちを徐々にそこない，麻薬の飲用や不品行やその他罪深い行ないに走らせることが往々にしてある。そして，やがて教会に出席しなくなり，活動からも遠ざかるのである。もし，夫婦という夫婦が皆，結婚の誓約を誠実に守るなら，今日の世界の問題や悲哀は，はるかに少なくなるであろう。また，もし両親が愛と信頼と永遠の家族の目標とを模範によって示すなら，子供たちは，当然のように，結婚というものが神聖なものであると考えるようになることであろう。

7，高い教育水準。私たちは，「神の栄光は英智なり。すなわち光明と真理なり」(教義と聖約93：36) と教えられている。主は，次のように勧告しておられる。

「そは，必ずしもすべての人信仰なきが故に，汝ら努めて求め，互いに智恵ある言葉を教うべし。然り，汝ら最も善き書より智恵ある言葉を探し求めよ。また正に研究と信仰とによりて学問を求むべし。」(教義と聖約88：118)

さらに，次のように教えておられる。「およそ，われらのこの世に於て達する英智の一切は，何にてもよみがえりの時われらと共によみがえるべし。さればもしある人ありて，精励従順によりこの世に於て他の人よりも一層勝れたる知識と英智とを得ば，未来の世に於てそれだけ利を得べし。」(教義と聖約130：18－19)

8，「最後に述べるが，決して軽んじられてはならないものは，常識である」と，この最近の改宗者は言っている。常識とは，詭弁を弄することもなく，特別な知識も必要としない能力である。それは，善良で，健全で，実際的な判断力のことである。人は皆だれでも，ある程度の常識は持ち合わせているものである。問題は，その常識をどう使うかである。性急に行動を起こすのではなく，常識を用いて物事を考えるかどうかである。

以上8つの意味深い，また重要な理由は，私たちが心に留め，各自の生活の中で実践する価値が充分にある事柄である。

福音のみが，人々を励まして，正しくかつ霊的な行為の規範に従った生活をさせる力を持っている。世のならいを捨て，神の戒めを忠実に守るときには，私たちが犠牲にしているものは何もない。というのも，この世の生涯で，ふさわしい生活を送っていれば，この世の生涯を終えた後には，御父の王国である日の栄に住まう資格が与えられるからである。これ以上に栄えある，また満足のいく報いがほかにあるだろうか。

予言者リーハイは，エルサルムの崩壊について警告が与えられたため，自分の家族とその他数人の人々を引き連れて，この聖なる都をあとにした。3日間荒野の中を進んだ後，彼らは，谷間を流れるある川のほとりに天幕を張った。(Iニーファイ2：6参照) その川は紅海に流れ注ぐ川であった。ここへ来るまでに，リー

ハイは，年長のふたりの息子に反抗されるという大きな問題を抱えていた。リーハイは，とうとうたる流れのことを考えているうちに，強く心を動かされ，長男のレーマンに向かって次のように言った。「この川がたえず流れて海に入るように，汝もたえ間なくあらゆる義しさの海に流れこんでくれるように。」（Ｉニーファイ２：９）

多くの川は，山腹からほとばしり出る混じり気もない，水晶のように透明な水をその源泉として，流れを始めている。その水が海に向かって流れて行く途中で，支流が集まり，大きな流れをつくっていく。だが，そうした支流の中には，汚染の進んでいるものもあり，それは清らかな水源を持つ本流をも汚濁させてしまう。そして，その川が海に流れ込むまでには，汚染が，川全体にまで広がってしまっているのである。

私たちの人生は，今申し上げた象徴的なたとえと，なんと似通っていることであろうか。主は，次のような啓示を与えられた。「人のあらゆる霊は，太初に罪なきものなりき。而して神は堕落より人を贖いたもうたるにより，人はみな再び幼な児の有様となり，神の前に罪なしとなりぬ。」（教義と聖約93：38）この啓示を心の中に留めておくと，私たちは，救い主がなぜ次のように言われたかを理解できる。「心をいれかえて幼な子のようにならなければ，天国にはいることはできないであろう。」（マタイ18：３）

子供が責任をとれる年齢に達するときのことを，主は次のように警告しておられる。「かの悪魔来りて，不従順により，また先祖の言伝えにより人の子らより光明と真理を取り去りぬ。」（教義と聖約93：39）

私たちは，この啓示から，人は皆，この世に生まれ落ちたときには，神のみ前に罪のない者であることがわかる。ちょうど川の源のように，清らかで，汚れがないのである。そして，汚染されている支流が本流に流れ込むように，私たちの生活も，罪悪という支流が流れ込むのを許してしまうと，簡単に汚染されてしまうのである。こうした悪の流れに対して，私たちは常に関心を払っていなければならないし，また私たち自身も，その身を守らなければならない。罪悪は決して幸福を生じたことがない。むしろ反対に，人の心を弱めているのである。罪悪は人の良心を麻痺させ，最終的には，霊的な生活を破壊する。そして絶えず悪事を行なうようになる。両親から適切な教育と訓練を受けていない子供は悪の誘惑に負けやすく，その結果，現世でも，永遠の世でも，その生涯を汚し，やがて滅ぼしてしまうのである。忘れてはならない。清くないものは，いかなるものも，神のみ前に出ることはできないのである。悪の道に従う者で勝利を得る者はいない。私たちがこのことを学ぶのが若ければ若いほど，私たちの生涯は，報いの多い，実りあるものとなってくるのである。

私は，私たちが皆，固く立って，着実に，なおかつ動揺することなく主の戒めを守り，この教会からサタンを完全に放逐することができるよう，心から祈っている。

私たちの努力をどこに向けるかお話した今，自分たちの教える内容にふさわしい模範となろうではないか。そして，私たちの友人や同僚と福音の知識を熱心に分かち合い，私たちの携わっている業が神のみ業であることを，心から証しようではないか。神が，そのように行なう私たちを祝福して下さるよう，イエス・キリストのみ名により，祈るものである。アーメン。

神権の祝福



大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する神権者の皆様。私は，皆様と共にこの神権者大会に集えることを心から感謝している。そして，神権を人類の利益のために行使するということに関して，一言申し上げたいと思う。

この神権は，福音を管理し，執行するものである。神権は，主御自身から委ねられた権能であって，私たち自身と私たちの同胞が，天上の日の光栄の王国において救いと昇栄にあずかるために，必要なことをことごとく行なえるよう，私たちに与えられているものである。

予言者ジョセフ・スミスに与えられた初期の啓示の中で，主は次のように言われた。「もし汝善を行わんと欲し誠に終りまで変ることなく忠信ならば，神の王国に救わるべし。こは，神の賜のうち最大なるものなり。およそ，救いの賜に勝る賜はあらざればなり。」(教義と聖約6：13)

さて，この，人に与えられる祝福の中でも最大のものである救いは，福音の律法に従順であることによってもたらされる。そしてその福音の諸儀式は神権の権能によって執り行なわれる。それで，神権というものは，私たち自身と天父の他の子供たちに祝福をもたらすために，私たちに与えられたのである。

神権の権威と権能があってはじめて，福音も宣べ伝えられる。人生で，福音を受け入れる以上に大きな祝福があるだろうか。

また，神権の権能があってはじめて，人は罪の赦しを受けるためのバプテスマを受けることができる。また生涯にわたって聖霊の神聖な力を受けることができるのである。

私たちには，誓約によってメルケゼデク神権が授けられる。私たちは，その召しを全力を尽して遂行し，「神の口から出る一つ一つの言葉で」(マタイ4：4）生活するという約束を交わす。主が私たちに与えられる約束は，私たちが自分で交わした約束を守れば，日の光栄の最高の位において昇栄にあずかることができるという約束である。

この世と永遠にわたる結婚は，「神権の命ずるところ」であり，この儀式を受けた夫婦には，その誓約に忠実である限り，王国と王座が約束されるのである。

聖なる神権を持つ兄弟たちには，信仰ある者が病める時に祝福を施す権能が与えられている。それ故，信仰ある聖徒たちには，「死の命を受けざる」限り，健康と体力とが回復されるのである。

そして，これは，教会活動の及ぶすべての範囲にわたって同じことが言える。主の祝福は，聖徒たちのみならず，全世界の人々にも，もたらされる。そのために教えと導きを施すのが，主の聖なる神権を持つ人々であり，主を代表する人々であり，本当の意味でしもべであり，使いである人々であり，そして，喜んで主に仕え主の戒めを守る人々なのである。

神権を持つすべての兄弟に，お願いする。自分に授けられている神権を，まず第一に自分自身に恵みをもたらすために，次に同胞に恵みをもたらすために使っていただきたい。教会で定められた秩序から決してはずれることなく行動していただきたい。

資格ある人々は可能な限り，召しに応えて，家庭の内外で福音を宣べ伝えるべきである。夫たる者は，妻や子供たちに祝福をもたらさなければならない。また，私たちは皆，主の宮居の祝福を受けるにふさわしくなければならない。この祝福こそ，神権によってもたらされる祝福なのである。

愛する兄弟たちよ，神権を持つと

いうことを決して軽々しく考えてはいけない。私たちは，主の権威と権能を扱っているのである。それは，主が，今日，諸天を開いてもたらして下さったものであり，その結果人類は再び，人が最初に地上に置かれたときと同様，あらゆる祝福を受けることができるようになったのである。

私たちが皆，各々の義務を悟り，神権を常に尊び，そして天よりの召しを全力を尽くして遂行することができるよう，心から祈っている。さらにまた，私たちが与えられている神権を行使して，自身と同胞に祝福をもたらし，そして，世界各地に伝えられている救いのおとずれに耳を傾けるすべての人々に祝福をもたらすことができるよう，私は祈ってやまない。

私は閉会にあたり，神権を授けられている人々，聖職に任命されている人々，責任を与えられている人々，そして，そうした責任に忠実な人々のために，私の祝福を差し上げたいと思う。

私たちに与えられている責任は，ただ単にこの神権を自分自身のために受けることだけではなく，全世界の進んで悔い改め，福音を受け入れる人々にも祝福をもたらすことである。そして私たちは，この救いのおとずれを，世界の各地に携えて行く。それが私たちの責任だからである。

私は，立派な神権者である皆様と共に働けることを感謝し，また喜んでいる。そして，悔い改めようとしている世界中の人々に救いをもたらすために，可能な限り，力を尽くして働きたいと願っている。主イエス・キリストのみ名により，申し上げる次第である。アーメン。

奉仕の業を続けて



大管長会第二副管長

N・エルドン・タナー

この集会は，まことに霊感に満ちた集会である。ここに集まっている人々，放送に耳を傾けている人々，また，聞いたことを実践しようとしている人々にとって，この大会は，特別の機会であり，祝福である。私たちに与えられているチャレンジも，機会も，祝福も，大きく，無数である。私たちが，自分の持つ神権の召しを全力を尽くして遂行しさえすれば，この世の中に，教会の神権者たちに授けられている神の権能に比肩し得る大きな権能は，存在しない。

私共夫婦は，日本にある4つの伝道部とひとつのステーキ部の訪問から戻って来たばかりである。日本にある伝道部とステーキ部は，現在，日本人の手によって管理されている。1組の伝道部長夫妻は，日本で生まれ，育ち，日本で伝道を経験した生粋の日本人であって，現在，偉大な働きをしている。私たちは，韓国と香港にある伝道部も訪問したが，両方の伝道部とも，ほんの10年か，12年前に伝道を終えたばかりのアメリカ人によって管理されている。実際のところ，6人の伝道部長が，現在自分の管理している地域で，以前伝道した経験を持ち，5人の伝道部長夫人がやはり同じ経験を持っている。

これらの偉大な国々で，宣教師たちが驚くべき業を行なっているのを目の当たりにし，教会の成長ぶりを見て，私は深い感動を覚えた。古い会員も新しい会員も，質的に高まっており，よくみ業のために働いている。会員の大部分は，おおよそ，20歳から35歳のまだ年若い人々である。

どの伝道部にも，ステーキ部にも，立派な指導者が見られ，その進歩の跡は著しい。会員たちと共に集った会では，どれも300人から1000人の出席を見たが，どこの国でも，将来，教会が成長し，強くなることに確信をおぼえた。どの集会でも，偉大なみたまの導きが感じられた。

私が滞在中，心を動かされたのは，献身的で，有能で，謙遜で，信仰深く，かつ効果的に働く宣教師たちの姿を見たときである。幼かった少年たちは，立派な大人へと成長し，勇気と理解力と指導力とを備えた人物となっている。また，主より任じられた大使として，教会員たちに称えられ，愛され，尊敬されている。彼らは重い責任を担い，指導者の仕事をたくさん引き受け，支部長や補助組織の長や教師の職に召されるべき人々を訓練している。バプテスマを施し，確認を行ない，儀式を執り行なっている。弱い人々を励まし，強め，病んでいる人々に祝福の儀式を施している。自分の父親に祝福を与えたひとりの宣教師は，自分の経験した奇跡的ないやしについて，証を述べてくれた。

宣教師たちは，誘惑や邪悪な行ないに会い，それを克服してきた証を持つ人々である。やがて伝道を終えて戻って来たとき，ワード部やステーキ部にあって，いかなる責任をも喜んで引き受けることのできる備えの完了した人々である。奉仕の大切さを知り，また実際に大きな働きをしてきた人々である。あなたたちのワード部やステーキ部に，強さと霊感と指導性とをもたらし，機会さえ与えられれば，青少年たちに霊感を与えることのできる人々である。また，不活発会員たちに深い関心を持つ人々であり，問題のある人には，だれにでも深い関心を払う人々であり，さらに，問題の解決のために，喜んで手助けしようという人々である。これが，教会の宣教師たちの姿である。

兵役にある人々についても，申し上げたいと思う。私たちは，韓国と大阪にいるときに，軍人たちに会ったが，兵役にある青年の大部分は，

教会でも驚くほどの働きをしている。

私が，新しく召された宣教師たちに話していたとき，24歳の宣教師たちに皆立ってくれるよう頼んだことがある。というのは，24歳という年齢は，ジョセフ・スミスが教会を組織したときの年齢だからである。その集会では，5人の宣教師が立ち上がったが，私はそのうちのひとりに，前に来て，どのようにして教会に入ったのか話をし，証を述べてくれるよう頼んだ。彼は，ベトナムで兵役についていたと話した。そして，ベトナムにいる間に，何人かの教会の青年に会い，特にそのうちのひとりが，福音に従った生活をし，また福音のことを教えてくれたと言う。その結果，その青年は現在，教会の会員となっているのである。また彼は，自分の人生がどれほど大きく変化したか，自分のした行ないをどのようにして悔い改めたか，そして，どのようにして人生の目的を理解するようになったか，説明してくれた。それから私は，他の4人にも同じように依頼した。そのうちのふたりは，軍隊にいる間に教会に加入したと述べ，同じような話をしてくれた。兵役にある青年たちの働きの結んだ実を知って，私は本当に心躍る思いであった。彼らは，軍隊にいる間も献身的に働き，福音についての証を持ち，福音に従って生き，教え，証を述べる勇気を持っているのである。

ステーキ部や伝道部で，宣教師たちがどのようにして人々を教会に導くことができたのかを知り，心を動かされた。中には，随分と高い地位にあると思われる人々がいたからである。改宗者の中には，大学教授がいた。立派な実業家もいた。高名な医師がふたり，そのうちのひとりは，心臓外科医であった。そのような人人が，自分を教会に導き，人生に影響を与えてくれた青年たちの働きを讃美するのを見て，私は心の中で深く頭を下げた。彼らは，教会に加入以来，福音が自分たちのためにどれほど大きな役割を果たしているか，という証を述べてくれた。

私は，どの伝道部でもステーキ部でも，その指導力に，深い感銘を覚えた。

監督やステーキ部長に訴えたいと思う。

兵役にある青年たちが，任務を解かれて帰って来たとき，奉仕する機会が与えられているかどうか，よく注意していただきたい。

次に，青年の皆様に申し上げる。あなたたちがこれまで，勉強し，祈り，経験してきたことは，主のみ業で本当の働きをなすための備えなのである。これまでの人生で試練を受け，証を強める機会のあったことを主に感謝していただきたい。教会の奉仕活動の中で，自分はすでに義務を果たし終えたなどと，決して思わないでいただきたい。主のみ業で一層働くために，その備えをしてきたに過ぎないのである。奉仕する機会を求め，また応じていただきたい。昔の悪友のもとに戻ることのないように。模範となっていただきたい。年若い少年少女たちに，伝道というものが若い人にとってどれほど役に立つかをよく教え，決して落胆させることのないようにしていただきたい。ワード部やステーキ部にいる少年少女は，あなたたちが伝道から帰って来たときには，あなたたちを尊敬のまなざしで見つめ，多くの期待を寄せることであろう。そして，あなたたちが教え通りに生活するならば，年若い少年少女の生活によい影響を及ぼすことであろう。国家のためであろうと，主のためであろうと，それぞれの業に携わっていたとき，交流を持った人々に及ぼしてきた数々のよい影響が継続するのである。

あなたたちが伝道を終えて家に帰り，こういう年若い人たちに会ったら，伝道に出て，神殿結婚をし，忠実な教会員だけに与えられる数々の祝福を受ける備えをするよう，励ましていただきたい。また，悪い行ないや誘惑に打ち勝つことができるよう，そして，自分の持つ神権を尊び，指導者たちを支持するよう，よく助けていただきたい。これが，任務を終えて戻って来る人々に，私の望むことである。

いかなる時でも，神権の召しを全力を尽くして遂行していただきたい。互いに尊敬し合い，支え合っていただきたい。絶対に誘惑に陥ることのないように。女性を敬い，必要とあらば，命を犠牲にしてでも貞節を守っていただきたい。決して，落胆したり，あきらめたりすることのないように。教会で活発に活動を続けていれば，他の方法で得る以上に，成功を収め，名声を勝ち得，そして幸福になれるであろう。私は，年若い兄弟たちに，約束したいと思う。あなたたちが，まず神の国と神の義とを求め，可能な範囲で主に仕える備えをなすならば，主はあなたたちを祝福して，恐らくはほかでは得ることのできない，成功と幸福と満足とを与えて下さるに違いない。教会に活発に集うならば，学校の成績も向上し，世の中に良い影響を及ぼすことができるであろう。

ある大会社で重役をしている私の知人が，先日私に次のように言ってきた。（彼は現在，政府の代表を務めているが，製材業界で，成功を収めた大実業家である。）「私たちは，政府のある仕事で，有能な人材を必要としていました。数多くの応募者がいましたが，私たちはまずそれを10人に絞りました。ところが，その10人の選考を進めているうちに，そのうちのひとりが，あなたの教会の会

員であることに気付きました。それで私たちは，彼を採用したわけです。」

私は，「どうして彼を採用したのですか」と尋ねた。

彼はこう答えてくれた。「私たちは，彼が夜に大酒を飲んで騒ぐような人物ではないし，信用もおけるし，与えられた仕事はきちんと果たしてくれることを知っていたからですよ。」私はこの時，教会の若人たちが，この話が事実であることを知ってくれたら，どれほど素晴らしいことが起こるだろうか，と考えた。

私は，今夜ここで，地区代表の集会で読み上げた手紙を読んでみたいと思う。その一部をお読みしたいと思う。その内容に簡単に触れてみることにしよう。

韓国伝道部の伝道部長は，私が訪問しているときに，兵役に携わっている青年たちの問題について，話してくれた。伝道部長の話によると，青年たちの赴任後，２カ月たっても，３カ月たっても，所属ワード部の監督たちが会員記録を送ってくれないと言うのである。実際のところ，韓国に駐留している軍人たちは，自分が韓国に派遣されていることを，決して楽しんではおらず，むしろ恨めしくさえ思っており，そのために孤独に陥っているという話である。彼らのまわりには，無数の売春婦たちがうろつき，事実，こうした軍人たちが売春婦と同棲することは普通に行なわれていることであると話してくれた。また伝道部長は，教会にあまり活発でなかったひとりの祭司が，寂しさのあまり，売春婦のひとりに熱を上げてしまったときの経験談について話してくれた。このときは，教会のひとりの青年が，福音の教えに従った生活をしており，こうした青年を救い出すことに深い関心を抱いていたため，彼がその祭司と接触をはかり，力を尽くしたため，遂にその祭司は，教会の価値を認め，これまでの行ないを悔い改め，主の祝福にあずかるにふさわしい者となるために一生懸命働くようになった。そして，伝道部長は，もし，その祭司が赴任した直後に，彼と接触することができたとしたら，何かしら援助の手が差し伸べられて，恐らくそのような悲劇を防ぐことができたはずだと言っている。伝道部長はまた，他にも，当地にいる数多くの青年のために働いた経験を話してくれた。実に多くの青年たちが，だれかが彼らと出会い，手を差し伸べて，愛と思いやりを示してくれたために，かの地ではびこっている誘惑に対抗することができたと，証を述べている。

それゆえ，兄弟の皆様，監督やステーキ部長の皆様。このような青年たちが家を離れて大学へ行くときには，必ず，彼らに関する会員記録や情報を，大学最寄りのワード部や支部に送っていただきたい。また青年たちが軍隊に入るときには，彼らのためを思って，決して，忙しいなどと言わずに，充分な関心を払って，彼らを救うために，できるだけのことをしてやっていただきたい。彼らが赴任する前に，グループリーダーやその他適当な人々に情報を送っておいていただきたいのである。

次に宣教師たちに関して申し上げる。宣教師は帰還したら伝道に出ようとしている青年たちと親しく交わるようにしていただきたい。あなたたちの影響力が彼らにも感じられるようにして欲しい。励ましていただきたい。伝道から帰ったばかりの宣教師は，心が燃えているものである。彼らを出迎え，愛し，働く機会を与えていただきたい。私はこのような例をいくつも聞いて知っている。つい先週も，そのような話を聞いた。ある母親の話である。「私の息子が伝道を終えて帰って来たとき，ワード部で話をする機会は与えられませんでした。監督からは，『やあ，おかえり』と言われただけでした。だれも息子には関心を払ってくれていないように思えました。」さらに話は続く。「私は，息子が興味を失わないように，また教会に活発に集うように，本当に一生懸命息子に働きかけなければなりませんでした。」

こうした兵役や大学や伝道を終えて帰る兄弟の皆様，監督に報告をし，自分を奉仕のために使って欲しいと，申し出ていただきたい。次に監督の皆様に申し上げる。このような青年たちがあなたたちのワード部から出て行くときは，必ず，学校や大学や軍の役員に，情報を送っていただきたい。そうすれば，その役員たちは，彼らが到着するまでには，どんな助けや激励が必要かを知り，また，実際に，その手を差し伸べることができるのである。

私たちに主の祝福があって，人の価値の大いなることを理解することができるように。私たちの中に，世話や助けを必要としている人々がいる。彼らを活発に集わせ，激励を与え，問題があるときには援助の手を差し伸べることは，私たちの責任である。神権は，神のみ名によって働くために私たちに与えられた神の権能であるということを，理解できるように。しかも，賢明に，謙遜に，そして効果的に働くことができるように，イエス・キリストのみ名により，へりくだって祈る。アーメン。



神権者の責任

大管長会第一副管長・十二使徒評議員会会長

ハロルド・B・リー

先週，私たちは「全教会員が相互に啓発し合うため教会はすべての教会員を心要としている」というテーマを中心に1日半を費やして十二使徒会地区代表と共に話し合う会を持った。私たちは，統計資料を詳しく分析し，図表を作成した。この図表は，今後，地区代表たちが各地の地区集会へ携えて行き，現在教会活動に活発でない人々にも手を差し伸べる必要があることを強く訴えてゆくことになる。ここで，図表から数字を取り出して，これから申し上げることがいかに大切なことであるか，訴えたいと思う。ある図表によれば，教会にはメルケゼデク神権者が35万3千人いる。その大半が父親であるが，月に聖餐会，神権会にそれぞれ1回づつ出席するということを基準に考えてみると，活発な会員は，18万7千人しかいない。言葉を換えて言えば，それだけのことしかしていなくても，この場合，活発とみなされるということである。21歳以上のアロン神権者が18万4千人おり，その大半がやはり父親であるが，そのうち活発な会員は1万7千人しかいない。このことを心に留めていただきたい。未聖任の成人会員も4万8千人，非教会員の夫も11万7千480人いて，やはりその大半が父親である。したがって，約70万人の成人男性がいて，その大半が父親であるが，そのうち，合計50万人ほどが，前述の基準に照らし合わせて，不活発ということになる。これは私たち自身へのチャレンジの対象として，未聖任会員の数と非教会員の夫の数とを加えた数字である。さて兄弟たちよ，私たちは，こうした兄弟たちを何らかの形で活発にするために，確固たる行動をとるよう提案したいと思う。ある伝道部長が，何年か前，東部諸州で宣教師たちと集会を持っていたときのことである。その会場には，真ん中に柱が何本も立っていた。伝道部長は宣教師のひとりに向かって言った。「立って，あの柱を押してみなさい。」

「さあ，押しても動きません。」

「どうしてですか。」

「あの天井の重みが，全部柱にかかっているからです。」

すると，伝道部長はこう尋ねた。「じゃ，その重みがないことにしよう。それだったら，動かせるかね。」

「もちろん，できると思います。」

こうして伝道部長は話し出した。「さて長老たち，私たちはちょうどあの柱のようなものです。私たちがこの教会で責任という重みを持っている限り，黄泉の力をもってしても，私たちを動かすことはできないのです。けれども，ひとたびその重みが取り除かれると，大部分は，私たちを引き倒そうとする勢力の絶好の標的になってしまうのです。」

さて，私たちは，すべての神権者に，そしてあらゆる家庭のあらゆる父親に，神権という重みをかけたいと思う。忘れないでいただきたい。いわゆる不活発会員や神殿に入っていない会員たちを増えるままにしておくと，やがて神殿で結び固めを受けない教会員，すなわち来世における家族関係を維持できない会員を何十万と抱えることになるのである。

活発でいるということが霊性の中枢をなしていることを忘れないでいただきたい。

次のようなプログラムを取り入れるよう提案したいと思う。まず，監督がホーム・ティーチャーと定員会指導者に，不活発会員の名前を提出してもらう。また同時に，こうした会員と接触し，活発にするための提案を書いて提出してもらう。次いで，監督も同様にして，こうして集めた名前をステーキ部長に提出する。こ

のようにして一定期間，努力と評価を続け，この間，数字よりも，個人に焦点を合わせるのである。これは，愛と創意工夫のテストと言えよう。私たちがどれだけ力を尽くしてこうした会員を助け，彼らにも他人に奉仕する機会を与えているかどうかということが，試されるからである。

今晩，これまで幹部の兄弟たちに話していただいたが，皆，この重要な問題に注意を喚起するものであった。どの話も，この問題の持つ様々な側面に触れていた。教会では，多くの人々が種々の職業に携わっているが，そうした人々から次のような問い合わせがきている。「福音を宣べ伝える宣教師として伝道に召されるのではなく，自分たちの才能や職業技術を使って主のみ業の助けをするといったかたちで，伝道できないだろうか。」

このプログラムについては，のちほど，もうすこし詳しく聞くことになろうが，とにかく，これは，メイスン博士がお話して下さったように，医師，看護婦，農業関係者などに対する召しである。私たちは，この人人も，正規の宣教師として，その種の助けが必要とする所はどこへでも自費で出かけ，伝道宣教師と同様に，一定期間，教会員の水準向上に資する様々な援助活動が行なえるよう召したいと考えている。このプログラムからは，偉大な質的向上が生まれ，力強い胎動が聞こえて来ることであろう。こうした動きは，自分の奉仕が可能な分野で働く機会が欲しいと願っている，数多くの人々から出て来るのであり，また，そのような人人は，多少なりとも不活発気味の人人に皆，手を差し伸べ，何か責任を果たしてもらおうと，一生懸命働いてくれるのである。指導者たちは，創意工夫をこらして，会員にひとり残らずなにかしらの責任を与え，教会は特別の奉仕活動のために自分を必要としてくれているという気持ちを抱いてもらえるよう，よく注意して見守っていただきたい。

これから申し上げる話は，恐らく以前にも話したことがあるとは思うが，今宵ここで再度お話ししたいと思う。故アダム・S・ベニオン長老が，ユタ州立刑務所を訪問したときの経験である。私たちも何度か訪れたことがあるが，ベニオン長老の話し方は，だれよりも大胆であった。長老は，会話の中に囚人たちを引き込んだのである。「皆さん，私は皆さんにお尋ねしたい。これまで皆さんの生涯でどんなことがあったために，このユタ州立刑務所に収容されるような間違いを犯したのですか。」冷たい雰囲気が柔らぎ，ひとつの答えが返って来た。「自分たちが刑務所にいるのは，自分たちに何が起ころうと関心を持ってくれる人はだれもいないと感じたことがあったからなんです。」

今夜ここに集っている人々は，比較的心配のない状態であるが，それでも自分たちの状態にだれも関心を払ってくれないと，心の中に感じている人がひとりでもおられたら，主が，そのような人を助けて下さるよう，祈っている。父親であれ，母親であれ，子供であれ，あるいはまた不活発な人であれ，だれも自分のことには関心を払ってくれないと感じている人がいたら，その人は危険な状態にある。私たちは，あなたたちが，こういう人々と接触を図り，なんらかの形で活発になるよう手助けして欲しいと願っている。臨戦態勢が整い次第，すぐにでも開始していただきたい。

私は，数年前，プロボで開かれた「夫婦の集い」に参加したことがある。その時，ひとりの美しい姉妹が立って，自分の夫が教会に活発に集うようになって以来，家庭にどれほど大きな喜びがもたらされたかということについて証を述べた。また夫と一緒に神殿へ参入したことについても話をした。また，彼女の話によれば，その夫は長い間不活発で，たばこも吸い，神権の面でも全然昇進しなかったという。ところが，ある人が，この夫と絶えず接触を続け，ついには，彼が神権を受ける資格ができ，喜んでそれを受けることができるようになるまで，助けの手を差し伸べてくれたと言う。そして，とうとうこの夫は監督から，神殿へ入るための推薦状を発行してもらったのである。この女性は，その素晴らしい夕べの様子を，次のように語った。「5人の娘たちは私たち夫婦に結び固められました。神の人が，私たちの家族は永遠であると宣言して下さったんです。」そして彼女はこの話を終えると証を述べた。壇上から，自分のすぐ前に座っている夫を見下ろすと，しばらくの間，自分たちふたりのほかに数多くの聴衆がいることを忘れて，その夫に向かって言った。「お父さん，子供たちが今どれほど幸福な気持でいるか，またあなたが私たちのためにして下さったことにどれほど深く感謝しているか，私にはとても言葉で言い表わせません。だって，お父さん，神権を持っていらっしゃるあなたがいなかったら，子供たちだって私だって，来世で家族一緒にいることができないんですもの。神様，本当にありがとうございます。私たちのお父さんは神権を持っていて，永遠の家庭へ通じる扉を開けてくれるんです。」

教会にいる無関心な父親が，この女性の証を聞いてくれたら，どれほどよかったことか。

神権者であるあなたたちに，お願いする。今こそこうした父親たちの目を覚まさせていただきたい。まだ

太陽は沈んでおらず，彼らも祝福を受ける時間はある。暗くなる前にしていただきたい。なにとぞ，主の助けがあって，今すぐに行動を起こし，またタナー副管長はじめ，今宵話をされた幹部の兄弟たちの説教の内容をよく把握することができるように。神権を行使しさえすれば，どんなことができるのか，その概略を教えられたはずである。この神権こそ神の権能であって，神はこの権能により，人を通じて，神の子らの救いのために働かれるのである。主の助けがあって，私たちが行動を起こし，未来への展望を持ち，これから先私たちが努め励もうとしている目的を達することができるように，主イエス・キリストのみ名により，へりくだって祈る次第である。アーメン。

「もしあなたがたが快く従うなら」



十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

愛する兄弟姉妹の皆様，私は，〔ウェイン〕シュート部長の祈りに感謝している。私は，その祈りの中で述べられた願いが私たちのためにかなえられるよう，心から望んでいる。

先日，私はロンドンのトラファルガー広場に立って，ネルソン提督の像を見上げる機会があった。像の礎石の部分には，トラファルガーの戦いの朝，提督が語った言葉が刻み込まれていた。「英国は，人民がこぞって自分の義務を果たしてくれるよう，望む。」ネルソン提督は，1805年のその歴史に名をとどめる日に，他の多くの兵士と共に戦死した。しかし英国は，国家として残り，やがて大帝国を打ち建てた。

当時から見ると，義務や従順というものに対する考え方は，随分と色あせてきている。だがそうした傾向は，別段目新しいことではない。有史以来続いている古い問題である。イザヤは，古代のイスラエルの民に向かい，次のように言った。「もし，あなたがたが快く従うなら，地の良き物を食べることができる。

しかし，あなたがたが拒みそむくならば，つるぎで滅される。これは主がその口で語られたことである。」（イザヤ1：19—20）

私が14，5歳の頃だったと思うが，このタバナクルへ来て，二階席の丁度時計の後ろに座っていた時のことを思い出している。その時は，ヒーバー・J・グラント大管長が少年時代にモルモン経を読んだときの経験について説教されるのを聞いた。大管長は，ニーファイについて話をし，また，自分の人生がニーファイから大きな影響を受けていることについて話された。それから，私が決して忘れることができないほど，確信に満ち満ちた声で，次のようなニーファイの偉大な言葉を引用された。「私は主が命じたもうことを行って行う。私は，主が命じたもうことには，人がそれを為しとげるために前以ってある方法が備えてあり，それでなくては，主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである。」（Iニーファイ3：7）

その時，若い私の心の中には，主の命じたもうことを努めて行なおうという決意が生まれた。私は，今日，主のみたまによる力を受けて，ここに集っておられる方々の中に，私と同様，少しでも心を動かされる方がおられればと願っている。

人が求められるままに従順に信仰の道を歩むとき，なんと驚くべきことが起こることであろうか。最近私は，ウイリアム・ロバート・アンダーソン中佐の書いた興味深い物語を読んだ。この中佐は，潜水艦ノーチラス号を率いて，北極海の氷の下を，太平洋から大西洋へと航行させた人物である。この中佐の書いた本には，その他，似たような危険を乗り越えた話が，数々記録されていた。そして，その本の最後を，次のような言葉で結んでいた。これは，中佐がさいふの中に入れておいてボロボロになってしまったカードに書かれていたものである。これを読んでみよう。「私は常に神のみ手に導かれていることを信じている。

私は常に正しい道を歩むことを信じている。

私は常に神が，道なきところに道を開いて下さることを信じている。」

私もまた，神が常に，道なきところに道を切り開いて下さることを信じている。私たちが主の戒めに従順に歩むならば，そして神権者の勧告に従うならば，神は，一見道のなさそうに思える所にさえ，道を切り開いて下さると信じている。

ロンドンのトラファルガー広場に面して，英国国立美術館があるが，この中には，ジョシュア・レイノル

ズ卿の描いた少年サムエルの絵が展示してある。幼い時に主のみ声を聞き，「しもべは聞きます。お話しください」（サムエル上３：10）と答えたあのサムエルの絵である。

その日から，サムエルは神の戒めに従順に歩み，やがてイスラエルの偉大な予言者となった。サウル王とダビデ王を選び，聖任したのも，このサムエルである。そしてまた，サウロに向かって叱責の言葉を投げかけたのも，このサムエルであった。その言葉は，長い歳月を越えて語り継がれている。「……従うことは犠牲にまさり，聞くことは雄羊の脂肪にまさる。」（サムエル上15：22）

私は，予言者エリヤについて書かれている簡単な聖句から力を得ている。エリヤは地上を襲う干ばつときさんについてアハブ王に警告したが，アハブはこれをあざけった。そこで主はエリヤに向かい，行ってケリテ川のほとりに身を隠し，その川の水を飲み，からすから食物を施してもらうようにと，言われた。その後，聖典には，簡明でしかも素晴らしい文章が書かれている。「エリヤは行って，主の言葉のとおりにした。」（列王上17：５）

そこには何の議論もなく，何の弁解もなく，何のあいまいなこともなかった。エリヤはただ「行って，主の言葉のとおりにした」のである。その結果，彼は恐ろしい災難から救われた。だが，あざけりや論争や疑いに終始した人々は，大きな災難を被ったのである。

主のみ声に従順であることは，いつでも容易なこととは限らない。自分がふさわしくないと感ずることがあるかも知れない。私は，たびたび，モーセとエホバの間で交わされた会話の中から慰めを得ている。エホバはモーセを召されて，エジプトからイスラエルの民を導き出す責任を与えられたが，モーセは逃亡者であり，羊飼であった。モーセは自分がいかにふさわしくないものであると感じたことか。

「モーセは主に言った，『ああ主よ，わたしは，……言葉の人ではありません。わたしは口も重く，舌も重いのです。』（私はモーセが「どうか私を召さないで下さい」と言っているのが，聞こえるような気がする。）

主は彼に言われた，『だれが人に口を授けたのか……。

それゆえ行きなさい。わたしはあなたの口と共にあって，あなたの言うべきことを教えるであろう。』」（出エジプト４：10—12）

1837年，教会がオハイオ州カートランドで数々の困難に直面していたとき，予言者ジョセフ・スミスは，ヒーバー・C・キンボールを召し，英国に渡ってそこでみ業を開始する責任を与えた。キンボール兄弟は，自分の力が弱いことを心配して叫んだ。「主よ，私はどもりですし，このような仕事には全く向いていません。どうしたら私はかの国で福音を宣べ伝えることができるのでしょうか。英国は，キリスト教国の間でも有名な，学問，知識，信仰に秀でた国です。……そうした折り紙付きの知識階級の人々に，どうやって宣べ伝えよと言われるのですか。」

だが，彼は反省して，次のように言った。「しかしながら，私がこのような事を色々考えたからと言っても，決して果たすべき義務をおざなりにすることはありませんでした。私は，天父のみこころを理解し得たその時，万難を排して英国に渡ろうと決意しました。天父がその全能の力によって私を支え，また必要な資質をすべて授けて下さると信じたからです。また，家族の者が皆，私を慕い，私も家族をひどい貧困の中に残さざるを得ませんでしたが，キリストの福音が真理であるがゆえに，その召しは，何を差置いてもまず第一に考えなければならないと感じたのです。」（Orson F. Whitney, “*Life of Heber C. Kimball*” オルソン・F・ホイットニー著「ヒーバー・C・キンボールの生涯」p. 104）

キンボール兄弟は海を渡り，ランカシャーのプレストンでみ業を開始した。彼と彼の同僚に敵対する地獄の悪魔どもとの闘いであった。こうして世界の片すみで始められたみ業は，あまたの人々の生活に恵みをもたらしている。つい最近マンチェスターで開かれた地域総大会は，そうした苦難のうちに始められた忠実な者たちの働きが，着実に実を結んでいるひとつの証左であった。

私たちに与えられる責任の割り当ては，決して快いものではないかもしれない。らい病人のナアマンは馬と車とを従え，贈り物や金を携えて，予言者エリシャのもとへやって来て，病いを直してくれるよう頼んだ。だが，エリシャは，ナアマンに会わずに，使者を遣わして，言った。「あなたはヨルダン川へ行って七たび身を洗いなさい。そうすれば，あなたの肉はもとにかえって清くなるでしょう。」

だが，スリヤ軍の長であった誇り高く高慢なナアマンは，これを自分に対する侮辱と考え，去って行った。だがナアマンは召し使いたちになだめられ，今度はへりくだった気持ちで戻って来た。聖書には次のように記録されている。「そこでナアマンは下って行って，神の人の言葉のように七たびヨルダンに身を浸すと，その肉がもとにかえって幼な子の肉のようになり，清くなった。」（列王下５：１—14参照）

この会場に皆さんもよく御存じの人が座っている。何年か前に，彼はコロラド州デンバーに伝道本部を置

く西部諸州伝道部で伝道するようにという，宣教師の召しを受け取った。彼は，大学の弁論部の部員として，デンバーへは何度も行った経験を持っていた。ひと山越えればすぐにでも行ける所であった。彼も両親ももっと環境の違う地方に召されるものと思っていた。「珍しい名前を持つはるかかなたの地」にでも召されるものと考えていたのである。友人たちは笑った。彼と親しい人の中には，その召しに知恵と霊感が働いたかどうか，疑う人さえいた。なぜ，彼のように将来ある青年が，ソルトレーク・シティーからデンバーのような所へ伝道に召されたのであろうか。だが，ともかく彼は赴任した。そしてそこで有能な宣教師となった。今では，主が彼を遣わして下さったことを感謝している人々が大勢いる。彼は副伝道部長に任命され，指導者を養成する数々の素晴らしい経験に恵まれた。また伝道地で美しい女性と出会い，後にその女性と結婚した。こうして非凡な，また特異な経験を積む機会に恵まれた彼は，自分に秘められていた素質をみがき，やがて仕事の上でも優れた働きをするようになった。今日，彼は十二使徒会地区代表のひとりとして，ここに座っている。

ここでもう一言付け加えておきたいと思う。私のすぐ後ろに座っておられるハロルド・B・リー副管長も，似たような状況の下で，同じ伝道部へ召された。そしてその従順さの中から，あの偉大にして驚嘆すべき性格を作り上げられた。それは，私たちが，副管長の生活の中で，親しく見ているところであり，またそのゆえに，私たちは副管長を心から愛しているのである。

ここで私は，私自身の個人的な，また神聖な証を述べたいと思う。

40年近く前，私は英国で伝道していた。私はロンドンにあるヨーロッパ伝道部の伝道本部で働くよう召されていた。当時は，十二使徒評議員会のジョセフ・F・メリル長老が，ヨーロッパ伝道部長であった。ある日のこと，ロンドンの3，4の新聞が，ある古書の再版本の書評を掲載し，悪意に満ち卑劣な論調で，その本がモルモンの歴史であると指摘していた。メリル伝道部長は私に，「君に出版社へ行って，抗議してきて欲しいんだが」と言った。私は伝道部長を見つめ，危うく「とんでもありません。とても無理です」と言いかけたが，おとなしく「承知しました」と答えた。

正直に申し上げよう。私はその時本当に怖かったのである。私は自分の部屋へ戻ったが，自分がモーセにでもなったような気がしていた。主からパロに会いに行くよう命ぜられたモーセも私と同じような気持ちだったに違いない。私は祈りを捧げた。フリート通りへ向かう地下鉄に乗るためグッジ通り駅まで歩いて行ったが，その間，私の心は激しく動揺していた。私は出版社の社長室を見つけると，受付係に私の名刺を差し出した。受付係はその名刺を持って，部屋の中へ入って行ったが，間もなく戻ってくると，スケフィントン社長は忙しくて私と会う時間はないと言った。私は，8,000キロもの道をはるばる来たのだから，待っていると答えた。それからの1時間，受付係は，社長室へ2，3回，取り次ぎに行ってくれたが，遂に，私を招き入れてくれた。私は自分が部屋へ入って行ったときの様子を決して忘れることはできない。社長は長い葉巻をくゆらせ，さも「邪魔しないでくれ」と言わんばかりの顔付きだった。

私は手の中に，例の書評を握りしめていた。私は，その後自分が何を言ったのかは，覚えがない。何か別の力が，私を通じて語っているように思えた。最初のうちは，社長は自己の立場に固執し，戦闘的でさえあった。だが，段々態度を和らげ始めた。そして最後には，社長は，何か必ず手を打つと，約束してくれた。1時間もしないうちに，英国中のあらゆる本屋へ連絡をつけて，例の本を版元へ返却するよう，手配したのである。社長は多額の費用を負担して声明文を印刷し，本のとびらに折り込みまで付けた。その声明文には，その本は，歴史ではなく，単なるフィクションとして考えて欲しいということ，また尊敬すべきモルモン教徒に対して攻撃を加える気は毛頭ないということが書かれてあった。後年，彼は，他の面でも，教会に対して多大の好意を寄せてくれている。私は，彼が死ぬまでずっと，毎年彼からクリスマス・カードを受け取っていた。

神権者の求めに応じて従順に歩み，信仰を持って進もうと努めるとき，主は，一見道のないところにさえ，道を切り開いて下さるのである。私にはそれがわかって来た。

10年前の一昨日，私は，十二使徒評議員のひとりとして，この大タバナクルで，初めて支持の挙手をいただいた。それからの歳月は，本当に素晴らしいものであった。世界各地で，数々の経験をして，その度に信仰が強められた。だが，そうした経験の中で，最も恵みに満ちた経験は，この建物の東側に立つ神殿の中で，大管長会と十二使徒評議員会の集会に，毎週出席できることである。ここで捧げられる祈りは，主のみこころをうかがう熱烈な嘆願の祈りである。そして，この神聖な場所で，啓示のみたまが降り注ぎ，教会を運営するための決議やプログラムが，提示され，討議に付されるのである。

10年間に及ぶ数々の経験から，私

は皆様に証申し上げる。神は絶えず，神の方法で，神の民に関するみこころを知らせておられる。また私は，この教会の指導者は，主の助けがあってもできないようなことを私たちに求めることは，決してないと証する。私たちはふさわしくないと感ずることがあるかもしれない。私たちに求められることが，私たちの好みに合わないかもしれないし，自分の描く理想とは合致しないかもしれない。しかし，信仰と祈りと決意とを持って努力するならば，私たちはそれをなしとげることができるのである。

皆様に証申し上げる。末日聖徒の幸福は，末日聖徒の平安は，末日聖徒の進歩は，末日聖徒の繁栄は，そして，この民の永遠の救いと昇栄とは，皆ことごとく，神の神権者の勧告に従って歩むかどうかにかかっている。「感謝を神にささげん，予言者の導き。」（讃美歌170番）

神よ，私たちが快く従い，地の良き物を刈入れることができるよう，助けたまえ。御父よ，私たちがあなたに信頼をおき，心から謙遜な気持ちで前進し続け，あなたの祝福を受けるにふさわしい者となることができるよう，助けたまえ。イエス・キリストの御名により，へりくだって祈るものである。アーメン。

手と心とで

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン



昨日，この歴史あるタバナクルに集った人は皆，その右の手を挙げて，教会の指導者たちを，それぞれが召されている地位に支持するという特権にあずかった。そこで挙げた手は，心の中の思いを表わしたものである。人がその手を挙げるとき，人はその心の誓いを表明するのである。

救い主は，たびたび，手と心について語られた。1832年3月，オハイオ州ハイラムで，予言者ジョセフ・スミスを通じて下された啓示の中で，主は次のような勧告を与えられた。「……汝忠実なれ。而してわれに命ぜられたる職務に服し，弱きを扶け，垂れたる腕を挙げ，かよわきひざを強うすべし。

而して汝終りまで忠実ならば，汝はわが父の家にわが備えたる住居にありて，不死不滅の冠と永遠の生命とを与えられん。」(教義と聖約81：5—6)

私は主のみ言葉について考えるたびに，サンダルをはかれた主の足音や，教えに耳傾ける人々の驚きのささやきが聞こえてくるような気がする。それはまるで，穏やかなカペナウムの情景から，響き渡って来るようである。大群衆がイエスのまわりを取り囲み，病人をいやしてもらおうと連れて来る。中風の人は床をあげて，歩き出す。そしてローマの百卒長は，その信仰により，しもべの健康を取り戻す。そんな情景である。

イエスは，言葉によって教えられただけでなく，模範によっても教えられた。イエスは神から託された使命を忠実に果たされた。人々を神に近付けるためそのみ手を伸ばされた。

ガリラヤで，ひとりのらい病人がイエスのところに来て，願った。「『主よ，みこころでしたら，きよめていただけるのですが』。イエスは手を伸ばして，彼にさわり，『そうしてあげよう，きよくなれ』と言われた。すると，らい病は直ちにきよめられた。」(マタイ8：2—3) イエスの手は，らい病人の体に触れても，決して汚されることはなかった。むしろ，らい病人の体が，あの神聖な手に触れられて，きよめられたのである。

カペナウムの，ペテロの家でも同じような例が見られる。ペテロのしゅうとめが熱病で床についていたときのことである。聖書の記録によると，イエスが来られて，「その手をとって起されると，熱が引き……」と書かれている。(マルコ1：31)

会堂司であったヤイロの娘のときも同じであった。親であれば，主に助けを求めたヤイロの気持は理解できよう。ヤイロは，主を見つけると，その足もとにひれ伏し，しきりに願って言った。「わたしの幼い娘が死にかかっています。どうぞ，その子がなおって助かりますように，おいでになって，手をおいてやってください。」(マルコ5：23)

「イエスがまだ話しておられるうちに，会堂司の家から人がきて，『お嬢さんはなくなられました。この上，先生を煩わすには及びません』と言った。

しかしイエスはこれを聞いて会堂司にむかって言われた，『恐れることはない。ただ信じなさい。娘は助かるのだ』。」両親は泣いた。他の人々も嘆き悲しんだ。だがイエスは言われた。「『泣くな，娘は死んだのではない。眠っているだけである』。……

イエスは娘の手を取って，呼びかけて言われた，『娘よ，起きなさい』。

するとその霊がもどってきて，娘は即座に立ち上がった。」(ルカ8：49—50, 52, 54—55)

ここでもう一度，主は，その手を伸ばして他の人の手をとったのであった。

主に愛された使徒たちは，主の模

範を克明に記録した。主は生涯を通じ，人に仕えられることなく，自ら人に仕えた。受けることなく，与えた。そして，自らの命を救うのでなく，他の人々のためにその命をささげたのであった。

使徒たちは，自分の進むべき道を示し，なおかつ行く末に影響を及ぼすような星が見たいと思ったら，自らそれを捜さなければならなかった。しかもそれを絶えず変化している空や，外界の中に見い出すのではなく，ひとりひとりが，自分の心の奥深く，主の示された教えに従って，見つけ出さなければならなかったのである。

しばらくの間，神殿の「美しの門」での，ペテロの経験について考えてみよう。人は皆，あの，生まれながら足のきかない男の苦しみに同情できるであろう。彼は毎日，宮の門のところへ運ばれ，宮もうでに来る人々に施しを乞うていた。ペテロとヨハネが近付いて来たとき，男はふたりに施しを乞うたが，このことから，男がふたりのことを，それまで自分の前を通り過ぎた数多くの人人と何の変わりもない人物だと思っていたことがわかる。だがペテロは，厳かに，しかし優しく，命じた。「わたしたちを見なさい。」聖書には，この足のきかない男は何かもらえるのだろうと期待して，ふたりに注目した，と書かれている。

次にペテロの言った心打つ言葉は，以来，時の流れを越えて，今日に至るまで，正直な，信仰ある者たちの心を奮い立たせてきた。「金銀はわたしには無い。しかし，わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい。」私たちは，この部分まで述べて引用を終え，次の聖句に注意を払わないことがたびたびある。「こう言って彼の右手を取って起こしてやると，……立ち，歩き出した。そして……彼らと共に宮にはいって行った。」（使徒3：6—8）

助けの手は差し伸べられた。傷ついていた体はいやされた。尊い一人の人間が，神に向かって引き上げられたのであった。

時は過ぎ，情況は変わった。境遇も様々である。だが，変わらないものは，弱い人々を助け，重く垂れ下がる手を引き上げ，弱っているひざを強めよ，という命令である。私たちには皆，疑う者とならずに，行なう者となり，また寄りかかる者とならずに，引き上げる者となるという責任が与えられている。だが，私たちの自己満足という木には，枝が多い。そして春ともなれば，多くの芽から花が咲く。私たちは，隣同士住んでいても，心の交流を持たないことがたびたびある。私たち自身が影響を及ぼすことのできる所に，「ギレアデに乳香があるではないか」（エレミヤ8：22）と叫んで手を伸ばしている人々がいる。私たちひとりびとりが，この問いかけに答えなければならない。

エドウィン・マーカムは言った。

「我々を兄弟同士だと思わせる何かがある。

だれも己一人の道を行くことはない。我々が他人の人生に送り込むものは皆，我々自身の人生に返って来る。」

——「信経」

自分の人生の大半を，同胞を無視し，己のことのみのために過ごした人物は，ディケンズの不朽の名作に登場するエブネゼル・スクルージであった。だが，あの冬の晩，ジェコブ・マアレイの幽霊がスクルージのところに現われて，次のような嘆きの言葉を吐いた。

「いやしくも，それぞれの置かれた小さな範囲内で，いかなることのためであろうと，熱心に力を尽しているキリスト教的精神の持主であるならば，さまざまの有益なことをするためには人間の生命は余りにも短か過ぎると思う筈だということを知らないのか。また，一人の人間が失った機会はいかほど後悔しても取り返しはつかぬということを知らずにいるのだ。だが，私もそうだったのだ。おお！　私もそうだったのだ。

なぜ私は気の毒な人たちをかまわずに通り過ぎたのだろう？　東の国の博士たちをみすぼらしいあばらやへ導いて行ったあの有難い星をなぜ見上げなかったのだろう？その星に導かれて訪ねてやるべき貧しい家もあったろうに！」

マアレイを慰めようとして，スクルージは言った。「だが，ジェコブさん，お前さんは商売上手だったじゃないか。」

それでもマアレイは嘆いた。「商売だって！……人類の問題が私の商売だったのだ。」（「クリスマス・キャロル」村岡花子訳）

その時，スクルージの生活に起こった変化は，正に奇跡的なものであった。彼は，一夜にして，最も寛大な，最も愛すべき，最も暖かい心の持ち主の，キリスト教徒となった。彼は，自分の状態の変化を，次のように言っている。「私は今までの私とはちがいます。」自分の心をキリストの模範に従わせようとする人は，同じことを経験する。

「……愛さない者は，死のうちにとどまっている」と，使徒ヨハネが書いたのは，1900年前のことであった。（Iヨハネ3：14）

罪を犯した人や不幸な人に対して非難の目を向け，あざ笑って「自業自得さ」と言う人もいる。また，「彼は変わりっこないよ。今までだってずっとひどかったんだから」と言う人もいる。外観にとらわれず，人の真の価値を認識する人は少ない。だが，それを認識するとき，奇跡は起こる。しいたげられた人々も，落胆している人々も，寄る辺ない人々も，

「もはや異国人でも宿り人でもなく，聖徒たちと同じ国籍の者であり，神の家族」（エペソ２：19）となるのである。真実の愛は人の生活に変化をもたらし，人の性質をも変えることができる。

この真理は，「マイ・フェア・レディー」の舞台の中で，極めて美しく述べられている。イライザ・ドゥリトルという花売り娘が，ある人に関心を持って語りかける場面である。この人物は，後に，イライザを平凡な境遇から引き上げてくれる役目を担う人物である。「ねえ，わかるでしょう。これ，本当のことよ，（身だしなみとか正しい言葉の話し方といった）だれにでも覚えられるようなことはさておいて，淑女と花売り娘の違いというのはね，どういう振る舞いをするかということじゃないの。どんなふうに扱われるかということなの。私は，ヒギンス教授にとっては，いつでも花売り娘なの。だって，教授はいつも私のことを花売り娘扱いしているし，これから先もきっとそうだわ。でも，あなたには，淑女になれる。だって，あなたはいつも私のことを淑女として扱っていてくれるし，これからもそうでしょうから。」（"*Pygmalion, in the Complete Plays of Bernard Shaw*"「バーナード・ショー戯曲全集，ピグマリオン」p. 260）

イライザ・ドゥリトルは，深遠な真理を述べていただけである。「私たちが人々を，単にそのあるがままの状態の人間として扱うとき，人はそのままの状態にとどまる。だが，その人々を，期待されている人間としてそれらしく扱うとき，人は，期待されたとおりの人間になる。」（ヨハン・ボルフガング・フォン・ゲーテが引用した言葉を改作）

実際，この原則を最も見事に教えたのが，贖い主であった。イエスは人を変えられた。イエスは人の習慣を変え，考え方を変え，志を変えられた。また，気性を変え，性質を変え，人間性を変えられた。イエスは，人を引き上げ，愛し，赦し，そして贖われたのである。私たちは，この主に従う気持を持っているだろうか。

刑務所の看守であったケニヨン・J・スカッダーは，次のような体験談を書いている。ある時，彼の友人が，たまたま，列車の中で，ひとりの青年と隣り合わせた。彼は随分，沈んでいる風だった。やがて，この青年は，自分が地方刑務所から仮出獄を許された囚人であって，家へ帰る途中だと，話し始めた。彼が刑務所に入れられたために，家族は，ひどく恥ずかしい思いをした。だから，一度も刑務所に訪ねて来なかったし，手紙もほとんど来なかった。だが彼は，それも，ただ家族が貧乏で訪ねてくれるだけのお金がなかったからだし，無学で手紙も書けなかったからだと考えた。歴然とした事実があるにもかかわらず，彼は，家族が自分のことをもう赦してくれていると思い込みたかったのである。

だが，そうした家族の気持を確かめようとして，彼は家族に手紙を書いておいた。列車が町はずれにある彼らの小さな農場を通り過ぎるとき，彼のために目印を付けておいてくれるよう頼んだのである。もし家族が彼のことを赦してくれているのなら，彼らは，線路の近くに立っている大きなりんごの木に白いリボンを結び付けておくことになっていた。だが，もし彼に帰って来て欲しくないのなら，何も目印を付けておかないことになったのである。その時には，彼は列車から降りずに，そのまま西部へ行くつもりでいた。

列車が彼の生まれ故郷の町に近付くにつれ，緊張が高まり，彼は，自分で車窓の外を眺めていることに耐えられなくなった。彼は叫ぶようにして言った。「あと五分で，機関士が警笛を鳴らします。確か，それが，私の家のある谷間の方へ行く長いカーブに差し掛かったという合図です。その頃，線路のそばにりんごの木が見えるはずですが，それを捜してもらえないでしょうか。」隣に座っていた私の友人は席を代わり，その役目を引き受けた。数分間が，何時間にも思えた。その時，列車の鋭い警笛が鳴った。青年は尋ねた。「例の木が見えますか。白いリボンがついてませんか。」

返事があった。「木が見えます。でも，白いリボンはひとつどころか，たくさんついています。きっと枝という枝に全部結び付けられているんですよ。さあ，確かにだれかがあなたのことを愛してくれているんですよ。」

その瞬間，青年はキリストによって清められた。

友人は言った。「まるで，奇跡でも見たような思いです。」

確かに，彼は奇跡を見たのである。それは，クリスマスの愛唱歌「ああ，ベレツヘムよ」の３番の歌詞に見事に描かれているとおりである。

「主のたまものこそ　奇しけれや
静かに恵みの　露はくだる
罪のこの世に　かかる恵み
天より来べしと　誰かは知る」

（讃美歌210番）

私たちもまた，これと同じ奇跡を経験することができる。それは，私たちが，救い主のされたように，手と心とで隣人を高め，愛して，新しい生活に導いたとき，可能となる。願わくは，私たちが，弱い人々を助け，重く垂れ下がる手を引き上げ，弱っているひざを強めることができるように。そして，それによって，贖い主の約束された永遠の生命を受け継ぐことができるように。イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。



主に捧げる証

十二使徒評議員会会員

ヒュー・B・ブラウン

ふるさととはありがたいものである。たとえ離れても，戻ったときには暖かく私たちを歓迎してくれる。私たちは先月9月22日にここソルトレーク・シティーを発ち，駆け足の旅行だったが，聖地を訪れた。私はここで旅行談をするつもりはないが，訪れた場所とそこで感じたことを述べてみたい。

同行したのは，ブリガム・ヤング大学のトルーマン・グラント・マドセン博士である。何度もグループを率いて当地を訪れている博士は，地理に詳しく，またキリストにかかわる話にも驚くほど精通しておられる。私の健康状態が思わしくなかったため，旅立ちが危ぶまれていたが，ソルトレークのJ・ルイス・シュリッカー博士が個人的に同道を申し出，私の健康管理にあたって下さることになった。この両人と共に私はニューヨーク経由でパリに飛び，そしてテルアビブに降り立った。そこから車を駆ってエルサレムに入り，オリブ山の頂上にあるインターコンティネンタル・ホテルに予定通り着いた。ホテルからの眺めは実に素晴らしい。オリブ山は，キリストがたびたび訪れたもうたことで有名な山であり，同時に神聖な山でもある。さらにキリストの再臨にあたってふたつに裂ける山でもある。

私たちはホテルからベツレヘムへ向かった。そして静かなたたずまいを見せるこの美しい小さな町に立ったとき，今にも天使たちの声と天群が「神にはみさかえ　高き神栄えあれ　地には平和を　人に親しみ」と歌う声が聞こえてくるのではないかと思ったほどである。

また私たちは，この幼子が生まれたときに，ベルゼブルが宣戦を布告したことを思い出した。彼はこの幼子の誕生が何を意味するかをよく知っていたにちがいない。そこで，この幼子と幼子に従う者たちに宣戦を布告したのである。

私たちはベツレヘムからケデロンの谷に近いアブラハムの墓所に行き，翌日エリコを訪れた。エリコは皆様も御存知の通り，現代の軍楽隊に勝ると劣らない立派な軍楽隊の演奏が行なわれた町である。彼らがラッパを吹き鳴らしたためにエリコの城壁が崩れ落ちたと私たちは理解している。

エリコに向かう途中，私たちは，「わたしの隣り人とはだれのことですか」という問いに答えた主の言葉で有名な地を通った。主は良きサマリヤ人の話をされた。人種の障害を乗り越え，手を差し伸べることが合法とされなかった相手に助けの手を伸ばした勇気ある人の話である。私たちはその地点を通ってエリコに向かった。興味深いことに，そこには「良きサマリヤ人」という名の小さな宿屋がある。

そして，エリコからヨルダン川峡谷を下って死海に出，再び北上して墓地を訪れた。巻物が発見されたほら穴のある所である。素晴らしい旅であった。そしてエルサレムに戻ると抑えられない気持ちで再びゲッセマネの園を訪れた。イエスが最大の苦しみを受けられた地である。血の汗を流し，弟子たちを園の外で待たせておいて御子ひとりでひざまずかれた地でもある。主は言われた。「わが父よ，もしできることでしたらどうか，この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし，わたしの思いのままにではなく，みこころのままになさって下さい。」(マタイ26：39) この言葉が私の心に浮かんできたのである。いかなる出来事にあっても，「わたしの思いのままにではなく，みこころのままになさって下さい」と言う勇気と見識と不屈の精神を私たちすべてが持っていたら，どんな

に素晴らしいことであろうか。こうした姿勢であれば，どんな重荷でも軽くなり，どんな難事も容易になるであろう。

救い主が十字架を背負ってゴルゴタに向かった「悲しみの道」を私たちも実際に歩いてみた。私たちはその苦しみについて聞かされている。苦しみを受けられた場所については様々な論議がかもされているが，「されこうべの場」と呼ばれるこの丘で十字架につけられたことは，はっきりしている。

次に丘を下って園へ入り，墓地を訪れた。墓の入口に立ったとき，私は香料を持ってやって来た女性たちのことを思い出した。最後まで十字架を離れず，墓にはまっ先にやって来たこの女性たちは，主の遺体に香料を塗ることぐらいはできると思っていた。だが彼女たちが見ると，主の遺体はなく，石が墓からころがしてあった。そして，そこにいた者がこう言った。「あなたがたは，なぜ生きた方を死人の中にずねているのか。そのかたは，ここにはおられない。よみがえられたのだ。」（ルカ24：5－6） けれども彼女たちにはその意味がわからなかった。その後マリヤは，墓を再び訪れたとき，自分のそばにだれかが立っているのに気付いた。マリヤは園の番人だと思って言った。「私は主を捜しに来ました。もしあなたが，あのかたを移したのでしたら，どこへ置いたのか，どうぞ，おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります。」（ヨハネ20：15参照）

イエスは手を差し伸べて，言われた。「マリヤよ。」これはまぎれもなくイエスの声であった。マリアは顔を上げ，キリスト・イエスのみ顔を見た。そしてイエスを抱きしめようとした。私たちはその場に立ってこれらのことに思いをはせ，胸にこみ上げるものを覚えた。私たち三人はそれまで毎日，私たちの旅を導いて下さるよう神に祈り，また，この国をかくも有名にし，神聖にしたもうた主の模範に従うことができるよう祈り求めていた。

ほかに数カ所エルサレム市内を巡り歩いたのち，私たちはガリラヤの海に向かって北上した。最初に訪れたのがタボル山である。モーセとエライジャがイエスとペテロ，ヤコブ，ヨハネに会い，イエスが彼らの前で変貌した変貌の山と信じられている所である。キリストはこの山で彼らに教えを授けられた。そしてペテロは，この山こそが最適の場所であると考えて，こう言った。「ここに小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために，一つはモーセのために，一つはエリヤのために。」（マタイ17：4，ジェームズ・E・タルメージ「基督イエス」pp. 429－30参照）

タボル山をあとにした私たちは，昔のナザレの丘を越え，ガリラヤの海に出た。見渡す限りの緑，この美しい峡谷，そして鏡のようなガリラヤの海，丘から眺める風景は見事だった。丘を下って海辺に出ると，ホテルの近くにある小さなユダヤ風の迎賓館に宿泊設備が整えられていた。ここでイエスが水の上を歩き，嵐を静め，数々の奇跡を行なわれたのだと思うと私たちは感無量であった。

向こう岸に，八福の教えの山がそびえていた。山上の垂訓が述べられたと信じられている所である。再び私たちは大きな感慨を覚え，その夜帰途についたのである。私たちの胸は，イエス・キリストの教会に属していることへの感謝であふれていた。キリストこそ，かの悪意に満ちた国で民を導き，彼らにより十字架につけられたその人である。

ヨルダン峡谷に戻る途中，道の両側に多くの都市が築かれていた。ほとんどが丘の中腹にあったが，ナザレもまた丘の上に築かれている。イエスはしばらくの間この町に住んでいたため，ナザレ人と言われている。それから私たちはエルサレムに戻り，数日間市内見物をして過ごした。

これらのことを申し上げたのは，私たちの訪問目的を皆さんにお伝えするためである。つまり，主を一層身近かに感じ，主のみ業に対する一層の献身を決意し，アンダーソン兄弟がきょう述べたように，主が神の御子であることについて一層の確信を得て帰ることが私たちの目的であった。ペテロはイエスから「あなたがたはわたしをだれと言うか」と尋ねられたとき，次のように答えている。これは私たちの多くが望む答でもある。「あなたこそ，生ける神の子キリストです。」するとイエスは言われた。「あなたにこのことをあらわしたのは，血肉ではなく，天にいますわたしの父である」（マタイ16：15－17）と。

兄弟姉妹の皆さん。私はキリストの証し人として召されている者として，申し上げたい。私もこのことを知っている。私もペテロが知ったと同じ源からそれを知った。血肉ではなく，天にいます私たちの御父がこの知識を私に明らかにして下さったのである。私は聖地訪問を振り返って，御父と皆さんに向かって申し上げる。「あなたこそ，生ける神の子キリストです。」私は今私が生きていることを知っていると同じように，このことを知っている。

私たちが神のみ業とお互いのために献身するときに神の祝福があって，この偉大な大会において語った方々の模範に従うことができるよう願っている。私はこの大会の一部をテレビで見ていたが，ジョセフ・フィールディング・スミス大管長が冒頭の説教で，主の足跡に従えと勧告され

たことを覚えている。

したがって，私たちは最後の部会にあたって，この勧告を思い起こし，人々に不死不滅と永遠の生命をもたらすという終わりのない業に再び自身を捧げようではないか。私はこれを証し，最近の私の経験を，イエス・キリストのみ名により皆さんに報告申し上げる。アーメン。

一致の精神をみなぎらせよ



大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する兄弟姉妹の皆様。また偉大な総大会を閉じようとしている今，私の心は，主のみたまが豊かに注がれていたことに対する深い感謝の気持ちで一杯である。私たちは主のみたまを充分に享受した。

私たちは，命のパンの施しを受けて，主に仕え主の戒めを守りたいという望みが，いよいよ高まった。こうした極めて友好的な雰囲気の中で，私たちが共に集うことができたということは，本当に有益なことである。

私はこの場を借りて，大管長会において私のかたわらに立つふたりの偉大な方々の信仰と献身と奉仕に対し，深甚なる感謝の言葉を申しあげたいと思う。

ハロルド・B・リー副管長は，エノクのような信仰を備えた霊的な巨人である。彼には啓示のみたまが宿っており，また，予言者，聖見者にして啓示を受ける者として，その天より与えられた召しを全力を尽して遂行している。

N・エルドン・タナー副管長もまた，高貴にして偉大な霊のひとりである。主の教会で彼が現在携わっている重要な奉仕の業を果たすために，永遠の昔より備えられた人である。また，卓越した能力と高潔さとを持ち合わせた人物である。

大管長会は今，固く結束している。イエスが，御父と御子と聖霊はひとつであると言われたように，私たちも常にひとつとなるよう，私は祈ってやまない。そして，これと同じ一致の精神が，どのステーキ部長会にも，どの監督会にも，どの神権定員会会長会にも行き渡っていなければならない。

私はまた，スペンサー・W・キンボール長老と，十二使徒評議員会の方々の働きと務めに心から感謝している。他の教会幹部についても同様である。皆様には，私がこの幹部の兄弟たちを心から愛していることを，知っていただきたい。

私は，忠実な教会員たちを祝福したいという気持にかられている。教会員は真理と徳の道を歩み続ける限り，心の中に義しい望みを抱き，時至らば御父の王国において永遠の報いを受けるという目標に向かって前進し続けるに違いない。

私は全生涯を通じて，戒めを守って主の喜ばれることをしようと努めてきた。そして私は，主が私に本当によくして下さったことを，また主の戒めを守るという誓約を交わした子供たちにも皆，同じようによくして下さることを，心から証したいと思う。

私は今，言わば人生のたそがれ時とでも言うべき時に，この場に立ち，自分が召されてこの世における管理の職について報告する日が遠からずやって来ることを認識しつつ，再度証申し上げる。この偉大な業は，真理の業であり，神聖な業なのである。

私は，神が生きておられ，私たちの罪を贖うために，愛する御子をこの地上に遣わされたことを知っている。

私は，御父と御子が予言者ジョセフ・スミスに現われ，この最後の福音の神権時代の幕を開けられたことを知っている。

私は，ジョセフ・スミスが昔も今も予言者であることを知っている。

さらに，この教会が主の教会であり，福音は進み行きて，やがて，水が海をおおっているように，主を知る知識が全地を満たすときがやって来ることを知っている。

確かに，私たちは皆，主を愛している。私は主が生きておられることを知っている。そして，主のみ顔を拝する日の来ることを心待ちにしている。そして，私は，主に，次のようなみ声をかけていただきたいと願

っている。「わたしの父に祝福された人たちよ，さあ，世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。」（マタイ25：34）

私は，私たちが皆，それぞれの時にかなって，同じように幸福な生涯を過ごすことができるよう，祈っている。これをイエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

目　次

第142回
年次総大会
1972
4. 6-9

時の動き

1971

10.29　インド北東部ベンガル湾沿岸地域を台風が襲う。死者推定1500人。

11.1　リチャード・L・エバンズ長老死去。

11.15　インド・パキスタン戦争終結。

12.2　十二使徒補助マービン・J・アシュトンが十二使徒に任命される。

1972

1.24　グァム島で元日本兵，横井さんが28年ぶりに発見される。

2. 3　札幌五輪開幕。

2.21　ニクソン米大統領北京入り。

3.　一連の“連合赤軍”事件が報道される。

3.15　山陽新幹線開通。

4. 6-9　第142回年次総大会
前管理監督ジョン・H・バンデンバーグ，第一副監督ロバート・L・シンプソンが十二使徒補助に，新管理監督会としてビクター・L・ブラウン，H・バーク・ピーターセン，ボーン・J・フェザーストーンが支持される。

大管長会


第一副管長
ハロルド・B・リー


大管長
ジョセフ・フィールディング・スミス


第二副管長
N・エルドン・タナー

十二使徒評議員会


スペンサー・W・キンボール


エズラ・タフト・ベンソン


マーク・E・ピーターセン


デルバート・L・ステイプレー


マリオン・G・ロムニー


リグランド・リチャーズ


ヒュー・B・ブラウン


ハワード・W・ハンター


ゴードン・B・ヒンクレー


トーマス・S・モンソン


ボイド・K・パッカー


マービン・J・アシュトン

大祝福師


エルドレッド・G・スミス

聖徒と世の人々への勧告



大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する兄弟姉妹，末日聖徒イエス・キリスト教会の総大会に参加の皆さんを心から歓迎する。

大会中に開かれる数々の集会は，共に集まって主を待ち望み，主のみたまを求め，主に仕えて戒めを守ろうという望みを新たにする厳粛で神聖なひとときである。

この場にいるすべての人々，放送を聞くすべての人々，また大会の話を読むすべての人々が，述べられる偉大な真理と，語る人々の口から出る賢明な勧告の言葉に対して心を開くように，祈っている。

教会の大会はすべて，互いに福音の教義を教え合い，天が開かれて私たちに知らされた事柄が神聖な真理であることを証し，創造の目的を充分に果たすために私たちのなすべき事柄を主から知らされ，また互いに忠告しあう機会である。

私たちは主のしもべである。主から光と真理と啓示を受けている者である。主は主の真理を宣言し，主の律法を守るようにと私たちに命じられた。そこで私たちは，主のみこころとみ旨にかなって，聖なるみたまに導かれるまま，聖徒と世の人々に勧告と導きを与えるものである。

世の人々に申し上げたい。今は末の日であると。末の日は災難と苦悩と荒廃の時代である。サタンが神に敵対する人々の心に住みつき，悪が満ちて，時のしるしが示される時代である。

この世の悪をいやすのは，主イエス・キリストの福音をおいてほかにはない。平和への希望，この世の繁栄と霊的な繁栄を求める希望，またやがては神の王国に住みたいという私たちのその希望は，この回復された福音を通じて，またその中にのみ見いだされる。私たちのだれもが携わることのできる仕事のうちで最も重要なものは，福音を宣べ伝え，この地上に神の王国である教会を確立することである。

そのために，私たちは世界各地の天父の子供たちがキリストを信じ，生ける予言者が啓示するままのキリストを受け入れ，末日聖徒イエス・キリスト教会に加わるよう，招いているのである。悔い改めて，世の人人をお造りになった神を礼拝し，現在主の福音を伝えるために遣わされている者たちの言葉を信じるようにと，呼びかけているのである。

あらゆる国の心の正直な人々に申し上げたい。主はあなたを愛しておられる。神はあなたが福音の全き祝福を受けられるように望んでおられる。主はあなたがモルモン経を信じ，ジョセフ・スミスを予言者として受け入れ，地上の神の王国に加わり，やがては天の王国で永遠の生命を受け継ぐように，招いておられる。

福音を受け入れた人々に申し上げたい。戒めを守りなさい。光の中を歩みなさい。終わりまで耐え忍びなさい。すべての誓約と責任に忠実でありなさい。そうすれば，主はあなたが想像しているよりもはるかに素晴らしい祝福を賜るであろう。古人はこう語っている。「事の帰する所は，すべて言われた。すなわち，神を恐れ，その命令を守れ。これはすべて人の本分である。」（伝道12：13）

イスラエルに属するすべての家族に申し上げたい。家族は，この世と永遠にわたって最も大切な組織である。この世にいる私たちの目的は，自分たちで永遠の家族単位を作り上げることである。あなたの家庭生活にとって，神殿での結び固めの祝福と，日の栄の結婚に関連して交わした誓約を守ること以上に大切なものはない。

教会内の両親に申し上げたい。真心から愛しあいなさい。道徳律を守り，福音に従いなさい。子供たちを

光明と真理の中で育てなさい。福音の救いの真理を教えなさい。家庭を地上の天国，主のみたまが宿るところ，正義を第一に尊ぶ心が一人一人に培われるところとしなさい。

家族のきずなを強め，守ることは主のみ旨である。父親が家族の長として正しい場を占めるように，私たちは願っている。母親たちは，夫を支え励まし，子供たちの光となるように。

ジョセフ・F・スミス大管長は言った。「母親は家庭の幸福と国家の繁栄の基である。神は母親に関して男と女に非常に神聖な義務を負わせられた。この義務を無視する者は神の怒りを買う。」（「福音の教義」第2巻，p. 22）また，「立派な父親または母親になることは，立派な将軍や政治家になることよりも偉大である。」（同p. 19）

シオンの若人に申し上げたい。主があなたがたを祝福し，守りたもうように。神の律法を学び，それに調和して生きるならば，主の祝福とみ守りがある。信頼には必ず応えなさい。父母を敬いなさい。愛と一致をもって共に生活しなさい。慎ましい服装をしなさい。この世に打ち勝ち，世の関心に合わせたファッションや風俗には惑わされないようにしなさい。

神殿で結婚し，喜びに満ちた正しい生活をしなさい。アルマのこの言葉を心に刻んで欲しい。「罪悪は決して幸福を生じたことはない。」（アルマ41：10）また，教会と義のみ業の未来と命運に懸ける私たちの望みが，あなたがたの手中にあることを忘れないで欲しい。

教会で信頼を寄せられ，責任ある役職に召されている人々に申し上げたい。福音を，教会の標準聖典にあるがまま，単純明快に説きなさい。私たちの時代に再び新たに啓示された教義とみ業の真実なことを証しなさい。

「わたしはあなたがたの中で，給仕をする者のようにしている」（ルカ22：27）という主イエス・キリストのみ言葉を胸に，誠心誠意神の栄光を現わすためにすべてのことを行ないなさい。困っている孤児ややもめを見舞い，自らは世の汚れに染まずに，身を清く保ちなさい。

さて，主が私たちに，聞いて知り，さらに行なって欲しいと望んでおられることはまだ多くあるが，リー副管長，タナー副管長，十二使徒評議員，その他の教会幹部はそれらのことについて，みたまの力を得てあなたがたに勧告するのである。

最後に私は，この地上における主のみ業が真実で神聖なことを，またジョセフ・スミスや彼と同じ業に働く人々を通じて啓示された教えが，永遠の真理であることを証する。

私は私の身と霊に告げる聖霊の啓示によって，天父なる神が生きておられること，神は無限無窮の永遠の贖いを果たすためその独り子をこの世に遣わされたこと，この末の日に永遠の完全な福音を回復されたことを知っている。

この地上に主のみ業が広がり行くことを私は知っており，そのことを証する。末日聖徒イエス・キリスト教会は確固として立つ。主のみ業は勝利を収める。地上のいかなる力も，あらゆる国に真理が広まり，福音が宣べ伝えられるのを妨げることはできない。

主の慈しみと恵みに対して，またかくも豊かに私たちに注がれているあらゆる祝福に対して，主に感謝する。私たちが皆，神の御子の福音を通じて聖徒たちに与えられる永遠の全きものを享受するにふさわしい者となることを，イエス・キリストのみ名により，祈るものである。アーメン。

決断の時

大管長会第一副管長・十二使徒評議員会会長

ハロルド・B・リー



この年もまた，私たちにとって最も重大な決断の年である。この時代を，世界史上最大の難事をはらんだ時代と呼ぶ人もある。

しかし私は，現代を最も危険かつ決定的な時代と呼ぶのは錯覚であると思う。どの時代も掛け替えなく，私たち自身や国家や世界にとって，どの年も最も重大な年であることを肝に銘じようではないか。現代こそ，誉れある人々を推して眼前の大きなチャレンジに立ち向かわせるべき時代である。

激しい政治活動が今まさに開始された。これから政治の場で様々なイデオロギーを持った人々が有権者の関心を求めて叫ぶことであろう。論争，口論，議論，対立が選挙運動の手段のようになるであろう。

最も理想的な意味で，論争は相違する政治見解を率直に闘わせることであろう。それが地に落ちると，口論や争いや中傷を意味することになる。その最低の例は，対立候補によく浴びせられる辛らつな個人攻撃である。中傷行為は選挙時期を通して続けられる。聴衆は，いずれ選出されることになる人で高潔さや，誠実さを持ち合わせている人はいるのだろうかという疑いと不信を抱いて去って行くことになる。こうした状態には重大な危険が潜んでいる。そうして選ばれた指導者がそしられ，けなされていたために，高潔や正直を疑われる人々が制定した法律や勧告に従順に従うどころか，権威や法律や秩序を軽んじる種が特に青少年の心にまかれることである。

多分，本当の話だと思うが，南北戦争中にグラント将軍率いる北軍が劣勢に傾いたとき，それを憂える聖職者たちがホワイトハウスにリンカーン大統領を訪ねてグラント将軍の免職を迫ったという。

リンカーン大統領は彼らを前にしてこのように言ったそうである。「皆さん，グラント将軍は，私たちがこの国で大切にしているものをすべて掌握している人です。批判する代わりに，皆さんもひざまずいて，彼がこの国を勝利に導くように，神に祈って下さい。」

私たちは何年か前にこの話を合衆国大統領に話して，大統領がだれであろうとどの政党であろうと，私たちも折につけひざまずいては，大統領やこの国の指導者，世界の指導者たちが現代の危機を無事乗り切ってくれるように神に祈っていると伝えた。

その時の大統領の返事に，私たちは勇気づけられた。彼はこう言った。「どの大統領も在任中は折にふれひざまずいて全能の神に祈ったと思います。」

非常な緊張をはらんだここ数年間，あなたはいつも主のこの勧告を心に留めていることであろう。「この故に今ある権力に服従し，統治すべき権能を持ちてすべての敵を脚下に踏みつくる者の統治する時の至るを待つべし。」また主はこのようにも教えておられる。「神の律法を守る者はその国の律法を破る要なければなり。」(教義と聖約58：22，21)

私たちには，ルカが記録した救い主誕生の時の天使の言葉がある。「……地の上では，み心にかなう人々に平和があるように。」(ルカ２：14)

この言葉の反対のようにみえるが，救い主の言葉が次のように記されている。「地上に平和をもたらすために，わたしがきたと思うな。平和ではなく，つるぎを投げ込むためにきたのである。わたしがきたのは，人をその父と……仲たがいさせるためである。そして家の者が，その人の敵となるであろう。」(マタイ10：34—36)

この一見相反するふたつの言葉は，どのようにして一致させられるだろ

うか。

この神権時代の初期に与えられた啓示は，現在の地上で相克する，いわゆる二大勢力について語っている。そのひとつは，「地より平和の取り去られる」悪魔の支配であると述べられている。(教義と聖約1：35)

他の聖典にも出ているが，黙示録には地上に人間が住む以前に「天では戦いが起った」と書かれている。(黙示12：7)

前世で神によってその霊を創造され，大きな望みを抱いていた息子の一人が，神聖な権能をもって地上を統轄したもう神をしりぞけてまでも，自分に全能の力を与えるならば各自の努力なしで全人類を救うと約束した。サタンとなったその息子や彼に従う者たちと，反対に救いの計画を示して人類に選択権を与え，栄光を神に帰するという神の愛する御子や御子に従う者たちとの間に，激しい対立が起きた。御子は御自身を「ほふられた小羊」(黙示13：8）として捧げ，その贖いの犠牲によって「すべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得る」(信仰箇条第3条）ことを提案された。

サタンとその軍勢は人の自由意志を滅そうとしたために投げ落とされ，偽りの父となり，人を欺き，盲目にし，神の永遠の計画の教えやみ言葉に聞き従わない人々を皆とりこにしようとした。

聖典が語る現在の地上のもう一方の支配は，「聖徒らを支配し，その真中にありてこれを統治」する主の統治である。(教義と聖約1：36)

今日，私たちは，目をくらまされ，間違って導かれている人々の声を絶えず耳にしている。彼らは，その行ないからわかるように，自分の望むままを行ない，法・規律，正義・悪，善・徳とは何かを自分の気持ちのままに勝手に決めることを自由意志と呼び，それを権利として要求している。

私が今神の啓示から引用した言葉を考えてみれば，それは恐るべき言葉であることがわかる。少し考えるだけでわかるであろう。自分を規則の制定者とし，自分が定めた以外の規則は何も知らないとしたならば，彼はあたかも，人類と世界を治めるすべての事柄の裁き主なる神の王座に昇ろうとしたサタンの計画に倣うに等しい。真理と偽り，正義の力と悪の力，サタンの支配と私たちの主，救い主イエス・キリストの旗のもとにある支配の間には，過去も未来も闘いがある。

自由意志の真の意味は，ある父親が息子に話した次の言葉にはっきり示されている。

「それであるから，人はみな現世に於て自由であり……。そして万人に為したもうメシヤの大いなる賢い仲裁（救い主の贖罪を意味する）によって自由と永遠の生命とを選ぶか，または……悪魔の束縛と力とに由って定まる束縛と死とを選ぶか，これは全く人間の自由である。」(IIニーファイ2：27)

「……主なる神は随意に行なう自由を人間に許したもうた。しかし人間はもしもあれに誘われこれに誘われなければ，随意に選び行なうことはできないのである。」(IIニーファイ2：16)

もし私たちが真空状態の中で生活し，障害物を乗り越えるための努力も苦しみもいらずに何でも得られるとしたならばどうであろうか。

尊敬する同僚のひとりが，自分を惨めに感じ，意欲も責任感もなくしていた若い大学生を，どのようにして助けようとしたかを私に語ってくれた。友人はその青年に魅力ある提案をした。彼は会話の中でこのようなことを言った。「これからは私が君の仕事の責任をみなとって，君の煩いを無くしてあげよう。大学の授業料を払い，服を買い，車やガソリン代をあげる。結婚するときには心配しなくていい。私が相手を探して家を買ってあげる。君が何も努力しなくても，そのあとずっと家族を養ってあげる。どうかい？」

青年はまじめな顔で一瞬考え込み，「あの，もしそうしたら，私は何のために生きるのでしょうか」と返事した。

すると友人はこう答えた。「君，私がわかって欲しかったのはそのことなんだよ。それが人生の目的なんだ。自分の生来の能力を発揮して苦労しなければ，喜びなんてない。」

さて，神から与えられた自由意志，つまり選択の自由を行使するにあたって，どのようにしたら真理と偽りを見極めることができるだろうか。

有名な評論家が次のように言っている。「真理がこの宇宙の論理である。それは未来を決める論理であり，神のみこころである。人の作り出す何物もそれに代わることはない。」(フランク・クレイン)

他の賢人もこう記している。「基本的な真理に進展はない。我々はその意味を知ることや適用の仕方において成長するが，真理の偉大な原則は永遠に同じである。」(マービー・ハミルトン・ライト)

救い主はピラトの面前での罪状認否のときに，自分の全使命は真理を証することであると述べられた。するとピラトは「真理とは何か」と尋ねた。

このとき救い主が質問に答えられたかどうかは記録されていない。しかしこの私たちの時代に，主御自身がそのときピラトに答えられたであろう言葉を述べておられる。それを引用しよう。「真理とは，事物の現在

あるがまま，過去にありしまま，未来にあるがままの知識なり。およそこれよりも過ぎたるもの，及ばざるものは太初より偽り者なりしかの悪魔の霊気なり。」（教義と聖約93：24―25）

さて，ここでしばらく，人が真理を探求する際に頼りとなる確実な事柄について話をしたいと思う。

まず第一に話したいのは，聖典の中でキリストの光，真理のみたま，神のみたまなどと様々に言われて，本質においては神のもとから出て人の理解を促す神の影響力を意味するもののことである。（教義と聖約88：49参照）使徒ヨハネはそれを，「すべての人を照すまことの光があって，世にきた」と言った。（ヨハネ1：9）

教会の大管長はそれをさらにこう述べている。「この世に生れてくる人で，神のみたまを受けていない人はいない。人の霊に悟りを与えるのは，この神のみたまである。……それぞれ光を受ける能力に応じて……人が……高度の英知を得るまで，このみたまは人に働きかけ続ける。」（ジョセフ・F・スミス「福音の教義」第1巻，pp. 80, 81）

聖典の言葉を知らない人々にとって，キリストの光は人の良心あるいは人の魂の中に存在する神の声と説明できよう。

私が若い時代に公職にあったとき，ある教会指導者から良い助言を受けた。彼はこのように言った。「私たちがあなたに望むただひとつのことは，心に正しいと感じるものに従って主張して欲しいということです。政策上の目的で主張するよりも，むしろあなたが正しいと感じたことを主張して誤った方が何倍も望ましいのです。」

私は何に価値があるかというこの助言の言葉を，公の職務に携わる人人に伝え，公職やその他の重責を担う人々に祈りをもって深く思い量り，主から人生の問題解決の援助をいただくようにと，強く勧めるものである。「方便は一時，原則は永遠」とある人は言った。（ヘンリー・ワード・ビーチャー）

さて，ではもうひとつ確かなことをお話したい。

合衆国憲法が基本原則の決定の拠り所として，法と秩序に関するすべての事柄に適用されることを，今大会でも何人かの人がお話した。合衆国憲法は実にそれを目的として神がお立てになった人々の手によって成ったからである。しかし私たちはこの霊感の文書に加えて，あらゆる偽りの哲学に対抗する最大の武器は，イエス・キリストの福音のはっきりとした教えであることを，常に心していなければならない。

私たちは神の王国の真の使節として世に出て行くすべての人に，歴史を通じて最も有能な信仰の擁護者のひとり，使徒パウロの賢明な助言に従うように，いつも勧めている。パウロはコリント人への言葉の中で，私たちがパウロのように力強く召しを果たす者となるための勧告を述べている。それが，悪と闘うときの彼の秘訣であった。

「兄弟たちよ。わたしもまた，あなたがたの所に行った時，神のあかしを宣べ伝えるのに，すぐれた言葉や知恵を用いなかった。なぜなら，わたしはイエス・キリスト，しかも十字架につけられたキリスト以外のことは，あなたがたの間では何も知るまいと，決心したからである。

それは，あなたがたの信仰が人の知恵によらないで，神の力によるものとなるためであった。」（Iコリント2：1―2，5）

捕まらずに盗む方法を話して聞かせながら人に正直を教えることはできないし，性行動のすべてを若者に話しながら純潔を教えることはできないとよく言われる。

それと同様に，真理を教えるには全能の神の力を借りて努力しなければならない。そうしたときに，私たちは悪に満ちたサタンの教えに対抗する強力な武器を持つことができるのである。

予言者ジョセフ・スミスは当時，教会員をいかにして治めるかと尋ねられて，こう答えた。「私は人々に正しい原則を教え，人々に自らを治めさせる。」

もし私たちがイエス・キリストの福音の原則を力強く教えるのでなく，正義の敵の哲学を強調したならば，結果は単に論争と争いを引き起こすだけで，全世界における伝道の業の目的を覆してしまうであろう。

次は3番目の確かな事柄についてである。

公職に仕える人々は，要求に関して意見が分かれている場合に，それが組織的に声を大にした少数派からのものか，声は小さくても理由が正しく正義の原則と一致している多数派から出ているものかを，どうしても判断しなければならない場合がよくあることを，知っている。私たちは古代の賢王の忠告を常に思い起こすとよい。「民の大半が不正なことを求めるのは稀れであるが，その少数が不正なことを求めるのは普通にある。故に汝らはよろしく民の賛成同意を得てまつりごとを行なうことを………」（モーサヤ29：26）

この賢い古代の王の忠告を，教会員や世界各地の公僕への私たちの助言としよう。自分の仕事や政治に対する関心を持ち，活動しなさい。どの社会にあっても，原則や公僕の選挙について，時代の情報に注意を払わず無関心であることは大きな危険である。

市民としての責任を果たす際に心に留めなくてはならない第4のことは，神から霊感を受けた人々が勧めているように，自分たちを治める人を，「公平と正義とを以て法律を行う……吏員および長官」（教義と聖約134：3）として選ぶことである。

一言で言えば，ただ「政治に向いているか」と考えるのではなく，「国民，社会にとって良いこと，正しいことか」と考える，真に政治家らしい人を探し求めるべきなのである。

政治についての私たちの宣言を常に思い出しなさい。「われらは，王，大統領，統治者，長官に従うべきを信じ，また法律を守り，敬い，支うべきを信ず。」（信仰箇条第12条）

あなたがどこにいようとも，どこに住もうとも，国の指導者のために祈りなさい。彼らもあなたが大事にしているものをすべて持っていることを念頭において。再び主の戒めを繰り返そう。「……今ある権力に服従し，統治すべき権能を持ちてすべての敵を脚下に踏みつくる者の統治する時の至るを待つべし。」（教義と聖約58：22）

そして最後に，すべて確実なもののうちで最たるものは，イエス・キリストの福音の中に与えられている神の永遠の計画である。ここに，私たちは安全な道にしっかり立たせてくれる不滅の原則を与えられているのである。それらの永遠の原則によって，すぐに真理と誤りとを見分けることができる。この神権時代初期の啓示の中に，福音の教えが与えられたのは「彼ら誤りたらば明らかにさるるを得，知恵を求めたらば教えを授けらるるを得」るためであると言われている。（教義と聖約1：25―26）

私たちは福音の真理の光によって，「善を行なえとすすめ，またキリストを信ぜよとすすめるものは……それが神から出たことは何の疑いもなく充分確に知ることができる。」（モロナイ7：16）

また同時に，宗教であっても哲学，科学，政治であっても，「悪をせよと説きすすめ，またキリストを信ぜずこれを否定し神に事えるなと説きすすめるものは何でもみな悪魔から出たと言うことは，何の疑いもなく充分確に知ることができる」ことも知っている。（モロナイ7：17）

祈ることを学び，聞く耳を養い，「あなたが呼ぶとき，主は答えられ，あなたが叫ぶとき，『わたしはここにおる』と言われる」人は，危機にあっていかに素晴らしい平安を感じることであろうか。（イザヤ58：9）

第2次世界大戦の連合軍最高司令官アイゼンハワー元帥は，世界の情勢を変える軍事上の重大な決定に際し，謙遜になって次のように言明した。「これは私の宗教観である。宗教は危機に際して決定を下さなくてはならないときに，決定をする勇気と，また結果をさらに力ある御方にゆだねるという信頼を与えてくれる。神にこの信頼を置くことによってのみ，数々の責任を受けている人間は平安を見いだすことができる。」

ここにあなたがたはそれを持っている。高い地位にある指導者，実業界，政界，教会の指導者であるすべての人々よ，このことを，人生を歩むそのときどきに思い起こしなさい。神が天のみ座にいまし，もし私たちが神を求め，神を見いだすならば，世に関するすべてのことが好都合となる。「神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。われわれは神のうちに生き，動き，存在しているからである。……われわれも，確かにその子孫である。」ということを。（使徒17：27―28）

さて，私は心から低くへりくだって，これらの人生の指標が私にとっていかに大きな力となっているかという証を述べたい。私は自分の経験を通して，責任が重くなればなるほど，より一層主に頼ることを学んだ。

私は，モーセが大いなる霊的経験をしたあとで言った次の言葉の意味を幾らかではあるが理解し始めた。「われ知る，人は物の数にもあらざるを。この事を嘗てわれ考えたることもなかりき。」（モーセ1：10）

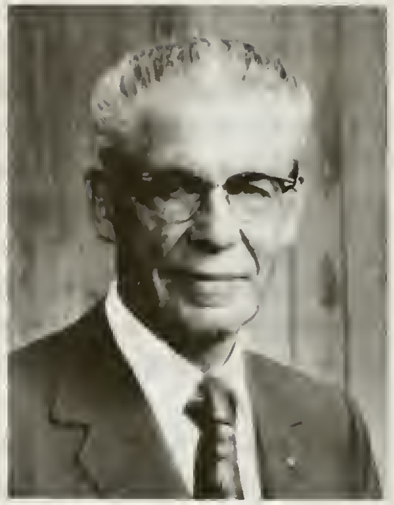
また私は人生の様々な経験を通して神の聖なる力に助けられるならば疑いは解けて確信に変わり，重荷は軽くなり，主に近づいて救い主がさらに確かなものとなって，文字通りの再生が実現するという確信を得た。

これらのすべてを主イエス・キリストのみ名により，へりくだって証申し上げる。アーメン。

「人をさばくな。自分がさばかれないためである」

大管長会第二副管長

N・エルドン・タナー



先日，私はある人が他人を非難しているのを耳にしたが，そのときこのような詩の一節が心に浮かんだ。

「『私にはあなたの長所がわかります。
そのように，私の長所も見て下さい。』
会う人ごとにだれもがこう言ったなら
この世はもっとすてきになっただろう」

また，讃美歌の一節を思い出した。

「おのが悪しきとがを
努めて知るべし
人を責むるとき
おのれを正すべし
同じとがあるとき
われには緩くし
人には厳しく責める
わが弱さを
おのが悪しきとがを
努めてしるべし
人を責むるとき
おのれを正すべし」
(讃美歌107番)

人が友人，隣人を取りざたし，外見上の変わった点や弱点を中傷するのは日常茶飯のことのようである。実際にごくありふれたことなので，うわさ話や人の批判はして当然と考えがちである。しかし，変わり者だと批判され，非難され，あざけられた若者が，やがては特異な分野で異才を放つに至った例をどれほど聞くことか。

間違った批判や見当違いの判断について，例を一，二あげてみよう。

デビッド・O・マッケイ大管長の夫人であるマッケイ姉妹が，教職についたばかりのときの話である。校長がマッケイ姉妹を生徒たちに紹介したとき，彼はひとりの少年を指さして，あの子は問題児ですと言った。マッケイ姉妹は少年のきまり悪そうにしている様子を見てとって，その通りの子供になりはしないかと心配した。そこで姉妹は紙きれにこう走り書きして，その少年の机のわきを通り過ぎるときに，紙きれをそっと落とした。「アール，校長先生は間違っていると思います。あなたは悪い子ではありません。私はあなたを信頼しています。この教室を学校中で一番良い教室にするのを手伝ってくれますね。」このアールは学識豊かな町の有力者になったのである。

もうひとつの例を話したいと思う。社会に関心を持ち，人々の尊敬を集めていたある人が，心に大きな痛手を受けたかのように振る舞い始め，以前は中心になって活躍していた場所にも足を向けなくなった。人々は，怒りっぽくてスポーツがへたで人づきあいの悪い奴だとその人を非難し始め，彼を避けるようになった。ところが，あとから医者の診断でわかったことだが，彼は脳腫瘍を患っていて，そのために，以前は主催までした活動にも興味を失ったのだった。

見当違いの判断といえる例をここで少し御紹介したい。最初に，ある監督はワード部で役員を補充する必要が出たときひとりの会員のことを思いついた。その人は活発ではないが能力がありそうだった。しかし監督は，「いや，きっと興味がないだろう。責任を引き受けたいなどと思わないだろう」と考え，あたってみることもせず，その結果，その人は何年も不活発なままだった。

やがてワード部に新しい監督が召され，監督がその人に責任を受けてくれるかどうかを尋ねたところ，彼は用意ができていて，働きたいと思っていたことがわかった。

人に偏見を持たず，機会を与えなさい。受け入れるか辞退するかは本人に決めさせなさい。

そうかと思うと，家族や他人に向かって「どうして監督はあんなこと

をするのだろう，私にはわからない。もっとわかってる人だと思ったのに」などと言っているのを耳にすることがある。その人は事実を知らないで監督を裁いている。もし事実を知っていたら，監督がとった措置の正しいことがわかるであろう。この人の非難は不当な上に，恐らく子供たちに偏見を持たせ，監督への尊敬を失わせ，さらに信仰までも弱くしたに違いない。

これらの話は，人を裁かないことがいかに大切で，非難するよりも励ますことがいかに大切かを教えている。イエス・キリストは2千年も昔に，人が正しくない非難をしがちなことに気付いて，次のように言われた。

「人をさばくな。自分がさばかれないためである。あなたがたがさばくそのさばきで，自分もさばかれ，あなたがたの量るそのはかりで，自分にも量り与えられるであろう。なぜ，兄弟の目にあるちりを見ながら，自分の目にある梁を認めないのか。自分の目には梁があるのに，どうして兄弟にむかって，あなたの目からちりを取らせてください，と言えようか。偽善者よ，まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば，はっきり見えるようになって，兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう。」（マタイ7：1－5）

私たちに欠点がなければともかく，そうでなければ人を裁く資格はないと，主は言っておられるのだと思う。予言者サムエルが王を選ぶときに経験したことを考えてみれば，人に人を裁く資格のないことが一層よくわかるであろう。主はイスラエルのサウル王を退けて，新しい王を選べと予言者サムエルに言われた。主はサムエルに，8人の息子がいるエッサイの家へ行くように，そして目の前を油注がれた子供が通り過ぎる時サムエルにはだれが選ばれるべきかがわかると告げた。長男のエリアブがサムエルの前に来たとき，サムエルはそのエリアブこそ選ばれた者であると思ったが，主はエリアブを拒み，人を判断する秘訣をサムエルに教えられた。

「顔かたちや身のたけを見てはならない。わたしはすでにその人を捨てた。わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見，主は心を見る。」（サムエル上16：7）

ついで6人の息子がそれぞれ予言者サムエルの前を通り過ぎたが，いずれも退けられ，やがて最年少のダビデが連れて来られて，主の目にかなった。

ここに見る通り，私たちに人を裁くことができないわけは明白である。私たちは心のうちを見ることができない。目に見えるどの行動にも動機があることは知っているが，その動機がわからないのである。私たちが良くない動機だと考えても，実は純粋な動機であるかもしれない。

人の望みや信仰や目標を知らないで，その人を正しく判断することはできない。環境も違えば，機会も異なるなど，いろいろなことで人々はそれぞれ違った立場にある。頂上から出発する人もふもとから出発する人もいて，反対の方角を目指して歩む途中で，いつか出会うこともある。「肝心なのは,どこにいるかではなく，どこを目指すかが大事だ。成功や失敗にどれだけ近いかではなく，どちらに向いているかということが大事なのだ」と，ある人が言った。私たちはみな弱くもろい者であるのに，どうして他を裁く座に着くことができようか。人はせいぜい目にするものしか判断できず，心の中や考えを判断することも，ましてや隣人の可能性を断定することもできないのである。

私たちは他人を批判してはならないのにそれをあえてしようとすると，虚栄心や不正直，不道徳，陰謀などの人間の弱さや欠点を探すようになり，それを見つけることに誇りを感じたりする。そうして，裁く相手の悪い面だけを見るようになるのである。

現代の報道機関もまた，派手な話題をまき散らしている人や非難を浴びている人に興味を持ち過ぎるように思う。100のうち99は良いことをしていても，たったひとつの弱点や過ちをことさら取り上げて世間に広めている。

私たちは高潔な人の心を傷つけるかもしれないことなど考えもせずに，激しい非難や悪意ある話や活字に耳を向け，.うのみにしてそれを広める傾向がある。そのようなことをしながら，「火のないところに煙はたたぬ」などと自分を正当化しているのである。実際は嫉妬から人が起こした悪意の火を，私たちがあおっているのである。

ときに私たちは，友人が間違いを非難されたり，うわさがたち始めたりすると，全部の事実を知りもしないのにその人を裏切って，聞いたことを本気にし，他人に言い広めたりする。間違った情報がもとで友情が壊れたり憎悪が生まれたりするのはまったく悲しいことである。

人生で一度だけ不可知論を容認できるとすれば，それはこのように判断する（裁く）ときである。「わかりません。ちゃんと証拠があるわけじゃないし。両方の言い分を聞いてみなければなりません」と言うのは，勇気あることである。

速断を避けることによってこそ，真の愛が示される。私たちはどんな犯罪者も公正な公開裁判を受ける権利があることをよく知っていながら，ちょっとしたことを見ては隣人や友

人を裁くのは，いったいどういうことだろうか。心の中からうぬぼれや激情や個人的な感情や偏見，狭量さを取り除き，まわりの人に愛を示そうと努力することは必ずできる。

見えない欠点を捜し出すよりも，良いところを捜そうではないか。他人の過ちを捜そうとすれば，それは簡単である。家族内でさえ，夫婦が互いに愛し合い良いところをほめ合うことをせずに，欠点を捜し出してことさらにあばきたてていれば，離婚や家庭の崩壊を招く。

私たちは他人と協調せず，折り合いが悪くなればなるほど，他人の過ちや弱さが目につくようになり，自分を改善するよりも自分の過ちを合理化，正当化しようとするようになるのである。教会指導者や教義に対する批判はほとんど例外なく，自分の義務をきちんと果たしていない人や指導者に従わない人や福音の教えを守らない人たちから出ている。

これについての良い例は，カインとアベルの話である。カインは自分の務めを怠りながらアベルの義しさや主に愛されていることをねたみ，狂気の嫉妬心から自分の兄弟を殺してしまった。もしカインが弟をほめ，祝福して，自分の間違いを正し，進歩しようとしていたら，カインの立場はどんなにか良くなっていたことであろう。

私たちは自分の生活や行動を反省し，正しい原則に添うようにして，決して他人を攻撃したり，間違った情報を広めたりしないようにしようではないか。

うわさ話は，人を裁くうちでも最も悪いものである。舌は人間の持つうちで最も危険で破壊力の大きい恐ろしい武器である。邪悪な舌は人の評判やあまつさえ将来までも奪ってしまう。名声に対する陰険な攻撃やいやなあてこすりやいいかげんな言葉は，大きなカシの木の命を絶つ寄生虫のように恐ろしいものである。それはほとんど人目にもつかず，卑劣なために，防ぐことができないのである。「細菌をだますより象をだます方がずっとやさしい」という言葉通りである。

もし私たちが，幾度となく耳にしてきた次の言葉を実行するなら，世の中はどんなに変わることであろう。「だから，何事でも人々からしてほしいと望むことは，人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である。」（マタイ7：12）ところが私たちは自分でこのように判断してもらいたいと思うのとは違った基準で，他人を判断しがちである。

姦淫の罪を責められた女がキリストの前に連れて来られたとき，キリストはその女を責めた人々の不義を憤られた。彼らは自分ならこう裁かれたいと望むのとは異なった基準でその女を裁かれるのを望み，しかも中にはほかならぬ同じ姦淫の罪を犯していた人もいたのである。

イエスは言われた，「あなたがたの中で罪のない者が，まずこの女に石を投げつけるがよい。」そして身をかがめて，地面に物を書きつづけられたあと，身を起こして女に言われた。「……あなたを罰する者はなかったのか。」（ヨハネ8：7，10参照）

もし，私たちのそばにイエスが立っておられて，人を裁くようにお願いしたときに「あなたがたの中で罪のない者が，まずこの女に石を投げつけるがよい」と言い，身をかがめて地面に物を書かれたとしたら，どんなに大勢の人が良心の呵責を覚え，恥ずかしい思いでそこを立ち去らなければならないことか。イエスの教えはいかにも正しい。

私たちが「自分を愛するようにあなたの隣りの人を愛せよ」（マタイ22：39）という第二の大切な戒めを受け入れて実行するならば，また隣人を愛することを本当に知るならば，意地悪いうわさ話や間違った受け売りはなくなるであろう。主の祈りにこのような言葉がある。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように，わたしたちの負債をもおゆるしください。」さらにイエスはこう言われた。「もしも，あなたがたが，人々のあやまちをゆるすならば，あなたがたの天の父も，あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば，あなたがたの父も，あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう。」（マタイ6：12，14—15）

キリストは赦しについて最も素晴らしい模範を示された。姦淫の罪で女がキリストの前に引き出されたとき，キリストは，「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように。」（ヨハネ8：11）と言われたのである。

また，十字架上でこのようにも祈られた。「父よ，彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか，わからずにいるのです。」（ルカ23：34）

私たちは利己心やうぬぼれや不安定な感情を持ちあわせているが，互いに愛しあい，赦しあい，自分の過ちを悔い改め，人を裁くことをしないならば，人生は一層幸せなものとなり，社会のため，他人の幸福のために役立つことであろう。

国の法律に対しては裁判官があり，教会には教会員に対して判士がいるのは確かだが，彼らには国の法律や教会の律法に従って正しい裁きを下すという重い義務と責任がある。

今年は選挙の年にあたり，選挙運動が華やかで，様々なことについて賛否入り乱れた声を聞き，討論をし，激しく意見が対立することもあろう。私たちは問題点を理解すべく努力し，さらには各自の信念に基づいて確た

る態度をとるべきである。しかし，選挙戦がいかに激しかろうとも，よく耳にする感情にまかせた個人攻撃は避けようではないか。自分たちの兄弟をののしってはならない。うそつき，詐欺師，不正直，不道徳といった汚名を着せてはならない。

私たちは原則に，高い原則の上に立とうではないか。政治家も含めて私たちすべてが，非難や中傷を受けないような生活をしようと努めることが極めて大切である。

他人をずたずたに引き裂いても，何も得るものはないし，自分の性格が良くなるわけでもない。私たちは，熱狂的な選挙戦のさなかに口にした言葉や非難によって友情が打ちこわされるのをしばしば目にしてきた。公職にある人や対立意見の人に対してしつこい非難演説をするのを聞いて，若者たちはその人や他の政治家たちに信頼を失い，政治形態そのものにも失望したりする。

私たち両親には，それらのことが家庭に及ばないようにする責任がある。また私たちは，どの言葉も行ないも子供たちの考え方や態度に影響することを認識しなければならない。子供が他人と仲良くやっていくことや愛，同情，他人への関心といった基本的なことを学ぶのは，家庭の中である。両親が肌の色や人種，宗教，階層，学力などでほかの子に偏見を持つことのないように言葉と模範によって子供を育て，また主を愛することを子供に教えるならば，以上のことは一層よく教えられるであろう。私は自分の両親が，忍耐強く子供たちをそのように育ててくれたことを感謝している。

私は心から主を愛し，隣人を愛していると，本当に謙遜な気持で申し上げたい。私はだれに対してもかたくなな気持は一切持っていない。私のために気持を害した人がいたならば，赦していただきたいと心から祈っている。私は今，救い主が言われた言葉をかみしめている。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは，すなわち，わたしにしたのである。」（マタイ25：40）

世のすべての人に対し，特にこの末日聖徒イエス・キリスト教会の教えを理解せず非難する人々に対して，私は証を述べ，この回復された福音の内容を知らないで裁くことをしないように強く申し上げる。私たちはあなたがたと同じように，神は生きておられ，イエス・キリストは神の独り子，真実肉体を受けた独り子であって，この世に生まれ，命を捨て，やがて復活して，全人類が不死不滅となるようにして下さったお方であると信じている。

救い主は，「……これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり」（モーセ1：39）と言われて，私たちがみもとに帰って永遠の生命を受けられるように，福音の計画を与えて下さった。

まさしく今，福音は完全なままに回復されて地上にある。聖書は予言者を通じて私たちに与えられた神のみ言葉であること，モルモン経は神が古代アメリカの民を導かれたことを正しく翻訳によって伝える，完全な福音を載せた神のみ言葉であることを証する。モルモン経はユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして，万国の民に現われたもうことを確信させるため，主の命令によって，また予言と啓示のみたまによって書かれたものである。

私はまた，教会の大管長であるジョセフ・フィールディング・スミスが神の予言者であり，主は彼を通じて語られることを証したい。私はスミス大管長の傍らで共に働く機会にあずかっていることを，心から深く感謝している。

これらのことを私は確かに知っており，それが真実であるとへりくだって証する。そして，皆さん一人一人がモルモン経を読んで研究し，そこに記されている次の約束をぜひ試してみられるようにと，切にお勧めする。

「またこの記録を受けるとき，それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば，神は聖霊の力によってこの記録が確かなものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。そして聖霊の力によって一切の事の真実であるかどうかがあなたたちに解る。」（モロナイ10：4－5）

この約束と私の証を，イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

神との交わりを強くしよう

十二使徒評議員会会長代理

スペンサー・W・キンボール



愛する兄弟姉妹，皆さんの前に立って永遠の福音について述べ，教会の神聖さと主のみ業の神聖さ，また予言者と主の指導者たちの神聖さを証するときに，私はいつも心に畏怖の念と，同時に喜びを感じる。

私たちは前回の大会を最後にこの世を去ったリチャード・エバンズ兄弟を心から悼むものである。そして今，十二使徒評議員会の12番目の会員として頼もしいアシュトン兄弟をここに迎えた。また，ピーターソン兄弟とフェザーストーン兄弟を心から教会幹部の中に迎え入れたい。彼らと，また新しい役職に就いたバンデンバーグ監督，そして副監督たちと共に働けるのは喜ばしいことである。

今週は復活祭である。この時期になると私たちはそれぞれに，エルサレムの城壁の外の，小さな内庭にある岩をくり抜いた墓の中で起きた空前のあの出来事を，厳粛な気持で思い出す。早朝に起きたその出来事は，聞く者すべてを驚かした。

それは地上で初めての出来事であり，人々には信じ難かったであろうが，復活された主ご自身がおいでになってみ姿を示し，人々が傷ついた手足に触れてみたとき，疑うことができたであろうか。キリストを信じていた近しい友たちが，何百人と証をした。

それこそナザレのイエスであって，馬小屋で生まれ，ヨルダン川でバプテスマを受け，ゴルゴダの丘で十字架にかけられ，岩窟の冷たい部屋に葬られ，墓の傍らの小さな美しい庭で復活を証拠立てられたあの御方である。

十字架につけられる前後のイエスの苦悩と大きな犠牲は，私たちがイエスの戒めに従わない限り，ほとんど，いやまったくというほど意味がなくなってくる。なぜなら，主はこう言われたからである。

「わたしを主よ，主よ，と呼びながら，なぜわたしの言うことを行わないのか。」（ルカ6：46）

「もしあなたがわたしを愛するならば，わたしのいましめを守るべきである。」（ヨハネ14：15）

確かに，私たちが教えに添って生きようとしないならば，キリストとの交わりは断たれてしまうだろう。

ある時，私は南米でその交わりを断たれる例を見た。

私たちはアルゼンチンのはるか北西部を車で旅していた。そこは牛の多い田舎で，まっすぐな狭い道が何マイルも続いていた。道の両側には4本の鉄線をわたした柵が立っており，それと平行して電柱がずっと続き，世界中に通じる電話線がひかれていた。それぞれの電柱には横木が取り付けてあって，横木から横木に通信線が延びていた。

車を走らせていると，焼け野原に出た。そこには地面に半ば倒れて黒焦げの電柱が数本あった。だれかが不注意に車の窓から火のついたタバコを捨て，それが草に燃え移って，そのため電話連絡が途絶えるか機能が低下してしまっていた。

遠くの電柱もほとんどが焦げるか燃えるかしていた。地面から数十センチの高さで焼け崩れてしまい，上部を電話線に支えられて宙づりになっているものもあった。ゆらゆらたるんでいる電話線が風に吹かれる度に，つられている電柱が地面に接触して，電話線にショートの状態が起きていた。

もともと電話線を架けるために立てた電柱が，ここでは電話線にぶらさがっていた。

私は南米の責任を受け持った3年間に，何度も遠距離電話をした。電話が接続すると大抵きまって空電があり，言葉が途切れたり雑音がした

りした。私のまぶたには，サルタロードで風に揺られ，地面を叩いては時折接続を途切れさせていたあの電話線が浮かんできたものである。

この電話線と電柱には，人間関係と似たものがあるのではないかと私は考えた。電柱はひとつの目的，あるいはときにほかの目的もあって立てられる。しかも，しっかりとしてがんじょうで電話線を支えるように設計されるが，傾いたり，ぶらぶら揺れたりして，断線とは行かないまでも通信機能が非常に損なわれることが多い。

私は経験からして，夫婦の問題の多くが意志疎通の欠如から来ることを知った。ちょうど電話線が垂れ下がり，電柱が焼け落ちるように，夫婦が騒々しく口論し，平和であるべきはずのところに空電が起きているのである。愛と一致のあるべきところに，反感と憎しみが募っている。

神の聖なる神殿で永遠の誓約をしてふたりの子供をもうけたばかりで，離婚をしようとしている，その典型というべき例を私は知っている。彼らの人生に対する考え方は多くの点で，特に霊的な事柄において相違していた。一方は相手が狂信的だと考えるような行動を，もう一方はそれと反対に，相手が背教的だと考えるような行動を選んでいた。そしてその両方とも間違っていた。

ふたりはそのことを話し合っては互いに腹を立て，共通の目標から次第に離れていった。ふたりとも根は善良な人なのだが，彼らには燃えていない電柱とたるんでいない電話線が必要であった。穏やかに意志を通じ合えないことが，怒りや激しい言葉や誤解を生んだのである。

そしてついには互いに別の人を見つけ，同情や理解や慰めを違った方向に求めるようになった。そしてこの不実な行為は姦淫にまで進み，ふたつの家庭を破壊し，伴侶に幻滅を与え，希望を踏みにじり，子供たちを傷つけてしまったのである。

それはすべて，善良なふたりが自分たちの通信線をたるませ，頼りとすべき電柱を地面の上にひきずってしまったせいである。このことは一組の若夫婦だけの問題ではない。華やいだ幸福とこの上ない喜びに満ちて，互いに責任を感じながら限りない希望に胸ふくらませて結婚生活を始めた数多くの夫婦に起きていることである。

ある日曜日，遠方でのステーキ部大会に出席した折，大会が終わるとどこかで見たことのあるひとりの青年が近寄ってきた。彼は帰還宣教師で，何年か前伝道地で私に会ったことがあると，自分を紹介した。彼は大会に出席できず，閉会の時に着いたので，私に挨拶したかったのだと言った。私たちは楽しく語りあい，素晴らしい思い出話をした。私はその男性の近況を聞いてみた。彼は大学に行っていて，まだ独身で，かなり大変な生活をしていた。

彼に教会では何をしているかと尋ねると，途端に目は輝きを失い，生気のないがっかりした顔つきになって，こう言った。「今，私は教会であまり活発ではないんです。伝道していた時に感じたような気持が感じられないんです。証は錯覚だったんじゃないかと考えるようになって。神様がいたとしても，今はそれがはっきり信じられません。昔感じた情熱や喜びは間違っていたんだと思います。」

私はじっと彼を見詰めてから，幾つかのことを尋ねた。「暇なときには何をしていますか」，「どんな本を読んでいますか」，「どれだけ祈りをしていますか」，「どんなことをしていますか」，「どんな人と付き合っていますか。」

答えは予想した通りであった。彼は鉄の棒から離れていたのである。不信心な人々と付き合い，大学の教科書に加えて無神論者や背教者や聖書の批判家が書いた本を読んでいた。天父に祈るのもやめていた。彼の電柱は燃えてしまい，通信線はひどくたるんでいた。

そこで私は尋ねた。「伝道が終わってから何回新約聖書を読みましたか。」

「一度も読みません」という答えであった。

「モルモン経は何回位，通して読んでいますか。」

「一度も読んでいません。」それが答えであった。

「では聖典を何章読みましたか。何節読みましたか。」

彼は一度も聖典を開いていなかった。否定的で批判的で信仰を無くさせるような本を読みながら，なぜ自分が楽しくなれないでいるのかを不思議がっていたのである。

彼は祈りをやめながら，辛いこの世にひとり見捨てられたような孤独を感じるのがなぜか，わからないでいた。長い間主の聖餐にあずからない状態で，自分の霊が死んでいるのがなぜかを，知らないでいた。

什分の一を1セントも納めないでいて，なぜ天の窓が閉じて鍵がかかっているのかと考えていた。彼は受けることができたはずのものを，みんな失っていた。その男性が自分の苦労や消えかかっている信仰や孤独，失敗を考えているときに，私はあの北アルゼンチンで見た焼け野原や，焼け落ちた電柱やたるんだ電話線や風に揺られていた電柱のことを思い出していた。

現代世界に信仰衰退の気配が濃いことは，非常に憂慮される。マッチが捨てられ，草が燃えている。

霊的な自覚が薄れているのは恐ろ

しいことである。従業員の間では職場のモラルが低下して，利己心や「かけひき」が横行している例も多い。「どの位の給料か」，「昇給はどれほどか」，「休日はどれだけあるか」，労働時間を少なく少なくとそれだけを求めている。雇用者側のモラルもまた貧しい。

私たちは豊かになり過ぎている。金銭も物にも恵まれ過ぎている。多くの物を持っている。貧しいと言われる多くの人々さえ物を豊富に持っており，「物」が人生となり，「自分のしたいことは好きなようにするさ」という言葉が幅を利かせてくる。

しかし主は言っておられる。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば，これらのものは，すべて添えて与えられるであろう。」（マタイ６：33）私たちはこの言葉に反して，「この世の物」を第一に求めることがあまりにも多い。

教会には素晴らしい若い世代がある。だが多くの若者と語るとき，彼らが，それも特に罪を犯している人が祈りにいい加減なのに驚く。多くの若者が祈りをしないに等しい状態になっている。彼らの通信線はたるんでいる。また大勢の新婚夫婦が新生活の初めから定期的に祈ることをやめてしまうが，彼らの通信線もたれ下がっている。

問題のある人にまず尋ねることは，「祈りはどうですか。どれ位お祈りをしてますか。心をこめて祈っていますか。祈るときには謙遜な気持で感謝したり，お願いしたりしていますか」である。

昔イスラエルに深刻な問題があった。水飢饉（ききん）に見舞われて，牽（けん）引用の牛馬を養うのが大変だった。

イスラエルの王アハブは予言者エライジャに問いただした。

「イスラエルを悩ます者よ，あなたはここにいるのですか。」

彼は答えた，「わたしがイスラエルを悩ますのではありません。あなたとあなたの父の家が悩ましたのです。あなたがたが主の命令を捨て，バアルに従ったためです。」（列王上18：17―18）

カルメル山上で予言者エライジャと無力のバアルの偽祭司との間で繰り広げられた壮観な光景は，たるんだ通信線の話さながらである。大きな罪悪のために主は天から雨を止められたのだが，そのときエライジャは言った。「……主が神ならばそれに従いなさい。しかしバアルが神ならば，それに従いなさい。……」（列王上18：21）

エライジャの持ち出したこの競い合いは，石や木や金属で作った神には力が無いことをイスラエル人に立証する結果となった。450人のバアルの祭司たちは彼らの神に捧げ物の火を点じさせることができなかったが，主はエライジャを介して天から火を下し，祭壇上の牛を焼き尽くされた。こうしてイスラエルに信仰がよみがえり，雲が湧いて豪雨となった。弱くなっていたイスラエルが新しい電柱を打ち立て，通信線を引き直して，また通信ができるようになったのである。

悲しみにうなだれた二組の若い夫婦が北西部からやってきた。片方の夫ともう片方の夫婦の妻が，いかなる形でも決して許されない交際をして互いの中に慰めを見いだし，その不実な行為に良心をさいなまれていた。彼らの問題はどうしようもないところまで来て，結果は後悔ばかりであった。

このような問題はみな同じである。互いの伴侶に誠実さを欠いたふたりが言葉を交わし，頼り過ぎるようになり，やがて人知れず会うようになって，伴侶に対する不実があからさまになる。それがついには，夢想さえしなかった罪へと進んだのである。

この二組の夫婦は不活発になり，教会から遠のいて行った。そして同じように霊的に無頓着になっている人々の仲間に入って行った。新しい生活は収入を越える出費で，借金がかさみ，什分の一が忘れられてしまった。

忙しくて家庭の夕べができず，あくせくしていて家族の祈りもできず，大きな誘惑がやって来たときに，備えがなかったのである。彼らの野原は焼き尽くされ，電柱は焼け崩れ，残った部分がたるんだ電話線にぶらさがっていた。

通信線が垂れ下がるときには罪がやって来る。遅かれ早かれ必ず。

私たちは通信線のたるんだ世界に生きている。カインがサタンにそそのかされたときからこの世に罪はあるが，今ほどに罪が平然とのさばる時代はなかった。私たちはこの壇上からも幾千という説教壇からも，悔い改めを叫び続けなければならない。世の大勢に迎合し過ぎると，警告し続けなければならない。

私たちが常に自分のたるんだ通信線を修理し，自分の義務をすべて果たして主なる救い主に近くいられるように，イエス・キリストのみ名によって祈るものである。アーメン。



良識の民

十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン

兄弟姉妹，いましがた「感謝を神にささげん，予言者の導き」という素晴らしい讃美歌を歌ったのは，まことにふさわしいと思う。私たちは神の予言者の声を聞いたばかりだからである。

彼はこの地上における神から任命された主の代弁者として語った。

末日聖徒は彼を尊敬している。民は彼の言葉を，この苦難の時代に自分たちを導くため，霊感と啓示によって与えられるものと，受け入れている。

教会員でない人々は，彼の召しの大きな意味を知らないであろう。末日聖徒でさえ，その意味をまだ悟っていない人々がいる。だが，教会の大管長は事実，この末の時代に末日聖徒に限らず全世界の民を霊感により導くべく召された予言者なのである。

全能者は，この教会の予言者たちについてこのように言っておられる。

「……聖霊によりて感ずるままに語る……。およそ聖霊に感じたる時語るところはことごとく聖典の言となり，主の意となり，主の精神となり，主の言となり，主の声となり，世を救いに導く神の能力となるべし。」（教義と聖約68：3―4）

スミス大管長は，モーセ，イザヤ，エゼキエル，エレミヤ，パウロ，ペテロ，その他古代に召された予言者たちと同じ予言者である。

信仰を持つ人ならば，旧約の時代を通じてイスラエルに予言者たちがいたことを認めるであろう。予言者たちは，救い主がその時代にお立てになった教会にもいた。彼らもモーセやイザヤのような者，いや，それ以上の者であった。なぜなら，彼らはキリスト教の予言者であり，聖徒たちに正しく教えて，だまし惑わす偽りの教えから彼らを守ろうとするキリストのみ業のために，主から選ばれた人々だからである。

ユダヤ人でもキリスト教徒でも，現在この地上に，昔の予言者たちが具えたと同じ賜と力とを持つ生ける予言者たちがいることを知っている人は，ごくわずかである。しかし，予言者は確かに生き，動いてここにいる。彼らは時代の情勢に通じた教育ある現代人である。彼らはモーセやイザヤ，ペテロ，パウロのように，神のみ言葉を受けるや，それを民に伝えている。

どうかそのことを自分で知っていただきたい。神は今も私たちに語られる。神は現代に召された予言者を通じ，1972年の現在の民に対して，御自分を示し，退廃的で無目的な世界の誘惑と堂々闘うことができるように民を助けておられる。

あなたがたは受け入れさえすれば，天の導きを充分に享受できるであろう。自分に関する神のみこころを，2千年の昔ではなく，今，ここで与えられて知ることができるのである。

モーセは自分の民の必要に応じた教えと導きを施したのではなかっただろうか。エレミヤ，イザヤ，エゼキエルもそうでなかっただろうか。ペテロもパウロも，自分の隣人や友人が直面している状況に即して，自分たちの時代の問題にじかに答えたのではなかっただろうか。

現在も，聞く耳をもつすべての人は同様の祝福が得られる。現代の予言者を通じ，現代の問題に対する現代の啓示によって，その祝福を得ることができるのである。

全能者は悪のはびこるこの時代に，破滅が世界を襲う前に人類を救おうと腐心され，ご自身について偉大な新しい啓示を与えられた。現代の人間に現われて，人々はみ顔を拝し，み声を聞いたのである。

神はもはや不在の神ではない。私たちから離れてはおられない。私た

ち自身のこの時代に，神は霊的にも肉体的にも実在する御方として御自身を示されたのである。

神は実際に現代の人々に姿を現わして，神の存在に関する疑問をすべてぬぐい去られた。御子イエス・キリスト同様，神は生きておられるのである。

その御二方が，私たちの時代に，偉大な新しい啓示によって御自身を知らされたのである。

信じ難いことであろうか。あなたは疑うだろうか。神が現代の人間に現われるとは信じられないことだろうか。

神は昔み姿を示された。聖典で言うように神が変わらない御方であるならば，現代の民にも昔と同じことをなさらないだろうか。

神は聖書の時代に御自身について教えられた。特に主の民が道を迷い始めるときには，力あるみ姿を示して彼らを群れに引き戻された。

主は折々に召した新しい予言者たちを通じてこれを行ない，すでに与えられている神のみ言葉を生き返らせてさらに意義を添える新しい啓示を，彼らに与えられた。

そして何世紀も予言者たちを通じて働かれたのちに，世を裁くためではなく，救うために愛する御子を遣わされた。

主は御自分の目的を成就するために教会を建て，福音を教えられ，しばらくの間，大勢の人がそれに従った。しかしその後，人間は再び主の教えから離れ，戒めをなおざりにして，現代の世界に至っている。

しかし，主は古代と同じように現代の民をも愛しておられるので，今，私たちを救おうと最後の努力をしておられる。昔とまったく同じ方法で，すなわち，人類に語る仲立ちとなる新しい予言者たちを立てて新しい啓示を与えられたのである。

あなたがたは，全能の神はもう御自分を現わされない，もう啓示は必要ない，聖書だけで充分だと教わっている，と言うかもしれない。

確かに過去何世紀もの間啓示はやんでいた。地上には使徒もいなければ予言者もいなかった，それは遺憾ながら真実で，実に悲しいことである。

しかしながら，啓示がやんだのは，旧約の時代にたびたび啓示がやんだのとまったく同じ理由からであった。イザヤはそのことを，こう説明した。

「見よ，主の手が短くて，救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞き得ないのでもない。ただ，あなたがたの不義があなたがたと，あなたがたの神との間を隔てたのだ。またあなたがたの罪が主の顔をおおったために，お聞きにならないのだ。」（イザヤ59：１―２）

ところが，末日には邪悪がはびこるが，今話しているこの新しい啓示がもたらされると，聖典に書かれている。天使も再び地上を訪れて，迷う人類に神の指示を与えるという。

信じ難いことだろうか。聖書を信じない人たちにはそうであろう。

私たち末日聖徒は，その新しい光が来たと宣言している。神は偉大な新しい啓示を与えられた。新しい使徒と予言者を立てて，ペテロやパウロのように国々の間で働く者とされた。私たちはその使徒と予言者である。私たちは現代に神から召された代表者である。

そのようなことはありえないと，大勢の人が言うであろう。

しかし，これは確かなことである。成就された事実である。また，聖書の予言の直接の成就である。

ある人は，ロッキー山脈の山奥の小さな宗派に神が現われるはずがないと言うかもしれない。また他の人は，末日聖徒は変わった宗教観を持つ民であって，検討してみるまでもないと言うかもしれない。

だが，私たちはロッキー山中に孤立した小さな民ではない。今や名だたるキリスト教宗派の多くをしのぐ人数を擁して，世界中に広まり，着実に発展している。

また，私たちは風変わりな思想を持つ宗教の極端論者ではない。私たちは現実主義者である。今まで末日聖徒が世の中になしてきた貢献が，宗教の不満分子に果たしてできることであろうか。

私たちは教会員が公民として多大の貢献をし，法を守る知性ある進取的な民であることは，私たちをよく知る人がみな認めるところである。

私たちは神の栄光も人の栄光も英知であることを信じて，教育を重視している。ちなみに教会は大科学者や発明者を生んでいる。今，大会の模様を映し出しているテレビジョンが，モルモンの科学者，フィロ・ファンスワース博士の発明の成果であることを御存じだろうか。

また，皆さんはステレオ音楽を楽しむことがおありだろうが，その立体音響が，これもモルモンの科学者，ハーベイ・フレッチャー博士の研究の賜である。

合衆国宇宙計画の幹部の数人はこの教会の会員であり，現在訓練中の宇宙飛行士にも末日聖徒がひとりいる。アメリカの最近の宇宙旅行で月に行ってきた人の中に，ソルトレーク・シティーの学校の卒業生がいる。

合衆国政府の閣僚となった末日聖徒があり，他国にも政府高官を務める末日聖徒がいる。

国際ライオンズクラブのような世界有数のクラブ組織を管理する末日聖徒も何人かいて，国際ロータリークラブの会長として世界中の会員たちの尊敬を集めていた人が，モルモンの使徒だったこともある。

末日聖徒の文化はよく知られている。教会の音楽はいろいろの演奏家によって，世界各地で演奏され，ソルトレーク・タバナクル聖歌隊の歌は毎週，国の内外で数百万の人々の耳に届いている。

また，アメリカ銀行家協会や全米工業者協会などの重要な金融，商業組織の会長をつとめる末日聖徒も数名いる。合衆国議会には各州から大勢の末日聖徒が集まっている。

軍隊で高位についている教会員もいる。最近，私はそのような3人の人たちと夕食を共にしたが，ふたりの代将とひとりの少佐はみな忠実な末日聖徒であった。

ここで女性解放に言及すれば，モルモンの女性は各地の女性に先駆けて選挙権を得たことを知っていただきたい。女性に選挙権が与えられたのは，今から102年前のブリガム・ヤングの時代であった。

教会の女性の組織は50万人近い会員を持ち，女性と子供の地位向上を目指して，世界63カ国で運営されている。この組織の会長であるベル・S・スパッフォード夫人は，最近まで合衆国婦人会議の会長をつとめた。彼女はまた，世界婦人会議の合衆国代表でもあった。そして，同会議において重要な役割を果たした。

教会には若い女性や十代の少女たちの組織もあり，40万にのぼる女性たちの向上のために活動しているが，会長のフローレンス・S・ジェイコブセン夫人も世界婦人会議の合衆国代表であった。

児童福祉の進歩をはかるホワイトハウスの会議には，教会員男女が過去も現在も重責をになって働いている。

末日聖徒は国際ボーイスカウト活動の指導層にもいる。数週間前に合衆国600万スカウトを代表して，ニクソン大統領に1972年のボーイスカウト名誉会長の会員証を贈呈したのは，モルモンのイーグルスカウトであった。

宗教の極端論者がこのような実績を残すことができるだろうか。教会員の男女は，いかなる意味でも主情主義に流されはしない。彼らは地に足をつけて調和のとれた，実際的な良識ある民である。

私たちは心の底から，神が現代に御自分について改めて啓示されて，私たちがその教えの保管人であることを厳粛に宣言する。

キリストの福音そのままが，そのままの姿でこの地上に回復された。福音は，今ここにある。福音を管理し，実施する神の権威もまた，私たちの時代に天から回復された。この回復された福音は，親子の間の罪やいさかいをやめさせることができる。

不品行や放蕩や酒びたりをやめさせることができる。

離婚や家庭の崩壊を食い止めることができる。

この福音の教えに従って生活すれば，今自分を苦しめている不幸をすべていやすことができる。

福音はどれも実際的である。良い結果を生むものである。

自分たちの状態を見て，神と神が近代に回復された福音に頼る以外に，この世の幸福と平和は得られないと考えたのは，すでに遠い過去のことである。

私たちは，神が生きておられることを証する。私たちは神の力によって正しく任命された神のしもべであること，現代の予言の力によって神が全人類に告げるみ言葉を説くようにと，天から委任された者であることを証する。

私たちは皆さんにぜひともお願いする。偏見によって真理を見る目をふさがないでいただきたい。神から新たに与えられたこの啓示に，心を開きこの啓示を研究し，その原則を守っていただきたい，と。これが本当の人生の生き方であり，神御自身と繰り返し訪れた天使たちによって地上に再びもたらされた救いであることを，私たちは証する。この証を主イエス・キリストの聖なるみ名によって申し上げる。アーメン。

忠実な聖徒の社会生活の標準



十二使徒評議員会会員

エズラ・タフト・ベンソン

会場あるいはラジオ，テレビでお聞きの愛する兄弟姉妹，私たちは皆同じ御父の霊の子供たちで兄弟姉妹であるが，私はここで回復されたイエス・キリスト教会が設立されて142回目の記念日に感謝しへりくだって皆様の前に立つ次第である。私は教会の総大会が大好きである。もっともこの壇上に立つことは抜きにして。とは言っても，この最大のみ業の証を全地に宣べる機会は私の喜びである。

昨年の秋，私は世界宗教者会議の議長であるバロン・ボン・ブロムバーグ氏の招きを受け，クロス大王によるペルシャ帝国建国の2500回記念式典に，教会を代表してペルシャ国王の賓客として出席した。招きをお受けするようにという大管長会の勧めで，私は10月大会が終わるとすぐその足で，27名の世界の宗教家代表者と50名ほどの君主とその他の名士たちに加わり，イランの盛大な式典に出席した。

クロス王は紀元前500年以上昔の人で，歴代志下やエズラ記の旧約聖書の予言に登場し，またエゼキエル，イザヤ，ダニエルなどの予言者たちが語っている人物である。聖書には，「主は……ペルシャ王クロスの霊を感動されたので」(歴代下36：22) と述べられている。クロス王は捕虜であったヘブル人に政治権や社会権を与え，エルサレム帰還を許可し，エホバの神殿の再建を命じた。

パーレー・P・プラットは予言者ジョセフ・スミスを評して，「クロス王の豪胆と勇気と，克己，忍耐，度量を具えている」と語った。(*Autobiography of Parley Parker Pratt*「パーレー・パーカー・プラットの自叙伝」p. 46)

ウイルフォード・ウッドラフ大管長もこう述べている。

「何度も考えることだが，古代に輩出した王たちの幾人かは，ある意味で原則や律法を実践することに現代の末日聖徒にも勝る熱意を持っていた。その例がクロス王である。………クロス王の誕生から死までをたどれば，知ってか知らずか，彼の動静は万事霊感によって動いたがごとくである。彼はまず寛大と徳の原則に従った。これによりあらゆるキリスト教国とキリスト教徒の王を容認し得たのである。……彼により多くの原則が確立されたが，私はその中の多くが様々な意味でイエス・キリストの福音を持つ者の注目に値すると考えている。」(*Journal of Discourses*「説教集」第22巻，p. 207)

私たちすべての父なる神は地上の人間，特に善良な人々を使ってご自分の目的を成就される。それは昔も，今も，そしてこれからも確かなことである。

恐らく主は，教会の外にあって助ける人々を必要としておられるのだろう。」十二使徒定員会の故オルソン・F・ホイットニー長老はこう語っている。「彼らは補佐する立場にあり，他のどの場所よりも主が置かれたその場にあって，この目的のために尽くすことができる。……そのため，群れに入って真理の証を受ける者があり，改宗しないでいる人がある。……福音の美しさも輝きも，賢明な目的があって彼らの目からは束の間閉ざされる。主はしかるべき時に彼らの目を開かれるであろう。神は偉大な奇しきみ業を成就するために，ひとつではない複数の民を使っておられる。末日聖徒だけですべてのことができるわけではない。ひとつの民にはあまりに広大，あまりに大事業過ぎる。……私たちは異邦人と争いはしない。彼らはある意味で私たちの共同者である。」(「大会報告」1928年4月，p. 59)

これは，困窮時に聖徒たちの真の

友であったトーマス・L・ケイン大佐についてあてはまるであろう。また，ジョセフ・スミス銃殺の命を上官から受けた時に，「それは殺人です。命令には従えません。……あなたがもしも彼らを殺したなら，私は法廷であなたにその責任があると言明します。神よ，助けを給え」（ジョセフ・フィールディング・スミス，*Essentials in Church History*「教会歴史枠」p. 241）と言ったドニファン将軍についても，同様である。

私たちは，評判を気にする心や党派心や個人の感情を超越して，正しい原則に情熱を注ぐこれらの友を尊敬する。

またこれと同じ理由で，この国の建国の父たちを尊敬する。神は使命を遂げる愛国者たちを興して，彼らを「賢き人々」（教義と聖約101：80）と呼ばれた。大管長会は数年前に，「建国の父の志を踏襲して憲法に真実従う」候補者を政治家に選ぶようにという指針を発表して，建国者たちの知恵を再確認した。

主は，「この世の子らはその時代に対しては，光の子らよりも利口である」（ルカ16：8）と言われた。聡明な建国者たちは，大半の私たち以上によく，教会の聖典の言葉を理解していたようである。「およそ殆んどすべての人間は，少し許りの権威を得たりと思うや，忽ち正しからざる支配を始めんとする生れつきの性癖あり。」（教義と聖約121：39）

建国者たちはこれを防ぐため，選出された政治家たちを原則で規制することが必要なことを知っていた。トーマス・ジェファーソンは「権力に関して様々な論議がかもされているが人を信頼することについて云々するのはやめ，悪影響を及ぼさないように憲法のかせで規制しようではないか。」と言った。

これら愛国の建国者たちは，主が憲法の中に定められた制約が祝福となることを，おおかたの私たち以上によく知っていたようでもある。主は，「人間の法律に関して何事にてもこれより過不及あらばそは悪より出ずるなり」（教義と聖約98：7）と言っておられるのである。

建国者たちは神に信頼し，人の腕ではなく，その憲法に信頼した。ニーファイはこのように言っている。「おお主よ，われ今日まで主を信じて頼りしが，これより後いつまでも主を信じて頼り奉る。われは……人間の腕に依り頼むことなし。まことに人に信頼を置き，人間を依り頼む腕と為す者は禍なるかな。」（IIニーファイ4：34）

そのことを，J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は雄弁に語っている。

「神はこの自由の国に，政治に対する私たちの忠節が，たとえ大きかろうが小さかろうが，個人つまり個々の官吏に向けられることのないようにされた。神の御計画では，私たちの忠誠，つまり私たちが合衆国の住民として負う忠誠は，ひたすら神御自身が制定された霊感の憲法に向けられる。政治に参画する者の就任の宣誓は憲法に対してである。人の持つ官職に対して私たちの負うべき忠誠は確かにあるが，それですら私たちはただ市民として負っているのであり，その人個人に対しては何ら忠誠を負うことはない。世界の多くの国々で，忠節が個人に向けられている。忠誠は憲法に捧げるという原則こそ，私たちの自由の基本である。それこそ，この「自由の国」を他の諸国と区別する最大の原則のひとつである。」（*Improvement Era*「インプルーブメント・エラ」1940年7月号，p. 444）

セオドア・ルーズベルト大統領はこう語った。「愛国心とは国を支えることである。個人が国を支持する度合いに厳密に従う以外，大統領やその他の公職者を支持するという意味ではない。……」

ルーズベルト大統領はこのようにも語った。「大統領が『国に仕える限り』という条件を付さずに『大統領を支持しよう』というかけ声に雷同する人は，『王は間違いを犯さず』と唱道したスチュアート王朝の狂信的な王党員と同じに，本質は柔弱である。自尊の心と知性ある自由の人間にそのような態度は取れない。」（セオドア・ルーズベルト*Works*「著作集」第21巻，p. 316，321）しかしながら私たちは末日聖徒として，社会の指導者たちのために祈り，正しいことをする人々を応援するべきである。

ハイラム・スミスは，「邪（よこしま）な人々に票を投じること，それは罪でもあろう」（「教会歴史記録」第6巻，p. 323）と言った。

予言者ジョセフ・スミスはこう述べている。「……合衆国のすべての民に，かの断固たるローマ人のように，候補者が公職者として約束を実行しないのを見たらその恥ずべきへつらい者の得意の鼻を折らしめよ……」（「教会歴史記録」第6巻，p. 207）

ジョセフとハイラムの信頼は人の腕ではなく，神と正しい永遠の原則に寄せられた。ジョセフ・スミスは，「私は合衆国憲法の地上最大の支持者である」（教会歴史記録」第6巻，p. 56）と言っている。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長の次の警告は実に時を得ている。「ここで言いたい。今こそ合衆国国民が，迫る危険から憲法を救わなければ，政府というものが本質的に変化してしまうとの認識に立って目を覚ます時である」。（大会報告1950年4月，p. 159）

大管長会から出された指針にも，

「どの政党であろうと，自由世界の直面している危機に目覚めた誠実，善良な候補者を支持するように」とある。(デゼレト・ニューズ　1964年11月2日)

幸いなことに，私たちはこのデビッド・O・マッケイ大管長の書簡やその他の教会指導者の書物の中に，当面する危険に立ち向かう手だてを得ている。

しかし，悪と闘って自由を得るための一番の手引き書というべきものは，モルモン経である。

ここで，聖徒たちにとって二番目に大切な社会生活の標準が出て来た。霊感されてできた憲法の次に来るものは，聖典である。

ジョセフ・スミスは，モルモン経を「私たちの宗教のかなめ石」，地上で「最も正確な」書物と言った。(「教会歴史記録」第6巻，p. 56) 地上で最も正確なこの書物には，民の自由を覆そうとはかる隠れた謀略者たちのために，2大アメリカ文明が没落したことが記されている。モロナイは，「私が今記録する民であるジェレド人はこの誓約と結社があったので亡びた。ニーファイの民もまたそうである」(イテル8：21) と言った。

さて，ニーファイは民を滅亡させた要因をいろいろ挙げることができただろうが，たったひとつ秘密結社を指摘していることに注意していただきたい。それは現在の教会が，平和と繁栄と神のみ業の伸展を脅かすものをたくさんあげることができるだろうが，その最大のものとして神の存在を否定するという陰謀を挙げているのと同じである。モルモン経にあるのは謀略の理論ではない。謀略の事実である。

モロナイは現代の私たちにこう告げた。「従ってこのような秘密結社があなたたちの間にできるのを見るときには，この結社のためにあなたたちが受ける境涯の恐ろしいことを思って自ら警めなくてはならない。これは主が仰せになる命令である……。」(イテル8：24)

モルモン経はさらに，「権力を奪い利益を得ようとして，このような秘密結社を助けて全国に拡がらせる国民は亡びる。……」(イテル8：22) と警告している。

この聖句は，悔い改めなければ絶対に回避できない事柄があると警告を発している。自由世界の国民である私たちが敵の悪事に，賛成の声を日増しに高くしているのは疑いもない事実だからである。神の存在を否定する陰謀は，法廷判決によって政府内に広がり，学校に延び，労働組合に居座り，防衛産業に，商船界にと，様々な場所に触手を伸ばす。私たちは国家として，悪い方向への多くの変革に手を貸している。

この教会は主の再降臨まで地上に存続すると私たちは確信しているが，果たしてどれほどの代価を払ってだろうか。初期の聖徒たちは，シオンはジャクソン郡に建つと信じていたが，彼らの不誠実が流血を呼び，引き延ばされる結果となったことをよく考えていただきたい。

クラーク副管長は，「私たちは自由を失うという危地に立っている。自由は一度失われると，それを取り戻すには血を流すしかない。一度失われると，私たちは教会を前進させるために，過去に経験したことがないほどの犠牲と迫害を耐え忍ばなければならなくなる。……………(「大会報告」1944年4月，p. 116) と語った。そしてまた，もしもこの陰謀が「入り込むと，恐らく猛烈な勢いで，政府のみならず私たちのこの教会でも指導し，導く人々の間にたくさんの空席ができるだろう」(「大会報告」1952年4月) と述べた。

さて，聖徒たちにとって第3番目の社会生活の標準は，予言者たちの，特に現在の地上にいる神の代弁者，生ける大管長の霊感による言葉である。あなたがたは自分の目を船長に向け，他のあらゆる権威者の言葉を，彼の霊感による言葉でもって判断しなさい。

ブリガム・ヤングが地域を見回っていたときに，ひとりの男が家を建てているのを見て，壁の厚さを2倍にしなさいとだけ言ったという話がある。その男はヤング大管長を予言者と信じ，自分の計画を変更して壁を2倍にした。そのすぐあとで町を洪水が襲い，大被害をもたらしたが，その男の家の壁は崩れなかった。屋根をふきながら，「感謝を神に捧げん，予言者の導き」と歌う彼の声が響いていたという。

ジョセフ・スミスは，「予言者は予言者として行動しているときだけ，予言者である」(「教会歴史記録」第5巻，p. 265) と教えた。

教会の指導者のだれかがあなたに，あなたはこれこれのことについて間違った意見を支持していると告げたとする。返すようにその指導者に逆らい，忠告を無視する人もいようが，私はみなさんに，忠実な聖徒たちの生活の4番目の標準にまず従うように勧めたい。その標準とは，聖霊のささやきを受けられるような生活をし，ささやきを聞いて，それに従うことである。

ブリガム・ヤングはこのように言った。「私は教会の民が指導者にあまりに頼り過ぎて，自分たちが神に導かれているかどうかを自分で神に尋ねなくなることを恐れている。……すべての男女が，神のみたまのささやきによって指導者が主の語られる道を歩んでいるかどうかを知るようにさせなさい。」(「説教集」第9巻，p. 150)

何年も前のことだが，ある忠実な教会員が教会の方針と思われる声明を聞いて，自分は良くない候補者を支持しているのではないかと心配した。彼は謙遜になってそのことを主に祈った。すると主のみたまによって自分の取るべき道が確信でき，その候補者を支持することをやめた。

この立派な兄弟は熱心な祈りによって，結局それが正しいとわかったのである。

私たちは，あらゆる人に，モルモン経を読んでそれが正しいかどうかを神に尋ねるように勧めたい。聖霊によってその真実なことがわかり，「聖霊の力によって一切の事の真実であるかどうかがあなたたちに解る」（モロナイ10：5）という約束は確かである。

私たちには常にみたまの導きが必要である。現代は欺瞞（きまん）の時代である。モルモン経の中でイザヤは，「ああわが民よ，汝らを導く者たちは汝らを誤たせ，汝らの道を破る」（IIニーファイ13：12）と言っている。教会内部にあってさえ，「貪欲な狼が私たち教会員の間に，私たちの中にいる。彼らは特に，神権という衣をまとって，羊の毛皮を装っている」（J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長「大会報告」1949年4月，p. 163）と警告されている。

私たちが愚かでいてだまされたら，主は私たちに責任を問われる。主はこう言われた。「賢くして真理を受け入れ聖霊の導きに従い騙されざりし者は，誠にわれ汝らに告ぐ，彼らは伐られて火に投げ入れらるることなくその日に堪うるべし。」（教義と聖約45：57）

そのための，忠実な聖徒たちにとっての社会生活の4つの標準は，第1，賢き人々の手により主が制定された憲法，第2，聖典，特にモルモン経，第3，霊感に基づいた予言者の勧告，第4，聖霊の導き，である。

私たちがこれらの標準を用いるように，またそれによって自分や家族や社会，ひいては国家，世界までを祝福するよう，神が私たちをみな恵みたもうように，へりくだって祈るものである。この末日の偉大なみ業が真実であることを証しつつ。イエス・キリストのみ名によって，アーメン。

あなたの行く先は

十二使徒評議員会会員

マービン・J・アシュトン



数週間前，英国で汽車旅行をする機会があった。天気に恵まれ，時間の余裕もあって，至極快適な旅だった。

マンチェスターからレスターへ向かっていたある日，私は1時間半ほど読書をしてから本を閉じて窓の外に目を移した。駅はまだ遠いのだろうかなどと考えていた。それから数分して客室のドアが開き，車掌が入ってきた。彼は「どちらへいらっしゃいますか？」と言って挨拶した。私は到着や出発や駅のことを気にしていたので，「レスターに用があるんです」と返事した。

車掌は「10分ほどでレスターに到着です」と教えてくれた。そして切符にハサミを入れ，隣りに移って行った。

彼が行ってから，私は彼の言葉を考えてみた。「どちらへいらっしゃいますか？」「10分ほどで到着です。」彼は，汽車が止まるたびに何百人という人が，自分の行く先に到着して降りて行くことを当然と考えているらしかった。彼は何年も乗客にそう教えてきたのであろう。

ところが私はレスターには四半期ステーキ部大会で2日間滞在するものの，そこが私の行く先ではなかった。英国のどの駅でもない。各地で用を足しながらの旅行だった。

この汽車旅行をしてきて，これまでもよく考えてきたことであったが，大勢の人が自分の人生の旅で目的地や到着駅や停留所，アナウンスの声，一時停車や指定の駅を混同していると思うのである。私には，もう到着したと考えて迷子になっている人がいるように思われる。ここで私の考えるところを御紹介し，「あなたの行く先は？」という問題の範囲内で，幾つか質問を提起したいと思う。

あなたが神殿に参入したとして，そこが到着地だろうか。神殿結婚が目的地だろうか。長年若者たちと接してきて何百人もの人が，「神殿に行きたいです。神殿結婚が目標です」と言うのを聞いてきた。

神殿に参入する準備をすること自体は目標として立派なことであり，努力の対象としても大いに価値のあることである。その永遠の目的は胸に刻んでおく必要がある。しかしながら，私たちは神殿の祝福にあずかったとしてもそれが最終の到着地ではない。私たちの人生には，神殿結婚というような高い理想や目標を，手段でなく目的にしてしまう危険がままある。私たちが到着という名の停滞を避けるには，永遠の視野の中で優先順位を正しく保っておかなければならない。

「移ろいゆく今という時を捕らえ，それが永遠のしるしかどうかを吟味することは最も高尚な仕事である」と言ったのは，確かルイス・J・ヘイである。日の光栄の結婚の後，昇栄を得るには，絶えざる献身と義の生活が要求される。それは到着地ではなく，先へと続く道程である。

あなたが伝道の召しを受けた時にそこが到着地だろうか。伝道を立派に終えた時，そこが目的地だろうか。立派に伝道を終えることは人生の旅路のひとつの大きな一里塚だと声を大きくして言えるようでありたい。それは，さらに大きな奉仕と力に向かうとりでであり，永遠の幸福を目指して前進するその足をしっかりと守るもの，清らかな信心の喜びを得させるものとなるはずである。

「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは，困っている孤児や，やもめを見舞い，自らは世の汚れに染まずに，身を清く保つことにほかならない。」（ヤコブ1：27）

残されたあと半年の忙しい伝道期間に苦労した宣教師のことが心に浮かぶ。彼は伝道部長補佐をしたあと

で，先輩同僚としてある支部で働く責任を受けた。彼は，「伝道部長の補佐という大きな責任を受けた時に，目標を達成した気でいたのです」と言った。彼はもう到着地に着いたと考えたために，一時のこととはいえ，やる気を失ったのであった。

宣教師の一生で，栄えある解任が新たな初まりのときであると知る日は，いかに大切であろうか。愛する宣教師たち，かつて宣教師であった人と今宣教師である人たちへ，「私は2年間を教会に捧げた」と自認するおごりの危険には決して陥らないように，私たちは心から祈っている。帰還宣教師が前方高く人生の行く手を見上げるならば，そこに至る正しい道を歩むことができよう。己れを滅して神と隣人に奉仕した上に，なお真理の道を歩み，これは今もその途上にあると思うのだが，永遠進歩の備えをするならば，伝道の2年間は宣教師の一生の最も幸せな歳月となるのである。

「わたしの子供たちが真理のうちを歩いていることを聞く以上に，大きい喜びはない。」(IIIヨハネ4)

喜びは，予期した到着地ではなく，真理の内を歩み，旅する中にこそあると，声を大にしたい。聖霊から啓示されてイエス・キリストの福音が真実だという証を得たとき，そこが到着地だろうか。証を得て，もう目的地に着いたように考えている人たちがいるのは残念なことである。証のその知識と確信を熱心な絶えざる奉仕に生かさないとすれば，それは人生にとって悲しむべきことである。証は分かち与えてこそ成長するものである。証を持つ者は，この主のみ業を世に証する義務を負う。証は到着地ではない。実践によって維持される財産である。

バプテスマを受けたとき，長老になったとき，監督に，ステーキ部長に，扶助協会役員，七十人，あるいは使徒になったとき，果たしてそこが到着地だろうか。働きと奉仕が求められているこの時代にこの問いに対して私たちがこぞって「否！」の声を高らかに上げることを願っている。サタンとその軍勢が今ほど強く団結しているときはない。サタンは狡猾であり，かなりの成果をあげている。その最も機略にたけた有効な武器のひとつが，私たちに「もう達成した」，「目的地に着いた」，「ひと休みできる」，「もうこれ以上言うことはない」，「ここにいれば安心だ」，「誘惑も来ない」，「ここまで来れば大したものさ」と思い込ませることである。

「かくの如く，サタンは甘言を語りて彼らを導きて，ついに彼らを地獄に引きずり落し，かくして彼らが己がわなに落入りて捕えらるるようになすなり。」(教義と聖約10：26—27)

私が最近十二使徒評議員に召されてから，数年前に亡くなった父の友人たちから「お父さんはあなたの召しを知って喜んでおいででしょう」という言葉を聞くが，それを聞いて私はよく思う。「私は父をよく知っているから，それよりもきっと，『ここで終わりじゃないぞ。目的地に着いたわけではないぞ。本当の試しはこれからだ。大きな信頼に応える生活をするようにがんばりなさい』と言うだろう」と。

きょう，この末日聖徒イエス・キリスト教会の愛する仲間たちの支持と信頼を感謝したい。私のたったひとつの願いは主の道を立派に歩むことであると，はっきり申し上げる。

現在，まことの道を勇気と目的を持って歩んでいるひとりの友人のことをお話したい。そのデニス・ディーン長老がアリゾナ伝道部に到着した時，私は伝道部を訪問していた。最初の集会に彼がやって来た。礼拝堂の通路を車椅子で進んで来る彼を見た出席者は全員言い知れぬ思いに駆られた。彼の表情は謙遜な確信に満ちていた。

同僚たちはすぐに，彼がなぜふさわしいとされてフルタイムの伝道に出ることができたか，その訳を知った。その日の彼の証は今でも覚えている。伝道が彼の生涯の希望と願いのひとつであった。彼はこのように言った。「皆さんの信頼に応えるために最善を尽くします。気の毒だと思わないで下さい。主に助けていただいて自分でできると思っていることを，私が自分でちゃんとできるように，手伝って下さるだけで充分です」。

彼の話に満場，声もなかった。その日，会のあとで，彼の新しい同僚になった人が興奮した面持ちで私のところへやって来て，こう質問した。「車椅子から動けない長老の良い同僚になるには，あなたでしたらどうしますか。」その日しばらくの時間をディーン長老と過ごしたあとで私はこう返事した。「彼に合わせるようにすればそれで大丈夫です。これから本当の試練を受けるのはあなた自身ですよ。彼ではなくて。」

ディーン長老は，素晴らしい伝道部長や同僚の宣教師たちの愛と友情もあって，2年の間に監督長老を務め，大勢の人に福音の教えを伝えて48人をバプテスマに導いた。現在ディーン兄弟はブリガム・ヤング大学で勉学を続けている。BYU第38ワード部のホームティーチャーまた日曜学校教師である。彼は先日私の事務所に来て歓談していったが，私は改めて，類まれな生きた模範に感銘を受けた次第である。

計画，目的地，目標，到着，実行と並べて考えて行くと，もうふたりの友人から学ぶことがあると思う。私の友人には一風変わった人たちがいる。珍しい経験をした人たちがい

る。先週の火曜日の夜，帰宅しようとして机を整頓していると電話が鳴った。「アシュトン兄弟，今あなたと会う許可が刑務所から取れました。すぐ行きますから待っていてくれますか」という話だった。

フランクがやってきて，話し合った。「あと1週間で出所だけれど，どんな計画をしていますか。何をするつもりですか。どんな目標を立てましたか」という質問に，彼はこう答えた。「アパートも見つけたし，きちんとした仕事もありました。愛する妻がいるし，勉強を続けます。教会の責任もあるし，しなければならないことは沢山ありますす。32歳だけれど神権は教師なので早く長老になりたいと思っています。」

彼は打ち溶けた話の最後に，私にこう言った。「アシュトン兄弟，もし私に準備ができたら，数カ月の内にでも一緒に神殿に入って，私たちの結婚の司式をして下さいませんか。」

この話を，同じ環境の別の人との会話に引き比べてみたい。何カ月か前に私は彼と面会して話をした。思い返してみると，話す人がいなかったので自分が話そうと思ったわけだった。

「ここを出たら何をしようと思っていますか」と聞くと，彼は「出さえすりゃいいんだ」とどなり返した。「臭い飯を食っていて，ああ，外に出たいよ」と。計画も目標も目的も準備もない。願いはそこを出ることだけで，私は彼の様子から，どのようにして出所して行くかは考えていないのではないかと心配だった。

きょう皆さんに心から証したい。立派に伝道を終えても，日の光栄の結婚をしても，貴重な証を得ても，教会で大きな責任を受けても，まことの末日聖徒にとっては，それらは目的地ではない。永遠進歩の大きな手助けにはなるがそれは私をもあなたがたをも神の王国に救ってはくれない。忠実な末日聖徒の生活こそが，救いを得させるものである。

「もし汝善を行わんと欲し誠に終りまで変ることなく忠信ならば，神の王国に救わるべし。こは，神の賜のうち最大なるものなり。およそ，救いの賜に勝る賜はあらざればなり。」(教義と聖約6：13)

旅路を行くとき，汽車の旅であれ人生の旅であれ，駅あり発車ありアナウンスあり予定あり，さらにはわき道に誘われる機会もあることをしっかり心に留めようではないか。救い主の道に従う人は賢明である。主のもとに来て主に従う人は安全と喜びを得る。神は永遠であることを，きょう皆様に証したい。私たちも永遠である。また神は，私たちをひとりで旅させようとはされなかった。

あなたの行く先はどこだろうか。行く先は永遠の生命であること，御父の王国での昇栄であることを皆が認識するように，天父の助けをへりくだって祈るものである。終わりまで忠実であるならば，このイエス・キリストの福音によって救いの賜が得られることを証したい。これらのことをイエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



求む，仕上げ職人

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン

さんさんと陽光の降り注ぐお昼どきには，ソルトレーク・シティーの街はひとときを高層ビルから開放されてにぎやかなウィンドーショッピングを楽しむ男女があふれる。私もときどきその仲間入りをする。

ある水曜日のこと，私は名のある家具店の上品なショーウィンドーの前で立ち止まった。私の興味を引いたのは美しいデザインのソファーでもなければ，その隣りの座り心地よさそうな椅子でもなければ，天井につるされた豪華なシャンデリアでもなかった。目を引いたのは，ウィンドーの右隅に置かれた小さな求人広告だった。そこには簡単に，「求む，仕上げ職人」と書かれていた。

その店は工場で生産している高価な家具類を，最後に紙やすりをかけたり磨いたりニス塗りをしたりする技術者を必要としていたのである。「求む，仕上げ職人」この言葉は，また忙しい仕事に戻る私の心にずっと残っていた。

仕事でも人生でも，仕上げ職人と言うべき人たちは常に必要である。彼らの存在は地味だが，働く場は多く，貢献は大きい。

有史以来，人生行路を歩む人々はみな，基本的な疑問を抱いている。自分はつまずくだろうか，無事終えるだろうかと。その答え次第で，この世と来るべき永遠の世で喜びと幸せの祝福が私たちを待っている。

この重大な決定をするのに，私たちを導いてくれるものがある。聖書にはそのような話や教えがあって，気を付けて学びさえすれば大いに益をもたらし，灯台の光となって私たちの考えを導き，行動に影響を及ぼしてくれる。それを読みながら，私たちはつまずく人に同情し，完遂する人に感嘆する。

使徒パウロは人生を競走になぞらえてこう言った。「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は，みな走りはするが，賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも，賞を得るように走りなさい」（Ⅰコリント9：24）

また耳を傾ける人々には，パウロのこの言葉に先立ってエルサレムの王ダビデの息子の伝道者の教えが響いてくる。「……必ずしも速い者が競争に勝つのではなく，強い者が戦いに勝つのでもない。……」（伝道9：11）

ダビデの息子は自分の父親のことを語ったのだろうか。どの点から見ても，イスラエル最大の王はダビデである。サムエルから油注がれたダビデは主によみせられた。

初めて手にした勝利の偉業で，ダビデは人気の絶頂に到達した。ダビデが勝利を収めるたびに，女性たちは新しい歌で彼を祝った。「サウルは千を撃ち殺し，ダビデは万を撃ち殺した。」（サムエル上18：7）民はダビデを賛美して叫んだ。「われわれは，あなたの骨肉です。」（サムエル下5：1）

彼は権力を手に入れた。そして平安を失った。

ある晩，ダビデは王宮の屋上を歩いていて，ひとりの女性が体を洗っているのを見た。女性は非常に美しかった。

「ダビデは人をつかわしてその女のことを探らせたが，ある人は言った，『これは……ヘテびとウリヤの妻バテシバではありませんか』そこでダビデは使者をつかわして，その女を連れてきた。……」（サムエル下11：3－4）

ダビデは姦淫の大罪のあとで，また大きな罪を犯した。「……『あなたがたはウリヤを激しい戦いの最前線に出し，彼の後から退いて，彼を討死させよ』……」（サムエル下11：15）肉欲と権力に負けたのである。

ダビデはイスラエルの主なる神から咎めを受けた。「……あなたはつるぎをもってヘテびとウリヤを殺し，

その妻をとって自分の妻とした。……つるぎはいつまでもあなたの家を離れないであろう。」（サムエル下12：9－10）

ダビデは競争の初めはよかったが，やがてつまずいてコースを走り終えることに失敗した。

大きな罪だけが私たちをつまずかせるなどと思わないように，救い主のところへやってきて質問したあの金持の青年の話を考えてみよう。彼はこう尋ねた。『先生，永遠の生命を得るためには，どんなよいことをしたらいいでしょうか。』 イエスは言われた，『……もし命に入りたいと思うなら，いましめを守りなさい』。彼は言った，『どのいましめですか』。」

イエスが戒めを枚挙されたのに対して，「この青年はイエスに言った，『それはみな守ってきました。ほかに何が足りないのでしょう』。イエスは彼に言われた，『もしあなたが完全になりたいと思うなら，帰ってあなたの持ち物を売り払い，貧しい人々に施しなさい。……そして，わたしに従ってきなさい』。この言葉を聞いて，青年は悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。」（マタイ19：16-18，20-22）

この青年は天の宝よりも地上の楽しみを優先した。この世の物を捨てて永遠の物を買おうとはしなかった。彼はつまずいたのである。仕上げに失敗したのである。

イスカリオテのユダもそうであった。彼は主の使徒として自分のつとめを始めたが，裏切者として終わった。ユダは銀貨30枚で自分を売った。しかしやがては罪の恐ろしさを悟って，自分をそそのかした者たちに，「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして，罪を犯しました」と叫んだ。（マタイ27：4）

後悔は自暴自棄となり，自暴自棄は彼を狂気に追いやって，狂気は自殺に終わった。ユダはキリストを裏切る事に成功したが，神から召された使徒職の仕上げに失敗した。

名誉をかなぐり捨てての権力欲，金銭欲は，人生舞台の失敗の先頭に立っている。立派な人物が偽ものの魅力にとりつかれてつまずき，転び，人生という大レースの完走者を待つ勝利の王冠を取り逃がしている。

完走できない人々について，ジョン・グリンリーフ・ウィッターの言葉は実に当を得ている。

「……舌によりペンによる言葉のなべて悲しきもののうち最も悲しきはこれ，『もしもこうであったら』。」（「モード・マラー」より）

ここで，挫折した人たちの人生から転じて，完走し，賞を受けた人々のことを少し考えてみよう。

ウヅの地にヨブという名前の男が住んでいた。彼は完全で，正しく，神を恐れ，悪から遠ざかっていた。敬虔な振る舞いをもって知られ，将来あるヨブが，それまで人が出会ったことのない試練に遭うことになった。

ヨブは所有物を奪われ，友人からあざけられ，苦難を被り，妻からも悪への誘惑を受けながら，気高い心の奥底からこう叫んだ。「見よ，今でもわたしの証人は天にある。わたしのために保証してくれる者は高い所にある。」（ヨブ16：19）「わたしは知る，わたしをあがなう者は生きておられる，……」（ヨブ19：25）

ヨブはひるまなかった。彼は仕上げ職人になった。

この世の業を終えられた主に続いて，自分の証を捨てるよりは命を捨てようという人たちが大勢いた。使徒パウロもそのひとりであった。エルサレムへ行くことがパウロの運命を決することとなった。彼はエルサレムを通って，新しい世界の形成に貢献した。

パウロは民を動かし，励まし，統率する能力に恵まれていた人物で，罪人から聖徒への雄々しい転換をした類ない模範である。パウロは落胆や心痛や試みに囲まれながらも，この世の務めを終えるにあたってこう言うことができた。「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき，走るべき行程を走りつくし，信仰を守りとおした。」（IIテモテ4：7）パウロはヨブと同じく完走者であった。

パウロは私たちに，「……罪とをかなぐり捨てて，わたしたちの参加すべき競争を，耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり，またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ……」（ヘブル12：1－2）と勧めている。

イエスは悪魔に試みられたが，それを耐えられた。憎まれても愛し，裏切られても勝利を得た。イエスは栄光の雲や火の車に乗ってでなく，凄惨な十字架に苦痛の腕を広げてこの世を去って行かれた。イエスのみ業は簡単な次の言葉に集約されている。

イエスは御父にこう祈られた。「父よ，時がきました。……わたしは，わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて，地上であなたの栄光をあらわしました。」（ヨハネ17：1，4）「……わたしの霊をみ手にゆだねます。」（ルカ23：46）

この世の命は尽きた。そして不死不滅の命が始まった。

時は移り，時代は変わったが，完走者の特徴は依然として残っている。それに注目しなさい。これは成功を遂げるために是非とも必要なものである。

1．ビジョンの特徴　歴史の扉は小さなちょうつがいでひっくり返えると言われているが，私たちの人生も同じである。私たちは絶えず小さな決定をしていて，その結果が人生の成功や失敗を決める。そこで，決断の時がやって来る前に，あらかじめ予想し，進路を定め，少なくとも幾

らかは備えをしていることが大事である。本物の仕上げ職人は自分の目標を把握する能力を具えている。

2. 努力の特徴　努力を伴わないビジョンは白昼夢であり，ビジョンが伴わない努力は骨折り損である。ビジョンと努力が一緒になってこそ賞は得られる。

必要なのは，人生の障害に力を落としているときに，それでも努力する頑張りである。

「身につくまでは意識して頑張りなさい。

初心者は大勢だが，完了者はわずかである。名誉も力も地位も賞賛も，最後まで頑張る人に与えられるのである。

身につくまでは頑張り続けなさい。

力を注ぎ，汗を流し，それに笑って。

力と汗と笑いから

しばしののち，人生の勝利が来る。」

(作者不詳)

3. 信仰の特徴　　昔，詩篇作者は言った。「主に寄り頼むは人にたよるよりも良い。主に寄り頼むはもろもろの君にたよるよりも良い。」(詩篇118：8－9) 信仰と疑いは同時に同じ心には存在しないこと，一方がもう一方を追放することを知りなさい。

4. 徳の特徴　　「……絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。……」(教義と聖約121：45) 主のこの勧告は，競走に参加する私たちに持続の力を与えてくれる。

5. 勇気の特徴　　いさぎよく死ぬ決意ではなく，立派に生きる決意として勇気を考えるときに，勇気は魅力ある生きた徳となる。勇気を持ちなさい。

「見果てぬ夢を見，

及ばぬ相手と闘い，

耐えがたい悲しみをにない，

勇者のしりぞく所を走る。

不当な悪を正し，

清さと純潔をはるか遠くから愛し，

かよわい腕で努力をし，

及ばぬ星に手を伸べる。」

(ジョー・タリオン *The immpossible Dream*「見果てぬ夢」1965年サムフオックス出版，ニューヨーク)

そうして，あなたは完走者となるのである。

6. 祈りの特徴　　人生の荷が重くなったとき，信仰が試されるとき，苦しみや悲しみや絶望で希望の光が燃え尽きそうになるとき，天父との交わりが平安をもたらしてくれる。

これまであげた本物の仕上げ職人の特徴は，人生を旅する私たちの足もとを照らしてくれる灯である。私たちを前進させ，上に引き上げてくださるのは，「……わたしに従ってきなさい」(ルカ18：22) と言われた御方である。

この御方の助けはひそやかに来ることが多いが，ときに劇的な影響をもたらす。私も何年か前にそのような経験をした。伝道部長となって，素晴らしい青年たち，主から召された宣教師を導く恵みにあずかったときのことである。

問題を持つ人たちがおり，励ましの必要な人たちはいたが，ひとりの宣教師がすっかり絶望して私のところへやってきた。彼は半ばにして伝道をやめようと決心していた。かばんを詰めて，帰りの切符まで買っていた。私に別れの挨拶をしに立ち寄ったのだった。私たちは話し合い，言いぶんを聞き，そして祈った。しかし，伝道をやめようという決心の本当の理由はまだわからなかった。

私たちが静かな部屋の中で祈り終えて立ち上がると，宣教師はすすり泣きを始めた。そしてこぶしを握り，たくましい右腕を振り上げて，突然に叫んだ。「私の問題なんです。学生時代はこの力でフットボールや陸上で賞を得てきました。でも私の頭はきたえられなかった。モンソン伝道部長，学生時代の成績が恥ずかしいです。どうにかして字を読むことは読めますが，4年生位の実力です。モルモン経も読めません。それがどうして，内容を理解して真理を人に教えられると思いますか。」

部屋の静寂は，ノックなしにドアをあけた9歳の息子によって破られ，彼はびっくりして言いわけをした。「ごめんなさい。この本をあの棚に返したかっただけなんです。」

息子は本を私に手渡した。ディータ・P・ニーレー博士の「子供のためのモルモン経物語」という本であった。その本のはしがきをめくると，そこにこうあった。「本書は4年生程度の国語力に相当して書かれてある。」真心からの祈りが劇的に答えられたのであった。

愛する宣教師はその本を読むというチャレンジを引き受けた。彼は泣き笑いをしながら「わかるものを読むのならいいんです」と言った。希望の光が絶望の雲を吹き払い，彼は伝道を立派に完了した。彼は仕上げ職人になった。

私は，またこの町のあの家具店の前を通り，もう一度大きなショーウィンドーの片隅の小さな広告を見ることがあるだろう。「求む，仕上げ職人」という言葉の真実の意味を心に深く刻みつけたいと思う。

私たちのだれもが人生の完成者となって，日の栄の王国で天父と共に永遠の生命にあずかるという尊い賞を受けられるように，心から祈っている。神は生きておられ，これが神のみ業であることを証し，各々がまことの完成者，神の御子の模範に倣うよう，イエス・キリストのみ名により，願う次第である。アーメン。

教会はあなたのために何をなすか



十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

私は何人かに聞いていただけることを希望しつつ，教会と離れてしまった2種類の人々に対してお話をしたいと思う。つまり，教会員であることはあるがつながりの絶えている人たち，それと，懐疑的で心が固く，すみをつつくような質問をして独善的な解答を求めるような人たちである。

ここで私は，「教会はあなたのために何をなすか」という質問に対して，私の答えを述べたい。

1. 世の中で最も素晴らしい兄弟愛に導いてくれる。

誰もが仲間との連帯に飢えている。この欲求は，いろいろな奉仕組織や同業者組合，社交グループなどの組織である程度は満たされる。これらは確かに良いものだが，しかし，神権者の組織に匹敵するものはひとつとしてない。

ここでは，人生を誇り高く歩む何十万，何百万の人々が神のみ名によって行なう権能を授けられ，お互いを助け，強めるために与えられた神聖な賜のもと，いかんなくその義務を果たしている。ペテロに語った主のみ言葉は彼らにふさわしいものである。主はこのように言われた。「シモンよ，……サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願ってゆるされた。しかし，わたしはあなたの信仰がなくならないようにあなたのために祈った。それであなたが立ち直ったときには，兄弟たちを力づけてやりなさい。」（ルカ22：31—32）

人々の必要に気付き，お互いを強めあう機会と手段を与えること，これが教会の神権定員会組織の大きな目的のひとつである。

ひとりの地方の教会役員が，ある日私を訪ねて来た。彼は弁護士だが，ある隣人が離婚のための助力を彼に求めて来たという。その人の結婚生活は深刻な問題を抱えていた。彼と妻とは収入以上の生活をしてきてどうしようもないほどの借金がたまり，そのため金銭問題で口論が絶えず，共同生活が不可能なまでになってしまっていた。

私たちは問題を話しあい，結論として，3人の神権定員会のメンバーにその夫婦と協力して問題を解決する依頼をした。ひとりは弁護士，ひとりは銀行家，ひとりは計理士であった。

3人は豊富な職業経験を生かして手際よく行動を開始した。彼らが債権者たちに話をすると，債権者は3人の力を信頼して，問題解決のための猶予を与えてくれた。その兄弟にとってはまったく手の施しようもなかった問題が，経験ある兄弟たちにとってはひとつの仕事でしかなかった。

混沌の中から秩序が生まれ，家庭に平和がよみがえった。新しい自信が彼の生活に到来し，妻は以前に見せたことのない尊敬を彼に示すようになった。2，3年の内には債権者たちに借りをすっかり返済でき，夫妻は家庭をどう管理するべきかの原則を学んだのだった。

パウロがローマ人に言っている。「わたしたち強い者は，強くない者たちの弱さをになうべきであって，自分だけを喜ばせることをしてはならない。」（ローマ15：1）これが兄弟たちのこの組織の精神である。すなわち，自分たちを喜ばせることだけに終始しているのではなく，神から与えられた責任を果たすべくお互いの弱さを担い合うのである。

2. 人は教会に活発であると，必要とあらば生活を正そうとする気持になる。

教会の歴史中には，イエス・キリストの福音に鼓舞，高揚され，良き人々との交わりから感化を受けて，

長年自分を縛ってきた悪習を断ち切る力を得た何千何万という例がある。

私は，1945年8月6日，一瞬の内に8万5千の命が奪われたあの惨禍を記念する広島の原爆記念碑のわきに，今から何年か前，日本人の実業家と肩を並べて立ったことがある。彼は日本帝国軍人であったため，経験からアメリカ人を憎悪していたと話してくれた。

ところがある日，教会のふたりの宣教師が彼の家をノックした。彼はひどく酔っていて話もできなかった。目的が何もかも人生から消えて，たったひとつの逃げ場が酒を飲むことだったのである。彼は訪れたふたりがだれであるかもわからないまま，後日来るように言った。その数週間後に，彼はバプテスマを受けたのである。

改宗によって人生に目的が生まれ，それまでの習慣を捨てる意志と，生き方をまったく変える力が生まれた。彼は，自分を導き，心中に決意を植え付けてくれた若い青年たちのことを，感謝を込めて語ったものである。

話をしたそのときには，彼は支部長会の一員として，また長老定員会の活発なメンバーとして働いていた。彼のような例は何千回，何万回と繰り返されるであろう。生活を変えようとする望みと意志とを与えるイエス・キリストの福音の力，これに勝る力はほかにはない。

3. 教会に活発でいると，責任を通じて成長の機会を得る。

人生は努力に従って成長するということは，真実である。とりわけ末日聖徒イエス・キリスト教会は，指導力を伸ばす立派な学校である。私は世界各地で宣教師たちに会う度に，「皆さんはそんな風に見えなくても，主の持っておられるものをみんな持っているのです」と話してきた。不思議なのは，彼らが主に仕えるにつれて，能力にも仕事にも秀でた立派な人になることである。

それは私たちもすべて同じである。主のみ業を進めるには，この私たちが働かなければならない。この教会では常に教会員が責任ある地位に就かなければならない。教会は生身の私たちを働き手とするのである。その私たちが働くにつれ，偉大な訓練計画により，神のみたまによって，能力を増し，たくましく成長して行くのは，実に素晴らしいことである。

兵役中に教会を知ったひとりの青年のことをお話したい。ある日曜日，彼はテンプル・スクエアを歩き回っていた。ここで始まった会話が，やがて彼をバプテスマに導くことになったのである。

四，五年後私は長老定員会会長を召すため彼を面接した。彼は子供の頃，孤児でいろいろな場所をたらい回しにされたこと，孤独ですさんだ生活をしたこと，教育の機会が閉ざされていたことを話してくれた。そんなときに教会に入り，初めはひとつの責任から次の責任を受け，そのどれもが自分の力量を少しずつ越えていたが，奉仕を続けるにつれて，彼の能力は増して行った。

そのようにして，彼には大きな責任を受ける用意ができたのである。彼の生活はすっかり変わった。現在では教会の役員であり，責任ある地位を持つ立派な職業人であり，良き夫，模範的な父親，素晴らしい隣人である。

ロバート・ブラウニング（イギリスの詩人，1812―1889）は，「容易につかむことができる位置よりもう少し先に目標を置け」と言っている。成長は，私たちが現在の能力を少し上回ることを成し遂げようと常に努めるときにもたらされる。教会プログラムの注目すべきひとつの点は，自分を伸ばして少しずつより高い所へ到達するように絶えず人々を助けることである。

4. 教会員となって活発に教会活動に参加することで人生に新しい視野が開ける。それは，神のみ名によって語る権威を受けて信仰の岩となるという霊的な面を指す。

この神権時代にみ業が始まったとき，主は福音が回復された目的のひとつを，「あらゆる人々主なる神すなわち世の救い主の名によりて語らんため」（教義と聖約1：20）と告げられた。

祈りが聞かれて答えられるという確信をもって祈る人は幸いである。聖霊を友とする人は幸いである。神のみ名によって語る権能を持つ人は幸いである。

ベルシャザル王が酒宴の夜に友人たちを招き集めたとき，人の指が現われて壁に何事かを書いた。占星術師や占い師が解き明かすように召されても解読できず，王は大いに思い悩んだ。

そのとき王妃が言った。「あなたの国には，聖なる神の霊のやどっているひとりの人がおります。あなたの父の代に，彼は，明知，分別および神のような知恵のあることをあらわしました。」（ダニエル5：11）

ダニエルは王の前に召され，自分に宿る力によって壁に書かれた文字を解き明かした。

神権を持ち，全力を尽くして召しを遂行している兄弟たちは，心に「明知，分別および神のような知恵」を持っているのではないだろうか。

活発な教会員であることは，あなたにどう役立っているだろうか。あなたの家族や仲間やあなた自身を祝福する霊的な分野があなた自身の人生に付け加えられるのである。

5. 家庭を治める上で助けとなる。

自分の妻を，永遠の天与の目的を

果たすために神と協同して自分と共に働く永遠の伴侶と考え，自分の子供たちを地上の両親に託された天父の子供と考える一家の長がどの家庭にもいたならば，国はどれだけ強くなることだろうか。

行ないは心の所産である。まことの福音の原則が家庭管理の指針となっているそのような家庭では，互いの感謝，尊敬，礼儀，信頼が見られるであろう。父親が妻や子供たちを神から授かった祝福として慈しみ，養い，守り，愛するからである。

教会に改宗した人がこのように語った。「私は父親として子供をむちで打つことが良いと信じていました。規則をちょっと破ってもすぐに体罰を加えました。でも福音が家庭に入ってきてから，子供たちに対する考え方が変わりました。子供たちは確かに私の子ですが，天父の子供でもあります。神さまの子をどうして虐待できるでしょう。私は子供たちについてまったく新しい見方をするようになり，子供たちも違った態度で答えてくれるようになりました。

私の家庭に懲罰がありますかって？　ええ，でもまったく違った罰です。親子は憎み合う敵ではありません。悪いことをしたときの罰則はありますが，それは違ったもので，当然の報いとして受けとめますし，前のように恨みを生みはしません。今ではお互いを尊敬して，それ以上に愛があります。福音は何と素晴らしい変化を生むものでしょう。」彼はそう言って話を終えた。

「そうですね。福音を受け入れて実践するときに，福音のもたらす変化は大きいものですね。」私はそう返事した。

6. 教会はあなたとあなたの最も愛する人たちとを永遠に結びつけてくれる。

人生で家族ほど，神聖で人の心を満たし，重大な結果をもたらす関係はほかにない。結婚式でよく言われる「死がふたりを分かつまで」という言葉は何と悲しい意味を持つ言葉だろうか。

結婚がこのような儀式で結ばれる以上は，死による家族の別離や家族関係の解消があるのは当然である。永遠の愛がない永遠の生命を考えることは，矛盾である。

慈悲深い永遠の御父は，子らのためにこの神聖な関係が続くようにして下さった。主は選ばれた十二使徒にこう告げておられる。「わたしは，あなたに天国のかぎを授けよう。そしてあなたが地上でつなぐことは，天でもつながれる……」（マタイ16：19）

地上でつなぐことを天でもつなぐその同じ力が，今この教会にある。その権能は聖なる神殿で行使され，そこでは神権の権威の下，誓約によって父，母，子供が時にも死にも引き裂かれない状態に結び固められるのである。

私は先頃，地域の立派な人物の葬儀の席上で話をしたことがある。確かに悲しみの時であった。しかし同時にそれは安堵の時であった。その日，遺族となった素晴らしい夫人と子供たちの涙の奥に輝いていたのは，自分たちの夫や父はやがて来るべき再会に備えてこの世にしばしの別れを告げたに過ぎないという確信から来る安らぎを漂わせたほほえみであった。

その葬儀のすぐあと，私は社会的に名のある実業家から一通の手紙を受け取った。彼は宗派が違っていたが，このように書いている。「あなたの教会の人たちは積極的な考え方をお持ちで，本当に感動させられました。あなたがたは嘆くためではなく慰めを得るために，また死をのろうためでなく生を賛美するためにこの世に来たのですね。その深い信仰が，死だけでなく人生の様々な浮き沈みを乗り切らせているに違いありません。」

教会はあなたのために何をなすのだろうか。教会は，死が単なる区切りに過ぎず，あなたにとって最も大切なものが永遠にあなたのものになるという確証をはっきりと与えてくれる。

あらゆる場所にいる兄弟たちに，無関心になった人々，流されて行った人々，まだ探求をせずにいる人々に，来て見てごらんなさいと招きの手を広げたい。あなたの人生を豊かにし，心に平安を与え，家庭に喜びと愛をもたらし，今愛している人々と永遠に離れないでいられるという確信を与えるために，英知の神は御自分の組織を築かれた。

兄弟たちよ，門は開かれている。あなたがたは暖かく迎え入れられ，自分を助けようと手を差し伸べている大勢の善き人々を見いだすことであろう。また私は主のしもべとして，やって来る人々は以前に経験したことのない喜びを必ずや知るであろうと，いささかのためらいもなくお約束する。

これらをイエス・キリストのみ名により，心から感謝の念をもって証する。アーメン。



教　師

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター

時計を見ていて，私は準備してきた原稿をたたんで内ポケットにしまいこんでしまった。しかし，しばしの時をいただいて，印象に残っている少年時代のひとつの小さな出来事を述べさせていただきたいと思う。教会の青年たちの指導に携わっている熱心な方々が大勢この午後の集会に参加しておられることを聞いて，この出来事を思い出した次第である。

まだ朝も早いある夏の日のことであった。私は窓辺に立っていた。カーテンの陰から，芝生の上にふたつの小さな生き物が見えた。ひとつは親鳥で，もうひとつは明らかに巣立って間もないとわかるひな鳥であった。見ると親鳥が芝生の上をぴょんぴょん飛び，足先で地面をつつき始めた。そして頭をもたげると芝生の中から太ったミミズを引っ張り出して，飛んで戻ってきた。ひな鳥はくちばしを大きく開けたが，親鳥はそのミミズを自分で飲み込んでしまった。

ながめていると，親鳥は木の上に飛び上がり，しばらく木の皮をつついていたが，口に大きな虫をくわえて戻ってきた。ひな鳥はくちばしを大きく開けたが，親鳥はその虫も飲み込んでしまった。それに抗議するやかましいさえずりが聞こえた。

そのうち親鳥は飛んで行ってしまい，戻って来る気配はなかった。残されたひな鳥をじっと見ていると，しばらくして，ひな鳥は芝生に飛び出し，足で地面をつついていたかと思うと，頭を起こして芝生の中から大きなミミズを引っ張り出したのである。

教会の子供や青少年を指導する素晴らしい人々を神が祝福して下さるように，イエスのみ名によりへりくだって祈るものである。アーメン。

宣教師と彼の教え



十二使徒評議員会会員

ヒュー・B・ブラウン

この午後の部で少しの話す時間を与えて下さった大管長会に感謝し，ほんのひと言お話したい。

宣教師や伝道の仕事については多くのことが言われてきた。伝道は私が人生で第一に愛するもので，今から68年前の英国滞在中に起きた幾つかの出来事で今も思い起こすことがある。そのうちのひとつを，ここでお話したいと思う。

私はある家を幾度か訪問したがその度に断わられ，二度と来て欲しくないと言われた。しかしそれでも私は繰り返し訪問したい気持に駆られた。あるとき，その家の前を通り過ぎようとすると，中へ入ってもう一度話したいという強い気持に駆られた。私は英国式のドアの大きな真鍮製のノッカーを叩いたが，何の返答もなかった。居間でひとりの婦人が編物をしているのが見えたので，そのノッカーをうるさいほど叩いた。その婦人は出て来ず，私は裏口へまわった。裏口の戸にはノッカーがなかったので，自分のステッキでドンドン叩いた。本当に家中に響くほどの音だった。

間もなくその婦人は顔を出したが，その当惑ぶりに私は思わず，小さい頃農場で，卵を抱いている鶏を巣の外へ追い出したときのことを思い出した。農場で働いた方はおわかりだろうが，卵を抱いているめんどりを巣から追い払おうとすると，めんどりは羽をばたつかせて口ばしをせわしげに動かしながらあらぬ方へ走るが，この婦人はちょうどそのような感じであった。

私は謝罪した。「お騒がせした上，無理にお会い下さるようにお願いしたりして，本当に申し訳ありません。でも奥さん，私は1万キロもの遠くから，主があなたに伝えるように望んでおられるメッセージを携えてやってきたのです。主はあなたにそのメッセージをお与えになるため，このように私をお遣わしになったのです。私はあと数日でカナダへ戻ります。それで，主があなたに知って欲しいと望んでおられることを，私はお伝えしなければならないのです。」その婦人は，「主が私にメッセージをですって！」と聞いた。「そうです。その通りです」と私は答えた。

私は婦人に福音の回復と，教会の組織と回復のメッセージを話した。彼女は私の話に非常に感銘した。私はその家を去る時，その婦人にこう言った。「お騒がせしてすみませんでした。でも，私がここへ来た使命と主の教えをどうしてもお伝えせずにはいられなかったのです。またお会いする時がきっとあります。そのときあなたは，『あのとき裏口へまわってくれてありがとう。私を愛し，主の教えを携えて来てくれて本当にありがとう。あなたが帰ったあと，胸が一杯でどうしようもなくなり，どういうわけかと考えて不安になり，心配しました。それで私は伝道本部へ行って何種類かの印刷物を手に入れ勉強しました。そして，家族と一緒に教会に入りました』とおっしゃることでしょう。」

それから10年後，私は再び英国に行った。そのときは軍人としてで，集会のあと，ひとりの婦人がふたりの大きくなられたお嬢さんと一緒に来て，こう言った。「何年も前に，あなたが教えを持って私の家に来て下さったことを，神様とあなたに感謝しています。あれから私と娘たちは教会に入りました。近いうちにユタへ行きます。あなたが勇気と忍耐と信仰をもって神様の教えを携えて来て下さり，それを主のみ名によって私に伝えて下さったことを，神様に感謝しています。」

兄弟姉妹，私はこの業が神のみ業

であることをあなたがたに証したい。私は胸の底からそれこそつま先まで，全身全霊で，これが神のみ業であることを知っている。福音は確かに回復された。この教会を導いている人人は，自分を任命した御方から霊感を受け，導かれている。この福音が全地を満たすまで広がり行くことは確かであり，私たち全員がやがてかの地に行って力を結集し，この地上でたじろぎつつ進めてきたこの偉大なみ業を堂々と遂行するときを，私は楽しみにしている。

この証と祝福を皆さんに残したいと思う。また神様がここにいる人々と，話を聞いている人々と，また全世界の人々とを祝福されるように祈る。御父よ，み業の精神をつかみ，イエス・キリストの福音を全世界に広めようとたゆみなく献身するよう，この民を祝福したまえ。

この証と話と祈りを，謹んでイエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

永遠の鍵と管理する権能

大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス



愛する神権者の兄弟たち，私は主が私たちに注いでおられる数々の祝福に対して感謝しつつ，愛と友情をもってあなたがたを歓迎する。

主が私を通じて数名の兄弟を教会幹部として新たに召されたことは，とりわけうれしいことである。御存じと思うが，ジョン・H・バンデンバーグ監督とロバート・L・シンプソン副監督が十二使徒補助に召された。彼らは新しい召しに関連して重要な責任を受けたのである。また，これも御存じだろうが，主はビクター・L・ブラウンを教会の管理監督に召され，H・バーク・ピーターソンを管理監督会の第一副監督に，またボーン・J・フェザーストーンを第二副監督に召された。

これら5人の兄弟たちは皆有能，忠実で，彼らの才能がそれぞれの職の分野で今，王国の建設に必要とされているのである。彼らは皆，信頼と責任と奉仕の新しい召しにあって，主から祝福を受けて立派に働く人々である。

私はここであなたがたに，主がこの最後の神権時代に私たちに授けられた神権と神権の鍵について，少々話したいと思う。

私たちは聖なるメルケゼデク神権を持っている。これは，人類の救いに必要なすべてのことを地上で行なうために神から人に委任された権威であり，力である。

また，私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会という地上の神の王国の鍵も所有している。

これらの鍵とは管理の権能であり，地上で主のみ業のすべてを指導し，管理する能力，権威である。これを保持する者は，他の人々が神権をもって働く仕事を管理し，監督する力を備えている。私たちはだれでも神権を持つことができるが，その神権は鍵を持つ者から指示と権能を与えられて，はじめて行使できる。

この神権と神権の鍵は，ペテロ，ヤコブ，ヨハネと，またモーセ，エライジャ，その他古代の予言者たちからジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに授けられた。その神権の鍵は十二使徒に聖任された人々に与えられている。しかしそれは管理者たちの権能であるため，地上では教会の大管長である神の先任使徒だけが鍵を完全に行使できるのである。

ここで極めて率直に，またはっきりと申し上げたい。私たちは聖なる神権を持ち，神の王国の鍵はここにある。それは末日聖徒イエス・キリスト教会にだけある。

ジョセフ・スミスへの啓示の中で，主はこれらの鍵が「大神権の大管長会に常に属するものなり」（教義と聖約81：2），「何人にてもわが言を受け入るる者はわれを受け入るるなり。而してわれを受け入るる者は，わが遣わしたる者すなわちわが名のために汝の助言者となしたる大管長会を受け入るるなり。」（教義と聖約112：20）と言われた。

同じくこれに関連して，予言者ジョセフ・スミスはこう語った。「あなたがたは，ダニエルのように主の家に向かって日に三度祈る人々と親しくなりなさい。大管長会に注意を向けて，その教えを受け入れなさい。」

さて，兄弟たち，私たちが特に肝に銘じておくべきことがひとつあると思う。それは，教会の大管長や大管長会，あるいは大管長会や十二使徒会の統一見解は聖徒を決して間違った方向に導くことはないし，主のみ旨やみこころと矛盾する勧告を世に声明することもないということである。

個人としては道をはずれたり，主が意図されるところとは異なる見解や忠告を与えたりするかもしれない。

しかし大管長会の声明や王国の鍵を握る他の人々の統一見解は，聖徒や世の人々を必ず主が望んでおられる道へ導くのである。

主はジョセフ・スミスに非常にはっきりとこう言われた。「またわれ汝らに告ぐおよそ誰か権威ある者より聖職に按手任命され，またその者の権威を有てることと，教会の長たる者たちより正式の按手聖任を受けたることとが教会員の知る所にあらざれば何人といえどもわが福音を宣べんために出で行くこと，または教会を創立することを許されざるべし。」（教義と聖約42：11）

「神の王国の鍵はこの世の人の手に委任され，福音はここより転じ行きて世の果にまでも達せん。あたかも人手によらず山より切り出されたる石の転がり出でて，ついに全世界に充ち満つるが如し。」（教義と聖約65：2）

兄弟たち，これらのことは真実である。主は主の民と共におられる。正義の道は広められる。私たちの掲げる大義は正しく，主は私たちを導き，ついには勝利に至らせて下さる。

私たちが大管長会に目を向けて彼らの忠告や指示に従ったならば，私たちは教会として，また個人としてこの世では平安を得，来るべき世では永遠の栄光を受け継ぐことができる。この世のいかなる力もこれを変えたり阻んだりすることはできない。この証を愛する兄弟たちに申し上げる。主イエス・キリストのみ名によって。アーメン。

神権の契約

十二使徒評議員会会員

マリオン・G・ロムニー



兄弟たちよ，私たちは貴重なひとときを迎えている。何万という神権者が会し，教会の大管長会から教えを聞くのである。

私は大管長の話に非常に感動した。大管長から御自分の体験を聞くことができて幸いである。私は大管長の説教を聞きながら，かれこれ25年も前のひとつの出来事を思い出した。ヒーバー・J・グラント大管長との会話である。そのとき私たちは，公けの立場で取った大管長の行動に対して向けられたある批判について話し合っていた。彼は私の背に腕をまわし，左肩に手をかけて，こう言った。「マリオン，君はいつも大管長を見つめているね。もし大管長が君に間違ったことをしなさいと言って，君がその通りにしたとしても，主はそのことで君を祝福して下さるよ。」

そしてこう続けた。「でも，心配することはない。主は御自分の代弁者に民を間違って導かせるなどということはなさらないからね。」

私はこの言葉を決して忘れたことがない。また，今までずっとこの勧告を忠実に守ってきたつもりである。

この集会に集う私たち兄弟は，みな神権を持っている。私たちは契約の民である。主はアブラハムと契約を結んだあとで，アブラハムに子孫の繁栄を約束された。

「……また汝のすえ……によりて世界の眷族ことごとく祝福を得ん，すなわち福音の祝福にして救いの祝福，すなわち永遠の生命の祝福を得んと言う約束を汝に与うればなり。」（アブラハム2：11）

アブラハムの時代以来，その子孫は，福音を知った人々には契約の子と呼ばれている。私たちが主と契約をして結ぶ事柄のひとつは，「神権に属ける」契約である。教義と聖約の84章は神権について述べているが，そこには次のようにある。

「モーセの息子らとまたアロンの息子ら（つまり，メルケゼデク神権者とアロン神権者）とは，今の代に主の宮居の中にありて神の喜びたもう棒物と犠牲とを奉るべし……またモーセとアロンの息子らは，シオンの山上主の宮居の中に在りて主の栄光に充たさるべく，而して汝らはモーセとアロンの息子たちなり。……およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権（アロン神権とメルケゼデク神権）を得，而してその天よりの召しを全力を尽して遂行する者たちは，『みたま』により聖められてその肉体再新さる。」（教義と聖約84：31—33）

私はこれが真実であると信じている。私は，神権の召しを全力を尽くして遂行する兄弟たちには，その肉体に変化が起こると思っている。リー副管長は今朝の福祉集会での話の際に，ある教会外の人について話をされた。その人は，マッケイ大管長に会ったとき，こう尋ねたそうである。「あなたは神の予言者ですか。」それに対して，マッケイ大管長は答えた。「私の顔を見て下さい。そうすれば，わかるでしょう。」

私はかつて，現在の愛する指導者の父君であるジョセフ・F・スミス大管長について話を聞いたことがある。大管長がアリゾナで，知事やその他高名な人々と共にある祝典に参列したときのことである。数名の人が，教会の大管長と一緒に写真を撮りたいと申し込んだ。ジョセフ・F・スミス大管長は喜んで応じ，写真を撮る間中，一緒に立っていた。写真を撮り終って，皆がその場を離れて群衆の中に戻ったとき，知事がこう言ったということである。「私はあの人のそばに立っていたとき，自分が泥棒か何かのような感じがしたよ。」彼は，神権の召しを全力を尽くして遂

行している立派な人間の，内からわき上る力を感じたのである。

「……忠実にしてわが今語れる二つの神権を得，而してその天よりの召を全力を尽くして遂行する者たちは，『みたま』により聖められてその肉体再新さる。これらの者はモーセの息子たちとなり，アロンの息子たちとなり，アブラハムの子孫となり，また教会員にして王国の民となり神の選民となる。」（教義と聖約84：33―34）

予言者ジョセフ・スミスは神権を持つ兄弟たちに，自分の召しと選びを確かなものにするようにと，繰り返し勧めていた。啓示はさらに続く。

「主は言う，またすべてこの神権を受け入るる者は，われを受くるなり。」（同35節）

私は，この箇所は主を代表する任命を受けた神権役員たちを受け入れる人々を指していると思う。

「主は言う，またすべてこの神権を受け入るる者は，われを受くるなり。そは，わが僕らを受け入るる者はわれを受くればなり。また，われを受け入るる者はわが父を受くるなり。而して，わが父を受け入るる者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。而してこは神権に属ける誓詞と誓約によりて然るなり。」（教義と聖約84：35―39）

スミス大管長は折にふれ，祈りや勧告の中で，私たちが自分の受けた誓約と責任に忠実であるようにと訴えている。「神権に属ける誓詞と誓約」の義務が私たち一人一人にかかっていることは疑いの余地がない。主がこう言っておられるからである。「この故にこの神権を受くる者は，すべてわが父のこの誓詞と誓約とを受け，而してこれをわが父は破ることも変えることも為したもうはずなし。」（教義と聖約84：40）

そのため，主と誓約を交わした私たちが自分の務めを果たせば，つまり神権の召しを全力を尽くして遂行すれば，主は私たちに永遠の生命を約束されるのである。

啓示には，主はこの誓詞と誓約に関して御自分の責任を怠ることはないとある。ところが私たちは務めを果たさないことがあるし，現に多くの神権者がそれを怠っている。そのような人々について，啓示は次のように言っている。

「されど何人にまれ一度この誓約を受けて後これを破り，またことごとくこれに違背する者はこの世に於ても未来の世に於ても罪の赦しを受くることなかるべし。」（教義と聖約84：41）

これについてであるが，神権の召しを全力を尽くして遂行しない人が，皆赦されない罪に定められるというのではなく，バプテスマを受けることや什分の一，知恵の言葉，その他の契約をすでに交わした神権者が，そのあとで契約に従うことを拒むと，約束された永遠の生命を失う危険を冒すということを言っているのだと思う。

今宵，この教会の指導者について，彼らが地上における救い主の代表者であることを話されたスミス大管長の言葉は真実であると証する。神権には力があること，私たちが最善を尽くしてその任を果たすならば，天から力を受けることができることを，私は知っている。

願わくは神の助けがあって，私たちがこのことを理解し，さらに神は神権を授けることによって私たちに大きな栄誉を恵みたもうたことを理解するよう，イエス・キリストのみ名により，祈るものである。アーメン。

神権—王の軍



大管長会第二副管長

N・エルドン・タナー

この建物や教会のそこかしこの建物に集う神権者の大きな群れを思うとき，「見よ，王の軍は」の讃美歌が一層意味を持って迫ってくる。私たちはこの地上で神の神権，すなわち神のみ名によって語り行なう権能を持った唯一の民である。私たちが自分を律し，自分の神権の召しを全力を尽くして遂行するならば，善をもりたてる力がどれほど大きなことか。その大いなる特権と責任を強く感じている。

私たちは父親として，息子として，また神権者として常に謙遜に，誇りを持ち，保持する神権を決して恥じてはならない。私たちはほかとは違う特異な民であり，真理と義の故に他と異なるべきなのである。しかし「人より清い」といった態度は断じて取ってはならず，常に教会の標準を守って，揺るがずにいなさい。

名声の失墜や嘲笑を恐れる人があるようだが，私たちは世の人のようになろうと努めたり，世間の罪深い生き方に迎合したりする必要はない。世にありながらも，世のものとなってはならない。私は自分の経験から何の疑いもなくはっきり申し上げたい。私たちは自分の持つ神権を恥じる必要はないし，教えに従って神権の召しを全力を尽くして遂行することを恥じる必要もない。

私がつい昨日，功なり名を遂げたある実業家と話をしていた時のことである。彼は神権の召しを一生懸命に果たすこの教会の熱心な会員である。私は，「あなたの人生で神権のために損をしたようなことがありましたか」と尋ねてみた。

彼は，「タナー副管長，いつでもためになってきましたよ」と返事をした。

現在，教会の一部の若者や監督，ステーキ部長までもが，放縦な世の傾向に影響され，私たちが周囲の情勢に比べてあまりにも厳しすぎる道徳を教えていると考える人たちがいる。事実，私たちは堅物と見られているが，しかし私にしてみればそうした見方をする人々は知恵も徳も人より優れていると自負する狭量な人間である。だが世の基準で判断するならば，恐らく私たちは堅物であろう。

私たちは信仰をなくし，近代の啓示を否定し，世間の人と同じような生活をしようとするつもりだろうか。それとも，特異な民となって，自分の神権を尊び，義務を尽くそうとしているのだろうか。

私たちは世と違っている。私たちには啓示された福音があり，神権がある。私たちはどのような場合でも，模範とならなければならない。

私たちはイザヤの言葉の通りに，「しかし，役人たちの中にも，イエスを信じた者が多かったが，パリサイ人をはばかって告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。彼らは神のほまれよりも，人のほまれを好んだからである」（ヨハネ12：42—43）という人々の中に数えられようとしてはいないだろうか。

今晩，私の話に耳を傾けている青年たちに申し上げたい。（聞いてもらえるならば，神権を持つ青年の一人一人に話したいのだが）私たちはイエス・キリストの福音を恥とする必要はない。むしろ自分の持つ神権を，常にへりくだって誇りとするべきである。

私は，来月バプテスマを受けるという青年と話をしたことがあるが，バプテスマを受けるのは家族の中で彼ただひとりであった。私は彼に，「どういうわけで教会に興味を持ちましたか」と尋ねた。

彼はこのように答えた。「学校で友だちだった人がこの教会の会員で，

私は彼の生活にひかれたのです。彼はほかの人たちと違っていました。幸せそうでした。私を自分の家に招いてくれましたが，家庭の中の愛を見て，彼の家族の生活に触れて，興味がもっと湧きました。彼は私を教会に連れて行ってくれて，バスケットボールのチームに入りました。この教会はほかのどことも違う感じだと思いました。それからバスケットボールのチームのことですが，仲間たちはみんな知恵の言葉を守って清い生活をしていました。それが私の心を動かして，この教会に入る決心をしたのです。」

青年はさらに続けた。「その友人とブリガム・ヤング大学へ来て，一学期間出席してみました。この大学の学生たちと接触してみたかったのです。ほとんどの学生は教え通りの生活をしていましたが，ある人たちには，会う前に教会に入る決心をしておかなかったら考えを変えたかも知れないと思いました。」

若者たちよ，どこにいようとこのことを心に留めておくべきだと思う。あなたがたの行動が，人々を教会から遠ざけているかもしれないのだ。だれもそんなことをしてうれしい気持にはなれまい。

つい先日，弁護士になってソルトレーク・シティーからニューヨークへ行くという青年の父親と話をする機会があった。話によれば，青年を招いた組織は合衆国でも指折りの団体で，その会長が東部で大会社の副社長をしている私たちの教会の会員を知っており，人柄を知っている会長がその副社長に，推薦できる人はいないかと尋ねた。会長はこう言った。「君の教会の青年たちのような人が欲しいのですよ。酒を飲まず，仕事熱心で信頼できる，そんな人物が。」そうでない人を批判するわけではないが，これは教え通りに生きる教会の青年たちに送られた推薦状である。これは生涯常にあなたがたの益になるであろう。

これに答え副社長はこう言った。「ソルトレーク・シティーに青年をひとり知っています。」そこでその団体は旅費持ちで青年をニューヨークに招き，面接をして仕事を与え，妻を同伴してニューヨークに移る費用も住む住宅も負担してくれたのである。

あなたがた自身のため，成功のため，幸福のため，また付き合う仲間たちに及ぼす影響のためにも，信念通りに生きることの大切さは幾ら強調しても強調しすぎることがない。人々はあなたがたが言葉通りのことをするように，言葉通りの人であるように期待している。期待を裏切るならば彼らはがっかりし，神権を持っていない青年たちはそこから影響を受けるのである。

先日，感銘を受けた出来事をお話したい。アメリカ青年会議所の会頭夫妻がほかに二組の夫婦と連れ立って私の事務所に来た折のことである。彼らは教会員である会議所の地区会員の招待で，公式訪問に来たのだった。世界情勢や青年会議所の会頭をしているその青年の責任について話し合ったあとで，私はこう言った。「教会について知りたいと思いますか。」

会頭は，「はい，知りたいです」と答えた。

それで私は，彼らを紹介してくれた青年に向かって言った。「君からこの方たちに，教会のことを話してくれないかな。」

彼は，「タナー副管長，あなたから話して下さると思っていたのですが」と言った。

私は，「いえ，君から教会のことを話してあげて下さい」と言った。

青年はこれもまだ若い会頭の目をじっとみつめて言った。「モルモン経について少しお話ししたいと思います。私たちはモルモン経を信じていますし，神のみ言葉であることを知っています。」彼はモルモン経とは何で，予言者がどうやってそれを手に入れたか，どのようにして翻訳されたかを語り，その説明をしたあとでこう言った。「私はこの本が真実であることを知っています。そして皆さんに証します。この本は真実で，神様のみ言葉です。この本の中にあるひとつの約束についてお話したいと思います。」この約束をあなたは知っていると思う。

それから彼は言った。「この本が欲しいと思われませんか。」

すると会頭は言った。「ぜひ欲しいです。興味があります。」

この証をした青年は，リチャード・モイル兄弟である。

青年たちよ，どこにいようとだれと会おうと，自分が神の子であることを忘れないようにしよう。私たちは神の神権を持っており，教えに従って生活する責任がある。

今宵，私はこの福音が真実であることを確かに知っていると証したい。それが真実であることを，世の出来事を知っているのと同じように，確かに知っている。神が生きておられること，イエスがキリストであり，神の御子であること，神と御子がジョセフ・スミスに姿を現わされたこと，福音が回復され，キリストの教会が地上に再建されたことを，私は知っている。

福音の証が自分にはないと感じている青年たちに申し上げたい。今宵，指導者たちが述べた確信に満ちた証を受け入れなさい。そして同時に，祈り，勉強し，戒めを守りなさい。そうすればあなたがたは自分の手で，人が享受できる最大の祝福を，その証を得るであろう。

「永遠の命とは，唯一の，まことの神でいますあなたと，あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。」(ヨハネ17：3)

私たちが神権を尊び，神権のもたらす祝福にあずかり，人に不死不滅と永遠の生命をもたらす業において自分の務めを果たすことができるよう，イエス・キリストのみ名により，へりくだって祈るものである。アーメン。





神権の強さ

大管長会第一副管長・十二使徒評議員会会長

ハロルド・B・リー

これまでのお話を聞いて，私はひとつの経験をここでお話したいと感じている。今宵，この大会に聞き入っている人は数多いと思うが，特にひとりの人はこのことをありありと思い出すことであろう。——それは何年か前の日本での出来事である。この話の一部に特に注目していただきたい。若いときの過ちが，将来神の王国で奉仕できる機会をいかに損なうかを知って欲しいのである。

大戦直後のことで，緊迫した情勢であった。私たちはものの30分もあればロシア上空に到達できる位置にある空軍基地で，軍人たちの昼の集会中だった。頼んであった最初の話者はある青年で，彼は救い主が弟子たちのために祈られたこの祈りを引いて話をした。「わたしがお願いするのは，彼らを世から取り去ることではなく，彼らを悪しき者から守って下さることであります。」(ヨハネ17：15) この若者の話は純潔について今まで聞いたことがないほど素晴らしい話だった。彼はこう言って話を終えた。「純潔を失うよりは，死んで棺に入れられて故国に送られる方が良いと思います。」

軍人ばかりの聴衆の間には，水を打ったような沈黙があった。それから証を述べて演壇から降りようとすると，彼はつまずいて倒れ，演壇の上にうずくまった。私たちは彼を演壇から降ろし，意識を取り戻すまで介抱して，席に連れて行った。

彼を連れて行くとき，伝道部長は私に「心臓が悪いのではないでしょうか」と言った。私は，「彼が話したことに敵対する力が，彼に及ぼされているように感じられました」と返事をした。

私に話す番が来たとき，私はその青年にこう言った。「あなたは私たちに深い感銘を与えてくれました。純潔を失うよりは死んだ方がいいとおっしゃったが，私たちが聞いたと同じように悪魔もそれを聞いたことを忘れないように。私の推測がはずれなければ，悪魔は純潔を失うくらいなら命を捨てると言ったあなたの言葉を試すでしょう。十分警戒していなさい。」

集会が終わると，グループリーダーが私をわきに呼んで言った。「おっしゃる通りでした。というのは，この千歳基地は教会員を陥れようとする売春婦がはびこっている腐敗しきった町です。私たちは彼らがその魔手にかからないように努めてきたのですが，この青年はそんな娼婦の所へ遊びに行く約束をしてしまったのです。私たちは彼が出掛ける前にそれを知りました。それで私たちは，『君を行かせるわけにはいかない。お母さんのことを考えてみなさい。恋人や妹たちのことを考えてみなさい。これから君と一緒に行って，何とか上手に約束を断わることにしよう』と言いました。」

彼らは実際にそうして，2週間その青年を気を付けて見守ることにした。彼らは青年にワードティーチング，つまり今で言うホームティーチングの責任を与えた。それは基地内の不活発会員を全員訪問することであった。そして2週間後，この青年に純潔について話す割当てを与えたのであった。

それから何年かたった。私はマッケイ大管長と共にロサンゼルス神殿の献堂式に参列していた。集会の合間に新鮮な空気を吸いに外に出て，神殿の西側を歩いていた時，小高い所に見覚えのある青年が立っているのが見えた。日本の北海道で会ったことのあるその青年に近寄って行くと，彼は私に気が付いて，階段を走り降りてくると私に抱き付くようにして言った。「リー長老！　私はロサンゼルス神殿で働くように召された

んですよ。」

私は胸に詰まるものを覚えた。私が彼に会ったのは，一歩踏み誤ればロサンゼルス神殿で働く権利を失ったと思われるそんな岐路に立っていた時だったからである。

さらに何年かたって，私は彼の住む地方の大会に出席した。若い夫婦が通路を歩いて来るのが見えた。男性は腕に無垢な幼子を抱き，美しい女性が彼に寄り添っていた。妻だと紹介してくれた。その幼子の顔を見せてくれたとき，若い父親となって幼子に汚れのない純粋な血が流れていることを知っている誇りが彼の顔にうかがえたように感じた。これこそ，試練を耐え抜いてきた者に与えられる報いである。

私たちが青年を教える際に留意しなければならないひとつのことは，思いもよらないときに来る誘惑にどう対処するかをはっきりさせておくことである。兵役に赴こうとする青年たちに教えるときには，実際に経験した人に来てもらって，「ではこういう誘惑にあったらどうしますか。どう対処しますか」と言ってもらうことである。そうすれば，自分ならどう対処するかを話しあうことができる。悪のはびこる時代に，これは何と大切なことであろう。

第一に責任があるのは，子供の父親である。しかしそうは言っても，父親がある朝，起きる早々息子を枕もとに呼び，15分で人生のあらゆることを話して聞かせようというのではない。子供たちにそのようなことが心要なのではない。微妙な問題について尋ねたいと思うときに答えてくれる父親が，子供には必要なのである。子供は知識に飢えており，あらゆる物事に好奇心を持っている。

もし父親が率直，正直に子供の成長に応じて知恵の及ぶだけのことを話して教えるならば，その父親はあとあとも子供から相談を持ち掛けられる父親になるであろう。そのような父親は子供の心の錨であり，子供が予想もしないときに襲ってくる運命の魔手に陥らないよう，自分の人生経験の書を引いて子供に備えをさせるであろう。

もうひとつのことをお話したい。私たちは家庭の夕べのような活動や神殿結婚，ホームティーチングなどの諸活動について研究して，単に警告したり家庭の夕べやホームティーチングをするように圧力を掛けようとしても，決して進歩しないことがわかった。ホームティーチングを行ない，家庭の夕べを持ち，聖餐会の出席数を増加させ，神殿結婚や神殿参入者数を多くするための唯一の方法は，神権者が家庭で自分の神権の召しを全力を尽くして遂行することだということがわかってきた。神権者が自分に与えられている全能の神の力，すなわち神の神権の重要さを理解しないうちは，その家庭は安定しない。

私たちがすべての父親に強調しなければならないことは，家族の永遠の福祉は父親に責任があるということである。これはつまり，家族と共に教会に集うことであり，家族と共に聖餐会に出席することであり，家族のきずなを強めるために家庭の夕べを開くことであり，家族を神殿に連れて行くために自分が備えることであり，それによって，永遠の家族を作る歩みを進めるのである。

主に命じられた通りの生活をして自分の神権の召しを全力を尽くして遂行することを，一人一人の神権者によく認識させることは，実に大切な責任である。

自殺防止協会について話してみたい。霊的な自殺を企てている教会員が大勢いると思う。肉体の自殺を企てる人と同様，彼らも助けを求めている。そうした苦悩の声は，私たちが気付きさえすれば命を救い得る声なのである。

現在私たちの周囲には，霊的な自殺の危機にあって，そのしるし，つまり苦悩の叫びを上げている人たちが大勢いる。私たちが遅れずにその苦悩の叫びに気付きさえすれば，私たち自身が彼らを救う手だてとなり得るのである。

もうひとつお話したいことがある。私たちは今，教会に様々な国籍の民を迎え入れている。私たち教会員は，迫害や市民権の差別や憲法で保障された数々の権利を取り上げられたという歴史を過去に持つことを忘れてはならない。教会員である人々は，肌の色や人種の違いに全く関係なく，全員が神の王国と教会の会員である。ある人々は自分が差別されていると話していた。卑劣な言葉を聞くこともある。私たちは状況に応じては，そのような人々と一線を画すことがある。

今，私たちはあらゆる地域の人々に兄弟愛の手を広げ，実際に改宗している人々，教会に加入してそこで得られる数々の豊かな祝福を受けたいと思っている人々に，この手を差し伸べなければならない。私たちはまだ神権を持っていない人々のために，イエス・キリストの祝福が可能な限り充分に与えられるように祈っている。一方，教会員には，互いに愛し合うべきであるという新しい戒めを与えられたイエス・キリストの模範に，誠心誠意従うようにお願いする。それを忘れることのないように，心から願っている。

さて，最後にもうひとつ述べたい。私は今晩のスミス大管長のお話に別の意味でも感動した。こうした感動は真実起こり得るのである。私が十二使徒評議員会の一員に名を連ねるようになって間もない頃，初めて参

加を許された教会幹部の再組織はグラント大管長の逝去の折であった。私たちは神殿に集まって長い討議をした。これは，挙手によって教会の大管長が選任される前にいつも取られる措置である。そのとき，私は副管長にだれがなってだれがならないかなどのうわさがあったことを考えていた。こうした再組織には付き物のうわさである。しかし，大管長が副管長を指名し，彼らが部屋の上座に着いたとき，私は心中，彼らこそ教会の大管長会に主が望んでおられる人々であるという証を持った。私の耳もとで真理が高らかに歌いあげられたかのように，その確信を感じた。

私は次のことを皆様に強調したい。だれかこのように言った人があるが，これは正に真実である。「神の力が教会の指導者の上にとどまるのを見て，それが胸の中で炎のように燃えるようにならないうちは，その人は真実の意味で改宗したと言えない。」教会員は，自分たちが正しく導かれているという確信を得，神の人である指導者が神のみ手により正しく任命され，霊感を受けているという確信を得てはじめて，真実の意味での改宗をするのである。

私は先程お話した出来事を通じて知った通りに，主が選ばれた人々はそのときに主が必要としておられる人々であることを，心の底から知っていると証する。私は十二使徒であったオルソン・F・ホイットニー長老がこの説教壇から話をするのを聞いたことがある。彼はこう語った。大管長会の兄弟たちは必ずしも教会で一番優れた人々ではない。彼らと同じように，あるいは彼ら以上に義しい生活をしている人はたくさんいるだろうと思うが，ただひとつ確かなことは，空席ができて主がそれを埋める人を必要とする時，主は周りを見て，その時にその地位を満たすに最もふさわしい人を見つけ出されるということである，と。

私は教会幹部として31年の長きにわたって働いているが，そこで得た経験から，このことが真実であると知っている。主はこの教会を導いておられる。私たちはこの教会の評議員会に神の導きがあることを，絶えず感じている。この心からの証を，主イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

なぜ清くあるべきか

十二使徒評議員会会員

ボイド・K・パッカー



けさのこの大会に力強いみたまが共にあることをどなたも感じておられることと思う。ここにこの微妙でむずかしい問題を語るとき，これまでになくみたまの力による助けがあるよう，切に求めたいと思う。

きょう，この会場には若人がたくさん見えておられる。私は皆さんに，しかも特に十代の皆さんに話したい。なぜ清くあるべきか――このテーマはあなたがたが大きな関心を寄せている事柄であろうと思う。

私はこのことを，深い敬虔の思いをもって話したいと思う。それに驚く人があるかもしれない。なぜなら，この問題はとりわけよく話の種になり，歌に歌われ，冗談の種にさえなっているからである。ほとんどの場合，それは慎みなく語られている。

あえてこの最もむずかしい問題について語るとき，人に不快感を与えないよう，慎みを保ちたいと思う。

若人の皆さん，私の話はあなたがたにとって非常に重要なものである。皆さんの将来の幸福にかかわる話だからである。聖典を読んだことのない人にとって，耳新しい事柄が幾つかあるかもしれない。

はじめに，この世に誕生する以前，皆さんは天父と共に住んでいた。天父は実在の御方である。実際に生きておられる。この地上に生きて天父の存在を証する人々がいる。私たちはこの大会で天父のしもべたちのその証を聞いた。天父は生きておられる。私はそれを証する。

天父はそこで，皆さんを知っておられた。皆さんを愛しておられたので，主は幸福と永遠の進歩とを願われた。神は皆さんが自由に選び，正しい選択の力によって成長し，御自身と同じようになることを望まれた。そのようになるために，私たちは神のみ前を去らなくてはならなかったのである。それは学校に行くために家を離れるのと似ている。ひとつの計画が示され，各々が天父のみ前を離れてこの世の生活を経験することに賛成した。

私たちがこの世に来るに際して，ふたつの大切なことが用意されていた。ひとつは，私たちは神のかたちにかたどって造られた肉体を受けるということである。肉体を通じ，それを正しくコントロールすることによって，私たちは永遠の生命と永遠の幸福を得る。ふたつには，私たちが力を増し，霊的に強くなるように試みられるということである。

さて，最初の目的は非常に重要である。なぜなら，私たちに与えられたこの肉体は，将来復活して，永遠に私たちに仕えるものとなるからである。

神の計画のもとに，アダムとイブが私たちの最初の両親として地上に送られた。彼らは，この地上にやってくる最初の霊たちに肉体を用意することができた。

私たちの肉体には，神聖な創造の力が備えられた。さながら火に，他の物に火をつける力があるのと同じように。この賜はただ神聖な結婚の絆の中でのみ用いられるべきものであった。この力を行使することにより，肉体が創造され，霊がそこに宿り，新たに人間がこの世に生まれる。

この力は善きものである。それによって家庭が作られ，維持されるのであり，幸福の土台は家族生活の中に見い出されるのである。この力は，この世に生まれてくるすべての人に授けられる。それは神聖で重要な力である。私は友である若人に繰り返して言う。この力は善きものであると。

十代の皆さんも，アダムとイブのあらゆる息子，娘と同様，この力を内に持っている。

創造の力，いうなれば生殖の力は，

単に神の計画に付随する事柄ではなく，その計画の基礎をなすものである。この力なしに，計画は実施できなかった。この力を誤って用いることは，計画を崩壊させることになる

皆さんがこの世の生涯で得ることのできる幸福の多くは，神聖な創造の力をどのように使うかにかかっている。若い男性は父親になることができ，若い女性は母親になることができるという事実は，皆さんにとって最も大切なことである。

この力は皆さんの中で成長し，自分の伴侶を求めさせ，その人を愛し，自分だけのものにしたいと思う力を与えてくれる。

繰り返し言うが，生命の創造において働くこの力は神聖なものである。皆さんはいつの日か，自分の家族を持つことができるであろう。そして，この力を行使して，子供を自分の所へ招くことができる。幼子が皆さんの子供となるのである。自分自身の形に似せて創造された幼子が……。あなたは力と影響と機会を支配してひとつの家族を築くことができる。しかし，それには大きな責任が伴うのである。

この創造の力には，強い欲求と衝動がつきものである。皆さんは，自分の関心や態度の変化の中に，それらをすでに感じられたことであろう。

十代に入ると，急に少年も少女も興味深い新しい変化を見る。皆さんは自分や他人の体の姿，形の変化に気付くことであろう。また，肉体の欲求のささやきをも経験するであろう。

この創造の力は，少なくとも二面を持たなければならなかった。すなわち，第一にそれは強くなければならず，第二にそれはある程度継続するものでなければならなかった。

この力は強くなければならない。そのため，ほとんどの男性は生来，未知のものを追い求めるのである。心の内にそのような力が存在しなかったならば，男性は家庭や家族を支える責任をいやがったことであろう。またこの力は継続するものでなければならない。なぜなら，それは家族生活を結ぶものとなるからである。

皆さんはまわりにいる動物の世界を見わたして理解できる年令に達していると思う。この創造の力が束の間で，ある季節にだけ力が現われるものの中に，家族生活は存在しない。

生命が続くのはこの力による。試練や恐れや失望に満ちた世界は，希望と喜びと幸福の国に変化できる。子供が生まれるたびに，世界は幾らか白紙の状態を取り戻すのである。

若人の皆さんにもう一度言いたいと思う。皆さんの内にあるこの力は善いものである。それは父なる神からの賜である。他の何物でもないこの力を正しく行使することによって，私たちは神に近い者となれるのである。

私たちは，ささやかではあるが，天父が子供である私たちを治めるときに持っておられると同様のものを数多く持つことができる。これよりも偉大な試験の場や学校を想像はできないであろう。

そうであるとすれば，教会における結婚が非常に神聖で重要なことに何の不思議があろうか。これらの創造の力を行使する結婚が，注意深く計画されて人生の最も厳粛な一段階となるべきことの理由を，あなたは理解できるだろうか。主が結婚式を執行する目的で神殿を建てよと言われたことを，何か変わったことのように思うべきだろうか。

ここで，私は別のことを皆さんへの警告として話したいと思う。はじめに私たちの間に天父の計画に反対した者がひとりいた。彼はその計画を崩壊させると誓った。

彼は肉体を得ることを許されず投げ落とされて自分の王国を築くにしても永遠に限界を置かれることになった。そして悪意とねたみを持った。彼は創造の力が神の計画にとって鍵とも言うべき重要な位置を占めているのを知っている。

彼は，あなたが未熟なうちや若過ぎるときにこの力を使ったり，間違った方法で使うように誘惑すれば，あなたが永遠進歩の機会を失ってしまうことを知っている。

彼は目に見えない世界に実在して強大な力を持っている。彼は神聖な創造の力を守ることができるように与えられた律法を破れと，その力を用いてあなたに勧めるであろう。

これまでは，彼は公然と人を不道徳へ誘うようなことはしなかった。ひっそりと隠れて，若者や大人が神聖な創造の力をいい加減に考えるように導くのである。神聖で美しいものを，普通の水準に，あるいは俗悪な水準に落とさせようとして。

しかし，現在，彼の策略は変わった。彼はこの力を，ただ満足させるべき欲望であると説いている。この力を使うには何も責任がいらないと教え，快楽だけが唯一の目的だと言うことであろう。

彼の悪らつな誘惑は町の看板に見られる。冗談に語られ，歌われ，テレビや劇場に現われる。ほとんどの雑誌に，皆さんは驚きの目を見はるであろう。言葉は御存じと思うが，ポルノを扱った雑誌がある。この神聖な力を誤用し，汚させようと，公然と邪悪な誘惑の手が伸びている。

皆さんは，神聖なこの力を誤らせようとする誘惑が絶えず目の前にある社会の中で，成長している。

私は皆さんに忠告したい。次の言葉を忘れないように。

他のだれにも，皆さんの体に少しなりとも触れさせてはならない。た

とえどのような人であっても！　そのように言う人は，自分の罪を皆さんにも負わせる人である。私は皆さんに，清さを保ちなさいと教える。

命を生み出すこの力を体験せよと勧める者には，背を向けることである。

そのようなことは現在の社会で皆がやっているというのは，理由にならない。

ふたりが合意の上だからというのも理由にならない。

愛情の当然の表現だと考えるのも，正しいことではない。

私たちは，結婚の誓約によらなければこの神聖な力を正しく行使できないのである。

これらの神聖な力を，決して誤って行使してはならない。

さて，友である皆さんに，真剣に厳粛に話さなければならないことがある。神ははっきりした言葉で，純潔の律法を犯すときには悲惨と苦悩を味わうと言われた。「罪悪は決して幸福を生じたことはない。」（アルマ41：10）

この賜の行使について，神は子供たち全員を導く律法を定められた。

神が意地悪で，復讐するために，道徳律を破った者に罰を与えるというのではない。律法はそれ自体確立されているのである。

皆さんが気高い人生を送るならば，栄光に輝く王冠が待っている。その冠を失うだけでも充分な罰であろう。しかしまれに，私たちは与えられる罰と同時に罰そのものからも罰せられることがある。

私の声を聞いている人の中には，すでに罪に落ちた若者がひとりならずいるに違いない。若人の皆さんの幾人かは，悪気なしに誘惑にのり，この力を間違って使ったことがあるであろう。

若い友人たちよ，このことを知って欲しい。大いなる清めの力がある。あなたはもう一度清くなることができる。

もし教会員でないならば，バプテスマの誓約自体がとりわけ洗い清めを象徴している。

教会員である人にとっては，苦痛は避けられないにしても，確かに可能なひとつの方法がある。神のみ前に汚れなく清く立つことができるのである。罪は消え去り，平安が得られる。監督のところへ行きなさい。彼がその清めの力の鍵を持っている。

そうすれば，いつかあなたはこれらの力の完全な正しい表現を知り，正しい家族生活の中で，それに伴う幸福と喜びとを知ることができるであろう。ふさわしいときに結婚誓約の絆の中で，それ自体の結実として子孫を得る，愛の神聖な表現に身をゆだねることができるのである。

いつの日か，皆さんは幼子を腕に抱き，夫婦が天父と協力して生命の創造に携わったことを知るであろう。子供はあなたのものであるそのことからあなたは，自分自身よりも他の人をもっと愛するようになるであろう。

私の知る限りにおいて，この経験は自分の子供を持つか，他人の子を養子にして自分の家族同様その誓約の中で育てる以外に，知ることのできないものである。

皆さんの中には結婚の祝福を受けていない人もいるであろう。しかしたとえそうであっても，創造の神聖な力は守り抜きなさい。偉大な償いの力があなたに及ぼされるからである。

自分自身を愛するよりもさらに深く愛することのできるその幼子によって，皆さんはまことのクリスチャンとなる。人がまれにしか知り得ない，聖典に言われている「父」という言葉の意味を知るのはそのときなのである。あなたは愛の何であるかを感じ，神が私たちに対して抱いておられる関心を悟るであろう。

至高なる神に与えられる崇敬と誉れと讃美の全称号を意味する呼び名として，簡単な「父」という言葉が選ばれたことには，大きな意味があるはずである。

皆さんの持つ賜を大切に守って欲しい。幸福がそこにかかっている。今はただ期待し，夢見るだけの永遠の家族生活も，天父が創造の力というあらゆる賜中最大の賜を授けて下さっているので，やがて現実となるからである。それは幸福の鍵である。この賜を神聖に，清く保ちなさい。主の命じられる通りに行使しなさい。

若い友人たちよ，この人生には大きな幸福と喜びがある。私はそのことを証できる。

私は，皆さんが愛し愛される伴侶を得る姿を目に浮かべている。皆さんが結婚の聖壇の前で神聖な誓約を交わす姿を心に描いている。愛が成就されて，自分の家庭を持つありさまを想像している。また，皆さんが子供を得，皆さんの愛が子供と共に成長してゆく様子を胸に描いている。

私は心に描くその姿に，わくを設けることができない。たとえできても，わくをはめようとはしないであろう。なぜなら，その姿には限界がないからである。主の律法に従うならば，その幸福には限りがないであろう。

神の恵みが若人の皆さんの上にあるようにと祈る。天父が皆さんを見守り，支え，この神聖な賜の表現において皆さんが天父に近くいられるように。天父は生きておられる。神は私たちの父であられる。これらの証を，イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



真の教会

十二使徒評議員会会員

リグランド・リチャーズ

兄弟姉妹，霊感豊かな今大会の最後の部に，少しの時間をいただけたことは身に余る光栄である。今大会を通じて兄弟たちの説教を聞きながら，主が回復された教会に大会の開催を定められたことに対して深い感謝を感じずにいられなかったのは，皆さんも同様であろうと思う。

この場で聞いた霊感あふれる勧告や助言を今一度考えて，私たち自身の生活や家族や若者たちの生活を整えるのに役立てていただきたい。私たちは隣人や友人とどのように交際するかについて教えられ，きょうここで話された中から，地域で政治活動に参加する際の自分たちの責任をも学んだ。

ついいましがたは聖歌隊の美しい歌声で「うるわしき朝よ」を聞いた。考えてみていただきたい。これこそ現代の世界に伝えるべき最も重要なメッセージである。スミス大管長は開会説教の中で,「主のみ業は勝利を得るであろう。地上のいかなる力をもってしても，真理が広まり，あらゆる国に福音が伝えられるのを妨げることはできない」と言われた。

また昨晩の神権会で,「福音は進み行き，やがて全地を覆うであろう」と言われた。福音が進み行き，全地を覆うとすれば，全地に進み行くその業を助けるにあたって，家族共々私たち末日聖徒に課せられた責任はなんと大きいことであろうか。今日の世界にあって，まだこの教会の会員ではない隣人や友人に，聖歌隊がいましがた歌った通りの福音の回復を証することほど，価値のあるメッセージはない。

古代の使徒ペテロの言葉を考えてみたい。彼は当時の聖徒たちに向かってこう語っている。

「……あなたがたは，選ばれた種族，王国の神権者，聖なる国民，神につける民である。(それはなぜか) それによって，暗やみから驚くべき栄光に招き入れて下さったかたのみわざを，あなたがたが語り伝えるためである。」(欽定訳Ｉペテロ２：９)

私たちは今大会で，イエスが言われたように光を人々の前に輝かし，人々が私たちのよい行ないを見て，天にいます私たちの御父をあがめるようにしなさいという勧告を受けた。(マタイ５：16参照)

パウロによれば,「……信仰は聞くことによるのであり，聞くことはキリストの言葉から来るのである。」(ローマ10：17)

「しかし……宣べ伝える者がいなくては，どうして聞くことがあろうか。つかわされなくては，どうして宣べ伝えることがあろうか。」(ローマ10：14—15)

そのため，教会員には，この神権時代に地上に真理を回復するにあたって主がなされたみ業を全世界に向かって証する大きな責任が課せられているのである。

イエスが，弟子たちから再降臨のしるしについて尋ねられたとき，戦争と戦争のうわさがあり，疫病があり，地震があり，ききんがあり，そして国が国に敵対して立ち上がるであろうと教えられたことを，あなたがたは覚えているであろう。そのとき，さらにイエスは言われた。

「そしてこの御国の福音は，すべての民に対してあかしをするために，全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」(マタイ24：14)

イエスの言われたみ国の福音を見いだすには，人はどこに目を向ければよいのであろうか。聖句に対する人の解釈にではなく，イエスが次のように言って十二使徒に授けられたような神の力の存在するところにである。

「あなたがたがわたしを選んだので

はない。わたしがあなたがたを選んで聖任したのである。」(欽定訳ヨハネ15：16)

「……そして，あなたが地上でつなぐことは，天でもつながれ……」(マタイ16：19)

だれでも聖句のある箇所を抜き出してそれを基に教会を組織することはできるが，枯れ木から生きた枝をどのようにして取ろうというのか。主のみ名によって事を行なう権威，権能を，どのようにしてそこに注入しようというのだろうか。

それは，正式に任命されなければ市長や知事や大統領の職務を代行できないのと同じことである。天父の王国においても，それを与える権利を持った人によって神からの権能が与えられるのでなければ，どんな仕事もなし得ない。

そのため，私たちは福音の回復の証し人としてここに立ち，キリストが生きておられ，天父が生きておられ，御二方が地上を訪れられたことを知っている，と全世界の人々に向かって証を述べるのである。予言者ジョセフのことを歌った歌にあるように，彼は数ある教会のうちのどこに加入すべきかと尋ねたその答えとして，どの教会にも加入してはならない，彼らは人の戒めを教えとして教えているからであると言われたと，宣言した。

人が少し心を開きさえすれば，どこで真理を見つけられるかを，さして困難なく知ることができると私は思う。もちろん，私たちは真理を探求する際に，聖書をそのガイドとして使う。私の印象に鮮やかに残っているのは，オルソン・F・ホイットニー長老の経験である。彼は十二使徒であったが，ある大会の席上，このような経験を述べた。その言葉を読んでみたいと思う。

「しばらく前のこと，ローマカトリック教徒の学者がユタ州に来て，ソルトレーク・タバナクルで演説したことがあった。私は彼とかなり親しくなり，自由率直に意見を交わした。彼は恐らく12カ国語は話せるであろうと思われるほどの学者で，神学，法律，文学，科学，哲学などにも通じていた。ある日，彼は私に次のように言った。『あなたがたモルモンは何も御存じない。あなたがたの占めている立場の重大さもわかっておいでてない。道理にかなう教会は，全キリスト教会の中であなたがたの教会のほかにはたったひとつ，カトリック教会です。問題はカトリックとモルモンの間のことです。私たちが正しければあなたがたが間違っていますし，あなたがたが正しければ私たちが間違っています。問題はただそれだけです。プロテスタントは存在する理由がありません。なぜなら，もし私たちが間違っていれば，彼らは私たちから分かれて行ったのですから私たちと同じように間違っていますし，またもし私たちが正しければ，彼らはずっと以前に私たちから離れ去って背教したのですから真の教会とは言えません。私たちが主張するように，もし使徒ペテロから神の力が継承されているなら，ジョセフ・スミスやモルモン教徒の必要性はありません。でももし私たちがそのような力を持たなければ，ジョセフ・スミスのような人が必要で，モルモン教徒がただひとつ道理に合っている教会になります。要は福音が古代から続いているか，のちの時代に回復されたかのどちらかです。』」(リグランド・リチャーズ「奇しきみわざ」pp. 2，3)

しばし考えてみれば，イエスが，再降臨の前にすべての民に証をするために全世界に宣べ伝えられるであろうと言われた，その永遠の福音を見いだそうとする者は皆，この話が当を得て正しいと結論せざるを得ないと思う。

だれでも聖典を研究すれば，予言者たちが初期の教会からの背教を告げていることを知るであろう。黙示者ヨハネがパトモス島に追放されたとき，主の天使が現われて彼にこう告げた。「ここに上ってきなさい。そうしたら，これから後に起るべきことを，見せてあげよう。」(黙示4：1)

天使はそれから，天上の戦いから最後の場面に至るまでのあらゆることをヨハネに示し，サタンに力が与えられて聖徒（聖徒とはキリストの教会でキリストにつき従う人々であった）に戦いをいどむことを見せ，すべての部族，民族，国民を支配する力がサタンに与えられたと告げた。(黙示13：7参照)

もし福音が聖ペテロの時代から現代までずっと続いているとしたら，なぜ聖書にこのような言葉があるのだろうか。

パウロは当時の人々に，イエスの再降臨がある前にまず背教が起こり，不法の者が現われると絶えず警告していた。(IIテサロニケ2：1―4参照）また，ほかの予言者たちも同様に，国にききんが起こる時代のことを証した。予言者アモスはこう告げている。

「主なる神は言われる，『見よ，わたしがききんをこの国に送る日が来る。それはパンのききんではない，水にかわくのでもない，主の言葉を聞くことのききんである。彼らは海から海へさまよい歩き，主の言葉を求めて，こなたかなたへはせまわる，しかしこれを得ないであろう。」(アモス8：11―12)

それはなぜか。地上には見つからないからである。

もし福音が地上にずっと続いてあったとしたなら，主の天使がヨハネ

の前に現われて，サタンが聖徒たちに戦いをいどんですべての部族，民族，国民に打ち勝つことを示したときに，「ただし，永遠の福音を保ち続ける者もいた」と例外を付け加えなければならなかったであろう。これこそ，当時，真理が地上になかったことの証拠にほかならない。

聖典には，末日に福音の回復される約束が数々載っている。私が好きなのは，ペンテコステ（五旬節）の日の後に，ペテロがキリストを死に追いやった者たちに向かって語った言葉である。

「だから，自分の罪をぬぐい去っていただくために，悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは，主のみ前から慰めの時がきて，あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを，神がつかわして下さるためである。このイエスは，神が聖なる預言者たちの口をとおして，昔から預言しておられた万物更新の時まで，天にとどめておかれねばならなかった。」（使徒３：19―21）

ペテロが神の予言者であるとするならば，私たちも世の人々も，更新（改革ではない）の伴わないキリストの再降臨は期待できないわけである。家の改造と新築とでは大きな違いがある。私が携わった伝道活動から知る限りでは，世のはじめからすべての聖なる予言者たちの口を通して告げられていたあの万物更新を主張している教会は，この教会以外にない。

聖歌隊によって歌われたこの天父と御子の訪れに引き続いて，モロナイの訪れがあった。彼はキリストから400年後の時代の予言者で，モルモン経の原版を携えてきた。

また，イエスを証したために首を打たれたバプテスマのヨハネが復活した体で現われ，ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに，罪を赦すために水に沈めるバプテスマの権能を授けた。そしてヨハネは，やがてメルケゼデク神権も回復される，それは手を按いて聖霊の賜を授ける権能である，と告げた。

そして，主イエス・キリストの使徒で，変貌の山へ主と共に登ったペテロ，ヤコブ，ヨハネが現われ，メルケゼデク神権を回復した。たとえ巨万の富を積んだとしても，天父の子供たちにとってこれらの出来事ほどに意義あるものを買うことができるだろうか。私たち一人一人に，私たちの家族に，友に，愛する人々に，こうした聖なる天使たちの訪れのようなことが起こるだろうか。

しかも，これだけではない。その後，マラキの予言した予言者エライジャの訪れがあった。主の大いなる恐るべき日が来る前に彼の訪れがなければ，主の降臨のときに全地が荒地と化すであろうと予言した，あの予言者である。マラキの言葉を読もう。

「彼は父の心をその子供たちに向けさせ，子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て，のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである。（マラキ４：６）

主が自分にみ旨の奥義を示されたと使徒パウロが言ったときの，彼の次の言葉を理解する手がかりがそこにある。

「それは，時の満ちるに及んで実現されるご計画にほかならない。それによって，神は天にあるもの地にあるものを，ことごとく，キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。」（エペソ１：10）

私たちは時満ちたる神権時代に生きており，エライジャの来訪によって彼の使命を託する鍵が与えられた。私たちが聖なる神殿を建てる理由はここにある。そのために，私たちにはこの遠大な規模の系図プログラムがあり，これと同じような事業は世界のどこを捜してもみあたらない。予言者たちは，これらの聖なる予言者たちの来訪を予見していた。

ヨハネはパトモス島にいる間に，サタンが聖徒たちに闘いをいどんで彼らを支配するその強大な力を見たばかりでなく，「もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者，すなわち，あらゆる国民，部族，国語，民族に宣べ伝えるために，永遠の福音を」たずさえてきたのである。（黙示14：６）

もし福音が絶えることなく存在していたとすれば，この出来事は必要なかったはずである。さらにヨハネは言った。

「神をおそれ，神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである……」（黙示14：７）

ジョセフ・スミスが驚くべき示現を受けた時代には，天と地と海と水の源とを造り，まだ御自身のかたちにかたどって人を造られた神を礼拝する教会は，地上に存在しなかった。人々はどこにでも存在する「霊的実在」を拝んでいたのである。人々の描く神は，体なく，手足なく，感情もなく，至高の王座に座するという神であり，それはまるで人に描き得る「無」というものの最上の説明である。体がないとしたら，どうして話すのか。どうして聞くのか。どうして理解し，どうして話すのか。

モーセはイスラエルの民を約束の地へ導いていたときに，このことについて語った。彼は民がそこに長くとどまることはなく，国々の間に散らされるであろうと言い，続けて語った。「その所であなたがたは人が手で作った，見ることも，聞くことも，食べることも，かぐこともない木や石の神々に仕えるであろう。」（申命４：28）

これこそ，ジョセフ・スミスが驚くべき示現を受けた当時，世の人々が礼拝していた神なのである。

モーセはさらにほかのことも見た。彼は，末の日（私たちの時代がその末の日である）に主の民が主を求めるならば，確かに主を見いだすということを知っていたのである。(申命4：29参照) ジョセフ・スミスはヤコブの「あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に，願い求めるがよい。そうすれば，与えられるであろう。」(ヤコブ1：5）という訓戒に答えて，モーセが語った通りに，行って主を求め，ついに真実の生ける神を見いだした。私たちはこの出来事について，世界のあらゆる民に伝える証を持っている。

使徒パウロが，イエスとイエスの十字架にかけられたこと以外は知るまいと言ったときの彼の言葉が思い出される。(Iコリント2：2参照) それは，パウロが古代の予言者たちを知らず，予言者たちを軽んじたという意味ではなく，新しい時代が到来したということである。

予言者たちが告げていた神の御子はすでに，地上に来ておられた。パウロはさらにこう言っている。「……わたしは，そうせずにはおれないからである。もし福音を宣べ伝えないなら，わたしはわざわいである。」(Iコリント9：16)

これと同じ意味で，私たちは人の子御自身によってもたらされた福音の回復以外のことは知るまい。この神権時代の予言者たちから離れないように。私たちがこの驚くべき真理を世の民に分かたないならば，私たちはわざわいである。

兄弟姉妹たち，私はこれが永遠の父なる神のみ業であることを知っている。これこそ，現代世界最大の事業である。世の正直な男女が，主を心から愛しながら，時間を取ってこの教会の姿を学び，たがうことなく導きたもう永遠の父なる神に願い求めるならば，この教会に加入しようとしない者はない。これこそ，あなたがたに述べる私の証である。この証を，イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



平和

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

最後の晩餐が開かれたエルサレムのあの二階の部屋で，イエスは弟子たちに重要な教えを数多く授けられた。その中で，イエスはこのように言われた。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは，世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな，またおじけるな。」（ヨハネ14：27）

イエスはまた，このようにも言われた。「これらのことをあなたがたに話したのは，わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは，この世ではなやみがある。しかし，勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」（ヨハネ16：33）

平和というのは，今日よく使われる言葉である。私たちはこの言葉を新聞，雑誌をはじめあらゆる方面において見聞きしている。人々は確かに平和を探し求めて世界中をあちらこちらと走り回っている。私たちはこの言葉を当世風の挨拶と考えているが，しかし人類始まって以来の古い言葉である。

聖書の国々の民は「平和があなたにあるように」とか「共に平和があるように」と言って，互いに挨拶を交わしている。しかし，地上のこの狭い地域の住人は，支配者の交替とともに，戦争，捕囚，隷属の境遇と常に辛酸を味わわされてきた。キリストの時代には，民はローマ帝国の支配下にあった。

従って自然に，ユダヤ人は「贖い主」，「救い主」を期待し，自分たちを束縛から解放してくれると考えたのである。イザヤは次のように記している。

「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた，ひとりの男の子がわれわれのに与えられた。まつりごとはその肩にあり，その名は，『霊妙なる議士，大能の神，とこしえの父，平和の君』ととなえられる。」（イザヤ9：6）

聖地と呼ばれるこの地に，平和は来なかった。現在でさえ，古い戦車や武器の残骸が道の両脇にさびついたまま放置され，常駐の兵士たちが国境線を警備している。世界のどこにも平和はやってきていない。ところが，山上の垂訓の中で，キリストは平和についてこう教えられた。「平和を作り出す人たちは，さいわいである，彼らは神の子と呼ばれるであろう。」（マタイ5：9）

イエスは弟子たちに向って次のように言われた。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは，世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな，またおじけるな。」（ヨハネ14：27）

キリストが言われた平和とはどのようなものであろうか。キリスト御自身の行ないが，それを示していると思う。

最後の晩餐ののち，キリストが弟子たちに教えを説き終えられてからのことを，ヨハネはこう記録している。

「イエスはこれらのことを語り終えて，弟子たちと一緒にケデロンの谷の向こうへ行かれた。そこには園があって，イエスは弟子たちと一緒にその中にはいられた。イエスを裏切ったユダは，その所をよく知っていた。イエスと弟子たちとがたびたびそこで集まったことがあるからである。さてユダは一隊の兵卒と祭司長やパリサイ人たちの送った下役どもを引き連れ，たいまつやあかりや武器を持って，そこへやってきた。しかしイエスは，自分の身に起ろうとすることをことごとく承知しておられ，進み出て彼らに言われた，『だれを捜しているのか』。彼らは『ナザレ

のイエスを』と答えた。イエスは彼らに言われた，『わたしが，それである』。イエスを裏切ったユダも，彼らと一緒に立っていた。イエスが彼らに『わたしが，それである』と言われたとき，彼らはうしろに引きさがって地に倒れた。そこでまた彼らに，『だれを捜しているのか』と，お尋ねになると，彼らは『ナザレのイエスを』と言った。イエスは答えられた，『わたしがそれであると，言ったではないか。わたしを捜しているのなら，この人たちを去らせてもらいたい。』」（ヨハネ18：1－8）

この平静さは，私たちにまねができるだろうか。この平安な態度を。殺そうとして捕らえに来た人たちに，「わたしはここにいる。私を連れて行きなさい。だが私の友だちは去らせて欲しい。」と言われたのである。

その後，イエスがピラトの前で厳しい尋問を受けられた時にも，ピラトはイエスを怒らせることができなかった。イエスはまったくの平安の中で尋問に答えられたのである。ピラトは，イエスに何の過ちも見つけられなかった。

イエスが十字架につけられてのちに復活してから，弟子たちに語られた最初の言葉は，「安かれ」（ヨハネ20：21）であった。

私たちがどの時代にも平安の秘訣を探し求めながら，それを見つけられないでいるのはどういうことであろうか。あえて申し上げたい。それは，だれかが自分のために平和を作り出してくれるのを期待しているからである。エドナ・セント・ビンセント・ミレーは次のように言った。「神と共にある人の心の平安以外に，今，地上に平安はない。………自分に平安のない人は，隣人と平和にやっていくことができない。」（*Conversations at Midnight*「真夜中の会話」ミレー選集より）

皆さんは，隣人の芝生の手入れを手伝って心に平安を覚えたという経験がないだろうか。果実もぎや作物の収穫を手伝って心に安らぎを感じたことはないだろうか。隣家の道路の雪かきをして，自分の心に平安を覚えたことはないだろうか。また，問題の解決に力を貸し，人生に新しい未来を開く手伝いをしてあげて，自分の心に平安を見いだしたことはないだろうか。皆さんは「悲しむ人を慰め，人を喜ばせ」ているだろうか。

また皆さんは罪の意識を覚えたことがあるだろうか。皆さんは，罪の意識によって心に不安と動揺が生じることを御存じだろうか。それは心や体の病気を引き起こすことさえある。しかし，このような感情が起きたときそれを鎮めることができるように，慰めの祝福があることは御存じだろうか。不親切な言葉や思いやりのない行動やそれよりもっと深刻なことがきっかけかもしれないが，何はともあれ罪の意識をぬぐい去るまでは，心の平安を望むことはできない。

今，皆さんは友人，隣人，あるいは神の子供のだれかに対して，不親切な気持や愛にもとる感情がありはしないだろうか。そのような人に対して，何か良いことをするようにしなさい。そして心に苦い思いがなくなるまで，それを続けなさい。

皆さんは日曜学校で教えていて自分が教えた福音の原則が生徒に役立ち，生徒に人生の希望を与えたと感じたことはないだろうか。そのときの安らかな気持と喜びを思い出していただきたい。だれかに福音を教えて，その人が教えを受け入れてくれたときに喜びを感じた経験はないだろうか。伝道の仕事は実に感動的である。

皆さんは，福音を知って受け入れ，イエス・キリストの福音の教えに一致して生活することから得られる心の平安や喜びを感じたことがあるだろうか。神殿で死者のための身代わりの儀式を受けて，心に安らぎを感じたことがあるだろうか。

平安の秘訣は奉仕である。キリストはこのように言われた。「そこで，あなたがたのうちでいちばん偉い者は，仕える人でなければならない。」（マタイ23：11）

神権の行使はすべて他人に対する奉仕であることを御存じだろうか。皆さんは神権につける義務を果たすときに，いつも平安な気持を感じてはいないだろうか。

平安は奉仕からもたらされるものである。

主は言われた。「見よ，これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」（モーセ1：39）

これが奉仕の最終目的である。神のようになるには，敵意をなくし，貪欲さを捨て，全力を挙げて人に奉仕しなければならない。主はこう言われた。「………正しき業を行なう者はよき報いを得，すなわちこの世に在りては平和を得，次の世に在りては永遠の生命を得ん。」（教義と聖約59：23）

ジョセフ・スミスは苦難のさ中に無上の平安を保った模範である。彼は37回も逮捕されては放免されてきたが，今度は戻れないことを悟っていた。ノーブーからカーセージに行く途中，ジョセフ・スミスはこう語った。

「私はほうり場へ引かるる子羊の如く行く。されど，わが心は夏の朝の如く穏やかなり。わが良心は神に対してまたすべての人に対しいささかの咎めもなし。われは罪なくして死なん。而して，世の人々は彼は残忍なる者の手に殺されたりと言わ

ん。」「教会歴史記録」第6巻，p. 605)

そのあとカーセージで，ジョセフは妻のエマにこう書き送った。「私は自分に罪なく，なし得る最善を尽くしたことを知っているが，自分の身の将来は成り行きに任せている。子供たちと………私の安否を尋ねる人たちによろしく。神がすべての人を祝福して下さるように。」(「教会歴史記録」第6巻，p. 605)

イザヤはこう言っている。「正義は平和を生じ，正義の結ぶ実はとこしえの平安と信頼である。」(イザヤ32：17) それは自分が神のみこころと一致して生活していることの確信である。

最近，私が聖地を旅行したときに案内してくれたガイドは，ヨルダンのアラブ人でサリ・ラバデという名のギリシャ正教の信者だった。彼は，「私たちはあなたに平和を差し上げます」という意味の「ハバノ・シャーロ・マリケン」というアラビアの短い歌を教えてくれた。

サリ，私たちもあなたとそして世界中の人々に，「私たちはあなたに平和を差し上げます」と言う。私たちはあなたに，キリストが「………わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは，世が与えるようなものとは異なる」(ヨハネ14：27) と言われた，あの平安，福音による平安をもたらすのである。

ひとりひとりが心に平安を持つならば，家庭に平和があるであろう。それぞれの家庭に平和があれば，国に平和がある。国に平和があれば，世界に平和がある。

「地に平和を。私から平和が広がるように」と歌うだけでなく，その通りに実行しようではないか。それを自分の目的にしようではないか。

救い主が再び来られるとき，地上に来られるそのときに，救い主は私たちが主の教えに従って人々に奉仕し，敵意と不義を捨てているならば，平安をもたらして下さる。

「中空を飛び，………地に住む者に宣べ伝えるために，永遠の福音をたずさえた」(黙示14：6)ヨハネの見た天使はすでに来ている。イエス・キリストの福音は地上に確立されて，もはや再び地上から取り去られることはない。

主の王国はすでに地上にあり主の再降臨に備えて急速に発展している。確かに主は来て，地上に平和をもたらして下さるであろう。しかしそれは私たちが主の教えに従っていることが前提となる。これは主のみ業であり，主の王国である。世に平和と永遠の生命をもたらす唯一の道である。これらのことを，イエス・キリストのみ名により証する。アーメン。

予言者の祝福



大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス

愛する兄弟姉妹，私はこの大会を通じて主が私たちと共におられ，私たちが命のパンによって養われたこと，また主の望まれるような民になる用意がよくできたと感じている。

みたまの力に導かれて賢明な勧告と教えを話されたすべての兄弟たちに感謝している。

私たちは感謝と祝福と証の心で大会を終えたいと思う。

私と家族と，教会と，また全世界に及んでいる限りない主の永遠の祝福に対して，私のこの心のあふれるばかりの感謝の念は言葉では到底言い尽くせない。

私は神の御子の贖いの犠牲を感謝している。御子の受難と死によって全人類が不死不滅の体によみがえり，御子の律法を信じて従う人々には主の王国で永遠の生命が恵まれるのである。

私はこの最後の神権時代に永遠の真理が回復されたことを感謝している。予言者ジョセフ・スミスや私の祖父である大祝福師ハイラム・スミスの使命と働きを感謝している。神の王国の鍵が再び地上の人間に託されたことを感謝している。

教会の成長，発展は私の喜びであり，拡大する伝道事業や多くの神殿や，主に仕えようと努めている人々，すべての生活が私の喜びである。

主がすべての教会員を祝福されんことを。私は自分の持つ鍵と力とによって，聖徒たちを祝福する。信仰ある家族，主を愛し，主を求める人人を。

永遠の福音の救いの真理を持っていること，「全地の面に於ける唯一の真にして生命ある」（教義と聖約1：30）教会の一員であること，天父の王国の永遠の生命に至る道を歩むことは，何という名誉であろうか。

おお，天父にして永遠なる御父よ，愛と慈悲をもってこの汝の教会と汝と戒めを守る教会員をみそなわしたまえ。汝のみたまを私たちの胸にとこしえに住まわせ，この世の試練と苦悩が終わるときには，私たちが愛する人々と共に汝のみ前に帰り，汝の宮居にとこしえに住まわんことを，へりくだって，イエス・キリストのみ名により祈り奉る。アーメン。

目　次

第142回
半期総大会
1972
10. 6-8

時の動き

1972

5.30　日本人ゲリラによるテルアビブ空港乱射事件。

7. 2　スミス大管長死去。

7. 7　ハロルド・B・リー，第11代大管長に任命される。

8.26　ミュンヘン五輪開幕。

9. 5　アラブゲリラによる，ミュンヘン五輪村襲撃事件。イスラエル選手団9人死亡。

9.12　日本大阪ステーキ部設立。

9.27　田中首相，北京において中国毛主席と会談。29日共同声明調印。

10.6　第142回半期総大会。

-8　新大管長会が支持される。ブルース・R・マッコンキーが十二使徒に，レックス・D・ピネガーが七十人最高評議員会に，O・レスリー・ストーン，ジェームズ・E・ファウスト，L・トム・ペリーが十二使徒補助に支持される。

大管長会



第一副管長
N・エルドン・タナー



大管長
ハロルド・B・リー



第二副管長
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会



スペンサー・W・キンボール



エズラ・タフト・ベンソン



マーク・E・ピーターセン



デルバート・L・ステイプレー



リグランド・リチャーズ



ヒュー・B・ブラウン



ハワード・W・ハンター



ゴードン・B・ヒンクレー



トーマス・S・モンソン



ボイド・K・パッカー



マービン・J・アシュトン



ブルース・R・マッコンキー

大祝福師



エルドレッド・G・スミス

「神の王国を出で行かせたまえ」

大管長

ハロルド・B・リー



今日，生涯で最も厳粛なこの日，私は心の奥深く貫く大きな感動をとても言葉で表現することはできない。したがって，私は主のみたまに促されて話すのでなければ，いと高き神の聖徒である愛する皆様に，この大切な歴史的な瞬間に私の心中にある思いを感じていただくことはできないであろう。

皆様と共にこの感動的な「聖会」に参加して，私の心は1835年に主がこの教会に与えられた大いなる啓示の重みをこれまでにも増して，力強く感じている。主はこの啓示の中で，神の王国すなわち教会を統治する神権の秩序について具体的な指示を与えられた。

この啓示の中で主は，大管長会すなわち主の呼び方によればメルケゼデク神権，または教会の大神権の大管長会（教義と聖約107：22）を定める4つの条件を指定された。

まず，3人の管理大祭司がいなければならない。

第2に，この3人はひとつの団体（これは十二使徒定員会であると考えられている）によって選ばれる。

第3に，この3人は今申し上げた団体すなわち十二使徒定員会によって指名され，聖任されなければならない。

第4に，彼らは教会員の信任と信仰と祈りによって支持されなければならない。

大管長会の定員会が組織されて教会を管理するためには，以上のことがすべて秩序正しく行なわれなければならない。

最初の3つの段階は，1972年7月2日に神殿で開かれた神聖な集会で，十二使徒によって正しくふみ行なわれ，大管長会を構成する人々が指名された。

そして今日，私はこれまでにも増して，最後の条件の重要性を感じている。すなわちこの大管長会は，主の言葉によれば，教会員の信任と信仰と祈りによって支持されなければならない。もちろんここで言う教会員とは，すべての教会員を指している。

しばらく前，私たちは愛と友情が豊かにあふれる光景を目にした。それは，この8月，中央アメリカ諸国やメキシコから素晴しいレーマン人の聖徒たちがメキシコ・シティー集まって，大きな地区大会が開催されたときのことである。1万6千人以上もの聖徒が広い会場に一堂に会し，教会幹部を支持する挙手をして下さった。

再びこの「聖会」の場で力強く手が挙げられるのを見て，私は兄弟たちの真実の愛と絆を感じて，口では言い表わすことのできない感動を覚えている。この会場には霊の賜があふれんばかりにみなぎっていて，疑いもなく私たちの前には，目に見える見えないを問わず，共に集っている人々が大勢いる。このような機会には私たちの主もそばにおられるに違いない。そうでないとだれが言えようか。私たちも全世界の人々もこの教会が主の教会であることを決して忘れてはならない。また私たちは全能者の指示に従って仕えなければならないのである。ニューヨーク州フェイヤットで開かれていた同様の大会で主が聖徒たちに宣言されたことを思い起こしていただきたい。今日の状態がまさにそれである。主は言われた。「されど見よ，誠にまことにわれ汝らに告ぐ，わが眼は汝らの上にあり。われは汝らの真中にあれど，汝らわれを見ることを得ず。」（教義と聖約38：7）

3カ月前，私が現在引き受けなければならないこの圧倒されるような責任の重さを感じ始めた頃，私は聖なる神殿に赴いた。そこで私は祈り

と瞑想に時を過ごし，神の人々の肖像画を見上げていた。うそ偽りのない清い人々，気高い神の人々であって，同じ召しを受けた私の先達であった。

数日前の早朝，私は自宅の書斎でただひとり思索にふけっていた。そして歴代大管長に寄せられた，最も近い人々からの賛辞を読んだ。

ジョセフ・スミスは少年時代に主から召され，神の権能を与えられた予言者であった。そしてジョセフ・スミスは神権を受け，末日に神の王国の基を置くために必要な事柄を教えられたのである。

ブリガム・ヤング大管長も，この世が造られる前から予任されていた方であった。ヤング大管長は，初期の集合地であったミズーリ州やイリノイ州の聖徒たちを激しい迫害の炎から導き出し，この人里離れた壮大な山脈の頂に聖徒のための社会を築いて，神の目的を達成するよう，神聖な召しを受けていたのである。

ジョン・テイラー大管長の容貌を見ていると，かつてジョセフ・F・スミス大管長が彼について言ったように，「これまでに知った人の中で一番清い人」がここにいる，と感じる。

いかにも聖徒らしい顔つきのウィルフォード・ウッドラフ大管長を眺めると，私は，昔のナタナエルのような人がここにいると確信できる。ナタナエルは悪意がなく，主のみたまの働きを鋭敏に捕らえる人物であった。また，いつも「みたま」の光に導かれて「何をせねばならぬのか，前以てそれを知らずにただひとすじに」歩む人物であった。

ロレンゾ・スノー大管長は，在任期間こそ短かったが，犠牲の律法を断固たる決意をもって実施することにより，聖徒たちの物質的な基盤を確立するという特別な使命を担っていた。また，知らず知らずのうちに忍び込んでいた過ちのために教会にふりかかっていた莫大な負債を除く使命も担っていた。

教義を明確にしたいとき，私はいつもジョセフ・F・スミス大管長の著書と説教に頼ってきた。彼の高貴な肖像を見ていて，未亡人となった母を助けて大平原を横切る9歳の男の子の姿が浮かんできた。また，マウイ島のハレアカの坂で示現のうちに叔父のジョセフ・スミスの訪れを受けて，力づけられた15歳の宣教師のことが思い出された。敵がい心旺盛な報道機関が教会を中傷した激動の時代に管理したのがスミス大管長であった。しかし主から任命された彼は，確固とした歩みで教会を堂々と守り抜いたのである。

ヒーバー・J・グラント大管長が私の肩に手をおいて，私の心の奥底を貫くほどの深い感動をもって私を主イエス・キリストの使徒として発表したときほど，神聖な召しの意味を深く感じたことはなかった。私を見下ろしているグラント大管長の顔を見ていると，神殿の中で，彼の手によって聖任されたとき，霊感された祝福の中に予言的な言葉があったのを，ありありと思い出すことができる。

ジョージ・アルバート・スミス大管長は，友情と愛に満ちた使徒であった。スミス大管長は実にすべての人の友であった。彼の肖像画を眺めていると，あらゆる人を友とした，あのほとばしるような暖かさを感じることができる。

背が高く，強い印象を与える大管長は，デビッド・O・マッケイ大管長である。貫くような視線が今も私を見つめているが，その目はいつも私の心を見抜いているように感じられたものである。彼と共にいることは，本当に大きな特権であった。度々感じたことであるが，マッケイ大管長の前にいるとどんなに短時間であっても，共に過ごしたことによって自分が向上したと感じたものである。

この世の栄誉は一切求めず，霊のことに喜びを感じた人。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長はそういう方であった。スミス大管長は笑顔を絶やさぬ愛する予言者であり，私の指導者であった。彼は真理については決して妥協することがなかった。正に，「神の指が彼に触れ，彼は眠りについた。」そのわずかの間に，スミス大管長は義の笏(しゃく)を私に渡して，「あなたも行って同じようにしなさい」と言われたように思われる。

そこで私はひとり立って思索の一時を持った。そのとき私の心にある思いが浮かんだ。それは，私が新しい召しにあって果たすことを記す唯一の真実の記録となるものは，私が教会の内外で，仕え働いた人々の心と生活に記録されるはずだということである。

愛するスミス大管長の死去数日後この任命を受けたが，その翌日，私は1853年に，当時十二使徒のオルソン・ハイド長老が総大会で話した説教の一節に注目した。この一節を読み，私も深く考える機会を持った。

ハイド長老の説教の題は，「神の民を導く人」であった。彼の説教から一部引用しよう。「どんな場合でも必ずこうである。人が民を導いていくように指名され聖任されるとき，その人はすでに様々の艱難と試練を乗り越え，神とその民の前に，その職に就くにふさわしいことを証明しているのである。……まだ試しを受けず，神と民の前に，また至高者の評議会の前に自分がふさわしいことを証明できなければ，出て行って教会と神の民を導くべきではない。このような例はこれまでになかった。時のはじめから，教会を導いていく人

は，みたまと全能者の勧めを理解し，教会員を知っていて，教会員からも知られている人であった。」(*Journal of Discourses*「説教集」第1巻，p. 123)

私の前に大管長の任に就いた人々の生涯を振り返ってみて，私はどの大管長もそれぞれの時代に特別な使命を帯びていたことを知った。

そして静かに自分のことを省みた。またオルソン・ハイドの評価法に照らして，私の経験を考えてみた。続いて予言者ジョセフが彼の性格形成について語った言葉を思い出した。その言葉は幾分私にも当てはまるように思われる。予言者は次のように語っている。

「私は高い山から転がり落ちる，ごつごつした大きな岩のようなものである。私が丸みを帯びていくとすれば，何かほかのものと接触して，角をとっていくしかない。それは，例えば宗教上の偏見，聖職者の策略，弁護士や学者の術策，虚偽を流す編集者，買収された判事や陪審員，それに暴徒や神を冒瀆する者や不品行な堕落した男女に後押しされて偽証する行政官に出会うときなどである。地獄が束になってそこかしこの角を打ちたたく。このようにして私は全能者という矢筒の中で磨かれ，角がとれた，矢となるのである。」

(*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 301)

心中をよぎるこうした教えを考えていると，これまでなかなか理解できなかった様々な経験や身にふりかかった出来事の意味がはっきりとわかるようになってきた。私も高い山から転がり落ちるごつごつした岩のようなところが多く，諸々の経験にもまれ，磨かれ，問題を克服して全能者の矢筒に入る洗練された矢となるべく備えられたように思われる。

私も苦しい事柄に遭遇して，従順を学ぶ必要があったに違いない。それは私のためになる経験であり，現世の様々の試練を克服できるかどうか試すものであった。

N・エルドン・タナー副管長とマリオン・G・ロムニー副管長という立派なおふたりを私の顧問として選んで，私はこのふたりも豊かに予言の賜を授かっており，私が決してひとりではないことを知っている。このふたりも試されてよしとされた，主の前に欠けるところのない人々である。私は大管長会の高潔な人々に，また立派な十二使徒や他の教会幹部の方々に本当に感謝している。

私が召された日の翌朝，愛する伴侶とひざまずいて祈っているとき，私の心は天の窓が開かれるがごとく，特別の親しみと愛とをこめてすべての教会員に届くように思われた。そして全世界の300万以上もの会員のひとりであることをしばし感じることができた。

別の機会にすでに話したことであるが，私はすべての忠実な聖徒から信任と信仰と祈りによって支持されることを，衷心から祈り求めている。私は皆様の祈りに答え，主が私を通して皆様の祈りに答えられるような大管長となるべく，真心から努めることを約束する。

この数カ月の間に，新しい霊的な理解の泉も湧いてきたように思われる。私は英国へ向かう初期の宣教師に予言者が言った次の言葉が真実であるとはっきり知っている。

「人が主に近づけばそれだけ，敵の力も主のみ業の達成を妨げようとして大きくなってくる。」(Orson F. Whitney, *Life of Heber C. Kimball*, オルソン・F・ホイットニー「ヒーバー・C・キンボールの生涯」p. 131)

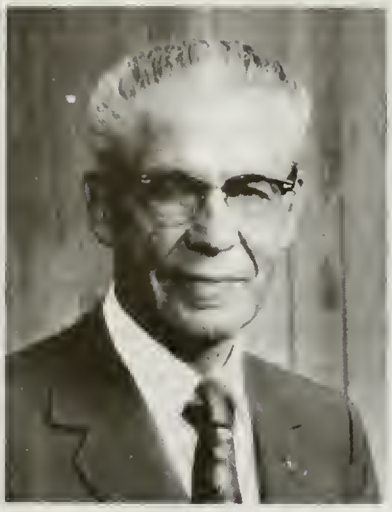
このことが当時だけでなく今日も変らぬ事実であることに一点の疑いも持っていない。しかし同時に主が言われたように，「汝らに刃向う刃は栄ゆることなからん。もし何人にても声を挙げて汝らに逆らう者あらば，わが時節至りて言い破られん。」(教義と聖約71：9―10)

私は皆様の忠誠と支持の挙手に心から感謝している。私は救い主が確かに神聖な使命を帯びておられたことを，またこれまでのすべての神権時代と同様，今日も主の教会にかかわる事柄の上に，主の導きの手があることを厳粛に証する。

目で実際に見る以上に確固とした証をもって，私は次のことを承知している。主が言われたように，「神の王国の鍵はこの世の人の手に委任され（予言者ジョセフ・スミスから後継者を通して今日に至る)，福音はこより転じ行きて世の果にまでも達せん。あたかも人手によらず山より切り出されたる石の転がり出でて，ついに全世界に充ち満つるが如し。

これを以て，願わくは天の王国の来らんため，まず神の王国を出で行かせたまえ。」(教義と聖約65：2，6)

私は全身全霊に満ちあふれる確信をもって以上の証を述べ，教会の全会員とあまねく心の清い人々に祝福があるように，主イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。



宇宙から送られてくる警告

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

この由諸あるタバナクルに集う大聴衆に向かい，また放送に耳を傾けている人々に向かい，お話することは本当に特権ではあるが，同時に重い責任でもある。私は，この美しい安息日の朝，主のみたまと祝福が私たちの上にとどまるよう，心からへりくだって祈るものである。

今日，世を取り巻く情勢を見て，私は最近読んだある論説を深く考えてみた。それはこういう論説である。

「ドイツのある天文学者によれば，地球の未熟な文明は，今，新しく発見した自己破壊能力のため，最初の大きな危機に直面しようとしている。人類がその破滅を防ぐ一筋の望みがあるとすれば，それは宇宙のかなたから電波で送られて来る勧告に必死に耳を傾けることであると言う。

この科学者の信ずるところによればどこか宇宙のかなたに，ある高度に発達した文明があり，その文明はこれまでたび重なる危機を乗り切ってきたので，まだ未熟な地球が若気の至りで過ちを犯さないよう警告しようとしているということである。

何と鋭い観察であろうか。だが，偉大なる創造主は，これまで何千年にもわたって，地上に住む御自分の民が，勧告と知恵に一心に耳を傾けることを望んで働きかけてこられたのである。ただ民は耳を傾けることもなく，目も耳も鈍かったのである。他の世界から送られて来るおとずれも，数多くあった。」(*Church Information Service*「教会情報提供誌」1970年9月)

時の初め以来，神御自らの現われによるか，天使によるか，あるいは直接の啓示によるか，示現によるか，夢によるか，また霊感によるかを問わず，私たちには神が人類におとずれを伝えられたことを示す記録がある。その最初の例は，主なる神がエデンの園で，アダムとイブに現われられたときのものである。ふたりは園を追放されたあと，主のみ名を呼び求めた。このとき，ふたりはみ姿は見なかったが，み声は聞いた。主はふたりに戒めを与えて，主なる神を礼拝し，供え物をささげよと言われた。

「……アダムは主の誡命によく従いぬ。

多くの日を経て，主の天使一人アダムに現われて言いけるは，汝何故に主に犠牲を捧ぐるやと。アダム彼に言いけるは，われその故を知らず，ただ主の誡命に従うのみ。

ここに天使語りて言いけるは，この犠牲を捧ぐることは，御父の生みたもう恩恵と真理に満てるただ独りの御子が犠牲となりたもうことのひながたなり。

この故に，汝の為すすべてを御子の御名によりて為せ。また汝悔い改めて今よりいつまでも御子の御名によりて神を呼ぶべし。

その日，父と御子の証を為したもう聖霊アダムに下りて宣いけるは，われは太初より，また今よりとこしえに，父の生みたまえる独子なり。汝堕ちしが故に贖わるることを得ん。贖われんと欲するありとあらゆるすべての人類もまた然りと。」(モーセ5：5―9)

従って，アダムは明らかに，キリストが人類の罪を贖い，苦しみを味わうことと復活のあることを啓示によって知っていた。これは，アモスの予言の言葉を裏付けるものである。アモスは「まことに主なる神は，そのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない」(アモス3：7)と言っている。

理解し難いことは，多くの人々が，歴史家によって記録された俗世の事実は喜んで受け入れるのに，人格に非の打ち所のない人たちが聖典に記録した宗教上の歴史を受け入れるこ

とを拒んでいることである。それどころか，主から出た予言が一旦成就し，俗世の歴史でも立証されているのにそれを信じようともしないでいる。特に人々は何世紀にもわたって自分の時代の予言者を受け入れることを拒んできた。そのため予言者の多くは，迫害され，嘲笑され，そして殺害されてきたのである。

予言者が悔い改めを叫んで，人々の悪に目を向けさせようとしても，大多数の人々は予言者を受け入れようとはしなかった。聖典はそれを嘆く声で満ちている。救い主が律法学者とパリサイ人を叱責された後，群衆に向かって言われた言葉を覚えておられることと思う。

「ああ，エルサレム，エルサレム，預言者たちを殺し，おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど，めんどりが翼の下にそのひなを集めるように，わたしはおまえの子らを，幾たび集めようとしたことであろう。それだのに，おまえたちは応じようとはしなかった。

見よ。おまえたちの家は見捨てられてしまう。

わたしは言っておく，『主の御名によってきたる者に，祝福あれ』とおまえたちが言う時までは，今度ふたたび，わたしに会うことはないであろう。」（マタイ23：37―39）

主に喜ばれる者になりたいと願うなら，私たちは予言者に耳を傾け，支持しなければならない。新大陸の初期の予言者ニーファイは，その民を嘆いて言った。

「私の兄弟たちよ。神は紅海の水を打ってこれを右と左へ分ける力をモーセと言う一人の人に与えたもうた。それで，私たちの先祖であるイスラエル人は乾いている陸を歩いて海を通り過ぎたが，そのあとから海の水はもとのところへかえり，エジプト人の軍隊を呑みこんでことごとくこれを溺らせてしまったことは，あなたたちが読んだではないか。

ごらん，もし神が本当にこのような大きな力をモーセに与えたもうたならば，あなたたちはなぜ互いに争って，悔い改めをしないとあなたたちに下るはずの裁きを知る力を神が自分に与えたことはないと言っているのか。

あなたたちは私の言葉を否定するばかりでなく，また私たちの先祖が宣べたすべての言葉と，前に言ったような大きな力を与えられたモーセの言葉，すなわちモーセがメシヤの降臨について告げた言葉も否定するのである。

このような証拠を立てたのはひとりモーセだけではなくて，その時からさかのぼってアブラハムの時代に至る聖い予言者たちもまた皆これを証した。

私はアブラハムの時代の後にも，これらのことを証した予言者が多かったことをあなたたちに知らせたいと思う。予言者ゼノスは勇敢に証拠立てたが，これがために殺されてしまった。

……エルサレムがエレミヤの言った通りに亡ぼされたことは私たちが知っている。それであるから，エレミヤが予言した通りに神の御子がどうして降臨したまわないことがあるだろうか。

今あなたたちは，エルサレムが破壊された事実を否定しようとするか。

私たちの先祖のリーハイも前に言ったことを証したためにエルサレムから追われた。……

今あなたたちはすでに以上のことを知っているから，自分を偽らなければこれを否定することはできない。それであるから，あなたたちは自分の知っている証拠がこれほど多いにもかかわらず，なお以上のことをみな否定しているから，この点に於て罪を犯している。……

しかし，あなたたちはすでに真理を否定し，あなたたちの聖い神に背いた。そして今に至っても錆び腐るものなく，汚れたものの入ってこない天に自分の宝を貯えようとせず，かえって裁判の日に受けなくてはならぬ責苦を積み重ねている。

あなたたちは今に至ってもなお人殺し，みだらな行い，悪事を重ねて永遠の亡びにおちいる用意をしている。もし悔い改めないと，このような亡びはすぐあなたたちにやってくる。」（ヒラマン8：11―13，16，19―22，24―26）

今日，私たちは喜んで悔い改め，神のみ言葉を受け入れようとしているだろうか。それとも，今読んだ古代の人々のように，いたずらに神の怒りを招いて，裁きの日に永遠の滅びの定めを受けようとしているのだろうか。こうしたおとずれは，あらゆる時代に霊の父である愛する天父のもとから，全地の民に送られている。そのおとずれは，私たちに幸福と祝福をもたらすために与えられたのである。天父は私たちに関心を持っておられ，私たちがこの世においても成功を収めて，幸福になることを望んでおられる。天父は世界を創造され，私たちをこの地上に送られた。従って，何が私たちにとって一番良いのかを知っておられる。そして，予言者と御子イエス・キリストを通して，私たちを救いと昇栄に導く「生命の計画」を与えられた。神が子供たちを愛しておられ，また導きたいと望んでおられることは，あらゆる点から考えて明らかである。

エジプトに売られたヨセフの経験を考えてみよう。自分の見た夢に悩まされたパロは，ヨセフならその夢を解き明かすことができるかもしれないと知って，ヨセフを呼びにやる

のである。「聞くところによると，おまえは夢を聞いて，解き明しができるそうだが……」

ヨセフは，「いいえ，わたしではありません。神がパロに平安をお告げになりましょう」と答えた。

そこでパロはヨセフに，7頭の太った牛と7頭のやせた牛，そして太った穂と，やせた穂の出てくる夢の話をした。するとヨセフは「神はこれからしようとされることを，すなわち，最初の7年間大豊作があり，その後7年間ききんの来ることをパロに警告されたのです」と言った。

パロがこの解き明かしを受け入れ，ヨセフをつかさに任命し，7年間のききんに備えて余分の食糧をヨセフに貯えさせたことは衆知の通りである。ヨセフは信仰が篤く，霊感と啓示に忠実であったため，のちに父ヤコブが，ヨセフをエジプトに売った兄たちを彼のもとに送って穀物を買い求めさせたとき，家族を救いうる地位にいることができたのである。

ヨセフは，後に証して言った。「神は，あなたがたのすえを地に残すためまた大いなる救いをもってあなたがたの命を助けるために，わたしを，あなたがたよりもさきにつかわされたのです。」（創世41,45参照）

私たちには近代の啓示もあるが，同様に古代の予言者が受けた数多くの啓示を記した記録もある。イエス，キリストの誕生，伝道，十字架上の死，そして復活に関する予言は，聖書にもモルモン経にも多く予言者によって幾度も予言されており，その中にはイエス誕生の数百年前のものもある。

私たちには，イザヤ，エレミヤ，エゼキエル，リーハイ，アルマをはじめ，この偉大な出来事を予言している多くの予言者の言葉がある。

ニーファイは，主の天使によってこの出来事を示現で示され，比較的詳しく記録している。ニーファイは，イエスの母マリヤがその腕に幼な子，すなわち神の子羊にして世の贖い主となる幼な子を抱いているのを見た。またイエスにバプテスマを施す予言者を見，聖霊がイエスの上に下るのを見，またイエスが十二使徒と共に働き，病人をいやし，悪霊や汚れた霊を追い出すのを見ている。

ニーファイはまた，救い主の生涯における最後の出来事をこのように予言している。

「しかしごらん，かれらの中には戦が起りまた戦の噂が行われる。そして天地の父の生みたもう独子が肉体でかれらに現われたもう日がくると，かれらは自分たちの悪事とかたくなな心と強情なために，その独子を受け入れることを拒み，とうとうこの独子を十字架にかける。しかし，独子は三日の間墓に横わりたもうてから，自身にある癒しの能力をもって死者の中からよみがえりたもう。それであるから，およそその御名を信ずる者は皆神の王国に救われるのである。従って，私の心はこの独子について予言をすることを楽しく思う。それは，私が，この独子の時代を先見したことがあって，心の中にその聖い御名をあがめるからである。」（IIニーファイ25：12,13）

ニーファイがこの予言をしたのは，救い主の誕生のほぼ600年前のことである。しかしこの予言に示された出来事は，後に一字一句も違わず成就している。新約聖書の筆記者たちは，これらの予言を確認して論争の余地のない証を立てている。新約聖書はまた，今述べた旧約聖書やモルモン経の他の予言が正しいことも立証している。

ルカの語る記録によれば，「天父の御使いが天空を横切って現われ言った。『きょうダビデの町に，あなたがたのために救い主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。』（ルカ2：11）すると突如として外界の宇宙のただ中から『おびただしい天の軍勢が現れ……神をさんびして言った。「いと高きところでは，神に栄光があるように，地の上では，み心にかなう人々に平和があるように」』（ルカ2：13，14）」（*Church Informatiom Service*「教会情報提供誌」論説1970年9月）

神が地上に予言者を召される目的はいかなる宇宙通信の方法であれ，神の選ばれた方法によって，全人類の幸福と祝福のために御自身のみ言葉を伝えることにある。神はその深い知恵によって，人が不死不滅と永遠の生命を得るための方法を備えられた。これがイエスの言われた，神の業にして神の栄光なのである。キリストが私たちのために偉大な犠牲を払われる以前も以後も，このおとずれ，すなわち福音の律法と原則に従順に従わなければならず，また悔い改めることによって，昇栄を得ることが出来るという知らせが，予言者を通じて啓示されている。

予言者の声に耳を傾けることは，何と大切なことであろうか。聖典には，この末日に私たちに襲いかかろうとしている災いについて警告している箇所が数え切れないほど多くある。その中にはすでに起こっているものもあるしまた今まさに起ころうとしているものもある。この破滅を免れるには，悔い改めて，神が御子イエス・キリストと予言者を通して啓示された福音の教えを受け入れ，それに従って生活するしか道はない。

「外界から送られてくるおとずれは，あらゆる時代に数限りなくあった。そしてエレミヤ，エゼキエル，ダニエル，ニーファイ，モロナイ，ペテロ，パウロによって，また近代ではジョセフ・スミスなど何人もの人により，忠実に解き明かされた。ラジ

オやテレビ通信以上の方法で，宇宙船や航空機やロケットを使うこともなく，個人に対するおとずれがもたらされたのである。人類が人の住む他の惑星に到着するには，まだまだ長い道のりがある。しかしながら，宇宙通信に相当するものはある。人類は神に語りかけ，神から答えを受けてきた。そうしたおとずれが，ここ6千年間，この地に住む人々の幸福と祝福のために送られてきたのである。」（同上）

今日，地上には予言者がおり，主はこの予言者を通してみこころを表わされる。私たちは教会員として，「すべて神のこれまでに啓示したまいしこと，すべて今啓示したもうことを信じ，なお今より後，神の王国につきて多くの偉大にして重要なることを啓示したもうこと」（信仰箇条第9条）を信じている。

かつて人類にもたらされたもので，最も祝福に満ちた出来事と言えば，イエス・キリストの贖いの犠牲であり，またイエスが与えられた「生命と救いの計画」である。人類にとって次に重要なことは，予言者ジョセフ・スミスを通して福音が回復されたことである。神はジョセフに語りかけられ，ジョセフはそれを聞いた。そして啓示によってジョセフは完全な福音が書かれた神聖な記録を世に現わした。その記録は，聖書や近代の記録と共に，イエスが地上におられたときに与えられたものと同じ「生命と救いの計画」を世の人々に提供している。

当時14才であったジョセフは，その地方の様々な教派が行なっていた改宗活動の渦に巻き込まれてひどく心を乱され，どの教派に加入すべきか知りたいと思った。あるとき聖書を読んでいたジョセフは，ヤコブ書に書かれている言葉に目がとまった。

「あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に，願い求めるがよい。そうすれば，与えられるであろう。

ただ，疑わないで，信仰をもって願い求めなさい。疑う人は，風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。」（ヤコブ1：5，6）

ジョセフは，もしだれか知恵を必要としている人がいるとするなら，それはまさに自分であると感じて，人里離れた森に行き，ひざまずいて祈った。

ジョセフはそのときのことをこう記録している。「……私は自分の真上に太陽にも増して輝く一つの光の柱を見た。そしてその光の柱は次第に下りてきて，光はついに私の上にふり注いだ。

……そしてその光が私の上に留った時，私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。その中のお一人は，『（ジョセフよ）こはわが愛子なり，彼に聞け』と仰せられた。」（ジョセフ・スミス2：16，17）

ジョセフはこの示現により，自分が生きているのが確かなように，父なる神と御子イエス・キリストが別個の生ける御方であることを知った。このとき御二方はジョセフの名前を知っておられ，祈りを聞いて答えて下さり，また彼に指示を下された。だがジョセフが自分の経験を友人や牧師と話すと，彼らの間に大きな反感がわき起こり，ジョセフは迫害され，馬鹿にされることとなった。ジョセフはこの当時のことを次のように書いている。

「……私は自分の胸の中で語るようになった『何故真実のことを話すから私を迫害するのか。私は本当に示現を受けたのだ，私がどうして神に抗らえようか。何故世の中の人は，私が本当に見たものを見ないと言わせようと思うのか。私は示現を受けたのであるからそれが真実であるのを身を以て知っている。私は神がそれを知りたもうことを知っている。私はそれを打ち消すことはできなかった。また敢て打ち消そうとしなかった。私は少くとも，本当にあったことを打ち消すならば神の怒りを受けて罪の宣告を受けることを知っている』と。」（ジョセフ・スミス2：25）

ジョセフが神にさらに指示を求めたとき，天使モロナイが現われ，ジョセフに金版について教え，示現で金版の在りかを示した。4年の後，ジョセフはその金版を受け取ったが，その金版には，神がアメリカ大陸の古代民族と交わられた記録が書かれており，完全な福音が載っていた。ジョセフは神の賜と力により，また啓示によって，金版上に刻まれた文字を翻訳した。その記録の目的は，ユダヤ人と異邦人とにイエスが永遠の神なるキリストにましまして，万国の民に現われたもうたことを確信させることにある。

モルモン経について，モロナイは次のように約束している。

「またこの記録を受ける時，それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば，神は聖霊の力によってこの記録が確かなものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。

そして聖霊の力によって一切の事の真実であるかどうかがあなたたちに解る。」（モロナイ10：4－5）

以上のことの真実であることが私に示されたことと，この末日に，予言者ジョセフ・スミスを通して福音が回復され，父なる神と御子がジョセフの前にみ姿をあらわされたこと

を心からへりくだって証する。神は生きておられる。イエスはキリストであって，私たちに不死不滅と永遠の生命とを享受させようとして，万人のために生命をささげられたことを証する。

私たちと主との間の系路は今も開かれている。従って，私たちはひそかに祈るときも，家族と共に祈るときも，公の集会で祈るときも，神がいつも共におられ，私たちの愛する父であることを感じながら語りかけることができる。また，個人的なことであろうと，私たちの持つ召しや職に関することであろうと，私たちの方でその気持ちさえあれば，主はすぐにも祈りに答え，私たちを導こうと待っていて下さるのである。

私はまた，現在の指導者ハロルド・B・リーが神により備えられ，選ばれた，神の予言者であり，また，権威ある者の手によって按手聖任されたことを証する。リー大管長こそ，教会のために，また人類のために神から導きを受ける資格のある人であり，現に今，その導きを受けている人である。

主は予言者に関し，教会員にこう仰せになった。

「……汝ら教会員は，彼が上より受くるままに汝らに与える誡命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き，わが前に全く聖き道を履むべきなり。

そは彼の言は，汝ら全き忍耐と信仰とを以って，あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。

これらのことを為さば，地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して，誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い……

主なる神かくの如く言う。われは彼に霊感を与えて，善を為すために大いなる力を以てシオンの大事を推し進めしむ。われ彼の勤勉なるを知り，また彼の祈りを聞けり。」（教義と聖約21：4—7）

願わくば，私たちが予言者の言葉を心にとめ，そして予言者に従うことができるよう，イエス・キリストのみ名によりへりくだって祈るものである。アーメン。

なぜ末日聖徒イエス・キリスト教会が必要なのか



大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

どこの会場かを問わずあらゆる場所で耳を傾けている兄弟，姉妹，それに友人の皆様，

発表された通り，この集会は末日聖徒イエス・キリスト教会第142回半期総大会の一部をなすものである。

教会が組織されたときも，また今日でも，いわゆるキリスト教会が数多くあるために，「なぜまた別の教会が必要なのか」という質問がしばしば発せられる。

まず第一に，質問そのものから明らかなことは，かように数多くの教会が存在することが，ひどく人々の心を惑わしたということである。心の正直な人々は，数ある教会の中で，もしあるなら，どの教会が真のキリスト教会なのかと考え，心を乱し悩んだ。

そのような人々の中に，14歳の少年ジョセフ・スミス（二代目）がいた。1820年の春，当時ニューヨーク州パルマイラに住んでいた彼は付近の信仰復興運動に心を乱され，また教会間の骨肉相はむ争いに惑わされ，やがてヤコブの「あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，……神に願い求めるがよい。そうすれば与えられるであろう」（ヤコブ1：5）という訓戒と勧告に心を動かされることになった。そこでジョセフは，幼子のように無垢な信仰をもって，「何れに加入すべきか知るためにすべての教派の中で何れが正しいか」を主に尋ねたのである。

「(ジョセフは言う。) 私は……ひざまずいて自分の心の願いを神に祈り始めたが，私が祈り始めるや否や，直ちに私は何とも知れぬ力によって捉えられ……

しかし，私は……全力を振りしぼって神を呼び求めたが，私が今にも絶望に打ち沈んでわが身を破滅に任せようとしたその瞬間……私は自分の真上に太陽にも増して輝く一つの光の柱を見た。そしてその光の柱は次第に下りてきて光はついに私の上にふり注いだ。

その光の柱が現われるや否や，私はわが身を縛った敵から救い出された事に気がついた。そしてその光が私の上に留った時，私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまい，他のお一人を指して『こはわが愛子なり，彼に聞け』と仰せられた。」（ジョセフ・スミス2：15―18）

この示現は，荘厳なドラマの幕開けであり，やがて10年後の教会の設立をもってこのドラマは最高潮に達するのである。

この天界からの示現の折，み言葉をかけられた御子はジョセフに，当時存在したいかなる教会にも加入してはならない，なぜなら「彼らことごとく誤れるを以てなり」（ジョセフ・スミス2：19）と仰せられた。当時の教会はイエス・キリストの教会を構成する上で不可欠な要素をふたつ欠いていた。すなわち，イエス・キリストの福音とそのみ名である。

諸教会に欠けていた，福音に絶対必要な要素とは，

1，神の属性に関する真理と，人間と神の関係についての真理
2，救いの原則と儀式に関する知識
3，神権
4，絶えざる啓示である。

まず第一の要素である，父なる神とその御子イエス・キリストの属性についてであるが，ジョセフは前述の示現のときに真理を知った。のちにジョセフは御二方について「御父は，人間の有する肉体と同じく触知し得る骨肉の体を有したもう。御子もまた然り」（教義と聖約130：22）と説明している。

神と人との関係について，ジョセ

フは，その後与えられた啓示によって，「諸々の世界」の住民（この地球上の私たちも含めて）は，「皆神より生れたる息子と娘なること」（教義と聖約76：24）を知った。

神と人とに関するこういった根本的な真理は，ジョセフ・スミス当時の教会では教えられていなかった。明らかに，当時の教会はそのような真理を知らなかったし，また信じてもいなかったからである。しかしながら，イエスと使徒の時代のキリスト教会の会員たちは，確かにこれらの真理を知り，信じ，教えていたのである。しかしこの知識は1830年に至るずっと以前に失われていたのだった。数多くの教会ができたのは，神と人に関する真の知識に欠けていたためである。

1820年代に入って，根本的な福音の原則と儀式に関する知識が，新たに天から少年予言者ジョセフ・スミスに啓示された。ジョセフはこれらの原則と儀式の多くをモルモン経から学んでいた。このモルモン経は，次のようにしてジョセフ・スミスの手に渡ったものである。

1827年9月，古代アメリカの歴史家であり予言者であったモロナイが復活して現われ，ジョセフに薄い金版に書かれた記録を手渡した。ジョセフはこの記録を，神の賜と力とによって翻訳した。この記録には，イエス・キリストの福音の原則と儀式に関する説明が古代アメリカの住民に教えられ，そこで行なわれたままに記されていた。

1829年，ジョセフはこの書物に「モルモン経」という表題をつけて出版した。この本には，復活したイエス・キリストがエルサレムの地で導きを与えられた直後，アメリカの住民の間で自ら導きを与えられたもうたことが記録されている。この住民にも，イエスはパレスチナで教えられた通りに教えられた。また御自分の教会を組織し，その指導者たちに聖なる神権を授けられた。イエスは指導者たちに，「福音の救いの儀式」の執行法を教え，示されたのである。

ジョセフはモルモン経を出版するまでに，福音の必要不可欠な要素を手にしていた。すなわち，それは聖なる神権であり，その権能によって，ジョセフは神に代わり，神のみ名によって行なうことができたのである。

1829年5月，ジョセフはアロン神権を受けた。モルモン経の中に記録されているバプテスマに関する救い主の教えを翻訳していたとき，ジョセフと筆記者オリバー・カウドリは，その主題に関してさらに大いなる光を求めて主に祈った。ふたりがひざまずいて祈ると，天のみ使いの訪れを受けた。そのみ使いは「新約聖書に見ゆるかのバプテスマのヨハネと同一人」のヨハネであると言うと，ふたりの頭の上に手を按いて，

「汝ら，われと同じ業に働く僕らよ救世主の御名によりて，われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み，悔改めの福音，罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして……」と宣言した。（教義と聖約13章）

数週間の後，ペテロ，ヤコブ，ヨハネが，ジョセフとオリバーにメルケゼデク神権を与えた。（*Documentary History of the Church*「教会歴史」第1巻，p. 40）

福音の第4の必要不可欠な要素である，「絶えざる啓示」は，神権の回復と共にもたらされた。ジョセフ・スミスが，神に関する知識と「福音の原則と儀式」に関する知識を受けたことから，ジョセフ自身，天から直接啓示を受けていたことは明白である。だが，これで必要なもの全部が揃ったわけではない。

時の絶頂におけるキリスト教会の会員は皆，聖霊の賜を受けた。聖霊とは啓示を与えたもう御方であり，聖霊を受けることは，霊的に生まれ変わることである。イエスがニコデモに言われた言葉を思い出してみよう。「だれでも，水と霊とから生まれなければ，神の国にはいることはできない。」（ヨハネ3：5）

聖霊の賜を受けることは，「みたま」により生まれることである。主は，末日聖徒イエス・キリスト教会の神権役員たちに，「バプテスマを受けて教会に入りたる者に，聖典の示すところに則り，火と聖霊とのバプテスマを受くる按手を施して，教会員たることを確認」（教義と聖約20：41）するよう指示された。

神権と聖霊の力は，教会とその会員に生命を与えるものであり，

「……聖霊の特別な職務は人の心を照らして高貴ならしめ，身も霊も清めて神聖にし，善行をはげまし，神の事を啓示するにある。」（ジェームズ・E・タルメージ「信仰箇条の研究」p. 225）

この賜がなかったなら，教会は電気のない発電所同様，全く無力なものと化してしまうであろう。

このようにして，福音の新しい神権時代を受けたジョセフ・スミスは，主によって導かれるままに，地上にキリストの教会を再建する資格を得た。その指示は，種々の啓示によって与えられたが，その中に組織の方法と日付けとを詳細に記した啓示があった。

この命令に従い，ジョセフ・スミス（二代目）は，1830年4月6日，神の戒めと国の法律に準じて，ニューヨーク州セネカ郡フェイヤットで，イエス・キリスト教会を実際に組織したのである。

これにより，「なぜ，すでに数多くの教会が存在するのに，当教会が組

織されたのか」という質問の答えは明白である。主イエス・キリスト御自身がジョセフ・スミスに教会を組織するよう命じられたからである。

また主はジョセフに教会を組織するよう命じられたばかりでなく，その教会の名前をも告げられた。

ひとつの事実を指摘しておこう。当時キリストを代表していると主張していたあらゆる教会の中で，キリストのみ名をつけていた教会はひとつもなかったのである。ジョセフは，ニーファイ人に対するイエスの教えから，キリストのみ名をつけていなければ，決してキリスト教会とは言えないということを知った。ニーファイの民の間で，キリストの教会に，どういう名をつけたらよいか論争があったとき民の間で教え導いておられたイエスはこう言われた。

「わが名をつけざるものはいかでわが教会ならんや。教会にもしもモーセの名をつけたらば，そはモーセの教会なり。あるいはまたある人の名をつけたらばそはある人の教会なり。もしわが名をつけて，わが福音を基となさばそはわが教会なり。」（IIIニーファイ27：8）

この宣言から，私たちは二重の試験法があることがわかる。つまり，キリスト教会は，（1）キリストのみ名を冠し（2）キリストの福音の上に建てられていなければならないということである。

この最後の神権時代にあって，教会の名について不確実なことのないよう主はジョセフ・スミスに言われた。

「わが教会は，末の世に於て須らく末日聖徒イエス・キリスト教会と称えらるべし。」（教義と聖約115：4）

モルモン教会という言い方は，通称である。

このように，回復された教会は救い主の二重の試験を通過している。つまり，教会名にそのみ名を冠し，キリストの福音の上に建てられているのである。これについては，疑いの余地がない。その名も福音も，主イエス・キリスト御自身によってジョセフ・スミスに啓示されたのである。

話を終えるにあたって，私は回復された福音とイエス・キリストの教会について，もう少し述べ，証をしたいと思う。

時の絶頂におけるイエスの伝道以来今私が述べてきたことほど，万人にとって重要な出来事はない。あの出来事は，ジョセフ・スミスやその同僚たちのためだけでなく全世界のためのものだったのである。

主は予言者に啓示を与えるにあたって，次のように言われた。

「……汝ら民よ，遙かなる所より耳を傾けよ。海の島々にある者よ。共に聴け。

誠に主の声はすべての人々に及ぶものなれば，一人ものがるる者なし。目として見ざるはなく，耳として聞かざるはなし，心として刺し貫かれざるはなし。

またわれ誠に汝らに告ぐ，世に住める人々よ。主なるわれは，これらの事を進んですべての人に知らせんと思うなり。

そは，われは人々を偏り見る者にあらざれば，すべての人々をしてその日の速に来るを知らしめんと思えばなり。而して地より平和の取り去られ，悪魔自らの領土を支配する時はなおいまだしといえども今や近きにあり。〔1831年において〕

されど主もまたその聖徒らを支配しその真中にありてこれを統治せん。而して……この世に下る審判のために天より降り来らん。」（教義と聖約1：1－2，34―36）

上記の言葉が語りかけられてから140年以上たった今日，地より平和は取り去られ，悪魔は自分の領土を支配し，主もまたその聖徒らを支配しておられる。主が「この世に下る審判のために天より降り来て」，その民の真中にありてこれを統治する日が近付いている。

しかし，今後，その時が来るまで，人も国家も，現在の歩みを続けるならば，大きな惨禍を被らなければならないであろう。さらに多くの「戦につきて聞かん，また戦のうわさにつきて聞かん……また地震も至る所に起り，（さらに）多くの荒廃は来らん。……全世界は揺れ動き……」（教義と聖約45：26，33）と言われている。これは主御自身の言葉である。

主はこの災難の到来を予言し，警告を与えられた。主はその災難から逃れる手段を与えるべく，福音を回復し，教会を再建されたのである。

教会の組織からおよそ1年半後，主は現在の苦難の原因を次のように説明された。

「……彼ら（地に住む人々）わが儀式より離れ去り，わが永遠の誓約を破りたればなり。

彼らは主の義を打ち建てんために主を求めずして，あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれらの神の姿を求むれども，その姿は人の世の像にしてその本質は一個の偶像なり。そは古びてついにバビロンにて，すなわちついに亡ぶべき大バビロンにて朽ちん。

されば，主なるわれ，この世に住める人々に襲い来るべき禍を知れば，わが僕ジョセフ・スミス（2代目）を呼び天より語りて彼に誡命を下せり。

また他の者どもにもこれを世の人々に宣る様誡命を与えたり」。（教義と聖約1：15―18）

世の人々に宣べるよう与えられた戒めとは，イエス・キリストの福音の原則と儀式のことである。福音を

回復し地上に教会を再建することにより，主は私たちのために，肉体的にも霊的にも救いを得る手だてを講じられたのである。

回復は，ダニエルの言った，国々の分裂する日に「天の神は一つの国を立てられます。これはいつまでも滅びることがない……」（ダニエル2：44）という予言の成就である。

またミカの言った，「末日になって，主の家の山はもろもろの山のかしらとして堅く立てられ，もろもろの峰よりも高くあげられ，もろもろの民はこれに流れくる」（ミカ4：1）という予言の成就でもある。

また「御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者，すなわち，あらゆる国民，部族，国語，民族に宣べ伝えるために，永遠の福音をたずさえてきて，大声で言った，『神をおそれ，神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである……』」（黙示録14：6，7）というヨハネの見た示現の成就となっている。

まことに，この回復とは，主の再降臨に備えて到来するとペテロが予言した，「万物更新」なのである。（使徒3：21参照）

そして，私は，イエス・キリストの特別な証し人として，これらのことが皆真実であると証する。そしてさらに私の言葉を聞き，読むすべての人々に証し申し上げたい。もし，あなた方が歴史上の事実と，回復にあたって啓示された真理とを調べ，へりくだって誠心誠意，イエス・キリストのみ名によって御父を呼び求めるなら，御父は聖霊の力によって同様の確信を与えて下さるに違いないと証する。私たちの主イエス・キリストのみ名により，アーメン。

感謝を神にささげん
予言者の導き

十二使徒評議員会会長代理

スペンサー・W・キンボール



愛する兄弟姉妹，ならびに友人の皆様，この聖会のことは長らく私たちの記憶に残ることだろう。また，支持の挙手の後，リー大管長は私たちに感銘深く話をして下さったが，これも長らく記憶に残ることだろう。石のような心の持ち主も，様々なグループの人々が一致して教会の指導者を支持し挙手をする今朝のこの光景を目にしたならば，その心を和らげたことだろうと思う。私にとって，本当に感銘深い光景であった。

いかなる舞台といえども，この末日に教会が繰り広げた数々の歴史的な場面に匹敵するほど大きな注目を浴び，かつ重要な場面を上演したものはないであろう。舞台はニューヨークに始まり，オハイオ，ミズーリ，イリノイ，そしてユタへと移って来た。舞台装置や背景も変わり，それを演ずる人々もまた変わってきた。きょう，またひとりの偉大な指導者が支持された。この場にいて，そのような重大な出来事の舞台に上っている私たちは，なんという大きな特権にあずかっていることであろうか。この教会の指導者の交替にあたって，重要なことは，神権定員会および聖徒の会衆が，感謝の念を表わし，支持と信頼を誓い，誓約を再び新たにする機会を持つということである。

ハロルド・B・リー大管長の召しは百数十年来行なわれてきた他の大管長の召しの場合と全く同じ様式に則って行なわれた。リー大管長は，過去の大管長が持っていたすべての鍵を持ち，同じ権能を持ち，同じ教会を代表している。ただひとつの違いは，教会が比較にならないくらい大きくなっているということだけである。

1830年に教会が設立された当時，教会には，ほんの一握りの人々しかいなかった。それゆえ，予言者ジョセフ・スミスは最初，非常に小さなグループを管理すればよかったのであるが，殉教したときには数千人にふくれ上がっていた。

ブリガム・ヤングが大管長になったときは約4万人の会員がいた。1877年新しい大管長ジョン・テイラーは約14万5千人を管理した。1889年，ウイルフォード・ウッドラフの管理の下には約19万2千人の会員がいた。1898年，ロレンゾ・スノーが大管長になったときは約25万3千人の会員がおり，ジョセフ・F・スミスのときには28万人近くになっていた。ヒーバー・J・グラント大管長のときは50万人近く，ジョージ・アルバート・スミスのときは100万人の会員がいた。そして1951年，デビッド・O・マッケイが大管長になったとき，110万人以上の会員がいた。

ジョセフ・フィールディング・スミスが大管長になったときは280万の会員がおり，そして，ハロルド・B・リーが大管長になった今，その数は約320万人である。しかもなお急速に増加し続けている。

リー大管長が，争いや批判で紛糾した諸委員会や総会を通じて選ばれたのでもなければ，人々の投票によって選ばれたのでもなく，神より召され，さらに人々から支持されたということを知るのは，まことに心強い限りである。

ここ3年の間に3人の大管長が教会を管理することになった。「デゼレト・ニューズ」の論説に，次のように書かれている。

「一般の組織では，このような指導層における度重なる交替は，指揮機能に混乱をきたし，人々の間にためらいと不安が見られるのが普通である。

だが，これと対照的に，この歴史的な時期に教会内に見られた感情は，安定と明確な目的に裏付けられたものであり，変遷のただ中にあっても，

確固たる一致が貫かれていた。」（1972年7月8日*Deseret News*「デゼレト・ニューズ」）

神から与えられた様式には，いかなる誤りも，争いも，野心も，利己的な動機も入る余地はない。主は，御自ら主の教会を管理する指導者たちを召してこられた。このことは非常に興味深いことであるし，重要なことでもある。

ハロルド・B・リー大管長は，1972年7月7日に大管長になったが，1941年4月10日に使徒に按手聖任されている。そして，疑いもなく，彼の前任者同様，遠い遠い過去においてこれらの責任に予任されていたのである。予言者ジョセフ・スミスは1世紀以上も前に，次のように言明している。

「世の人々を教え導く職に召されている人はすべて，前世の天上の大会議において，まさしくそのために聖任されていたのである。」（ジョセフ・フィールディング・スミス編*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 365）

初期の使徒のひとりは，ジョセフ・スミスについて次のように語っている。

「その権能は，彼が初めて天使にまみえ，賜の幾つかを授かった時に彼の頭上に固められたのではなかった。……それは，だれか聖なる神権の権能を持つ人から按手を受ける必要があった。」

程なくして，ジョセフは，この地上で最後に鍵を保持していた人々の按手により，その権能を受けた。その使徒の話はさらに次のように続いている。

「イエスは……3人の弟子たちを山に連れて行かれたとき，3人の前で変貌された。そのとき，モーセとエリヤが彼ら3人に恵みを施した。また，そのときペテロは，その神権時代の鍵を保持するよう按手聖任された。ペテロは同僚であるヤコブ，ヨハネと共にその鍵を保持した。

彼らは近代に現われ，ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリの頭に手を按いて，ふたりを彼ら自身の持つ権能，すなわち使徒職に聖任した。」（ジョージ・Q・キャノン*Gospel Truth*「福音の真理」第1巻，pp. 253－54）

私たちにとって意義深いことは，142年前の1830年4月6日から今日に至るまで，1分1秒たりといえども，教会が神より導きを受けずに存在してきたことはないという事実である。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長の体から霊が去った瞬間，ジョセフ・スミスの言葉にあるように，予任されていたハロルド・B・リー大管長は，十二使徒評議員会の会長として，正当に神の命を受け，真実の承認された指導者となったのである。

ジョージ・Q・キャノン副管長は，予任について次のように言っている。

「ジョセフ・スミスが，聖任される以前に，すでに様々の賜を持っていたということは驚くべき事実である。彼は聖見者であった。それは，聖任される前に翻訳に従事したからである。彼はまた予言者でもあった。それは，聖任を受ける前に多くの偉大な出来事を予言したからである。……また啓示を受ける者でもあった。教会が組織される以前に，神がジョセフに様々の啓示を与えていたからである。それゆえ，ジョセフは，この地上で聖任を受ける以前から予言者，聖見者，啓示を受ける者であった。」（福音の真理」p. 253）

1972年7月7日，十二使徒評議員会は，これらすべての賜を保有していた。そして1941年4月10日以来，これらすべての賜と鍵と完全な神権を保持していたハロルド・B・リー大管長は7月7日，十二使徒定員会により，これらの諸権利を保有している旨再確認された。

私たちの主は，責任の交替に備えて常に完璧な準備をしておられる。今日では，12人の使徒とふたりの副管長，合わせて14人の使徒職を持つ人々がいて，状況が変わればいつでもその権能を行使できる状態にある。この人々は皆，聖任順位が進んで自分に順番が回ってくればいつでも指導者の地位に就くことができるよう，聖任されているのである。

ジョセフ・スミスの時代から今日まで，およそ80人の人々が使徒職の権能を与えられた。だが，その中で大管長の地位に就いた人は11人しかいない。他界した人々がいるからである。主のしもべたちの死は，主の力と統治力と支配の及ぶ範囲内にあり，主は，その指導の職に就くよう予任されている人々にのみ，教会の筆頭職につくことをお許しになるのである。生も死も主の支配の要因となる。主により新しい使徒が順次選ばれ，そのときの生ける予言者に啓示され，その予言者が新しい使徒を聖任するのである。

教会の最高定員会では，聖任順位が大きな意味を持つ。使徒たちは皆，これを完全に理解しており，教会の事柄に精通している会員も皆，この完全な継承方法に熟知している。

ジョセフ・スミスは，主から受けていたすべての鍵と権威と権能を十二使徒たちに授けた。ジョセフは，彼らにすべてのエンダウメント，それに聖なる洗いと灌油の儀式を施し，また結び固めの儀式を施した。

きょう私たちは，イスラエルの子らがしたように，誓約を新たにし，新しい予言者を支持する機会にあずかっている。かつて主がヨシュアに言われたことが，きょう，リー大管長に

もあてはまる。「あなたが生きながらえる日の間，あなたの前に立つことのできる者は，ひとりもないであろう。わたしは，モーセと共にいたように，あなたと共におるであろう。わたしはあなたを見放すことも，見捨てることもしない。」(欽定訳ヨシュア1：5)

「民は……言った，『……われわれは主に仕えます』。

『われわれの神，主に，われわれは仕え，その声に聞きしたがいます』。

こうしてヨシュアは，その日，民と契約をむすび……。」(ヨシュア24：21，24，25)

きょう，私たちも，これと同じ契約を新たにしようではないか。

初期のある指導者は次のように言った。「私は大管長に注目している。——私は，船旅で氷山に閉じ込められたり，大嵐に遭遇したとき，きまって，非常に関心をもって，船長に注目したものである。……私は船長の目を見，その振る舞いを見た。……船長を見れば，自分たちがどれほど危険な状態にいるのかよく判断できる……と考えたからである。私は，甲板に出ている人が長老たちを除いて皆，船室へ降りて行きたくなるような嵐の中に生活を続けている。……」(*Gospel Truth*「福音の真理」p. 271)

それゆえ，リー大管長を支持することは，私たちの特権なのである。

恐らく，あなた方も知っていることと思うが，ひとつの大切な規則が，予言者ジョセフ・スミスによって私たちに与えられた。「王国の奥義の鍵をひとつあなた方にあたえよう。それは永遠の原則であり，神と共に永遠に存在してきた原則である。もしだれか立ち上がって他人を攻撃し，教会の欠点を捜そうとしたりまた自分は義しいが他の人々は道からはずれていると言ったりする人がいるなら，その人は，背教に通じる道をかなり進んでいると判断すべきである。そして，そのような人は，もし悔い改めないなら，神が生きてましますように確かに，背教に陥るであろう。」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 156，157)

キャノン副管長は，再び警告している。「もしあなたがたの中で，不平不満を言ったりあら捜しをしたいなどと思う人がいたり，また福音の精神に合致しないような間違った思いを抱いたり言葉を口にしたりする人がいたなら……その人は，誠心誠意悔い改め，へりくだって主にその罪の赦しを請うべきである。これは，非常に由々しい罪だからである。

神権を持つ人々は，ただの人間にしかすぎない。彼らとて過ちを犯す人間である。……（このことは神権者自身が一番良く知っている。）かつてこの地上におり立った人で，全く罪を犯さなかった人は，御子をおいてほかにはひとりもいない。……」

私は，このことが教会幹部の兄弟たちの場合にも完全にあてはまるものと確信している。

「にもかかわらず，神はこれらの人々を選び出された。……神が選び出され，神が彼らに聖なる神権の権能を授けられたのである。こうして，これらの人々は地上における神の代表者となったのである。神はこれらの人々をキリストに従う群れの羊飼いとし，またシオンの城壁の番人とされた。そして，神がこれらの人々に与えられた権能に関しては，神がすべての責任を負っておられる。主イエスの日に，これらの人々は主の御前に立って，この権能をどのように行使したかによって裁かれるであろう。もし彼らが，この権能を誤って行使したり，主のみ業や主の民の救いに災いする方向で行使したならば，主イエスの日に災いが彼らに下るであろう……。」(「福音の真理」p. 276)

この使徒はまた，主は裁いたり叱責したりする権能を，正規に組織された教会の評議会にのみ与えておられるのであって，一般の人々には与えておられない，と説明している。「そして聖なる神権の権能に対し……反抗の声をあげる者は……悔い改めない限り，地獄へ落ちるであろう。」(同上)

ウイルフォード・ウッドラフ大管長は，晩年に，次のように述べている。「私は天父に，この高齢にあっても，私に残された生涯を，神の霊感によって導かれるべく，そのしもべたる私にみたまをお注ぎ下さるよう請い願っている。イスラエルの人々に申し上げる。主は私であれ，だれであれ，この教会の大管長の職にある人が，あなたがたを誤った方向に導くのを決してお許しになることはない。そのようなことは，主の御計画にもなければ，主のみこころでもない。もし私がそのようなことをしようとすれば，主は私からその地位を取り去られるであろう。これはまた，だれであれ，人の子らを神のみ言葉やその義務から誤った方向に導こうとする者についても言えることである……。」(*The Discourses of Wilford Woodruff*「ウイル・フォード・ウッドラフ説教集」pp. 212－213)

この言葉は私たちに深い確信を与えてくれるに違いない。

また，ある指導者は次のように書いている。「この教会では，人が地位を求めたからといって，それが得られるものではない。もし教会である人が特定の地位に就こうとする野心を持っていることがわかった場合，その野望は主に認められるものではないため，そうした事実そのものが，その人を挫折へと導くであろう。こ

れは，この教会のすべての役員について言えることである。……すべての役員は神の管理の下にある。神がこれらの役員を選び，指名されるのである。そして，彼らが間違ったことをした場合，それを正すのは神のされることである。」(ジョージ・Q・キャノン *Deseret Weekly*「デゼレト・ウィークリー」1898年5月21号 p. 708)

願わくは主が私たちの新しい大管長と副管長たちを祝福し，完全に支持して下さるように。また，私たち民が一致してハロルド・B・リー大管長を支持するように祈っている。私はリー大管長がこの地上における主の予言者であることを知っている。私は，ヨルダン川で，ニーファイの民の間で，そしてニューヨークの森で聞こえた言葉が神のみ声であり，この神は私たちの天父であられることを証する。また，神が「これはわたしの愛する子，わたしの心にかなう者である」と言われた方が，この教会の頭たる御方，すなわち私たちの救い主イエス・キリストであることを証する。私は，リー大管長が神の予言者であることを証する。もし私たちがリー大管長に従うならば，王国は偉大な発展を遂げることであろう。私はこの証を全身全霊をもって，イエス・キリストのみ名により証申し上げる。アーメン。

1972年度 統計記録

教会ユニット

ステーキ部数……………………………… 592
　ワード部数……………………………… 4,365
　ステーキ部内，独立支部数…………… 1,029
　ワード部，独立支部合計……………… 5,394

伝道部数………………………………… 101
　伝道部内　支部数……………………… 1,891

教会員数

ステーキ部……………………………… 2,716,769
伝道部…………………………………… 511,021
合計……………………………………… 3,227,790

神権

アロン神権者
　執事…………………………………… 139,194
　教師…………………………………… 101,042
　祭司…………………………………… 160,993
　合計…………………………………… 401,229

メルケゼデク神権者
　長老…………………………………… 264,465
　七十人………………………………… 24,229
　大祭司………………………………… 93,344
　合計…………………………………… 382,037

アロン神権者，メルケゼデク神権者総計…… 783,266
　（年度内増加数　30,216名）

会員数の増加度

ステーキ部，伝道部内　幼児祝福数……………69,695
ステーキ部，伝道部内　子供のバプテスマ数…58,343
ステーキ部，伝道部内　求道者のバプテスマ数
　………91,237

補助組織登録会員数

扶助協会………………………………… 715,071
日曜学校………………………………… 2,442,033
アロン神権YMMIA……………………… 164,925
アロン神権YWMIA……………………… 186,393
初等協会………………………………… 478,769

一般統計

出生率（1,000人当り）………………… 26.43
結婚率（1,000人当り）………………… 15.39
死亡率（1,000人当り）………………… 4.74

福祉

被援助者数……………………………… 102,961
雇用者数………………………………… 14,502
労働奉仕日数累計*……………………… 187,800
福祉操業日数累計**…………………… 7,140

系図協会

身代りの神殿儀式（エンダウメント）
　のために手続きのとられた名前の数…… 2,181,918
年度内に20カ国においてマイクロフィルムに収録された系図記録は，23,046,000mの長さとなり，これは300ページの本で3,607,002冊に相当する。

神殿の儀式

15の神殿で執行された儀式数
　生者…………………………………… 68,376
　死者…………………………………… 9,046,194
　儀式総数……………………………… 9,114,570

教会の学校（1971—72年度）

在籍者数（インスティテュート，セミナリーを含む）……………… 257,388



「主は生けりと知る」

十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

主が私と家族に，そして全世界の忠実な聖徒たちに注いで下さるかくも豊かな祝福に対して，いかなる表現をもってしても，またいかなる言葉をもってしても表わしえない程感謝している。私は今聖霊の力に導かれて，私たちすべての者が携わっているこの栄えあるみ業が真実なものであり，神聖なものであることを証できるように切に求めている。私はまた，今朝からこの場に臨んでいる光明と真理と啓発のみたまが引き続きこの場に集う人々の心に宿って，あなたがたが啓発され，私の証が真実であることを悟れるように祈っている。

教会員として，またこの地上における神の王国の民として，私たちは，みたまの賜を享受している。恵みと慈悲に満ちた神が常に忠実な聖徒たちに与えられる驚異と栄光と奇跡の賜である。みたまの賜に関する現代の啓示の中で第一にあげられている賜は，証の賜，啓示の賜，神のみ業の真実さと神聖さを知る賜である。この賜は他の箇所ではイエスの証と，また予言のみたまと表現されている。これこそ私に与えられている賜である。私はこのみ業が真実であることを知っている。

私は，イエス・キリストが生ける神の御子であり，世の罪のために十字架にかかられたということを完全に知っている。私は，ジョセフ・スミスが神の予言者であり，彼を通して今日再び完全なる永遠の福音が回復されたことを知っている。また私は，この末日聖徒イエス・キリスト教会が，地上における神の王国であって，神の承認のもとに，今，支持を受けたハロルド・B・リー大管長を頭として，今なお引き続きその務めを果たしており，「人の子」の再臨のために備えをさせていることを知っている。

またさらに私は，主が今日，主を信じる人々に，古代の聖徒たちが享受したと同じ栄光と驚異に満ちた賜を授けておられることを知っている。主は，予言と啓示のみたまを，昔の聖徒たちに与えられたが，現在の私たちにも同様に授けて下さっている。永遠の福音の栄光と素晴らしさを「汝に告げんとす」と主は言われる。「われ今汝に来りて汝の心の中に留るべき聖霊によりて汝の智と情に告げんとす。そもそも，見よ，これは啓示の『みたま』なり。」（教義と聖約8：2，3）

私自身啓示を受けてきたので，この教会内に啓示があることを知っている。私は，神のみ名を証する者として働き，神が啓示された救いの真理を教え，また教会の教えが真実であることを証する特権と機会があるのを喜んでいる。

この正しい教義を教え，真理について証することは，主が定められた方法である。宗教は神から来るものであって，神以外にその源はない。それが真理であれ，また現世にあって人の心に喜びと平安をもたらし，来世にあって永遠の栄光のために備えをさせるものであれ，すべては主に源を発している。人は自分を復活させることもできないが，同様に，救いの宗教を創り出すこともできないのである。

神は，過去の各神権時代の人々に啓示されたと同じ基盤に立って，今日，救いの真理を私たちにお与え下さっている。そして昔から変わることなく，神は使徒や予言者や義人に救いの教義と真理を啓示しておられる。また世の人々に向かってその真理を教え，真理について証するようそれらの人々に命じておられる。使徒や予言者の職務は，そうした教えが主から出たものであることを証することである。主の代理人やしもべ

たちは，常に真理について証する者である。今日私は，真理の証し人としてここに立つ特権に浴していることを喜んでいる。

主のみたまがこの大会衆の上に注がれている今日，私は自分の手を直角にあげ，自分の心と霊の中で誓約する特権に恵まれたことを感謝している。また，神の王国を管理するよう神により召された偉大な大管長会の方々を支持し，その勧告に従えることを感謝している。ハロルド・B・リー大管長は聖見者であり，啓示と知恵のみたまで満たされた人であり，主と親しい交わりを持っている人である。N・エルドン・タナー副管長は高潔さとキリスト教徒としての諸徳を身につけた人であり主を愛し，主の戒めを守る人である。マリオン・G・ロムニー副管長は霊の巨人であり，義の説教者である。また，主を知り主の教えを説く人である。ロムニー副管長と私は同じ家系である。私がこの召しの話を聞いたあと，ロムニー副管長は私に向かってこう言われた。「祖父のレッド（レミュエル・ハーディソン・レッド）は喜んで私たちを迎えてくれることだろう。」それに答えて私は言った。「祖父がいる所へ行けるような生活をするつもりです。」するとロムニー副管長は「私もそのつもりだ」と言われた。

この時代に神の王国の鍵を握るこれら3人の兄弟たちについて，主はその民に次のように言っておられる。「彼らはわが教会の大管長会として召したる者なり。彼らに従え。」また「……彼らの上に……すべての支部教会の重荷を負わしめたる故なり……われを受け入るる者は，わが遣わしたる者すなわち……大管長会を受け入るるなり。」（教義と聖約112：18—20）

私は全身全霊をもって教会の大管長会を支持し，彼らの口から告げられる啓示と真理の光にそって歩みたいと願っている。彼らは主の民に向かい，またこの地上のあらゆる国々に住む正直な真理の探求者たちに向かい，主のみこころとその思いを伝えているからである。私はみ業が真実であることを知っている。

私は皆様方一人一人に代わって申し上げたいと思う。これは私自身の気持ちでもあり，私の家族の気持ちでもある。この聖会にあって教会幹部を支持し，リー大管長がみたまの力で語られるのを聞いている間，主のみたまは豊かに注がれていた。それゆえ私は，ここにいるすべての人人が，真理と正義の原則にそって自分自身の生活を捧げようと改めて決心したのではないかと思う。この真理と正義の原則のために，気高い指導者たち，すなわちリー大管長がひとりずつ名前をあげられた歴代大管長たちは生き，働き，そして天に召されていったのである。

過去はどうであれ，私たちは次のことを誓約しようではないか。罪なき主のあらゆる儀式にそって歩むこと，また神の戒めを守り，この栄えある業が神のまことのみ業であることを証する生ける証し人となることを。この業は，洪水のように地に広まり，水が海を覆うように全地を覆うに違いない。

おお神よ。願わくば，私と家族，またイスラエルの家のすべての忠実なものをして，真理と光のうちに歩ましめたまえ。また，教会外にあっては，地上のいずこにても見い出し得ざる交わりと親しみとを享受した今，永遠の世において，またやがて来るべき王国と住まいにおいて同じ精神，同じ親しみを享受せしめたまえ。

以上すべてのことを，証と感謝の気持ちをもって，へりくだりまた喜びつつ主イエス・キリストの聖なるみ名によって申し上げる。アーメン。



友とは

十二使徒評議員会会員

マービン・J・アシュトン

きょう私は，あらゆる地に住む皆さんを友として歓迎したい。

「友とは，あるがままの私を受け入れてくれる人である」という言葉がある。これを友の定義として踏まえ，さらに，人を見いだした時のまま放置しておくのでは真の友とは言えないということを添えておく。

ある人々は友達になるということを誤解しているようである。友の行為は自己改善，正しい態度，自立，慰め，自己信頼，福利などを生み出すものでなければならない。もし，非行や悲しみをもたらす事柄に関与している人に友という語を用いるとすれば，それは間違いである。人は自分がほかの人から期待されていると感じるならば，その姿勢は全く変わるはずである。行動や姿勢が改善や独立につながる時にそこに友情を認めることができる。

真の友になるには勇気が要求される。ある人々は，いかなる状況にあっても裏表のない人間であろうとする姿勢を示さないために，友情を危機にさらしている。恐れは友情と共存しない。真の友とは，いかなる場にあっても私たちと共にとどまり分かち合う勇気を持つ人である。ウィンストン・チャーチル卿は国家存亡の機に大英帝国最大の友となった。和平降服を提唱していても容易に友となることができたにもかかわらず，彼は国民に「血と苦しみと涙と汗」を求める勇気を持っていたからである。

アブラハム・リンカーン大統領は，敵に対する姿勢に関して非難を受けたことがある。ひとりの同僚がこう尋ねた。「大統領はなぜ彼らと友達になろうとするのです。断固，倒すべきです。」するとリンカーンは穏やかにこう答えた。「敵を滅ぼそうとしているのではない。彼らは私の友人なのだから。」

末日聖徒イエス・キリスト教会の会員である私たちは，予言者，聖見者，啓示を受ける者であるハロルド・B・リー大管長を親しい友のひとりと考えてよいのではないだろうか。大管長は私たちの必要に応じて私たちを叱責し，愛し，励まし，導いてくれるからである。リー大管長は私たちの友である。私は，この言葉の持つ最も高貴な意味あいにおいてリー大管長が私たちの友であること，リー大管長が霊感と勇気あふれる態度で私たちを導いていることを証する。

私は皆さんが大管長の友人になるようお勧めしたい。今朝，私は手を挙げ，私の友リー大管長を支持したが，私にとってこれは大きな喜びである。リー大管長と私との友情は，過去の年月の裏付けがある。常にあるがままの私を受け入れ，進歩の機会を与えてくれた。大管長をはじめ教会幹部の皆さんと共にいることは私にとって大きな喜びである。さらに，地上における天父の王国建設に携わる皆さんも同様の喜びを感じておられると思う。

私はタナー副管長とロムニー副管長を愛している。二人とも私の友だからである。私はブルース・R・マッコンキー長老と共に座を占めることに幸せを感じている。彼も私の友だからである。友情の重要性を理解しようと努めれば努めるほど，次の聖句に見られる真理への認識が深まると思う。

「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは，困っている孤児や，やもめを見舞い，自らは世の汚れに染まずに，身を清く保つことにほかならない。」（ヤコブ1：27）

私たちは世の罪に染まらず，今日よりも，明日はよりよい人間になろうとする時に，自分自身を友とすることができる。日々，自分自身を真

の友とする目標を立てるならば，それは立派な目標である。未亡人や孤児に対する私たちの責任は，彼らをありのままの姿で受け入れることである。だが，必ず彼らに進歩改善する機会を与えなければならない。悲しみを和らげ，励ましの言葉をかけ，日々の必要を満たす援助をすることこそ，私たちの責任である。

イエス・キリストの福音を持っていながら，それを説服と模範とによって家族，隣人，見知らぬ人々と分かち合わないとしたら，友としては不十分ではないだろうか。イエス・キリストの福音に対して証を持ちながら，それを分かち合わないとしたら，友と言えるだろうか。

友は私たちが獲得するものであって，贈り物として与えられるものではない。「あなたがたにわたしが命じることを行うならば，あなたがたはわたしの友である。」（ヨハネ15：14）主に仕え，主の戒めを守る者は主のしもべである。そして試しを受けて，あらゆることについて忠実であると認められた時，彼らはもはやしもべではなく，友となる。主の友は，主と共に王国に入り，永遠の受け継ぎを得る者たちである。（教義と聖約93：45—46参照）

救い主が「友」に関して語られた箇所を教義と聖約の中から幾つかあげてみよう。

「またわれ誠に汝らに告ぐ。わが友よ。…

すなわちわれに近づけ，さらばわれ汝らに近づかん。熱心にわれを求めよ。さらば，汝らわれを見出さん。求めよ，さらば与えられ，叩けよ，さらば開かるることを得ん。

何にてもわが名によりて御父に願うところ汝らのため必要なることは汝らに与えらるべし。」（教義と聖約88：62—64）

「…わが友シドニーとジョセフよ。…」（教義と聖約100：1）

「わが友よ。われ誠に汝らに告ぐ，…われ汝らに一つの啓示なる誡命を与う。」（教義と聖約103：1）

「…わが友よ，怖るるなかれ。…」（教義と聖約98：1）

「…われ汝らを友と呼ばん。汝らはわが友にして，われと共にゆずりを受くべければなり。」（教義と聖約93：45）

この最後にあげた親しみのこもった言葉は，家族の行動に関してジョセフ・スミスが叱責を受けた時に与えられたものであることを付け加えておきたい。

「而して，われわが使徒たちに語りし如く汝らに告ぐ，そは汝らはわが使徒にしてすなわち神の大祭司たちなり。また汝らはわが父のわれに与えたまいし者なり。汝らは誠にわが友なり。」（教義と聖約84：63）

救い主イエス・キリストは私たちの友であることを証する。愛のこもった命令，叱責，挨拶の言葉，啓示，励まし，忍耐の中で主は毎日このことを証明しておられる。確かに主はあるがままの私たちを受け入れて下さるが，主のみ言葉と道に従って進歩するようにも望んでおられる。

友情の真の意味を求めて，私は簡単だが力ある話し合いを持った時の経験をお話したい。18歳の女性にこう尋ねた。「一番の友達はだれですか。」「母です」と彼女は答えた。「なぜですか。」「私のことをいつも考えてくれるからです。」

祭司の年齢の男性にも同じ質問をした。「監督です。」「なぜですか。」「ぼくたちの話をよく聞いてくれるからです。」

19歳の女性とのやりとり。「グリーナーのクラスの先生です。」「なぜですか。」「レッスンじゃないときにも相談に乗ってくれるからです。」

13歳の少年。「スカウトの隊長です。」「なぜですか。」「私たちと何でも一緒にやってくれるからです。」

受刑者。「教戒師です。」「なぜですか。」「彼はいつも私を信じてくれます。信じられないようなことも信じてくれることがありましたから。」

夫。「妻です。」「なぜですか。」「妻は私の一部ですし，一番大切なものだからです。」

以上の対話から，友情とは作り出すものと結論できないだろうか。

「友達を作る唯一の方法は，自分から友達になることである」とエマーソンは述べている。相手を知らなければ友達になることはできない。相手を知るための時間だけでなく，共に過ごす時間をとる人こそ本当の友である。人に与えることのできる最大の贈り物は，最良の自己である。

ジョセフ・スミスが友の価値をどのように考えていたかを，次の言葉からうかがい知ることができる。「もし私の生命が友にとって価値のないものであれば，私にとっても価値がない。」

救い主は言われた。「人がその友のために自分の命を捨てること，これよりも大きな愛はない。」（ヨハネ15：13）

ロバート・ルイス・スティーブンソンはその輝ける人生の秘訣を尋ねられた時，簡潔にこう語った。「私には友がいた。」

出エジプト記33章11節には次のように記されている。「人がその友と語るように，主はモーセと顔を合わせて語られた。」

受け身でただうなずくだけの人は真の友とは言えない。友とは関心を寄せる人を言う。

最近南アメリカを訪問した時の経験をお話したいと思う。伝道部長と共に各地を巡り，伝道本部から320キロ程隔てた地に着いた時のことである。ある長老が腹膜炎を起こしたと

の連絡が入った。医者の診断を受けるのが6,7時間遅れたため，状態は極めて悪い。伝道部長はすぐさますぐれた外科医を捜すよう電話で指示し，ゾーン大会に集まっていた60名の宣教師と共に祈りを捧げた。そして翌朝，彼は夫人と共に病院に駆け付けた。祈りがさらに続けられた。医師もあらゆる手段を尽くしている。長老の同僚たちも交替で昼夜を問わず付き添いにあたっている。アイダホ州に住む両親にも急が告げられた。「息子さんには最善の処置がとられています。多分大丈夫だと思います。どうか家族の皆さんも一緒にお祈りして下さい。」

真の友情，真の友の姿がここにあった。この伝道部長はまさしく99匹の羊を残して，すぐに助けが必要な一匹の羊に全力を尽くす模範であった。

私たちは奉仕する時の報いとして，「友達になってくれてありがとう」という心からの言葉を受けるほど大きな報いはない。助けの必要な人が私たちを通じて，また私たちと共に改善の道を歩めることがわかったときこそ，真の友情を発揮するときである。私たちを通して弱い人が強くなり，強い人がより強くなる時，その友情は本物である。もし人をその友達から判断できるとすれば，友達がどの程度の人間かでその人の行く末も判断することができる。

では，どのようにして友を助けることができるだろうか。アラビアのことわざにその答えを見ることができる。「友とは，人が心のすべてを打ち明け，公平に取りふり分ける親切な手を信頼して，もみがらも種もすべてを差し出し，価値あるものを保存し，残りは愛の息で吹き散らしてもらうことのできる人を言う。」

その通り，友とは，あるがままの私を受け入れるが，よりよい人間になる機会を与えてくれる人を言うのである。

ペテロとヨハネが美しの門に近づいた時に経験したことは私たちすべてにとって意味がある。そこに生まれながら足のきかない男がいた。施しを受けて日々を過ごしている男だった。二人がこの男に近づいて行くと，男は何か施しを受けようとして手を差し出した。すると，皆さんも御存じのように，ペテロはこう言った。

「『金銀はわたしには無い。しかし，わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい。』

こう言って彼の右手を取って起してやると…。」（使徒３：６—７）

ペテロは友であった。「立って歩きなさい。私が助けてあげよう」と言ったからである。私たちも，友達が自力で道を歩めることがわかるまで，手を取ってあげなければならない。ペテロは乞食をあるがままの姿で受け入れ，進歩改善する道を示したと理解してよいと思う。救い主は私たちが主と隣人の友となる方法を示しておられる。

「あなたがたは，わたしが空腹のときに食べさせ，かわいていたときに飲ませ，旅人であったときに宿を貸し，…

あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは，すなわち，わたしにしたのである。」（マタイ25：35，40）

私は，私たちが互いに友となることができるよう祈っている。私たちは神の友になる必要がある。神は私たちのために弁護して下さる。神は生きておられ，私たちの近くにいて助けて下さる。私は，イエス・キリストが私たちの贖い主，救い主であること，この教会は主の教会であること，また主も私たちの友であることを，へりくだり，イエス・キリストのみ名により証し上げる。アーメン。

末日聖徒はなぜ神殿を建てるのか



大祝福師

エルドレッド・G・スミス

私は今朝，ハロルド・B・リー兄弟を末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長として支持し，さらにすべての教会幹部を支持する特権にあずかり喜んでいる。

私は，私に対して支持の挙手をして下さったことを感謝すると同時に，ここで，すべての指導者を心から支持することを誓いたいと思う。地上に主の王国を築く上で私に求められるすべてのことを心から果たす所存である。

さて，「末日聖徒はなぜ神殿を建てるのだろうか。」これは多くの人から尋ねられ，また私たちと信仰を同じくしない多くの人々が心に抱く疑問である。

信仰箇条第3条は次のように宣言している。「われらは，キリストの贖罪により，すべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず。」

続いて第4条は，

「われらは，福音の第一原則と儀式とは

第1，主イエス・キリストを信ずる信仰

第2，悔改め

第3，罪の赦しを受くるために水に沈めらるるバプテスマ

第4，聖霊の賜を授かるための按手礼

なることを信ず。」

私たちは，神のすべての律法と儀式を守り，従わなくてはならない。キリストはニコデモに対して言われた。「『よくよくあなたに言っておく。だれでも，水と霊とから生れなければ，神の国を見ることはできない。』

ニコデモは言った，『人は年をとってから生れることが，どうしてできますか。もう一度，母の胎にはいって生れることができましょうか』。

イエスは答えられた，『よくよくあなたに言っておく。だれでも，水と霊とから生れなければ，神の国にはいることはできない。』」（ヨハネ3：3－5）

この時すでに，キリストは自ら従うことによってこの律法を完全かつ正確に示しておられた。その模様がマタイ伝に記録されている。「そのときイエスは，ガリラヤを出てヨルダン川に現れ，ヨハネのところにきて，バプテスマを受けようとされた。

ところがヨハネは，それを思いとどまらせようとして言った，『わたしこそあなたからバプテスマを受けるはずですのに，あなたがわたしのところにおいでになるのですか』。

しかし，イエスは答えて言われた，『今は受けさせてもらいたい。このように，すべての正しいことを成就するのは，われわれにふさわしいことである』。そこでヨハネはイエスの言われるとおりにした。」（マタイ3：13－15）

従って，バプテスマは全人類のためのものである。罪のない完全な御方であった神の御子キリストとても例外ではなかった。とすれば，私たち全人類にとっては，なおさら必要だということになる。

さて，全人類に求められているとすれば，公平な神は，この律法に従うことができない時代や，地方に生まれた人々を，とこしえに罪ありとされるだろうか。

神が，私たちが知っている通りの公平な御方であるとすれば，神は全人類が儀式を受ける方法を用意されるはずである。そして人類は神に受け入れられる者となるためには，どうしても儀式を執行してもらうことが必要である。

ペテロはその第一の手紙の中で，キリストは十字架にかけられて，復活するまでの間，世を去った人々の霊に宣べ伝えられたと語っている。

「こうして，彼は獄に捕われている霊どものところに下って行き，宣べ伝えることをされた。

これらの霊というのは，むかしノアの箱舟が造られていた間，神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。その箱舟に乗り込み，水を経て救われたのは，わずかに八名だけであった。」(Ⅰペテロ3：19—20)

こうして，この世で福音を受け入れる機会のなかったすべての人々に，死後福音を受け入れる道が開かれた。しかしながら，神の王国に入るために是非とも必要なバプテスマの儀式がこれによって免除されるわけではない。

コリント人に福音を宣べ伝えていたパウロは，復活が実際に起こることを彼らに確信させようとして，次のような質問を投げかけている。「そうでないとすれば，死者のためにバプテスマを受ける人々は，なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば，なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。」(Ⅰコリント15：29)

この質問から，当時の人々は亡くなった先祖のために身代わりのバプテスマを行なっていたことが明らかである。

キリストは私たちのために代わって苦しみを受けられた。そして現在，私たちに，隣人のために身代わりの業を行なう機会を与えて下さっている。

しかしながら，私たちに求められているのはこれだけではない。死者の名前が分からなければ，どうして身代わりの儀式ができるだろうか。

死者一人一人にこの業を行なうためには，記録をつけ，探究し，入手することが当然必要になってくる。

1836年4月，オハイオ州カートランドの神殿が完成した折，幾人かの天使がジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに現われた。ジョセフ・スミスだけではなくて，ジョセフとオリバーに現われたことに注目していただきたい。二人でこの訪れを目撃したのである。その天使の中に，死を味わうことなく天にのぼった予言者エライジャがいた。

ジョセフ・スミスは13年前に天使モロナイから，エライジャがジョセフのもとに遣わされるという約束を受けていた，予言者ジョセフ・スミスはエライジャから授かった鍵について次のように説明を加えている。

「エライジャのみたま，力，召しとは，すなわち，啓示，諸儀式，神のみこころ，権能，メルケゼデク神権および地上における神の王国の完きエンダウメントの鍵を持つ権能を付与することである。神の王国につけるすべての儀式を賜わり，執行する権能と，父の心に子らを思わせ，子らの心に天にいる父祖を思わせる権能を授けることである。」(*Documentary History of the Church*「教会歴史記録」第6巻，p. 251)

この機会にあずかることのできなかった私たちの先祖は，この日の到来を約束されていたのである。(教義と聖約121：26—27参照)

カートランド神殿において予言者エライジャがジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに現われて以来，この死者の名前を収集する作業はあらゆる国のあらゆる人々の間で盛んに行なわれるようになった。これは実に驚くべきことである。この大事業を促進し，可能にするため，種々の機器が発明されたが，この発明にあたって主が現代の科学者たちの知恵に霊感を与えられたことを考えてみていただきたい。

エライジャの訪れがあってから5年後の1841年，主は予言者ジョセフ・スミスに啓示を与え，民に対して次のように命じられた。「……わが名により，最と高き者の住むべき一つの宮居を建てよと。

そは彼来りたもうて，汝らのすでに失いたるもの，すなわち彼の取り去りたまいしもの，すなわち完全なる神権を再び回復したもう土地はこのほか世に一つもあらざればなり。

そは彼ら，すなわちわが聖徒らが死者に代りてバプテスマを受けるための浸礼盤世になければなり。

すなわちこの儀式はわが宮居に属すれば，汝ら貧しくしてわが宮居を建つる能わざる時代を除きわれに受け入れらるること能わず。」(教義と聖約124：27—30)

次いで主は主の家すなわち神殿で執行されるべき他の聖なる儀式について語っておられる。

このように，世を去った私たちの先祖のために，バプテスマをはじめとする神聖な儀式を身代わりによって執行するために，神殿すなわち聖なる建物である主の宮居を建てる必要がある。

エライジャは神の王国につけるすべての聖なる儀式を執行するための鍵をもたらした。来世において人が昇栄を受けるため，すなわち永遠の生命を得るために必要なこれら最も神聖な儀式は，神の宮居で執行されてはじめて神に受け入れられるのである。

イスラエルの子らが持ち運びのできる「契約の箱」を造ったのはこの理由つまり神の王国につける祝福にあずかるためであった。

昇栄すなわち永遠の生命という完き祝福を受けるためには，人は神の王国のすべての律法と儀式を受けなければならない。

もうひとつ，すべての律法を成就するために必要なものに，人がある。私たち教会員は，主の宮居に入るにふさわしい生活を営み，まず第一に

自分自身のために，次いで亡くなった先祖のために，これらの神聖な儀式を受けなければならない。

生きている者が最初である。私たち自身がまずこれらの儀式を受けることが必要である。そうしてはじめて，私たちは先祖のためにこの業を行なう特権に浴することができる。

私たちの先祖には，時満ちたる神権時代に私たちが地上に来て，彼らのためにこの業を行なうという約束が与えられたのである。

世界中の多くの国々に神殿が建てられる日は必ず来る。人の救いと昇栄と永遠の生命にどうしても必要なことだからである。従って私たちは熱心に家族の記録を集め，この業の一端を担うにふさわしく生活しなければならない。

私は主の祝福があって，私たちがこの業を果たすことができるよう，イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。



予言者よりみ言葉聞け

十二使徒評議員会会員

エズラ・タフト・ベンソン

けさ私たちは，ハロルド・B・リー大管長をこの地上におけるイエス・キリストの教会の大管長として全会一致で支持した。これは，この世における最高の職ではないかと思う。私はこの偉大な人物を，教会幹部の中でも一番長く知っていると思う。私たちがお互いにまだ子供の頃から50年以上の長きにわたって，私は彼を尊敬し，称賛してきた。私は彼を神の予言者，霊感された指導者として心から愛し，支持している。リー大管長は，この混乱の時代にあって，キリストの教会を導くにふさわしい理想的な人である。願わくは，私たち教会員の上に神の導きがあって，この高潔な指導者に従う知恵を賜るように祈っている。

私はこれから特に，まだ教会員となられていない方々に述べたいと思うが，皆さんの信仰と祈りによってそのメッセージが彼らの身と霊に力を与え，確信を与えるよう願っている。

サウロがダマスコへ向かう途中，天から示現を受け，主イエス・キリストのみ声に立ち止まった。そのときサウロはこう尋ねた。「主よ，わたしは何をしたらよいでしょうか。」（欽定訳使徒9：6）主はこれに答えて，サウロにひとりの主から遣わされたしもべのところに行き，指示と祝福を受けるように告げられた。

「主よ，わたしは何をしたらよいでしょうか。」世の中でこれほど大切な問いかけがほかにあるだろうか。人がこの問いに答える道を探し求め，その道を歩むときほど偉大な行動があるだろうか。一体，主イエス・キリストは私たちに何をするよう望んでおられるのだろうか。主はこう答えておられる。「それだから，あなたがたの天の父が完全であられるように，あなたがたも完全な者となりなさい。」（マタイ5：48）さらに，「汝らはいかなる人物にてあるべきか。まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」（IIIニーファイ27：27）

こうしてキリストは，私たちがどういう人間になるべきか，また何をなすべきかの模範を示された。この世に立派な特質をもつ者は多しといえども，罪を犯すことなく生涯を過ごされた御方はただひとりである。父なる神を肉体の父に持ち，御自分の体をよみがえらせる権能をもった御方である。このイエスこそ，私たちの模範であり，私たちがその足跡に従うようにと命じられた御方なのである。

父なる神はすべてのものの上に，イエス・キリストの名を置かれた。そのため，最終的にはすべてのひざがかがみ，すべての口が，イエスがキリストであると告白するのである。キリストは道であり，真理であり，光である。キリストによらなければ，いかなる人も天父のみ前に帰ることはできないのである。キリストは神の御子であり，すべての徳を完全に具えておられる。従って，真の偉大さを計る唯一の尺度は，その人がどれほどキリストに近い人物であるかである。キリストに最も近い人が最も偉大な人であり，キリストを最も愛する人がキリストに最も近い人となるのである。

それでは，いかにして人は命じられたように，神に倣い，その足跡に従って進むことができるだろうか。私たちはまず，キリストの生涯について学び，戒めを知り，守らなければならない。この道に従う者には，豊かな生命，完全な喜びと平安が与えられ，重荷を負っている者には休息が与えられると神は約束された。キリストについて知るためには，聖典を学び，キリストを知っている人の証を研究しなければならない。私た

ちは，神が戒めを守る者に約束された啓示と霊感，祈りを通してキリストを知ることができるのである。

では，戒めを学ぶためにはどのようにしたらよいのだろうか。皆さんは聖典にある主のみ言葉や正当なしもべを通して与えられる啓示によって，主の戒めを知る。あるいはキリストの光，つまりすべての人に与えられる良心のようなもの，さらには個人の啓示によって戒めについて知ることができる。

パウロが，「主よ，わたしは何をしたらよいでしょうか」と尋ねたとき，キリストはパウロを主の正当なしもべのひとりのところに行かせたが，これは非常に大切なことである。同じくコルネリオもまた，祈りの後，人々を遣わしてペテロのところに行くよう命じている。(使徒10参照) こうしてこれまでずっと，神がこの地上に予言者を置かれたときはいつでも，人々は予言者のもとへ行って，キリストとキリストの戒めについて教えを受けた。

こうした予言者たちの霊感された言葉が記録され，聖典となった。そして神が代表者を地上に置かれたときはいつでも，新しい啓示や聖典が加えられた。ただ人々が堕落腐敗し，予言者が人々の間から取りあげられたときだけ，聖典も途絶えた。神はこう述べておられる。正当な神の代表者を通してのみ，人は救いに欠くことのできない儀式と神の子らを完き者とするために必要な戒めを受けることができる，と。

予言者について，主はこう語っておられる。「あなたがたを受けいれる者は，わたしを受けいれるのである。……」(マタイ10：40) かくして生ける予言者の声は，当時の人々に対する神のメッセージであったために，常に時代を先駆けるものとなった。ノアの時代に，古代の聖典は受け入れたが，ノアが受けた啓示に従わず，箱舟に乗らなかった人々は皆，おぼれてしまった。生ける予言者の言葉は，常に人々に対する最も重大な勧告である。もしキリストを知り，戒めを学び，従いたいと思うならば，主の正当な代表者を捜し求めなければならない。

幾世紀もの間，人々が邪悪であったがために，地上から神の予言者はいなくなり，聖典は新約聖書の最後の言葉をもって終わり，いわゆるキリスト教世界には，混乱と論争がはびこっていた。彼らの手元にあるのは古代の聖典だけで，人々に釈き明かし，新たな啓示や聖典を加え，教え導く業を指揮する正当な神の予言者がいなかったからである。

だが，1820年，キリストの復活以来最大の出来事が起こった。父なる神と御子イエス・キリストが自らジョセフ・スミスというひとりの少年に現われた。そのとき，ジョセフ・スミスはどの教会に入るべきかを主に尋ね求めていた。父なる神はこの少年に告げて言われた。「こはわが愛子なり，彼に聞け。」(ジョセフ・スミス2：17) 御子なる神はジョセフ・スミスにどの教会にも加わってはならないと告げた。そのときジョセフは，この地上に主のまことの教会はなく，教会の土台となる生ける予言者もずっと昔にこの地上から取り去られていたことを知った。しかもその予言者たちの死によって，教会を建てるべき啓示の岩もなくなり，新しく加えられる聖典もなくなったのである。

そしてついに，イエス・キリストの教会を導いていた最後の正当なしもべ，ペテロ，ヤコブ，ヨハネがジョセフ・スミスに現われた。この栄光を受けたみ使いたちは彼らがイエスから受けたと同一の権能をジョセフ・スミスに授けた。こうして再び，この地上に，「かくの如く主汝らわが僕らに言う」と語ることのできる神の予言者が置かれたのである。ジョセフ・スミスは自分が受けた権能を人々に与え，かくしてこの末日にイエス・キリストの教会――末日聖徒イエス・キリスト教会，通称モルモン教会が回復されたのである。

また時至って，別の天使がジョセフ・スミスに現われ，神はこの地上に初期のアメリカ先住民の記録を与えようとしておられると告げた。しかもそれは旧世界の記録である聖書と対比されるものであった。このアメリカの聖典は，天からの霊感を受けたジョセフ・スミスが翻訳し，モルモン経と呼ばれる。モルモン経には，キリストがエルサレムで復活された後，アメリカ大陸に住む神の子らに実際に現われ，彼らに教えを施されたことなど多くの事柄が記されている。モルモン経の使命は，聖書と並んでイエスがキリストであることを証する第二の証人となることである。また神があらゆる国々の人々を愛しておられることを示し，キリスト教徒の間に混乱を招いている様様な教義を明確にすることである。

ジョセフ・スミスはイエス・キリストから多くの啓示を受けた。彼の後を受け継いだ代々の予言者たちもまた啓示を受けた。つまり新しい聖典が与えられてきたのである。現在この地上における主の代弁者，予言者はハロルド・B・リー大管長である。リー大管長のもっている権能は代々の予言者を通じて，ジョセフ・スミスまでさかのぼることができる。ジョセフ・スミスはペテロ，ヤコブ，ヨハネから聖任され，この3人はキリストから直接聖任されている。キリストは昔も今もこの教会の頭であり，この地球の創造主である。またすべての人々が報告をするためにみ前に立たなければならない神である。

今日神が予言者に語りかけ，しかも再び神の教会を設立されたという驚くべきメッセージは全世界の人々のためのものである。イエスを見たと言うピリポにナタナエルが尋ねたとき，ピリポはこう答えた。「きて見なさい。」（ヨハネ1：46）

私たちも同じように言いたい。「きて見なさい」と。人はあなた方を欺くが，神は決して欺かない。もしこのメッセージが真実かどうか心から知りたいならば，熱心に祈り，それをよく研究し，試してみることである。神は必ずそれを教えて下さるであろう。

皆さんは，ジョセフ・スミスが神の予言者であり，モルモン経が神から与えられた聖典であるかどうかを知りたいならば，試してみるとよい。モルモン経を読んでいただきたい。このモルモン経の終わり近くに，これを読むすべての人々に与えられたひとつの約束がある。「それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば，神は聖霊の力によってこの記録が確なものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」（モロナイ10：4）

これが，そのチャレンジとテストである。私は皆さんに証したい。私もモルモン経を読み，試してみた。その結果，神は私にこの聖典が真実であることを明らかにして下さった。またジョセフ・スミスが神の予言者であり，今日ハロルド・B・リーも神の予言者，代表者であり，この末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長として神がお立てになったことも示して下さった。かつての使徒ペテロと同様，神の王国の鍵を有する人はこの地上にリー大管長をおいてほかにいないのである。

では，今日この地上には，主の真の予言者が必要だろうか。ノアの時代の人々は物心両面にわたって人々に警告を与える予言者を必要としただろうか。ノアに従わなかった人は洪水から救われただろうか。私たちが住んでいるこの末日に，人々は，神が洪水によって地球を清められたあのノアの時代に匹敵する邪悪を行なうようになると聖書に記されている。皆さんは今日，私たちに警告し，神が予言されたこの清め，今度は火による清めに対して私たちに警告し，備えさせる予言者が必要ではないだろうか。

人間の心は霊的な事柄についてだけでなくこの世につける事柄についてもむしばまれている。皆さんの祝福となることを神がどれほど啓示しておられるか知りたくはないだろうか。神は近代の予言者に健康の律法を与えられ，人がもしそれを守るならば，走れども疲れず，歩けども気を失うことなからんと約束された。

現在，人生に絶望した人，あるいは自殺を企てる人の数が激増している。しかしながら，もし彼らが末日に与えられた啓示を知っていたら，果たしてそうしたであろうか。彼らの前世の状態，どこから来て，何のためにこの地上におり，どこへ行くが，そして前途に待ち受けている大いなる祝福が知らされているのである。

サタンは今，家族の絆を寸断し，家庭に分裂と争いを起こそうとしている。そうした中にあって，近代の主の予言者は50年以上も前から，家庭の夕べと呼ばれるプログラムを実施している。このプログラムでは，毎週1回家族全員が集って，霊性や人格形成について教えを受け，実族の目標や計画について話し合い，タレントを発表し，ゲームをし，リフレッシュメントを食べるのである。素晴らしいプログラムではないだろうか。

教会は，会員たちに1年分の家庭のタベプログラムの提案を盛り込んだテキストを配布している。この家庭の夕べを忠実に開いている人々には，神の予言者が祝福を約束している。その祝福の言葉を読んでみよう。

「家庭に愛と両親に従う気持が高まり，イスラエルの若人の心には信仰が育まれてゆく。かくして若人は，彼らを取り巻く悪魔の力と誘惑に抗する力を得るのである。」（「家庭の夕べ」1965年，p.v）

皆さんは自分の家庭にこうした祝福を受けたいと思わないだろうか。

次に，結婚についてはどうだろうか。主は末日の啓示を通して，結婚は神の定めたもうた儀式であり，権威ある者によって神殿で結婚した夫婦は，天においても結ばれると言われた。つまり死をもってしても二人を引き離すことはできず，この世と永遠にわたって結ばれるのである。このことを聞いて，どう思われるだろうか。もし夫婦や子供たちが忠実であるならば，来世でもひとつの家族として共に住むことができるという保証を得たいとは思わないだろうか。

皆さんは，この祝福されたアメリカ，あるいは自由世界の国々に滅亡の危機が訪れつつある事態を憂慮しておいでだろうか。巨大な陰謀のもとに広がる邪悪について考えたことはないだろうか。モルモン経はこの内部からの陰謀により崩壊したふたつの偉大な古代アメリカ文明の記録であると申し上げたら，驚かれるだろうか。しかもその中には，もし私たちがこうした恐るべき状態を目にしたら，すぐ目を覚ませという主の命令も記されている。私たちがこうした自由の敵に与えている援助や取り引きは増加の一途をたどっている。モルモン経がこうした陰謀を企てる

国々はどうなると述べているか知りたくはないだろうか。私たちが身も霊も滅ぼす社会主義の道に向かいつつあることに対して予言者はどういう警告を与え，私たちにどうするように教えているか知りたくはないだろうか。

イエスは世界を襲う災害についてよく知っておられる。そのために，ジョセフ・スミスを初め，他の予言者に啓示を与えられたのである。私たちはまた長年の間，最低一年分の食糧や衣服を蓄え，できれば燃料をも蓄えるように指導され，借金をなくすようにと言われてきた。皆さんは，神が教会を導き，自立させようとしておられることを知っているだろうか。

これらはほんの一部である。もっともっと多くの祝福を内包した啓示と，人々を明日のため，永遠の行く末のために備えるプログラムがこの末日聖徒イエス・キリスト教会を通して手にすることができるのである。

私たちは一体，どのような人になればよいのだろうか。まさに，イエス・キリストのような人間にならなければならない。そのようになるために，私たちはイエスの生涯について学び，主の戒めを学び，行なうのである。これが喜びと豊かな生活と永遠の生命への道である。

そのイエスをよく知っているのは，神の予言者たちである。神の予言者はこれまでイエスについて語り，イエスの戒めについて私たちに教えてきた。彼らは神から遣わされた人々であり，啓示を通して，私たちの進むべき道を示している。パウロはこう言った。「主よ，私は何をしたらよいでしょうか。」人間にとって，これほど重大な問いかけがあるだろうか。その答えは，指示を与えるよう主から召された人のもとにある。

「来たれ予言者より　みことば聞け
喜びてうたえ　真理の道
昔の予言者の　道を知りて
今，他の予言者を　また送らる。」

(讃美歌83番)

どうか皆さんが末日聖徒イエス・キリスト教会についてもっとよく調べ，モルモン経を読んでいただきたい。恐らく，皆さんの近くにも教会があるはずである。どうぞ気軽に教会を訪れていただきたい。彼らは喜んで教会についてお話するはずである。教会の集会にも出席していただきたい。もし教会に関するパンフレットが御希望であれば，あるいは御質問があれば，ソルトレーク・シティーの私たちの本部までお便りを寄せていただきたい。

最後に，私の証を述べたいと思う。私は神が生きておられることを知っている。神は実際に生きていて，その子らを愛しておられるのである。私たちは皆，兄弟姉妹であり，同じ霊の父をもつ神の子供たちである。神は私たちを祝福し，一層の祝福を与えたいと願っておられるため，教会を建て，予言者を送られたのである。今日，その教会とは末日聖徒イエス・キリスト教会であり，その予言者，代弁者はハロルド・B・リー大管長である。私はこのことを，今自分が生きているのを知っているのと同じようにはっきり知っている。これらの証を主イエス・キリストのみ名により，へりくだり，感謝をこめて申し上げる。アーメン。



救いの福音を教えなさい

大管長

ハロルド・B・リー

全世界の聖徒に送る警告の声

愛する兄弟姉妹の皆様，そしてラジオ，テレビを通じてこの説教に耳を傾けている友人の皆様，

私は，しばらくの間，この偉大な大会に霊感がとどまるよう祈っている。

教会が組織された日，そしてその後間もなく，主のみ言葉がこの神権時代の予言者に臨んだ。主は，この末の日にキリストの教会が設立されたことを宣言したあと，大管長に戒めを与え，さらに，「天より能力を彼に与え」られた。これは，まず第一に「堕落したる或る民の記録と……イエス・キリストの完全なる福音」（教義と聖約20：8－9）とを世に出だすためであり，第二に，世の光となし，教会員と，この光を求める非教会員とのためにひとつの旗となすためであり（教義と聖約45：9），第三に，教会の民に主の降臨の備えをさせるためであり，第四に，あらゆる国々に力強く完全なる福音を教えるためであった。（*Documentary History of the Church*「教会歴史記録」第4巻，p. 537）

今日，国家や世界の将来に，重大問題が山積されているため，世界中の人々は人類を悩ます病弊の治療薬を捜し求め，また未解決のままになっている世界の諸問題を解く鍵を捜し求めている。

古代の予言者たちは，極度の挫折感に陥る今日の時代を先見していたように思われる。現代はまさに，誤った所に解答を求め，誤った方法で問題の解決策を求めている時代なのである。予言者たちは，次のような時代が来ることを先見していた。「わたしがききんをこの国に送る日が来る。それはパンのききんではない，水にかわくのでもない。主の言葉を聞くことのききんである。」さらに予言者は言った。「……主の言葉を求めて，こなたかなたへはせまわる，しかしこれを得ないであろう。」（アモス8：11－12）

心の満たされないこの時代に，私たちは，あらゆる方面から様々な質問が寄せられているように思われる。例えば次のような質問である。

教会はベトナム戦争についてどう考えているのか。

教会は人口過剰と産児制限の問題について，どのような立場をとっているか。

堕胎に対する教会の見解はどうか。

世界中にはびこりつつある共産主義の脅威に，どう対抗するのか。

犯罪の増加，特に少年犯罪の増加について，教会はどのような見解をとっているのか。

家族の絆を強め，不道徳の波を押し止め，自立と責任と道徳的，肉体的訓練の必要性を教えるために，一体何ができるのか。

こういった問題に対する解決策はないのだろうか。

私の話を進めるにあたって，10年程前，故デビッド・O・マッケイ大管長がこの説教壇から語られた，極めて重要な説教の一部をここで繰り返して述べてみたいと思う。

「この定まらない不穏な時代にあって，自由を愛する人々の最大の責任であり，また最高の義務ともいえるものは，個人の自由の確保に努め，人と神との関係を宣言し，イエス・キリストの福音の原則に従順でなければならないことを声高らかに宣べ伝えることにある。そうすることによってはじめて，人類は平和と幸福とを見出すのである。」（*Improvement Era*「インプルーブメント・エラ」1962年12月，p. 203）

こう言うと必ず質問が出る。この要請にどう答えたらよいのかという問いかけである。

使徒パウロはローマで捕らわれの

身になっていたとき，テモテに次のような手紙を書き送った。

「御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても，それを励み，あくまでも寛容な心でよく教えて，責め，戒め，勧めなさい。

人々が健全な教に耐えられなくなり，耳ざわりのよい話をしてもらおうとして，自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め，

そして，真理からは耳をそむけて，作り話の方にそれていく時が来るであろう。」（IIテモテ4：2－4）

再びマッケイ大管長の言葉を引用してみよう。

「パウロがテモテに送った最後の書簡には，今日でも同じように重要な内容が含まれている。すなわち……世界中の教会員は『御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても，それを励み（熱心で，まじめでいなさい，という意味）』なさいということである。

今日，混乱した世界のただ中にあって，真の末日聖徒の心の中には，何を宣べ伝えるのかという疑問はないはずである。その答えは，青天白日のごとく明らかである。……

つまり，簡潔に言えば，私たちが宣べ伝えるべきみ言葉とは，福音の救いの計画のことである。

この偉大なアメリカの建国者たちは，神を信ずる信仰を持っていたがゆえに，この国の経済的かつ政治的な繁栄を固く信じていた。だが，今日，人に関することにおいても神の導きが必要であるとは言いながら，人におもねて妥協的態度を取る人がいるが，これは別に珍しいことではない。……

しかし，私はあなた方に申し上げる。時が良くても悪くても，永遠の父なる神に対する信仰と，御子イエス・キリストに対する信仰と，聖霊に対する信仰を宣べ伝えなさい。

福音の計画の根本が，個人の尊厳にあり，神の業と栄光が「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす」（モーセ1：39）ことにあることを宣べ伝えなさい。……

神が生きてましますこと，神の愛する御子が人類の贖い主であり，救い主であること，救い主は，そのみ名をいただく教会の頭に立っておられること，そして，この地上で主を代表するよう権能を与えられた人々に，主が導きと霊感とを与えておられることを宣べ伝えなさい。……

この生命の計画を，この生き方を，そしてこの救いの計画を宣べ伝える責任は，全教会員にあると教えなさい。だが，とりわけ，神権の職に聖任され，民の指導者として，またしもべとして召されている人々にあると教えなさい。」（*Improvement Era*「インプルーブメント・エラ」1966年12月，p. 1093）

これらの永遠の真理は，1972年の今日においても，イエスがはじめて説かれた時と同様に生きている。また，この真理は，人類が存続する限り，人類の進歩と幸福のための基盤として，また必要欠くべからざるものとして残ることであろう。

次に，著名な教育者の言葉から引用してみよう。

「わが国で，また世界の国々で，社会的かつ政治的な刷新を行なうとするならば，まず，道徳の理想を刷新することから始めなければならない。」（ミズーリ大学，J・ウィリアム・ハドソン博士）

こう言うと，即座に，しかも判で押したように，そのような説はあまりにも無邪気で，現実の時の流れについていけない人間から出たものである，と嘲笑する人々がいる。事実，昨今の社会科学を研究する人々の中で，そう唱道する者もいる。だが，そのような人々は，自分たちの知識が本当に微々たるものでしかないということをまだ認識していないのである。しかし彼らがそれに気付くならば，微々たる学問であっても危険なものとはならないはずである。

時間があまりないため，私たちの世代を脅かす驚くべき問題を二，三取り上げて，若干の意見を述べるにとどめよう。

この教会の初期の迫害のさ中にあって，聖徒たちは，敵の脅威にいかに対処すべきか，その方法を求めて，熱心に主に祈った。

それに対し，主は次のように答えられた。「この故に汝ら戦を棄て平和を宣言し，子らの心にその先祖を思わせ，先祖の心に子らを思わせんことを熱心に求むべし。」（教義と聖約98：16）

そして，次のような重要な約束が与えられた。

「また，われ汝らに告ぐ，もし汝ら何事にまれわが命ずるところを守りて為さば，主なるわれ，すべて怒りと憤りとを汝らより去り，かくて地獄の門は汝らに打勝つことなかるべし。」（教義と聖約98：22）

教会の歴史の初期において，次のような，啓発的な主のみ言葉が与えられた。

「何人もその国の律法を破ることなかれ。そは神の律法を守る者はその国の律法を破る要なければなり。

この故に今ある権力に服従し，統治すべき権能を持ちてすべての敵を脚下に踏みつくる者の統治する時の至るを待つべし。」（教義と聖約58：21－22）

霊感を受けたこの神権時代の予言者は，現在私たちが「信仰箇条」と呼んでいるものの中で，この教会員の信条を宣言した。

「われらは，王，大統領，統治者，長官に従うべきを信じ，また法律を守り，敬い，支うべきを信ず。」（信

仰箇条第12条）私たちは，この宣言に従い，国家の危急存亡の時といえども，国の権威に服するのである。

簡単に言えば，この時聖徒たちが言われたのは，敵との戦いを避けるためには，戦いを捨てて平和を宣言しなければならず，またそのためには，まず家庭で親子が平安に過ごすことから始めなければならない，ということであった。

主はさらに約束を与えて，もし聖徒たちの間にある怒りと憤りとが克服されるなら，サタンは悪の力を振るっても決して勝利を得ることはないであろうと言われた。

教会においても，社会においても，この悪に対する備えをどこから始め，また初期の段階で阻止できない場合，悪に対する戦いをどこで武装闘争に切り換えたらよいのか，ということについては，主は疑問の余地がないほどはっきりと説明された。

主は，親たちに戒めを与えて，子供たちが主の前に正しく歩むよう教えるべしと言われたあと，私たちの中に主の眼から見て喜ばしくない者がいることを指摘された。主のみ言葉によれば，「怠る者その中にあり，彼らの子らもまた今や次第に悪事に増長し，永遠の富を熱心に求めずしてその眼は貪欲を以て充さるればなり。」（教義と聖約68：31）

この言葉をはっきり理解するならば，私たちは，諸悪の根源がどこに存在するのかを，ずっと教えられてきたことがわかる。私たちの子供たちは，これまで家庭で両親から正しく教えられていなかったのである。私たちの地域社会がこれまでとってきた政策と言えば，必要な物質を買うために働きたいと思う人がいても，勤労を促すのでなく，怠惰を助長するような政策であって，怠惰や失業を最少限に抑える手だては，なんら打っていなかったのである。

教会の歴史を見ると，開拓者たちの指揮者ブリガム・ヤング大管長は，開拓時代の政治家として，勤労の大切さについて，次のように語っている。

「私は経験を通じて学び，信念となったことがある。それは，もし人が充分健康で，何かする仕事があり，必要なものを働いて稼ぎ出せるのなら，彼らに，金銭，食糧，衣服などをことごとく与えることは，決して益にならない，ということである。これが私の信念であり，私はこの信念に従って行動する。これと反対のやり方を説けば世の中のいかなる社会も破滅してしまうであろうし，社会全体も怠け者の集団となってしまうことであろう。」（*Discourses of Brigham Young*「ブリガム・ヤング説教集」p. 274）

ここでしばらく本題から離れて，以前のこの朝の大会で話された言葉を引用してみたいと思う。何年か前，福祉計画が始められたころの，指導者たちの言葉である。

「ここで教会福祉計画の本質を説明しよう。それは，ただ単に人に食糧と衣服を与えることではない。無論それも重要なことは知っている。だが，それ以上に，永遠の存在である人々にそれぞれ独力で，創造的な活動により，誉れ高い労働により，そして奉仕により，己を築き上げさせるのである。怠惰な風潮に浸って育て上げられた世代は，高潔さを維持していくことはできない。」（Richard L. Evans, *Improvemeht Era* リチャード・L・エバンズ「インプルーブメント・エラ」1936年，p. 768）

「当初から，福祉計画の最終的な目的は，与える者，受ける者を問わず，教会員ひとりびとりの人格を築き上げることにあった。このようにして，人の心の奥深く存在する，貴いものをことごとく維持し，霊をあふれんばかりに豊かにし，実を結ばせるのである。そして，結局，ここに，この教会の存在している使命と目的と理由とがある。」（Albert E. Bowen, *Church Welfare* アルバート・E・ボウエン「教会福祉」p. 44）

教会員であるあなた方は，これら天からの霊感によって与えられた諸訓戒を霊感あふれる指導者たちの言葉通りに実践するにあたって，全教会員を対象に，家族の指導と参加を目的とする家庭の夕べという活動が与えられていることを認識しなければならない。これと関連して，主は，教会の福祉計画を通して，現世における救いの計画を示して下さっている。この計画では，だれでも，自分の能力の範囲で，労働と金銭によって与える者の側に立ち，また奉仕をすることができる。また，それら奉仕の実のいくばくかを受けることもできる。それは，その困窮者自身もかつてはその実を生産したからであり，何ら当惑することも遠慮することもなく，必要に応じて，物資を受け取ることができるのである。

さらに，主は子供と青年のための活動を設け，また教会の補助組織と神権定員会の組織で母親や父親に教えを与えるよう指示された。こうしてすべての人に与えるためのあらゆる手段が講じられたのである。この教会の青少年のための活動を評して，ある外部の人は，注意深い観察の後，次のように言った。「これほど数多くの素晴らしい活動に参加する機会が与えられれば，悪い活動に心を向ける時間はまずないでしょう。」

だれでも，少し考えただけで，こうした健全な社会一般の原則を，罪悪や失業や少年犯罪に悩むすべての地域社会が取り入れなければ，不穏な空気と困苦の種が，まさに主の警告の通り，その実を結び，はびこってしまうことがわかるであろう。こ

れら，正しい生き方の原則と主の救いの教えを応用することに注意を向けなければ，私たちは，悪の力がその手を伸ばして，家庭に，国家に，そして世界に挑戦してくることを覚悟しなければならないだろう。

そうなったとき，主御自身の予言にあるように，平和ではなく，つるぎが投げ込まれるのである。これは，息子を「その父と，娘をその母と，嫁をそのしゅうとめと仲たがいさせるためである。そして家の者が，その人の敵となるであろう。」（マタイ10：35—36）

あなた方は，これが現実に世界中の数多くの家庭に起きていることに，気付いているだろうか。人類と世界を救う主の計画に私たちの生活を完璧に適合させるために，さらに言葉を加える必要があるだろうか。もし私たち教会員が指導者の勧告に耳を傾けるなら，主の言われた，次のような約束が与えられることになる。

「……地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して，誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い，汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。」（教義と聖約21：6）

私たちは，大胆に，世界のあらゆる所に住む高貴な人々も皆，全人類を祝福に導く同じ道を歩むよう，勧めるつもりである。

だが，現在，全世界の教会員は，義の力と悪の力との間で行なわれている，果てしない戦いのために，全力を尽くさなければならない。予言者ジョセフ・スミスは，彼自身の経験から，十二使徒たちに次のように話している。その時から今日に至るまで，私たちはこの言葉が真理であると証することができる。ジョセフは，こう言った。

「あなた方は，あらゆる種類の試練を経験することであろう。あなた方が試練を受けることは，アブラハムや他の神の人同様，全く必要なことなのである。そして……神はあなた方を捜し求め，捕らえ，あなた方の心の奥底を揺さぶることであろう。だが，もしこの試練に耐えることができないなら，あなた方は，神の日の栄の王国において受け継ぎを得るにふさわしい者とはなれないであろう。」（John Taylar, in *Journal of Discourses* ジョン・テイラー「説教集」第24巻，p. 197）

再度申し上げる。たとえ，ある人口過密国家において非常な貧困があったとしても，神が時の初めに与えられた，「ふえよ，地に満ちよ」という神聖な戒めに従わず，人口制限をするような方策をとることは，由由しい罪であると。まことに，そのような方策を取り入れて，生命の誕生を妨害し，また誕生前や誕生後の生命を断ってしまうような人々は，神の罰という大きな報いを受けるであろう。神は侮られるような御方ではないからである。

現在，是非とも必要なことは，あらゆる可能な手だてを講じて，こうした不幸な人々の間に見られる無知を克服するため，世界的な運動を起こすことである。このような地域でこそ，主の救いの計画に範をとった，正しい生活と自制を教える根本的な原則，及び健全な経済原則とを取り入れなければならないのである。

この教会は，その方法を示す上で先頭に立たなければならない。私たちがそうして始めて，古代の予言が成就し始めるのである。予言者は次のように言った。「主の家の山は，もろもろの山のかしらとして堅く立ち，……すべて国はこれに流れてき，多くの民は来て言う，『さあ，われわれは主の山に登り，……彼はその道をわれわれに教え，われわれはその道に歩もう』と。律法はシオンから出，主の言葉はエルサレムから出るからである。」（イザヤ2：2—3，ミカ4：1—2参照）

世界の国々に起こっている政治上の混乱に関して，私たちが切に祈ることは，このアメリカ合衆国と他の諸国とが，人民の自由と政治上の自由が保障されるような政治体制を取り入れて繁栄を続け，予言者イザヤやミカに与えられた古代の予言が成就するのを心から待ち望みたい，ということである。その予言は，すでに引用した「律法はシオンから出，主の言葉はエルサレムから出る」という予言である。その日が来れば，自由諸国の祝福と自由が実現するであろう。

最後に，自由の敵によって広く流布されている教えのうち，大きな危険をはらんでいるものをひとつとりあげてお話しよう。それは，本質的には，私たちの愛する予言者であり，政治家でもあったJ・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長が，「聖典に記されている協同制度という主の計画を模倣したサタンの愚かな試み」と表現したものである。私たちの教会の現在の福祉計画は，教会員がこの協同制度という計画に従って生活するのにどの程度準備ができているかを知るための，いわば「予備訓練」とでも言うべきものである。この原則を踏み行なったひとつの実例として，「モルモン経」と呼ぶ古代の聖典の中には，このアメリカ大陸でこれを喜んで実現した民の記録が書かれている。この民は，皆，改宗して主を信じたため，「富んでいる者と貧しい者との区別もなく，自由な者と奴隷との区別もなくて，誰もかれも……天の賜を授けられた。」全地で「まことに……この民ほど幸福な民があるはずがなかった。」（Ⅳニーファイ3，16）犠牲と奉献の律法に完全に従って生活したためである。

教会内の善良な人々の中にはイエス・キリストと神の王国の福音の偉大な原則を，いわゆる「宗教熱」と言われるようなものに置き換えて，これまで責任を果してきたような人もいる。だがその結果は，動機がいかに誠心誠意なものであろうと，これらの危難に対処するために神の定められた神権組織以外の団体を使ったために，混乱を引き起こしてきただけである。そのようなことをしたために，これまで教会の兄弟同志で敵対するようなことがあり，そして，主が悪に対抗するために，教会と神の王国の神権組織を通してもたらす最大の武器である一致を弱めることもあったのである。そのような団体が幾つか形成され，似て非なる方策と処置をとったため，教会から離れ，背教し，ついには教会から破門されてきたのである。

私たちが神権者の指導に従うなら，たとえサタンが領土を支配することがあっても，主は啓示の書のはしがきに記された約束を成就して下さるであろう。主は次のように約束して下さっている。「……主もまたその聖徒らを支配し，その真中にありてこれを統治せん。而して……この世に下る審判のために天より降り来らん」（教義と聖約1：36）

私はすべての教会員が主の真実の旗印のもとに結束し，イエス・キリストの福音を，雄々しく教えるよう心から勧めたい。また，それによって，真に改宗した人々が主の救いの計画に反して，論争に終始するような意見や方針と結託するようなことが決して起らないよう，切に願っている。

主は確かに神権を通じて聖徒たちのただ中で統治しておられる。主は，人の手に成る組織を通してではなく，私がこれまで述べてきたような組織を通して権能を委任しておられるのである。

話の結びにあたり，私は教会と国家と世界のために謙遜に祈りをささげたいと思う。もっと言うべきことがあることは重々知っているが，この祈りを通し，しばらくの間，あなた方と信仰をひとつにしたいと心から願っている。

天にまします，われらの永遠なる父よ。今ここに集いたるわれらの祈りを聞きたまえ。激流のごとく世を覆いつつある悪の力を退けるためわれらのために，教会と世界の義しき男女がなしつつあるすべてのことを清めたまえ。あらゆる国民，部族，国語の民，民族に汝の偉大な贖いの計画をもたらさんとの熱意を，われらの内に燃えたたせたまえ。かくして汝の予言が成就し，水が大いなる淵を覆うがごとく真理が全地を覆う，その栄光の日を仰ぎ見ん。

われらと汝の業が汝の目的に一致するそのときまで，汝の全能の力をもてわれらを護りたもうよう，願い奉る。われら，汝の守りの眼のもとに自らを置き，汝が決してわれらを見捨てたまわず，汝の目的の成就に必要なる指導を続けたもうよう祈り奉る。

私は，この心からの祈りに加えて，教会員と世の人々に向けて証を述べたい。それは，主イエス・キリストの贖いを通じ，「すべての人類が，福音のおきてと儀式とを守ることによりて救わるる」（信仰箇条第3条）ということである。

私たちが携わっているこの業は，本当に主のみ業である。主は生きておられ，私たちが主に近づくにふさわしくなるよう備えさえすれば，主はいつでも喜んで私たちに近づこうとしておられるのである。

私自身の個人的な経験から，今まで厳粛に申し上げたことが真実であることを知っている。主イエス・キリストのみ名により。アーメン。

霊のききん

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター



旧約聖書で最も印象に残る予言と言えばそれはもちろん現代に関する予言であるが，そのひとつにアモスの語ったものがある。「見よ，わたしがききんをこの国に送る日が来る。それはパンのききんではない，水にかわくのでもない，主の言葉を聞くことのききんである。

彼らは海から海へさまよい歩き，主の言葉を求めて，こなたかなたへはせまわる，しかしこれを得ないであろう。」（アモス8：11―12）

ききんは旧約時代によく人々の上に襲った災いである。人々は収穫の失敗と人々の飢えがどれほどの苦しみをもたらすかをよく理解していた。アモスは人々がよく理解しているこの点に焦点を当てて，霊のききんを予言したのである。「……それはパンのききんではない，水にかわくのでもない，主の言葉を聞くことのききんである。」と語っている。

これより先に，モーセはこのように記している。「……人はパンだけでは生きず，人は主の口から出るすべてのことばによって生きる……」（申命8：3）

宗教上の疑問や衝突の解決に努める個人や宗教団体の間に見られる混乱や挫折を目にするにつけ，アモスの言葉が思い出される。

「彼らは……主の言葉を求めて，こなたかなたへはせまわる，しかしこれを得ないであろう。」

彼らは啓示の岩の上に建てずに解決策を求めようとしている。主は地獄の門に滅ぼされないようにするには，この岩の上に建てなければならないと言っておられるのだが。（マタイ16：17―18参照）この問題は時満ちたる神権時代にイエス・キリストの福音が回復される以前もそして回復された後，今日に至るまでも，善良な人々，誠実な人々の関心の的となっている。

今から134年前になる1838年，教会が組織されてわずか8年後のことだが，ラルフ・ワルド・エマーソンはケンブリッジ大学の神学校で最上級生を前に講演を行なっている。その中でエマーソンは，次のように質問した。これは，当時だれも答えることのできなかった質問であり，今日でも多くの人々にとって未解決の疑問である。

「私は私に課せられた義務として皆さんに申し上げたい。新しい啓示が今ほど必要とされているときはない。……人は無限の存在であることを，どれほど多くの教会が，どれほど多くの予言者が語っているだろうか。……かつてではなく，現在神がおられること，神が語られることを示すのは，真の教師の務めである。……人々は今や，啓示が遠い昔に与えられ行なわれたものとして語っている。まるで神が亡くなられたかのように。」（*The Complete Writings of Ralph Waldo Emerson*，『ラルフ・ワルド・エマーソン全集』pp. 37―45参照）

これは約150年前の言葉である。実に興味深い。今なおこの言葉は語り継がれているのである。

それから100年以上を経て，教育家のロバート・ゴードン・スプロール博士は現代のキリスト教会の状態について次のように述べている。「今や国家は特異な状況を呈している。キリスト教を信じていないにもかかわらず，キリスト教に則った儀式典礼を一部実施しているのである。私たちは心を啓発するために教会に目を向けるようにと勧められている。だがそうしても，教会で語られている事柄に何ら霊感を見いだすことができない。今日の教会の声は私たち自身の声でしかない。

この解決策は声にある。しかしながらそれは私たちの声ではない。…

…聖職者たちはその声を聞く義務がある。そして私たちにその声を聞かせ，意味を伝える義務がある。私たちは現在の社会を作ることはできた。だがこの声がないと，世を救うことはできないのである。」

UPI通信の首席編集員であるルイス・カッセルズは，一般大衆の宗教への関心が薄れていると語っている。それは人々が「信じられない事柄を聞くのに疲れてしまったからである。彼らは，もしあるとすれば，何を信じたらよいのかを知りたいと考えている。」「多くの教会はこの問題に対して解答を与えていない。」彼は以下の警告をもって筆を置いている。「人々がパンを求めているのに，石を与えていたら，パン屋に来る人はいなくなってしまうだろう。(*Christianity*「キリスト教」1970年10月23日)

1967年初頭に公表されたギャロップ調査によると，アメリカ人の過半数すなわち57%が，生活に宗教の影響を受けていないということである。その10年前では14パーセント，つまり四分の一に過ぎなかった。「これまでアメリカ社会の調査を行なってきたが，これは最大の変革のひとつに加えられる。」とジョージ・ギャロップ氏は述べている。調査が行なわれて5年を経た現在は，さらに落ち込んでいるに違いない。

ラルフ・ワルド・エマーソンがケンブリッジ神学校で，「新しい啓示が今ほど必要とされているときはない」と語ったが，それより10数年前に，予言者ジョセフ・スミスは自宅近くの森に入り，どの教会に入るべきかを神に尋ねている。今日の無数の人々と同様，彼も心の中に混乱を覚えていた。しかし主はそれに答え，不安を一掃されたのである。主は言われた。「彼らの信条はことごとくわが目より見て悪むべきものなり。……また彼らは唇もてわれに近づけど，その心はわれに遠ざかれり。彼らは人の誡命を教えとして教え神を敬う様をすれども神の力を否む。」(ジョセフ・スミス2：19)

一般的に言って，世の中はこの状態から何の進展もみせていない。

キリストがこの世におられた時に建てられた真の教会からの長い背教時代が終り，神の王国の確かな基がすえられた。それはこの神権時代に神の啓示の原則により神権と福音が回復されたことによるのである。神のみ名において行動する権能である神権は，バプテスマのヨハネと，救い主が地上におられた時に鍵を持っていたペテロ，ヤコブ，ヨハネの来訪を通じ回復された。ほかにも，エライヤス，エライジャ，モーセを含む力ある予言者，指導者が訪れて，王国に不可欠な鍵を回復した。また，イエス・キリストの新しい証し人であるモルモン経が天使モロナイを通じて回復された。

啓示が次々に下され，それらが教義と聖約に記されている。神の王国を治める組織の基礎がこのようにして確立された。神の王国はやがて全世界に広がってゆくのである。

140年余りを経た現在，神権によって回復された福音が伝えられ，奇跡が現実のものとなっている。この大陸をはじめ世界の各地に神殿が建てられ，礼拝の家にいたっては世界のここかしこに建てられている。砂漠はさふらんの花が咲く所となった。1万6千人の宣教師が多くの国々で福音を宣べ伝えている。世界各地にある小学校，高等学校，セミナリー，インスティテュート，大学では25万人以上の学生が，世の学問だけでなく，福音の永遠の真理をも学んでいる。

最も大切なことは，歴史を通じて現在に至るまで教会に予言者，聖見者，啓示を受ける者が存在しているという事実である。教会の頭として立つイエス・キリストが，現在の予言者ハロルド・B・リーに指示を与えておられる。さらに副管長，十二使徒評議員会会員，大祝福師も予言者，聖見者，啓示を受ける者である。300万を越える教会員は不確かなラッパの音に耳を傾ける必要はない。私たちは指導者が主に導かれていることをはっきりと知って，彼らの声を信じることができるのである。

イエス・キリストの教会では，教会員に対して最大限の力を発揮させる機会が用意されている。資格と意志を具えたあらゆる老若男女が有意義で報いのある活動に参加し，責任を果たしている。イエス・キリストの福音がすべての人の生活にもたらす心からの満足と精神の健康とがこうして助長されているのである。

年少の子供たちは幼い頃から訓練を受け，初等協会や日曜学校で責任を果たす。ふさわしい少年は12歳になるとアロン神権を受ける。つまり，人生を通じて与えられる数々の責任に備える訓練を始めるのである。

家庭において愛と忍耐と献身をはぐくむという生活の原則ほど，永遠の結婚に大きな影響を及ぼすものはない。大人になってからの適応力と実行力を養うのは主として家庭生活である。幸せで社会に順応する子供を育てる家庭を築くにあたって，永遠の結婚の原則ほど力を発揮するものはない。教会は親密で一致した家庭を築くことに最大の力を注いでいる。

神は死んだ。信じられるものはない。未来に望みはない。と説く宗教指導者，教育者，論説員と比較すると，これは何と大きな対照をなしていることだろうか。世の人々が味わっている混乱や挫折感は，忠実な教会員とは無縁である。1世紀半近くの間教会員が示した忠誠と献身がそ

の証明となっている。

この忠誠と献身は減少するどころか増大している。毎日何百人もの人が不信心の暗闇から，信仰を持ち，悔い改めの律法に従い，バプテスマを受けることによって，福音に基づく永遠の生活へと抜け出している。彼らの生活は聖霊の賜によって輝きを得，彼らの霊は神と人への奉仕によって高められている。

望みは確かにある。神は生きておられる。信仰を持つ者，信じようとする者にとっては信頼できる声がある。私たちはまさしく，アモスが語った「彼らは……主の言葉を求めて，こなたかなたへはせまわる，しかしこれを得ないであろう」（アモス8：12）というききんの時代に生きている。しかしながら，霊のききんの中にありながらも，霊の豊かな実りを見いだした人々も数多くいるのである。

私は神が生きておられること，イエスがキリストであり世の救い主であることを証する。これまでの話は，私の証である。すなわち，この末日に完全な福音が回復されたこと，耳を傾け，従う信仰を持つ者のために主の思いとみこころを語る予言者が今日この地上にいることを証する。そして私たちがそのような者になることができるよう，イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。



神のもとに子らは安し

十二使徒評議員会会員

ボイド・K・パッカー

ホーム・ティーチングほど大切な教会活動はない。

昨日の朝と今朝の二度にわたり，私たち教会幹部はリー大管長と共に会合を持った。皆さんは，私たちが大管長と共に神殿に入って会合を開くことが，どんなに素晴らしい経験であるかを想像することができると思う。

きょうの話の主題を決めたのは，少し前のその会合においてである。私たちは開会の讃美歌として「いともやさし」を歌った。そしてリー大管長は祈りの中でこの讃美歌の1節「神のもとに子らは安し」（讃美歌97番）という言葉を使われた。続いて，聖徒の安全をはかり，保護して下さっている全能の神に，厳粛に感謝を捧げ，また引き続き聖徒たちを守護したもうよう祈られたのである。

私は暴力と不安に彩られている世界の中に，互いに関心を払い合う民がいるという恵みに，深い感謝の念で一杯になった。

パウロはエペソの聖徒にこう言っている。「そこであなたがたは，もはや異国人でも宿り人でもなく，聖徒たちと同じ国籍の者であり，神の家族なのである。」（エペソ2：19）

聖徒たちと同じ国籍の者であるということには大きな意味がある。だれでも悔い改めて備えをし，バプテスマの儀式を受けさえすれば，この国籍を得ることができる。バプテスマを受ければ末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であり，決してひとりぼっちではないのである。

人は神の息子また娘である。家族はお互いに助け合うように教えられている。これを実行している家族の中では「子らは安し」という言葉があてはまる。それに家族の構成は驚くほど教会組織の形態に似通っている。

例えば，若い男女が親のもとから離れて住んでいても，ひとりぼっちで放置されているわけではない。彼らはいつも見守られているからである。子供たちが結婚すると，再び同じ循環が始まる。

結婚しないでいる人もいるが，それでも決してひとりぼっちのままおかれることはない。

子供たちが家庭を離れて自分の家庭を作り始めると，おじいちゃん，おばあちゃんと呼ばれる立場になった両親は，新婚の時のようにまたふたりで新らしい生活を始めることになる。これが自然で，予期される姿であり，望ましい形である。主の履みたもう道はとこしえに変わることがないからである。会員は決してひとりで放っておかれることはない。

子供たちは両親を敬うように教えられるが，時に遠く離れて住むことがある。しかしこの場合も教会は守護の手を差し伸べている。

また連れ合いに先立たれた老未亡人といえども，ひとりぼっちではない。この時も必要であれば，教会の組織が，未亡人の必要とすることを物心両面にわたって世話し，安心して生活できるようにするからである。

その方法は簡単である。2名の神権者が定員会会長から召され，定期的にホーム・ティーチャーとして各会員の家を訪れるように監督から割り合てられるのである。ホーム・ティーチャーは個人および家庭を守護するのである。

私は話の題材として，神権ホーム・ティーチングを選んだが，教会にはもっと心を躍らせる面白い活動があることをよく知っている。それどころか恐らくほとんどの活動が，もっと興味を引くことであろう。

先日，私は聖餐会が終わってからある家を訪ねた。母親が十代の男の子に今日はどうだった，と聞いていた。その若者はいかにも若者らしく，

大胆に物おじすることなく答えた。「よかったよ。聖餐会だけは，別だけどね。」

聖餐会はどうだったの，と母親が尋ねると，その子は言った。「うん，高等評議員がホーム・ティーチングや福祉について話さないでくれたらよかったんだけどね。」

この母親は顔から火の出る思いで言った。「デビッド，ここにいらっしゃるパッカー長老はそのプログラムの全教会の責任者なのよ。」

「知っているよ。でもパッカー長老はなぜ何とかしないんだろう。」男の子はこう言った。

一本取られた感じである。実は私はちょうど今，そのプログラムをどう運営したらよいか，知恵をしぼって働いているのである。説明させていただこう。皆さんはきっとこの密接に関連し合っているふたつのプログラムが非常に興味あるものであることを知るであろう。たとえ今それに気づいていないとしても，このふたつは皆さんが安らかに生活するために，必要欠くべからざるものなのである。

あの少年にかかっては，私も基本的な神権プログラムについて話した高等評議員と同様に言われることであろう。訓練や練習をやかましく言うコーチや，ほんの数分の発表のために何時間もの練習を要求する音楽の教師も同列に置かれることになるであろう。また両親も同様である。人生の基本的な事柄に注意を払うよう，また働くよう求めるからである。

繰り返そう。ホーム・ティーチング以上に人々を引きつける活動があるかもしれないが，これ以上に重要なものはない。

面白いことに，余りに基本的な事柄は，往々にして当り前のように考えられることである。例えば私たちの体内に血液が循環していて，体を支えるために栄養を補給し，不要な物質を運び出している。また病気や病気の感染から体を保護している。この血液循環作用は心臓が間断なく確実に収縮運動を繰り返すことにより，円滑に行なわれている。生命の必須の運動である。

ところが普通，指の切り傷の方が注意を引く。心臓の方は，鼓動が途切れがちになったり，止まるまで誰も注意を払わない。そんな事態になってはじめて注意を払っているのである。

不思議なことに，ホーム・ティーチングはいかにも空気のように当り前のものと思われていて，大部分の会員があまり注意を払っていない。型にはまった訪問をし，時には面倒なものと考えている始末である。それでも教会員がよそでは得られない保護と世話を受けられるのは，このホーム・ティーチングのおかげなのである。

十代の若い同僚に一晩5，6軒の家を訪問しようと誘っている人を思い浮かべていただきたい。ふたりは家族を励ますために訪問し，彼らが霊的に何を求めているかを知り，彼らの福祉に関心を払う。こうしてすべての人が緊急の時に助けを求めることのできる人がいることを知って安心するのである。

病気で倒れてもすぐ助けの手が差し伸べられる。子供の世話はしてくれるし，訪問が手配される。このような場合，神権ホーム・ティーチャーと扶助協会の訪問教師が共に働く。問題は病気だけとは限らない。悩みをもつ十代の子供や，しつけのむずかしい幼児の場合もある。

この神権ホーム・ティーチングという系路を通じて，地上の教会にある限りの手段をつかって援助することができる。それだけではない。天より可能な限りの霊的な救いの力を注ぐこともできるのである。

ホーム・ティーチングを通して数数の悲劇が避けられ，意気消沈した心が活気づけられ，物質的必要が満たされてきた。悲しむ人は慰められ，虚弱な人は祝福を受けていやされている。この仕事は大げさに宣伝されるわけではない。しかし，全能の神の霊感によって始められた制度であって，この民の霊的成長に欠くことのできないものである。

教会の指導者は神権ホーム・ティーチングを成功させるため，多大の努力を払っている。ホーム・ティーチングはたとえ脚光を浴びなくとも，現在絶えず行なわれており，これからもずっと行われるであろう。社会が変転し，教会のプログラムに様々な追加はあっても，ホーム・ティーチングの原則に変更があったことは一度もなかった。この制度がなければ教会はたちまち教会ではなくなってしまう。もう一度言おう。もっと面白い活動はあるかもしれないが，これ以上に大切なものはないのである。

私はいろいろな活動のプログラムが用意されていることを感謝している。これらのプログラムは，いわば香料，調味料，デザートの役目を果たし，人生を楽しいものにしてくれている。特に若い人々にはそうである。私はこれらの活動に大いに好感を覚えこそすれ決してないがしろにされるのを喜ぶものではないし，ましてや私から取り上げようとしてもできない相談であろう。

ホーム・ティーチングしか行なわない教会は，若い人々にとって調味料もデザートもない食事のように全く面白くないかもしれない。しかし私は各地の指導者が活動のプログラムだけに指導を集中して，ホーム・ティーチングを無視する傾向にありはしまいかと懸念している。

監督の皆さんに申し上げる。活動プログラムだけで青少年を育成しようとするのは，チョコレートやソーダ水で運動選手を養成しようとするようなものである。若い人はそれに引かれるかも知れないが，それだけではあまり栄養にならない。青少年を救う上で，ホーム・ティーチングに時間を費やし注意を払う以上に効果の大きいものはない。というのも，ホーム・ティーチングの目的は家庭を強化することにあるのであって，十代の人がよく口にし，また承知しているように，「それでこそ本来の姿である」からである。この家庭を結ぶ生命線がつながっていれば家庭を強化できるばかりでなく，活動ももっと味わい深いものとなることがわかるであろう。

若い人々を元気づける方法は数多くある。私たちがいろいろ考えれば，興味を引きそうな方法を一杯案出できそうである。しかし結局は主の方法に落ち着いていくであろう。

毛皮とりの猟師の話がある。彼はもっぱら狐の毛皮でちょっとした財産を築き上げた人物である。ある時，彼は冬の間南方へ出かけ，その間わなはよく訓練した若手の助手に任せることにした。それでわなのしかけ方とえさを置く場所を教えた。

ところが春になって帰ってみると，わずかの狐しか捕まっていなかったので落胆し，「教えたとおりにしたのか」と聞いた。

「いいえ，もっといい方法を発見したんです」と助手は答えた。

監督と定員会の指導者の皆さん，ホーム・ティーチングに十分配慮するよう勧告したい。ホーム・ティーチャーがなすべきことをほかの方法でしようとして彼らの責任を解いてはならない。青少年を強めるための数多くの方法を編み出すこともできるかもしれない。しかし間もなく主の方法に戻らなくてはならなくなるのである。

聖典に次のように書いてあることが思い出される。「主は言う，われ約束してこれを果さざりしことあらんや。

われ命を下すに人これに従わずば，われ我約束を取消し祝福を与えず。

その時，人々心の中に言わん。こは主の御業にあらず，主の約束果されざればなりと。されどかくの如き人は禍なるかな。その報いは地の下に潜み，天よりの報いあらざればなり。」（教義と聖約58：31—33）

ホーム・ティーチャーの皆さん，皆さんは，機械的な訪問をし，時には骨の折れる仕事だと感じることもあろうが，決してこの責任を軽視したり，訪問しさえすればよい責任だなどと考えてはならない。皆さんがホーム・ティーチングに使った時間，歩いた距離，ドアをノックしたこと，すべての挨拶，励ましの言葉は2倍になって帰ってくるであろう。

ホーム・ティーチャーが家庭を訪問していて教えられることがよくあるのは，興味深いことである。ホーム・ティーチャーが犠牲を払い，奉仕しているのは事実であるが，そんな状況の中でも，恵みを多く受けているのが一体訪問されている家族なのか，ホーム・ティーチャーなのか，わからないことがよくある。

私も非常に貴重な教訓を得た経験がある。やはりホーム・ティーチャーとして働いているときのことである。

結婚する少し前，私は年上の同僚と2人で，小柄なひとり住まいの老婦人のホーム・ティーチャーに召された。この婦人は病身で，ドアをノックしても動けないので，入ってきて下さいと返事することがよくあった。ベッドから出られないため，ベッドのそばでメッセージを伝えることがしばしばであった。

私たちは何かの拍子に，この人がレモンアイスクリームが大好きなのを知った。それでよく訪問する前にアイスクリームの店に立ち寄った。彼女の好みを知っていたので，私たちは二重の理由で歓迎されたのであった。

先輩同僚が何かの理由で行けない時があった。私は一人でいつものように訪問前にレモンアイスクリームを買って行った。

彼女はベッドの中にいた。そして翌日孫がとても難しい手術を受けるので心配でしかたがありません。ベッドのそばでひざまずいて，孫のために祈って下さいと私に頼んだ。

祈り終わると，彼女は私が間もなく結婚することを思ってであろう，こう言った。「今晩は私がレッスンしましょう。あなたにお話して聞かせたいことがあります。この話は決して忘れないで下さい。」そして私が今もって忘れることのできないレッスンが始まったのである。彼女自身の生涯の話であった。

立派な青年と神殿で結婚してからの数年間，ふたりは，毎日の生活と子供たちを養うのに一生懸命であった。そんなある日私書箱Bから手紙が舞い込んできた。（その当時，ソルトレークの「私書箱B」からの手紙といえば，必ず伝道の召しであった。

驚いたことに，ふたりは家族で遠い国へ出かけて行って，そこで伝道活動を開始する召しを受けたのであった。ふたりは召しを忠実に，また立派に果たし，何年かたって帰国し，また家族を育てていく責任を果たし始めた。

そこでこの小柄な婦人は，話をある月曜日の朝の出来事に移した。山のような洗濯物を抱えて，いらいらしていたのだろうか，ちよっとしたいざこざがあって，意見が分かれ，

続いて夫婦の間に非難の言葉が飛び交った。どういうわけか老婦人はそれが何をきっかけに始まり，何をめぐって起こったのか覚えていなかった。「とにかく，私は門の所まで行って，夫が仕事に向かうのを見送りながら，夫に向かって，ひどく意地悪なとげとげしい言葉を投げかけたのです。」

それから涙を浮かべて，その日事故があって夫が二度と帰らぬ身になってしまったことを話してくれたのである。

「それから50年というもの，私は地獄に住んでいるような思いで生活してきました。私が夫に最後に投げかけた言葉が意地悪な，とげとげしいものであったことを忘れられなかったからです。」

これが，若いホーム・ティーチャーに話してくれたメッセージである。彼女はこの話を決して忘れてはいけませんと強く念を押した。私はそれ以来この話から豊かに恵みを受けてきた。その時から夫婦というものは一言も食い違う言葉を口にしなくともやっていけるものだということを知ったのである。

私は時々あの家に訪問したことや，費やした時間，アイスクリームに使ったわずかなお金のことを考える。あの小柄な姉妹が幕のかなたに召されてからすでに久しい。私の先輩同僚もすでにこの世の人ではない。しかし，ホーム・ティーチャーが教えられたあの大きな経験を私は今でも忘れていない。以来，私は，機会あるごとに，結婚の聖壇の前に立つ若い男女に，そして世界各国の人々に，彼女の教えを幾度となく説いてきた。

ホーム・ティーチングには霊的に優れた要素がある。ホーム・ティーチングの割り当てを受けて出かける神権者は，皆測り知れない恵みを受けて帰ってくるのである。

教会でどんな責任を受けているかと聞かれて，「ただのホーム・ティーチャーです」と答える人を見かけたことがある。

ただのホーム・ティーチャー。言いかえれば，群れを見守る守護者にしか過ぎないと言っているに等しい。しかしこれは，神に仕える最も大切な責任であり，主のしもべの責任なのである。

冒頭に引用した讃美歌の歌詞「神のもとに子らは安し，世の造り主導きたもう」が真実なのは，あなた方ホーム・ティーチャーのおかげなのである。

イエスはキリストであることを証する。この教会はキリストの教会でありまた王国である。私たちはキリストから神権と権能を与えられている。私たちは予言者を頭にいただいているが，予言者は生身の人であり，地上の果てまで出かけて行って，すべての支部，伝道部，ステーキ部，ワード部に恵みを及ぼすことはできないが，与えられた権能と鍵を使うことによって，ステーキ部，ワード部，支部はもとより各家庭，個人に至るまで，祝福しあるいは支え，安らかに住めるようにすることができるのである。イエス・キリストのみ名により，アーメン。



人生のスイッチ

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

ウイルフォード・ウッドラフの記録によると，1833年に教会の全神権者が4メートル四方の部屋に集まり，予言者ジョセフと共に会合をもったという。

今宵，彼らと同じ神権を持つ18万以上の人々がこの会場をはじめとする750の会場に集っている。この中で，青少年は2万5千から3万人にのぼると思う。私はみたまに導かれるならば，青少年に対して話したいと思う。

最初に，私は現代の青少年ほど，献身的で能力を具えた青少年は教会の歴史を通じて他に類を見ないと確信していることをお伝えしておきたい。年長の兄弟たちの中には異論を唱える方があるかもしれない。このことについて一つの話を思い出した。ある朝，一人の息子が朝食のときにこのようなことを言った。

「お父さん，きのうお父さんの夢を見たよ。」

「私の？　どんな夢だい。」

「天国までかけられているはしごを昇るんだ。そして，はしごの一段一段にチョークでぼくが犯した罪を書いて行かなきゃならない夢だったの。」

「それで，お父さんはどこで登場するんだい。」

「ぼくがはしごを昇って行くと，お父さんはたくさんのチョークを抱えてはしごを降りて来たっていうわけ。」

主はこれまで度々少年を選んで，主の偉大な目的を成就するための訓練を施された。サムエル，ダビデ，エジプトに売られたヨセフ，ニーファイ，モルモン，ジョセフ・スミスがその例である。

神は皆さん一人一人をも大いなる計画の中で，何か大切なことをさせるために選ばれたと私は信じている。それは今あげた人々の召しとは異質のものかも知れない。しかし，神は皆さんを愛しておられ，一人一人になすべきことを用意しておられる。

皆さんに主のみたまが宿り，聖霊が皆さんを通して語りたもうように生活する責任が課せられているのである。

私はみたまの賜によって，力強く語り，皆さんが心を動かされて神と人に愛されるような生活をしようと決意することを願っている。

これは決して不可能なことではない。悲壮な決意をもって人生の進路を決める必要はないのである。日常のささいな事柄についての選択が進むべき道を決めるからである。

かなり昔のことになるが，私は鉄道会社の本社に勤務していたことがある。ある日，ニュージャージー州ニューアークの支社から電話がかかってきた。旅客列車が到着したのだが，乗客の荷物がなく，乗客が怒っているということであった。

調査してみると，客車はカリフォルニア州オークランドで連結され，セントルススまで運行されていた。そして東海岸の終着駅に向かうことになっていた。しかし，セントルイス駅の操作場で，操作士が不注意にわずか10センチメートルほどレバーを動かしてしまったのである。

そのレバーがポイントのスイッチであったため，ニュージャージー州ニューアークへ行くはずの列車が2,000キロメートルも離れたルイジアナ州ニューオーリンズへ行ってしまったのである。

私たちの人生もこれと同じことが言える。一本のタバコ，パーティーの席での一杯のビール，好奇心からの幻覚剤，これらが少年の人生の方向を転換させ，予任された偉大な召しから遠く離れる道へと彼らを運んでしまうのである。ニーファイは次のように述べている。「……このよう

に悪魔はこの人々をだまし，心を配って地獄へつれて行くのである。」（IIニーファイ28：21）

私は今，手の中にスイスで買い求めた小さな箱を持っている。映画「サウンド・オブ・ミュージック」の最後を飾った美しい歌，「エーデルワイス」を覚えておいでだろうか。アルプスの花を，「白く小さい，清く輝ける故国に恵みあれ」と歌う。

この箱にはエーデルワイスの種子が入っている。コショウ粒ほどの小さな種子である。けれども箱には，どんな花が咲くかが描かれている。スイス・オーストリアアルプスの高原で吹きすさぶ嵐に耐え，雪の下で花を咲かせ，アルプス高原に美を添えるあの花である。この小さな種子の中には，活気に満ちた美しい生活の可能性が秘められている。頑健な民，「白く小さい，清く輝ける」偉大な国の祝福の象徴となっているのである。

少年たちもこれと同じである。皆さんは善を行なう可能性を測り知れないほど秘めている。日常のささいな事柄の判断が人生を決めるのである。

従って，常に知恵を用いて欲しい。皆さんが考えている以上の能力を主は祝福して下さっている。あなたの知能指数は世界最高ではないかも知れない。そんなことはかまわないではないか。刑務所を埋め尽くしているのは頭の良い人たちばかりである。私は，世の数々の業は知的天才ではなく，並の能力でもそれを特異な方法で使う人々によって成し遂げられると考えている。皆さんは教会員として学問を追求し，技術を改善する義務がある。

どんな職業を選ぼうとそれは問題ではない。商人，教師，大工，配管工，技師，医者，その他誉れある仕事であれば何でもよい。大切なことは社会にあって有用な人物になることである。目的もなく中途半端な生活をすることはたやすいが悲劇を生む。これに対して建設的な生き方は困難を伴うが満足を与える。自分自身とあなたが仕える人々にも恵みをもたらすだけでなく，末日聖徒イエス・キリスト教会に対しても誉れをもたらすのである。あなたがモルモンであることを人々が認め，仕える人々の口を通して教会のイメージも高められるであろう。神権を持つあなたは安っぽい働きなど許されないのである。

清くありなさい。「汝ら，主の器をもてるものは潔くあれ。」（教義と聖約38：42）　汝ら，主の晩餐の聖餐を扱い，執行するものは潔くあれ。

先日，私たちはリー大管長と共に，エルサレムのゲッセマネの園を訪れた。主が苦しみながら，やがて身に受ける恐るべき苦悩，神の御子といえどもあらゆる毛孔より血を湧かせる苦しみを予見しておられた地である。主はここであざけられ，裏切られ，悪人の手に渡された。

若い友人の皆さん，私たちは主の犠牲の象徴を執行する時に，もし清くない手と心で聖餐台の前に立つなら，主をあざけっていることになるのではないだろうか。

皆さんは執事，教師，祭司として，卑しい話に興じたり，笑ったり，ポルノ小説を読んだり，ポルノ映画を見たり，自分を性的に汚したり，あらゆる不道徳なことをしたりしてはならない。

心の平安を維持するために清くありなさい。先日，伝道を志している青年と会う機会があった。彼は数カ月間不道徳な行動をとっていた。交際していた女性と共に，二人は上手に立ち回っていると考えていた。しかし，彼は取り返しのつかない大切なものを女性から奪ったこと，彼自身も償うことのできないものを失ったことに気付いた。彼は涙で頬を濡らしながら，自ら守り得なかった行動の基準を教えるために世に出て行くことはできないと自ら判断した。平安も喜びも彼には残らなかったのである。

あなたの子孫のために清くありなさい。いつの日か，皆さん一人一人が理想の女性に出会う。その女性を本当に愛しているならば，あなたは彼女を傷つけるよりも自分の右手を切り落とした方がよい。あなたを通じて先祖の特質を後代に引き継ぐことになる事実から目をそらしてはならない。立ち止まってよく考えていただきたい。あなたの行動次第でそれらの特質が弱められも高められもするのである。清くありなさい。そうすればあなたの力は十倍にも強められる。それは心が清いからである。

愛する友人の皆さん，従順でありなさい。神権の召しに従順でありなさい。私たちは最近，イギリスとヨーロッパ各地で1,000人以上の宣教師に会った。私にとって彼らは奇跡である。それも途絶えることのない奇跡である。驚異的な能力，障害に立ち向かう勇気，素晴らしい説得力，すべて感動に値する。どのようにして身につけたのかと尋ねた人がいた。この能力は教会の召しに従順であることによって，次第次第に身につけたものである。

神の王国には，小さな務めや大切でない務めというものはない。ひとつひとつの責任を果たすことによって，新しい事柄，多くを要求される事柄を成し遂げる力が身についてくるのである。今宵タバナクルで壇上に座っている方々，世界中の神権指導者は，頼まれたことを熱心に果たそうと努めた少年時代を経験している。

「義務が静かに，『あなたはしなけ

ればならない』と告げ，若者が『できます』と答える時，人は神に，神は人に近づく。そして栄光が目前に迫ってくる。」(ラルフ・ワルド・エマーソン)

常に祈りの気持を持ちなさい。主は次のように約束しておられる。「汝須らく謙遜なれ，さらば主なる汝の神は手を取りて汝を導き汝の祈りに応えん。」(教義と聖約112：10)

ウイルフォード・ウッドラフ大管長はこのように言明している。「自らの召しを全力を尽くして遂行するのであれば，祭司であるか使徒であるかは問題ではない。祭司は天使の導きと恵みを施す鍵を有している。私は使徒，七十人，長老を経験しているが，これまでの半生で，祭司の職にあった時に受けた主のみ守りに勝るものを受けたことがない。」皆さんが受けているアロン神権には，天使の導きと恵みを施す権利が伴なう。このことを深く考えてみると，いかに驚嘆すべき祝福にあずかっているかがわかると思う。

皆さんのお許しをいただいて，先日スイスのローザンヌで聞いた話をもう一度紹介したい。それは神聖な出来事であった。私はそう考える。

60年以上も昔のことであるが，アイダホ州の農場に住む一人の少年が父親について農場へ行った。父親が一日中忙しく立ち働いている間，少年はあちこちで遊んでいた。柵の向こうに，壊れた古い納屋があった。想像力の旺盛な彼は，家畜をその納屋に入れたらどうかと考えた。中を調べてみようと柵を乗り越え，納屋に近付いた。その時，「ハロルド，そっちへ行ってはいけない」と言う声がした。彼は振り返って父親を捜したが，父親の姿はなかった。しかし少年はその警告に従い，きびすを返して走り出した。彼はどのような危険が潜んでいるかを知らなかった。また，潜んでいるかどうかを疑いもしなかった。耳を傾け，従ったのである。

この少年こそ，現在末日聖徒イエス・キリスト教会を管理しているその人である。長年にわたり，彼は耳を傾け，主は聖きみたまのささやきによって彼を強め，守り，導いてこられた。

先月，3週間にわたり私は主のみ業における彼の後輩同僚として行動を共にした。私はみたまがこの現代の予言者の中に働いていることを証する。少年時代より養い育て，耳を傾けてきたみたまである。

友人の皆さん，祈りを捧げ，そして耳を傾けなさい。声を聞くことはないかも知れない。恐らくないと思う。しかし，言い表わすことのできない方法で，あなたは励ましと祝福を受ける。主が次のように約束しておられるからである。「われ，汝に来……るべき聖霊によりて汝の……情に告げんとす。」(教義と聖約8：2)

常に祈りの気持を持ちなさい。そうすれば神が聞いて答えて下さることを知るであろう。神に答えていただきたいと望む時に必ず受けるわけではないが，時の経過と共に，太陽が昇るように確かに，神は聞いて答えて下さったと知る時が来るであろう。

従って，人生のスイッチすなわち日常のささいな事柄の決断に注意しなさい。知恵を使いなさい。清く，従順でありなさい。また常に祈りの気持を持ちなさい。そうするためにはかなりの自己修養が要求される。しかしながらこれは，前途に待ち受けている神の王国の建設と，世にあって有用な働きをなすという大いなる務めを果たすための強さと能力を培うものである。満たされた人生と永遠の喜びを得ることであろう。私は主のしもべとしてそのように約束し，主からのみもたらされる安らぎが皆さんの上にあるよう願い，これらをイエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

貧しい人，乏しい人を心にかける



大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

愛する神権者の皆さん。私たちは神権者として周囲の「貧しき人々，乏しき人々」を心にかける義務を負っているが，私は今宵，この点を中心に話を進めてゆきたいと思う。以前はそういうことがなかったが，現在私たちは福音のこの点についてあまり関心を払っていないようである。

しかしながら，イエスは教えの中でこれを最重要視しておられたと思われる。マタイ伝25章に記されている主の言葉を思い返していただきたい。すなわち，主は栄光のうちに降臨される時，「羊飼が羊とやぎとを分けるように」(32節) 主の民をより分け，羊を右に，やぎを左におかれるのである。

主は右にいる人々には「わたしの父に祝福された人たちよ，さぁ，世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」と，左にいる人々には「のろわれた者どもよ，わたしを離れて，悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいってしまえ」と言われる。(マタイ25：34，41)

同じ箇所で主は，その大いなる日により分ける基準となるのが，貧しい人々や乏しい人々を心にかけたかどうかという点であると述べておられる。

また，たくさんの資産を持っていた青年と語ったときにも,主はこのことを強く言っておられる。「……帰ってあなたの持ち物を売り払い，貧しい人々に施しなさい。そうすれば，天に宝を持つようになろう。そして，わたしに従ってきなさい。」(マタイ19：21)

よきサマリヤ人のたとえ話の中でもこのことが強調されている。

貧しい人々を心かける義務については，聖書と同様モルモン経でも強く教えられている。

ベンジャミン王は，罪の赦しを受けるために悔い改めを行なう上で，貧しい人々に心を配ることが不可欠であると教えている。

「……日々自分の罪の赦しを保ち，……ことができるように，お前たちが一人一人みなその財産の多い少いに応じてそれを貧しい人々に分け与えることを望む。それはたとえば，腹のすいている者に食物を与え，はだかでいる者に着物を着せ，病んでいる者を見舞い，各々の必要に従って肉体についても霊についても救助を施すことである。」(モーサヤ4：26)

アミュレクは，祈りが聞きとどけられるには貧しい者に施すことが必要であると説明している。キリストの贖罪により，「悔改めを生ずるような信仰」を持つすべての人に対して，憐れみが正義の要求を満たすことを説明した後，アミュレクは次のように力強く勧告している。

「それであるから私の兄弟らよ，ねがわくはあなたたちが悔改めを生ずる信仰を起し，神が自分たちを隣みたもうよう，神の御名によって祈り始めることを神が許したまわんことを。

神は人を救う大能を具えたもうから，神に憐みを求めよ。

牧場に居る時は，あなたたちの家畜の群について神に祈れ。

家に居る時はあなたたちの家族全体について朝も昼も晩も神に祈れ。

一切の義しいことに敵対する悪魔を防ぐことができるように神に祈れ。

こればかりではない，あなたたちが一人で部屋に居るときも，秘密の所に居るときも，また野に居るときも心にあることをうち明けて祈れ。

声をあげて主に祈らない時でも，自分の為を思ってたえず心の中で主に祈れ。」(アルマ34：17—18，20—21，23，26—27)

以上を実行するならば，素晴らし

い人になると皆さんは思わないだろうか。しかし，アミュレクはこれで十分だとは言っていない。

「私の愛する同胞よ。これで満足だと思ってはいけない。たとえこれらのことをみな行っても，もしも貧しい者や着る物のない者の願いをことわり，病んでいる者，あるいは悩んでいる者を見舞わず，持物がありながらその幾分を貧しい者に施さないならば，あなたたちの祈りは空しくなってその効果はなく，またあなたたちは神の言葉を否定する偽善者のようになるであろう。」（アルマ34：28）

これら古代の聖句は確かに感動的であり，私たちの精神を高めてくれる。だが，私たちが拘束を受け，裁きの基準として取り上げられるのは近代の聖典である。従って，近代の聖典がどのように教えているかを是非とも知っておかなければならない。

教会が組織されて1年にも満たない頃，すなわち1831年の1月に，主はこの問題に触れて次のように言われた。

「ことごとくの者，兄弟を己が身の如くに思い，わが前に徳と聖きを履み行うべし。

われ重ねて汝らに告ぐ，汝ら皆己が身の如くに兄弟を思うべし。

汝らの中誰か十二人の息子を有つに，その一人にのみ偏よることをせざればその子たちよく父に仕う。然るに，すなわち一人に向いて汝礼服を着けて此所に座せよと言い，また他に向いて汝ぼろを着て彼所に居れと言い，しかも息子たちに向いて，見よ，われ公平なりと言うことを得んや。

見よ，こは一つの比喩を以て汝らに語るところなれど，正にわれ在るが如く真なり。われ汝らに向いて言わん，汝らひとつとなれ。もしひとつとならずば，汝らはわがものにあらず。」（教義と聖約38：24—27）

この点をさらに明確にするため，主は同じ啓示の中で，この世につける物について述べておられる。

「さて，またわれこの地方の教会員に一つの誡命を下さん。すなわちこの教会員の中，ある人々は任命を受く……べきなり。

任命されたる人々は貧しき人々乏しき人々に心を留めて，その苦しまざるよう救助を施すべし。……」（教義と聖約38：34—35）

それから数週間後，主は，教義と聖約42章に記録され，教会の律法として下された偉大な啓示の中で，次のように言われた。

「汝らもしわれを愛すれば，……

汝ら貧しき者のことを思い起し，彼らに与えざるべからざる扶助のために，……己が財物を神に奉献せよ。

また汝らの財物を貧しき者に分ち与うれば汝らこれをわれに為すなり。……」（教義と聖約42：29—31）

貧しい人々や乏しい人々を心にかけることの大切さについては，1831年6月7日カートランドで与えられた啓示に述べられている。主は兄弟たちを二人一組にしてミズーリへ遣わされた。指名を受けた兄弟たちはほとんど衣食にも事欠く状態であったが，四州にまたがる旅に出かけた。予言者自身もセントルイスからインデペンデンスまでの全行程約300マイル（480キロメートル）を徒歩で向かった。こうした苦難の中にあったにもかかわらず，主は最後に次のような指示を下されたのである。

「また汝ら貧しき者，乏しき者および病める者，悩める者たちを万事に憶えて憐れむべし。これらの事を為さざる者はわが弟子にあらざればなり。」（教義と聖約52：40）

こうした苦難の只中にあった兄弟たちでさえ，「貧しき者，乏しき者および病める者，悩める者たち」を心にかけなければ主の弟子たる資格を失ったのである。さて，兄弟の皆さん，豊かに恵まれている私たちが，もし彼らのことを心にかけないとしたら，どんなことになるだろうか。

現代社会は主の計画を覆えそうとするたくらみが横溢している。こうした社会にある私たちは，惑わされて，貧しい人々や乏しい人々に対する責任を政府その他公的機関に転嫁してその義務から免れ得るといった間違いに陥ってはならない。私たちは自ら進んであふれる愛を隣人に示さなくては，モルモンが語った愛すなわち「キリストの純粋な愛」（モロナイ7：47）をはぐくんでゆくことができないのである。そしてこの「キリストの純粋な愛」は，私たちが永遠の生命を得るために是非とも身につけなければならないものである。

貧しい人々や乏しい人々に心を配るよう指示された主は，あらゆる神権時代の人々にそれを実行する具体的な方法を明らかにしておられる。古代イスラエルの民に与えられた方法は実に簡潔なものである。

「あなたがたの地の実のりを刈り入れるときは，畑のすみずみまで刈りつくしてはならない。またあなたの刈り入れの落ち穂を拾ってはならない。

あなたのぶどう畑の実を取りつくしてはならない。またあなたのぶどう畑に落ちた実を拾ってはならない。貧しい者と寄留者とのために，これを残しておかなければならない。……」（レビ19：9—10）

実に簡単明瞭ではあるが，これはすべての福祉計画で実施されている二つの基本原則の上に成り立っている。すなわち，（1）持っている者は与え，（2）受けた者は働く，ことである。

ルツはこの福祉計画に従ってボア

ズの畑で落ち穂を拾ったのである。もちろん，ボアズがルツに対して好感を持っていたため，ルツが多少恵まれていたことは事実であるが，当時このプログラムは実施されていたのである。

主の計画の中で，貧しい人々を助ける義務と同様に偉大なことがある。それは援助を受けた人は，自分と家族のために，能力の限り働くということである。主はアダムをエデンの園から放逐するにあたって，次のように言われた。「あなたは顔に汗してパンを食べ，ついに土に帰る。」（創世3：19）

この神の命令は今なお効力を有している。現在の神権時代に「教会の律法」として与えられた啓示の中で，主は次のように言われた。「汝怠惰なることなかれ。およそ怠惰なる者は働く者のパンを食することもなく，またその衣服も着るべからざればなり。」（教義と聖約42：42）後に主は次のように付け加えておられる。「……怠惰なる者は悔い改めて行いを改むるにあらざれば，教会の中にて地位を与えらるることなし。」（教義と聖約75：29）

怠惰を戒めるこの命令と同様の厳しさをもって命じられていることがある。援助を受けた者がこの戒めに従わないからといって，教会員は「わが福音の律法に従いてこれを貧しき者乏しき者に」財物を分かち合わないでよいということはないのである。（教義と聖約104：18）

この点についてベンジャミン王は次のように語っている。

「おそらくお前たちは『この者は自分自身でこのみじめな有様を招いたのであるから，私はかれを助けるのを止め，その苦しみを救うために私の食物を与えず，また私の持物も分けてやらない。その苦しみは当然の罰であるからである』と言うであろうが，

私はお前たちに告げる。このようなことをする者は誰でも大いに悔い改める必要がある。もしもその行いを悔い改めないならば，お前たちはとこしえに亡びて神の王国の民となることはできない。」（モーサヤ4：17—18）

エノクの時代にはこれら二つの原則，すなわち与える者の慈善と受ける者の勤勉が完全に実施されていた。このため，「主，その民をシオンと呼びたまえり。彼ら心を一にし，精神を一にし，義に住みたればなり。されば彼らの中に貧しき者一人もなかりき。」（モーセ7：18）この最後の神権時代における福音の回復の一環として，主はエノクの民が守っていた協同制度をお与えになった。しかしながら，教会員はこの律法に従うべく自らを治めることができなかったため，代わりに什分の一の律法が与えられた。教会は什分の一，断食献金，扶助協会献金，そして一時期移民基金献金により，100年の間，貧しい人々や乏しい人々を助けたのである。

1930年代半ばになって，現代特有の要求に応えるべく，主は教会の指導者を通じて，現行の教会福祉プログラムを啓示された。

このプログラムによって，什分の一と断食献金基金に加えて，様々な種類の食料，衣料，燃料，その他生活必需品を貧しい人々乏しい人々に供給することができるようになった。さらに，働く能力と意志のあるすべての人々にその機会を与えている。

こうして主は，現代の貧しい人や乏しい人に対して私たちはどのように心を配らなければならないかを具体的に示されたのである。これを怠る者に下される恐ろしい報いもはっきりと示されている。主の啓示を読んでみたい。

「主なるわれは諸々の天を拡げ，わが手づから創れるもの，すなわちこの地を築きたり。されば，その中にあるよろずのものはわがものなり。

あらゆるものはわがものなれば，わが聖徒らを扶養するはわが目的なり。

されどその事たるや，必ずわが道に適いて行われざるべからず。見よ，この道は主なるわれ，わが聖徒らを扶養するため命を下したるところにして，貧しき者は高くせられ，それにて富める者は低くせられんこと，これなり。

地は物に満ち足りて余りあり。然り，われよろずの物を備えて人の子らにこれを与え，人各々を自由意志によりて動く者となす。」（教義と聖約104：14—17）

まさに私たちの上に責任が置かれていることが，この聖句から明らかである。私たちが持つすべての物は主から与えられたものである。主は，主の民を助けるために私たちはどのように貢献したらよいかを教え，その上で私たちの自由意志を認めておられる。私たちは自分の思うままにこれを選ぶことができる。しかし，次のような主の警告がある。

「この故に，もし何人たりともわが造りし多くの物の中より取り，わが福音の律法に従いてこれを貧しき者乏しき者に自己の取前をわかつことをせざる時は，悪人と共に地獄に落ちて苦悩を受け目を挙げて望み視ん。」（教義と聖約104：18）

私の理解はこうである。私たちは「福音の律法」に従って，「貧しき者乏しき者」に分け与えるものを，私たちの「多くの物」から取り出すわけであるが，それはまず第一に，什分の一を正直に納めることであり，第二に，断食献金を惜しみなく納めることであり，第三に，労働と金銭で福祉プログラムに貢献することで

ある。

私自身，この律法を理解し，この律法に従いたいと心から望んでいる。私は「悪人と共に地獄に落ちて苦悩を受け目を挙げて望み視」るのは願い下げにしたいからである。

兄弟の皆さん，私はこれら聖典の教えをよく考えてみると，私たちは律法が与えられていることに感謝し，律法を忠実に守らなければならないと感じる。願わくは，神の助けがあって私たちがそのようにできるよう，へりくだりイエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。

神権と神権を管理する職

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー



今，タバナクル聖歌隊が男声合唱で歌って下さった『正しかれ』という曲を聞くたびに，私はいつも感動を覚える。特に私は，「天使は　われらの行ない　書きています　義をなせ」(讃美歌55番）という歌詞に，特別の意味を感ずるのである。

神権者の前に立って話をすることは，いつも特権であると同時に祝福であると感じている。神権とは，私たちの持つ職において神のみ名によって行動するため，私たちに付与された神の権能である。神がこの神権を私たちに与えられるとき，私たちは神と誓約し，神もまた私たちと聖約を結ばれるが，私は今宵，その聖約を読んでみたいと思う。

「およそ忠実にして……二つの神権を得（これは，例えば執事なら執事で，彼がこのふたつの神権を持つことができるよう，与えられた責任を果たすことから始めなければならないということである）而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは『みたま』により聖められてその肉体再新さる。

これらの者はモーセの息子たちとなり，アブラハムの子孫となり，また教会員にして王国の民となり神の選民となる。

主は言う，またすべてこの神権を受け入るる者は，われを受くるなり。

そは，わが僕らを受け入るる者はわれを受くればなり。

また，われを受け入るる者はわが父を受くるなり。

而して，わが父を受け入るる者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。

而してこは神権に属ける誓詞と誓約によりて然るなり。

この故にこの神権を受くる者は，すべてわが父のこの誓詞と誓約を受け，而してこれをわが父は破ることも変えることも為したもうはずなし。

されど何人にまれ一度この誓約を受けて後これを破り，またことごとくこれに違背する者は……罪の赦しを受くることなかるべし。」(教義と聖約84：33—41)

この誓約が果たされるかどうかは，私たちにかかっている。私たちもその誓約を結ぶのであるが，主がこの誓約を破られることはあり得ない。この誓約を守る責任は私たちの方にあるのである。

今宵，私は神権の秩序，すなわち，神権の指示の下にある事柄の中から少しお話したいと思う。この問題が，アロン神権者の人々にも，その他の人々にも，同様に意味があると考えたからである。まず第一に，大管長の死後，いかにして後任の大管長が選ばれ，聖任されるのか，またいかにして大管長会が再組織されるのかの問題について説明したいと思う。この大管長会の再組織に引き続いて昨日行なわれたように，大管長会の会員は，聖会で神権定員会の支持の挙手を受け，一般大会で，出席した教会員の支持の挙手を受け，さらに，各ステーキ部大会で全教会員の支持の挙手を受けるのである。また，私は，大管長の権能，義務，責任についても幾つかお話したいと思う。

周知の通り，3カ月前，愛するジョセフ・フィールディング・スミス大管長は，大いなる報いを受けるため，そして新たな責任を受けるため，幕のかなたへ召された。スミス大管長は，まさしく，主の真のしもべであり，神の予言者であった。幼い時から全力を尽くして福音の教えに従って生活し，また聖約に違背することがなかったのである。誠実そのもののスミス大管長が亡くなる様は，まるで死を経ずに身が変えられるようであった。

亡くなる前の木曜日，スミス大管

きたい。大管長はメルケゼデク神権の鍵を持ち教会の中には大管長が果たすことのできない仕事や職というものはない。事実，教会のあらゆる職は，大管長に属しているのである。

主は予言者ジョセフ・スミスに向かって次のように語られた。「また，大神権の職を管理する長たる者の義務は全教会を統轄すべきものにして，モーセの如くあるべし。

すなわち，見よ，この教会の頭首に神の与えたもうあらゆる賜を有し誠に彼は聖見者たり，啓示を受くる者たり，翻訳者たり，また予言者たり，ここに智恵現わる。」（教義と聖約107：91，92）

私たちが教会員として，無条件で，リー大管長を神の予言者とし，また私たちの指導者として受け入れることは，非常に大切なことである。私は心の奥底から，万感の思いを込めてそう言うことができるのを，この上ない喜びと感じている。予言者の声に耳を傾け予言者に従って行こうではないか。しかも盲目的にではなく，信仰によって従って行こうではないか。そうすれば決して道に迷うことはない。神権者である限り，だれもこの問題を軽々しく扱うことはできない。すべての会員がその神権の召しを全力を尽くして遂行し，また神権を持つことが偉大な特権であり，祝福であると認識するようになることは，大切なことである。

私たちは，信仰に忠実でなければならないし，あらゆる点で信頼に足る者とならなければならない。世に対する模範ともならなければならない。青年諸君に申し上げたい。あなた方が今持っている神権は，自分の職において神のみ名により行動するため私たちに付与された神の権能であるということを忘れないでいただきたい。主は，私たち一人一人が，この神権を行使するにふさわしく生活し，世の模範となるよう望んでおられる。この大会でもしばしば言及されたが，リー大管長が大管長に指名された直後に行なわれた記者会見で語ったように，世に対する大管長のメッセージは，「戒めを守りなさい」ということである。またこれはとりもなおさず私たち一人一人に対するメッセージでもある。私たちが戒めを守れば，必ず祝福を受ける。

私たちは，主が私たちのために一体どんな職や祝福を用意して下さっているのか，全く知らない。しかし，どんな召しが来ようとも，それに応ずることができるよう準備することは，私たちの責任である。エジプトに売られたヨセフは自分が民を救うために選ばれた人間であるなどとは全く考えてもみなかった。彼は，その忠誠と，誘惑に打ち勝つことにより，主から祝福を受け，強められやがてその忠誠の故によしとされたのである。

モーセもまた青年時代には，自分がイスラエルの民をエジプトから導き出すことになっているなどとは，つゆ知らなかった。モルモンも，初めのうちは，自分と息子モロナイがイエス・キリストの福音に関する神聖な記録を作り，保存するような偉大で重要な業に携わることになろうとは夢にも思っていなかったのである。

いずれの場合でも，彼らが子供のときからその忠誠を身をもって示し，またどんな地位に召されようとも，自分がふさわしい者であることを立証して主に受け入れられた結果なのである。

今日の午後，「シオンの若者真理を守り」と歌われるのを聞いて，私は胸に迫るものがあった。今宵，私の声を聞いているすべての青年には，次のことを主の前に立証するよう，切に勧めたいと思う。それは，シオンの若者は決してひるんだことはないし，今から後もひるむことはなく，むしろ世に対する模範となり，人々を義に向かわせる影響力を発揮するであろう，ということである。そして，立派な人間になりたいと思うなら，立派な子供であり，青年でなければならない，ということを忘れないでいただきたい。私たちの大管長が青年時代にしたように，あなた方も自ら備えをなしなさい。

ジョセフ・スミスは14歳のとき，自分が大管長になり，神の予言者になるなどとは毛頭思っていなかった。彼が望んでいたことは，ただどの教会が真実か知りたいということであった。私たちは皆，ある目的のために予任されているが，ジョセフも予任されていた。そして，忠実に生活し，ふさわしいことを証明したために，この高い地位に召されたのである。私たちも予任された召しにふさわしく，またその職務を果たすことが出来るよう生活しようではないか。

リー大管長は青年のとき，よもや自分が大管長になろうとは夢にも思わなかった。だが，彼の召されたあらゆる職で忠実に働き，自分がふさわしい者であることを立証したのである。もし主のみ手に使われる器になりたいと望むなら，執事定員会会長や教師定員会会長は，長老定員会，七十人定員会，大祭司定員会の会長と同様，その義務を遂行し，主のみ前に義しく歩むことが大切であることを知らなければならない。主はすべての人がその義務を果たし，自分の結んだ誓約に忠実であるように望んでおられる。教義と聖約には，主のみ言葉が次のように記録されている。「この故に，今や神権者皆各々その義務を覚れ。また己が任命せられたる務めを全く勤勉に勤むべし。

およそ，怠惰なる者はその地位に居るに値せず，またその義務を覚ら

ず信任さるるに足る行ないを示さざる者は，その地位にある値なき者なり。誠に然り，アーメン。」（教義と聖約107：99，100）

誠に，「戦いをいとうなら，報いはなし」と歌う通りである。大切なことは，神権者が老いも若きも，自己を鍛え，悪に打ち勝ち，自らを道徳的に清く保ち，知恵の言葉を守り，安息日を聖くし，正直に行動し，他人の信頼を裏切ることなく，あらゆる友人，知人から愛され，尊敬され，そして人々がそのよい行ないを見て，天にいます私たちの父をあがめるように生活することである。

私たちは，主のみ業が進展していることを認識し，主の王国である教会がこの地上で成長し，全地に満ちるまで援助を続けなければならない。これこそ，神権者としての私たちの責任である。

人類が現世に在るのは幸福を得るためである。楽しい時間を過ごしなさい。正しいことを行なって人生を楽しみなさい。罪悪には，何ら喜びも満足もない。だが忠実な者には偉大な祝福が約束されている。私の説教に耳を傾けている青年で，自分が何の職に予任されているのか，自分のために何が備えてあるのか知っている人はいない。だが主は次のように約束しておられる。「およそこれらの言葉を憶えて守り且つ行い，この誡命に従って歩むすべての聖徒らは（主はここで知恵の言葉だけではなく，すべての戒めに従って歩むことを言っておられたのである），そのへそに健康を受けその骨に髄を受けん。

また智恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。

而して走れども疲れず，歩けども気を失うことなからん。

主なるわれ彼らに一つの約束を与う。すなわち，さつりくの天使はイスラエルの小児たちが如く，彼らを過ぎ越して居ることなかるべし。」（教義と聖約89：18—21）

願わくは，私たちが皆，主の教会の会員であり神権者であるという特権を朝な夕な主に感謝することができるように。また勇気と強さを求めて祈り，私たちの履み行なうべき道に従って生活し，それによって永遠の生命に向かって私たち自身が準備し，また他人が準備するのを助けることができるように。イエス・キリストのみ名により，へりくだって祈るものである。アーメン。



神権者に与える勧告

大管長

ハロルド・B・リー

今宵，ここでお話しするよう，みたまに促されたことがある。従って，主が望まれるならしばしの間，この偉大な総大会で，それについてお話したいと思う。

何年か前，私は神権の偉大さについて，ひとつの教訓を学んだ。それは，忘れもしない1935年4月20日，大管長会の呼び出しを受けて，大管長会の事務所を訪れた日のことであった。私は，そのとき，ソルトレーク・シティー理事であり，またステーキ部長でもあった。

当時，教会は福祉の問題と取り組んでいた。政府の雇用事業には見るべきものもなく，教会の財政も窮迫していた。教会の財政は手の施しようがないところまできている，とさえ言われていた。私のステーキ部だけでも，部分的にせよ，他人に頼って生活している人々は，7,300人のうち4,800人にも及んでいた。もはや，なすべきことはひとつしか残されていなかった。それは啓示に示された主の御計画を実施することであった。

大管長会が私たちのささやかな経験を知り，ある朝電話をかけて，私に大管長会の事務所に来て欲しいと言ってきたのは，私たちの小さな努力の結果であった。土曜の朝ということもあり，事務所の予定表には，訪問者の予定はなかった。その朝，私たちは何時間にもわたって話し合った。大管長会の方々は，私に市理事を辞職するよう要請した。また，私をステーキ部長の職から解任し，政府から直接救済を受けようとする風潮を変えるため福祉活動を指揮し，教会が自らその貧困者の面倒をみることができるように，私の助けを借りたいと願い出た。

その朝の話合いの後，私は自動車に揺られて（ちょうどスプリングがこわれていた），シティー・クリーク・キャニオンの頂の，当時ロータリー・パークと呼ばれていた所に登った。そして，そこで私は，たったひとりになって私の生涯で最も謙遜な祈りのひとつとも言える祈りを捧げた。

このとき私は，30代半ば，言わば弱輩の身であった。それまでの経験も豊富とは言えなかった。アイダホの小さな田舎町で生まれた私は，ユタとアイダホの州境を越えて出たことも，ほとんどなかった。それなのに，このとき私の双肩にかけられた責任は，世界中のすべての教会員にまで及ぶものであり，想像するだけでも二の足を踏みたくなるような思いであった。私の限られた知識で一体どうすればよいのだろうか。

私はひざまずいて，熱心に祈った。「大管長会から与えられた責任を果たすために，どのような種類の組織を作ったらよいでしょうか。」そして，私はこの美しい朝，神権の権能の重大さを認識する機会を得たのである。何か次のような言葉が私の耳もとでささやかれたように感じた。「教会員の必要を満たすために，何ら新しい組織を作る必要はない。ただ神権の権能を完全に働かせるだけでよい。これ以外に何も必要ない。」

これを充分に認識し，ただ神権の権能を活用するだけで，以来，福祉計画は急速な勢いで大きな発展を遂げ，一見不可能と思える障害をも乗り越え，今や神権の権能の記念碑として雄々しくそびえ立っている。あの頃，私は今日の隆盛の一端をかい間見ただけだったのである。

では，こうした神権の権能を充分理解した上で，今宵，私は思いつくままに，2，3の事柄を述べたいと思う。

あなた方に考えていただきたい聖句がふたつある。時の絶頂における救い主の降臨のあとの時代同様，このふたつの聖句は，使徒時代以降の

今日においても充分あてはまるものである。使徒行伝の中で，使徒パウロは，イスラエルの長老たちに次のように注意を与えている。パウロはこう語った。

「どうか，あなたがた自身に気をつけ，また，すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は，……神の教会を牧させるために，あなたがたをその群れの監督者にお立てになったのである。

わたしが去った後，狂暴なおおかみが，あなたがたの中にはいり込んできて，容赦なく群れを荒らすようになることを，わたしは知っている。

また，あなたがた自身の中からも，いろいろ曲ったことを言って，弟子たちを自分の方に，ひっぱり込もうとする者らが起るであろう。」（使徒20：28―30）

そして，使徒パウロはガラテヤ人にも次のように書き送った。

「あなたがたがこんなにも早く，あたたがたをキリストの恵みの内へお招きになったかたから離れて，違った福音に落ちていくことが，わたしには不思議でならない。

それは福音というべきものではなく，ただ，ある種の人々があなたがたをかき乱し，キリストの福音を曲げようとしているだけのことである。

しかし，たといわたしたちであろうと，天からの御使いであろうと，わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら，その人はのろわるべきである。

わたしたちが前に言っておいたように，今わたしは重ねて言う。もしある人が，あなたがたの受け入れた福音に反することを宣べ伝えているなら，その人はのろわるべきである。

……兄弟たちよ。あなたがたに，はっきり言っておく。わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない。

わたしは，それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく，ただイエス・キリストの啓示によったのである。」（ガラテヤ１：６―12）

この警告は，警告が与えられた当時と同様，今日でも正確に的を射ている。

私たちの中にも，おおかみのような者がいる。つまり，当教会の会員であると言っておきながら，群れを荒らしている者がいる，ということである。また会員の中に様々な曲がったことを言っている者もいる。ここで言う「曲がったこと」とは，教会のまだ信仰の浅い会員を，自分の方に引っ張り込むために，故意に正しい原則から目をそらし，悪に固執することである。

また使徒パウロが言ったように，当時と同様，今日の私たちにとっても不思議でならないことがある。それは会員の中に，非常に早く，福音を教えてくれた人々から離れ，また，キリストの福音の真実の教えから離れて堕落し，悪意悪計に満ちた慣習と儀式を行なうような背教の道を歩み出す人々がいるということである。

こうした背教者グループの中には考えもしなかった出来事をその身に招いているものもあるが，彼らは予言者の警告通り，のろいを受けているのである。こうした人々は，明らかに，時のはじめ以来サタンの弄するあらゆる詭弁を駆使して弱い人々を陥れようとするあの悪魔の一味なのである。

ここで，今述べたような種類の問題について一言申し上げたいと思う。第一は，前にも述べたことであるが，陰口やうわさを広めることについてである。陰口やうわさというものは，一度話の種になると，加速度がついて話のたびに面白おかしく脚色され，ついには，人騒がせ好きな人々が出所を確かめようともせず，何の考えもなくファイヤ・サイドや日曜学校のクラスや扶助協会や神権定員会のクラスで繰り返し話してしまうのである。賢明に使われれば，有益で，人々の精神を啓発するはずの会合を，このようにしてただただ無為に用い，憶測と空論の場としてしまうのである。

ひとつの例を示そう。あなた方のうち，どれほどの人がこの話を聞いているかは知らないが，私が救い主の降臨とイスラエルの十支族に関する祝福師の祝福を受けているらしいという話が広く流布されているということを聞いている。

まず第一に，祝福師の祝福というものは，祝福を受けた人，個人に与えられる神聖な文書であって，決して公表するためのものではない。そして，すべての祝福師の祝福同様，祝福を受けた人個人のうちにとどめおかれるべきものなのである。

次に，私が前述のような祝福を受けているらしいということについてであるが，そのような話は間違いであり，事実無根であるとだけ言っておけば充分であろう。

ひとつ驚いたことがある。それは，たまたまある機会に，前述のようなうわさは根も葉もないことであると言うと，すでにうわさを耳にしている人々の中に，がっかりする人がいるということである。そのような人人は，根も葉もないうわさを信じて楽しんでいたように思える。私は，そのような愚かなうわさを，その真実性を確かめもせずに，広くまき散らすなどということを決してしないよう，強く申し上げたいと思う。

1913年８月，大管長会は教会員に警告の書簡を出したが，今日なお再読に耐える内容である。その中から２，３読んでみたいと思う。

「末日聖徒イエス・キリスト教会の役員，会員各位

ハイラム・ページのとき（教義と聖約28章）以来，折々，教会員に対する偽りの霊の現われが起きている。時にこうした現われは，罪を犯したために大いなる偽り者のえじきとなった男女に起きている。またある場合には，教会の規則や儀式や様式を厳守していることを心から誇りにしている人々が悪霊によって背教に導かれている。悪霊たちは，余りにも神からでたものと酷似した影響力を行使するために，自分を『選民』と考えているこのような人々でさえ，その本質的な違いを識別するのに困難を感じているのである。サタン自身がその身を変えて，『光明の天使』を装うのである。

示現，霊夢，異言の力，予言，内なる声あるいは非凡な賜，霊感などが，これまで受け入れられている教会の啓示と調和しないものであったり，正統な権威者の決定に反するようなものであるなら，それが，どんなにもっともらしく見えようとも，末日聖徒たる者は，それが神から出たものではないと判断しなければならない。また，教会を導くための決定は教会の頭を通して，啓示によって与えられるということも理解しなければならない。教会の忠実な会員は皆，自分自身のために，自分の家族のために，そして自分が指名され，聖任された管理の職のために，聖霊のささやきを受ける資格がある。だが，教会の長たる者を通して神から与えられたものと一致しないものはすべて，権威ある，信頼すべきものとして受け入れられるべきではない。霊的な事柄もこの世の事柄も，聖徒たちは自分自身のことに関する導きと啓示を受けることができる。だが，これは決して，他人に指図する権威を持つというのではなく，またそうした導きが，教会の誓約や教義や規律，証明ずみの事実や真理，また良識に反する場合には受け入れないことが必要である。どんな人でも，いかにももっともらしい啓示や示現や霊夢を神から受けたと主張して，兄弟姉妹たる教会員を説いて，投機や株の売買に身を投じさせる権利はない。特にそれが，局地的なものであれ，全教会的なものであれ，承認ずみの権威に反するものである場合，なおのことである。主の教会は，『秩序の家』である。主の教会は，個人に与えられる賜や現われによって統治されるのではなく，指定された大会で教会員の挙手により支持された聖なる神権の秩序と権能によって統治されているのである。

教会の歴史には霊の現われを信じてみせかけの啓示を受けたと主張し，それを受け入れる人々を導こうと虎視眈々とねらっている詐欺師や熱狂者の例が数多く記録されている。そしてその結果生ずるものは，いつの場合でも，失望，悲嘆，そして不幸である。さらに財政的損失，時には完全に破産してしまうこともある。」

この警告は，時に触れ，折に触れて再三再四発せられてきたものである。神権者であるあなた方に申し上げたい。「不思議な」種類の霊の現われを受けたと主張する人々が，ここかしこで立ち上がり，いまだかつて教会の指導者が指示したことのない方向へ教会員を導こうとしている。このように人々の心に忍び入ろうとしているものに対し，雄々しく立ち上がり，排斥する努力を始めていただきたい。

たびたび言うが，教会員の中に，いとも簡単に欺される人々がいるということに，私は驚きを禁じえない。このような人々は，人騒がせな話や夢や示現のうわさをまき散らし，恐らく個人的な日記から取ってきたのだろうが，これまでの教会の指導者に与えられたと称する話を，適当な教会の権威筋に確かめることもせずに，広めているのである。

もし私たち教会員が，策略と偽りのうわさに満ちたこの喧噪うずまく時代にあって安全に導かれたいと願うのなら，術策にたけた者たちのえじきになるのを防ぐために，指導者に従い主のみたまの導きを求めなければならない。そのような者たちは，巧妙な詭弁を弄(ろう)して注目を集めようと画策し，己の意見や，時には悪意を含んだもくろみに追従する人々を味方に引き入れようとしているのである。

主は，ある種の神権の権能を受けているとひそかに言い張る人がいる場合だれでもその真偽のほどを確かめることができるよう，非常に明確なひとつの方法を設けられた。次の聖句は教義と聖約42章11節にある主のみ言葉である。

「またわれ汝らに告ぐおよそ誰か権威ある者より聖職に按手任命され，またその者の権威を有てることと，教会の長たる者たちより正式の按手聖任を受けたることとが教会員の知る所にあらざれば，何人といえどもわが福音を宣べんために出て行くこと，または教会を創立することを許されざるべし。」

それゆえ，だれか権威を持っていると主張する人が来たら，「その権威をだれから受けましたか。だれか権威ある人から聖職に聖任されたのですか。あなたが権威を持ち，教会の長である人々から正式に聖任されたということを，教会員は知っているのですか」と尋ねてみるとよい。もし「いいえ」という答えだったら，その人が詐欺師であることがわかる。教会員たちは，だれか教会員を背教に導こうとする詐欺師が来たときには，いつでもこの方法を応用すべきである。

次に，私たちに襲いかかろうとしているもうひとつの危険がある。私たちの中に，群れの中のおおかみのように教会員の中でもまだ信仰の弱い人々を背教に導こうとしている者がいるらしいということである。私たちの手もとに届いた報告によれば，合法的な政府との間に若干の政策的な不一致があるとの理由で，法律を自分勝手に解釈して，所得税を納めない人々がいるとのことである。

また，警察権もないのに一般市民を扇動して，危険とあらばいつでも戦えるように武装している人々もいるとのことである。こういう人々は，そのようなことをして政府当局に反抗することにより，自分自身が逮捕されたり，投獄されたりする羽目になるのだということを，露ほども知ってはいないのである。

また教会員の中に，劇場でポルノ映画が上映されるのに反対して，劇場に爆弾を仕掛けたために，法律によって罰せられ，その後懲戒のために教会の法廷に立たされる人々もいるということさえ，耳にしている。

いわゆるポルノのたぐいのみだらで挑発的なものを締め出そうとしている人々を私たちは強く支援しなければならないが，ただ，前述のような過激な手段をとる人々には，次のような方法を知っていただきたい。それは主のみ言葉である。

「何人も自らを支配者なりと思うべからず。されど神をして審く人をその聖旨のままに支配せしめよ。すなわち議する者または審判の席に座する人を聖旨のままに支配せしめよ。

何人もその国の律法を破ることなかれ。……統治すべき権能を持ちてすべての敵を脚下に踏みつくる者の統治する時の至るを待つべし。」（教義と聖約58：20，22）

私は，この偉大な神権者の群れが，ソドムとゴモラのあの大いなる罪に対抗するよう，強く警告したいと思う。その罪は，殺人の罪に次いで第二に重大な罪と呼ばれているものである。御存じのように，私は，主が姦淫と呼んだ罪について言っているのである。主はそのとき，非合法的な性関係の罪も姦淫と同列に扱っておられた。また，同じような重大な罪に同性愛がある。この罪も，バビロンのような世の中にあって，加速度的な速さで社会的に受け入れられつつあるように思える。だが，教会員たる者は，決してこのような傾向に追従してはならない。

世にあっても，世のものとなってはならないのである。学校や歓楽の場でも，人々を刺激して実際の行動に向かわせようと，これ見よがしに種々，性的に倒錯した試みが行なわれているが，この教会の神権者たちは，このような攻撃に対し，可能な限りの合法的な手段を用いて，雄々しく確固たるとりでを築き上げなければならない。

イスラエルの判士である監督，ステーキ部長たちがその管理区域で懲戒の処置をとる際の指示は，誤解のしようがないほど明確で簡潔なものである。主の律法とその手続きをはっきりと踏まえて，決してその適用をためらったり，避けたりするようなことがあってはならない。悔い改めをせず，罪深い行為から真実悔い改めた人にだけ約束されている正義の原則を踏みにじるような罪人には，いかなる慈悲も施してはならない。

もうひとつのことについて話そう。私たちの間に，今襲来しつつある災害に関して不正確な情報が流れているということである。そうした情報の中には，まさに襲来しつつある恐怖から世の人々の目を覚まさせることが必要であるとでも言うように，既に印刷出版に付されているものもある。だが，このうちの多くは，その出所が定かでなく，信頼できないものである。

あなた方神権者は，もし私たちがこれまで聖典に明確に記されていることに精通していさえすれば，こうした類の出版物は必要ないということに気付いているだろうか。

非常に政治的な含みのあるこうした奇妙な情報よりも，もっと信頼に足る導きを受けることのできる確実な予言の言葉を教えたいと思う。

マタイ伝の24章を読んでいただきたい。ここでは主が，人ではなく主が，時のしるしについて種々予言しておられる。さらに，教義と聖約の101章と133章に目を向け，救い主の再降臨に至るまでの出来事が刻々と記されている箇所を読んでいただきたい。

最後に，教義と聖約38章にあるように，邪悪な人々の上に審判が下るとき，戒めを守った人々に与えられる数々の主の約束に視線を投じていただきたい。

兄弟たちよ，これらの聖句こそ，あなた方が関心を持たなければならない聖句なのであって，不確かな情報を集めて書いたものでもなければ，その目的に疑義が向けられるような筋合いのものでもない。さらに付け加えるならば，そのようなものを書く人の多くが，自分の出版物にどんな不確実な情報を載せたとしても，何も自分の立場が不利になることはない，ということを申し添える。

主は，初めから，次のように神権者を戒めておられるのである。

「この故に汝ら腰をひきからげて備えを為せ。見よ，王国は汝らのものにして，敵する者汝らに打勝つこと能わざらん。

誠にわれ汝らに告ぐ，汝らは潔けれども，いまだことごとくの者は潔からず，わが悦ぶところの者のほかに一人もあることなし。

すべての人はわが前に腐りたり。而して，暗黒の力は人の子らの中にありてすべての天群の前に於て世を支配せり。

この故に世は静まり返り，すべての永遠なるものは苦しみ……」(教義と聖約38：9—12)

兄弟たちよ，私はこの神権会で一つ一つを明確に述べてきたつもりである。今宵，またこの大会でこれまですべての教会幹部の兄弟たちによって言われてきたことを，一言一句もらさずに心にとどめていただきたい。幹部の勧告を，初期の啓示にあるように，主の出された指示と同様に受け入れていただきたい。既にタナー副管長がこの啓示を引用してお話して下さっている。「そは彼の言は，汝ら全き忍耐と信仰とを以て，あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。」(教義と聖約21：5)

そうすることによってのみ，つまり今日私たちをひとつとするために主が召された人々の指導に従うことにより私たちは神権者の群れとして，真実の意味でひとつになることができるのである。そして，教義と聖約の中にあるように，主は，私たちがひとつとならなかったら，主のものとはなれないと警告しておられる。

私自身と私の現在の責任について，2，3話したいことがある。私はかつて，自分が大管長になる日が来ようとは夢にも思っていなかった。田舎の子供であった私は，兄弟たちが，よく教会の「柱」について話をするのを聞いた覚えがある。一体それがどんな意味なのか，いぶかしく思ってはいたが，教会の柱となることは，何か偉大なことに違いないとは感じていた。だが，大管長となった今，私は，それがどんな意味を持っているのかということを理解しつつあるように思っている。ただ，私は次のことだけは知っている。それは，だれが次の大管長になるのかなどと前もって推測しようとする人々は，競馬と同じようなかけ事に興じているのだ，ということである。主のみがその時刻表を持っておられるからである。

私はあるとき，十二使徒評議員会の会合の席上でチャールズ・A・カリス長老*が言った言葉をよく覚えている。幾つかの問題について，非常に霊的な討議が交わされていたときのことである。幹部のひとりが次のように言った。「十二使徒会会長のジョージ・アルバート・スミス兄弟の言葉に耳を傾けた方がいいですよ。彼が次の大管長になるかもしれませんからね。」

カリス兄弟は，ほほ笑みながら次のように言った。「それはわからないでしょう。私はこれまで，3人も次の大管長になる人を選んできました。でも，3人が3人とも，管理の職に就く前に亡くなられましたよ。」主のみが知っておられるのであり，私たちが推測したり，想像したりすることは，主の目から見て，好ましいことではないのである。

お話したいことがもうひとつある。ブリガム・ヤングは，予言者ジョセフ・スミスの偉大な擁護者であった。その当時も，救い主の時代と同様，また今日と同様，教会員でありながら人々をつまずかせ，その信頼を裏切るというユダのような人物が役員の中にいた。こういった話の出所を調べるとき，私たちは本当に驚かざるを得ない。

あるときブリガム・ヤングは，予言者ジョセフを大管長の地位から退けようともくろむ人々の集会に招かれた。だがブリガム・ヤング十二使徒定員会会長を自分たちの仲間に引き入れようとしたのが失敗だった。ブリガム・ヤングは彼らの計画を一通り聞くと，次のような趣旨のことを言った。「君たちに一言言いたいことがある。君たちは神の予言者をその地位から失脚させることはできないのだ。だが，君たちは，自分と予言者とをつないでいる糸を断ち切ることはできるのだよ。そうすれば地獄へ落ちることにもなるのだが……。」

話を続けるが，そこにはジェイコブ・バンプという名前のプロボクサーがいた。この男は，こぶしを固く握りしめると，ヤング会長に向かってなぐりかかろうとした。ヤングはこの脅しに答えて，次のように言った。「予言者ジョセフ・スミスを守るために，君のような男には，頭の上に手を按いて悪霊を叱責してやりたいものだよ。」

兄弟たちよ，これを忘れないでいただきたい。神の予言者をその地位から失脚させることはできないのである。主がこの教会を管理することはできないのである。主がこの教会を管理することを望まれる人物は，主御自身が知っておられる。だが，時にはそのために，数多くの訓練と指導と試練を必要とすることもある。そしてその後で，私たちのうちだれが現在の責任を受ける準備ができているのかを主が識別されるのである。

また私は，ある大管長を他の大管長と比較するということは，極めて愚かなことであると考えている。ある大管長が，他の大管長の仕事を代わって行なうということはない。それぞれの大管長にそれぞれの仕事があるのである。私は数年前，ひとつの教訓を得た。それは教会幹部のひとりの兄弟と共に，エンサインステーキ部のステーキ部長会を再組織したときのことである。私たちは既に，あるワード部の監督をステーキ部長に指名していた。だが年末だったために，その監督は，年末の書類の決

済が終わるまで監督になるはずの第一副監督と仕事を続けたいと申し出た。

そして，支持を受けた6週間後にそのステーキ部長が突然亡くなった。

すると，私あてに次々と数多くの手紙が届き始めた。ただの6週間で，主が，死ぬことをよしとされるような人を召すなんて，一体全体どんな霊感を受けたのか，というのである。また彼の葬儀で話をするようにも促していた。ある人々の手紙は，ただの6週間で主が御自分のもとに引き上げられるような人をなぜ私が指名したのか，説明してくれるよう望んでいる書きぶりであった。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は，壇上の席で，私がこの人々に満足してもらえるような話をしてあげたいと努めているのを聞くと，私に次のように言った。「その問題であまり悩まないで下さい。ある人をこの教会のある職に召して，翌日その人が亡くなったとしても，その職は，その人がこの世を去って，来世で召される職に何らかの関係があるのですよ。」

私はこのことを信じている。私は，この教会の大管長，使徒，監督，ステーキ部長などの管理の地位にある人々の職は皆，この世を去って，来世で召される職に何らかの関係があると信じている。

それゆえ，ある大管長は，前の大管長の仕事を引き継ぐものと考えている人がいるかも知れないが，そうではないのである。その大管長には自分だけに課せられた仕事があるのである。だから私たちは，この人はあの人より偉大だとか立派だなどという比較をしてはならないのである。主の目から見れば，人は皆主の時にかなって，ある特別の時のために主が最も必要とされる人なのである。あなた方はこれを確信していることと思う。

最後にもうひとつお話しよう。ある日，私が自分のワード部の日曜学校のクラスに出席していたときのことである。そのクラスの教師は祝福師の息子であった。彼は，以前自分の父親の祝福の種をあかしてやろうとしたことがある，と言った。そのとき彼は，父がいわゆる「あやふや」な祝福を与えているのに気付いたのである。父親は祝福を与えるが，それは皆，「これこれをしないなら」とか「これこれをせずにいたら」などという条件付きで述べられていたのである。そして，その教師は次のように結んだ。「私は父が『あやふや』な祝福を与えた人々の多くが，祝福師である私の父が与えた警告に注意を払っていないことに気付きました。その人々は，警告に従わなかったがゆえに，決してその祝福を受けることはなかったのです。」

この言葉を聞いて，私が思案を始めたことはおわかりいただけると思う。私は，教義と聖約を聞き，教会の様々な兄弟たちに与えられた「あやふや」な啓示を読み始めた。もし，何か慄然とするような経験をしたいと思うなら，予言者ジョセフ・スミスを通して，トーマス・B・マーシュ，マーテン・ハリス，ホイットマー家の幾人かの兄弟，ウイリアム・E・ムレリンに与えられた警告を読んでみるとよいだろう。この人々が，この警告に注意を払っていたなら，そのうちの何人かは，わき道にそれないですんだであろう。だが警告に注意を払わず，その生活を意義あるものとしなかったために，わき道にそれてしまったのである。さらに，教会の会員の資格をも失った者さえいたのである。

私たちが皆，心に留めておくべきことがある。神殿の中で，宣教師のグループと集会を持っていたときのことである。ひとりの姉妹宣教師が知恵の言葉について質問した。もし人が知恵の言葉を守れば，走っても疲れず，歩いても気を失うこともないという約束についての質問であった。その姉妹宣教師は次のように言った。「足の悪い人は，この約束をどう受け取ったらよいのですか。もし足が悪かったら，走っても疲れず，歩いても気を失うことがないという祝福はどのように成就するのですか。」

私は答えた。「あなたはこれまで主を疑ったことがありますか。主がそう言われたのですよ。」

今日，私たちを取り巻く数々の問題は，私たちの多くが，主のみ言葉の後に終止符ではなく疑問符を打っていることに起因している。このことを深く考えていただきたいと思う。私たちはなぜ主がそのような啓示を与えられたのかとか，それが本当に成就するのかとか，などということに関心を払う必要はない。ただ，主を信頼しなさい。私たちは，解答や説明を見つけ出そうとは思わない。私たちは，主が説明を加えるのをよしとされなかったことを説明するのに，時間を費やすべきではない。時間を浪費するだけだからである。

もし教会員に，主のみ言葉の後に，疑問符ではなく終止符を打つことを教えるなら，教会員は常に次のように言うであろう。「その言葉が主のみ言葉であるということを知れば，それで充分です。」

ゴードン・B・ヒンクレー長老がベトナム訪問から帰って，私にひとつの話をして下さったが，その話は私にとって偉大な教訓となった。私が覚えている範囲でお話するが，ベトナムで軍務に服している間に教会に加入したひとりの青年がいた。その青年は，服務期間が終わって，東南アジアにある本国へ帰るところで

あった。

ヒンクレー兄弟はその青年に言った。「君はここで教会に加入したわけだが家へ帰るとどういうことになるのかね。」

青年は答えた。「追い出されることになるでしょう。家族は私を勘当するでしょうから，学校へは行けなくなります。もう軍の仕事もありませんし。」

ヒンクレー長老は尋ねてみた。「それは，教会に加入した代償としては，ちょっと大き過ぎはしませんか。」

すると，この青年はヒンクレー長老をじっと見つめながら言った。「でも，福音は真実ですから。そうでしょう。」

これは，ヒンクレー兄弟の身も心も揺さぶるような言葉であった。ヒンクレー兄弟は答えた。「その通り。間違いないよ。真実だとも。」

これを聞いて，青年は言った。「じゃ，ほかに何も心配することなんかありません。」

神権を持つ兄弟たちよ。イエス・キリストの福音が真実なら——それは確かに真実であるが——ほかに何を心配する必要があるだろうか。もし私たちが，いつも自分に，「私は福音が真実であることを知っているのだから，ほかに何も心配することはない」と言い聞かせているなら，この危険極まりない世の中にあって，主が確かに私たちを導いて下さるという根本の証が得られ，祝福が得られるのである。

これが真実であることを，また主が天におられることを，そしてあなた方が思っているよりもずっと近くにおられることを，謹んで証する。主がこの教会に最後の啓示を与えられたのはいつかと尋ねる人がいる。主は日に日に啓示を与え続けておられる。そして，あなた方が将来，この時代を振り返って見るとき，主がこの時代に幾つかの力強い啓示を与えて下さったということをはっきりと認識するであろう。私はこれを証する。今宵，あなた方の心に私の証を残すべく，主イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。

※チャールズ・A・カリス（1865—1947）アイルランドに生まれる。1933年10月12日使徒に聖任される。

キリスト教界に広まる奇妙な信条

十二使徒評議員会会員

リグランド・リチャーズ



兄弟姉妹の皆さん，再び素晴らしい大会に出席できたことを喜んでいる。只今のタナー副管長の美しい証に皆さんは心を打たれたことと思う。

現在世界中に300万の末日聖徒がいる。彼らは一様に，予言者ジョセフ・スミスが語った御父と御子の訪れ，さらに天使の訪れがまことであることの証を心の中に燃やしている。だがこのほかにも，私の両親のように休息に入った何十万という人々がいる。私の祖父は結婚生活の14年間のうち10年間をこの地とヨーロッパでこの大いなるメッセージを証することに費した。

今日，世界に約1万7千人の専任宣教師がいるが，彼らは自費もしくは家族の助けによって，この話を全世界に伝えている。私は証申し上げる。主を心から愛し，主の望まれるように主に仕えたいと思っている心の正直な男女は，必ずこの教会に加入する。彼らはただ，今の時代に地上にみ業を回復するにあたって主が行なわれた奇しき事柄に目を向けさえすればよいのである。

数年前のことであるが，ラジオ解説で全国的に名を知られている人が次のような質問を受けた。「世の人々に伝えるべき一番大切なメッセージがあるとすれば，それは何でしょうか。」これに対して解説者はしばらく考えた後に，こう答えた。「この地球にかつて住んでいた人が，神からメッセージを受けて戻って来たとしたら，それが一番大切なメッセージになると思います。」

それが正しいとすれば，末日聖徒は，モロナイやバプテスマのヨハネ，さらにはペテロ，ヤコブ，ヨハネが地上を訪れただけでなく，先程タナー副管長が証したように父なる神と御子イエス・キリストが地上を訪れたもうたという，この上なく大切なメッセージを持っている。もし世の人々がこのことを理解したら，どれほど素晴らしいことだろうか。

宇宙飛行士が月面着陸に成功した時，世界中の新聞がそのことを第一面に報じた。だがこの快挙とて，天地の創造主がこの地球を訪れたもうたことに比べれば，かすんでしまうに違いない。私たちは，天地とこれにつけるあらゆる物はイエスが創造されたと教えられているからである。

皆さんもすでに御承知の通り，救い主はジョセフの質問に答えて，既存の教会は人の戒めを教えとして教えているため，いずれの教会にも加わってはならないと言われた。そして救い主はこう言っておられる。「彼らの信条はことごとくわが目より見て悪むべきものなり。」（ジョセフ・スミス2：19）

私たちはこの宣言をもって，教会員でない人々を攻撃するつもりはない。私たちが知っているように，もしイエスが予言者ジョセフ・スミスを訪れたもうたとすれば，彼の宣言は世の何人の宣言よりも権威があるはずである。ジョセフの後にも，他の教会の指導者が似たような証を宣べている。

例として，ハリー・エマーソン・フォスディックの言葉をあげてみよう。「もしイエスが今，地上に戻ってこられて，イエスにまつわる神話を聞き，霊魂創造説や宗派主義，礼典重視主義に主のみ名を用いているのを御覧になったら，間違いなくイエスは『もしこれがキリスト教だとすれば，私はキリスト教徒ではない』と言われるだろう。」

73名の著名な神学者と聖書研究家が執筆した「聖書辞典」（*Smith's Bible Dictionary*）には次のように記されている。「今日地上に聖典に基づいた福音があるなどと思ってはならない。キリストの教えのあらゆる点を完全に備えた宗教，そればかりか

教えの一点についても完全な宗教を見いだすことはできない。」

アメリカ最古のバプテスト教会の牧師であったロジャー・ウイリアムズは次のような言葉を残して辞任している。「地上には正規の組織を持つキリストの教会は存在しない。いかなる儀式であってもそれを執行する資格を具えた人もいない。そして，この状態は教会の大いなる頭から新しい使徒が遣わされてくるまで続くだろう。私はその来訪を待ちこがれている。」（*Picturesque America*,「アメリカの個性」，p. 502）

さて，全世界に向かって私たちのメッセージを述べたい。真の使徒たちがすでに遣わされている。私たちはこの大会において約30名の偉大な人々，宗教を抜きにしても個人として偉大な人々から説教を聞いてきた。彼らは，御父と御子がこの地上を訪れたという証を胸に燃やしている。

私は今朝，「彼らの信条はことごとくわが目より見て悪むべきものなり」と語られた救い主の言葉について考察を加えたいと思う。サタンが天から投げ落とされたとき，次のような叫び声があがった。「……地よ，……おまえたちはわざわいである。悪魔が，自分の時が短いのを知り，激しい怒りをもって，おまえたちのところに下ってきたからである。」（黙示12：12）「かくの如く，サタンはこの世をかなたこなたにさまよい歩きて人々の身も霊も亡ぼさんとす。」（教義と聖約10：27）サタンはどのようにして人々を滅ぼそうとしているだろうか。多くの誤りにわずかの真理を混ぜて，人々を欺いているのである。

イザヤが語ったのはまさしくこのことであった。「明けの明星よ，あなたは天から落ちてしまった。……あなたはさきに心のうちに言った，『わたしは……わたしの王座を高く神の星の上におき，……いと高き者のようになろう。」（イザヤ14：12—14）サタンは地を震わせ，国々を動かして，人々を欺いた。（イザヤ14：16参照）イエスが「彼らの信条はことごとくわが目より見て悪むべきものなり」と言われたのは，サタンが人々を欺いているからである。

ここでしばしの間，サタンの欺きの例をあげてみたいと思う。ただ主イエス・キリストを信じさえすれば，私たちは救われる，という声を絶えず耳にする。この教えを説く人々は，十字架上でイエスが罪人の一人に言われた「あなたはきょう，わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」（ルカ23：43）という言葉を根拠にしている。（予言者ジョセフ・スミスは，聖書のパラダイスという語は，「霊界」と翻訳されるべきだった語であると指摘している。）彼らはイエスをキリストと認めれば，それだけで救われると考えている。彼らは聖典を理解しているのだろうか。

パウロは第三の天まで引き上げられ（もし第一，第二の天がなければ第三の天があるはずがない），パラダイスに引き上げられ，「口に言い表わせない，人間が語ってはならない言葉を」聞いた。（IIコリント12：2—4参照）

イエスが罪人に言われた言葉をここで考えてみよう。「あなたはきょう，わたしと一緒にパラダイスにいるであろう。」（すなわち霊界）パウロは霊界の上に三つの天があると言っている。そしてイエスはこのように言われた。「わたしの父の家には，すまいがたくさんある。もしなかったならば，わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために，場所を用意しに行くのだから。……わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。」（ヨハネ14：2—3）

モルモン経の予言者アルマは死と復活の間の人の状態について述べている。「これがすなわち悪人の霊の有様で，かれらは暗やみの中で大そう恐れおののきながら自分たちに下る火のような神の怒りを待っている。かれらは復活の時までこのような境涯に止まらなくてはならない。しかしこれと同時に義人はパラダイスに在る。」（アルマ40：14）

世の人々は，聖典に頼りさえすれば理解できるこのことを，理解していない。イエスは罪人に「天国」へ連れて行くとは言われなかった。イエスは罪人を霊界へ連れて行かれたのである。そして聖典によると，その上に三つの天がある。主はなぜパラダイス（霊界）へ罪人を連れて行かれたのだろうか。それは罪人が十字架上で言った言葉に対する大きな賜であり報いだったのである。

使徒ペテロは，はりつけになったその日に主がどこへ行かれたかを記している。「……彼は獄に捕われている霊どものところに下って行き，宣べ伝えることをされた。これらの霊というのは，むかしノアの箱舟が造られていた間，……従わなかった者どものことである。……水を経て救われたのは，わずかに八名だけであった。」（Iペテロ3：19—20）

従って，この罪人は，ノアの時代の邪悪な人々のように何年も待つことなく，その日のうちに救い主により，福音を聞くことができるところへ連れて行かれたのである。ペテロはこう述べている。「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは，彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが，霊においては神に従って生きるようになるためである。」（Iペテロ4：6）その日罪人は救い主と共にここへ行ったのである。その上に三つの天があったが，イエスは罪人をそこへは連れて行かれなかった。

皆さんも覚えておいでのことと思

うが，女たちが墓へ行ってイエスの体を捜していた時，二人の天使が墓の両側にいて，こう言った。「あなたがたは，なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは，ここにはおられない。よみがえられたのだ。」（ルカ24：5―6）

マリヤは救い主から言葉をかけられた時，「『ラボニ』と言った。それは，先生という意味である。」（ヨハネ20：16）すると主は言われた。「わたしにさわってはいけない。わたしは，まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ，わたしの兄弟たちの所に行って，『わたしは，わたしの父またあなたがたの父であって，わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行くと，彼らに伝えなさい。」（ヨハネ20：17）

聖典を正しく読めば，容易に理解できるのである。救い主がサドカイ人に対して，「あなたがたは聖書も……知らないから，思い違いをしている」と言われたのも当然のことである（マタイ22：29）。従って，その日罪人はイエスと共に，福音を聞くことができるところへ行ったが，イエス御自身はまだ天父のみもとに上っておられなかった。

現在，イエスがキリストであると告白しさえすればよいと全世界に説いている人々がいるが，イエスはそうは言われなかった。イエスは次のように言われたのである。「わたしにむかって『主よ，主よ』と言う者が，みな天国にはいるのではなく，ただ，天にいますわが父の御旨を行う者だけが，はいるのである。

その日（すなわち主の再降臨の日）には，多くの者が，わたしにむかって『主よ，主よ，わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また，あなたの名によって悪霊を追い出し，あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。

そのとき，わたしは彼らにはっきり，こう言おう，『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ，行ってしまえ』。」（マタイ7：21―23）

パウロはこのように述べている。「彼は御子であられたにもかかわらず，さまざまの苦しみによって従順を学び，そして全き者とされたので，彼に従順であるすべての人に対して，永遠の救の源となり，」（ヘブル5：8―9）

ヨハネは「死んでいた者が，大いなる者も小さき者も共に，御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが，……死人はそのしわざに応じ，この書物に書かれていることにしたがって，さばかれた。」そして次のように記している。「この第一の復活にあずかる者は，さいわいな者であり，また聖なる者である。この人たちに対しては，第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり，キリストと共に……支配する。」（黙示20：12，6）

イエス・キリストを信じていると告白するだけでこのような祝福にあずかることなどできるはずがない。行ないに応じて裁きを受けるのである。私たちはタラントのたとえ話を読んで，5タラントと2タラントを受けたものがそれぞれ5タラントと2タラントをもうけて，どのような賞賛を受けたかを理解しておく必要がある。「良い忠実な僕よ，よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから，多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」

1タラントを渡された者も進み出て言った。「ご主人様，わたしはあなたが，まかない所から刈り，散らさない所から集める酷な人であることを承知していました。そこで恐ろしさのあまり，行って，あなたのタラントを地の中に隠しておきました。ごらんください。ここにあなたのお金がございます。」

主人はこれに対してどう言ったであろうか。「さあ，そのタラントをこの者から取り上げて，十タラントを持っている者にやりなさい。おおよそ，持っている人は与えられて，……持っていない人は，持っているものまでも取り上げられるであろう。この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい。彼は，そこで泣き叫んだり，歯がみをしたりするであろう。」（マタイ25：21，24―25，28―30）

このたとえ話から察すると，私たちは天父のみもとへ行きたいと思うなら，告白するほかに何かをしなければならないようである。手短かに申し上げたが，この点について知っていなければならない事柄はたくさんある。

もうひとつ，「神の目より見て悪むべき」信条を簡単に取り上げてみたい。ジョセフ・スミスが驚くべき示現を受け，栄光に包まれたキリストを見た時，イエスは墓から出て来られたと同じイエスであった。使徒たちに現われ，手と脇の傷に触れさせ，500人の兄弟たちの目の前で天に上って行かれたあのイエスであった。キリスト教会がことごとく，実体のないものを拝んでいる時に，この同じイエスが予言者ジョセフ・スミスに現われたもうたのである。

詳細にわたって検討する時間の余裕はないが，彼らの教義によると，彼らの神には「体がなく，器官がなく，感情がない。」つまり，神には目がないので見ることができない。耳がないので，祈りを聞くことができない。声がないので，予言者に語ることができない。さらにある人々は，「神は，頂のない御座の頂に座しておられる」と言う。なんと不合理な

ことだろうか。彼らが信じている神の説明は，無を最もよく説明したもののように思える。

モーセはこの状態が世に蔓延することを知っていた。モーセはイスラエルの子らを約束の地へ導いて行く時，彼らはその地に長くとどまらず，国々に散らされ，「その所であなたがたは人が手で作った，見ることも，聞くことも，食べることも，かぐこともない木や石の神々に仕えるであろう」と述べている。(申命4：28)

ジョセフ・スミスが生ける真の神を明らかにする輝かしい示現を受けたとき，全キリスト教界はまさしくこの種の神を礼拝していたのである。しかし，モーセの言葉はここで終わっているのではない。末日になって，もし彼らが神を求めるならば，必ず神を見いだすと述べている。(申命4：29参照)

この大会において，すべての幹部の兄弟たちが，予言者ジョセフは神を求め，見いだしたことを証している。私は主の代表者の一人として，主イエス・キリストの使徒として，主が地上を訪れたもうたこと，私たちには主より啓示された真理があることを知っていると証したい。ペテロはペンテコステの翌日に，「神が聖なる預言者たちの口をとおして，昔から預言しておられた万物更新の時まで」，キリストが天にとどめおかれなければならないと語ったが（使徒3：21），私たちはそれを受けている。私たちは，その万物更新を主張する世界でただひとつの教会である。万物更新と改革には大きな違いがある。私たちはカトリックでもプロテスタントでもない。私たちは，神の永遠の真理が再び地上にもたらされたことを信じている。

最後にもう一つのことについて述べたい。先日，私はテレビである宗派の伝導集会の模様を見た。集会の主催者によると，その集会を開催するために125万ドルを要したという。私はその時，彼らは人々を手玉にとって利をむさぼるという聖典の言葉を思い出した。（IIペテロ2：3参照）集会が終わると，その主催者は，人々に壇上に来て，イエスを告白するよう促した。

それを見て私は，ペンテコステの日のことを思い出した。その日ペテロは集ったすべての人に教えを説いた。彼らはそれぞれ自国語で教えを聞き，強く心を刺されて叫んだ。「兄弟たちよ，わたしたちは，どうしたらよいのでしょうか。」（使徒2：37）ペテロは壇上に来て告白しなさいとは言わなかった。彼はこう言った。「悔い改めなさい。……バプテスマを受けなさい。そうすれば，あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。この約束は，われらの主なる神の召しにあずかるすべての者，すなわちあなたがたと，あなたがたの子らと，遠くの者一同とに，与えられているものである。」（使徒2：38—39）

天より認められて権能を受けた者がいなければ，人はバプテスマを受けることができない。イエスが十二使徒に言われた通りである。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んで聖任したのである。……」（欽定訳ヨハネ15：16）「……あなたが地上でつなぐことは，天でもつながれ，あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう。」（マタイ16：19）

大会の模様に耳を傾けておられる兄弟姉妹および友人の皆さん，私たちはこれらの素晴らしい真理を皆さんと分かち合うために，知る限りの手段を尽くしている。

末日聖徒はすべて宣教師となるよう求められており，主は「……その警めを受けしことあるすべての人はその隣り人を警むる責任あり」（教義と聖約88：81）と言っておられる。このため，皆さんも機会があればいつでも証を述べる必要がある。これは今日この世で最も大切なメッセージである。私はそのことを主イエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。

今，他の予言者を また送らる

十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン



キリスト教世界全体にとって極めて重大な出来事が，末日聖徒イエス・キリスト教会のこの大会の席上で起こった。

神の新しい予言者が今日という日のためにまた召されたのである。

彼は今の世に導きを施し，耳を傾けるすべての老若男女に天からの新しい啓示をもたらすために神より召された，霊感豊かな人々の中にその名を連ねる人物である。

この新しい予言者が任命されたことは，神を信じるすべての人，特に主イエス・キリストを信じるすべての人にとって，重大な意味を持つ。私たちは謙虚に，しかしながら絶対の確信をもって，世の人々に向かい厳かにこれを宣言するものである。

この地上に主のみこころにかなう民がいる時，主は常に生ける予言者に天から導きを与えて民を導いて来られた。

民が忠実である限り，全能者は予言者を次々に立てられた。こうして，大勢の神の人が旧新約聖書に登場したのである。

現在，同様に，霊感を受けた人々の系譜が確立されている。末日の聖見者ジョセフ・スミスにより主イエス・キリストの福音が回復された結果，実現したのである。

予言者アモスは主は予言者を通してのみ主の民を導かれるという重要な言葉を述べている。「まことに主なる神はそのしもべである予言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない。」（アモス3：7）

この言葉は神と人との間に度々交流があることを示唆していて，特に興味深い。

一般に信じられているところと反して，主はみこころをあらわされる神，啓示の神である。光明と英知の神，知識とおとずれの神である。主は闇の中で物事をなされることも，人を無知のままに救われることもない。救いの全計画は，知識を与えられた民との交流を基盤に築かれるのである。

無知のままで，だれが理性で納得した礼拝ができるだろうか。

神を知らないで，だれが意味のある信仰を持てるだろうか。

また，もし神御自身からでなければ，その知識はどこから来るというのだろうか。

知識が神から来る時，神と人との間に道が開かれ啓示が下される。

主は交流の神であるが，人に知識を送る時に特別な方法を用いられる。その過程は今も昔も変わることがない。すなわち主は，常に生ける予言者を通して民に語られるのである。

聖典には，主が何世紀にもわたってみこころのままに，人類に導きを与えておられたことが記されている。しかし，そのような啓示がやんだ時代があった。それは聖書の時代にもあり，イザヤはその理由を次のように説明している。

「見よ，主の手が短かくて，救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞き得ないのでもない。ただ，あなたがたの不義があなたがたと，あなたがたの神との間を隔てたのだ。またあなたがたの罪が主の顔をおおったために，お聞きにならないのだ。」（イザヤ59：1，2）

人間は主の道を悟るに遅い。そして特に，主は人と交流しようとしておられ，それを予言者として指名された霊感あふれる人々を通じて行なわれるという事実を，容易に受け入れようとはしない。

しかし，神はこの方法をとられる。それが神の方法であり，神はそれを変えられたことはない。神はきのうもきょうもとこしえに変わることがなく，神の方法もまた変わることがない。

人間同士の意志の疎通がなくなると，多くの苦悩が生まれる。しかし神と人との交流が断えると，さらに深刻な事態が起きる。

昔，主は，アダムの時代からバプテスマのヨハネの時代に至るまで，代弁者として仕える霊感豊かな人々を次々に召されて，民に話しかける意志のあることを示された。考えるまでもなくイザヤ，エゼキエル，モーセ，ザカリヤといった名前がすぐに浮かんでくる。彼らの書いた物が，現在，旧約聖書となっている。これは，人類最高の文学と啓示の集大成のひとつである。

では新約聖書の時代についてはどうであろうか。このときも神は同じ方法をとられたであろうか。キリスト教会に予言者を置いて，旧約聖書に示された昔ながらの方法をとられたのであろうか。

確かにその通りである。

パウロはエペソ人に，イエス・キリストの教会は使徒と予言者という土台の上に建てられ，救い主御自身が隅のかしら石であると言っている。（エペソ２：20参照）

その時代の予言者とはだれのことだったのだろうか。

当然十二使徒が含まれる。しかしそのほかに予言者がいただろうか。

新約聖書には，その他の予言者たちがいたと書かれている。シラスとバルナバがそうであり，ふたりとも当時の偉大な宣教師であった。ほかにシメオンとルキオがおり，イスカリオテではないユダという名前の人物もいた。マナエンとパウロの捕縛を予言したアガボも同様に予言者と言われている。（使徒11，13，21の各章参照）

エペソ人への書簡の中で，キリスト教の予言者がなぜ存在したかという理由について，彼らは「聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ，キリストのからだを建てさせ」（エペソ４：12）るために主の教会に置かれたと説明されている。

救い主はその民に，天父が完全であるように完全な者となりなさいと戒められたが（マタイ５：18参照），それを実現する手段として主の教会を建てられたのである。そして教会には使徒や予言者を置かれた。

それらの霊感に満ちた人々は，聖徒たちの一致のために，また「もはや……様々な教の風に吹きまわされたり，もてあそばれたりすること」（エペソ４：14）がないよう，群れの分裂を鎮めるために教会に置かれたのである。

このように，主は旧約時代に一貫してとって来られたと同じ方法を，新約時代の主の民との交流にも用いられたのである。

では私たちの時代はどうであろうか。

神と人との交流は初期のキリスト教会に欠くべからざるものであったが，現代のキリスト教会の状態はどうであろうか。現在のキリスト教の予言者たちはどこにいるのだろうか。

悲しいことに，予言者は幾世紀にもわたっていなかった。一般に，黙示者ヨハネが最後の消息を絶ったと信じられている紀元110年以後は，キリスト教の予言者が存在したという記録は皆無である。

それではそれからの歳月，キリスト教は天との交流を持つことなく，さ迷ってきたのだろうか。

ある宗派では予言者はいないと言い，もはや予言者も啓示も必要ないと教えている。さらにまた，彼らは，はるか昔に書かれた聖書に，必要なことはすべて記されていると言う。

それは，いにしえからの主の方法，すなわち生ける予言者を通じて主の民を導くという方法とあまりにもかけ離れてはいないだろうか。

イザヤの時代に，神に背いたのは，民の方であった。主がその民から顔をそむけられたのではなかった。

救い主の時代も同じであった。主が御自分について次のように言われたのを思い出していただきたい。「……ちょうど，めんどりが翼の下にそのひなを集めるように，わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それだのに，おまえたちは応じようとしなかった。」（マタイ23：37）

神は御自分の民をお見捨てにはならない。神を捨てるのは民の方である。

「主われにたよるものの霊
敵の手には渡し得ず
地獄かれに迫るとも
われその霊を見捨てはせず
必ずわれは見捨てず」
（讃美歌96番）

私たちの愛唱する讃美歌にこう歌われている。

聖典には，末日の救い主の再降臨の直前に，時のしるしが与えられると書かれている。

その中には海が己の力を超えて猛り，地震や疫病，そしておびただしい死傷者を伴う戦争が起きるといった荒れすさんだ状態も記されている。

しかし，時のしるしのうちでも最も重要な出来事は，「神のさばきの時」に行なわれるはずの，福音とイエス・キリスト教会の回復であった。（黙示14：6，7）

この回復は非常に大規模に及ぶものであるため，聖典では「神が聖なる予言者たちの口をとおして，昔から預言しておられた万物更新」（使徒３：21）と言われている。

それでは，この中には予言と啓示の回復も含まれるのだろうか。

騒然としたこの時代に，民を導く予言者の新しい系譜が興されるのだろうか。

聖典には末日に新しい啓示が与えられると書かれており，また神は常にしもべである予言者を通して啓示を与えられる。ところが幾世紀にもわたって予言者はいなかった。これらのことを考えあわせてみると，私たちの時代のために啓示を伝える新しい予言者が起こされなければならない。

では，その出来事の次第を次に述べよう。

ジョセフ・スミスが系譜を興す者となった。主は彼を通じて純粋なままの福音を回復され，1830年に至って，教会が地上に再び建てられた。

以来その業を進めるべく，近代の予言者たちが続いた。それは主イエス・キリストの再降臨まで続く。

ジョセフ・スミスのあとはブリガム・ヤングが召され，次にジョン・テイラー，ウイルフォード・ウッドラフ，ロレンゾ・スノー，ジョセフ・F・スミス，ヒーバー・J・グラント，ジョージ・アルバート・スミス，デビッド・O・マッケイ，ジョセフ・フィールディング・スミスと続き，現在はハロルド・B・リー大管長である。彼らは皆その時代の神の予言者であり，聖見者にして啓示を受ける者であった。

私たちはこの大会で，心と手とをもってリー大管長を現代の霊感を受ける指導者として正式に支持した。

予言者の衣が今や彼の肩にかけられた。彼は歴代の予言者たちに授けられていた聖なる神権の権能を持っている。

天使によって予言者ジョセフ・スミスに与えられた鍵と力のすべてがリー大管長に授けられた。彼こそが，今神より選ばれ，権能を受けた予言者であって，予言者の長い系譜を継ぐ者である。

この業は進展しており，福千年にまで至るはずである。信じる民は救い主を受け入れる準備を整えている。キリストは必ず再臨される。降臨に備えてキリストの教会がすでに回復されたのである。

モーセ，イザヤ，ペテロ，ヤコブ，ヨハネ，サウロ，バルナバ，パウロのような予言者を，私たちは再び地上にいただいているのである。

再び真の救いが全人類に示された。

近代のしもべを通して主は再び語っておられる。

「すべて重荷を負うて苦労している者は，わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから，わたしのくびきを負うて，わたしに学びなさい。そうすれば，あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく，わたしの荷は軽いからである。」（マタイII：28—30）

私たちを導くこの新たな予言者の系譜によって，全人類に再び救いがもたらされる。神はこの末の日に本当に語りかけられ，私たちは神のしもべであることを証する。

いにしえの聖典は語る。「ああ，麗しいかな，良きおとずれを告げる者の足は」（ローマ10：15）

あなたは考えたことがないだろうか。この良きおとずれを告げる者というのはだれのことで，山の上で麗しいのは，だれの足のことなのだろうかと。

モルモン経ではアビナダイがそれについて説明している。

この良きおとずれを告げる者とは神の予言者のことである。平和の君である主イエス・キリストの福音を説く者たちのことである。

アビナダイは次のように言っている。「……世界が始まって以来起った聖い予言者……かれらは平和を布き善の良い音ずれをもたらし，救いを宣べひろめ，シオンに汝の神は治めたもうと告げた者たちである。

それであるから，その足は山の上にあっていかにも美しいではないか。

今現に平和を布く者たちの足も山の上にあっていかにも美しいではないか。

また今から後とこしえに平和を布く者たちの足も山の上にあっていかにも美しいであろう。

ごらん，こればかりではない。良い音ずれをもたらして平和を起し，その民を贖いその民を救いたもうた主の御足は山の上にあっていかにも美しいではないか。」（モーサヤ15：13—18）

これがアビナダイの言葉である。

予言者たちはイエス・キリストのしもべであり，時の初めからこの地上に存在していた。彼らはキリストのしもべであって平和の福音を説くがゆえに，見よ，山の上にあって彼らの足はいかに美しいことか。

私たちは予言者を誇りに思う。そして予言者に従う。そうしてこそ，この地上で主の道にかなった方法で，自分の救いに向かって前進することができるのである。

私たちは歌う。

「来たれ予言者よりみことば聞け
喜びてうたえ真理の道
昔の予言者の道を知りて
今，他の予言者をまた送らる
大地をとざせる暗きやみは
払われて神のみ顔は出づ
世のまよいゆきしあやまち去り
聖徒らはついに道見出だす」

（讃美歌83番）

この時代に，天と地の交流が再び確立されたことを，私たちは厳かに証する。私たちは，神が世の人々から決して遠く離れておられないと宣言する。

神は死んだのではない。生きておられる。

神は目が見えないのではない。見

ておられる。

神は耳が聞こえないのではない。聞いておられる。

神は口がきけないのではない。語っておられる。生ける予言者に，また彼らを通じて世の人々に語りかけておられるのである。

神はこのように，今，あなた方に話しかけておられる。神のみ言葉に耳を傾け，神に感謝しなさい。神に祈り，神に従いなさい。主イエス・キリストのみ名により，アーメン。

愛と力の手



十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン

ナザレのイエスは人々の間で教えと導きを施しているとき，当時の律法学者のような言葉ではなく，万人にわかる言葉で語られた。イエスはたとえ話を使って教え，人々はその教えに心を動かされ，新しい生活への意欲をかきたてられた。高原の羊飼い，畑の種まき，網をもった漁師などを話の題材として主は永遠の真理を教えられた。

主は盲目ではなく，実際に見える眼，耳しいではなく，実際に聴くことのできる耳，またかたくなではなく，実際に知り，感じることのできる心について語られた。そのとき人人は，まことに驚くべき力と不可解な器官より成る，神が造りたもうたこの肉体について新たな知識を得たのだった。しばしば，教えの中で，足，鼻，顔，脇，背中などを引き合いに出しておられる。中でも特に大切なのが，人間の手について語られたときである。美術家が絵を描いたり，彫刻家が粘土で像を造るとき，人間の体のうちで最も難かしい部分だと言われるこの手をじっと見ると，まさに驚嘆すべきことがわかる。たとえ，色，大きさ，形，年令が違っても，これが創造の奇跡であることに変わりはない。

まず第1に，子供の手について考えてみよう。幼子をその腕に抱きあげるとき，神の力の偉大さに驚嘆し，神に感謝しない人がいるだろうか。弱々しく，小さな手，それでいて全く汚れを知らない手を見ていると，話題に尽きることがない。だれも，ぐっと握りしめた幼子の小さな手を開くことはできない。口には笑いがひろがり，眼には輝きが増し加えられ，人はやさしい愛に触れ，感謝するのである。詩人はそのときの気持をこう描いている。「真新しく，美しい人間の花が，まさに神の家から舞い降りてきた。この地上に花を咲かせるために。」（ジェラルド・マッセイ）

幼子は成長すると，じっと握りしめていた手を開いて，全幅の信頼を示すようになる。「お母さん，手をつないで。そうしたらこわくないから。」子供の歌に，忍耐を求め，教えを願い，奉仕の機会を促している歌がある。

「私はふたつの手がある
　それは小さくて弱いけど
日が暮れるまで一日中
　いろいろのことをいたします
神様この手を感謝します
　そしてこの手がまもること
おぼえたらいつも楽しく
　いられるように願います」
（「子供の歌」B—74）

こうした愛や信仰の高まりは親の誠実さ，つまり正しいことを行なおうとする決意から生まれてくるものである。

このことに関して新約聖書から引用してみたい。そのとき，弟子たちはイエスのところに来て，こう尋ねた。『いったい，天国ではだれがいちばん偉いのですか。』

すると，イエスは幼な子を呼び寄せ，彼らのまん中に立たせて言われた，『よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ，天国にはいることはできないであろう。

また，だれでも，このようなひとりの幼な子を，わたしの名のゆえに受けいれる者は，わたしを受けいれるのである。しかし，わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は，大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が，その人の益になる。」（マタイ18：1—3,5—6）大切なのは幼な子の手である。

第2に，青少年の手について考えてみよう。これは一種の訓練期間であり，その手は働くために学んだり，

学ぶために働き，せわしく活動している。正直に努力すること，愛ある奉仕などは豊かな生活への旗じるしである。少女たちはそれぞれ活動の夕べで教えをうけ，クッキーを焼き，近くの養老院に住む老人のところにもって行く。老人は青少年たちが示してくれた愛をその手に受けとめる。言葉など必要ない。心と心の対話である。クッキーを焼いたその手で涙をぬぐう。まさに清い手であり，清い心である。

やがて少年，少女が互いに手を取り合う頃になり，両親は突如子供たちが成長したことを知る。少女の指には神聖な誓いを示す指輪が輝いている。少女の手がこのときほど美しく感じられるときはない。軽やかな足取り，陽気な笑顔，世の中のすべてがバラ色に見える。そして，婚約，結婚へと進む。再びふたりの手が合わせられる。今度は聖なる神殿の中で。しばしの間，世の煩いを忘れ，永遠の価値に思いをはせる。しっかりと握られたふたつの手は心の中の約束を語っている。まさにふたりは天国にいる。

時が過ぎ，花嫁の手は母親の手となる。大切な子供を育てるその手は前にもましてやさしくなる。風呂に入れ，服を着せ，食物を与え，そして子供をあやす。母の手ほどやさしい手があるだろうか。その愛は決してなくなることがない。私は今でも，あるひとりの宣教師の母の手を忘れることができない。数年前，伝道部長セミナーが開かれ，世界各地から伝道部長が集まってきた。そのとき宣教師たちの両親がそこに招待され，わずかな時間だが伝道部長たちと話しを交わすことができた。挨拶をし，握手をした人の名前を皆憶えてはいないが，ワイオミング州のスターバレーから来たある母親の手を握ったとき，心の中に湧きあがってきた気持ちを，私は決して忘れることができない。「手が荒れていてどうもすみません。主人が病気になってから，農場の仕事は私がすべて面倒をみているものですから。息子が宣教師として，主の業に仕えている間は頑張ります。」

私たちは涙を抑えることができなかった。いや抑える必要もなかったのかもしれない。こうした涙は身も霊も洗い清めてくれるからである。母親の働きによって，息子の伝道の業が清らかなものとなっている。まさに母の手は愛なりである。

しかしながら，父親の手も決して忘れてはならない。優れた外科医であれ，職人，教師であれ，家族を支えているのは父親の手である。その正直な働きと疲れを知らない努力に，私たちは最大の尊敬を払わなければならない。

ちょうどあの大恐慌が起こったとき，私はまだ少年だった。仕事はほとんどなく，長時間働いても，賃金は安い。それでも仕事がある人は恵まれていた。私たちが住んでいた通りにひとりの父親がいて，女性ばかりの大家族を養っていた。この父親の会社はスプリング・キャニオン炭鉱会社といい，会社にあるものと言えば，古いトラックが1台，石炭1山，シャベル1本，男性が1人，それに彼の両手だけである。朝は早くから晩の遅くなるまで，彼は懸命に働いた。生きるためである。それでも，毎月1回の断食証会には家族や仕事，さらには自分の福音に対する証を主に感謝していた。私が座っている長椅子の背に伸びたその手は荒れて，あかぎれになっていた。父親のそうした手を見る度に，私は揺るぎない信仰とは何か，自分が決心したことに忠実であること，あるいは真理に対する証とは何かを思い起こす。尊敬を受けるべきは，このような父親の手である。

金曜日の朝，この歴史的なタバナクルの中で，あるいはそれぞれの家庭でテレビやラジオを通してこの大会の放送を聞きながら，私たちは右手を挙げて，予言者，聖見者，啓示を受ける者，つまりこの末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長を支持した。私たちが挙げた手は，私たちの心のうちを語っている。右手を挙げるとき，私たちは心の中で誓約をしているのである。その予言者，私たちのハロルド・B・リー大管長の手についてしばらく述べてみたい。もちろん，このことはリー大管長のお許しのもとに，心からへりくだって申し上げたい。

数年前，リー大管長は霊感と啓示を受けて，ディウィット・J・ポールを，東部のあるステーキ部の祝福師に召された。ポール兄弟姉妹はその召しを聞いて非常に謙虚になった。彼らは驚いた。心配もした。そして天からの確かな答えを得るために祈った。だが，すぐには得られなかった。

教会員の支持と承認があって聖任のときになった。大会が開かれたホールの2階下の地下にひとつの部屋があった。ディウィット・ポールはその部屋の椅子に座って聖任のときを待っていた。高ぶる気持を抑えようと，心の中で祈った。ハロルド・B・リー大管長は，新しく召されたこの祝福師の頭に両手を按いて，祝福の言葉を告げ始めた。すると今まであった心の動揺や疑惑はなくなり，ただ平安と信仰が広がってきた。その隣りにはポール姉妹が座っていた。ポール姉妹は夫を永遠の友として全幅の信頼を寄せていた。祝福が告げられ，聖任が行なわれているとき，ポール姉妹は眼を開けてみた。ポール兄弟の頭に両手を按いているリー大管長の上に一条の光が射している

のが見えたからである。祝福が終わると，ポール姉妹はリー大管長のところに行って，この召しが確かであることを告げた。一条の光が輝いて，リー大管長の両手を照らしているのを見たことを説明した。そのとき，リー大管長はこう答えた。「確かに，それはこれが神よりの召しであることのしるしです。この地下室を見回してごらんなさい。太陽の光が射してくるような窓はどこにもありませんよ。」まさに，予言者の手ほど貴いものはない。

最後に，まだ述べていないもうひとつの手について語ってみたい。それは，主のみ手である。モーセを導き，ヨシュアを励まし，ヤコブに約束したのもこの主のみ手であった。その時，主はこう告げておられる。「恐れてはならない，わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない，わたしはあなたの神である。……わが勝利の右の手をもって，あなたをささえる。」（イザヤ41：10）

両替人を神殿から追い出したときの厳しい手，あるいは幼な子を祝福するときの慈愛にあふれた手，それも主のみ手である。また耳しいの耳をいやし，目しいをいやした強い手でもある。さらにこのみ手によって，らい病人は清められ，足なえはいやされた。一度は死んだラザロが生き返ったのもこのみ手によってであった。またその指によって，砂の上にみ言葉が記された。そのみ言葉は風が吹けば，消えてしまうが，正直な人の心からは消え去ることがないものであった。あるときは大工の手，教師の手であり，ある時はキリストのみ手であった。またポンテオ・ピラトがその手を洗ったとき，その人はユダヤ人の王と呼ばれていた。なんと愚かで，いくじのないピラトだろうか。あなたは水がその罪を本当に洗い流してくれると思ったのだろうか。

「つき刺されし主の手を思い
　その愛と恵み忘れ得ず
みくらの前にひざまずいて
　主のみ恵みをたたえまつらん」
（讃美歌76番）

哀れむべきは罪を犯した手であり，憎むべきは偽りを働く手である。敬うべきはものを造り出す手であり，感謝すべきは助けの手である。尊敬すべきは奉仕の手であり，拝すべきは救いの手，すなわち神の御子，全人類の贖い主イエス・キリスのみ手である。キリストはそのみ手で私たちの理解の戸を叩いておられる。

「見よ，わたしは戸の外に立って，たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら，わたしはその中にはいって」来るであろう。（黙示3：20）

私たちは主のみ声に耳を傾けているであろうか。私たちの生活の戸を開けて，いと高き御方のみ前に帰ろうとしているか。私たち一人一人が尋ねてみるべき問いである。

この世の旅では，私たちが進むかなたに，暗雲が待ち受けているかもしれない。一寸先も確かなものはない。そうした絶望の渕で，私たちはこう叫ぶかもしれない。

「私は，歳月の門口に立つ男にこう言った。

光を下さい。末知の旅を安全に進めるように。

男は答えた。

暗闇の中を歩み，あなたの手を神のみ手に置きなさい。

その方がどれほど光よりもすぐれ，どれほど安全なことか。」

これらが誠に真実であることを，私は証する。私たちの主，救い主は生きておられ，現在でもその万能のみ手でこの教会を導いておられることを宣言し，これらをイエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



聖徒たちに与える祝福

大管長

ハロルド・B・リー

この素晴らしい新しい幹部の方々の熱意を感じ取っていただきたいと思う。この方々は，主がそのみ業のために，予言の賜によって召されたのである。私はそれを謹んで証申し上げる。幹部の兄弟たちは，このことをよく理解していることと思うし，また彼らはこの新しい役員がどのようにして召されたか，よく知っている。

私たちは今，極めて重要な大会の幕を閉じようとしている。この大会は歴史的な大会であり，また私たちの置かれている時代の情勢からしても多くの点で意義のある大会であった。恐らく教会の歴史上，この大会ほど大きなチャレンジ，大きな問題，そして輝かしい未来への約束で歴史の1ページを記すことのできた大会はなかったであろう。

私は幹部の兄弟たちの証を聞き，非常に満ち足りた気持でいる。あなた方は教会の大管長会が立派なタナー副管長とロムニー副管長とを得て，完全に一致していると感じたことであろう。また十二使徒やその他の教会幹部たちが述べたように，皆ひとつとなっていると感じたことであろう。これらの役職に召されている人人は，血縁の絆よりもはるかに強い絆で固く結ばれている。それは深く，素晴らしく，力強い絆であり，この絆なくして私たちは，今日求められている道を歩むことは決してできないのである。

予言者ジッセフ・スミスも同じような状況のもとに置かれたことがあった。当時彼はリバティーの牢獄の中にいて，聖徒たちを力づけ，励ますために，何か良い方法はないかと考えていた。ジョセフ・スミスはこう記している。

「この故にわれらはわれわれの知れる暗黒に隠れたるすべての事を明るみに出すことに身命を尽して働かざるべからず。またこれらのことは，誠に天より顕さるるものなり。

さらば，大いなる熱誠を以てこれに勤めざるべからず。……

兄弟よ，汝らこの事を知る。それいと大いなる船も，暴風雨の時にはいと小さきかじにより，風と波とをしのぎて進路を保つによりて大いに助けらるるにあらずや。

さればわが愛する兄弟らよ，いざ力の能う限り，あらゆる事を元気に為さむ。然り而うして，確固不動の信仰をもて耐え忍び，神の救いを見，また神の御腕の現わるるを望まんことを。」（教義と聖約123：13—14，16—17）

数年前，私はユタ州のマンタイを訪れたことがあった。土曜日の晩，指導者会を終えて外に出るとひどい吹雪だった。ステーキ部長は私を乗せて家に着くと，車を止めて神殿が立っている丘の方を振り返った。そこには照明灯に照らし出された神殿が堂々と立っていた。私たちはしばしその場に腰をおろし，その神秘的な美しさに感動を覚えていた。その時，ステーキ部長は私にこうささやいた。「リー兄弟，何と言っても，神殿は深い霧に包まれているときとか，ひどい嵐に打たれているときとかが一番美しく感じられますね。」

これと同様に，イエス・キリストの福音もそれが最も必要とされている時とか，心の嵐に悩まされている時，あるいは混乱と騒ぎの中にいる時ほど，素晴らしく感じられることはないのである。

今この大会を終わるにあたり，私は自分自身を振り返ってみた。私にもどうしてだかわからないが，この大会の中で私の名前が呼ばれるたびに，それが私自身ではなく，だれかほかの人のような気がしてならなかった。私はそれが当然だと思う。だれもこの3日間で私が得たような経

験をして，変わらない人はいないと思う。もはや金曜日の朝以前の私ではないのである。

主の民である皆様方が示して下さった信頼，愛と信仰のゆえに，以前の私に戻ることなど到底許されないのである。これまで皆さんが語ったのは私自身のことではなく，私にそうなってもらいたいと願う姿だと思っている。願わくば，神の助けがあって皆さんの御期待に添える者となれるよう祈ってやまない。

私たちはこれまでこの大会の模様が全世界に伝えられていることを繰り返し述べてきた。何百万という人人がこの大会に耳を傾けておられる。私たちはこのタバナクルから送り出すメッセージによって裁かれているのである。先日，私はある新しく召された宣教師たちの集会に出席して，興味あることを耳にしたので，少々無分別と思われるかも知れないが，きょうはそこで気付いたことについて触れてみたい。主は偉大な啓示の中で次のように述べておられる。「この故に汝らすべて軽々しきことを言うを止め，またすべての高笑すべての卑しき欲望，すべての傲慢と軽薄なる心および汝らのする一切の悪しき行為を止めよ。」（教義と聖約88：121）

私たちはこの重大な影響を及ぼす建物の中で語る言葉がテレビやラジオを通じて外部の人々に伝えられていることを，時として忘れることはないだろうか。だからと言って，むずかしい顔をし，喜びを顔に表わすべきではないと言っているのではない。外部の人の誤解を招くようなおおげさな表現で喜びを表わすべきでないと言っているのである。これは至高の神に対する私たちの責任から見て，忘れてはならないことだと思う。私たちが主のみ業に仕えるとき，主がこの啓示を通して勧告されたことの模範とならなければならない。

この二，三日間，私は非常に大きな祝福をこの身に感じている。自分の家族がこれほど緊密になったことは今までになかった。何物にも代えることのできない私の宝である子供や孫たち，そして愛する妻を本当に身近に感じることができた。確かに私の肉眼では見ることのできない人人も皆，私たちの周りにいるのである。全員が一致してこの召しを盛り立ててくれている。私は家族に言った。「私がいくらよい説教をしたとしても，家族の生活の模範にはかなわいだろう。」そして，これからも人々の前でよき模範を示すようにと勧めておいた。

今この大会を閉じるにあたり，私は教会の族長として，皆さんの上に祝福を捧げたいと思う。私が関心をもっていることは，皆さんがここで語られた言葉をどれくらい覚えているかではなく，皆さんがそれを聞いてどう感じたかである。この会を後にするとき，何を持って帰るか。自分の家族にどのようなみやげを持って帰るのか。ワード部，ステーキ部，伝道部の会員たちに何を与えるかということである。

皆さんがこの大会を通じて，みたまと貴い一致の精神を感じたならば，どうか彼らに私の愛と祝福とを持ち帰っていただきたい。教会の大管長会をはじめとする教会幹部の面々は力や教育の有無を問わず，全世界の教会員を心から愛していることを伝えていただきたい。そして私たちが彼らの福利に大きな関心を抱いていることも加えていただきたい。

この数日の間に，私の信仰は一層強くなり，確固たるものになってきたようである。この大会を終わる前に，是非皆さんに申しあげておきたいことがある。この大会は主が不在のまま行なわれてきたのではないということである。これは主の教会である。主は教会の中心であるここ以外のどこへ行かれるだろうか。主は人をなおざりにされるような御方ではない。いつも私たちに関心を寄せておられる。そして私たちが主の導きに従うよう望んでおられる。主は実在の御方である。天父もまたしかりである。私はそのことをはっきりと知っている。私がひとえに願うことは，主が召され，皆さんが支持して下さったこの貴い地位にふさわしい者となることである。

私はこれまで語られてきたことが真実であることを心から証する。私たちが今携わっているこの業はまさしく主のみ業であることを一点の疑いもなく確信している。人類が救われる道は天（あめ）が下にこのみ名をおいてほかにないのである。

家族や友人，たとえ罪のうちにある人であろうとも，私の声に耳を傾けておられるすべての人々に私の愛が届くように，私たちはそうした罪人，教会に不活発な人々にも援助の手を差し伸べ，手遅れになる前に彼らをこの群れの中に連れ戻したいと願っている。

神の祝福が皆さんの上にあるように。恐らく，主がニーファイの民に別れを告げたときもこのような気持ではなかったかと思う。主は人々の信仰がまだ堅固でないことを御存じであった。しかしこう言われた。もし人々が家に戻り，主が告げられたことを深く考え，行なおうとするならば，主は再び現われて，彼らに新たな教えを施すであろうと。同じように，皆さんも耳にしたこと，あるいは私たちが語ったことのすべてを十分には理解できないかもしれない。しかし皆さんがこれから家に帰り，ここで語られたことをよく心にとめ，その精神を捕らえるならば，皆さんが再びここに集われたときに，ある

いは私たちが皆さんのもとに出かけて行ったときに，皆さんが抱えている問題の解決に一層の助けが与えられるものと思う。

これらの証と祝福をすべてイエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

末日聖徒
イエス・キリスト
教　会

CONFERENCE REPORTS 1970-72 PZSI0083JA PRINTED IN JAPAN 6H